



青玉島物語
現代版

Sapphire Island

青玉島以外にも人の集まる場所が現れ、いつしか村となり、街となり、国となった。大陸では小さな国が離合集散を繰り返すなかで、いつしか大国が生まれる。大陸の西岸に位置する“紅玉高原”。ルビーの運んだ小包を使い、アイリスとその仲間たちが建国した国だ。

一方、大陸の外にも1つ、小さいが極めて重要な国がある。もちろん青玉島だ。青玉島は夢幻界でもっとも早くに成立した国であり、後に成立した紅玉高原と“姉妹国”となった。それ以来、2ヶ国の君主はかなりまめに連絡を取り合っている。

この2大国を“夢幻王国”という。青玉島は“夢幻王国第1番”、紅玉高原は“夢幻王国第2番”とも呼ばれている。さらに、夢幻王国に次ぐ第2流国家として、“柘榴溪谷”、“黄玉荒野”を始めとする“準夢幻王国”なるものが、10ヶ国ある。

夢幻界はその形がある程度形成されて以来、大きな戦争はほとんど起きていない。とりわけ大陸から離れた青玉島は、1度も戦争というものを経験したことがない。これらは“夢の奇跡”などと言われている。

ディックは、そんな夢幻界を出たり入ったりしていた。むろん、ユリアを捜し続けているのである。

どれほど旅を続けても、幾年の時が流れても、ルビーとの“思い出”はディックを苦しめ続けた。愛しかった人を、自らの手で傷つけ、殺した。その事実が薄れることはなく、ディックの首を絞め続ける。しかし、ディックを苦しめたのはそれだけではなかった。“人を殺した”ということそのものに対する罪悪感も、重く押し掛かったのだ。ようやく、母親を殺してしまったジャックの苦しみが理解出来たような気がする。今までの“ユリアを殺してやる”という決意が、いかに軽薄だったかを思い知った。

“人を殺す”って、口で言うほど簡単なことじゃない。殺すこと自体は呆気ないのに、そのあと... そのあと...

これは、ディックを大いに悩ませた。

まだ、その気になれば“ルビー様を殺すつもりはなかった。あれは彼女が、俺を利用して自殺したんだ”と言い逃れする余地もある。だが実際には、俺はそう逃げることも出来ない。罪悪感に押し潰されてしまうことのないよう、ひたすら堪え続けるのがやっとだ。今だってもう気が触れそうなのに...それなのに、人を故意に殺したら.....俺はどうなってしまおうだろう？

“そこまで思うならやめればいい”“その復讐のために、ルビーを失ったんじゃないのか”そう思わなかったわけではない。しかし、そう思う度に、心の中のシェルダンが、もの言いたげな眼で見つめてくるのだ。まるで、“それじゃあ僕の無念はどうなるの？”とでも言うかのよう。

本当に、シェルダンは復讐を望んでいたのか.....そんなことは分からなかった。別に復讐したところで、シェルダンが生き返るわけでもないのだ。それでも、ディックの中のシェルダンはじっとディックを見つめていて、決して逃がさない。

ユリアに復讐するには、どうしてもルビーとの“思い出”が邪魔だった。あの楽しかった日々が、あの血と泥の光景が、ディックの決意を揺るがしてくる。

...何度も、彼女のことを忘れようとした。決意を揺るがされたくなくて。罪悪感から逃れた

くて。しかし、結局それは叶わなかった。まさにルビーの言う通り、ディックは自分が愛し、傷つけ、殺した人を、忘れられるような人ではない。

もう1人ージャックとディック以外にも、人を捜してあてのない旅を続ける者がいた。実界を彷徨った挙句、夢幻界への入り口を見つける。

彼は今、青玉島の北にある丘の上の大樹の下に立っていた。青年はふわりと舞い込むように、その樹の洞へ入っていく。木の洞は洞窟の入口となっていた。狭い道を登ったり下りたりしながら全体的には登って行き、何本もの川を越える。やがて3叉路に着くと、彼は迷わず真ん中の道を選んだ。すぐ突き当たりにある扉の隙間から、青白い光がゆらゆらと幻想的に漏れている。彼はその扉のノブを握った。感電しているかのような痛みに襲われても、構うことなくドアノブを回す。その瞬間、彼は青白い光に包まれた。生まれてから今までの54年間で、一瞬のうちに押し寄せてくる。

「……っ…」

膝を折った彼の前に、ふわっと少年が現れた。結ばなくても良さそうな長さの金髪を無理矢理結び、鮮やかな水色の目を輝かせる、13才か14才の男の子だ。

「おにいさん!!どうしてこんなところに来ちゃったのさ？」

少年は驚いたように尋ねた。この歳の少年にしては、かなり高い声だ。

「君に聞きたいことがあってね」

青年が立ち上がりながら答える。

「妻と、妹と、親友を捜しているんだ。3人とも行方不明でね。君なら知ってるんじゃないかと思って来たんだよ」

それを聞くと、少年は悲しげに首を横に振った。

「おにいさん...僕と同じ轍を踏んでるよ。僕もね、お姉ちゃんを捜しにここへ来たんだ。だけど、ここの守人にも“誰がどこにいるか”とか“今生きてるかどうか”とか...そういうことは分からないんだよ。しかも、ここに1度入ったら、もうほとんど出られないんだ.....正当な人なら、自由に出入りできるんだけど、僕やおにいさんみたいに無理矢理来ちゃった人は、1度入ったら...24時間しか出られない。何回でも出入りできるけど、出ている時間の合計が24時間になっちゃったら、消えちゃうんだ。次の人が来るまで空白を作るわけにもいかないから、消えたくなくても消えられないし...」

「...ふーん...つまり？」

青年が遠い眼をして聞く。聡明な青年だから、本当は答えを察しているのだろう。

「つまり、これからはおにいさんが、ずっとここで仮の守人として働かなきゃいけないってこと。そして、基本的にはもうここから出られないってことだよ」

少年はそう説明すると、

「じゃあ、まあ...頑張って。僕は2000年間やったからね、もううんざり...あとは24時間外の世界を楽しんで、消えることにするよ」

と言うや否や、青年が制止する間もなく飛び出して行く。

「...あーあ...“急がば回れ”なんて言ったのは誰だろうねえ...諺通りだ。やっぱり、横着は良くないらしい」

独り残された青年は、虚ろな眼で苦笑いしながら呟いた。

時は淡々と流れていく。

1日。1日。

日が昇って、“今日こそは”という期待と、“今日もどうせ”という諦めを抱えて歩き出し、やがて日が沈み、夜が来て、“やっぱり今日もまた”という思いと、“明日こそは”という期待を抱いて眠り、夢に叩き起こされる。それを、1日、また1日と繰り返す。1日が30回集まって1ヶ月となり、1ヶ月が12回集まって1年となる。その1年を、積み重ねて、積み重ねて...途方もない数積み上げて、有り得ない奇跡を妄信して、ひたすら待ち、捜し続ける。

そうこうするうちに、300年ほどの年月が経った、ある晩のこと。ジャックはまた、いつもの夢を見ていた。漆黒の中、自分の足音と背後から追って来るうめき声を聞きながらひたすら歩いていく。

...今日はどちらだろう...

ジャックは、これが夢であるということに自覚していた。このあと、両親や姉が出てくるのか、サファイアが出てくるのか、そのどちらかでしかないということも、その両方の結末も、すべて分かっている。それでも夢の中を歩き続けるのは、もしかしたらサファイアに会えるかもしれないと思うからだ。

会っても、僕が潰してしまうだけなのは分かっているけど...それでも、一目でいいから会いたい...

そう思いながらとにかく歩いていくと、前方から子守唄が聞こえてきた。今夜はサファイアの夢らしい。

あと数歩進めば、サファイアの姿が見えてくることは分かっていた。しかし、今日はなぜか、そこでジャックの足が止まる。

もし...もし、ここで止まっていたら、どうなるだろう？

彼女に話しかけ、“抱きしめて”と言われ、そのまま抱き潰してしまう。この300年間、ジャックはサファイアの夢を見るたびに、それをずっと繰り返してきた。

ここで止まって、ただずっと彼女の子守唄を聞いていれば...そうすれば、何か変わるのではないだろうか...？

ジャックは立ち止ったまま、子守唄に耳を傾けてそっと目を瞑った。すると、聞く者を抱きしめるかのような優しい旋律が脳内で反響する。サファイアの歌い方が特別に上手だというわけでもなければ、この子守唄が名曲だというわけでもない。しかし何故か、聞いていると無条件に安心できる。

ジャックはしばらくの間、子守唄を聞き続けていた。聞いていると、サファイアと過ごした2年3ヶ月の記憶が蘇ってくる。無邪気な笑顔、コスモス畑の中を駆け回る姿、椅子に座って、足をパタパタさせながら本を読んでいる様子...

...会いたい。声だけじゃなくて、姿を見たい...

ジャックは無意識のうちに歩き始めていた。早足に数歩進むと、後ろで手を組んで、子守唄と同じペースでゆっくりと向こうへ歩いていくサファイアの姿が現れる。それを認識するや否や、

ジャックはそちらへ駆け出していた。

結局いつも通りのシナリオを辿った結果、ジャックはいつものように跳ね起きることとなった。

...やっぱり、こういうことになるのか...

一瞬立ち止まったにもかかわらずまた彼女を抱き潰してしまった自分の腕を、ジャックはやるせない思いで見つめる。

どうして、また...

そう思わずにはいられないが、どの道単なる夢にすぎないと自分に言い聞かせ、今度は現実の世界で歩き始める。

...今日は、見つかるだろうか...

その日もサファイアは見つからなかった。その代わりに、奇妙な論文を見つける。250年以上前に発表された古い論文だ。

『魔力と寿命』

これによると、1000Ma以上の魔力を有する者は、永遠の寿命を得られるのだという――。



第1章 再会

1992年12月19日

暁月の浮かぶ夜。すっかり都市化してしまった青玉島に残された、ごくわずかな森の中に、突然青白い光が現れた。その光は瞬く間に強くなった後、突然ぎゅっと凝縮し、固まっていく。

固まった光は、少しずつ人間の形を取っていった。そしてついに、濃紺の髪を持つ赤ん坊と化す。

これが、サファイアの生まれ変わった瞬間だった。

この赤ん坊の持つ魔力は500Maほど。およそ吸血鬼と同じくらいの魔力だ。つまり、吸血鬼と同じく2週間ぐらいまでなら、飲まず食わずでも生きていられる。 ※1 これと新月の呪いが、誰にも気付かれることなく生まれた赤ん坊を救った。

1992年12月23日

空から月のなくなった夜。日が沈むや否や、森の奥から凄まじい水流が迸った。森から少し離れた場所を歩いていたサラリーマンがそれを目撃し、慌てて警察に通報する。

まもなく駆け付けた警官が目にしたのは、暴走する赤ん坊だった。こう書くと滑稽だが、本人やその周囲の者にとっては、笑い事ではない。

この赤ん坊の持つ魔力は強大だが、赤ん坊は所詮赤ん坊だ。それが周囲と赤ん坊本人にとって、救いとなった。幸運にも、死傷者を出すことなく、無事保護されたのだ。赤ん坊は王宮に連れていかれ、そこで育てられることとなる。

この時に付けられた名は、“サファイア・クリアシャイン”だった。

1999年1月17日

青玉島の王宮で深夜、火災が発生した。発見が早かったのですぐに避難・消火活動が始まったのだが、1人、何が何でも無事でなければならない子が見つからない。12才の王女、ピュア・カーランドである。深夜だから本来なら女王の間で眠っていたはずなのだが、どういうわけか彼女はそこにいなかった。こっそりと抜け出して、王宮の中を探検していたのである。常にボディガードがついて回る彼女は、どうしてもひとりで自由に歩き回って見たかったのだ。

ピュアが火災に気付いたのは、かなり煙や火が回った後だった。逃げようにも、無闇に探検していたものだから、今自分がどこにいるのかまったく分からない。

そんな王女を偶然発見したのが、6才になったサファイアだった。彼女は3才のときから、王宮の掃除・洗濯などをして働いていたのだ。

王宮の掃除・洗濯は、サファイアのように養い手のいない幼い子供30人が、10人ずつの班に分かれてこなしている。絶対王政の青玉島だが、国民の税金で養う以上、何か働かせないわけにはいかないのだ。

そんな少人数でやっているものだから、サファイアも城の内部については嫌と言うほどよく知っていた。

「王女様、こっちです!!」

サファイアが居合わせたことにより、ピュアは奇跡的に避難することが出来た。

数ヶ月後、ようやく城——というのは名ばかりで、実際は普通のビルなのだが——の再建が終わったころ、ピュアの母親でありこの国の女王でもあったプルメリアが病死。青玉島は女性君主制なので、プルメリアの夫ペーターではなく、まだ12才でしかないピュアが跡を継いだ。

「クリアシャインを呼びなさい」

これが、46代目女王ピュアの最初に出した命令である。

10分後、家来たちがサファイアを連れて来た。濃紺の髪をツインテールにした上から三角巾をつけ、丈が長い紺色のワンピースに、限りなく白に近い水色のエプロンをし、手には身長よりずっと長いモップを持っている。

彼女は何が何だか分からないという様子で、玉座の前に膝をついた。そんなサファイアに対し、ピュアは頬杖をついて開口一番に

「いいわよ、跪いたりしないで。あんただでさえちっちゃいのに、これ以上ちっちゃくなってどうすんのよ」

と言う。

「は、はいっ!!ごめんなさい」

もともとどうして呼ばれたのかも分からないサファイアは、かなり慌てていた。頬を紅潮させながらひょこっと立ち上がると、そのまま俯いてしまう。

確かにサファイアが小さいのは事実だった。立ち上がっても背丈は1mに満たない。顔立ちや声も幼く、まるで3才児のようだ。

「あんた、今日から私の側近になりなさい」

ピュアはサファイアをピッと指差しながら言った。

「は、はいっ!!かしこま……え？」

サファイアが思わず聞き返す。

「…ほらほらピュア、からかうのも大概にしなさい」

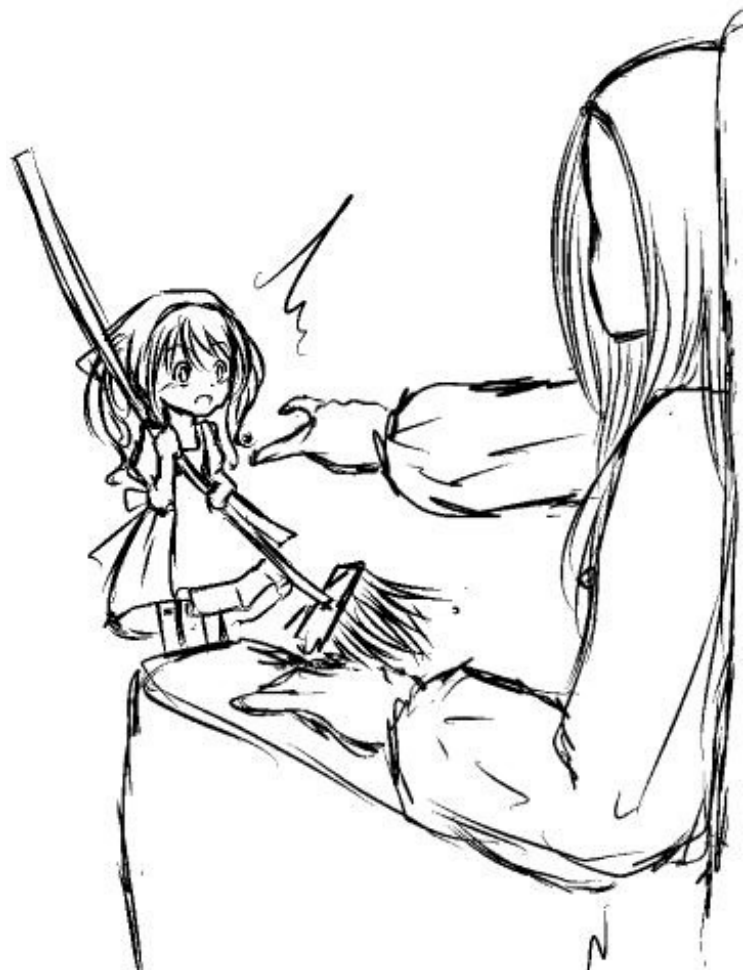
今まで黙って聞いていたペーターも、呆れたように……いや、今聞いた言葉は単なる幻聴なのだと思いますかとも思っているかのよう、遠い眼をして窘めた。

「からかっちゃいないわ。本気よ」

そう言うピュアの口調は、明らかにイライラしている。

「クリアシャイン、あんたは今日から私の側近になるの。いい?絶対よ!!」

ピュアが再びサファイアをピッと指差して言うと、サファイアは隠せない戸惑いを抱えながらももう聞き返すわけにもいかず、



「は、はいっ!!かしこまりました!!」

と答え、ペコッとお辞儀した。

※1...と言っても、これは成人の吸血鬼の話。いくら吸血鬼でも赤ん坊ではせいぜい5日が限度だと言う。

当たり前だが、“お掃除のちびっこ”と“女王の側近”では、同じ王宮内であっても生活する場所がまったく違う。サファイアはすぐさま、ちびっこお掃除隊が共同生活している地下室から、城の最上階にある女王の間と繋がっている個室へと、自分の荷物をすべて移動させることになった。

「ごめんね、急なこと言って...」

女王の間を出た瞬間、サファイアの後ろからそんな言葉が降ってくる。サファイアが振り返ると、そこにいたのはペーターだ。

「あの子...この前の火事で君に助けられてから、すっかり君のことが気に入っちゃったみたくて...」

「ちょっと、勘違いしないでよね!!」

ペーターの言葉を遮ったのは、ドアから顔だけ出したピュアだった。

「あんた、親も友達もいないでしょ、どうせ。それで雑用じゃあんまりにも可哀相だから、哀れんでやってるだけなんだからね!!」

それだけ言って、バタンツとドアを閉めてしまう。

「.....あー.....悪く思わないでやってね。ほんっとに素直じゃないんだ、まったく...」

ペーターは溜め息を吐きながら言った。

「...あ...はい、もちろんです...」

サファイアが戸惑いながら答える。むろん、相手は女王なのだから、サファイアには悪く思うも何もないのだが。

側近になった次の日から、サファイアの生活は大きく変わった。身の回りの雑用や政治の相談などが主な仕事なのかと思っていたのだが、そういう類の仕事は、せいぜいピュアが暇になった時の話し相手になることぐらいしかない。そのかわり、毎日戦闘訓練を受ける羽目になった。ピュア曰く、“側近っていうけど、要は私のボディガードと、私直属の派遣員なんだから”とのことだ。

まもなく、サファイアはぱっさりと髪を切ってしまった。今までは肩より10cmほど長い髪をツイテールにしていたのだが、それを完全なショートにまでしてしまった—というより、ピュアの思い付きでそうされてしまったのだ。それにあわせて服装も変わった。ワイシャツ、膝丈のハーフパンツ、かっちりとしたベスト、ハイソックス。襟には、ネクタイの代わりに青いリボンが結んである。6才の女の子なのだが、どう見ても3才の可愛い男の子にしか見えない。

2003年7月1日

この日、女王は珍しく外出した。

実はピュアも、母親と同じ呼吸器系の病気を患っている。そのため、青玉島の治安はとても良いにもかかわらず、ピュアが外に出ることは滅多にない。

しかし、今日は5年に1度の大花火大会である。ピュアがどうしても行きたいと言い張った結果、ピュアの家教師パール・カーターとペーター、そしてサファイアの4人で見に行くことになっ

たのだ。 ※2 警備が薄いように思われるが、サファイアの戦闘訓練はもうすぐ一段落つくというレベルまで進んでいるし、パールはもう70才を越えているにもかかわらず、まだ身体を張ってサファイアの訓練をするほど元気である。おまけにペーターはかつて、プルメリアの“側近”だった。 ※3 つまり、たった3人の警備だが、その3人が全員戦闘のプロなのだ。まだ半人前のサファイアでさえ、伊達な警備員10人くらいの能力をもっている。

4人は一般人を装っていた。 ※4 そして花火大会は何事もなく終わり、4人は無事に帰ってきた……はずだった。

※2...パール・カーターはピュアの家庭教師であり、サファイアの戦闘訓練指導者でもある。

※3...もともと強大な魔力のおかげでパワーはあるので、それを磨くとかなり急速に伸びるのだ。

※4...これもピュアが懇願した結果である。

3日後の朝――

「おはようございます」

決められた時間である07:00ピッタリに女王の間へ“出勤”したサファイアは、非常に深刻な顔をしていた。女王の間では、ペーターも眉を顰めてパソコンの画面を見つめている。その横にいるピュアは、きまり悪そうな膨れっ面だ。

「今朝のニュースですか？」

サファイアが言うと、ペーターは黙って頷いた。

青玉島は夢幻界No.1の...いや、夢幻界と実界を併せた世界でNo.1のIT国家だ。義務教育機関である王立青玉学園初等部(2年間)でこそアナログのノートや鉛筆などを使うが、中等部からはすべて――教科書、ノート、プリント、宿題、テストなど――パソコンで行われる。国民のパソコン普及率は98%。みんな1人1台のパソコンを持っている。

そういう国だから、ニュースもほとんどネット配信のみになっていた。おかげでニュースがものすごく早い反面、信憑性や公平性に揺らぎが生じている。そんな中、最も権威ある報道局は“ディマイア”だ。創業1108年、実に894年の歴史を誇る国際マルチメディアで、新聞、テレビ、ラジオ、ネット配信...挙げ句の果てには口コミまで、情報配信に纏わるありとあらゆる分野に手を出している。 ※5

さて、ペーターが今見ていたのも、サファイアが10分前に読んだのも、このディマイアのネットニュースだ。トップニュースの見出しには“青玉島女王の側近、最年少記録を塗り替える!!”とある。

今年即位したピュア女王陛下は、側近に10才のサファイア・クリアシャインを採用していたことが1日の夜に判明した.....過去の最年少記録は採用時16才のアーサー・ジョンソン(1608年採用)だが、クリアシャインが採用されたのは4年前、6才の時である。ジョンソンも相当物議を醸したようだが、クリアシャインに比べれば驚くに足りない。.....また、周知の通り、クリアシャインは“新月の呪い”を持っており.....

「...さすがディマイアだ。何1つ間違ったことは書いていない」

ペーターが困惑しきった様子で言った。

「え.....ということは、記事の最後に書かれていることも本当なのですか？」

サファイアが尋ねる。“記事の最後に書かれていること”とは次のような内容だ。

...なお、クリアシャインは近々、青玉島東の森にある吸血鬼自治区へ派遣される予定らしい。

「...ええ、本当よ。ただ定期使節として行ってもらっただけだけどね...」

そう答えるピュアは、しかめっ面でイライラしている。

「...私、初耳ですよ。報道の方が早いなんて...」

サファイアは驚きの表情に、少し非難の色を滲ませて言った。

「しょうがないじゃない...昨日の夜決まったの。今朝言おうと思ってたの。ディマイアが早過ぎるのよ」

そう言いながら、玉座の肘置きを指で小刻みに叩いていたピュアは、

「あんたの仕事、追加ね。ディマイアに行って、“青玉島の女王が怒ってる”って言ってきてちょうだい!!」

と言って、肘置きをバンッと叩く。

「こらっ!!あんまり粗暴な振る舞いは.....」

「だって!!」

父親の小言を遮り、ピュアが憤慨した。

「だって、側近に誰をつけようとちゃんと仕事をする人なら問題ないでしょ?!私の勝手じゃない!!」

「いや、それは...」

ペーターが口を挟んでも、ピュアはお構い無しだ。

「今までディマイアが王宮の人事に口を出したことなんてなかったのに!!」

「多分、私でなければ黙ってたんでしょうけどね...」

そう苦笑したのは当のサファイアだ。

新月の呪いを持つサファイアは、生まれる前から“呪われた子”として有名だった。ある種の伝説みたいなものだ。生まれた時には王宮が報道沙汰にならないよう取り計らったし、幸いにして生まれた直後を除けば事故を起こしたことはないから、大きく報道されるようなこともなければ、取り立てて話題に上ることもない。しかし、それでも“呪われた子がついに生まれたらしい”ということは噂となってじわじわと広まっていった。おかげで、青玉島国内に住んでいる人はまずほとんどが知っているし、国外の人でも知っている人は知っている――忌まわしいので、あくまでも基本的には口にしないのだが。

一方女王は、いわゆるこの国の専制君主なのだが、代々まともな政治を行ってきたため、国民の人気は非常に高かった。善人が独裁者になれば、これほど良い政治はない.....まあ、あくまでも独裁者が善人であればという話だが。青玉島では、そんな夢のような政治がずっと続いていた。おかげで“青玉島”という国家が誕生して以来、ずっとカーランド朝のままだ。

そんな女王のすぐ側、すぐ近くに、そんな呪われた子がいる。このギャップが、話題性を呼んだのだろう。

「とーにーかーくっ!!あんたにはまずディマイアへ行ってもらおうわ。ディマイアの社長に、“ちょっと調子乗んじゃないわよ”って抗議して.....あっ!!」

ピュアは喋っている途中で、何か気づいたように手をぱんっと叩いた。

「クリアシャイン、“青の薬商人”の話、聞いたことある？」

「あ、はい。ありますけど...」

サファイアはきょとんとした様子で頷く。

“青の薬商人”とは、夢幻界及び実界全域で姿を見せる薬売りだ。非常に腕が良い上に、破格の安値で売ってくれる。彼を必要として捜している人はたくさんいるのだが、彼はいつも神出鬼没だった。いつ、どこに現れるか分からない。おまけに、彼の個人情報も謎に包まれていて、名前も、国籍も、生年月日も分からない。何より不思議なのは、彼の出没記録だ。青玉島に初めて姿を見せたのは926年。その次に青玉島に来たのは1056年。その後は、1273年、1339年、1421年、1596年、1608年、1727年、1879年、1930年と続く。普通に考えれば明らかにすべて別人ということになるが、どういうわけかこれはすべて同一人物だと言われていた。彼の異常に良心的かつ超人的な点が、そんな話を呼んだのかもしれない。ちなみに、容姿はいずれも黒髪の若い青年だという。そんな正体不明の彼だが、彼自身もまた誰かを捜しているらしい。

「まさか、ポーラに...？」

ペーターがハッと一言。

ポーラとは、ピュアの従姉妹にあたる6才の女の子だ。

先程も書いたが、ピュアは、かつて母プルメリアを死に至らしめたのと同じ病気にかかっている。この病気は発症してからわずか1ヶ月で不治の病と化してしまうのだ。ピュアが発症したときも、多くの医者が治療しようと試みた。治療法はただひとつ、極めて単純だ。ただ、治療薬を調合して3日間、1日3回飲ませればよいのである。にもかかわらずピュアの治療が失敗に終わったのは、誰ひとりとしてその治療薬を調合できなかったからだ。だからピュアはもう、少しでも進行を遅らせるということしかできない。

さて、昨日、ポーラも同じ病が発症してしまった。しかし、彼女についてはまだ、治療の見込みがある。あと27日の間に、治療薬を飲ませればよい。そこでピュアは今、半ば伝説となっている“青の薬商人”なら薬を作れるかもしれないと思ったのだ。

「ついだから、ディマイアに行ったら青の薬商人について情報を持ってないか聞いてみて。分かったことはすぐ報告しなさいよ!!で、その後吸血鬼自治区の視察。出発は明日の朝。いいわね?!」

「はい、かしこまりました!!」

ビッと指差しながら出された命令に、サファイアはそう答えるほかなかった。

※5...“口コミ”というのはつまり、口コミを流すのである。

2003年7月5日

翌朝、サファイアは女王の間を出発した。白いワイシャツに青いリボンをネクタイ代わりに締め、暗い濃紺のベストと膝丈のハーフパンツを着ている。要はいつも通りの服装だ。荷物は最低限の食料とノートパソコン、ケータイ、魔法銃を持っている。

魔法銃とは、青玉島軍が全員携帯している小型銃のことだ。普通の弾丸のほか、麻酔弾、睡眠弾、威嚇弾、大型爆弾などを放つことができる。また、大型爆弾以外は撃った時の反作用を消すことができるので、ジャンプしながら撃っても何ら問題ない。 ※6

ただ、これらの荷物は縮小魔法で小さくしてしまったため、傍目には手ぶらであるように見える。

廊下を歩いている途中、顔まで隠してしま
いそうなフードのついた丈の長いローブを引
きずる、奇妙な人とすれ違った。すれ違った
直後に驚いたサファイアが振り返ると、その
人も立ち止まってサファイアを見つめている

。驚いたように見開かれた紫っぽい青色の眼は、
化学反応を連想させる光を宿していた。綺麗
だが、どこか冷めた印象を受ける。

「...??」

サファイアは“どうしたんですか?”と尋ね
ようとしたのだが、その人ははっと何かを思
い出したように、慌ててどこかへ行ってしま
った。

夢幻界の大陸の最西端に位置する丘に造ら
れた巨大な地下要塞。そこがディマイアの本
社だ。地下なので窓はないが、外に出てみ
ると、海の向こうに青玉島を見ることもで
きる。

「社長、本当に良かったんですか？」

栗毛を七三分けにした30代後半の男性が、パソコンの画面を見ながら尋ねた。

「...ぶっちゃけ、あんま良くねえんだけど...しょうがねえだろ？」

“社長”と呼ばれた青年は、頭の後ろで手を組み、天井を見つめながら答える。

「何がしょうがないんですか!!絶対青玉島が怒りますよ!!」

秘書は腰に手を当て、お説教するような口調で言った。それに対し、社長は口笛を吹いて誤魔化そうとする。

...しかしなあ...俺、ほんつとに何やってるんだろ...



社長は自分の座っている回転椅子を子供のようにクルクル回しながら、自分が発行させた記事を見た。サファイア・クリアシャインの記事だ。

ディマイアは日々膨大なニュースを発信するのだが、それでも記事を配信する際には、必ず社長が自ら最終チェックを行っている。もちろんこの記事も例外ではない。それどころか、これは社長が指示を出して書かせた記事だ。ネット配信、新聞、ピラ、口コミ、壁新聞、テレビ、ラジオ……などなど、ありとあらゆる媒体で配信した。

…あいつ…最後に目撃されたのいつだっけ…？

社長は記事の載った新聞を机に置くと、今度はパソコンでデータベースにアクセスする。

1930年(青玉島にて)、1935年(イギリスにて)、1937年(ドイツにて)、1940年(イタリアにて)、1946年(紅玉高原にて)、……1999年(リディリスタンにて)

…あいつ……まだ生きてるよな？……どっかで、これを見てくれればいいんだけど…

夢幻界大陸のずっと南にある小さな村にある砂浜。その隅で、青年は薬を調合していた。その様子を、熱に浮かされている小さな子を抱いた男性が、じっと見つめている。調合している青年は綺麗な身なりをしているが、子持ちの男性の方はもうずっと着替えていなさそうだ——いや、実際そうなのである。

…以前、ここを訪れたのはいつのことだろう？

青年は大きなピーカーを左手の炎で加熱しながら、そんなことを何となく思った。もう数世紀経っているのは確かだ。前に来た時は賑やかな町だったのに、今は細々と漁業を営む小さな村になっている。

北半球にある青玉島は夏だが、この村は南半球に位置するため、空気が非常に冷たい。

「…お医者さん、そう言えば…クリアシャインの話、聞きました？」

寒さを紛らわそうと思ったのか、子供を抱いた男性がそう話しかけた。

「クリアシャイン？」

青年が聞き返す。

「…あら？クリアシャインをご存じない？」

子持ちの男性はきょとんとして言った。それから

「ほら…」

と説明を始める。

「呪われた子ですよ。これはご存知でしょうか？その子の苗字、クリアシャインになっていたそうなんです。お医者さん、ずっと旅してるからかえって分かんないですよ…10年前、ついに呪われた子が生まれ変わったらしいんですよ。この時は青玉島が大ニュースにならないように厳重に規制してたみたいなんですけど…でもほら、第1発見者とか、そのご近所さんとかいるじゃないですか。なんとなく、噂にはなっていたんですよ。ところが今朝、ディマイアが彼女の所在をすっぱ抜きましてね。青玉島の王宮ですよ、王宮!!信じられますか？あんな忌まわしい呪われた子が、青玉島の王宮…しかも、女王様のすぐお近くにいるだなんて!!」

青年だって、“呪われた子”のことは散々聞いていた。ただ、その子の苗字が“クリアシャイン”だということは初耳だ——男性は噂にはなっていたと言っているが、青年のように根なし草のごと

く旅していると、この類の、皆が忌み嫌って口にしながらないようなことに関する噂は知ることができないのだ。

「ディマイアが報道したのですか？」

青年が尋ねると、子供を抱いた男性は

「そう」

と頷く。

「今朝の新聞ですよ...いや、今朝は本当に幸運です。新聞もその日の朝の物を拾えましたし、何よりあなたにお会いできて...もしそうでなかったら、この子がどうなっていたか...」

「その新聞、今もお持ちですか？」

青年の言葉に、男性は

「ええ」

と頷いて、ジャンパーの内側から若干くしゃくしゃした新聞を取り出した。

「その記事を頂けません？」

青年が真剣な口調で頼むと、男性は手に新聞を持ったまま

「...え？」

と間の抜けた声を出す。

「クリアシャインの記事だけで結構です。わたしにいただけませんか？」

青年がもう1度頼んだ。

「え...あ、ああ...構わない、ですけど...」

まったく訳が分からないという様子で答えながら、子供を抱いた手で新聞を丁寧に破き始める男性の前で、青年は火を止めてビーカーの中身を薬瓶に移す。

「お薬が出来上がりました。1日2回朝と晩に、20mlずつ飲ませてあげてください。良くなるはずですよ」

青年がそう言って薬瓶を渡すと男性は

「ああっ!!どうもありがとうございます、本当にどうもありがとうございます...」

と言いながら、新聞を破る手を中断して財布を取り出そうとする。薬代は50Fan。 ※7 普通に薬局で買おうと思えば同じ量でも600Fanは下らない薬だが、今の全財産が450Fanという男性にとっては、50Fanでもかなりの金額である。

ところが青年は、きっぱりした口調で

「お薬代は結構です」

と言った。

「え？」

男性が驚いて聞き返す。なんせ、青年から値段を聞いたのはつい1時間前なのだ。

「その新聞記事を頂ければ、それで十分ですよ」

青年が言うと、男性は

「そんな...」

と何か言いかける。

「いいえ」

そんな男性の言葉を、青年は静かな声で遮った。

「わたしにとっては、その記事はお金に換算できないほどの価値があるんです」

※6...ただし、そんな撃ち方をして当たるかどうかは別問題である。

※7...“Fan”とは夢幻王国の共通通貨のこと。実界とのレートは変動するが、2003年現在1ドル=118Fanである。

妙な人とすれ違ってから数時間後、サファイアはディマイア本社の入口前に降り立った。“降り立った”ということは、ここまで飛んで来たということだ。

いくら呪われていようと何だろうと、サファイアはあくまでもヒトであって、吸血鬼ではない。従って、本来なら彼女は空など飛べやしない。そんなサファイアがここまで飛んで来ることができたのは、まさに文明の利器のおかげだ。サファイアが今履いている靴は、履いている人に飛行能力を与える魔法の靴なのだ。空飛ぶサンダルを履いて空を駆け回った伝令神ヘルメスになぞらえ、“メルクリウス”と呼ばれている。最大速度は時速200kmだ。

サファイアは入口から、ディマイア本社の中へ入って行った。細い階段を少し下りると、仰々しい扉が現れる。サファイアはそれを無造作に開け、中を見た。高級感溢れるロビーを、多くの人がガヤガヤ喋りながら行き交っている。ロビー正面奥にはサービスカウンター。その背後に4つの扉が並んでいる。

サファイアはサービスカウンターの前まで行った。背が低過ぎて、カウンターからぎりぎり顔が出る程度になっている。

「...どうしたの？坊や」

受付のおねえさんがカウンターから出てきて、サファイアに視線を合わせるようにしゃがんだ。サファイアは今10才だが、外見年齢は7才ぐらいだ。

「青玉島のサファイア・クリアシャインと申します」

サファイアは受付のおねえさんの目を直視しながら、笑顔でそう名乗った。しかしその途端、受付のおねえさんはバツと立ち上がり、あからさまに嫌悪と恐怖の色を浮かべて2・3歩後退りする。

これだけあからさまな態度を取られても、サファイアはまったく気にする様子を見せなかった。

「こちらの最高責任者の方とお話しさせていただきたいのですが」

サファイアは何事もないように、平然としてそう言葉を続ける。

「...ちょっと、待っててね...」

しばらく固まっていたおねえさんは、慌ててカウンターにあった電話の受話器をとり、どこかへ電話した。それでもまだ、サファイアの方にちらちらと目をやっている。

「...こちらサービスカウンターです。青玉島のサファイア・クリア.....え？いいのですか？本当に?!.....かしこまりました、失礼します」

おねえさんはそう言って電話を切り、受話器を置くと、引き攣った営業スマイルを顔に無理矢理貼付けて言った。

「お待たせいたしました。ただいまご案内させていただきます」

受付のおねえさんはカウンター奥中央の扉を開け、サファイアに中へ入るよう示した。エレベーターだ。高級百貨店のエレベーターのように、金色で装飾されている。

エレベーターはどんどん地下へ潜って行き、ついに最下階まで来た。そこで降りると、正面に扉が1つ現れる。今までと打って変わって、装飾どころか塗装もされていない、非常に簡素な木の

扉だ。

「こちらになります」

おねえさんはそう言いながら扉をノックした。

「はい？」

中から聞こえたのは若い男性の声。

「先程のサファイア・クリアシャインさんがいらっしゃいました」

おねえさんが言った途端、内側からパッとドアが開く。

「サファイア・クリアシャインさん、ようこそおいで下さいました」

そう言って陽気に出迎えてくれた人の姿を見て、サファイアはびっくりしてしまった。鮮やかな赤毛をポニーテールにしたカッコいいおにいさんなのだ。きっとまだ、20才ぐらいだろう。

てっきり、白髪混じりの髪を七三分けにした、恰幅のいい初老のおじさんかと思っていたのに...

ただ、若くても海千山千なんだろうなあということは一目で分かった。赤褐色の眼に宿る夕焼けのような光はとても綺麗なのだが、少し陰りを含んでいるのだ。これから昇る朝日ではなく、もうすぐ暮れていく夕焼けの光。天を巡り、様々なものを見て、明るい盛りを越え、それでもなお燃え盛る、夕焼けの光だ。

...あれ？

そんな彼の眼を見ていたサファイアは、その瞳孔が縦に長い楕円形をしていることに気づいた。

もしかしてこの人、吸血鬼...？

しかし、吸血鬼は普通“黒に近い濃紺の髪に青い目”と相場が決まっている。それに対し、この青年は赤毛に赤褐色の目だ。

いったい、どういうこと...？

青年はサファイアに部屋の奥の肘掛け椅子を勧めた。そうこうしているうちに、受付のおねえさんは勝手に帰っていく。

「ご足労いただき、どうもありがとうございます」

青年はサファイアが腰掛けた肘掛け椅子の向かい側に座ると、明るく笑いながらそう挨拶した。



「わたしは、ディマイア社長のディック・ソルジャーと申します」

社長が自己紹介をする。丁寧な言葉の割に、口調はサバサバとしていた。

「あ...私は青玉島国家使節のサファイア・クリアシャインと申します」

そう名乗るサファイアはきちんと背筋を伸ばし、お行儀よく座っているのだが、そのきっちり加減がかえってサファイアを子供っぽく見せてしまう。

「女王陛下の側近をなさっているのでしょうか？そんな方がわざわざいらっしゃるなんて、どうなさったのです？」

ソルジャー氏はそう聞きながらも、サファイアが来た理由には見当がついているようだった。きまり悪そうに、視線が泳いでいる。

「2つ、お願いしたいことがあってまいりました」

サファイアがそう言うと、ソルジャー氏は

「“お願い”ですか」

と聞き返してきた。

「ええ...まず、“青の薬商人”について教えていただけたらということなのですが...何か、ご存知でいらっしゃいますか？」

サファイアが尋ねると、ソルジャー氏は

「あー...あれね...」

と呟きながら頭に手をやる。

「彼を捜してらっしゃるんですか？そうですねえ...きちんとしたデータとしては、これぐらいしかないですね、彼の情報は...」

そう言いながらソルジャー氏が見せてきた画面には、薬商人の出没記録が映されていた。青玉島だけではなく、夢幻界と実界の情報が集約されている。

「あー...結構目撃されているんですね...」

サファイアはさっと目を通しながら呟いた。だいたい、少なくとも5年に1度は目撃されている。

最後の情報は1999年、リディリスタンにて、かあ...

リディリスタンとは夢幻界赤道付近の小さな都市国家だ。

「わたしたちが持っている確かな情報は、これだけです」

「不確かな情報ならあるのですか？」

ソルジャー氏の不自然な発言に、サファイアが首を傾げた。すると彼は一瞬、どうしようかと迷うような素振りを見せる。

「...社長さん？」

サファイアはそう呼びかけながら、首の傾げ方を一層大きくした。おそらく、今の振る舞いは彼女の素だろう。ソルジャー氏はそんなサファイアをしばらく見つめていたが、やがて諦めたように苦笑する。

「...これは不確かどころか、わたしの勝手な憶測にすぎませんので、できれば誰にも一一いえ、それは無理ですね一一女王陛下以外に言わないでいただけますか？」

ソルジャー氏はそう言いながら、サファイアの目を直視する。

「あ、はい...分かりました」

サファイアはその奇妙な条件に戸惑いながらも、目を合わせたまま、とりあえず頷いておくことにした。

「本当に勝手な憶測で、わたしの勘以外には何の根拠もないんですけど.....もし彼がわたしの予想通りの人だったら、多分彼の方から青玉島に来ると思いますよ」

「...え...?」

サファイアが呆気にとられたように聞き返すと、ソルジャー氏は黙って頷いた後、
「捜したりしなくても、彼の方が青玉島の王宮に来ると思います...いや、もしかしたら吸血鬼自治区に現れるかもしれませんね」

と付け加える。

「え...ええっ?!」

ようやく彼の言葉を理解したサファイアが、驚いて小さく叫んだ。それを見たソルジャー氏は、ニッと悪戯っぽく笑いながら

「ええ...根拠がないので公表されると困りますが、多分そうだろうと思いますよ」と言う。しかしそう言う彼の眼は、その表情とは裏腹に、そうであってほしいと願っているかのようだった。

2つ目の用件については、サファイアはあまり強く言えなかった。先程の受付のおねえさんがいい例だが、昨日のように報道されてしまって、冷ややかな扱いを受けるようになるのは他ならぬサファイアだ。しかし、ソルジャー氏の対応はあまりにも上手だった。

サファイアが

「あ...あと、2つ目のことなのですが...」

と切り出すと、彼は

「昨日の朝のニュースですよ、あなたの」

と言ってから、

「いや...誠に申し訳ありませんでした」

とあっさり頭を下げてしまう。とても丁寧で、心がこもってはいるのだが、どこか人懐っこさを含んでいて、感じがいい.....というより、拒絶できない感じなのだ。

「正直なところ、あなたは最年少だろうと何だろうとこうやってきちんと任務を果たしているわけですし、それ自体には問題ないんですけど...」

ソルジャー氏の言葉に対し、サファイアはもともと小さい身体を一層小さくして

「...呪いですか?」

と恐る恐る尋ねる。ところが彼は

「いやいやいや!!」

と言いながら身体の前で両手を振って、“そんな馬鹿な!!”というように否定した。

あれ...?記事のニュアンスでは、確かに年齢や呪いを批判している感じだったのに...

「そういうことじゃなくって、ただ...ただ、それを記事にすること自体が重要だったんです。

その.....ちょっと、さっきの話とも絡んでるんですけど...いや、ほんっとうに申し訳ありませんでした」

“記事にすること自体が重要だった”？

サファイアにはますます意味が分からない。しかし、結局サファイアは彼の人柄に流されてしまい、よく分からない説明を問い質すこともできなければ、あまり強く抗議することもできなかった。

『ちょっと、なんなのよこれ?!』

サファイアがディマイアで話したことをレポートにまとめて王宮に送ると、5分もしないうちにピュアから電話がかかってきた。“電話”といってもテレビ電話だからお互いの顔が見えるため、ピュアはいつも何の挨拶もなく話し始める。

「すみませんっ!!」

サファイアは平謝りだ。

『あんたねえ……ソルジャーさんの口振りからしたら、青の薬商人の正体に心当たりがあるってことでしょ?!何でそこを 追及しないのよっ!!』

そう言いながら、ピュアはサファイアをビッビッビッと指差して来る。

「ごめんなさい…」

『“ごめんなさい”じゃな…』

『まあまあまあ…』

きつい口調で責めるピュアの言葉を、苦笑いしたペーターが遮った。

『今まで、“ディマイアの社長”っていったら完全に正体不明だったんだ。それこそ青の薬商人以上に……誰も、その影すら見ることができなかった人物と面会できたっていうだけで、すごいと思うよ』

ペーターの言う通り、ディマイアの社長は創業以来常に正体不明の存在だった。そもそも、存在するかどうかすら分からなかったほどである。

『むしろ、どうしていきなり面会してくれたのかしら？たかがクリアシャインごときに…』

首を捻るピュアに対し、サファイアは

「たかが私ですけど、“青玉島国家使節”って名乗れば、肩書にはかなりの凄みがありますよ。肩書には…」

と前置きしたあと、

「ソルジャーさん、もうすぐ退職なさるそうです。だからもう、自分の顔がバレても関係ないと思ったみたいですよ」

と説明した。

『…はあ?!』

数秒の沈黙を挟んで、ピュアが怒ったように聞き返す。

『じゃあ、せっかくあのディマイアの社長の正体を掴んだと思ったのに、意味なし?!』

そう言うピュアに対し、サファイアは

「ええ、でも」

と言いながら少し得意げに笑った。

「でも、重役会議の写真撮ってきましたよ。多分この中の誰かが次の社長になるのだろうと思いますが…」

サファイアの発言に、再び何秒か沈黙が流れる。それからサファイアの言葉をようやく飲み込んだピュアは、パッと笑顔になって

『すごいじゃない!!上出来だわ!!』

と叫んだが、その後はっとしたように咳払いをすると、また急にしかめっ面になり、

『それならそうと真っ先に言いなさいよ、バカ!!』

と言ってから、いつものようにビッとサファイアを指差して

『とにかく、吸血鬼自治区と青の薬商人の件上手くやってちょうだい!!あと、その写真を至急よこすこと!!いいわね?!』

と言って、電話を切ってしまった。

その日はもう真っ暗になってしまっていたので、夜が明けるのを待ってから出発した。海を渡って、大陸から青玉島に帰ってくる。

サファイアの向かっている“吸血鬼自治区”とは、外島の東方に広がる森の中で、吸血鬼が集まっている場所のことだ。

青玉島はもともと、イギリスから3回に分けて入ってきた人々から成っている。この移民の中に一定数、吸血鬼とのハーフが混ざっていたらしく、本来の吸血鬼が絶滅してしまった今でも、稀に青玉人の子供として吸血鬼が生まれることがあるのだ。

何故吸血鬼は絶滅してしまったのか。これにはいくつかの原因がある。1つ目は、もともとの個体数があまりにも少なかったこと。2つ目は、吸血鬼の遺伝子がヒトの遺伝子に対して劣勢であるため、ヒトと吸血鬼のハーフはほとんどヒトになってしまうということ。この2つだけでも種の存続は十分苦しいのだが、そこに追い討ちをかけたのが、吸血鬼同士の紛争とヒトによる“吸血鬼狩り”だ。この社会的な要因が決定打となってしまったのは間違いない。

さて、今はもう、もちろん吸血鬼狩りなどしていない。しかし、今でも吸血鬼を忌み嫌う地域があるのは事実である。小さな島国であっても、やはり意識の上で中央と地方との差が生じるのはやむを得ないのだ。そのような地域に生まれた吸血鬼は、迫害から逃れるべく、ヒトのいないところで身を寄せ合って暮らすほかなかった。そのようにして自然発生したのが、吸血鬼自治区である。青玉人の間に生まれた吸血鬼やその2代目、3代目が、吸血鬼独自のルールにしたがって静かに暮らしているのだ。現在、5つの一族が存在している。

青玉島王宮は、この自治区を公認している。“ヒトの行いの結果として、争いを避けるために生まれた自治区を、ヒトの勝手に潰すわけにはいかない”というのが主な理由だ。しかし、だからといって放置しているわけでもない。青玉島王宮は、3年に1度使節を派遣し、自治区の近況などを聞き、青玉島王宮からのメッセージを伝えている。そして今年は、サファイアがその使節となったのだ。

2003年7月6日

翌日、サファイアは朝から自治区の中を飛び回った。リーダーに会って聞きたいことを聞き、言いたいことを言って出てくるだけだから、作業の進み方は割と順調である。3つの一族が済んで、残っているのはあと2つとなった。この調子で行けば、あと1・2時間で終わるはずだ。

「!!」

そんなことを考えながら、鬱蒼としてほとんど光が差し込んでこない森を歩いていたサファイ

アは、突然反射的にしゃがんだ。サファイアの頭があった位置を、6本の閃光が走る。

「ちょっと待ってください!!」

サファイアは立ち上がると、パッと両手を挙げて見せた。戦う気はないのだ。

「.....ありゃ?!」

それを見て、6人の吸血鬼が、しっかりロッドを構えたまま姿を現す。いずれも17才か18才ぐらいの少年だ。

「なんだ、子供か...おい、坊や、何でお前みたいなのがこんな所をフラフラしてんだよ？」

正面にいた少年が不思議そうに、そして咎めるように尋ねた。

...いやいやいや...私、坊やじゃないから。

サファイアは内心で突っ込んだものの、特に訂正はしない。彼女自身、自分がどう頑張ったって男の子にしか見えないということは自覚しているのだ。

かわりに、サファイアは手を挙げたまま

「青玉島国家使節の、サファイア・クリアシャインと申します。3年に1度、こちらに伺わせていただいていると思うのですが」

と言った。

「ああ、女王様のパシリ.....って、ええええっ?!」

別の少年が驚いたように叫ぶ。

「お前が？本当に？だってお前...まだガキじゃ...」

「何をしている？」

ガヤガヤ騒いでいた少年たちは、背後から聞こえた呆れ声にピタッと固まった。

「...リーダー...」

少年たちの後ろを見ると、ブルーの鋭い目をした青年が、ロッドを軽く構えながら呆れ顔で一同を見つめている。無造作に切った髪は、吸血鬼にしても鮮やかな藍色だ。

「この子が、青玉島国家使節だって名乗ってんですけど...」

少年たちの1人がサファイアを指差して言った。

「この子？この子って.....ああ」

リーダーは少年の言葉を聞いて辺りを見渡し、いないじゃないかというように何気なく下を見て、ようやく小さなサファイアの存在に気づく。

「...ああ、なるほど。早速クリアシャインを寄越して来たのか.....いや、この子は間違いなく青玉島国家使節だよ」

リーダーは少年たちにそう告げてから、

「クリアシャイン、こっちに来なさい」

と言って手招きした。

サファイアはリーダーの家に案内された。

「いやはや、ちょうどいいところに来てくれた、クリアシャインの坊や」

サファイアの正面の椅子に座ったリーダーは、最後の部分を言うときに含み笑いをしたが、

サファイアが特に何とも反応しないのできまりが悪くなり、

「...すまない、悪ふざけはこの辺りにしておこう」

と謝った。

「わたしはマーティ・カーネギー、ここのリーダーだ。さっきの子たちが君をいきなり攻撃したみたいだね。申し訳ない...本当に申し訳ないと思うが、今回は許してほしい」

昔と違い、今の吸血鬼の村はもともと各地から迫害を逃れてきた者の寄せ集めだ。したがって、同じ村でも苗字はバラバラである。

「何か起きているのですか？」

サファイアが首を傾げると、カーネギーは深刻な顔で頷く。

「ああ、起きているとも。2週間前から、別の一族が侵入してきているんだ」

「え...」

何、このタイミングの悪さは...

サファイアは心の中で呟いた。げんなりしているのが顔に出ないよう気をつけている。

「シュワイマーという奴の一族で、こっちが40人なのに対し向こうは60人ほどいるみたいなんだが.....クリアシャイン、この事態に対して王宮はどう対処するんだね？王宮は常に、自治区の現状維持を念頭に置いていたように見えたが？」

カーネギーはサファイアの眼をじっと見つめながら聞いてきた。

...うわ...これ、絶対援軍を期待してるよね...

サファイアは目を逸らしたいのを堪える。目を逸らすと、信用してもらえない.....ヒトと吸血鬼の関係とは、そういうものだ。

「申し訳ありませんが、それほどの緊急事態となりますと、私の一存では答えかねます。どうか、明日まで待っていただけませんか？」

サファイアが言うと、カーネギーは一瞬イラッとした表情を見せた。しかし、サファイアがしゅんと俯いて

「あの...ごめんなさい...」

と謝るサファイアと、カーネギーも思わず苦笑する。

「...そうだな。分かった、明日まで待とう...方針が決まったら、夜中でも来て構わないからな」

そんなカーネギーの表情を見たサファイアはホッとしたように顔をあげた後、

「どうもありがとうございます」

と言ってペコッとお辞儀した。

「.....ということだそうです」

吸血鬼自治区に最も近い場所にあるヒトの村、タンジェント村の宿に泊まることにしたサファイアは、そこから王宮に電話してカーネギーの話を伝えた。

『...あら...そう...』

ピュアの返事も深刻だ。

『...そう、分かったわ。いい？よく聞きなさいよ』

ピュアは肘置きを指でツンツン叩きながら言った。

『私たちは、カーネギーさんの方に理があるという立場をとる。彼が言ったように、青玉島王宮はずっと、基本的に自治区の現状維持を良しとする傾向で動いてきたから...吸血鬼は長生きなせいでも、悪いけど援軍は出せない。だからといって、彼等に任せちゃうわけにもいかない...任せたらどうせ戦争始めるでしょ？戦わせるわけにもいかないの。だから、あなたが全部請け負って、シュワイマーさんたちにもともと自分たちがいたところへ帰るよう説得しなさい』

「ええええっ?!」

サファイアが思わず叫ぶ。

「そんな...無茶ですよ!!子供1人の説得でどうにかしようだなんて...」

サファイアがそう抗議しても、ピュアは

『子供1人じゃないでしょ。昨夜あんたが言ったように、あんたは青玉島国家使節なの。たかが子供1人でも、その肩書だけすごいい力があるんだから』

と言って聞き入れてくれない。

『あのね、シュワイマーの一族って、他の一族に対してもかなり影響力があるのよ。カーネギーの一族は独自路線を走ってるから、そういうのも気にしないんでしょうけど...』

そう言いながら、ピュアは自分のパソコンを少し操作する。多分、吸血鬼自治区についてまとめた資料を出したのだろう。

『つまり、シュワイマーと下手に敵対すると、あそこにいる吸血鬼の大部分を敵に回す羽目になるわけ。もし、それが皆で王宮に攻め込んできたらどうするのよ...敵わないじゃない。 ※8 だから、なんとしても、話し合いで穏便に出て行ってもらわなくちゃ。いい？武器は出しちゃダメ。あくまでも敵対する気はないって感じで...分かった?』

指さしながら念押ししてくるピュアに、サファイアは結局

「.....かしこまりました」

と答えるほかなかった。

電話の直後、サファイアはカーネギーのところへ行くと、青玉島が仲介に入るからどんなことがあっても手を出さないでほしいという旨を伝えた。

「...“青玉島が”って言ったって...要は“君が”だろう？平気なのか？」

カーネギーはそう言って顔をしかめる。

...ちっとも平気じゃないけどさ...

サファイアは内心でそう思いながらも、平然とした風を装って

「お任せください」

と言い張る。

約30分間に渡って押し問答した末、ようやくカーネギーは渋々納得し、シュワイマーたちがいると思われる場所を教えてくれた。

そして翌日の朝、早速サファイアはそこを訪ねてみる。やはり最初のお出迎えは、カーネギーたちの村を訪れたときと似たり寄ったりだった。突然閃光が飛んできて、かわしたサファイアがハンズアップすると、ロッドを構えた吸血鬼たちに取り囲まれる。サファイアが青玉島国家使節だと名乗ると、彼らはサファイアをリーダーのもとへ通してくれた。

「...ああ、クリアシャインか」

シュワイマーもまた、サファイアのことを知っているようだった。ディマイアの報道のせいである可能性は高いが、そこに載っていた写真はかなり遠くからのもので、それほど鮮明に顔が分かるようなものではない。

「わたしたちに何の用だ？え？」

シュワイマーはドスの効いた声で言う。カーネギーに比べて、ヒトに対する反感が幾分強いようだ。

「少し、お話を伺いたいと思っていますのですが...よろしいでしょうか？」

サファイアは丁寧且つ控えめな調子で言った。彼女の周りを取り囲むように、6人の吸血鬼がロッドを構えている。

「お話？」

シュワイマーは面倒臭そうに聞き返した。

「...まあ...まあ、聞かないでもないさ。言ってみろ」

そう促され、サファイアは慎重に話し始める。

「皆さんは、もともとこちらに住んでいらっしゃったわけではありませんよね？もっと北の方にいらっしゃったと伺いましたが...」

サファイアの質問に、シュワイマーは黙って頷いた。

「どうしてこちらにいらっしゃったのですか？この辺りには、すでに他の一族が暮らしているということをご存知でしょうか？」

サファイアがまた質問すると、シュワイマーはケタケタと笑う。

「ああ...ああ、知ってるさ。知っているとも...だが最近、わたしたちは人数が増え、もう住む場所が足りなくなってしまった。それで、仕方なく、領地拡大となったわけだ...分かるな？坊や」

...だから坊やじゃないって...

「あー...事情やお気持ちはよく分かります。しかし...それをしてしまうと、紛争は避けられませんよね？」

サファイアが問うと、シュワイマーは

「だな」

と頷く。

「だが、それを避けようとは思っちゃいないからな」

そう開き直すシュワイマーに対し、サファイアは

「しかし、わたしたちとしましては、そのような事態は回避したいのですが...」

と出来るかぎり遠慮がちな言い方をした。しかし、それでもやはり、シュワイマーに鼻で笑われてしまう。

「紛争を回避したい?! ったく...よく言うな...つい150年くらい前まで散々わたしたちを追っかけ回して、絶滅させようと躍起になってたのはどこのどいつだ? え?!」

シュワイマーはそう言ってから、ハハッと溜め息にも似た笑いを漏らした。

「...んまあ、お前に言ってもしょうがねえんだろうけどな...いくつだ? お前...6つ? 7つ?」

「10才です」

サファイアが答えると、シュワイマーは低く口笛を鳴らす。

「おおっと...通りで喋り方がしっかりしてるわけだ...まあ、いずれにせよそんなもんだろ? どうせ、“吸血鬼が絶滅しちゃわないように、みんなで保護していきましょう”みたいな時代しか知らねえんだろ? ああ?」

「.....」

そう言われると、サファイアは何とも答えられない。確かにその通りなのだ。むろん、話に聞いているとか、歴史として知っているとかというのは、彼の言う“知っている”に含まれない。

「わたしは今263才だ」

「もっとお若く見えますが」

サファイアがご機嫌取りに言ってみるものの、

「当たり前だ」

の一言で一蹴される。

「ヒトはすぐ世代が代わるから、そういう自分たちにとって都合悪い歴史もすぐ忘れちまう。だけどわたしたちはまだ、そのころの奴がそのまま生きてんだよ...当時とほとんど変わらない状態だな」

じっと睨んで来るシュワイマーから、サファイアは思わず目を逸らし、俯いた。確かに、彼の言うことは何一つとして間違っていないのだ。

「...しかしまあ、寿命の長さなんてしょうがねえよな。今回はお前らの言うことを聞いてやってもいいぜ」

「...!!!」

シュワイマーの発言に、サファイアはパッと顔をあげた。彼の目付きは心持ち和らいでいる。

「本当ですか?」

サファイアが期待に満ちた声で聞き返した。

「ああ...ただし」

シュワイマーはニッと口角をあげる。

「内島と交換」

.....は...はいいい?!

サファイアは呆気にとられた。もう少しで心の声が本当の声になってしまうところだったぐらいだ。

「申し訳ありませんが、それは出来かねます」

サファイアが即答する。当たり前だ。そんなこと王宮に相談するまでもない。

「ああ？ダメ？」

「ええ...それは」

サファイアの返事を聞くと、シュワイマーの目が再び鋭くなった。

「だって、おまえらはわたしたちが...えーっと...カーネギーとかって言う奴の領土に侵入するのを止めたいんだろ？だけど、我々としてはもうどうにも土地が足りなくて、このままではやっていけないんだ。となったら、おまえらがわたしたちに代わりの土地を寄こすしかないじゃないか。だろ？」

シュワイマーがそう言っても、サファイアは

「お気持ちは察しますが、それは出来かねます」

と言って静かに首を振るばかり。

「ああ、そう.....じゃ」

シュワイマーはそう言いながら、サファイアを取り囲む6人の吸血鬼たちに目配せをした。すると、6人のロッドがパッとサファイアの首の位置まで上がる。

「じゃあ強硬手段といきますか」

※8...とはいえ、自治区にいる吸血鬼はカーネギーの一族を含めても200人前後である。実際には敵わないこともないだろう。

サファイアは自分を取り囲んでいた吸血鬼の脇を鼠のように素早くすり抜けると、近くの窓を開けた。誰かがとっさに爆撃してくるが、そのころにはもう窓から逃げ出している。

家の中で爆撃しちゃって平気なのかな...

そんなことを思いながら林立する木々の奥へ飛んでいくサファイアを、6人の吸血鬼が追いかける。

サファイアは背後から閃光が襲って来るのを予測して、わざと木々の間をジクザグ縫うように飛んだ。案の定、サファイアの周りの木々は閃光や爆撃を雨あられと受けて、穴が開いたり抉れたりしていく。

7人の飛行速度は時速200km。どう考えても木が乱立する森の中を飛ぶのに適した速度ではないはずなのに、サファイアは身体ごと追っ手を振り返ると、

「私をどうする気なんですか？」
と尋ねた。

「別に殺しはしねえよ」

薙ぎ払うように振られたロッドの先端が弧を描き、それがそのまま光の刃と化す。光の刃は生まれると同時に空を切って迫ったが、サファイアは風に舞う葉のような動きでかわした。

「じゃあどうするんです？」

つい一瞬前までサファイアの足があった位置を通過した光の刃に切り落とされた太い木の枝が地面にぶつかる音や、耳元を吹き抜ける風の音に負けないように、サファイアが大きな声で聞くと、今度は別の吸血鬼が

「ただ人質になってもらうだけさ」

と言ってロッドを勢いよく振り、サファイアの足元を狙って閃光を放った。だがそれはサファイアがかわずまでもなく外れ、彼女より前の木を貫通する。

6人が次々と放ってくる攻撃を、サファイアはまるでトンボか何かのようにすばしっこく飛び回ってかわしていた。

「鬱陶しいガキだな...いつまでもちょこまかしてられると思うなよ!!」

誰かがイライラした声で叫んだのに対し、サファイアは
...思っていないよお!!

と内心で叫び返す。

鼠花火のように飛び回るサファイアを追いながら、6人のうちの誰かが

「てか、もう俺らの村出ちまったんじゃね？」



と言った。

「!!」

その言葉を聞いて、サファイアはハッとする。

私...今、どこへ向かっているんだろう？

サファイアはあまりにもジクザグ飛んでいたのだから、完全に方向感覚を失っていたのだ。今までは気づいていなかったのだが、1度気づいてしまうと、その不安が彼女の動きを一瞬鈍らせる。

吸血鬼たちも、それを見逃すはずはなかった。一斉に放たれた閃光が、一気に襲いかかってくる。

「っ!!」

そのうちの1本がサファイアの左足首外側を掠った。真っ赤な血が勢いよく吹き出すのが、むしろメルクリウスが裂かれてしまったことの方がまずい。もう片方が残っていたので墜落は免れたが、もう飛び続けるのは不可能だった。辛うじて転ばないように着地すると、仕方なく走り出す。飛んでいる吸血鬼から走って逃げようとするということ自体がもともと不可能なのに、そのうえ足を怪我しているというのでは話にならない。

しかし、サファイアはそれほど長い距離を走る羽目にはならなかった。

...あわわっ!!

突然森が開け、サファイアが走ってきた地面が途切れた。あと3mというところまで崖の淵が迫っているのだ。サファイアは怪我していない右足で踏ん張り、急ブレーキを駆けてどうにか止まる。

「...ははーん...ちょこまか坊やも、運の尽きだな」

追手の1人が、にんまり笑いながら言った。もうサファイアに逃げ道がないと分かっているから、吸血鬼たちはロッドを構えたまま、ジリジリと迫ってくる。それに圧されて、サファイアもジリジリと後退していく。

「さあ、殺しはしねえって言ってんだ、大人しく捕まれ。な？」

吸血鬼たちの1人が楽しそうに言った。

人質にされたら厄介だな.....ピュア様がすぐに見捨ててくだされば国には問題ないかもしれないけど...でも、それでも絶対“やっぱり呪われた子を雇うと碌なことにならない”とか何とか話になって、私に情けを掛けてくださったピュア様の面子を潰すことになっちゃうよね...

サファイアはちらっと振り返り、崖の下を見た。3mぐらい下に、木々の先端がある。地面が見えないので高さは分からないが、裏を返せば、落ちたあとのサファイアを上から目視するのは不可能だ。

一か八かだけど...

命さえ助かれば、あとはどうにでもなる。なんせ、青玉島の医学は夢幻界でもトップクラスなのだ。

...しょうがない。

「...ほら、どう足掻いたって逃げ道はないんだぜ？」

またさっきの吸血鬼が言った。6人の中で、この人が1番よく喋っている気がする。

「そんなことはないですよ」

サファイアはそう言うと同時に、後ろへ大きくジャンプした。

「!!!!」

サファイアの身体は低い放物線を描くと、すぐに落下運動を始める。

さすがにこの行動は想定していなかったらしく、吸血鬼たちは一瞬固まった。そして、サファイアの姿が見えなくなって2・3秒経ってから、途端に言葉を取り戻す。

「...しまった!!逃げられた」

「いや、どの道大怪我で動けねえよ。下りてって、ゆっくり捕まえればいいさ」

しかし、彼らはまもなく、自分たちの考えが甘かったことに気づいた。

「...あのガキ...どこ行きやがった?!」

地上のどこにも、サファイアの姿が見当たらなかったのだ。

青玉人には、テレポートをすることはできない。したがって、サファイアもどこかへ消えてしまったわけではない。では、どこへ行ったのか。

崖から飛び下りたサファイアは、枝にぶつかりながら落ちて行く中で、片方のメルクリウスでバランスを取りながら、固い地面との激突を少しでも和らげようと、青玉魔術のロッドを取り出していた。片方のメルクリウスと水の噴射で衝撃を和らげよう、というかなり苦しい考えだ。

ところが、サファイアの身体は何か柔らかい動きで受け止められ、枝がなくなるよりも早くに落下が止まった。

「...っ?!」

驚いたサファイアは思わず声をあげそうになったが、後ろから抱きしめるようにして彼女の身体を支えている何かが口を塞いでしまっているため、声を出すことができない。

。

「...ん.....んん...」

抵抗するサファイアの耳元で、誰かが「お静かに」と囁くのが聞こえる。

...だ...誰?!

今この人に助けられているのは事実だが、だからといってこの人が味方であるという保証はどこにもない。

「あのガキ、どこ行きやがった？」

「まさか逃げたのか？」

「んな馬鹿な...」

「じゃあどうしていねえんだよ?!」

地上から、吸血鬼たちの戸惑う声が微かに聞こえてくる。

「...しょうがねえ、戻るか...」

やがて吸血鬼たちが引き返して行った。サファイアを取り押さえていた誰かはそれをきちんと確認した後、地面に下りてサファイアを解放する。するとサファイアは、すぐにその人の方を振り返った。

「...!!」

ある程度警戒していたにもかかわらず、その姿を見たサファイアは、思わずそのまま固まって



しまう。

.....え.....すごい綺麗...

そこに立っていたのは、20才ぐらいの青年だった。服はダークグレーのワイシャツと黒のスラックス、ベストで、暗い濃紺のまっすぐな髪を、後ろの低い位置で1つに束ねている。すらっとした長身であるうえに顔立ちも非常に端正で、まるで精巧に作られた人形のようなのだ。

ただ、サファイアを固まらせたのはそういう容姿の綺麗さではなかった。彼の鮮やかな青色の眼――限りなく澄み渡ったその眼は、どこまでも果てしなく透き通っていて、見る者を吸い込んでしまいそうなのだ。そんな眼に、鋭利な刃物を思わせる明るく強い光が宿っている。

...なんて綺麗なんだろう...こんなに綺麗な眼、初めて見た...

サファイアは自分が読眼術の使い手だということを自覚していた。だから、この綺麗過ぎる眼が何を意味しているのかも知っている。

「...あ、あ...その...ありがとうございました」

つい見とれてしまっていたサファイアは、ようやく我に返ると途端に俯いて、恥ずかしそうな様子でお礼を言った。

「どうしてあのような無茶をなさったのか、教えていただけませんか？」

腕組みしてサファイアを見下ろす青年の声は冷淡だ。“あのような無茶”とは、言うまでもなく崖から飛び降りたことだろう。

「...ええっと、その...」

うろたえたサファイアが左右の人差し指をつんつんしながら

「...その...ちょっと、仕事で...」

と答えると、青年は

「...そうですか」

とだけ言って、それ以上深く追及してはこなかった。その代わりに、ちらりとサファイアの左足を一瞥して

「よろしければ治療いたしますが」

と言ってくる。

「...え？」

急に言われたサファイアは、きょとんとした様子で聞き返した。すると、青年は「ずいぶん怪我をなさっているようですが...よろしければ、治療いたしましょうか？」ともう1度言う。

「...あ...」

サファイアはどうか迷った。

...やっぱり怪我してたらどう考えても苦しいし、治してもらえたら嬉しいけど...でも、なんか悪いし...っていうか、さっきの人たち放置してるけど平気かなあ...?...とは言え、今このまま再チャレンジしても結果は同じだよね...あああああどうしよう...どうしよう？

「ええっと.....ん？」

いつまでもあれこれ迷っているサファイアに、青年はいくつかの薬を量り取ってくれた。サフ

ファイアがびっくりしていると、彼は無表情のまま

「これで治ると思います」

と言う。

「あ...ありがとうございます」

ファイアがそうお礼を言って飲み干すと、傷はみるみるうちに快復してしまった。

「...いかがですか？」

青年はコップを片付けながら尋ねる。

「あ...もう大丈夫です。すみません、お手数おかけして...」

ファイアはそう謝ると、

「どうもありがとうございました」

と言ってペコリとお辞儀をし、6人の吸血鬼たちが行った方向に駆けだそうとした。ところが青年はそれを見ると、

「...先程の方々は何なのですか？」

と言って引き留める。

「何でもありません」

ファイアは振り返りながら即答した。振り返るより答える方が早かったぐらいだ。そんなファイアの様子に青年は怪訝そうに眉を顰めたが、俯いているファイアは一向に気づく気配もない。

「何でもありませんのに襲われたのですか？」

そう聞かれても、ファイアはただ黙っているばかりだ。

「...そうですか」

問い質すのを諦めた青年は少し低めの声を漏らすと、淡然とした様子で

「無理に聞くつもりもありませんが...ひとりではどうにもならないこともありますよ。数の力は思っている以上に大きいですから...」

と言った。

30分後、サファイアはシュワイマーたちの村の近くまで戻ってきたものの、しばらくそこで立ち止まっていた。

“ひとりではどうにもならないこともありますよ”か...

確かにその通りだ。このままでは、何回挑戦したところで結果は目に見えている。

でも、だからと言って協力を求められる人なんて誰もいないし...

そんなことを考えていると、突然茂みの向こうからボールが転がってきた。

「...？」

不思議に思って拾うと、すぐに同じ茂みから3才ぐらいの女の子が駆け出してくる。

「これ、君の？」

サファイアが聞くと、その子は

「うん」

と頷いて両手を差し出してきた。

「どうぞ」

サファイアが笑いながらその手にボールを渡してやると、女の子は嬉しそうに笑って

「ありがと、おにいちゃん!!」

と言い、とことこと駆け戻っていく。

その後ろ姿をしばらく見つめていたサファイアは、そちらから大人の話し声が聞こえることに気づいた。木の陰に隠れて聞き耳を立てると、女性の声が

「...ここまで来たけど、シュワイマーさんまだ行くつもりなのかしら？」

と問いかけるのが聞こえる。

「そうなんじゃない？」

ほとほと困ったような声で答えたのもやはり女性だ。

「でも...これ以上進むと、他の一族とぶつかっちゃうんでしょ？」

また別の女性の声。そんな声の後ろから、はしゃいでいる子供の声も聞こえる。

...これって、もしかして...

そう思ったサファイアが、顔だけを少し出して覗いてみると、案の定、いわゆる井戸端会議のようなものが開かれていた。困惑したようすで話し合う4人の母親たちの足元を、子供たち5人が無邪気に駆け回っている。

サファイアが首を伸ばしてもひっこめても、もちろん構うことなく井戸端会議は続いた。

「シュワイマーさんは、戦う気満々みたい」

誰かが言うと、最初の声が

「無理よ!!こんな子供ばかりなのに、そんなことしたらどうなっちゃうの?!」

と憤慨する。

あれ...意外と反戦派って多いのかなあ...?

そう思った瞬間、ふとサファイアの頭の中に先程の青年の言葉が蘇った。

“数の力は思っている以上に大きいですから...”

...そっか...だったら逆に...

サファイアはふっと笑うと、木の陰から駆け出て行く。

「あ、おにいちゃん!!」

先程の女の子が駆け寄って来ようとしたが、母親がその肩を掴んで引き戻す。

「あんた、誰？」

別の女性が、訝しげに聞いてきた。

「私は青玉島国家使節のサファイア・クリアシャインです」

サファイアが名乗ると、皆は驚いたように目を見開く。

「あなたが？あなたがクリアシャイン？」

「はい」

サファイアが頷くと、母親たちは啞然とした様子で顔を見合わせた。“呪われた子”クリアシャインが、まさかこんな可愛らしい少年だとは思っていなかったのだ。

「嘘よ...だってあなた、男の子じゃない」

「...いえ、一応女子です...」

間違われるのは慣れっこだが、こう正面きって言われると訂正するのも気まずくて、サファイアはきまりが悪そうに目を逸らす。

「あら、ごめんなさ...」

「何の用なの？」

今度は別の人が鋭い声で尋ねてきた。

「向こうの村と戦うのを、やめてほしいんです」

サファイアが言うと、先程困り声を上げていた人が呆れた顔をする。

「馬鹿ねえ、そんなことは私たちじゃなくて、リーダーに言うのよ」

そう言われると、サファイアはしゅんと俯いて

「ええ、伺いました...危うく捕まえられるところでしたけど」

と答えたあと、パッと顔をあげて

「あの...もしよろしければ、お力添え願えませんか？もしここで紛争になってしまったら、どちらが勝とうと負けようと、次は吸血鬼とヒトとの戦争になってしまいます!!それは、何としても避けたいんです...」

と訴えた。

ヒトと吸血鬼が実際に戦争を始めてしまうという事態は本当に最悪のケースであって、現実にはまず起こり得ないのだが、ここではあえてそうしておく。

「それは、何としても避けたいんです...」

サファイアは最後の部分を再度繰り返しながら、子供たちの方にちらちらと視線を走らせた。“紛争になったら真っ先に犠牲になるのはこの子たちですよ”というメッセージだ。

これはなかなか効果があったらしい。固く腕を組んだ母親が、ロッドの柄を持っている手の指で軽く突きながら

「...“お力添え”って言ったって...どうするつもりなのよ？」

と聞いてくる。

「...もう少し協力してくださる方が見つかったら、もう1度シュワイマーさんのところへ行ってみます」

サファイアが答えると、彼女たちはしばらく互いに目配せしあっていた。だんだん雰囲気は和らいでいくように感じられる。

「...分かったわ」

やがて、1人が真剣な表情で言った。

「今回は協力してあげる。子持ちの女たちはみんな戦いたくないと思ってるから...私たちで持ち掛けてみるわ」

その言葉を聞くと、サファイアは嬉しそうに

「どうもありがとうございます」

と言って、深くお辞儀をした。

その日の夜は、とても風が強かった。にもかかわらず、シュワイマーは自宅の屋根の上に座っている。一族のリーダーたるものが、何故そんな猫のような真似をしているのか——その答えは簡単だ。昼間、青玉島から来た小娘を捕まえようとした部下が、室内で爆撃してしまったおかげで粉碎されてしまった部屋を、その部下たちに修理させているのだ。

「...リーダー...リーダー？」

下の方から自分を捜す声がしたのを聞いて、シュワイマーはそちらへ身を乗り出す。

「終わったのか？」

予想もしなかった場所から声がしたためか、捜しに来た部下はギョツとしたように跳び上がった。

「な...そんなところで何やってんですかっ?!」

「おまえらがガンゴドカドカ騒ぐから避難してたんだよ、レイフ」

シュワイマーはそう答えながら、ひょいと身軽に飛び降りる。

「ガンゴドカドカって...リーダーの家を直してたんじゃないですか」

レイフが反論すると、シュワイマーは

「てめえらがあのガキを逃がしちまったんだろうが。その罰だ罰!!」と叱り付けた。

「ちゃんと直したんだろうな？」

シュワイマーがドスの利いた声で尋ねると、レイフは

「任せてください、完璧ですから!!」

と胸を張る。

「ほーう...」

シュワイマーはその言葉を信じ、見に行ってみた。ところが...

「...ほーう...“完璧”か、これが」

シュワイマーは頬を引き攣らせながら、レイフを始めとする6人の部下を1人ずつ見据えて言った。爪先が、イライラと床を蹴っている。

穴の開いていた床や壁は、ベニヤ板の切れ端が無造作に打ち付けられているという状態だった。しかも、所々塞がっていないところがあったり、釘が曲がっていたり、釘の頭が飛び出していたりする。

「しょうがないじゃないですか...素人なりに頑張ったんですよ!!」

別の部下がそう憤慨したが、リーダーに

「ははーん...“素人なりに”か。じゃあ、ガキンちょを捕まえんのはどうなんだ？素人だとは言わせねえぞ?!」

と睨まれると、皆一斉にサッと目を逸らしてしまう。

そんな残念な空気を打ち破るように、ドアをノックする音が響いた。

「...誰でしょう？」

皆が首を傾げていると、再びノックする音が聞こえる。

「見てこい」

シュワイマーの指図で、レイフが玄関へ向かった。

「はい？」

レイフがドア越しに応じる声が聞こえる。

「ごめんください、先程お世話になりましたクリアシャインです」

それを聞いた皆は呆気にとられ、しばしの間言葉が出なかった。

...あのガキンちょめ...まさか、また来るとは...

「...入れてやれ」

10秒ぐらいしてから、シュワイマーはようやく呆れたような声で指示した。するとドアを開ける音と同時に、レイフの

「お前、馬鹿だろ...よくまたこうやって来るよな...」

という声が聞こえる。

「来ますよ。仕事ですから」

サファイアは当たり前のように答えた。

レイフに連れられて現れたサファイアに、シュワイマーは苦笑しながら

「クリアシャイン、お前...“飛んで火に入る夏の虫”って言葉知ってるか？」

と尋ねる。ところがサファイアはその言葉に対する返事の代わりに、哀れむような申し訳なく思ふような微妙な表情で

「あー...床や壁の修理でしたら、業者をお呼びしましょうか？」

と申し出た。

「よ...余計なお世話だ、ばかやろ」

シュワイマーは少し赤くなって反発する。

「で、何だ？交換条件呑むのか？」

シュワイマーが腕を組んで尋ねると、サファイアは



「内島ですか？」

と言いながらふるふると首を振った。

「申し訳ありませんが、それは不可能です。青玉島の政治・経済はほぼ内島に集まっていますから...」

サファイアが答えると、シュワイマーは「じゃあ外島でもいいぜ」と笑う。

「外島は第1次産業の99.98%、面積の99.7%を占めています。どうして先程から、不可能な案ばかり出されるのですか？まさか本気で、青玉島が頷くとは思っていないでしょう？」

サファイアは取り澄ました様子で聞きながら、“まったくもう...”とでも言うかのように腕を組んだ。

「...まあな」

シュワイマーは肩を竦める。

...ったく、妙なガキだぜ...黙ってりゃ6才の小僧、喋れば大人顔負け、実際は10才の小娘ってわけか...

「要はだな、ここはあくまでも吸血鬼“自治区”だってことだ。ここは吸血鬼が“自治”してるんだよ。いちいちヒトが口出しするんじゃないぞ」

シュワイマーにきっぱりとした口調でそう言われると、サファイアは「...そう...ですか...」

と言ってしゅんと俯いてしまう。それを見て諦めたと思ったシュワイマーはようやくほっとしたような色を見せ、子供に対する口調で

「ほら、分かったらとっとと帰れ」と言った。すると、サファイアは従順に頷く。

「はい、そうします...でも」

今までしゅんとしていたサファイアは、突然悪戯っぽく笑いながら顔をあげると、シュワイマーの手をパッと掴んだ。

「あっ、おい、お前...」

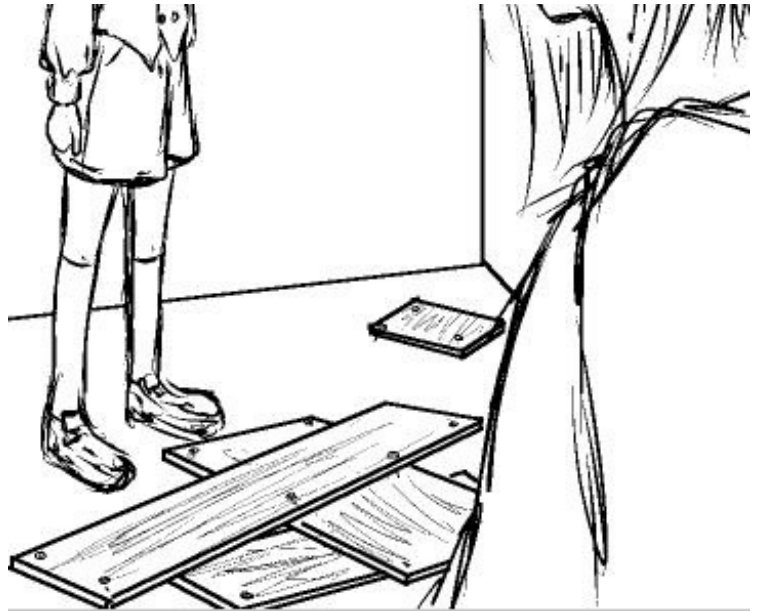
「いいから、ちょっと来て下さい!!」

サファイアは、その小さな身体からは想像も出来ないような強い力でシュワイマーを家の裏口の方に引きずっていく。

「何なんだ、おま.....っ!!」

サファイアが裏口のドアを開け放つと、シュワイマーの言いかけていた言葉はすっかり立ち消えてしまった。

裏口の周りを取り囲むようにして集まっているのは、この村の母親及び子供、42人。



「リーダー、これ以上領地広げていって、カーネギー族と戦う気だって本当ですか？」

集まった母親の1人が尋ねた。

「そんなことしたら、次はヒトを敵に回して戦争する羽目になるんでしょう？」

そう言ったのは別の母親。

「うちの村はこれだけ子供がいるのに、そんなことしたらどうなっちゃうのよ？」

そう問い詰める女性は2人の子を抱いて、さらに1人の子供の手を握っている。

「この一族の総人口は61人でしょ？42人の反対があっても、強行する？」

そう言うサファイアの茶目っ気たっぷりな笑顔を見たシュワイマーは、もうただ絶句するほかなかった。

...このガキ...なんて小賢しい奴なんだ!!

結局、こうなってしまっただけはどうすることも出来ず、シュワイマーは渋々“出来るかぎり早く退去する”という契約書に調印した。

サファイアはカーネギーの村へ行って一連の結果を報告したあと、王宮に詳細なレポートを送る。それを読んだピュアは、

『じゃああとは青の薬商人ね。早くしてちょうだい!!ポーラの人生が掛かってるんだから!!』とすぐに次の指示を出して来た。

「はい、了解です.....というより、それを真っ先にやったほうがよかったのではないのでしょうか？」

サファイアが言うと、ピュアはサファイアをビッビッビッと指差しながら

『馬鹿ね、私だって一応一国の女王なのよ?!国全体のことより自分の家族のことを優先したらマズいじゃない!!』

と言った。

さて...

電話を切ると、サファイアはタンジェント村の民宿“シスレーズ・ハウス”のベッドにごろんと寝っ転がった。スプリングが強く、サファイアの身体は2・3回弾む。

明日からは青の薬商人捜しか...

どう考えてもこれが1番厄介な仕事だった。夢幻界と実界という、広すぎる2つの世界のどこかにいるらしい“青の薬商人”を、見つけださなければならないのだ。

薬商人といえば、今朝助けてくれた人も薬商人なのかなあ...それとも、お医者さん？

サファイアはふと、あの濃紺の髪を思い出した。

私...どうしてあの時、何の躊躇いもなく薬飲んじゃったんだろう？

いや、彼の薬のおかげで怪我が治ったのだから、もちろん結果的には正しかったのだ。しかし、一般常識から言えば、初対面の見知らぬ人からもらった薬を口にするなど、無用心にも程がある。ところがこの時、サファイアはこの青年をまったく疑わなかった。“毒ではないのか”という発想すらなかった。サファイアは本当に、何の躊躇いもなく飲み干したのだ。

どうしてだろう...やっぱり、あの人の眼があんまりにも綺麗だったからかなあ...

サファイアはそう思ってから、突然くすくすと笑い出した。

“眼があんまりにも綺麗だったから”だなんて、読眼術を前提にしてなかったらものすごく痛いセリフだよ...

何はともあれ、サファイアはとにかく、もう1度彼に会いたいと思った。

あの人ののおかげで任務が終わったんだから、そのことも報告してお礼を言いたいし、崖から飛び下りた私を助けてくれたこととか、治療してくれたこととかのお礼も改めてきちんと言いたいし.....それに...“...先程の方々は何なのです？”って聞かれた時の私の返事、ちょっとあまりにも失礼だったよね...

あの時は“これからどうしよう？”と焦っていたからそこまで気が回らなかったのだが、今になって冷静に思い返してみると、なんだか拒絶しているみたいだったなあ...と気になってくる。

...わざわざ治療してくれた人に対して、あれじゃ.....ん？

サファイアはそこまで考えて、さらに重要なことに気付いた。

...ってというか私、薬代払ってないし。

サファイアはコロンと寝返りを打ち、うつ伏せになる。

...うん、まずその辺りから始めよう...

2003年7月8日

翌朝、サファイアは再び吸血鬼自治区に入って行った。

「げっ...まだ何かあんのか？」

シュワイマーの村の近くを通ると、シュワイマーの部下であるレイフとたまたま鉢合わせし、げんなりした声で言われる。

「いえ、今度は人を捜しているんです」

サファイアはその薬商人だか医者だかと思われる青年の容貌を話し、見かけなかったかどうか

と尋ねたが、答えはNoだった。青の薬商人についても同じくだ。

「お前もちっせえのに大変だな。すっかりパシられちまって...」

レイフはサファイアに同情するような色を見せる。とても、約24時間前に(殺すつもりはなかったとはいえ、実質)命懸けの鬼ごっこをした間柄だとは思えなかった。

レイフと別れたサファイアは、とりあえず例の崖まで行ってみる。

さて...

昨日彼と会ったのはこの崖の下であった。しかし、サファイアのメルクリウスはまだ故障中である。

...どうやって下りようか...?

「また飛び下りるおつもりではないでしょうね?お嬢様」

背後から冷ややかな声が降ってくる。

「うーん...いざとなったらそれしか.....」

.....ん?

そこまで言って、サファイアはおかしなことに気付いた。

あれ?私、誰と話してるんだろう...?

そう思いながらサファイアが振り返ると、そこに立っていたのは、まさに捜していた青年だった。改めて見ても、やっぱり綺麗な人だ。

「お医者さん!!よかったあ...ずっと捜してたんです!!」

サファイアが満面の笑みで喜びながら言うと、青年はほんの一瞬だけ、微かに口角を持ち上げた。“笑った”という感じではない。皮肉っているようにも、悲しんでいるようにも、喜んでいるようにも見える、不思議な表情だ。

「お医者さんの治療とアドバイスのおかげで、任務が1つ終わったんです!!」

サファイアはそれを気にしながらも、なお明るい調子で続ける。

「アドバイス?」

青年が聞き返した。どうも、心当たりがないらしい。

「“ひとりではどうにもならないこともありますよ”“数の力は思っている以上に大きいですから...”って...この言葉のおかげで、どうにかなったんです」

サファイアが答えると、青年は一瞬目を逸らしてから再びサファイアの方を向き、

「...そうですか。それはよかったですね」

と言った。

「ええ、本当にどうもありがとうございました」

サファイアはそう言ってペコッとお辞儀する。

「あと私、怪我を治していただいたのに、治療費も薬代も払っていませんでしたね。それも気になってて...」

「それは結構です」

財布を取り出したサファイアに対し、青年は即座に言った。 ※9

「え、でも...」

「結構です。あれはわたしが勝手にしたことですから」

そう言う青年の声はどこか肅然としていて、人を納得させる力を持っている。

「...いいんですか？」

それでもなおサファイアが確認すると、今度はやや苛立ちを滲ませながら

「ええ」

と頷いた。

「...すみません。どうもありがとうございます」

サファイアはまた深々とお辞儀すると、

「それから、ちょっとお伺いしたいことがあるんですけど...いいんですか？」

と尋ねた。すると青年は

「わたしに答えられることでしたら」

と言って静かに頷く。

「呼吸器石化症の特効薬を作れる方を捜しているのですが...」

“どなたかご存知ないですか？”サファイアはそう聞くつもりだった。さすがに、いきなり別の同業者の名前を出して聞いたりして、喧嘩を売るのは気が引ける。そこで、彼がNoと言ったら“青の薬商人”って方が調合できるって噂を聞いたんですけど...ご存知ないですか？”と切り出そうと思っていたのだ。

だから、青年が

「患者を診させていただかないことには、お作りできないのですが」

と言ったとき、サファイアは初め上手く話についていけなかった。

「え...？えーっと...つまり...？」

「あの薬は病状の進行度合いや患者の体格など、さまざまな要素によって材料の割合や1回の服用量が変わってきますから、診させていただかないことにはお作りできません」

青年は淡々とした声でそう説明してくれる。

えーっと...こう言うってことは、この人、呼吸器石化症の特効薬を調合できるってことだよね...？ってことは...えええっ?!じゃあ...じゃあもしかして、この人が...“青の薬商人”?!

サファイアがそう尋ねると、青年は無表情のまま

「...そう呼ばれているらしいですね」

と認めた。

※9...いくらIT大国である青玉島でも、現金はきちんと存在している。もちろん電子マネーの方がよく使われているのだが、サファイアは一応現金も持って来ていたのだ。

サファイアはすぐさまピュアに報告した。するとピュアは、ただちにポーラのいるサファイアンコスモス静養地へ行くように命じる。

サファイアのメルクリウスが壊れているので、静養地へ飛んでいくことは叶わなかった。しかしそれでもさほど困りはしない。電車を使えば、わずか30分で着いてしまうのだ。

サファイアがポーラのことを話して治療を頼むと、青年はすぐに承諾してくれた。2人はそのまま、ポーラのいるサファイアンコスモス静養地へと向かう。

最寄りのタンジェント駅に着くと、まず切符を買って、その後10分ほどでやってきた電車に乗り込んだ。青玉島ではもうここ以外、こんな路線は残っていないだろう。まずサファイアの中では“切符”など完全に化石となっていたし、電車を10分も待つなんてことも初めてだった。他の地域では、ケータイの電子マネーでホームに入り、1分間隔で来る電車に乗るのが当たり前なのだ。ちょっとでもダイヤが乱れた日には即事故が起きそうだが、ほとんどコンピュータ制御されているためか、未だかつてそのような事故は起きたことがない。

一方、青年はあちこち旅しているだけあって、こんな駅にも一切驚かなかった。「青玉島にいると分からないかも知れませんが、切符売場も改札も運転もすべて人が手作業で行っているところなどたくさんありますし、そもそも電車自体存在しない地域も数多くありますよ」

青年がそう言うと、サファイアは「あー...話には聞いたことありますけど...」と、信じられない様子で呟いた。

電車はがらがらで、2人の乗った車両は隅の方の席におばあさんが座っているだけだった。ノートパソコンを自分の膝の上に開いてイヤホンをつなぎ、動画に見入っている――完全にその世界へ行ってしまうものだから、乗り過ごしてしまわないかと周りが不安になるくらいだ。

青年はジャック・キュアラーと名乗った。サファイアも自己紹介をして、「いつ頃から旅してらしたんですか？」と尋ねる。

「1500年ほど前からになりますね」

ジャックは短く、平淡に答えた。

「え...?せ、せん...1500年...?」

サファイアは愕然として呟く。

...1500って...青玉島の歴史と同じくらい?...いや、もっと長いよね...?

「あの...もしかして、不老不死の薬とかですか?」

サファイアが半ば本気で尋ねると、青年は

「ええ」

と頷いたあと、一瞬間をおいてから

「魔力が1000Maを越えると、無限に生きてしまうんです」

と付け加えた。

1500年、かあ...

サファイアは自分が1500年生きることが想像してみた。

...正直、私だったら願い下げだなあ...

「...それって...何て言うか.....その、飽きちゃったりとか、しませんか？」

サファイアは躊躇いながら恐る恐る聞いてみた。するとジャックは、サファイアの眼をまっすぐ見つめてくる。

...あ...やっぱり聞いちゃまずかったかなあ...

サファイアがそう不安に思い始めたころ、ようやく彼は

「...飽きるでしょうね」

と言った。やや低めの声は、どこか枯淡としている。

「ですが、目的があれば話は別です」

「目的...？」

サファイアは呟きながら首を傾げた。

1500年かけても果たしたい目的って...何なんだろう？

電車は駅に着き、扉が開いた。急行の通過待ちで2分ぐらいずっと止まっていたにもかかわらず、閉まる直前になってから隅のおばあさんが大慌てで降りて行く。

「耳の遠い年寄りにも聞こえるようなアナウンスをせんかい!!」

などと喚いていたところを見ると、やはりネット動画に夢中になりすぎて、乗り過ごしそうになっていたようだ。

...気になる...けど、さすがにもう聞いちゃまずいよね...うん。

そう判断したサファイアは、話を変えることにした。

「キュアラールさん、どうしてさっき、私が女子だって分かったんですか？」

サファイアがくいと首を傾げて尋ねると、ジャックは怪訝そうに眉を顰め、

「妙なことをおっしゃるのですね」

と聞き返してきた。

「いや、だって...」

そう言いながら、サファイアは恥ずかしそうに俯く。

「...だって、皆私のこと男の子だと思うみたいなんですよ。まあ、確かにこの顔でこの格好をしていたら男の子と思われるのは無理ないですけど...だから逆に、どうしてキュアラールさんは分かったのかなあって、不思議に思ったんです」

彼女はそう言ったが、何も顔立ちが女の子らしくないというわけではない...はずだった。ジャックは1500年前の彼女を、まるで昨日のことであるかのごとく鮮明に覚えているが、その顔立ちはまったく変わっていない。もっとも、1500年前に出会ったときは13才だったのに対し、今目の前にいるサファイアはまだ10才だから、その3才分の違いはあるものの、それ以外で違うのは服装と髪型だけなのだ。

しかし、それにもかかわらず、サファイアが男の子にしか見えないのも紛れもない事実だった。ジャックですら、その姿からサファイアの性別を判断したのではなく、初めから女の子だと知っていたから分かったのだ。

しかし、まさかそれを言うてしまうわけにもいかない。

「...どうして、と聞かれても答えにくいですが.....でも、分かりますよ」

ジャックはとりあえず、そう答えておくことにした。

その後は、2人ともあまり話さなかった。もともとジャックは口数の少ない方だから、サファイアから話し掛けなければ会話は始まらない。ジャックはサファイアに何か尋ねられれば丁寧に答えるが、そこから話が脱線したり発展したりすることもない。2人とも、特にそれを気にする様子はなかった。まあジャックはジャックだからそうだろうが、サファイアの方も別にそれで構わなかったらしい。

『まもなく、サファイアンコスモス畑、サファイアンコスモス畑』

自動音声のアナウンスを聞いて、2人は荷物を持って立ち上がった。すでに減速していた電車は、すぐにプラットフォームに入って停車する。

降りてみると、そこはタンジェント駅に10本ぐらい輪を掛けて寂れた駅だった。

2人はサファイアンコスモス畑を突っ切るようにして歩いていた。

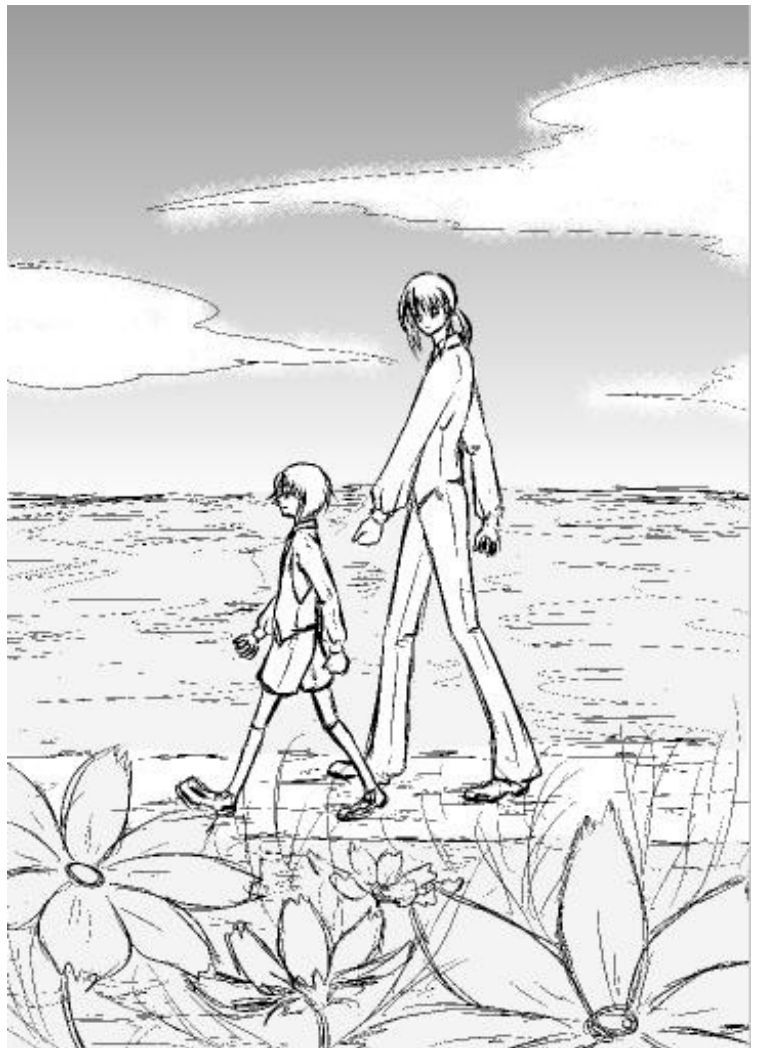
「もう咲いているんですね」

ジャックが6分咲きの花畑を見ながら言う。ここはかつて、ジャックが(人類史上)初めてこの花を見つけた場所であり、砂時計の呪いが発覚して間もなく、サファイアを連れて来た場所でもあるのだ。あの時のサファイアは、ここを散々はしゃぎ回り、駆け回ったものである。

しかし今日のサファイアは、ただちらりと横目に見て

「ね」

と相槌を打つだけだった。



5分ほど歩くと、ポーラ・カーランドのいる静養地が見えてきた。特別な施設などではなく、小さい別荘のような家だ。

「ポーラ様は、女王様の従姉妹なんです。カーランド家って何故かお身体の弱い方が多いんですけど、ポーラ様もやっぱり病弱みたいで...まあ、ピュア様は政治をやらなきゃいけませんからセントラルシティにいらっしゃいますけど、ポーラ様はそういうこともないので、こんな景色の良いところで、ご静養なさってるってわけなんです」

サファイアが説明した。“セントラルシティ”とは、王宮のある都市、つまり首都の名前である。

※10

そんな話をしているうちに、2人は目的の家へ到着した。

サファイアがインターホンを押すと、“リンドーン”という、なんだかレトロな音がする。しかし、レトロなのは音だけで、性能はあくまでも最新型だ。

「はい？」

中から若い女性の声がした。もちろんポーラの声ではない。

「サファイア・クリアシャインです。医師の方と共に参りました」

サファイアがそう名乗ると同時に、ドアがガチャリと開いた。

ポーラはベッドに腰掛けて御人形遊びをしていた。人見知りなのか、ジャックが診察しようとするとうさぎの大きな縫いぐるみの後ろに隠れてしまう。

「ポーラ様!!なりませんっ!!」

教育係と思われる若い女性がポーラから縫いぐるみを取り上げてくれたおかげで、ジャックはようやく診察をすることが出来た。

診察が終わると、ジャックはすぐに薬を調合し始める。

「1日3回4日間飲んでいただければ治るかと思いますが、一応5日分調合しておきますね」

ジャックはそう言いながら、小さめのバケツほどもある、ビーカーとよく似たガラス容器を取り出した。

「4日、ですか？」

先程ポーラを取り押さえていた女性が驚いたように聞き返す。普通は3日間と言われているのだ。

「ええ。ポーラ様はまだ幼いうえに、お身体も丈夫ではないようですから、4日間に分けて飲まれた方がよろしいかと」

ガラス容器の中に水と数種類の薬品が入れられた。ジャックはそれを、吸血鬼の青い炎にかける。

ジャックがそのように調合している間、サファイアは自分のパソコンで王宮のデータベースにアクセスすると、何となく呼吸器石化症特効薬の論文を読んでいた。並んでいる材料は、サファイアでも名前を聞いたことのあるようなものばかり。調合時間は6時間——決して長い方ではない。

では、何故青玉島のトップクラスの化学者がいくら頑張っても作れないほど、難しいのか。そ

れは、材料の分量やひとつひとつの行程のタイミングを、すべて寸分違わず厳密に行わなければならないからだ。しかも先程ジャックが言っていたように、その分量は患者の状態によって変化する。

「……あ」

今まで静かに読んでいたサファイアが、ふと声を漏らした。

「どうしました？」

教育係と思しき女性が反応する。

「この薬の発明者の“ジャック・キュアラ―”さんって、もしかして…キュアラ―さんのことだったりしますか？」

サファイアはそう尋ねながらジャックの方を見た。

「…ええ、そうです」

ジャックは流れるような手際によさで作業を進めつつ、簡潔に答える。

「そうだったんですか!!すごいですね」

女性の感嘆した声を聞きながら、サファイアはジャックの近い未来に同情した。

…あらら…これはもう、キュアラ―さんが旅を続けるのは無理だろうなあ…そんな優秀な人を、ピュア様が見逃すはずないもん…

2003年7月13日

ピュアを見ても分かるように、呼吸器石化症は本当に悪化しないと自覚症状が出ない。そのため、完成した薬を4日間服用し終わっても、果たして治ったのかどうか分からない。

それを調べるべく、ポーラは別の医者の手で精密検査にかけられた。場所は病院ではなく、このサファイアンコスモス畑の静養地。一見したところただの別荘でも、一連の検査機器などはきちんと揃っているのだ。“静養地”という名前は伊達ではないのである。ちなみに、ジャックではなく別の医者が検査をしたのは、治療を行った者が検査をすると、治っていないのに“治った”と嘘をつくかもしれないという用心のためだ。

そしてその検査の結果、ポーラの病気は見事に完治していた。

サファイアとジャックは再び、サファイアンコスモス畑の中を歩いていた。ある程度静養所が後ろに遠ざかると、突然サファイアが足を止める。

「どうなさったのです？」

それに倣って立ち止まったジャックが尋ねると、サファイアはジャックの半歩前で花畑を見つめながら

「いえ、ただ…仕事も一通り終わりましたし、まだ電車来るまでに時間ありますから…5分くらい遊んで行ってもいいかなあって…」

と言って、恥ずかしさと悪戯っぽさを合わせたような笑みを浮かべた。

「城にお帰りになるまで仕事は終わっていないと思いますが」

ジャックは腕組みしたまま言う。

「...やっぱりダメですか？」

ジャックの声が冷たく聞こえて、サファイアは恐る恐る尋ねた。すると、彼は無表情のまま花畑を横目に見て、それから腕時計に目をやる。

「電車が来るまでにはまだ時間がありますから...その間に遊んでいらしてはいかがですか？」

※11

サファイアはサファイアンコスモス畑の中を無邪気に駆け回っていた。やっと、外見年齢にあった振る舞いを見たように思われるが、彼女の場合、外見年齢は実年齢より3・4才幼いから、実年齢には合っていない。

そんなサファイアを、ジャックはただじっと眺めていた。

...なんて不思議なことだろう。つい数日前は素通りしたのに、今日は同じ花畑で楽しそうに駆け回っている。まるで、1500年前のあの日を再現したかのように。

夢を見ているようだった。

“飽きちゃったりとかしませんか？”——“飽きる”などという次元ではない。毎朝、“今日こそ会えるのでは”と期待して歩き出す。薬の研究をしたり、薬を売ったりしながら、実界と夢幻界をあてもなく、満遍なく歩いていく。そして結局、“今日も会えなかった”と、期待を裏切られて眠りにつく。 ※12

“眠りにつく”と言ったが、安眠できた夜などほとんどなかったに等しい。毎晩毎晩、見る夢は2つしかないのだ。1つは幼い頃からずっと見てきた、両親の最期の夢。恐ろしいことに、今でもなおお続いているのだ。これほど見続けてもなお、慣れることはない。

もう1つはサファイアの夢だ。漆黒の中を独りで歩くジャックの前に、子守唄を歌うサファイアが現れる。ところが、ジャックが捕まえようとする、彼女の腕はぐしゃっという軽い音とともに、脆く崩れてしまう。そして、愕然とするジャックに、穏やかな声でこう言うのだ。

『ダメだよ...死んだ人にまで優しくしてたんじゃ』

『私のこと、抱きしめて殺して。そしたら、私といた2年3ヶ月の記憶が邪魔になるんだったら、私のことなんて忘れちゃって構わないから...幸せになって』

『抱きしめて』

これらの言葉に対し、ジャックがとる行動はいつも同じだった。いつも、言われるがままに抱き潰してしまう。もう何十万回後悔したか分からないのに...

サファイアは、頻繁に現れては自分のことを忘れるようにと言った。“忘れて”と言いながら、しょっちゅうジャックの前に姿を現した。それを卑怯だと思ったこともなかったわけではない。しかし、ジャックも本当は分かっていた。

サファイアが卑怯なわけではない。僕が望むから、彼女はそれに応じて現れるのだ。

現にジャックは、サファイアの夢を見るのが嫌だと思ったことなど、これまでに1度もなかった。どんな形でも、サファイアに会えることが嬉しかった——例え、それが夢に過ぎなくとも、その直後にまた、自分が殺すことになっていたとしても...

朝に抱いた期待は、必ず夜に裏切られる。今日も。今日も。今日も。また今日も。それが何十

万回も続いた。何十万回裏切られても、また翌朝になると、期待せずにはいられなかった。

サファイアが死んでから300年弱経った頃。そろそろジャックにも寿命が来るはずの頃だった。サファイアと同じように、砂となって消えるときが。

...もうそろそろ、終わるのだろう。サファイアにもう1度会いたくて。会いたくて、会いたくて、抱きしめたくて...それですっと、捜し続けてきた。でも、もうすぐそれも終わってしまう...

長く、辛い日々だったのに、それが終わるのが嫌だった。

...会いたい。せめて、一目だけでもいいから...

そんなある日、ジャックは1本の論文を読んだ。

『魔力と寿命』

もう発表されてから250年以上経つ論文だった。ここで初めて、1000Ma以上の魔力を有するものは、永遠の寿命を得られるのだと知った。嬉しかった。まだ、捜し続けることができる。決して、容易な旅ではない。また、朝に抱いた期待を夜に裏切られる、という日々を繰り返すことになるのだ。それでも嬉しかった。とにかくサファイアに会いたい一心だった。

会いたい。会いたい...

不思議と、あれ以来ジェーンたちに復讐したいとは思わなかった。姉を憎まなかったわけではない。むしろ、サファイアのことがある前からずっと憎み合っていた姉弟だ。それに加えて、サファイアに新月の呪いを掛け、砂時計の呪いを掛けたのは、すべてジェーンなのである。もしかすると、機会があれば殺していたかもしれない。しかし、ディックのようにわざわざ捜しにいくとは思わなかった。

...そんなことをしても、サファイアが喜ぶはずないということは分かっている。だったら、奴を捜して殺すより、サファイアを捜して抱きしめたい。

とにかく、それほど会いたかったサファイアは、ある日突然、人からもらった新聞の中に現れた。

“サファイア・クリアシャイン”

皮肉にも、記事の“サファイア”と自分の捜している“サファイア”を一致させる決め手となったのは、新月の呪いだった。“新月の呪い”を持った“サファイア”が他にいるとは、到底考えられない。

その記事は、彼女がまもなく吸血鬼自治区へ行くことを記していた。ジャックが欲しい情報はすべて書かれている。

それを読み終わると同時に、ジャックは青玉島へと飛び立った。そしてとうとう、そのサファイアに会えたのだ。

いくら捜し続けたって、結局会えないまま終わってしまう可能性は十分にある。いや、十分過ぎて、ほとんどその可能性しかないと言っても過言ではない。それにもかかわらず、奇跡的に再会できた。まさに“奇跡”。それ以外の何物でもない。

...であるはずなのだが...

正直なところ、ジャックはこの状況に戸惑っていた。よくよく考えれば当たり前のことである。あまりにも姿が違いすぎて。あまりにも幼くて。にもかかわらず、自分の知っているサファイ

アよりずっとしっかりしていて。その反面、やはり1500年前の彼女と完全に重なる部分もある。もっと幼い振る舞いも見せる。何より、自分はサファイアを知っているのに、彼女にとっては初対面なのだ。まさか、“1500年前のあなたを知っています”とは言えまい……いや、むしろ、そんなことを言うと厄介なことにもなりかねない。サファイアが彼女自身のことをどれほど知っているのかも分からないし、自分の知っていることが正しいのかどうかも分からない。

「…あ、キュアラールさん待っていて下さったんですね…すみません」

花畑ではしゃぐのに満足したらしいサファイアが、少し頬を上気させて帰ってきた。

「…早く行っても電車が来ませんから」

確かにサファイアには“お急ぎでしたらお先にどうぞ”と言われたのだが、もちろんジャックにはそうする理由など1つもない。

「キュアラールさんはこれからどちらへ行かれるんで……あ」

サファイアは言葉の途中で、急に“あちゃー…”というような顔をした。

「ちょっと、失礼します…」

そう言いながら、サファイアはポケットから名刺大の物を取り出すと、ボタンひとつで元の大きさに戻す一パソコンだ。ちょうどサファイアが操作しやすいような高さに浮かんだパソコンには、ピュアからのテレビ電話がかかってきている。 ※13

『あんた今帰り道でしょ？』

サファイアが通話ボタンを押すと、何の挨拶もなしにピュアが言ってきた。まあ、いつものことである。

「はい、そうですが」

サファイアが答えると、ピュアは

『キュアラールさんは？』

と聞いてきたが、画面に映っていたらしく、サファイアが答える前に

『あ、まだ一緒にいるのね』

と言うと、またいつものようにサファイアをビツと指差した。

『いい？王宮に帰ってくるとき、キュアラールさんにも来てもらってちょうだい!!青玉島の女王様が会いたがってるって伝えて!!いいわね?!』

こう言われたら、もうサファイアには拒否権などない。

「…はい、かしこまりました」

サファイアがやや憂鬱そうに答えると、電話はブツツと切れてしまった。

「…えーっと…すみませんが、そういうわけですので…来ていただけませんか？」

サファイアはパソコンを名刺大に縮めてポケットにしまうと、ジャックの方に向き直ってそう言った。先程“憂鬱そう”と書いたが、この口調だと“申し訳なさそう”と言う方が正確なようだ。

「分かりました」

ジャックは淡泊な声で答える。

「あの…行ってしまうと、多分もう旅は続けられなくなってしまうかと思うのですが…」

サファイアが本当にすまなそうな様子で念を押しても、ジャックは

「構いません」

ときっぱり言った。本音を言えば、“構わない”どころの話ではない。上手く行けば、願ったり叶ったりの展開になるかもしれないのだ。

※10...ちなみに、セントラルシティの範囲は内島全体である。

※11...ということは、どうも予め路線や乗り換え案内を調べていた模様である。

※12...ジャックは呼吸器石化症特効薬の他にも、500近い薬を開発していた。

※13...今更書くのもなんだが、青玉島ではパソコンで通話するのが当たり前である。

サファイアンコスモス畑駅から王宮の最寄り駅であるセントラルシティ駅まで、電車を乗り継いでいくと4時間30分かかった。電車を降りると、サファイアは興味深そうにきょろきょろしている。これほど大きな駅に来たのは初めてなのだ。

「あ...」

ホームから改札のあるフロアに来たところで、サファイアが小さな声を上げながら立ち止った。

「どうなさいましたか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは

「あの、えっと...ちょっと、あそこ見てきてもいいですか？」

と言ってお土産屋さんを指差す。遠慮がちな言い方ではあるが、その一方で行きたくて仕方がないということも見え見えだ。

「構いませんが...」

ジャックが頷くと、サファイアは雑踏の中を器用に縫って行った。そして店内を素早く回る途中、ある1ヶ所で足を止める。猫のぬいぐるみキーホルダーの売り場だ。大きな籠の中に、様々な色・形のものが雑多に入れられている。

「可愛い...!!」

サファイアはそう言いながら、いくつか手に取って選び始めた。面白いことに、黒猫しか手に取らない。それでも、目の色、ポーズ、リボンの色などにバリエーションがあるため、選択肢は豊富である。

しかし、サファイアは案外素早く決めた。

「この子にしょっ♪」

そう言って選んだのは、眼もリボンも鮮やかな青色をした黒猫。いかにも真面目そうな顔をして、お行儀よく座っている。

...地元のお土産を買ってどうするのだろう...？

ジャックはそう言おうかとも思ったが、サファイアがそのぬいぐるみを大層気にいったようなので、冷やかな眼を向けるだけにしておく。

キーホルダーは480Fanだった。

「...え...あなたが、“青の薬商人”？」

30分後、2人が女王の間に行くと、ジャックを見たピュアは開口一番にそう言った。先程の電話では顔が映っていなかったのかもしれない。

「そう呼ばれているようです」

ジャックは静かに答える。

「もっとおじいさんかと思ってたわ」

ピュアがけろっとして言った。まあ、そうだろう。サファイアもそう思っていた。

まさか、こんな綺麗な人だなんて...

「...昔から、若い青年だって話だったじゃないか」

玉座の背もたれに手を置いて立っているペーターが苦笑すると、ピュアは「そりゃそうだけど...ほら、やっぱりサンタクロースが魔法使いの格好をしたようなのを思い浮かべちゃうじゃない」

と反論してから、

「まあいいけど」

と呟いてきちんとジャックに向き直った。

「ポーラのこと、どうもありがとう。本当に感謝してるわ」

ピュアはそう言いながら会釈する。意地っ張りなピュアが素直にお礼を言うなんて、非常に珍しいことだ。それに対しジャックが丁寧に一礼すると、ピュアは小さく頷いて話を続ける。

「今まで、呼吸器石化症特効薬を調合できた人はいなかった。私のときも、母のときも...青玉島のトップクラスの化学者がこぞってやっても、ダメだったわ...言っとくけど、青玉島のトップクラスってことは、夢幻界トップクラスなのよ。私が言うのもなんでしょうけど.....それをあなたは、いとも簡単にやってのけたそうね。しかも、どうしてかと思ったら、あなた、特効薬の発明者なんでしょ？すばらしいじゃない」

ピュアは玉座から上目遣いにジャックを見上げつつ、クッと口角をあげた。“上目遣い”と言っても、ぶりっ子するときのそれとはまったく違う。もっと...獲物を追い詰めたハンターや、大好きなお菓子を目の前にした子供などの表情に近い。

「お褒めにあずかり、光栄です」

一方ジャックは、夢幻界1の大国に君臨する女王に褒められても、顔色ひとつ変えることなく端然としている。

「で」

ピュアはジャックの目を見つめたまま、本題を切り出した。

「これは即答しろっていうんじゃないくて、考えてみてほしいんだけど...あなた、ここで働かない？国家直属の...医者？薬品研究者？兼、私の側近として」

「ええっ?!」

ピュアの提案に、サファイアが思わず悲鳴をあげる。

「私、クビですか?!」

サファイアの悲痛な問いに、ピュアは真顔で頷いた。

「うん。ほら...この間の報道もあったし」

そう言われると、サファイアは光のない眼を伏せて俯いてしまう。一切身寄りのいないサファイアにとって、ここでの職を失うことは本当に死活問題なのだ。

「...こら、洒落にならないこと言うんじゃない」

それを見兼ねたペーターがピュアを叱った。ピュア自身も叱られる前に気付いたらしく、慌てた様子で

「あ、あんたほんつとに馬鹿ね!!クビにするわけないでしょ。冗談よ、冗談!!」

と言って撤回する。

「え...本当ですか?!」

サファイアが顔をあげて尋ねると、ピュアは

「当たり前でしょ」

と優しく言ってから、ハッとしたように顔を赤らめ、

「か、勘違いしないでよ!!別にあんたみたいなお子ちゃまがいなくなったって困りはしないけど、それじゃあんまりにも可哀相だから、憐れんでやってるだけなんだからね!!」

とまくし立てた。

「ありがとうございます」

サファイアが心底ほっとした様子で丁寧にお辞儀するのを見て、自分自身もほっとしたピュアは、再びジャックの方に向きなおる。

「とにかく...キュアラールさん、ちょっと考えてみて。給料は、2つあわせて...月に10万Fan+王宮での衣食住。まあ、高いと考えるか安いと考えるかはあなた次第だけど...でも、悪い仕事じゃないわよ。国家予算で自由に研究できるし、研究室も1人1部屋貸せるし。側近の仕事は...まあ、この子に聞けば分かると思うわ」 ※14

ピュアはサファイアの肩を叩きながらそう説明したあと、

「とにかく、明日の朝までに考えてちょうだい」

と言った。

※14...つまり、10万Fanは本当に自分の趣味に使ったり、貯金したりできるのだ。

とりあえず来客用の部屋を借りることになったジャックは、サファイアの案内でその部屋へ移動した。フロアは女王の間の1つ下だが、部屋の造りは女王の間より良く出来ていたりする。

短い移動だが、思った以上に多くの人とすれ違った。様々な人が盛んに行き来しているし、建物も普通のビルだし、雰囲気は“王宮”というよりむしろ“オフィス”に近い。

そんな廊下を歩く中で、ジャックは1つ奇妙なことに気付いていた。すれ違う人が、2人をサッと避けて歩くのだ。他の人同士は皆仲良さげに会釈しあっているのに、自分たちとは...どうも意図的に視線を外しているらしい。

「相変わらずいい部屋ですよ、ここ...」

部屋に着くと、サファイアが独り言のように呟いた。まだサファイアには、側近の仕事を説明するという仕事が残っている。

「えーっと...仕事内容なんですけど...」

サファイアはテーブルの周りに椅子を2つ並べながら話し始めた。

「正直なところ、普段はあんまり仕事ないんです。洗濯はスタッフがやってくれますし、食事は厨房がやってくれますし...女王の間の掃除は、ペーター様が“趣味だから”などとおっしゃってご自分でやっちゃうんですよ」

サファイアはそう言うと、少しおかしそうに笑う。

「だから、普段の仕事は話し相手ぐらいです。ただ、側近は女王様直属の派遣員も兼ねてますから、外部に出掛けることが...たまにあります。ピュア様がお出かけになるときは、ボディガードにもなりますし...だから、ある程度の戦闘能力が必要なんですけど...」

サファイアはそこで言葉を切り、俯いた。

「...私、まだ半人前なんですよね...」

ジャックは何ともコメントしない。サファイアの戦闘を見たことがないため、コメントできないのだ。

「あ、でも、キュアラーさんは...吸血鬼、ですよ？」

サファイアがジャックの目を覗き込んで、縦に長い形の瞳孔を確認しながら聞いた。すると、ジャックは黙って頷く。

...気付いていたのか...

もちろんそれを隠すつもりだったわけではない。ただ、サファイアが今まで何も反応を見せなかったから、むしろいつ言おうかと思っていたのだ。

「だったら、多分問題ないと思います。吸血鬼の能力なら問題ないでしょう」

サファイアはそう言って笑った後、

「正直に言って、この仕事はそれほど悪くないと思いますよ。少なくとも、私にとってはこれ以上望めない職です」

と断言した。

「ただ...」

サファイアはジャックの眼を見つめたまま、

「もう旅はできませんけど...いいんですか？」

と言って少し首を傾げる。

「ええ...もう構いません」

ジャックは肅然と言った。静かだがきっぱりとしている言い方から考えると、もう旅の目的が果たされたのだろう。

そう思ったサファイアは、

「そうですか...」

と祝福するように微笑んだ。本当は何かコメントした方がいいかとも思ったのだが、結局あまり個人的なことに踏み込んでもしようがないと思い直し、止めておく。

「あと...」

祝福するようなサファイアの微笑みが、突然自嘲的なものになった。

「そうすると、私もご一緒させていただくことがとても多くなってしまいますが、構わないのですか？」

そんなサファイアの表情と言葉に、ジャックは少し眉を顰める。

「どういうことです？」

「“呪われた子クリアシャイン” ※15 “狂気の子クリアシャイン”“狂気の再生”“出来損ないの人間兵器”...などなど」

サファイアは自分自身を嘲るかのように、自分の蔑称をゆっくりと列挙した。

「廊下でみんな、私のこと避けて歩いていただけでしょう？」

確かにそうだ。

「みんなそうなんです...いや、当然だとは思いますが。だって、やっぱり嫌じゃないですか。月が消えるたびに、周りの人を片っ端から、狂ったように襲う...どう考えても危険人物でしょう？しかももともと、暗黒派の人物に“人間兵器”として作られたわけですし...まあ、そこは出来損ないなんですけどね。とにかく、みんな ※16 “呪われた子クリアシャイン”の再来を...何と言うか...恐れていたっていうか...青玉島じゃないところに生まれてほしい、もっと言うなら生まれてこなければいいって思ってたみたいなんですけど...」

そう語るサファイアは、本当に申し訳なさそうだった。その後さらに、サファイアは小さな肩を竦めて

「本当に生まれてこなければよかったのですが」

と付け足す。

「誰かにそう言われたのですか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは軽く頷いた。

「ええ、まあ...小さい頃、どうしてみんなに避けられているのか分からなくて、パール先生に――あ、ピュア様の家庭教師兼私の戦闘訓練指導者なんですけど――パール先生に、聞いてみたんです。そしたら、知っておかないと困るだろうからって、そういうことを教えてくださって...あ、ピュア様、ペーター様、あとパール先生は、とても優しくして下さってるんですよ。どこも行くあてがない私を、こうして雇ってくれているんですから...危険人物だからって殺されてしまっても、文句言えないのに」

サファイアの口調はとても軽かった。まるで、他人の噂話をしているかのようだ。しかし、ジャックはそれがどうしても気に入らない。

...どうしてそんな調子で話すんだろう？

もちろん、サファイアは本当に気にしていないというわけではない。むしろ、ずっと苦しんできたのだ。そんなことはジャックだって当然分かっている。

...だけど...

「...まるで、サファイアさんご自身もそれが当たり前だと思っていらっしゃるかの言い方ですね」

ジャックは固く腕を組み、やや低めの静かな声で言った。

「ええ」

それに対し、サファイアはあっさりと頷く。顔でこそニコニコしているものの、その濃紺の眼が助けを求めて叫んでいるということまでは、隠し切れていない。

...そんなふうに笑わないで...

辛さ、理不尽さ、悲しみ、怒り...そんなものをすべて独りで抱えて、何でもないかのように笑う。

独りで抱え込まないで。相談してくれれば、僕に打ち明けてくれれば.....そうしてくれれば、少しは力になれるのに。

しかし、そう言うにも無理があることは分かっていた。ジャックにとってはこれほど愛おしいサファイアだが、サファイアからすれば、ジャックはほんの数日前にあったばかりの人なのだ。

「生まれてこなければよかった」とか“殺されてしまっても、文句言えない”とか...そんなこと、自分で言わないでいただけませんか？」

やがてジャックはサファイアの眼をまっすぐ見つめて言った。口調は静かだが、周囲に対する怒りとサファイアに対する憤りを含んで、冷々としている。言葉はこれでも慎重に選んだつもりだ。

「あなたが生まれ変わってくるのをずっと心待ちにしていた人も、いると思いますよ」

サファイアはしばらく、ジャックの言ったことが理解できないかのように、目を瞬かせていた。それからようやくその意味を理解すると、ふっと笑顔になる。今度は心からの笑顔なのだろうが、まだどこか卑屈さ ※17 のようなものが拭いきれない。

「ありがとうございます、キュアラールさん...優しいんですね」

※15...王宮外では“呪われた子”としてしか知られていなかったが、王宮の中では昔から“呪われた子クリアシャイン”と言われていた。

※16...サファイアはあまり意識していないが、“呪われた子クリアシャイン”という言い方からすると、ここでの“みんな”というのは王宮内の“みんな”のことだと思われる。

※17...こう書くとかなりきつい表現だが、その後のセリフからすると、おそらく“ただ慰めてくれただけだ”と思っているのだろう。

翌朝、ジャックはピュアの申し出を受け入れると返答した。

「あら、よかったわ」

ピュアがそう嬉しそうに言って玉座に付いているリモコンを操作すると、逆さにした卵の上を平らにしたような形の引き出しが、ヒューンと飛んでくる。

「はい、これ」

ピュアはその最も大きな引き出しから、A3の紙がすっぽり入るくらいの紙袋を取り出すと、ジャックに手渡した。

「その中に必要なものは一式入ってるはず。分かんないことはクリアシャインに聞きなさい。あとクリアシャイン、部屋は片付いてるんでしょうね？」

ピュアがニッと笑いながら聞くと、サファイアはどぎまぎしながら

「え、ええ...多分大丈夫かと...」

と答える。

「今まで、側近って原則同性だったから、2人相部屋なのよ。でも別にいいでしょ？お子ちゃまと一緒でも」

ピュアは手をひらひらさせながら、ジャックに尋ねた。

「...わたしは構いませんが...」

“それはサファイアさんに聞くべきではないでしょうか”

ジャックはそう言おうとして振り返り、つい先程まで隣りにいたサファイアがいなくなっていることに気づく。

「サファイアちゃんなら、“部屋見てくる”って行っちゃったよ」

ペーターがくすくす笑いながら言うと、ピュアも

「安心しなさい、あの子は文句なんて言いやしないわよ。寂しがりやなんだから」

と言ってまた手をひらひらさせた。

サファイアの部屋はかなり広かった。“部屋”と言っているが、ちょうど1LDKのマンションのようになっている。出入口は、女王の間と直結しているドアと、廊下から入るものの2ヶ所だ。

1LDKの“1”にあたる部屋は、とても女の子の部屋とは思えなかった。全体的に飾り気がないのだ。縫いぐるみもポスターも置物もなく、ただシンプルな置き時計と温度計、絵のないカレンダーがあるのみだ。2つの机のうち、片方には数冊の学問書らしき本が立てられている。部屋の奥に2つ並んでいるベッドには両方とも水色系のカバーがかけられているが、どちらにも使った形跡が見られない。

「...普段、使っていらっしゃるお部屋ですよ？」

ジャックが思わず聞くと、サファイアはこくりと頷いた。

「ええ...ものが少ないってことですか？」

サファイアの言葉にジャックが頷くと、サファイアは笑いながらパソコンを取り出す。

「これ1個あれば、ほとんど何だってできちゃいますから...」

サファイアはそう笑ったあと、自分が使っているのは左側のベッドだということと、サファイ

アの机以外はすべて勝手に使っていいということを使った。

「...分かりました、どうもありがとうございます。ところで...本当に、よかったのですか？」

ジャックはお礼を言ってから、ずっと気になっていたことを尋ねた。しかしサファイアは首を傾げて

「えっと...何のことですか？」

と聞き返してくる。

「わたしも同じ部屋を使わせていただくということで、本当に構わないのですか？」

ジャックがここまではっきりと言い直しても、サファイアは

「え...キュアラーさんさえよければ、私は何も困りませんが...？」

などと言って一層きょとんとするばかりだ。

...気にしていないなら、まだいいか...

そんなサファイアの様子を見て気にしない方針を固めたジャックに、サファイアが無邪気に話し掛けてきた。

「その支給品セット、結構すごいでしょ?!」

ジャックはその言葉で、先程もらった紙袋の中身を見してみる。制服、パソコン、ケータイ、魔法銃...

「あ...もう制服もらったんですね...私、まだもらってないんですよ、半人前だから...」

サファイアが苦笑しながら言った。何ともコメントしないジャックを気にすることなく、サファイアは話を進めていく。

「あ、でもメルクリウスが入ってない...」

「メルクリウス？」

サファイアの呟きにジャックが聞き返した。

「あ、空飛ぶ靴です。ローマ神話の商業神メルクリウスが、後にギリシャ神話のヘルメスと同一視されたことから来ているんですけど...多分青玉島に定住してないと知らないですよ。青玉島でしか普及してませんから...」

サファイアは饒舌に説明する。

「あと、魔法銃はキュアラーさんには必要ないかも知れませんが、ここに入っている百露華は便利ですよ」

「はくろうか...」

ジャックが繰り返すと、サファイアは頷いて

「青玉人にとっては必需品です。MWが組み込まれたペンライト的なものなんですけど...」
と言った後、

「MWって、ご存知ですか？」

と尋ねた。

「ええ、それは分かります」

MWとは、青玉魔術の水に4つの数値 ※18 を与えて着色したもののことだ。それをステンドグラスのように組み合わせると、その色と模様によって、魔力をさまざまな“魔法”という

形に出力することができる。つまり、4つ1セットの数値を組み合わせることで、いろいろな魔法を使うことができるのだ。青玉島は、これを様々な製品に利用している。パソコンやケータイにも組み込まれているし、メルクリウスもこれを使っている。そして、MWを使う製品の最たるものが、百露華だ。サファイアが言った通り、多くのMWを組み込んだペンライトのようなものなのだが、MWを通した光を当てることで複数の魔法を使うことができるという、いたってシンプルな道具である。ちなみに最もよく使われる機能は、光を当てた物を拡大したり縮小したりする機能であろう。

「パソコンとケータイも、青玉島のはかなり癖がありますけど...大丈夫ですか？」

青玉島のものに癖があるも何も、パソコンやケータイ自体、何なのかは分かっているが使ったことはない。それを聞くと、サファイアはちょっと微笑んだ。

「じゃあまず、図書館へ行きましょう!!」

※18...平たく言うと色水を作るわけだから、シアン・マゼンタ・イエローという色の3原色があれば、ほとんどの色を作ることができる。原理的にはブラック以外の3色を混ぜれば黒になるはずなのだが、実際にはそうならないため、補助的に黒も使っているのだ。

数分後、2人は屋上に来ていた。

「...図書館へ行くのではなかったのですか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは

「あ、いや、その...図書館は別棟なんですけど、この際ですから城内案内もしておいたほうがよいかと思いましたので」

と言いつつ笑ってから、解説を始める。

「ご覧の通り、こちらが屋上です。見晴らしいいでしょ？よく科学部天文学班の方がここで天体観測していますが、他にも多くの方が息抜きしに来たりしています」

次に2人が来たのは食堂。ファミレスのような雰囲気、とても王宮の中にある施設とは思えない。 ※19

「あ...キュアラールさんにはあんまり関係ないですね。でも、まあ...とにかく、ここが食堂です。60種類の定番メニューのほか、外国の料理、季節の料理、今月の料理、日替わりメニューが各10種類、デザート50種類、計150種類から好きなものをオーダーできるんです。あ、飲み物もたくさんありますよ。紅茶50種類、コーヒー10種類、その他のソフトドリンク20種類、お酒30種類...」

壁の電光掲示板のメニューを指差しながらそう解説したサファイアは、不意に

「キュアラールさんは、お酒とか召し上がりますか？」

と首を傾げてきた。

「...人に勧められれば、少しはいただきますが」

ジャックが答えると、サファイアは

「やっぱりそうですね。キュアラールさん、いかにもそんな感じがします」

と笑いながら頷く。

「王宮のメニューにしては、結構家庭料理が多いでしょう？使っている食材も決して高級なものではないです...毎年、厨房から“もっと良い材料で高級なものを作りたい”って要望が出るんですけど、女王様が“国民が納めた血税を悪戯に浪費する必要はない”っておっしゃって...で、結局こうなっているんです」

言葉ではそう言っているが、サファイアの表情や口調からすると、どうも現状で満足しているようだった。

3ヶ所目はアリーナだ。

「見ての通り、体育館ですね。そこの扉は軍部棟へ繋がっています...あ、私の訓練はここじゃないですよ。向こうの軍部棟でやってるんです」

2人が4ヶ所目に来たのは科学部実験棟。もともとオフィスビルのように飾り気のない王宮だが、このビルは装飾らしきものが本当に1つもない。

「科学部には、物理班、化学班、生物班、数学班、医学班、天文学班、魔法班、総合班の8つがあります。それぞれ1フロアずつ持ってますね。でも所属している人は少ないですよ。物理班、天文

学班は4人、化学班もキュアラールさんを含めて4人、数学班・魔法班・生物班は3人、医学班は8人、総合班は1人ですから…」

話の途中で、サファイアは急に口をつぐんだ。耳を澄ますと、高い足音を響かせて誰かが近づいてくるのが聞こえる。

やがて、1番近くの角から20代後半か30代前半の男性が現れた。短い髪とプラスチックフレームの眼鏡は共に赤銅色だが、その奥の眼は青銅色で、どんより濁った光を宿している。白衣を着ていることからすると、おそらく科学部員の1人なのだろう。

「やあ、サファイアちゃん」

その男性が掠れた声で挨拶した。

「こんにちは」

サファイアは心持ち警戒しながら挨拶を返すが、彼の眼はもうサファイアから離れ、別のものを見ている。

「おや、あなたは…？」

男性はジャックを見つめながら、やや粘り気のある口調で尋ねた。すると、ジャックは淡泊な調子で

「本日から化学班でお世話になります、ジャック・キュアラールと申します」

と自己紹介した。

「ああ、キュアラールさん…ポーラ様を治して差し上げた…そうかい？」

男性は冷めた眼のまま、口角だけ持ち上げて笑う。

「若いのにすごいねえ…って、違うか。吸血鬼だもんね、若く見えるだけか…」

そう言いながら、彼は後ろ手に手を振りつつどこかへ歩いて行ってしまった。

「あー…今のはアルバート・ウィルソン博士」

彼が名乗らなかったので、代わりにサファイアがその後ろ姿を見送りつつ、溜め息混じりに紹介する。

「唯一の総合班です…彼は天才ですよ。科学の全範囲を一通り知っていて、それらを上手く組み合わせているいろいろ発明するんです。ただ…性格はあんまり良くないので、気をつけてください…実験台にされかねませんから」

科学部実験棟を出ると、2人はようやく目的地である図書館に来た。

「ここが図書館です。本の数は約50万冊、論文が約60万本、視聴覚資料は約150万あります…でも、ここはどちらかというと、資料の保存がメインですね。普通に読むだけなら、パソコンを



使えば一発ですから」

サファイアはそう言いながら、書棚の間をどんどん歩いて行く。

「どちらへ向かっていらっしゃるのです？」

ジャックが尋ねると、彼の前を歩いていたサファイアはちらっと振り返って

「オススメの本があるんです...ほら」

と言い、文庫本の棚の前で立ち止まった。

「このシリーズです」

“このシリーズ”の名前は『うっすら分かった気になるシリーズ』と言った。

- 01 『青玉生活』
- 02 『青玉社会』
- 03 『青玉地理』
- 04 『青玉政治経済』
- 05 『青玉文化』
- 06 『青玉パソコン』
- 07 『青玉ケータイ』
- 08 『青玉島の歴史』
- 09 『青玉島の法律』
- 10 『青玉魔術』
- 11 『青玉英語』
- 12 『青玉文学』
- 13 『夢幻界』
- 14 『イギリス』
- 15 『魔法化学』
- 16 『魔法生物』
- 17 『魔法理論』
- 18 『MW』

...など、1巻から286巻まで、ありとあらゆるテーマが取り扱われている。

ジャックは試しに『魔法化学』という題のものを取ってみた。表紙には、いかにもふざけたイラストが描かれている。

「騙されたと思ってめくってみてください、きっと感心しますよ」

サファイアが本を手で指し示しながら熱心に薦めてくるので、ジャックはパラパラと斜め読みしてみた。

...確かに...

確かにサファイアの言う通り、なかなかよく出来た本である。表紙と同じく文体もふざけてはいるものの、“魔法化学”とはどんな学問なのか、というところから始めて、押さえるべき要所をきちんと押さえ、初めて“魔法化学”という言葉聞いたというような人でも、最低限の基本的な知識を身につけられるようになっているのだ。究極の入門書、導入書と言えるだろう。

「夢幻界の様々な王国の例に漏れず、青玉島もかなり特色の強い国ですから、外国から越して来て戸惑う方が多かったんです。それで王宮が、この国で暮らすのに最低限知っておくと便利だろうってことをまとめてみたのが第1巻『青玉生活』なんですけど...そのノリで青玉島の文化とか歴史とか、色々なことをまとめてみたら、青玉人にまでウケちゃって、今では青玉島から離れて様々なことの入門書になっている、というわけなんですよ」

そう解説するサファイアは何故か誇らしげだ。

「01から09はお読みになることをオススメします。あとは...興味のあるものがありましたら...借りるのには期限も冊数制限もありませんから、お好きなだけどうぞ」

結局、ジャックはとりあえず01から09までを借りることにした。9冊の本をブックバンドでまとめ、図書館から出る。

王宮巡りを始めたのは朝だったのに、いつの間にか日が高く昇っていた。水色の空、明るい太陽、白い綿のような雲。その下に広がる庭は、いかにも“人工的に作り出した自然”という感じだ。黄緑色に輝く芝、石畳で舗装された歩道、咲き“乱れ”ることなくきちんと並んで咲く花壇の花、整備された小川、きれいに刈り込まれた生け垣...

「今時、ここまで定規当てたみたいに整備しちゃった庭って珍しいでしょう？」

サファイアはジャックの半歩前を歩きながら、肩越しに振り返って言った。

「ええ...そうですね」

ジャックが相槌を打つ。確かに最近、わざと自然のままに見えるような整え方をしている庭が多い。

「これもまた、この王宮独特の配慮なんですよ」

サファイアが笑顔で言う。

「青玉島の王宮では、城内の掃除・洗濯や庭の手入れは、みんな身寄りのない小さな子供たちの仕事になってるんです。“ちびっこお掃除隊”って呼ばれてるんですけど...1才から10才までの子ですね。自然に見える程度に加減して整えるって、そんな子供たちには難しいでしょう？だから、逆にかっちりやらせちゃ.....あ」

話の途中で、サファイアは何か気付いたように声を漏らした。そして次の瞬間、

「ミヒヤエル!!」

と手を振りながら呼びかける。

その先にいたのは、大きなメッセンジャーバッグを抱えた栗毛の少年だった。おそらく11才か12才といったところだろう。彼はサファイアの声に気づくと、慎重な足取りで.....むしろ、躊躇っているような調子で、こちらにゆっくりと歩み寄ってくる。

「やあ、サファイアちゃん...元気だった？」

少年が微笑みながら挨拶した。しかし、その声はどことなく硬い。

「うん。ミヒヤエルは？」

朗らかにそう言ったサファイアは、何の気なしに、少年の肩へ手をやろうとした。ところが、ミヒヤエルと呼ばれた少年は、その手をサッと避けてしまう。

「.....」

「...うん、僕も元気だったよ」

固まってしまったサファイアに、ミハエルは上ずった声で答えた。そして、それを慌てて取り繕うように

「あ...ごめんね、さっきから変な声になっちゃって...ちょっと、風邪引いちゃったみたいなんだ...」

と言ったあと、

「じゃ、じゃあね、サファイアちゃん」

と言って、まるで逃げるように駆けて行ってしまう。

「...今のはミハエル・ラックス。私がピュア様の側近になる前の同僚で、私にとっては数少ない友達なんです...まあ、私にとっては、ですけど」

サファイアは彼の後姿を見つめながら――いや、むしろそれよりずっと遠くを見つめながら、自嘲的な声で言った。

「彼も私も、ちびっこお掃除隊出身なんです。お掃除隊をやっているうちはまだ小さくて、みんな呪いのことなんて知らないから、まあ騙し騙し仲良くなれたりもするんですけど...卒業して呪いのことを知られちゃうと、大抵こうなっちゃうんですよね...」

そう言って肩を竦めるサファイアはとても寂しそうに見えた。ところが、次に

「そろそろ戻りましょうか」

と言って城の方へ歩き始めた時には、もうすっかりいつもの笑顔に戻っている。

「.....サファイア」

そのあまりにも小さな後ろ姿を、ジャックが静かな声で呼び止めた。

「はい？」

サファイアは少し驚いた様子で振り返る。ジャックに“サファイア”と呼び捨てにされたのは、これが初めてだったのだ。

「もっと砕けた話し方で構いませんよ。呼び方も、呼び捨てで構いませんし...」

ジャックは腕組みをしたまま、淡々とした口調で言った。

「...え...ええっ？いいんですか？」

驚いたサファイアが尋ねると、ジャックは黙って頷く。

「じゃあ...じゃあ、“ジャック”って呼んでも、いいの？」

それでもなお、恐る恐る確認してくるサファイアに、ジャックは少し苛立ちを滲ませた声で

「ええ」

と答える。

「...ありがとう、ジャック」

サファイアはしばらくしてから、恥ずかしさと嬉しさが半々で混ざり合ったような笑顔を見せた。

※19...それを言うのなら、そもそも王宮なのに“食堂”という時点でおかしいという気もするのだが。

2人が女王の間に帰ってきたのは、王宮案内を始めてから2時間後のことだった。

「お帰り。城の案内は済んだのかい？」

ペーターがサファイアに問うと、サファイアは朗らかに

「はい、おかげさまで」

と答えた。

「だったら仕事に戻ってもらうわよ」

ピュアはそう言いながらリモコンを操作し、2人分の椅子とテーブルを引っ張り出す。

「どうもありがとうございます」

2人はお礼を言いながら椅子に腰掛けた。ピュアはカタカタとキーボードを叩いている。

「ピュア様、こちらで少しお店を広げても構いませんか？」

サファイアが尋ねると、ピュアはパソコンから目を上げて、不機嫌そうに顔をしかめた。

「お店広げるって...何する気なのよ？」

「先日壊してしまったメルクリウスを直したいんですけど...」

サファイアが答えると、一瞬沈黙が流れる。

「ばっ...馬鹿ね、さっさと直しなさいよ!!何で今までずっと直さなかったの?!」

言葉を取り戻したピュアは、キーボードをバンツと叩きながら怒鳴った。確かにもっともなツッコミに聞こえる。なんせ、サファイアはメルクリウスが好きで、移動するにせよ戦うにせよ、いつもメルクリウスをフルに駆使しているのだ。そんなサファイアにとって、メルクリウスの故障は致命的である。しかし...

「今まで、毎日60000字のレポートを要求なさせてたのはどこのどなたですかぁ!!」

サファイアが悲痛な訴えを起こした。ピュアはサファイアに毎日、とても詳細なレポートを要求していたのだ。

「ろ...60000字?!そんなレポートを書かせてたのかい？」

ペーターが目を丸くして小さく叫びながらピュアを見ると、ピュアはふいとそっぽを向いてしまう。

「だって...部下の仕事を上司が把握するのは当然でしょ？」

確かにピュアの言うことは正しい。しかし、世の中には何でも、“限度”というものがあるのだ。

「しかも、ピュア様の返答はいつも“分かったわ。さっさと仕事終わらして帰ってきなさい”ってだけですし...」

サファイアが膨れっ面をして言うと、ピュアは

「あのねえ...こっちも暇じゃないのよ。あれを毎日読むだけでもやっとなんだから」

と弁明する。

しばらく、ピュアとサファイアはこんな調子で言い合っていた。ケンカとは違う、“苦情陳述とそれに対する受け答え”といった感じの会話だ。

...思ったより打ち解けているんだな...

そう思いながら2人を見つめているジャックに、ペーターは

「まあ、だいたいいつもこんな感じだから...」

と苦笑して見せた。

ピュアとサファイアの会話が一段落つくと、2人はそれぞれ自分の作業を始めた。サファイアは左足のメルクリウスを1度分解すると、靴の合皮の中から、小さなチップを取り出す。

「あーあ...依りによってここがやられるなんて...」

サファイアはそう呟きつつポケットから似たようなチップを取り出すと、パソコンに差し込んだ。そして1分ぐらいの間キーボードとマウスを弄ると、パソコンからチップを取り出して、破れたところから靴の合皮の中に押し込む。

きちんと押し込まれたのを確認したサファイアは、ポケットから百露華を取り出し、靴の部品ひとつひとつを縫い合わせるかの如く光を当てていった。色とりどりの光に照らされるそばから、靴の部品たちは綺麗に繋がっていく。

「...瞬く間なんですね」

その工程をずっと見ていたジャックが平淡な声で言うと、サファイアは「作りは単純ですから」と笑った。

サファイアが説明した通り、2人の主な仕事は“女王の間にいる”ということだった。7:00から20:00まで女王の間にいれば、あとは本を読んでいようと何していようと一向に構わない。そればかりか、きちんと断ればその時間に席を外すことさえ許されるようだ。

その一方で、サファイアには毎日欠かさず戦闘訓練が課せられていた。21:00から22:00まで、サファイアはピュアの家庭教師でもあるパールの指導を受けている。驚くのはその訓練方法だ。教師パールを相手に、取りあえず戦ってみる。少年ジャックがデイビッドの訓練を受けていたときと、まったく同じやり方なのだ。

パールの戦い方は至極正統派だった。まさに型通りの正しい動き方をする。しかし、そんな教師のスタイルは、教え子に受け継がれなかったらしい。サファイアの戦い方は、とても戦っているようには見えないものだった。持ち前のすばしっこさとメルクリウスを駆使して、くるくる踊るような軽やかさでちょこまか動き回り、相手の攻撃をかわしつつ、あちらこちらから攻撃する。そのすばやさはまるでトンボのようだし、その質量を感じさせない様は、まるで妖精が踊っているかのようだ。まあ、自分の体格などを上手く活かした戦い方ではある。

訓練が終わると22:00を回っているのだが、それでも2人の就寝時刻はまだまだ先だった。その後今度は、研究者としての活動が始まるのだ。

科学部化学班は4人いるが、その4人が協力して何かを行うということは皆無に等しく、普段は完全に個人作業だった。それが良いかどうかはその人の考え方次第だが、実験室は1人1部屋あるし、器具はすべて揃っているし...環境は理想的だ。

その間、サファイアもどこかへ出掛けているようだった。

どこへ行っているのだろうか？

気にならないわけではないが、それを聞いてみる理由もない。

「ジャック～～!!」

ある日の――いや、夜の2:00ごろのこと。ジャックが実験棟の研究室を出て城に帰ろうとすると、背後から子供の無邪気な声をした。

「サファイア?!」

ジャックが驚いて――というのはジャック本人にしか分からないのだが――振り返ると、実験棟の無機質な廊下をサファイアが走ってくる。

「こんな深夜に何をなさっているのです？」

ジャックが尋ねると、サファイアは肩を竦めて

「4時間近く、色水とにらめっこだよ。もうすぐ論文の期限だから...」

と答えた。話しながら、2人はどちらからともなく歩き始める。

「論文...何のですか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは滑らかに

「ん...今、人の容姿を変えるMWを考えてるんだ。ほら、誰かに化けるMWはもうあるでしょ？だけど、あれは化けたい目標の人の髪が必要だから、あれだと架空の人物に化けたり、自分の容姿をちょこちょこいじるなんて芸当はできないんだよね...だけどまあ、似たのに物の材質を変えたりするのがあるから、その応用で行けると思うんだけど...」

と語った。

「...ということは、ここの研究者なんですか？」

ジャックが聞くと、サファイアは目を瞬かせて

「...あれ？言ってなかった？」

と首を傾げる。

「私、科学部魔法班の班員なんだ」

サファイアはそう言うと、ちょっとだけ得意げに笑ってみせた。彼女が得意げに笑うなんて、非常に珍しいことだ。

ジャックは驚いて、6・7才にしか見えない10才児サファイアを見つめる。 ※20

「班員なんだ」

サファイアがもう1度繰り返すと、何も答えないジャックの眼を覗き込んだ。しかし、ジャックはやはり顔色ひとつ変えずに黙っている。

「むう...ちょっとは驚いてよ。これでも、青玉島科学部史上最年少なんだよ」

そう言って膨れっ面してしまうサファイアに、ジャックは

「言葉も出ないほど驚いているのですが...」

と正直に言ったが、やはり無表情にしか見えなかった。

※20...今ジャックが驚いたのは、普通にサファイアが科学部員だということに対してである。

第2章 無理厳禁



2003年7月24日

実験棟の魔法班の部屋が並ぶ中の1室。サファイアはそこで、キーボードを叩き続けていた。今“叩く”と書いたが、そう書くとやや語弊があるかもしれない。サファイアの指はキーが反応する最小限の力でキーボード上を掠めるように踊るばかり。その動きで、画面上には文字が話すよりずっと速く現れる。

最後だけカット強く打ち、サファイアの指が止まった。マウスを操作すると、今まで文字で埋め尽くされていた画面にステンドグラスのような模様が現れる。これがMWだ。

…うーん…今のところ、特に間違いはない…よね。

サファイアはそう思いながら、パソコンの画面右下に表示されている時計を見る。

02:18

…うん、そろそろ切り上げよう。

サファイアは描いたMWを上書き保存し、さらにバックアップしておいた。それからパソコン——B5サイズぐらいのノートパソコンなのだが——を縮小してポケットにしまう。

戸締まりをして出入り口のドアを開けたところで、サファイアは驚いて立ち止った。ドアの向かいの壁に、赤銅色の髪 of 男性がもたれて立っていたのだ。

「アル博士…」

サファイアがそう呟くと、彼は片手を挙げながら

「やあサファイアちゃん、遅くまでご苦労様」

と微笑む。

「お疲れ様です…こんなところでどうなさったんですか？」

サファイアが慎重に尋ねると、アルバートはゆっくりと壁から離れ、サファイアとの間を詰めながら言った。

「いや、疲れているところ悪いんだけど…ちよっと協力してもらいたいことがあるんだ」

それを聞くと、サファイアは苦々しい顔で

「え…アル博士、またですか？」

と聞き返す。アルバートは周囲の人間に、自分のことを“アル”と呼ぶよう求めていた。サファイアはそれに敬称を付けて、“アル博士”と呼んでいる。

「うん、また」

アルバートはそう頷きながら、すでにかなり詰まっていた間合いをさらに詰めてサファイアの肩に手を置くと、低めの抑えた声で言った。

「いいじゃないか、それだけ必要とされてるってことだよ」

アルバートの研究室にはいつも、奇妙なものが雑多に並んでいた。ピーカー、試験管、半田鋸、量り、導線、電圧計、検流計、電流計、恐ろしく古い本、木材、鉄板、電動糸鋸、歯車、作りかけの装置、薬品…いつ見ても混沌としている。

「ここに立ってもらえる？」

アルバートがそう言って指し示したのは、ガラクタを押し退けて捻出した1m×2mぐらいのスペース。その端には、映写機に似た形の機具が置かれている。

「何をするんですか？」

サファイアは示された場所に立ちながら、訝しそうに尋ねた。しかし、アルバートは

「それはお楽しみ」

とだけ言ってくつつつ笑うと、片手で弄んでいたリモコンを映写機に向けて不意にボタンを押した。

「っ!!」

映写機のようなものは、サファイアの頭上に水平な光の板を作り出した。それが少しずつ下りてきてサファイアの頭に触れた途端、その部分に焼けるような痛みが走る。

光の板はそのまま少しずつ下りていった。その3分ぐらいの間、痛みもずっと続く。サファイアが横を見ると、アルバートはパソコンの画面を覗き込んでいた。

光の板が足元まで下りると、ようやく激痛も止んだ。一瞬揺らいだ身体を、サファイアは両足でどうにか支える。

「ほら、おいで」

アルバートは画面を見つめたまま、言葉だけでサファイアを呼んだ。サファイアが画面に近づくと、アルバートが説明し始める。

「今のは健康診断のMWだよ。これを使えば、身長・体重・サイズとか、血糖値・血圧・コレステロール値とか、かかっている呪いなんかもすべて分かる…なかなか便利だろう？」

アルバートがそう言うと、サファイアは驚いた様子で

「珍しいですね。アル博士がそんな世のため人のためになりそうな物を開発なさるなんて」とコメントした。いつもの彼は、光明と暗黒の狭間辺りの怪しいものばかり作っている。こうして実験台になったサファイアにさえ、何の魔法だったのか言えないケースもしばしばだ。

「先週、夢幻界健康委員会から依頼があってね。5000万Fanくれるとのことだ」

アルバートはふふっと小さく笑った。それを聞くと、サファイアも思わず苦笑する。

なるほど…そういうことか。それだけの大金が絡めば動きもするはずだ。

「見てほしいのは、検査結果に間違いがないかという点だ」

そう言われたサファイアは、改めて画面を見てみた。

身長：116cm

体重：20.1kg

……

呪文：新月の呪い・所有呪文

「…所有呪文…？」

サファイアが怪訝そうに眉を顰める。

…まさか……まさか、そんな呪文が……

「…いや、これは間違いじゃないと思うね」

アルバートは楽しげに笑いながら言った。

「どうも、先代の君は相当不幸だったらしい…いや、今と同じか。先代の君も、やっぱり誰かの奴隷だったみたいだ」

「……」

アルバートのそんな言葉も、サファイアの耳には入ってこない。サファイアはただ、信じられないという思いで画面の文字を見つめているばかりだ。

“所有呪文”とは、持ち主が呪文をかけられた人を自在かつ自然に操れるようにするという、吸血鬼の魔法陣魔法だ。暗黒魔術の中でも極めて古く、かつ非常に有名である。少なくとも、魔法学に関わっている人ならば、魔法陣を専門としていなくてもざっくりとは説明することができるというぐらいだ。 ※21 もちろんサファイ

アだって知らないはずはない。サファイアに所有呪文がかかっているということは、その名の通り、先代のサファイアが誰かの所有物であったということだ。

「…魔法痕は見れないんですか？」

サファイアが呟くように尋ねると、アルバートは

「ああ、見れるよ」

と言って画面を切り替えた。すると、画面にはっきりとした魔法痕が映る。

魔法痕とは、その名の通り魔法を掛けられたものに残る痕のことだ。これは、例え魔法陣を使っていようとMWを使っていようと、共通の仕組みで現れる。

魔法痕を見るだけで、いくつかの情報を知ることができた。まず、この所有権は譲与できるのだが、それはなされていらないらしい。その代わり、1回強奪された——つまり上から塗り替えられた痕跡がある。

「まず、誰かが君に所有呪文をかけた…そのあと、別の誰かが君を奪って、呪文を上書きした。まあ、そんなところだろう？」

アルバートはそう言ってサファイアににっこりと笑いかけた。まるで、愉快的な話でもしているかのようだ。

「…ええ…そうでしょうね」

サファイアがやむを得ず頷く。この鮮明な魔法痕を見る限り、他には考えようがない。

「アルバートさん、このデータ…消してもいいですか？」

サファイアは静かな声で尋ねた。静かだし、あくまでも“尋ねて”いるのだが、その裏にはとても10才児とは思えないような強い力があり、相手に有無を言わせない。

「いいよ」

アルバートはあっさりと言った。

「ありがとうございます」

アルバートは承諾しないだろうと思っていたサファイアは、少し驚きながらもすぐにマウスを取った。今表示されているウィンドウを閉じ、“変更されていますが保存しますか？”というダイアログボックスに“いいえ”と答える。それからパソコンと外部メモリーに検索をかけ、根絶やしにしてしまった。

「…他人のなのに…徹底的にやったね…」

アルバートが呆れた調子で言うと、サファイアは

「申し訳ありません」

と謝ってから

「でも、私の個人情報ですから」

と開き直る。

先程アルバートがあっさり承諾したのは、サファイアにパソコンのデータを消されても、外部メモリーのバックアップが残ると思ったからだったらしい。しかし、サファイアはパソコンの国家資格も持っている。そんなミスをするはずがない。

「まあ、そうだね…いずれにせよ、これで実用化できるかな？」

部屋の隅に置かれた映写機のような機具を見つめながら言うアルバートに、サファイアはふるふると首を振って、

「あの光の板みたいなものが身体に触れると、焼けるような痛みを伴うんです。それをどうにかしないと、実用化は難しいかと思います」

と告げた。

※21...サファイアの専門はMW開発である。

サファイアがアルバートの部屋を出たのは3:30過ぎだった。あと1時間もしないうちに夜が明ける。そんななか、サファイアは非常に硬い表情で歩いていた。

“所有呪文”か...

別に、自分が自分のものではなく誰かの所有物なのだ、ということにショックを受けているわけではない。もともとサファイアは女王の所有物だと言われているのだ。かつてはプルメリアの物だった。今はピュアの物である。サファイアが硬い表情をしているのは、女王以外に別の一人女王よりも強い所有権を持つ所有者がいる、ということが分かったからだった。サファイアが側近になったばかりのころ、ピュアに言われた言葉が蘇る。

“あんたには、大きくなったらやってもらわなきゃならない仕事があるの。そのために、わざわざ王宮で雇ってあげてるんだから...だから、あんたは私の物でなきゃ困るのよ”

そう言うピュアに、サファイアが

“でも...もしも、私を作った人が、返せって出てきたらどうするんですか?”

と尋ねると、 ※22 ピュアは

“それでも渡さないわ。どんなことがあっても...誰にも、渡さない”

と断言した。

しかし、所有呪文のもたらす所有権は絶対的だ。ピュアが何と言おうとも、ピュアの持つ所有権より所有呪文における所有者の持つ所有権の方が圧倒的に強い。所有呪文を解くことはできないし、ヒトであるピュアは吸血鬼の魔法である所有呪文を掛けることなどできないから、もうサファイアの所有者にはなることはできない。

先程の魔法痕を見ると、サファイアの所有権は誰かに強奪されたのを最後に、誰にも譲与された形跡はなかった。普通に考えれば、それならもう所有者は死んでいるはず ※23 なのだから、なんら困ることはないだろう、ということになる。ところが、所有者が死亡していることを表す死亡痕は見当たらなかった。ということは、まだサファイアの所有者は生きているということになる。

このことが発覚する前に、その仕事が済んでしまえばそれで良い。しかし、もしもその前に所有者が現れて、サファイアの所有権を主張し始めたりしたら?...そうなると、ピュアの言葉から考えれば、サファイアは“大きくなったらやってもらわなきゃならない仕事”をすることができなくなってしまう。その仕事のために雇われているのに、その仕事をできなくなってしまうと、もうサファイアの存在価値はない。

その時点で、ピュアはサファイアを必要としなくなる。

...そうになったら私は、捨てられちゃうのかな...? ...いや、殺されるのか。“危険人物”として...“危険物”として。

サファイアは、殺されること自体はさほど恐れていなかった。いや、もちろん死ぬのは怖いのだが、それ以上に、誰にも必要とされなくなることの方がずっと怖い。

“呪われた子クリアシャイン”などと言われ、皆に危険人物扱いされたりあからさまに避けられたりしてきたサファイアは、“誰かに必要とされたい”という願望を持っていた。いや、おそらく誰でも持っている願望なのだろうが、サファイアの場合はそれがとても強く、しかも比較的顕在

化していた。アルバートの実験台になることを断れないのもそのためだ。アルバートは別に、サファイアという人間そのものを必要としているわけではない。単に、サファイアは強い魔力のおかげでタフだから、実験台にしやすいというだけのことである。そんなことはサファイアにも分かっているのだが、それでも“必要だ”と言われると、ついその言葉に縋ってしまうのだ。しかし、サファイアにとって“自分は必要とされている”と思える1番の拠り所は、やはりピュアだった。ピュアが言っているのだから、“任務”というのは何らかの形で青玉島の役に立つ任務なのだろう。

※24 そのために必要だというのなら、サファイアにとっては当然非常に大きく、確かな拠り所となる。そして、その大きさ・確かさの分だけ、失った時の穴も大きい。実際、ピュアに“要らない”と言われたら、その段階でサファイアは自分自身の存在価値を失ってしまうのだ。

一方サファイアがアルバートと別れてから15分ぐらい経った頃、ジャックは研究室が並ぶ廊下を歩いていた。サファイアの帰りがあまりにも遅いため心配になり、かれこれ1時間以上捜していたのである。

...いったいどこにいるんだ...?

ジャックは1時間前、まず真っ先にサファイアの研究室を訪ねたのだが、研究室はすでに空っぽだった。その後科学部実験棟は隅から隅まで歩きまわったし、城の中もサファイアが行きそうなところはすべて行ってみた。もう自室に戻っているかもしれないと思って1度帰ってみても、やはりサファイアの姿はない。そこで再び、サファイアの研究室を訪ねてみたわけだが.....案の定研究室は無人である。

他に、サファイアがいそうなところは...?

そう思いながら歩いていると、廊下の向こうの角から人が現れた。赤銅色の短髪を持つ男性—おそらくアルバートだろう。

先に反応を示したのはアルバートの方だった。

「おや...こんばんは。こんな遅くにどうしたんだい？」

ジャックはどう答えようか一瞬迷った。“サファイアを捜している”—そう言えば、彼が知っていれば教えてくれるかもしれない。だが、アルバートが警戒すべき人物であることは明らかだ。でも、これだけ捜しても見つからないとなるともう、いよいよ心配で...

「...サファイアが部屋に戻らないのですが...ご存じありませんか？」

ジャックが尋ねてみると、アルバートは微かに目を見開いた。

「もう自室に戻っていると思っていたけど？結構前にここを出たはずだからね...15分ぐらい前かな...」

「...そうですか」

ジャックは短く答えると、

「どうもありがとうございます」

と会釈をしてアルバートと別れ、実験棟から出ていく。

本当にどこへ行ったんだ...?

ジャックはそう思いながら、今度は庭に行ってみた。左右正面に目を走らせながらきちんと整

えられた花壇によって作り出された小道を歩いて行くと、ベンチが並んでいるところにたどり着く。最も奥にあるベンチには、小さなシルエットが――…。

「サファイア？」

少し離れた辺りからそう呼ばれ、サファイアはハッとした。いつの間にか庭のベンチに座り込んでいたようだ。もう、東の空から日が昇り始めている。

「あ…おはよう、ジャック」

サファイアは明るい笑顔を作ると、小道を歩いてくるジャックの方へ駆け寄った。

「“おはよう”ではないでしょう」

ジャックが冷たく言う。

「まさか、ここにずっといらしたわけではありませんよね？」

ジャックに鋭い視線を向けられたサファイアは、

「あー…うん。さっきまで研究室にいたから…」

と言って誤魔化そうとした。もちろん、アルバートの実験台になっていたなどと言うわけにはいかない。

しかし、ジャックは

「“さっき”というのは2:40より前ですよ？」

と言いながらちらりと時計を見る。

03:50

空白となっている時間は1時間10分だ。

「……どうして知ってるの？」

サファイアは驚いて尋ねた。

「あなたの帰りがあまりにも遅いので、捜していたんですよ。ケータイに連絡しても繋がりませんし…」

そう答えながら、ジャックはサファイアを歩くよう促す。

「あ…ごめんね…」

サファイアが謝った。連絡が繋がらなかったのは、アルバートの実験室へ入る際に“機具が壊れるから”と言って電源を切らされ、そのまま忘れていたためだ。2:40のことを知っているということは、それよりもっと前から――少なくとも1時間10分は捜していたことになる。

「本当にごめんね、わざわざ…」

サファイアは半歩後ろを歩くジャックを振り返ってもう1度謝ってから、

「で、どうしたの？」

と首を傾げた。

「“どうした”とはどういうことですか？」

ジャックが怪訝そうに聞き返すと、サファイアは目を瞬かせながら

「え……だって、何か用事があったから捜してたんでしょ？」

とさらに首を傾げる。ところがジャックは

「…いえ、特に用があったわけではありませんが」

と言って首を振った。

「ただ、あなたの帰りがあまりにも遅いので、捜しに来ただけです」

ジャックはさも当たり前のような口調でそう付け足す。

「…??」

サファイアはその真意を測りかね、ジャックの表情を伺い見た。しかし、ジャックはあくまでも無表情である。

……？

サファイアはまだどうもよく分からなかったが、それ以上聞くことはしなかった。

帰り道、ジャックはサファイアの半歩後ろを歩いていた。身体は小さいにもかかわらず、成人男性と同じ速度でちょこちょこ歩いていく。

その後ろ姿を見つめながら、ジャックは先程ベンチに座っていたサファイアを思い出していた。

自分の研究室で研究していたサファイアは、この広場で一体何をしていたのだろうか？息抜きしていたというだけなら一向に構わないのだが、どうもそういう風には見えなかったし…

…そもそも、どうしてウィルソンさんがサファイアのことを知っていたのだろうか？たまたま廊下ですれ違っただけだろうか？だが、それにしても“15分前”など、かなりはっきりとしたところまで覚えていたようだが…。

2003年7月29日

この日の夜遅く、サファイアは自分のベッドに腰掛けていた。

「失礼いたします」

そう断りながら、ジャックは丁寧な手つきでサファイアの腕を拾い上げる。このまま手に力を入れたら折れてしまうのではないか…そう心配になってしまうほど、細い。

ジャックは、そのか細い手首に2本の牙を突き立てた。 ※25 それでもサファイアが痛みを感じることはない。ただ、自分の身体の中に何か異物が入ってきて、そこから何かか抜き取られていくという、違和感があるだけである。

てっきり、喉とか肩とかから吸うんだとば



っかり思ってたんだけどなあ...

もうかれこれ2週間ほどの間、毎日吸血されていにもかかわらず、サファイアはまだそう思っていた。しかし、だからと言ってそうしてほしいというわけではない。嫌だとい



うわけでもないが、やはり一種の気まずさや戸惑いがあるのだ。どういうわけか、心臓がバクバクしている。もしこれが喉とか肩とかだったら、今よりもっと酷かっただろう。

そうこう思っているうちに、ジャックは慎重に牙を抜いた。入っていた異物が抜けていく奇妙な感覚...入ってくる時以上に変な感じがする。本来の状態に戻って安心するような、今まであったものがなくなって物足りないような...

「もういいの？」

サファイアはほぼ毎日そう尋ねている。ジャックが飲む量は、わずか20mlほどなのだ。

「ええ」

ジャックも毎回、まったく同じ静かな声で答えながら牙の刺さっていた部分を丁寧に指で撫でると、顔色ひとつ変えないまま

「どうもありがとうございました」

と言って、礼をした。

※22...6才児がそんな思考回路を持ち合わせているかと疑問に思うかもしれないが、ちょうどこの会話の直前にサファイアが何者かに造られた人間兵器だったらしいという話をしたばかりだったため、そのように発想しやすい状況だったと言える。

※23...1500年前のサファイアの所有呪文を掛けた人物が今生きているとしたら、当然その人は1500才以上になっているはずである。そんなに長生きする人間はいないだろう.....という理屈だが、この物語にはすでにその例外が2人登場している。

※24...もちろん、サファイアがそう考えたいというだけのことである。

※25...念のために言うておくが、この牙は別に普段から見えているわけではない。どういう仕組みか分からないが、ちょうど猫の爪のように、必要な時だけ現れる。

翌日の朝7:00、2人はいつものように女王の間に出勤した。

「おはようございます」

「おはよう」

サファイアたちの挨拶に、パソコンからちらりとだけ目を上げたピュアが答える。

「ペーター様はどうなさったのですか？」

ジャックがすぐに、丁寧だがやや鋭い声で尋ねた。普段ならピュアを1人にして席を外すことなどないペーターが、どこにも見当たらないのだ。

「ああ、別に...」

「ピュア、持ってきたよ」

ピュアが答えようとした瞬間、そう言いながらペーターが廊下の方から現れた。両手には、典型的なイギリス式の朝食を2人分持っている—トースト、スクランブルエッグ、焼ベーコン、トマト...それに、紅茶といった具合だ。

「ちょっ...ペーター様?!

サファイアが驚いて声をあげると、ペーターは苦笑しながら説明した。

「いや...ピュアが、いつもより1時間ぐらい早く起きちゃったらしくてね。だからその分朝食も早くしたんだ」

「そんな...一声かけてくだされば、私たちが行きましたのに...」

サファイアが戸惑いながら言う。なんせサファイアは5:00起きだし、ジャックにいたってはもっと早くから起きているのだ.....こうなるとむしろ、いつ寝ているのかと不安になってくる。

※26

「いやいや...君たちの勤務時間は7:00から20:00なんだから、それ以外の時間に煩わせちゃ悪いからね」

そう言って笑うペーターは、ピュアに朝食の乗ったプレート ※27 を渡してから自分の分を手近なテーブルに置くと、今度はサファイアに小さな皿を差し出す。その上に載っているのは、さつまいもとカスタードクリームタルトに、ホイップクリームをたっぷり搾ったもの。サファイアの大好物である。

「あああああっ♪♪」

サファイアが我を忘れて叫んだ。

「え...え、これ...いいんですか??」

皿を受け取りながら眼を輝かせて確認してくるサファイアに、ペーターは

「もちろんだよ。君、前にこれが好きだって言ってただろう?多分君たちが行く時間にはなかったと思ってね」

と微笑む。こんなに優しい上司(しかも女王の父親)は他どこにもいないに違いない。

「ありがとうございます!!」

サファイアは満面の笑みで言うと、ぴょんぴょん跳ねるようにして部屋の隅に行ってしまった。そこで食べるつもりなのだろう。

「...ったくもう...お父様のせいで、クリアシャインがまた壊れちゃったじゃない...」

ピュアがイライラと肘置きを叩きながら言った。

「甘いものが好きなのですか？」

ジャックは幸せそうに食べるサファイアを見ながらそう尋ねる。生まれ変わったサファイアがこれほど幸せそうに笑うのは、ジャックの知る限りサファイアンコスモス畑ではしゃいでいたとき以来だ。

「半端じゃないわよ...」

ピュアが頼杖をついていない方の手をひらひらさせながら答えた。

「放っといたら、3食ケーキだけで生活しかねないんだから...あの子のために、食堂のケーキは1人につき1食1つまでってルールを作ったくらいよ」 ※28

「...そうですか」

そう相槌を打つジャックの声にも、呆れたような色が滲んでいる。

確かに1500年前のサファイアも甘いものは大好きだったが...まさか、ここまでだったとは思ってもしなかった...

「...ごちそうさまでした♪」

いつのまにか食べ終わったサファイアが戻ってきていた。

「美味しかったかい？」

ペーターはそう尋ねたが、はっきり言って愚問である。

「はい、とても♪♪」

案の定、サファイアの返事はまさに幸せいっぱいだ。それ以外の何物でもない。

「本当にどうもありがとうございました」

サファイアは幾分落ち着きを取り戻してから、もう1度丁寧にお礼を言った。そのあとピュアの方に向き直ると、

「あの...今日の仕事は18:00までということではよろしいでしょうか？」

と尋ねる。

「は？どうして？」

ピュアはそう聞き返した。しかし、その言葉の途中ですぐに

「...ああ...」

と気づく。

「今夜は新月ですから」

そう微笑んで答えるサファイアの声には、まだ先程の明るさが残っていた。

※26...なんせ、寝るのは2:00とか3:00とかなのだ...と言っても、サファイアの場合はあくまで研究が忙しい時期の話なのだが。

※27...食堂から持ち出す際に用いるものだ。

※28...このルールだと、1日に3つまでならケーキを食べることができるということになる。ということは、このルールがないと、サファイアはケーキを1日に4個以上食べてしまうということなのだろうか....

今朝断っておいた時刻である18:00になると、今まで女王の間でパソコンを弄っていたサファイアは、突然立ち上がって

「あ...それでは申し訳ありませんが、本日はこれで失礼させていただきます」と言った。

「あ、はいはい.....ところで、今日は誰も呼んでないわよ」

ピュアの言葉に、サファイアは少し驚いたような顔をして

「え...じゃあどうするんですか？」

と尋ねる。

「キュアラーに頼めばいいでしょ？」

ピュアはそう答えながら、ジャックの方に目を向けた。するとサファイアは、浮かない表情で

「ああ...分かりました」

と頷いてから、ジャックの方にきちんと向き直る。

「どうしても頼まないといけないことがあるんだけど...大丈夫？」

申し訳なさそうにそう尋ねてくるサファイアに、ジャックはきっぱりとした声で

「ええ、もちろんです」

と答えた。

2人はすぐに、自室へ戻ってきた。

「ええいやっ...と」

サファイアがふざけた掛け声とともに本棚をずらすと、小さな隠し扉が現れる。

「暗証番号は19921219だよ」 ※29

サファイアはそう言いながら、タッチパネルで暗証番号を打ち込んだ。“ピーー...”という電子音と、“ガチャ”という鍵の外れる音が、一緒に響く。

サファイアは無造作に扉を開けた。その奥にあるのは、半径が小さくていかにも目を回しそうな螺旋階段だ。これが下へ下へと続き、そのまま地中へ吸い込まれていく。

サファイアは窓の外を一瞥した。空は赤く染まり、徐々に夜が近づいている。

「...あんまり時間なさそうだね」

そう呟くサファイアの声は、まるで独り言を言っているかのようだ。

2人は螺旋階段を、飛ぶように駆け下りていった。階段は永遠に続くかと思われたが、それでもずっと下りていくと、ようやく終点にたどり着く。そこに現れたのも、本棚の裏にあったものと同じような小さい扉とタッチパネルだ。

「今度は91212991ね」 ※30

そう言いながらサファイアが打ち込むと、また“ピーー...”という電子音と、“ガチャ”という鍵の外れる音が一緒に響いた。

「...これは.....」

ジャックは思わずそんな呟きを漏らす。扉の奥にあったのは狭い地下牢だった。石造りの壁・天井、鉄格子の嵌った小さな通気孔、床に置かれた手錠・足枷・封印鎖。猿ぐつわ、不自然な位

置に立った、太くて頑丈そうな柱…。

……まさか……

「お願いしたいっていうのはね、ここら辺に落ちてる物を使って、私が動けないように固定して
ってことなの。呪いが発動しても、暴走しないように」

サファイアはそう言いながら、足元に落ちている封印鎖を拾って見せた。その口調は、非常
にあっけらかんとしている。

「…かしこまりました」

時間がないのですぐに頷いたが、ジャックはその方法に啞然としていた。

…まさか、1500年前からまったく変わっていないなんて…

冷静に考えれば当たり前かもしれない。なんせ根本的に呪いを解くのは原理的に不可能なわけ
だし、彼女の強大な魔力を封じることが出来るものといったら、封印鎖ぐらいしか存在しないの
である。

何はともあれ、ジャックはすぐ作業に取り掛かった。足枷と手錠をかけてからサファイアの身
体を柱にそっと固定し、鎖で手際よく縛り付ける。

「ジャック…上手だね」

サファイアが驚いたように呟いた。

「…そうですか？」

ジャックは手を止めずに答える。そんなことを褒められてもまったくもって嬉しくはないの
だが、たしかにジャックはその感覚をまざまざと覚えていた。コツは、“これぐらいなら我慢で
きる”というギリギリまできつく絞めること。そうしないとかえって、サファイアは“鎖が解けて
しまったらどうしよう”という不安に襲われるということを知っているのだ。

「…できましたよ」

やがてジャックがそう言って立ち上がると、サファイアは眼だけで“ありがとう”と言うように笑
った。 ※31

まだ勤務時間中なので、ジャックは地下牢から出た。すると、扉から

『ロックボタンを押して、施錠してください』

というアナウンスが流れる。これまではどうも、その時々で手の空いている人がこの役目を依頼
されていたらしいから、鍵をかけ忘れたがために悲惨な事故を招くことがないように、という配
慮なのだろう。

ジャックはロックボタンを押してから、また目の回りそうな螺旋階段を上り始めた。飛んでい
くこともできるが、あえて歩いて上る。

…なかなかよく出来ている。

ジャックは憂鬱な気持ちでそう思った。階段の上下に鍵がかかるようになっているのはもちろ
んのこと、12階 ※32 から地下までの道程を半径の小さな螺旋階段にすることで、上に出てき
づらいようにしてある。もっとも、ここまで嚴重にするということには、城の者から危険人物状
態のサファイアを遠ざけるという目的だけではなく、そうすることでサファイアを安心させると

いう優しさもあるのだろう。先程の、鎖の締め方と同じだ。

20:00になると、ジャックはすぐ地下へ下りていった。本当は彼女の周りに人がいると暴れ方が激しくなるから、あまり近くへ行かない方がいいのだが、城にこれだけの人数がいるとなると、もうジャックがどこにしようとなんら影響はない。

それなら出来るだけサファイアの近くにいたい。別に自分がいたところでどうにかなるわけではないが、それでも側にいたい。

螺旋階段を下っていくと、ジャックは地下牢の中から聞こえてくる音の大きさに、思わず足を止めた。

1500年前に聞いていた物音の、2・3倍ではないだろうか。

言うまでもなく、音の激しさは牢の中にいるサファイアの動きの激しさを表している。

ジャックは扉の脇に立つと、パソコンを開いた。城に来て間もないころに借りた本を瞬く間に読んだ彼は、もうパソコンもケータイも十分に——もちろんパソコンの国家資格取得者であるサファイアほどではないが——使いこなせるようになっていたのだ。さすがに夜が明けるまでずっと立ち尽くしていても仕方がないから、最近行っていた実験の見直しをしようと思い、サファイアの治療薬だけでなくパソコンも持ってきたのだが、あまり役には立たなかった。どうしても、サファイアのことを気にかかって、集中できなかつたのである。

※29...この番号はサファイアの生年月日である。

※30...この番号は先ほどの番号を逆さにしたものだ。

※31...猿ぐつわをされているため、話すことができないのである。

※32...このビルの最上階。女王の間も、側近の部屋も、この12階である。

夜が明けたのを確認すると、ジャックはすぐに地下牢へ入った。

「...サファイア？」

ジャックの慎重な呼びかけに対し、サファイアは“ん？”というように見上げてくる。サファイアはケロツとした顔でジャックを見上げていた。鎖や手錠、足枷、猿ぐつわを外してやると、サファイアはひょいと立ち上がり、首を傾げながら笑う。しかし、そのサファイアの身体は傷だらけだった。床や柱に打ち付けた傷、鎖が食い込んだ痣...何度も何度もぶつけたのか、服に血が滲んでいるところも多数ある。痛くないはずはないのだが、それでもサファイアは普段と何も変わらない笑顔でしっかりと立っていた。

...その差がかえって痛々しいということ、サファイアは知っているのだろうか...

「お薬を持ってまいりました」

ジャックは冷静な声で言うと、サファイアの傷を診ながら数種類の薬を量り取り、傷だらけの小さな手に渡した。

「ありがとう」

サファイアがそれを飲み干すと、傷は瞬く間に治ってしまう。もう、シャワーを浴びて服を着替えてしまえば、先程まで傷だらけであったことなどまったく分からなくなってしまうだろう。

そう、実を言うと、この呪いそのものがもたらす害はそれほど深刻ではない。封印鎖などできちんと封じてしまえば悲惨な事故は避けられるし、医学が進歩したおかげで、薬を飲めば傷など一瞬で治ってしまう。辛いことに相違ないが、それでもこういったことはどうにかなるのだ。

本当にサファイアを苦しめているのは、周囲の認識だった。周囲どころか、国中がサファイアのことを“呪われた子”などと呼んで、危険人物扱いをする。新月の晩以外は何も問題ないのに、まるでいつ襲ってくるか分からないとでもいうかのように避ける。...そういうことが、サファイアを苦しめているのだ。

「...ずっとそこにいてくれたんでしょ？研究とか色々あっただろうに...ごめんね」

サファイアは唐突に謝った。

「.....」

...そんな、事ある毎に謝らなくていいのに...

ジャックはそう眉を顰めたが、サファイアは申し訳なさそうにそう言ったあと、ふと小さな笑みを漏らす。無理して笑ってみせたというようなものではなく、“だけど、近くにいてくれて嬉しかったよ”とでも言うかのような、安らぎのある笑顔だ。

「――.....」

ジャックは、サファイアの方にそっと手を伸ばした。抱きしめたかった。“いつでも側にいるから”と伝えたかった。ところがその手は、サファイアに触れる直前でぴたりと止まってしまう。

伸ばしたのも止めたのも、ジャックが意図したことはない。どちらも無意識のことだ。

目の前のサファイアに、1500年前のサファイアが重なる。似ても似つかないのに、石壁の地下牢に夜の砂浜が重なる。自分の腕の中で、抱きしめたサファイアの身体がグシャリと崩れる、あの感覚がよみがえる...

ジャックの奇妙な行動に、サファイアは不思議そうに首を傾げた。小さな明かりしかない中で

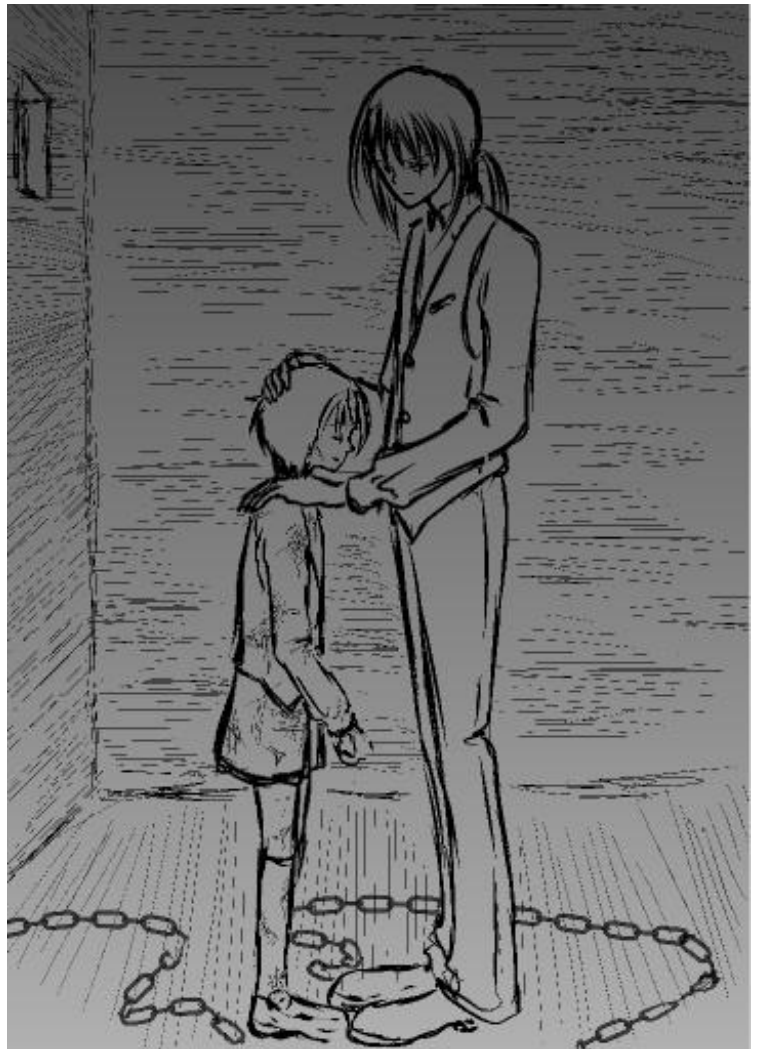
、彼女の濃紺の眼が不安げに揺らめく。

抱きしめたかったはずなのにどうしてもそうできないジャックは、代わりにその手でサファイアの短い髪をそっと梳いてやった。サファイアは安堵と嬉しさを感じながら、身を委ねてしまうかのように目を瞑る。

サファイアの髪を梳くジャックの手つきは、驚くほど丁寧で優しくかった。それがサファイアには、まるで“いつでも側にいるから”と言ってくれているかのように思えてしまう。

...馬鹿だなあ、私...

サファイアは心の中で自嘲的に呟いた。万が一の事態に備えて、牢のすぐ外で見張っていてくれたこと。小さな同僚を憐れんで、優しくしてくれているということ。そういう“親切”を、“まるで‘いつもそばにいるから’”と言ってくれているかのように”だなんて、都合よく解釈しちゃって...



いずれにせよ、ジャックにこうしてもらっているとすごく安心できたし、そんな“親切”はとても嬉しかった。

だけど...

実はジャックがサファイアの方へ手を伸ばしてきた際、サファイアは一瞬、抱きしめてくれたらと期待した。

...馬鹿だなあ、私...そんなこと、あるはずがないのに...

そんな期待の直後に、ジャックの手が止まった時の不安。そして、今感じている安堵や嬉しさと、微かな落胆...

どうして、抱きしめてくれることなど期待したのだろうか？そんなことあるはずがないのに...いったい、何を期待しているのだろうか？どうしてあれほど不安になったのだろうか？別に、拒絶されることなんてもう慣れっこなのに...何が怖かったんだろう？そして、どうしてこんなに安心してるとんだろう？何に落胆しているんだろう？

サファイアは自分の感じたものが何もかも分からないことに戸惑っていた。しかし、そんなことはだんだんどうでも良くなる。そして結局、そのよく分からない安心感にただ身を委ねてしまっていた。

2人は螺旋階段を上って部屋に戻った。ジャックは“傷は治っても1晩中暴れ続けた疲労は残っているはず”と心配したが、サファイアは大丈夫だと言い張って自分の足で上る。ふらついて転落す

ると危ないので、メルクリウスはわざと自室に置いてきたのだ。

シャワーを浴びたサファイアに、ジャックはL-02という薬を渡した。甘くてとろみの強い、強力な体力回復剤だ。本当に強力なのだが、その副作用として、服用直後から1時間程度の深い眠りを伴う。

今の時刻は5:27。6:30に起きれば、どうにか7:00の出勤に間に合うはずだ。

ジャック自身もシャワーを浴びた後、食堂からサファイアの朝食をとってきた。デザートコーナーを見るともうケーキが並んでいたのだから、最も大きくて綺麗なものをとってくる。今朝のケーキはミックスナッツタルトだ。

ジャックが戻ってきたときも、サファイアは依然として眠っていた。まだ薬が効いているため起きるはずないのをいいことに、ジャックはサファイアのしなやかな髪をそっと梳き、指に絡めてみる。

さっき、どうして抱きしめることが出来なかったのだろうか？

ジャックはそれを不思議に思うと同時に、愕然としていた。しかし、考えてみれば無理もないのかもしれない。1500年前のあの感触は今でも鮮明過ぎるほどに覚えている。

少しずつ崩れていくサファイア。それを抱きしめると、腕の中で、グシャリと――……。

1500年前の感触がまざまざと残っているうえに、ジャックはこの1500年間、夢という形で同じことを何十万回と繰り返してきた。

夢の中のジャックは、抱きしめたら潰れてしまうと分かっているが、いつもサファイアの言葉に操られるかのごとく抱き潰してしまう。にもかかわらず現実のジャックは、もう抱きしめても潰れはしないと分かっているのに、記憶と夢がトラウマとなって、抱きしめることができない。

……どうして……？

そうこうしているうちに、時刻は6:30になった。そろそろ薬の副作用は切れているはずだし、もう起きないと不味い時間である。

「…サファイア？」

ジャックが軽く揺ると、サファイアはすぐに目を覚まして

「…あ…おはよう」

などと言いながらひょいとベッドから出ると、思いっきり大きく伸びをした。いくら大きく伸びをしても、やはり小さいものは小さい。

そんなサファイアに、ジャックは

「朝食をお持ちしておきました」

と言いながらテーブルを示す。

「あ、どうもありが…あああああああっ♪♪」

サファイアは“ありがとう”と言っている途中で朝食と一緒に並んでいるミックスナッツタルトを

見つけると、またもや喜びの悲鳴をあげた。

「ミックスマツタルトだっ♪私、これ大好きなんだよ!!」

サファイアはそんなことを言いながらジャックにぎゅっと抱きつくと、

「どうもありがとう!!」

と笑ってテーブルに着き、足をパタパタさせる。椅子に座ってしまうと、まだ爪先しか床に届かないのだ。

「いただきます♪」

「...ケーキは食後ですよ」

ジャックは、ちょうどタルトにフォークを突き立てようとしていたサファイアにそう釘を刺してから、

「すっかり快復なさったようですね」

と、皮肉とも安堵ともとれる言葉を呟いた。

2003年8月8日

22:30ごろ、サファイアは

「ただいまぁ」

と言いながら帰って来た。

「おかえりなさい」

ジャックが出迎えると、サファイアは明るい笑顔を見せる。戦闘訓練で1時間ずっと飛び回っていたため、本当はもうすっかり疲れ果てているのだが、サファイアにとっては“ただいま”“おかえりなさい”というやり取りをできること自体が嬉しくて、自ずから笑顔になってしまうのだ。

サファイアはリビングに行くと、ソファの上にぽふんと落ちるような形で座った。座ると、そのまま横に倒れこんでしまう。ちょうど、起き上りこぼしが倒れて、そのまま起き上らないような状態だ。

そんなサファイアに、ジャックは

「紅茶が入りました」

と言って縁に青いラインが入っているティーカップ ※33 を運んできた。サファイアが戦闘訓練から帰ってくると、ジャックはいつもこのカップに紅茶を淹れてくれるのだ。

「あ、ありがとう」

サファイアはそうお礼を言うと、すぐにきちんと座りなおして手を伸ばした。

「ジャックの紅茶、本当においしいよね」

サファイアはそう言いながら、ホッと息をつく。砂糖はジャックの厳しい監視の下、きっちり2杯っきりだ。

「そう言っていただけでと光栄です」

ジャックが答えると同時に、サファイアのケータイが鳴った。画面を見た瞬間、サファイアの表情が硬くなる。

「あー...ごめん、私、ちょっと出かけてくるね」

サファイアはそう言うと、急ぎながらもできる限り味わいながら紅茶を飲み、

「行ってきます...」

と浮かぬ顔で出かけた。

2003年9月15日

2人が出会ってから2ヶ月ちょっと経過し、いつのまにか秋になっていた。サファイアとジャックもだいぶ馴染んできている。

そんな夕方のこと。

「...いやったあ!!」

サファイアが独り言レベルの音量で叫んだ。今まで恐ろしい速度で動いていた指を止め、パソコンの画面を見ながら嬉しそうに笑っている。

「どうしたんです？」

ジャックは自分のパソコンから顔をあげると、いつもの淡々とした調子で尋ねた。

「あのねあのね、前から研究してたMWがやっと完成したの♪」

サファイアが嬉々として答えると、ピュアが

「え、変身魔法の？」

と口を挟んでくる。紅茶を飲もうとしたところだったらしく、ティーカップを持った手が口元で止まっているが、その表情を見ると好奇心満載だ。

「はい、そうです。あとは今夜にでも研究室で実験してみれば...」

「なあに言ってんのよ」

サファイア言葉を遮ったピュアは、ぱっと立ち上がったかと思うとサファイアの手を掴んで思いっきり引っ張った。

「ふえっ?!」

引っ張られて立ち上がったサファイアは、そのまま自室の方へ引きずられていく。 ※34

「ちょ...ピュア様?!」

「せっかく出来たんだから、さっそく試してみなくちゃ!!今なら私も手伝ってあげるわ。女王様が直々に手伝うって言うてるんだから、感謝しなさい!!」

そう楽しそうに言うピュアは、サファイアが

「そんな...何かの間違いで爆発したりしたらどうなさるんですか?!」

と不安げに言っても、

「そしたらあんた死刑よ」

と笑ってあしらうばかりで、まったく聞く耳を持たない。

「そんな...」

そうこう言っているうちに、ピュアの手が側近の部屋のドアノブに届く。

「開けるわよ」

ピュアは後ろ手にドアを開けるとサファイアをぐいっと一気に引っ張り込んだ。2人が入ると同時に勢いよく扉が閉まり、その後の女王の間には一瞬の沈黙が流れる。

「...ペーター様、よろしかったのですか？」

ジャックが扉を見つめながら尋ねると、ペーターは苦笑しながら

「...まあ...大丈夫だろう、多分...」

と答えた。

「彼女は何を研究していたのです？」

サファイアもジャックもお互いに研究の話はしないので、ジャックはサファイアが何のMWを研究しているのか、まったく知らないのだ。

「あー...何か、一時的に外見を変えるものらしいよ。確か...確か、30分とかじゃなかつ...」

「えええええええええっ?!うそおっ?!」

隣の部屋から聞こえた悲鳴が、ペーターの言葉を遮った。ピュアの声だ。

「ちょ、ちょっと...ちょっと待ってなさい、いいわね?!」

実際に見ていなくても、扉の向こうでピュアがサファイアをビッと指差している様子が目に浮かぶ。そうこう思っているうちにバンッと扉が開くと、部屋からピュアが出てきた。しかし、

ジャックやペーターが何か質問する前に、彼女は衣装室へ行ってしまふ。

5分後、衣装室から出てきたピュアは洋服一式を抱えていた。全体的に青系のものが多い。ピュアは再び側近の部屋に入ると、サファイアに

「ほら、私の服を貸してあげるんだから感謝しなさい!!」

と言い放った。

「ええっ?!いや...そんな、畏れ多いですよ...」

サファイアが焦った声で断ろうとしても、

「ほら、命令よ!!」

と一蹴する。問答無用の構えだ。

「観念なさい!!そして感謝しなさい!!」

「はい...」

扉の向こうが大騒ぎなのに対し、女王の間の方はただペーターがくすくす笑っているばかりだった。

20分後――...

「ふふふふ...出来たわ」

ピュアは、まるで悪の組織の女ボスが秘密兵器を出すかのごとく、低い声で呟きながら出てきた。

「覚悟はいい?すごいわよ!!」

そう勿体ぶるピュアはものすごく楽しそうだ。

「いい?行くわよ...ほらっ!!」

ピュアはそう言って勢いよくドアを開けた。ところが、そこには誰もいない。

「って、ちょっと!!どこ行っ.....て、どうしてそんなところに隠れてるのよっ?!」

慌てて部屋を覗き込んだピュアは、女王の間から見えない死角に隠れているサファイアを見つけると、怒ってそう言った。すると、サファイアの

「だってえ...私には似合いませんよ...」

という恥ずかしそうな声が返ってくる。

「いいから出てきなさいっ!!命令よ、命令!!」

こんな下らないことに何回“命令”と言っただろうか。とにかくピュアはそう言いながら、入口の壁で身体を支えつつ思いっきり手を伸ばした。そして、隅に隠れているサファイアを無理矢理引っ張り出す。

「.....え.....」

出てきたサファイアはまるで別人だった。肩甲骨あたりまである、毛先がくるくるした濃紺の髪。一房だけ拾ったサイドの髪につけられた、鮮やかなブルーのリボン。濃紺のワンピースの上半身部分はピッタリしたデザインだが、スカートの部分はふんわりと広がっ



ていて、襟や袖、裾などには白いフリルがあしらわれている。襟元に付いているリボンは髪とお揃いだ。足元を見ると、白いレースのついたハイソックスと黒のローファーを履いている。

これならもう、誰も“坊や”とは言わないだろう。

「言っておくけど、魔法を使ったのは髪を伸ばすことだけよ!!顔は弄ってないし、毛先のくるくるだって天然なんだから!!」

ピュアはそう説明しながら、恥ずかしそうに俯いてるサファイアの肩を、ぽふぽふと何故か自慢げに叩いた。

「...え...本当に、サファイアちゃん...だよな？」

ペーターがゆっくりと尋ねる。これでも、かなり慎重に言葉を選んだに違いない。

「そうよ、紛れも無く!!」

ピュアはそう言って得意げに笑った。サファイアは自分のものだから、それが可愛ければ持ち主のピュアも嬉しくなるのだ。

ジャックにとっては、むしろこの方がずっと馴染みのある姿だった。しかしそれでも、つい先程までどう見ても少年だったのに、ただ髪を伸ばしただけで、すっかり“元の”少女に戻ってしまうサファイアに、驚かすにはいられない。

...顔立ちが中性的なのだろうか。

しかし、少年のなりをしているときにも、少女の装いをしているときにも、“もしかして...?”と思わせる要素はまったくない。

.....同じ顔なのに.....

「決めたわ。クリアシャイン、あんたこれから髪伸ばしなさい」

このサファイアをすっかり気に入ってしまったらしいピュアは、きっぱりした口調でそう命じた。

「ええええっ?!あの...本当におっしゃって...」

「もちろんよ」

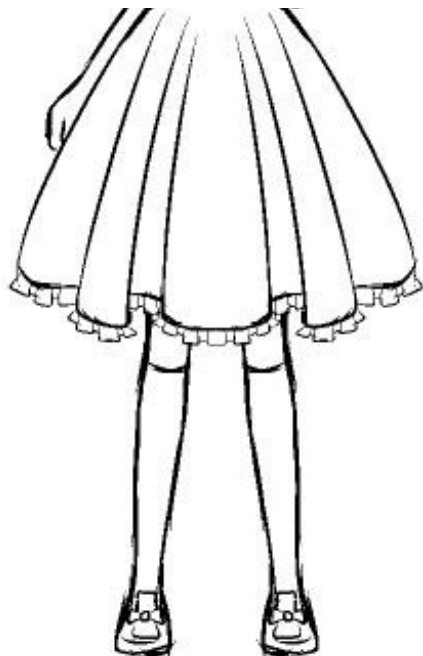
サファイアが慌てて聞き返しても、ピュアはその言葉を途中で遮ってしまう。

「あんただってもう11才でしょ?いいじゃない」

ピュアはそう言いながら、まるで妹を可愛がるかのような手つきでサファイアの髪を撫でた。ところが次の瞬間、ハッとしたように手を引っ込めると

「べ、別にあんたが可愛くて気に入っちゃったとかじゃないんだからね!!さすがにその歳で男装してるのもイタいかなあって...そう思っただけなんだから!!」

などと盛んに主張し始める。



“誰が男装させておいたんだ”とか、“何をいまさら...”とか、ツッコむべき点はたくさんあるが、ペーターもジャックももう今更何も突っ込まない。

「...ふふふ...でも、これだと恋愛禁止令なんてあるのが勿体ないわね...まあ、いっか。ずっと私のもの♪」

誰も突っ込まないのをいいことに、ピュアはニヨニヨ笑いながら独り言のように呟いた。

※33...サファイアの愛用カップだ。ちなみに、ジャックのは色違いでブルーグレー。あと、赤とオレンジもあるのだが、そちらは使われていない。

※34...いくらピュアが病弱だとはいえ、まだ普段は元気である。

そんなことを話しているうちに、サファイアはすぐいつもの姿に戻ってしまった。着替えたり、隠れたりしている間にも、“30分”という時間を消費していたのである。そして20:00になって女王の間での勤務が終わったサファイアは、ジャックと一緒に食堂へ来ていた。戦闘訓練の前に夕食を食べておこうというのである。

「ピュア様ったら...髪伸ばせて、本気で言ってたのかなあ...」

ハンバーグを1口大に切りながら、サファイアが困ったように言った。

「嫌なのですか？」

ジャックが腕組みした状態で尋ねる。

「ん...6才で側近になった時からずっとこんな格好してるから...小さい頃は普通に女の子の格好してただけだね...」

サファイアは浮かない顔で言って首を傾げたあと、皿から視線を上げて

「そもそも、似合わなくない？」 ※35

と聞いてきた。

「いえ、とてもお似合いでしたよ」

ジャックはサファイアの眼を見ながら、さらっとした口調で答える。お世辞っぽさもなければ照れた感じもない、まるで純水を掬うかのようにさらさらとした言い方だ。

「...え?...あ、そう？」

普通なら、サファイアは間違いなく否定しただろう。別に謙遜しているわけではなく本心から、自分にはあんな可愛い服など似合わないと思っているのだ。しかし、今のジャックの言い方は、そんなことを言わせない力を持っていた。まるで催眠術か何かのごとく、無条件に納得させてしまう。

...ちょ、今の反則だよ...もともと、その眼だけで反則なのにさ...

心の中でそう抗議してみても、結局抗えないと気づかされるばかりである。結局、サファイアは斜め下に視線を落として、はにかみながら

「...ありがと」

と答えた。

やがてハンバーグなどの皿が空になると、サファイアはデザートのカークに取り掛かかった。今日はティラミスである。

「サファイア？」

ティーカップをそっと皿に置くと、ジャックが抑えめな声で話し掛けた。

「なあに？」

サファイアはティラミスの1口目を飲み込んでから答える。

「あなたは、人との付き合い方にまで規制がかかっているのですか？」

そう聞かれたサファイアは、初めのうち何のことだか分からないというような顔をした。しかし、間もなくして思い当たると、

「...あー...」

などと言いながら笑う。

「ああ...恋愛禁止令のことね。うん...恋愛だけ、禁止されてるんだ」

「呪いの関係で？」

ジャックがやや鋭い声で聞いた。

「ううん」

サファイアは苦笑しながら首を振ると、

「違うよ。えーっと、まあ...私もよく知らないんだけど、誰かを好きになったり付き合ったりすると、“大きくなってからやんなきゃいけない大切な仕事”とやらの支障が出るんだってさ」

とおどけた口調で説明する。

「...そうですか」

ジャックはやや低めの声でそう答えながら、ふっと目を伏せた。

「どうしたの？」

それを見たサファイアは、くいつと首を傾げて尋ねる。ほんの一瞬だが、なんとなく、彼が今憂いの色を見せたような気がしたのだ。しかし、ジャックはいつも以上に平淡とした声で

「いえ...どうしたというわけではありませんが」

と答え、そのあと

「もし...もしも、その命令に背いたらどうなるのです？」

と尋ねてくる。するとサファイアは

「何が何でも引き離すんだって」

と言いながらおかしそうに笑い、フォークを口へ運んだ。

「...そうですか」

ジャックはまた同じ返事をする。しかし、今度の“そうですか”は先ほどと違って、いつも通りの無表情な“そうですか”だ。

「そうだ、そんなことより...ジャック、今夜少し時間ある？」

突然、サファイアが身を乗り出して聞いてきた。

「ええ...ありますけど、何か？」

ジャックの答えを聞くと、サファイアは嬉しそうに笑う。

「じゃあさ、今夜私の訓練が終わったら、少し散歩しようよ」

22:20ごろ、パールの戦闘訓練を終えたサファイアが「ただいまぁ!!」と言って自室に帰ってきた。へとへとに疲れているはずなのだが、見た限りでは元気いっぱいだ。

「お帰りなさい」

パソコンで電子書籍を読んでいたジャックがそう言っているうちに、サファイアはジャックの手を掴んで引っ張る。ちょうど、夕方のピュアとサファイアの構図と同じだ。

「じゃあ行こう♪」

“散歩”と言われていたジャックはどこを散歩するのだろうと思っていたのだが、サファイアはな

んと、あのサファイアンコスモス畑に行くと言い出した。

秋の空を飛び続けること2時間、2人はサファイアンコスモス静養地の近くに到着する。月の光が明るいおかげで、夜でも青いコスモスの花がきちんとよく見えた。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

花畑の中の小道を歩きながら、サファイアが済まなそうに謝る。

「別に構いませんよ」

ジャックが答えると、サファイアは

「じゃあ追いかけっこしよ」

などと誘った。

「それは遠慮します」

そう即答するジャックの眼が一気に冷たくなる。

「やっぱり？」

氷のような眼を見たサファイアはそう言って苦笑しながら肩を竦めた後、

「じゃあ私、ちょっと遊んでくるね」

と断って、パタパタと駆けて行った。

.....恋愛禁止令、か.....

またひとりではしゃいでいるサファイアを見ながら、ジャックは心の中で呟いた。

あまりにも広すぎる世界と途方もなく長い時の中で、奇跡的に再び巡り会うことができた。それはもう“奇跡”などという言葉では到底言い足りない。確率を計算すれば、分母が天文学的な数になることは確実だ。そんな数字を乗り越えて、あれほど会いたくてたまらなかったサファイアと、今再び一緒に暮らしているのだから、これ以上望んだらもう贅沢過ぎるだろう。しかし、そう分かっている、やはり望まずにはいられない。“恋愛禁止令”なるものを、恨まずにはいられない...

だがその一方で、ジャックは自分自身の感情が何なのか、よく分からなくなっていた。

サファイアのことを、愛おしくて愛おしくてたまらない。かけがえがなくて、守りたくて...そして、ずっと幸せでいてほしいと願っている。それは間違いないのだ。しかし、こういった思いが本当に“恋愛感情”なのかと問われると、はっきり頷くことはできない。いや、恋愛感情がベースになっていることは確かなのだが、純粋な恋愛感情ではなく、友情、家族愛、憧憬...などといった、いろいろな感情が混ざっているような気がする。1500年間にも渡って捜し続けてきた結果、単にサファイアを“女性”として愛するだけでなく、“人間”として、さまざまな意味で愛するようになっている気がするのだ。

...でも、それなら現状で十分ではないのか？恋愛禁止令の話聞いてからずっと、こんなにも胸が痛いのはどうしてだ？

「ただいまあ!!」

花と思う存分じゃれ合っていたサファイアが、満足そうな笑顔で帰ってきた。

「見て見て!!また写真撮ったんだ♪」

“また”というからには7月の時も撮ったのだろうか。いずれにせよ、サファイアが見せてきた写

真はどれも綺麗に撮れている。

「上手に撮れていますね」

ジャックの口調は淡泊だが、サファイアは笑いながら

「そんなこともないけど...」

と首を振った。そして、なんとなく小道を歩き出すと

「この花にはね、面白い伝説があるんだよ」

と話し始める。

「今は5月下旬から10月いっぱいまでずっと咲いてるけど、昔は普通のコスモスと同じで9月ぐらいにならないと咲かなかっただけだ。だけど、だいたい1500年くらい前——まだ青玉島が国家になってなくて、1つの村に過ぎなかった頃だけ——そんな頃に、島の砂浜から突然光の柱が立ち上がって、その柱の根本から広がった同心円状の光が島全体を覆ったんだって。それから、サファイアンコスモスは5月末から咲くようになり、青玉島の人みんな水の魔法が使えるようになったんだと」

サファイアはまったく他人事のように話していたが、それを聞いたジャックの脳内には、忘れようにも決して忘れられない記憶が、すぐ鮮明に蘇る。

...その光は...サファイアの最期の光だ...

そんなジャックの思いなど知る由もないサファイアは、ジャックが何も反応を示さなくても気にすることなく話し続ける。

「私ね、この花が1番好きなんだ。綺麗なブルーが透き通ってて.....何か、懐かしい気分になるんだよね」

.....!!

その言葉に、ジャックは驚いてサファイアを見た。

「...どうしたの？」

サファイアが不思議そうに首を傾げると、ジャックは

「いえ...どうしたというわけではありませんが」

と目を逸らす。

2人の会話が途切れたその一瞬に、秋の夜の冷たい風が吹き抜けた。コスモスの花が、一斉に大きく揺れる。

「...冷え込んできたね」

サファイアは寒さから身を守るべく、自分自身をぎゅっと抱きしめて呟いた。

「防寒着を持って来ないのが悪いんです」

そんなサファイアを見下ろしながら、ジャックがその風と同じくらいの冷たさで言う。

「だってえ...昼間は暖かったし...」

いじけたようにそっぽを向いてそう言い訳していたサファイアは、その言葉の途中で肩にふあさっと何かが掛かってきたのに驚き、言葉を止めた。見ればサファイアの上着である。

「え？」

サファイアが驚いて振り向くと、ジャックは自分の百露華を縮小してポケットにしまっている

ところだった。それから冷淡な口調で、
「そういうことだろうと思って、持ってきたんです」
と言う。

サファイアは少しの間目を瞬かせていた。それから嬉しそうに
「ありがとう」
とお礼を言うと、笑いながら
「...なんか、じゃっくんお兄ちゃんみたい...」
と呟く。
「.....」

ジャックは何も答えず、ただサファイアを見下ろしていた。

※35...じゃあ今の服は自分に似合うと思っているのかというと、そうでもないらしい。どんな服を着ても土台の悪さは誤魔化せない、というのが、サファイアの基本スタンスだ。だったら別にどんな格好をしたって構わないのではないかと言う気もするが...そこは、やはり慣れた服装と言うことになるのだろう。

季節はさらに巡り、もう冬になっていた。11月～12月上旬は、青玉島王室が大忙しになる時期である。国民に王宮の決算報告をするために、1年間使ったお金をすべて書類にまとめなければならないのだ。そんなこと女王が自らやることなのだろうかという気もするが、そういう仕組みだから仕方がない。その報告書はこのあと、専門の委員会がすべてチェックしていくことになる。

2003年12月19日

決算報告が無事に委員会のチェックを通過したころ、サファイアは誕生日を迎えて11才となった。

「お誕生日おめでとうございます」

ジャックがそう言って、水色のギンガムチェックの包装紙と青いリボンでラッピングされている、薄い直方体の箱を差し出す。

「え...ええええっ?!」

サファイアは受け取りながらびっくりして叫んだ。

「え...どうして私の誕生日が今日だって分かったの？」

サファイアが首を傾げる。今までに1度も教えていないはずなのだ。しかし、ジャックはしれっとした口調で

「以前そうおっしゃっていたでしょう？」

などと言う。

「...あー...そうだったっけ...」

サファイアはそう言いながら首を傾げた。しかし間もなく、もうそういうことにしてしまおうという結論に行きつく。ジャックに平然と言われると、教えたような気ができてしまうのだ。

※36

「ねえねえ、開けてみてもいい？」

サファイアがわくわくしながら尋ねた。どうしてジャックが自分の誕生日を知っているのかということよりも、プレゼントの中身の方が気になる。誕生日プレゼントなどもらったことがなかったから、もう嬉しくて仕方がないのだ。

「ええ、どうぞ」

ジャックが頷くと、サファイアは包装紙を破かないようにそっと開けていった。そして、中身を見ると

「ええええっ?!すごい!!!」

と大喜びで叫ぶ。

箱の中から現れたのはデジタルフォトフレームだった。ジャックは、これならサファイアが撮ったコスモスの写真を飾ることができると考えたのだ。

「すごいよ、じゃっくん...どうもありがとう!!!」

はしゃぎながらさっそくパソコンと繋ぎ、ジャックの思った通り、サファイアンコスモスの写真8枚を入れる。そして、そのフォトフレームを机の上にそっと飾った。 ※37

この日の夜中、それぞれの研究を切り上げたサファイアとジャックは、いつものように実験棟

の出口で落ち合うと、王宮のビルへ歩き始めた。深夜2:50のことである。

「...あれ？」

庭を突っ切ってメインのビルのエントランスに入った時、サファイアはふと呟いて足を止めた。その視線の先にあるロビーのソファを見ると、小さな女の子が眠っている。6・7才といったところだろうか。

サファイアはその子の側に駆け寄ると、

「...ローラ？」

と優しく呼びかけた。

「...ん...んん...？」

ローラと呼ばれた少女は、ゆっくりと身を起こして焦点の合わない眼で2・3回瞬きをした。それから、突然

「きゃっ!!」

と悲鳴を上げる。

「さ、サファイアおにいちゃんッ?!」

ローラは驚いて口をパクパクさせながら叫んだ。どういうわけか、頬を紅潮させている。

「こんなところでどうしたの？」

そんなローラに、サファイアが首を傾げて問いかけた。すると、ローラは怒ったように

「“どうしたの？”じゃなくない？あたし、おにいちゃんのこと待ってたんだけど」

と膨れっ面をする。

「ええええっ?!こんな時間まで?!」

今度はサファイアが驚いて叫ぶ番だった。

「そう。最近、ちっとも来てくれないじゃん。最後に来たのいつだか覚えてる？」

ローラはサファイアを見上げながら睨む。サファイアも小さいが、この子はもっと小さいというわけだ。

「10月17日」

サファイアが済まなそうな顔で即答した。すると、ローラの目つきは少し緩くなる。

「とにかく、2ヶ月も放っとかれてムカついたから、こっちから来ちゃったの。ここなら絶対通ると思って...そしたら、いつまでたっても来ないから、寝ちゃったのよ。これから遊びに来てくれるんでしょね？」

実質選択肢を与えないような聞き方をするローラに、サファイアは

「うん...いいよ」

と答えながらジャックを振り返った。それでローラも、初めてジャックの存在に気付く。

「あれ？サファイアおにいちゃん、本当のお兄さんいたの？」

ローラは驚いたように質問したが、答えを待たずに

「まあいいや。お兄さんも来なよ」

と言って歩き出してしまった。

「...お兄さんだって」

サファイアは苦笑しながら、ジャックにだけ聞こえるように呟いたあと、ローラの後を追って歩き出す。

...“お兄さん”か...

ジャックは心の中でそう呟いてから、2人に続いて歩き出した。

3人は地下へと向かった。階段を下りて長らく廊下を歩き、1番隅の部屋の扉を開ける。中には10台のベッドと10台の机があり、9人の子供がいた。1才ぐらいの子が2人、5・6才の子が4人、7・8才の子が3人だ。5・6才の女の子以外は、みんな寝ている。

「あ、サファイアおにいちゃんだ!!」

その起きていた子が嬉しそうに叫んだ。

「あっ、馬鹿...」

ローラが寝てももう手遅れ、赤ん坊2人が目を覚まして泣き出してしまう。

「もうっ!!あたしさっき、やっとの思いで寝かしつけたのに...」

そう憤慨するローラも泣き出しそうだ。

「おにいちゃん、悪いけど...」

「了解です」

サファイアは苦笑して頷くと、2人の赤ん坊をそっと抱き上げた。そして、軽く揺すりながら子守唄を歌い始める。

.....え.....?

ジャックは驚愕した。サファイアが歌った子守唄は、1500年前によく彼女が歌っていたもの、そしてジャックが夢の中で、何十万回と聞いてきたものと、まったく同じ歌なのだ。ものすごく上手いというわけではないが、聴いている人を安心させる、優しく、穏やかで、少し憂いを含んだ旋律...

ジャックはローラに

「この子守唄は、有名なものなのですか？」

と聞いてみた。しかし、ローラは

「ううん」

と言って首を振る。

「少なくとも、あたしはサファイアおにいちゃんが歌うのしか聞いたことないよ。まあ、ここじゃ子守唄を歌う人自体、おにいちゃんしかいないから何とも言えないけど...」

「...そうですか...」

ジャックはそう答えながら、もう1度サファイアを見た。かつてこの歌を歌っていた時より、ずっと幼いサファイア。にもかかわらず、その歌声は1500年前と何一つ変わらない。1500年間、ずっと夢の中で聞いてきた歌声ともまったく同じだ。優しさの中に憂いを秘めた旋律が、伸びやかな繊細さで歌われる。それはまさに、聞くものを抱きしめて包み込むようで...

それから間もなくすると、2人の赤ん坊はすやすやと眠ってしまった。

「おにいちゃん、ありがとう」

ローラは声を潜めながら、心底ほっとしたように笑う。

「ううん...今ローラが最年長？」

サファイアが尋ねると、ローラは

「そう...もううんざり」

と口を尖らせた。

「先月アンナおねえちゃんが10才で卒業しちゃったから、今9才のあたしが最年長 ※38 なんだけど...もう無理、手に負えない。キャサリンとリサはすぐ泣き出すし、セイラたちはやんちゃばっかするし...」

「...そっかあ...ごめんね」

サファイアは苦笑して謝りながら、ローラの頭を撫でてやる。

「...おにいちゃんのせいじゃないからいいよ」

俯いてそう答えるローラの頬は、心なしか赤く染まっていた。

サファイアとジャックがそこにいたのはわずか20分ほどだった。

「また来てね!!サファイアおにいちゃん...あたし、おにいちゃんのこと大好きなんだから」

ローラは真剣な顔でそう言いながら、サファイアにぎゅっと抱きつく。

「うん、私もだよ」

そう笑いながら、サファイアもローラのことを軽く抱きしめてあげた。しかし、2・3秒ほどで放してしまい、

「じゃあね」

と手を振る。

「絶対来てね!!」

そんなローラの言葉に送られて、サファイアとジャックはちびっこお掃除隊の部屋を離れた。

「以前あなたは、幼い頃は城の掃除や洗濯等をなさっていたとおっしゃってましたよね？」

ジャックが聞くと、サファイアは笑顔で

「うん」

と頷いた。

「私もあの部屋にいたんだ。さっきの子はローラ・カロンっていう、私の幼なじみ.....まあ、今はそうってただけけど」



ジャックはすぐにサファイアの言っている意味を察した。おそらく、あの子もまだ、新月の呪いについて知らないのだろう。しかし、ジャックはあえてそこには突っ込まず、別のことを聞いた。

「彼女はまさか、あなたの性別をご存知ないのですか？」

サファイアがびっくりしたように振り返ると、おかしように笑い出す。

「まさか!!知ってるよ...部屋は男女別だもん。何言ってるのさ...」

「...そうですよね」

ジャックはそう言いながらちらりと後ろを振り返った。

無論ジャックも、部屋が男女別になっていることぐらい分かっている。それでもあえて聞いたのは、ローラがどうも...サファイアに気があるように見えたからだ。

...まあ...まさか...

「物には困らないんだけどね、あそこ...ただ、人がいなくて。年下の子の面倒は、全部年長者が見なきゃいけないんだ。だからローラも大変なんだけど...まあ、それもあと2ヶ月だけだね。ローラの10才の誕生日は2月10日だから」

サファイアはそう言うと、少し寂しように笑う。その理由も先程と同じ。ローラもまた、ミヒヤエルのように離れていってしまうと思っているのだ。しかし、やはりジャックはそこには触れないで、代わりに

「先程の子守唄は、どちらで聞いたのです？」

と尋ねた。しかしサファイアは

「どこでもないよ。あれ、もともと私のでたらめだったんだ」

と答えながら首を横に振る。

「私、あそこを出てからも今日みたいな感じでよく遊びに行ってたんだけど、8才ぐらいのとき、夜泣きの酷い子がいて——さっきキャサリンとリサを起こしちゃった子なんだけど——あの子を寝かしつけるために、即興で歌ったの。そしたら案外すぐ寝てくれたから、それ以来ずっと使ってるってわけ」

サファイアはそう説明した後、

「何で？」

と首を傾げてくる。

“その唄、知っているんです”

そんな言葉が喉まで出かかった。そう言いたかった...そう言ったら、どうなるだろう？

ジャックは一瞬、本当にそう言ってしまうかとも思った。しかし、結局

「...いえ...何故というわけではありませんが」

と答える。普段は表情の乏しさに困ることもあるジャックだが、こういうことになると——つまり恋愛が絡むと、ということだが——どうも顔に出るらしい。 ※39 かつて、ディックに指摘された覚えがある。恋愛禁止令が出ていることを考えると、下手な発言はしないほうが無難だ。

その代わりに、ジャックは

「ただ、とてもいい唄だと思っただけです」

と付け加えておいた。

※36...本当は教えていないのだが...

※37...ちなみにこの後、サファイアはジャックの誕生日が3日前の12月16日であることを聞いて、大いに慌てることとなった。

※38...本当は9才なのに6・7才に見えるということは、どうやらこの子も2・3才幼く見える子らしい。

※39...ジャックはそう思っているが、別にそんなことはない。逆に、見抜いたディックの方が鋭いだけのことである。

2004年2月24日

2月が終わりに近づき、青玉島はようやく最も寒い時期から抜け出そうとしていた。しかし、窓の外は相変わらず、真っ白な雪に覆われている。

そんな日の22:20ごろ、戦闘訓練から帰ってきたサファイアがいつものように紅茶を飲んでいるときのことだった。

リンドーンリンドーンリンドーン...

サファイアたちの部屋のインターホンの音が聞こえた。急いでいるのか、リンドーンリンドーンと押し続けている。

「はい」

ジャックがマイク越しに応じた。

『ローラ・カロンです...サファイアおにいちゃんいますか?』

その言葉を聞くと、サファイアはティーカップを置いて立ち上がる。

「どうしたの?」

サファイアがドアを開けた。

「おにいちゃん...ちょっと確かめたいことがあるんだけど」

深刻な表情で言うローラに、サファイアの笑顔が硬くなる。“確かめたいこと”の内容を察したのだ。

「うん、じゃあ...あがって」

それでもサファイアはそう言って、ローラをLDKのソファへ案内した。

「卒業したの、2週間ちょっと前だよな?」

サファイアが聞くと、ローラは黙ったまま頷く。2月10日に10才となったローラは、晴れてちびっこお掃除隊を卒業したのだ。

「今はどうしてるの?」

「厨房で下っ端やってる...なんか、お皿割ったら超怒られたんだけど...」

ローラが膨れっ面で答えた。すると、サファイアは

「そっか」

と苦笑する。

「お茶が入りました」

そう言って、ジャックが紅茶を淹れてきてくれた。サファイアはまだ先程の飲みかけがダイニングテーブルにあったのだが、わざわざ新しく淹れてくれたらしい。

「あ...すいません、いただきます」

ローラは緊張気味に、小さく会釈しながら言った。

「ごめん...ありがとう」

サファイアもそうお礼を言う。

ジャックは2人に軽く会釈だけすると、部屋から出ていった。気を利かせて席を外してくれたのだろう。

「...お兄さん、紅茶淹れるの上手くない?砂糖無しで良さ気なんだけど」

1口飲んだローラが言った。ちなみに、ローラはいつも、砂糖を2杯くらい入れている。

「うん」

サファイアは笑いながら頷いた。しかし、ローラの

「いやいやいや...“うん”じゃないでしょ、おにいちゃん...それ5杯目？」

という突っ込みに動きが止まる。

「もう...おにいちゃん、相変わらずなんだね」

ローラは溜め息混じりに言ったが、次の瞬間ふと真顔になった。いや、“表情が消えた”と書いた方が正確かもしれない。

「ねえ、サファイアおにいちゃん、さっき紅茶を淹れてくれた人って、本当はお兄さんじゃないよね？」

ローラの問いに、サファイアは

「うん同僚だよ」

とあっさり頷く。

「だよね...だって、サファイアおにいちゃんにお兄さんがいるわけないもんね...湧いてきたんでしょ？」

ローラがそう言うと、一瞬沈黙が流れた。無機質な部屋が、沈黙の痛さを倍増させる。

「ああ...聞いたんだね、呪いのこと...」

やがて、サファイアが微笑みながら言った。

「...本当なの?“新月の呪い”って...」

ローラの声は小さい。ちらちらとこちらを伺ってくる眼は、“嘘だと言ってほしい”という思いをはっきりと伝えている。

「うん。本当」

しかし、サファイアはそれに気づいていながら、やはり微笑んで言った。いや、もちろんそこで“No”と言えば嘘になってしまうのだが、仮面をつけたように微笑んでいて、臆する様子は微塵もない。

「...!!」

サファイアの答えにローラはショックを受けたような顔をした。だが、それでもさらに

「じゃ、じゃあ...いきなり暴れだしたりするの？それで、怪我した人は同じ呪いに掛かっちゃったり...」

と聞いてくる。そんな根も葉もない噂 ※40 まで流れているのだ。

それを聞いたサファイアは、苦笑しながら

「暴れたりするのは新月の晩だけだし、人に伝染ったりはしないよ」

と答えてから、諦めているような口調で

「...って言っても信じてくれないよね」

と付け加えた。

「.....」

それに対して、ローラは何とも答えることができない。

数分の間、非常に冷たくてぎこちない沈黙が2人を支配した。呆然としているローラと、慣れきって諦観したように微笑んでいるサファイア。2人の間に置かれた2つのティーカップから、白い湯気がゆらゆらと立ち上っている。

「...うん...」

ようやく、ローラが小さな声で頷いた。

「...信じられないよ.....何で言ってくれなかったの？」

ローラはサファイアの眼を見ながら尋ねるが、サファイアの目はローラを見ていない。ローラの方を向いてはいるのだが、そのはるか後ろを見つめている。

「どうして今まで黙ってたの？」

それに苛立ったローラが、大声を出した。

...あたし、見限られてる...

直感的に、そう感じている。

「だって、それを知ったら一緒にいてくれないでしょ？」

サファイアはゆっくりと答えた。その態度は、あくまでも落ち着き払っている。

「ずっと一緒にいてほしいだなんて、そこまで高望みしたことはないよ。あの部屋を卒業して、大人とも関わるようになれば、こうやってバレちゃうのは分かってたからね。だけど、それまでは...それまでの間だけは、一緒にいてほしかったんだ」

穏やかな声でそう言うサファイアに、ローラはまたしばらく絶句した。

「...それ...どういうこと？」

数十秒経ってから、どうにか再び話し始めたローラの声は、明らかに震えている。

「初めから、そういうつもりだったの？その場凌ぎとしか思ってなかったの？騙してでも、その間だけ一緒にいらればよかったの？」

そう詰問されると、サファイアは一瞬悲しげに視線を落とした。しかし、すぐにまたローラと目を合わせると、小さく笑いながら

「そう言われても、否定はしないよ」

と答える。

「!!」

ローラが勢いよく身を乗り出し、右手を高々と振り上げた。身体を支えようとテーブルに突いた左手がバンッと大きな音を立てると同時に、その衝撃で2つのティーカップが倒れてしまう。しかし、2杯とも紅茶は零れなかった。カップが転がっても、赤い液体はその中に平然と留まったままだ。

そんなことには構わず、ローラは振り上げられた右手を勢いよく振り下ろした。だがそれも、サファイアの左手が平然と捕まえてしまう。

そのままの状態、3回目の沈黙が流れた。そしてやはり、それを破るのはローラの方だ。

「...ねえ、サファイアおにいちゃん...あたしね、おにいちゃんのこと好きだったんだよ」

ローラがゆっくりと言った。

「おにいちゃんのこと、本当に大好きだった...優しくて、いつもにこにこしてて...大好きだっ

たの」

そう言うローラは、小さく震えている。

「おにいちゃん...あたしが“大好き”って言うと、いつも“私もだよ”って言ってくれたよね。だけど...それも嘘だったの？」

サファイアは何も答えなかった。ただ、顔色ひとつ変えることなく黙っている。

やがて、ローラはそっと身を起こした。ローラの右手を掴んでいたサファイアの左手は、ちらりとも留めておこうとはせずに放してしまう。

「...いいよ、もう.....もう...」

ローラはそう言って、ドアの方へ歩いて行った。サファイアは追うどころか、立ち上がりもしない。

ローラの手がドアノブにかかったが、彼女はそこで1度足を止め、サファイアのことを振り返った。そして、小さな声で

「...大嫌い...」

と囁くように言って、そのまま部屋を出ていく。

結局、サファイアは最後まで微笑んでいた。

※40...多分、人狼伝説と混ざっているのだろう。

決して盗み聞きする気はなかったのだが、サファイアとローラの会話は、ジャックがいる寝室の方まで完全に聞こえていた。まるで壁に穴が空いているかのような防音設備のせいで、結局すべて聞こえてしまったのだ。

...どうしてあんな言い方をするのだろうか？

聞きながら、ジャックが第1に思ったことはそれだった。

はたしてローラさんは、初めからこのような結論を持ってきていたのだろうか？

初めからサファイアを拒絶する気なら、わざわざここまで来る必要はない。ミヒヤエルのように、なんとなく避けていけばいいのだ。その方が、はるかに無難である。

にもかかわらず、わざわざここまで来たのは何故だろう？サファイアを問い質したうえで、まだ“友達” ※41 でいたかったからなのではないだろうか？

仮にそうだとすれば“何故彼女はここへ来てから考えを変えたのか”という話になるのだが、その原因は明白だった。サファイアの話し方のせいだ。表情は見えないが、声を聞く限りでは1度も動揺を見せていない。

“...って言っても信じてくれないよね”——サファイアは“ローラさんが自分を信じてくれる”という可能性を否定している。つまりその点において、サファイアがローラさんを信じていないことになる。

“それまでの間だけは、一緒にいてほしかったんだよ”——サファイアはローラさんのことを所詮“それまでの間だけ”一緒にいればいい存在としか思っていなかったのだろうか？

“...そう言われても、否定はしないよ”——何故否定しないのだろうか？“その場凌ぎのために騙していた”と言って、話が好転するはずないということなど、明白ではないか。

そのうえ、まったく動揺を見せない落ち着き払った声は、ローラさんがいなくなっても困りはしないというふうにも解釈できる。特に、

“おにいちゃん...あたしが‘大好き’って言うと、いつも‘私もだよ’って言ってくれたよね。だけど...それも嘘だったの？”

という問いに対し、黙っていれば...むしろ、そうとしか解釈できなくなる。

...僕の言えたことではないが、サファイアなら、もう少しローラさんを引き止めるような.....少なくとも、ローラさんに“大嫌い”などと言わせないような言い方もできたはずだ。それなのに、どうして...？

ガチャリとドアが開き、ジャックのいる寝室にサファイアが入ってきた。

「この部屋の防音設備、すばらしいでしょ」

サファイアがおかしそうに笑って言う。

「...申し訳ありません」

ジャックが聞いてしまったことを謝ると、サファイアは静かに首を振った。

「いいよ。もし聞いてなかったって言ったら、会話の内容全部話すつもりだったし...」

サファイアはそう言いながら、ジャックの隣にちょこんと座る。

「...どうしてあのような言い方をなさったのです？」

ジャックがおもむろに切り出した。

「まるで、ローラのことを騙してその場凌ぎとして利用してただけだから、別に嫌われたって構わない、みたいになってこと？」

サファイアが虚ろな眼をして聞き返す。

「そこまで言うつもりはありませんでしたが...」

「そうすればローラは、二度と私と仲良くしようだなんて思わなくなるでしょ？」

そんな返事を聞いたジャックは、思わずサファイアを凝視した。サファイアは自分の膝に置かれた親指に視線を向けているが、実際にはそれよりはるか遠くを見つめている。

そんな姿は、今にも壊れてしまうのではないかと見る者を不安にさせた。あまりにも虚勢を張り過ぎて、頑なになり過ぎて...抱きしめるどころか、触れるだけで崩れてしまうのではないかと思うほどだ。

「私なんかと一緒にいると、ローラまで同じような扱いされちゃうからさ...あの子、本当に優しい子だから、これぐらい酷いこと言わないと、私に同情して一緒にいてくれちゃいそうな気がしたんだ.....私なんかのために、ローラまで辛い思いをする必要はない...でしょ？」

ジャックは返す言葉がなかった。

...こんなところまで変わっていないのか...

1500年前も、サファイアは事あるごとに“ジャックは優しいね”と言っていた。別に、僕が優しいからそうしていたわけではないのに...。僕は何回そう思い、何回彼女に言ったことだろう？

今回だって、もし仮にローラさんがサファイアと一緒にいたいと思っていたのだとしたら、それは、ローラさんが“優しい”から“同情して”いたというわけではなく、サファイアのことを好きだから一緒にいたいと思っただけだ。

...どうして彼女は、そう考えようもしないのだろうか？

そう思っても、今答えを導き出せるはずはなかった。なんせ、1500年越しの問いなのだ...そう簡単に分かるはずがない。

「あなたも、辛い思いをする必要などないでしょう？」

仕方なく、ジャックは少し論点をずらして言った。すると、サファイアは肩を竦めて

「んー...でもまあ、人に迷惑をかける人は、疎まれてもしょうがないよね」

と言う。

「私と親しくしていると、漏れなくその人まで道連れになるっていうんじゃ、しょうがないでしょ」

サファイアはそう言いながら、ジャックのことをちらっと見上げた。そんなことを言うとジャックに対して失礼だし、大きなお世話だろうから1度も口にすることはなかったが、サファイアは内心でいつも、自分といるばかりにジャックまで同じような思いをしているのではないかと心配していたのだ。それと同時に、どうしてジャックは自分の側にいてくれるのかと不思議に思ってもいる。

2人の間に沈黙が流れた。先程サファイアとローラの間にも流れたのとはまた違った感じで、重い沈黙だ。

「...サファイア」

やがて、ジャックはゆっくりと口を開いた。

「わたしに対しても、同じように考えていらっしゃるのですか？」

「え...？」

思わず見上げたサファイアの眼を、ジャックが直視する。

「わたしがあなたの側にいることは心苦しいですか？わたしも側にいない方がラクですか？」

「.....」

サファイアは頷こうとした。今まで自分が言ってきたことを踏まえれば、ここで首を縦に振らないと、“自分と一緒にいることでどんな扱いを受けても、それがジャックなら別に構わない”と言っていることになってしまう。

しかし、サファイアはどうしても頷くことができなかった。ジャックはサファイアにとって、呪いのことを知ったうえで何の交換条件もなく自分を受け入れてくれた、唯一の存在なのだ。

...ジャックには側にいてほしい。身勝手なのは分かっているけど、でも...どうしても...

「――...」

サファイアは、黙ったままジャックのワイシャツの袖をきゅっと掴んだ。おそらくこれが、返事の代わりなのだろう。

その姿は、いつも以上に小さく見えた。

※41...まあ、ローラの場合一概に“友達”とも言いきれないかもしれないが。

2004年5月20日

夢幻王国第2番、紅玉高原。その王宮の王の間で、黒電話がジリジリと鳴った。 ※42

「あ、はい、紅ぎよ...わあああストップストップ!!俺だよ俺、ルチアーノ!!ちょっと待って...兄さん、青玉島からなんだけど...」

受話器のマイク部分を抑えながら、赤毛の少年がそう兄を呼んだ。十代後半といった年格好だ。

「あああああっしまった!!すっかり忘れてた...今夜、ピュアちゃんと電話会談するって話だったっけ...」

弟と同じ赤毛の頭を抱える兄は、もう20代後半に見える。

「いいから早く出なって」

この兄弟よりももっと赤い髪をした少女に促され、フィリッポが

「あ、そうだった...はい、フィリッポ・フィラレーテです」

と言って電話に出ると、次の瞬間

『んもうっ!!今度こそ時間通りにかけるって言ったのはどこの誰よ!!』

と受話器越しに怒鳴られてしまった。青玉島の女王、ピュア・カークランドの声だ。

「ごめん!!ほんつとに申し訳な...」

フィリッポはそう謝るが、ピュアは

『もう聞き飽きたわよ。切るから、かけ直してよね』

と言うや否や、一方的にガチャンと切ってしまった。

「また電話代気にしてるの？」

ルチアーノが苦笑しながら聞くと、フィリッポは

「そう。青玉島は真面目だからな...」

と言いながらダイヤルを回す。

長電話するとき、必ず相手にかけてもらう国王。フィリッポはいつも“そんなケチな国王、いるはずがない”と思っているのだが、少なくとも1人は青玉島にいるわけだ。ちなみにピュア曰く、かけた人とかけられた人の払う額の比は2:1なのだという。

フィリッポが黒電話のダイヤルを回し終わると、ピュアはすぐ応答した。

『じゃあ始めましょ、もう...』

電話に出たピュアは呆れ声で、挨拶も何もなしに話し始める。

こうして、いつもの“電話会談”が始まった。

青玉島と紅玉高原は姉妹国だ。だから、週1回ほど不定期の電話会談を行っている。とは言え、今は夢幻界全体が平和だから、それほど差し迫って話すこともない。それでも止めないのは、緊急事態となった時にすぐ上手に連携して動けるよう、いわば仲良くなっておくためだ。そしてその目的通り、ピュアとフィラレーテ兄弟は電話越しの幼馴染である。

『...あ、そういえば』

話し始めてから30分後、ピュアがふと思い出したように言った。

『この間、ディマイアの社長の正体掴んだわよ』

「は一ん...ディマイアの...」

フィリップが答えると、そのまま沈黙が流れる。

「ええええええええええええええええええ?!」

次の瞬間、フィリップが全力で叫んだ。

『ちょ...うるさいっ!!』

すかさずピュアに怒られる。

『あーよかった、あんたのみたいな、受話器を耳に当てるタイプじゃなくて...絶対ギンギンしちゃってたわよ...』

「え?“ディマイア”って、“ディマイア”?あの、マスコミの?」

そんな言葉を無視してフィリップが急き込んで聞くと、ピュアは得意げに

『そうよ』

と頷く。

別に、テレビ電話を使う必要なんてないよな...映像がなくなたって、ピュアちゃんが大得意になって踏ん返り返ってる姿が眼に浮かぶし...

『どうしても知りたいって言うなら、教えてあげてもいいけど?』

「うん、教えてください」

フィリップが頼むと、ピュアは

『えーっと...』

などと言いながら(見えないけど多分)資料の用意をして、話し始めた。

『えっとね、名前はディック・ソルジャー。出生地・生年月日などは不明。赤い髪をポニーテールにした、赤褐色の目のおにいさんらしいわ...20才ぐらいじゃないかって』

「へえええ...若いんだな」

フィリップが言うと、ピュアに

『私たちに言えたことじゃないでしょ』

と突っ込まれる。確かに、フィリップもピュアも国を治めるにはあまりにも若い。

『陽気で話しやすい人らしいわ』

「へえええ...そうなんだ」

フィリップは、聞けば聞くほど意外すぎる人物像に驚きを隠さなかった。

ありとあらゆる手段で実界と夢幻界の情報を扱う巨大報道局、ディマイア。そこの社長って言ったら...

「...てっきり、偉そうなおっさんかと思ってたんだけど...」

フィリップが言うと、ピュアも

『うちのパシリもそんなこと言ってたわ』

と言って同意した。

電話会談が終わると、フィリップはルチアーノと側近を務める少女に内容を話した。

「ちょ...ちょっと待って」

ディマイアの社長の話をすると、少女がそう言って立ち上がる。

「ん？ルビー、どうしたの？」

呆然とする少女ールビーを見上げて、ルチアーノが首を傾げる。フィラレーテ兄弟は座っているから、立っているのはルビーだけだ。

「今、ディック・ソルジャーって言ったよな？」

「ああ、うん...言った」

フィリップも“それがどうした？”というように首を傾げた。

「赤毛のおにいさんだろ？」

ルビーはそう聞きながら、何やら恐ろしく古い紙を取り出す。

「ああ...」

フィリップが頷くと、ルビーは唐突に窓へ歩み寄った。そして、そのまま窓を開け放つ。

「ちょ...ルビー、どこ行く気？」

そんなルビーの行動を見たルチアーノが、慌てて尋ねた。

「ディマイア行ってくる」

ルビーはそう言うと、ポケットから“炎の戦車”と呼ばれる赤い自転車を取り出し、星の瞬く大空へと漕ぎ出して行ってしまう。

「...行ってらあ...」

仕方なく、フィラレーテ兄弟はそう言いながら手を振って見送った。

※42...フィラレーテ兄弟が黒電話を使っているのは趣味だ。紅玉高原は青玉島ほどIT化が進んでいるわけではないが、それでもさすがにもう、黒電話しかないという時代ではない。

「いよいよ明日ですね、社長...」

髪を七三に分けた30代の青年が、しみじみした口調で言った。

「だな」

社長――ソルジャー氏が頷く。

「お前、次の社長にはきちんと、敬意を持って接してやれよ」

ソルジャー氏の言葉に、秘書が

「次の社長に“も”でしょう？」

と苦笑した。

「まるでわたしが、あなたに敬意を持って接してこなかったみたいじゃないですか」

「だってそうだろ？いっつも人のこと頭ごなしに叱りつけてさあ...」

ソルジャー氏はそう言いながら、面白そうに笑う。

「それは...それは社長があまりにも馬鹿げたことを...」

秘書の言葉を電話の呼出し音が遮った。番号表示を見ると、受付からのようだ。

「はいはい？」

ソルジャー氏が応じると、つい3週間前に実界から入社してきた女の子の声が聞こえる。

『クリアシャインという方が、社長にお会いしたいと...』

「クリアシャイン？」

社長が聞き返す。

サファイアちゃん...？

そう思いながら無意識のうちに回転椅子でくるくるしているソルジャー氏を、秘書は無言のまま背もたれを掴むという強硬手段で止めた。

『ええ、以前にもお会いしているからご存知なはずだって...』

もともとディマイアは来客の少ない会社だ。ましてや、社長に会いたいという客は皆無。慣れない事態に、受付の少女は慌てふためいている。

「OKOK...通してあげて。あと、それから...」

ソルジャー氏はそう言った後、妹をからかう兄のような口調で

「そのお客様、今日の前にいるんだろ？俺に会うのは俺より偉いお客様なんだから、“お会いする”じゃなくて“お会いになる”って言うの」 ※43

と付け加えた。

数分もしないうちに扉がノックされた。

「はい？」

ソルジャー氏がドア越しに答えると、

「先程のクリアシャインさんがいらっしゃいました」

という、受付の子の声が聞こえる。

それを聞いた秘書は素早く自分の控室に引っ込んだ。同時に、ソルジャー氏がドアを開けてあげる。

「!!」

“サファイア・クリアシャインさん、ようこそおいで下さいました”——ソルジャー氏はそう言おうと思っていたのだが、その言葉は途中で立ち消えになり、陽気な笑顔は凍りついてしまった。確かに、目の前で笑っているのは“クリアシャインさん”なのだ。“以前お会いしている”のも事実である。しかし彼女は、愛らしい少年の出で立ちをした濃紺の髪の子供ではない。真っ赤なショートヘア、オレンジ色の目——できることなら、もう二度と会いたくなかった人だ。

「ようこそおいで下さいました、クリアシャインさん」

それでもソルジャー氏は1秒くらいで復活し、朗らかに部屋へ通した。受付の子はすでに、逃げかのごとく帰ってしまっている。

赤毛の少女は

「お邪魔します」

と言って中に入ると、ソルジャー氏が奨める前に部屋の奥の長椅子に座ってしまった。 ※44

うっわ、相変わらずもう...

ソルジャー氏は内心でそう呟くが、懐かしいという思いは一欠けらもない。

「ご足労いただき、どうもありがとうございます」

少女が腰掛けた長椅子の向かいに座ると、ソルジャー氏はそう挨拶した。

「わたしは、ディマイア社長の...」

「ディック・ソルジャーさんだろ？」

自己紹介しようとしたソルジャー氏の言葉を、少女が気軽な声で遮る。

「青玉島から聞いてるから。うちは、ルビー・クリアシャイン」

...はい、知ってます...

ソルジャー氏は心の中で呟いた。

“ルビー・クリアシャイン”——できることなら忘れてしまいたかった名前だ。しかし、あれだけ苦しめて傷つけた挙句に殺してしまった大切な人、自分のことを好きだと言ってくれた大好きな人.....それを、そう簡単に忘れられるはずがない。それどころか今でも、何かのきっかけで彼女との思い出が蘇っては、すぐに彼女の最期を思い出してしまう。申し訳なくて、後ろめたくて——“同じ悲劇を繰り返さないために”、また彼女が生まれ変わっても、決して会うまいと心に決めていた。決めていたのに...

「ルビー・クリアシャインさんですね？」

ソルジャー氏はそんな思いを微塵も顔に出さず、朗らかに確認した。

「そ。ところで、さっそく本題に入ってもいい？」

ルビーは完全に自分のペースで、さっさと話を進める。

「あんたさあ、ここの社長さんやってたんなら、うちが生まれ変わってきた時とか普通に気づいてたでしょ？何で来てくれなかったの？来てくれるって約束だったじゃん」

唐突に話し始めたかと思うといきなり非難がましく睨んでくるルビーに、ソルジャー氏はいよいよ背筋の凍る思いがした。

...まさか、1500年前のこと、覚えてんのか...？

1500年前の手紙には、記憶は引き継がれないと書いてあった。しかし、目の前のルビーの態度

・話し方・口ぶりなど、どう考えても初対面のそれではない。

...単に馴れ馴れしいだけならいいんだけどさ...

「...先代のクリアシャインさんのことでしょうか？」

ソルジャー氏が言うと、ルビーは

「そうそう」

と頷いてポケットから紙切れを取り出した。

「1500年前のうかが、未来のうち宛に手紙を残してるんだ。結構細かいことまで書いてあるんだけど.....“ディック・ソルジャーっていう赤毛のおにいさんが捜しに来るはずだけど、不審者じゃないから安心するように”とか、“もしディックがアンポンタンすぎて捜しに来ないときは、こっちから捜しに行ってあげる”とか...」

ルビーは所々抜粋しながらそう言うと、紙切れをしまって身を乗り出す。

「てなわけで、わざわざ捜しに来てやったってこと。感謝してよ」

「あー...はい.....で、どうするんです？」

ソルジャー氏は話を飲み込むのに苦労しながら尋ねた。

先代のルビーさんは、自分のことを俺に殺させることで俺に魔力を移し、自分が生まれ変わるまで俺が生きていられるようにした——そこまでは初めから知っている。それと同時に、当時の記憶を持たない未来の自分に、いわば“引き継ぎ”作業も行っていた——それも、1500年前の俺宛の手紙に書いてあったから知っている。

そして、今目の前にいる彼女は、その引き継ぎ書に従って、わざわざ俺を捜しに来てくれたってわけだ...そこまでは分かった。

で？だから彼女は何をしたいんだ？

「さっきの手紙には、あんたはうちと友達だったって書いてあるんだよ。でな、うち、今ちょうど同僚を捜してて.....あーっと.....つまり...」

ルビーも話しながら、自分の言っていることが要領を得ていないことに気づいたのだろう。勝手に中断して、初めから仕切りなおす。

「うち、紅玉高原の王宮で王様とその弟王子様の側近として働いてるんだ。でも、本来なら側近は2人必要なのに、今、うち1人しかいないんだよ」

「...で？」

先の見えてきたソルジャー氏が、まさかと思いながら聞き返した。もうすでに、仕事用の口調はどこかへ吹き飛んでいる。

「それじゃあ困るじゃん？だから、ずっと前から王様たちに“早く気の合いそうな相棒を見つけてこい”って言われてたんだけど...それだったら、あんたがいいかなあ...って思ってたんだよね。わざわざ1500年前のうかが、また会えるようになって取り計らってくれた友達みたいだし...ぴったりじゃん？しかも、当時の吸血鬼で“ソルジャー”ってことは、戦闘の方もプロだろ？」

かつての吸血鬼は、一族ごとにそれぞれのスキルがあった。“ソルジャー族”はまさに、戦士の一族である。

「うちの側近は、意外と戦闘力必要だからさ...誰でもできるってわけでもないんだよ」

そんな風に言ってくるルビーにソルジャー氏が

「...で、それを俺に引き受けろと」

と聞くと、ルビーは明るく

「そうそう」

と頷く。

「...え...マジで？」

さも当たり前のような調子で話を進めるルビーに、ソルジャー氏はげんなりした口調で呟いた。

「当たり前じゃん、冗談でわざわざこんな辺境の地まで来ないって!!このアンポンタン」

...この子...本当に、俺のこと覚えてねえのか...?

ルビーを見るソルジャー氏の眼が、呆れたように細くなる。

初対面にしちゃ、あんまりにも馴れ馴れしすぎじゃね...?

馴れ馴れしいこと自体は別に構わないのだが、“実は1500年前の記憶を持ってました☆”なんてオチだったら...それはあまりにも怖い。

「な?うち、真面目に言ってるんだよ、な?な?いいじゃん!!」

「いや、“いいじゃん!!”って言われても...」

一体全体、何がいいのかさっぱり分からない。

「いいじゃないですか。退職なさる前日に王宮からスカウトが来るなんて、あなたぐらいですよ」

不意に、背後からそんな声が聞こえ、ソルジャー氏は

「ばっ...おまえ...!!」

と慌てて振り返った。秘書が、2人分のコーヒーを淹れてきてくれたのだ。

「退職？」

聞き逃してほしかったのに、ルビーはきっちりと聞いている。

「ってことは、明日ここ辞めんの？」

そう言うルビーの表情が、パァァッと明るくなった。

「ならもう決まりじゃん!!な？」

...ばかやろ、余計なことを...

ソルジャー氏がそう思いながら秘書を睨みつけても、秘書には心当たりがないせいか、睨まれていることに気づきもしない。

「...それに」

ルビーはそう言ってから、声の音量も高さもぐっと下げて、とどめを刺しにくる。

「あんた、何で1500年も生きてるの？」

「っ!!」

ソルジャー氏の顔から表情が消し飛んだ。ルビーを殺すことで、彼女から奪い取った魔力アーディック・ソルジャーを今生かしているのは、まさにその魔力なのだ。

「...その辺の話も、さっきの手紙に書いてあったけど？」

ルビーがニッと笑う。ソルジャー氏は何も言えない。

「決まりやな」

ルビーはそう言うと、勝ち誇ったように笑った。

※43...“お会いする”は動作主体がへりくだる謙譲語、“お会いになる”は動作主体を持ち上げる尊敬語である。この場合動作主体はお客様だから、それをへりくだらせてはまずいという話。

※44...念のために言うが、ルビーだって王宮の側近をやっているのだから、礼儀作法を知らないわけではない。ただ、ディックに対して礼儀作法を守る必要はないと思っているだけである。

2005年7月17日

ローラの件があってから1年5ヶ月が経過した。ワイシャツの襟にかかるぐらいまでしかなかったサファイアの髪は肩甲骨あたりまで伸び、服装も女の子の服に変えたため、もう誰にも“坊や”とは言われぬ。

「ただいまっ♪」

そんな日の22:30。いつも通り戦闘訓練を終えたサファイアが帰ってきた。

「お帰りな...」

「見て見てじゃっくん!!」

サファイアはジャックの言葉を遮ると、輝くような笑顔でA5サイズの銀板を差し出す。

「“戦闘訓練修了証明書”...合格なされたのですか？」

ジャックが聞くと、サファイアは

「うんっ!!」

と大きく頷いた。6才の頃から、6年以上に渡って受けてきた戦闘訓練が、今日をもって修了したというのだ。

「おめでとうございます」

ジャックが丁寧に言う。いくら心を込めて言っても平淡になってしまうのは、もういつものことだ。

「ありがと...これでやっと、1人前になれたんだ...」

サファイアはお礼を言ってから後半部分を嬉しそうに呟くと、思い出したように何か紙袋を取り出す。

「ほら...ちゃんと制服もあるの。何か外の仕事があるときはこれ着るんだ...お揃いだよ♪」

ふざけて笑うサファイアの言葉を、ジャックは冷淡な声で

「制服ですからね」

と一蹴した。しかし、そんな淡泊な反応にも、サファイアはまったくめげない。ジャックのそういう受け答えにはもう慣れているし、冷淡なのは表面だけで本当は優しいということも分かっているのだ。

「あと、ロッカーのカードキーも...いまいちロッカーの必要性を感じないけどね」

そう言いながらサファイアは首を傾げてカードを見せた。

...あれ...?これ、どこかで.....

ジャックはどこかでそのカードを見たことがある気がして、自分の記憶を手繰ってみる。

青地に、黒い線で模様の描かれた小さなカード...

...!!

どこで見たのか思い出したジャックは、思わずそのカードに手を伸ばした。

...これは.....1500年前、僕たちが夢幻界に来て間もない頃に、ジェイクさんが落とし物だと言ってサファイアに渡したカードだ...

よくよく考えればジャック自身もカードキーをもらっているのだが、今サファイアも言ったようにまったく使っていないし、そもそも男性用ロッカールームのカードキーはデザインも色も違

うので、気づきようがなかったのだ。 ※45

「...どうしたの？」

ありふれたカードキーに何故か強い関心を示したジャックに対し、サファイアが不思議そうに尋ねた。

「...いえ...何でもありません」

しかし、ジャックはそう答えながらサファイアにカードを返してしまう。

「...?なんだったらあげるよ。私使わないだろうし...」

まだ首を傾げながらも、冗談っぽく笑うサファイアに、ジャックは冷ややかな声で

「どう使えとおっしゃるのです？」

と聞き返した。

※45...同じ施設なのにデザインも色も両方違うって、なかなかない例だと思う。

2005年8月15日

青玉島は、1年のうちで最も暑い時期をようやく通り過ぎようとしていた。しかし、今夜は妙に暑い。昼間はそこまで暑くなかったのだが、1日中曇っていたせいか、昼間の気温がほとんど下がっていないのだ。

そんな夜、サファイアはいきなり

「ちょっと出掛けてくるね...」

と断ると、気乗りしない様子で部屋を出て行った。

サファイアもジャックも、研究の仕事にはむらがある。毎晩何時間も研究室にいるような時期もあれば、ほとんど携わらない時期もある。そして今は、まさに後者の時期だ。

...どうしたんだろう...？

ジャックはそんなサファイアの行動が気に掛かりはした。しかし、だからと言って特に尋ねるようなこともしない。2人とも、互いに干渉し過ぎないように気をつけているのだ。

何はともあれ、サファイアはその後、30分ちょっとで普通に帰ってきた。

ところがその次の日の深夜。久々に研究室へ行ってきたジャックは、自室に戻ってきた時、キッチンの方で冷蔵庫を開閉する音がしたことに気がついた。そっと様子を見に行くと、案の定サファイアが冷蔵庫を開けて何かを出そうとしている。

「何をなさっているのですか？」

ジャックが鋭く詰問した。その声にびくっとしたサファイアは、反射的に扉を閉めつつ

「えっ...いや...」

などと口走りながら振り返る。しかし、確かに冷蔵庫から何かが取り出され、それが今背中の後ろに隠されているということは、誰がどう見ても明らかだ。

そんなサファイアに、ジャックは冷水のように冷えきった声で

「夜中にお菓子を食べてはならないと、何回申し上げれば分かっていただけののです？」
と言った。

「えっ、いや...お菓子じゃ...」

サファイアも口答えしようとしてみはしたのだが、氷のようなジャックの視線を受けると、どんどん声が小さくなってしまふ。

「お菓子ではない...それでしたら、後ろに隠しているのは何なのですか？」

ジャックはそう言うと、サファイアの手から取り上げようとした。しかし、サファイアも伊達に戦闘訓練を受けていた訳ではない。サファイアはコマネズミのような動きで、ジャックの手を器用にかわしてしまふ。

そんなサファイアに、ジャックは容赦なく“奥の手”を使うことにした。

「あっ!!」

突然背後から生えてきた蔓がサファイアの腕に巻きつく。ジャックはその蔓を手繰ってサファイアの手を掴むと、握っていた何かを没収した。

サファイアが

「ちょっ...それ反則...返してえ!!」

と抗議しても、ジャックは一切応じない。

没収品をよく見たジャックは、もともと冷たかった眼をさらに冷たくして

「...確かに、お菓子ではありませんね...」

と呟いた。

サファイアが隠していたのは、蛍光パープルのジェル状の物体が入った薬瓶。確かにお菓子ではないが、お菓子よりももっと悪い。

「何の薬品ですか？」

ジャックは薬瓶の中身を見ながら、非常に鋭い声で尋ねた。しかし、サファイアは俯いたまま何とも答えない。

「何の薬品ですか？」

きちんとサファイアの方を向いてもう1度尋ねても、返ってくるのはやはり沈黙だけ。

「サファイア？」

「.....」

「...調べても構いませんね？」

ジャックがそう聞いた瞬間、サファイアは

「えっ...それはちょっと...」

と慌てた様子を見せ、再度取り返そうとした。

「困るようなものなのですか？」

そう尋ねるジャックの眼は冷々としている。

「.....」

また黙ってしまったサファイアにジャックは

「...調べさせていただきます」

ときっぱり言うと、部屋の出口の方へ歩き始めた。

30分後、2人はジャックの研究室にいた。椅子に座ったサファイアの前には、調査結果の映し出された電子板が置かれている。 ※46

「デュラニウム、メルプシン、リコノイド、ネピシン...よくもまあ、これだけの有毒物質を集めましたね...むしろ、感心します」

腕組しながら立っているジャックが、冷ややかな調子でゆっくりと言った。いつもの服の上から白衣を着ている。

「どこで入手したのです？」

「.....」

この期に及んでも、サファイアはまだ白状しない。

「どこで、誰から入手したのです？」

ジャックがこれほどしつこく追及するのには理由があった。この薬品の出所に心当たりがあるのだ。

「……」

しかし、やはりサファイアは何も答えない。

「…ウィルソンさんですか？」

ついに、ジャックがその心当たりを口にした。

「昨夜出掛けたのは、ウィルソンさんを尋ねていたのではないのですか？」

昨夜のようなことは決して初めてではない。以前からたびたび、サファイアが気乗りしない様子で不意に外出することはあった。メールを見て、急に“ちょっと出掛けてくるね”などと言い、そのまま出かけてしまうのだ。サファイアは普通なら、ジャックが質問しなくても、たいてい自分の方から“〇〇に行ってくるね”“〇〇分くらいで帰ってくるよ”などと断ってから外出する。

そんな彼女が、突然そんな様子で出かけるなんて…“明らかに”とは言えないが、なんとなくおかしい。

別にジャックは、サファイアがどこに行っているのかと探りを入れたわけではない。だが、そんなことしなくても、2年以上一緒に暮らしていてそんなことが度重なれば、どうしたって少しずつぼろが出てしまうのだ。

「いや、違…」

「サファイア？」

それでも否定しようとするサファイアの言葉を遮って、ジャックが肅然と言った。今までの冷たい声とは違う、あまりにも静かな声だ。その声に思わず視線を上げてしまった段階で、サファイアの負けは決定してしまった。青く澄み渡った透明な眼の、強く真っ直ぐな光に捕らえられてしまったが最後、サファイアは抵抗することもできずに小さく頷く。

…ほんとうに、この眼は反則だって…

「…これね、アル博士の新薬なんだ」

サファイアが小さな声で言った。実験棟にはアルバートもいるため、彼に聞かれないよう外をちらちらと気にしている。ジャックはサファイアと薬瓶を交互に見ながら

「“新薬”とおっしゃいますが、明らかに毒薬ですよ」

と念を押した。

ウィルソン氏はそれも教えずに渡したのだろうか？それともサファイアは知っていて飲もうとしたのだろうか？

ジャックはどちらにしても信じられないと思いながら聞いたのだが、サファイアは

「分かってるよ」

とあっさり頷く。

「飲むとどうなるのかは分からないけど、毒薬だってことは聞かされてた。でも、ちゃんと解毒剤もらってるから…」

サファイアはそう言いながら、別の薬瓶を取り出した。入っているのはオレンジ色の透明な液体だが、少し植物の繊維のようなものが混ざっている。

ジャックはそれを受け取ると、照明に透かしながら



「...解毒剤...見たところ、ただツキミヒマワリを煮出しただけのものに見えますが」と言った。

「ツキミヒマワリ...？」

サファイアが首を傾げる。

「ええ。あらかたの毒物に効く解毒剤です。デュラニウム、メルプシン、リコノイド、ネピシン...いずれも、それ単体なら効きます。しかし、薬品を混ぜて反応させれば別の物質になってしまいますからね。新薬ですからこれ全体でどうなっているのかは実験してみなければ分かりませんが、デュラニウムとリコノイドの反応物には効きませんから...この解毒剤では太刀打ちできない可能性が高いですよ」 ※47

ジャックはツキミヒマワリの抽出液をサファイアに返しなが

「ツキミヒマワリは万能薬と呼ばれることもありますが、むしろ、よく分からない毒物にとりあえず使ってみるという応急処置的な解毒剤です。専用の解毒剤があれば、その方が早く確実に効きますからね」

と付け加えた。そしてさらに、黙っているサファイアを見下ろしながら

「そういうものを渡してきたということは、ウィルソンさんはまだ、解毒剤の研究もしていないということではないでしょうか？」

と指摘する。

「...あー...やっぱり...」

サファイアは、薬瓶を手の中で弄びながら呟いた。

「まあ、そんなところだろうとは思ってたよ...」

そう言って小さく苦笑するサファイアを、ジャックは

「どういうことです？」

と鋭く詰問する。まるで氷剣のような口調だ。

「え...どういうことって...」

サファイアがそう言い淀むと、ジャックは

「要は、あなたが実験台になっていたということですよ？」

と核心を突いた。

「...うん」

仕方なく、サファイアは小さな声で頷く。

「どうなるか分からないのを承知で？」



ジャックがさらに聞くと、サファイアは黙ったまま小さく頷く。

「何回目ですか？」

そう聞かれると、またサファイアは一瞬答えに詰まった。しかし、やがて俯いたまま

「...分かんない」

と呟く。

「...5才ぐらいのときから、ずっとだから...」

その答えを聞いたジャックは、もう呆れて何も言えなかった。

「どうして、そんな...」

ジャックが尋ねると、サファイアは

「...恩返ししたくって...」

と言って微笑む。悲しくて苦しそうなのに何故か、メレンゲのようなふんわりとした印象を与える微笑だ。

「私、いっつも人に迷惑かけたり優しくしてもらったりするばかりだから、誰かに必要なんだって言われると、すごく嬉しいの...たまには恩返しできるかなあって...」

ここまで言うと、サファイアはふと視線を落とし、

「だから、断れないんだ...例え、“必要だ”って言葉が嘘だと知ってても、その恩返しが自己満でしかないって分かってても、ね...」

と付け加えた。それに対し、ジャックはただ、黙ってサファイアを見つめている。

要は、サファイア自身が自分の存在価値を見出せないのだ。だから、人体実験だろうと何だろうと引き受けて、少しでも“誰かの役に立てている”と思いたいのだろう。

...どうして自分の存在価値を見出せないのだろう？サファイアのことを必要としている人は、彼女の周りに、確実にいるというのに...

ピュアは意地っ張りだが、サファイアのことを妹のように可愛がっている。ペーターがサファイアを自分の娘のごとく可愛がっているのは、誰が見ても明らかだ。パールの厳しさも、教え子に対する愛情ゆえである。そしてもちろん、ジャックがサファイアのことを愛しているのは、もう今さら書くことではない。皆、サファイアのことを必要としている。同時に、彼女に必要とされていることも、なんとなく感じている。そして、それが普通なのだ。言わなくてもこれを前提にしているのが一般的な人間関係というものだろう。 ※48

サファイアも、そういうことを分かっているわけではないわけではない。一般論としては同じ意見を持っている。ただサファイアに言わせると、自分はその例に当てはまらないらしい。彼女は自分のこととなると、どうしても“皆に優しくしてもらっている”と考えてしまうようなのだ。自分は皆を必要としている。皆は自分に優しくしてくれる。でも、自分は何も“恩返し”できない.....こういう理屈だ。

これは何も今に始まったことではない。1500年前も、やはり——多かれ少なかれ——同じ傾向を持っていた。そして、サファイアはこの点に関しては恐ろしく頑固で、いくら周りが——“周り”というのはほとんどジャックのことだが——言っても、一向に変わらない。

これ以上迷惑をかけたくないと思うから、周囲の足手まといになるまいと気丈に振る舞う。何

か自分の存在価値となるものが欲しくて、人に必要だと言われれば、文字通り自分の身の危険も顧みず協力してしまう。そんなことをしていくうちに、彼女は12才とは思えないほど大人びていく。でもそれはちょうど、ダイヤモンドの鎧を着て背伸びしているようなものでしかない。ダイヤモンドは最も硬度の高い物質だが、それ故に柔軟性がないため、鉄などで思いっきり叩かれると――もしくは鉄などをダイヤモンドで思いっきり叩くと、衝撃を吸収できないダイヤモンドの方が砕けてしまうのだ。サファイアの強さも、それと同じような危うさを持っている。 ※49

しばらくの間、この研究室は沈黙に支配されていた。研究室の外も中も完全に静まり返って、押しつぶされそうな空気を作っている。

そんな沈黙を破ったのは、

「...でしたら、わたしもあなたにお願いしたいことがあるのですが」

という、ジャックの静かな声だった。“静かな”と言っても、ただ静かなのではなく、強い感情を無理矢理押し殺しているかのような静かさだ。

「.....？」

サファイアが首を傾げると、ジャックはその口調のまま、

「あなた自身のことを、もっと大切にしてください。あなたを必要としている人が.....あなたがいなくなってしまうたら悲しむ人がいるんです...」

と言う。

...あなたに会いたい一心で、1500年間待ち続けた人もいるんですから。

それを聞くと、サファイアはおずおずと、小さくゆっくり頷いた。

「ごめんね、ジャック.....本当に、や」

「そういうことではありません」

サファイアが次に何と言ってくるかを予測していたジャックは、“や”と聞いたただけですぐに遮ってしまう。

「わたしが優しいから、そう言っているわけではないんです」

ジャックは聞いている側が苦しくなるくらい抑えた声でそう言うと、サファイアの前にしゃがんで視線の高さを合わせた。そして、同じ高さからサファイアの眼を見つめ、

「わたしはただ...自分があなたにしていっていただきたいことを、お願いしているんです」

と言ってから、彼女の髪を1度だけ梳く。

サファイアは初め、まだ意味が分からないような顔をしていた。しかし、次第にその表情は驚きのものに変わっていく。そして、サファイアは深く俯くと、小さな声で

「...ありがとう」

と言いながら、ジャックの手を両手できゅっと握った。

...ねえねえじゃっくん、もし誰かに“仲良いの？”って聞かれたら、“うん”って答えちゃっても、いい...かな？

※46...“電子板”とは、A5からB4ぐらいの範囲で大きさを自由に変えられる、厚さ1mm弱の板で、2次元ないしは3次元の映像を映し出すことができる便利なツールだ。

※47...そもそも、毒を吞んでしまった人が自力で解毒剤を吞めるかどうかという問題もある。

※48...まあ、恋愛は別かもしれないが。

※49...まったくの余談だが、サファイアやルビーといった石の総称であるコランダムは、ダイヤモンドに次ぐ硬度を持っている。(モース硬度9)

それ以後、サファイアはアルバートからメールが来ても、一切応じなくなった。ジャックが行かせないからでもあったし、サファイア自身が行こうとしなくなったからでもある。

ジャックはアルバートがどんな反応をするだろうかと懸念していたのだが、それは杞憂に終わりそうだった。ずっと無視していても、アルバートは何もしてこないのだ。廊下ですれ違ったりしても、まったくいつも通りの挨拶をしてくる。まあ、もともと彼の方が違法なことをしているわけだし、そのうえサファイアたちは女王のすぐ側にいるのだから、下手なことをして女王に告げ口されたら困ると思って、大人しくしているのかもしれない。

そうこうしているうちに、季節はどんどん移っていった。暑い季節が終わり、秋になり、寒い冬が来て、もうそれも過ぎて春になっている。その間、特別なことは何もなかった。9月にイギリス ※50 との定期会談を行ったり、12月に決算報告でバタバタしたりしたぐらいだ。

2006年3月12日

「ねえねえじゃっくん？」

いつも通りの勤務時間中、キーボードを叩いたりマウスを弄ったりしていたサファイアが、ふと顔を上げて話しかけた。

「中和滴定の計算がよく分かんないんだけど...」

青玉島の義務教育は8才から16才までの8年間である。初等教育2年間、中等教育6年間、高等教育2年間だ。青玉島の教育水準は高く、初等教育の段階では日本の小学校高学年から中学2年生ぐらいまでの内容をやる。文字の読み書きや四則計算は入学する前にどうにかしておけということだ。そのため、このような基礎教育を行う塾などが多数あり、ほとんどの子供が通っている。サファイアの年齢は中等教育の段階だが、中等教育では中学3年生から高校までの内容をみっちりやる。そして高等教育では、大学の基礎的な部分を学ぶ...ここまでが義務教育だ。 ※51

さて、毎日王宮で勤務しているサファイアは、もちろん学校に通ってはいないのだが、では教育を受けていないのかというと、もちろんそんなことはない。王宮が“子供に教育を受けさせる義務”を怠っているとあっては、洒落にならないだろう。サファイアは通学する代わりに、通信教育を受けていた。ちなみに、通信教育を行っているのは青玉島で1・2位を争う名門校である。

そして、今13才であるサファイアが質問した中和滴定は、日本なら高校化学の内容だ。

「ああ、それは...」

基本的に、ジャックが自分から口出しすることは滅多にない。しかしサファイアが質問すれば、いつも非常に丁寧に教えてくれた。化学・魔法化学・生物・魔法生物はもちろんのこと、物理・魔法物理、国語 ※52 、夢幻史、実界史、青玉史、イギリス史.....など、ほとんどの教科の質問に答えている。

「...あ、そっか!!なるほど...ありがと♪」

しばらくしてから、ジャックの説明で納得したサファイアが、嬉しそうにお礼を言った。

「よかったわね、いいお兄さんがいて」

ピュアがイライラしながら言う。彼女は通信教育ではなく、家庭教師であるパール ※53 に全教科を教えてもらっているのだ。

「はい♪」

それに対し、サファイアは満面の笑顔で頷く。

「本当に...」

ペーターが何か言おうとした時、王宮の外から、花火のような音が聞こえてきた。

「...何？今の音...」

ピュアが呟く間に、素早く立ち上がったジャックが窓に歩み寄り、カーテンを開ける。

「!!」

王宮の東の方から酷い煙が上がっていた。煙の出所を見ると、赤い炎が燃えている。

「あそこって、まさか...」

呆然としたサファイアの問いに答える者はいなかったが、質問したサファイアを含め全員が分かっていた。

あそこは、セントラルシティ駅だ。

セントラルシティ駅は、首都セントラルシティの中でも最も大きい駅だ。 ※54 国土の中心に近い位置にあるため、この国を走る主要な鉄道である輻射線 ※55 はすべてこの駅を通っている。いわば、青玉島の鉄道の心臓に当たる駅だ。

2006年3月12日16:00に起きた爆発は、この駅の北側を吹き飛ばしてしまった。当然死傷者は多数、輻射線も全線運転見合わせである。そのうえこれとまったく同時に、青玉島経済の中心都市アークライト ※56 とディケンズ空港 ※57 でも同規模の大爆発が起きた。これらをすべて合計すると、死傷者数は1500人以上となっている。

本来なら、瞬く間に国中が大パニックになりそうなものだが、王室はこの事態に驚くほど迅速な対応をした。その場に居合わせた人々には、大勢の警察が動いて明確な指示を与えることでパニックを抑制し、警察、消防、救急などが正常に機能できるようにする。そして、青玉島に向かっていた飛行機は、パーセル空港 ※58 とホガース空港 ※59 に着陸するように誘導する。青玉島は軍隊も動かし、国中厳戒態勢に入った。ところがそんな中、王宮に1通のメールが届く。

それは、青玉島の王宮に宛てた脅迫状だった。“これ以上爆破事件を起こされたくなければ、我々の指示に従いなさい。さもなくば、またMB-356 ※60 を爆発させる”という、非常に短いものである。

もちろん、青玉島がそんな脅迫に応じるはずはない。しかし、だからと言って迂闊に動きをするわけにもいかない。どうすべきかと思っていた直後、今度はピュアのパソコンに電話がかかって来た。

『あ、もしもし？紅玉高原のフィリップ・フィラレーテなんですけど...』

「ちょうどよかった、今電話しようかと思っていたのよ」

ピュアは緊迫した声でそう言う。

『“電話しようと思っていた”？何かあったの？』

フィリップの質問に対し、ピュアが青玉島の現状――3ヶ所で同時に爆発が起きたこと、脅迫状が届いたこと――をざっくりと伝えると、フィリップは愕然とした声で

『マジで...?』

と呟いた。

『そんな...そんな、嘘だろ...?』

「あんたの方は何があったのよ？」

ピュアがイライラした様子で尋ねる。もともとフィリッポの方から電話して来たのだから、当然彼だって何か言わなければならないことがあったはずなのだ。

『ピュアちゃんと同じようなことが起きたんだよ...』

フィリッポはそう言ってから、紅玉高原首都アレティーノ・カポルオーゴにある経済の中心都市ギルダンダイオと、紅玉高原で最大の規模を誇るレオンカバロ空港が、青玉島の3ヶ所とまったく同じように爆破されたと告げた。

「...ちょっと待ってよ...どういうこと?！」

話を聞いたピュアは、頭を振りながら困り果てた様子で呟く。

「セントラルシティ駅、アークライト、ディケンズ空港、ギルダンダイオ、レオンカバロ空港...つまり、青玉島と紅玉高原の経済の心臓部分と交通の要で、同時にまったく同じような爆発が起きたってわけでしょ?これって...」

『...全部、同一犯によるテロかなんかなんだらうな...脅迫状なんか届いてるし』

ピュアの言葉を、フィリッポが暗い調子で引き取った。

『ただ、紅玉高原には脅迫状とか届いてないんだよな。それが気になるけど...』

フィリッポがそう言うと、その奥の方から微かに“良いじゃん、届かない方がいいって”と呟く女の子の声が被さってくる。するとさらに、“ばかっ!!向こうに聞こえちまったらどうするんだよ?!”という、男性の声も聞こえてきた。

...あれ...?この声って...

ジャックはその声からずっと会っていない友人の姿を思い浮かべたが、すぐに自分の中でまさかと打ち消す。

もう1500年経っているのだから、さすがに...

ところがジャックは、隣でサファイアも首を傾げていることに気づいた。ただ、向こうの黒電話と違って ※61 、こちらの電話にはスピーカーホン機能が付いている。そして、皆に向こうの言っていることが聞こえるよう、スピーカーホンをONにしている。したがって、今無駄口を叩くことは許されない。

「そうよ、届いてない方がいいわ」

ピュアは真剣な声でその女の子の言葉に同調してから、

「それより、どうする？」

と尋ねた。

『...んー...この5つの爆破事件が全部同一犯で、青玉島の王宮を思い通りにしたいってことを目的としたテロなんだとしたら、青玉島と紅玉高原は一緒になって対策していくべき...だよな?』

フィリッポが言うと、ピュアは

「そうね」

と頷く。

『じゃあどうする？俺がそっち...あー...でも、さすがに今国を留守にしたいくないしなあ...』

「あんた、こっちに来る気なの？」

フィリップの発言に驚いたピュアが聞き返すと、フィリップはケロッとした口調で

『当たり前じゃん!!』

と言い切った。

『今は通信機能がちゃんと働いてるからいいけど、もしそれが止まったら連携取れなくなっちゃうじゃん!!で、青玉島の人がこっちに来てくれるっていうんでも構わないけど、やっぱ事件のメイン舞台はそっちだろ？場所も3ヶ所だし、脅迫状も届いてるし...ってことはやっぱ、こっちがそっちに行くのが無難でしょ』

フィリップはそう説明してから、

『何より、電話越しじゃやっぱチームワーク育たないし...』

と付け足す。

「なるほど...」

ピュアは感心したように呟いた。

『でも、悪いけど俺は行けないと思うから...ルチアーノと、うちの“愉快的仲間たち”を送るわ。それもいい?』

フィリップはそう申し訳なさそうに言ったが、ピュアは

「“愉快的仲間たち”...?」

と、そのネーミングに対して不信感を露わにする。

『そ。めっちゃやかまし...わあああっストップストップ!!そんな怒るなよ!!.....あーすいません、うん、だけど、多分役に立つと思うよ。その気になればめっちゃ使える奴らだから...“その気になれば”だけど。それに、片方はピュアちゃんとその側近さんの妹だし』

「ああ、ルビー・クリアシャインさんね」

ピュアは“あんたのところいつも電話中に何が起きてるのよ?”と聞くつもりだったのだが、最後の言葉を聞いてコメントが変更される。

「分かったわ。じゃあ3人？」

『あ、うん』

「分かった...」

その後、ピュアとフィリップは3人の移動手段や日程などについて綿密な打ち合わせをした。そして電話を切ると、ピュアは

「話聞いてたわね？」

と聞きながらペーター、サファイア、ジャックを見回す。

「はい、大丈夫です」

皆が頷くのをみると、ピュアは

「じゃあ、それまでに国内の事態収束をあらかじめ済ませなくっちゃね...」

と溜め息をついた。

※50...“イギリス”というのはイギリスの魔法界政府のこと。隔年で開催国を交代しながら2ヶ国会談を開き、お互いの国と夢幻界・実界の近況報告をしあっているのだ。

※51...もちろんこれは単なる目安だ。また、こういった内容の他に、魔法教育もしっかり受けることになる。

※52...青玉島の公用語はイギリス英語をベースにした青玉英語である。

※53...サファイアの戦闘訓練を担当しているパールと同一人物だ。

※54...1日の利用者数は5万人程度。かつてイギリスでもっとも利用者数が多いと言われていたウォーターlooー駅と同じぐらいだ。ちなみに、新宿駅の1日の利用者数は400万人近いという。

※55...“輻射”とは車輪のスポークのようにある1点から周囲に向かって放射状に広がっていくことで、“放射”と同じ意味。輻射線は6本あり、時計になぞらえて“12-6線”“1-7線”“2-8線”...と名づけられている。ちなみに、これと交差する形で環状線という路線もあり、内側からA線、B線、C線となっている。もちろん、他のローカル線も縦横無尽に走っている。

※56...セントラルシティの中にある経済都市。“青玉島の経済の中心”ということは、夢幻界の経済の中心でもある。面積は約3km²。登録人口はおよそ8,000人だが、昼間人口は約30万人となる。

※57...青玉島には、大きな空港が東西南北に1つずつあるのだが、その中でも最大の規模を誇るのが、東にあるディケンズ空港である。

※58...青玉島の北にある大きな空港。

※59...青玉島の南にある大きな空港。

※60...“MB”とは、“Magical Bomb”の略である。

※61...黒電話にはスピーカーホンは付いていないが、それにもかかわらず、他の人の話し声まで拾ってきてしまっているようだ。

2人が自室に戻った頃にはもう日付が変わっていた。3人 ※62 とも食事時間を返上し、側近2人は勤務時間を過ぎることも構わず、どうにか事態収束の目処がつくまで作業を続けていたのである。もちろん大臣や官僚 ※63 も同じようなものだ。そのおかげで、アークライトの経済機能はどうか復旧させることができた。その後まもなく、紅玉高原のギルダンダイオも復旧している。

それだけ緊迫した状況であるにもかかわらず、サファイアは時折そわそわしたかと思えば、憂鬱そうな顔をするなど、終始落ち着かない様子だった。無論誰だって落ち着かない状況ではあるのだが、サファイアの場合はどうも、今回の事件のせいではないようだ。

「...嬉しそうですね、サファイア」

そんなサファイアの様子を、ジャックが冷ややかな声で指摘した。

「そんなことないよ」

サファイアは顔の前で両手をひらひらさせながら否定するが、やはりこの事件とは違うことに気を取られていることを隠し切れていない。

サファイアも、“ルビー・クリアシャイン”という妹がいることは話に聞いていた。1500年前に生まれたときに合わせて“双子の妹”ということにしてあるが、実際はピュアと同年——つまり、サファイアより6才年上だったはずだ。しかし、いまだかつて会ったことは1度もない。これまでも、そんな妹に会ってみたいという気持ちはあった。だからサファイアは、そんな妹に会うことを楽しみにしているのだが、それと同時に、彼女にとって妹と会うということは非常に怖いことでもある。

もし、拒絶されたらどうしよう？

ルビー・クリアシャインの生い立ちも、“暗黒派が作った兵器”という点ではサファイアと同じである。しかし、彼女には新月の呪いはかかっていない。にもかかわらず、ルビーにも同じ呪いがかかっていると思って冷遇する人も少なからずいるという話をたびたび聞いているのだ。

普通に考えたら、他の人よりもっと、私のこと嫌いだよね...

だから、前々から会ってみたいと思っていたにもかかわらず、そうしたいとは言わなかったのである。

もし彼女と会って、面と向かって拒絶されたら...実の妹に拒絶されたら...きっと、立ち直れない...

とにかくサファイアは、ルビー・クリアシャインに会うということがずっと気になって仕方なかった。しかし、本来今はそれどころの事態ではない。なんせ、1500人以上の死傷者を出すテロ ※64 が起きたのだ。経済・流通・交通の受けたダメージは絶大だし、今までに1度も戦争を経験したことのない青玉島では、そもそもこれほどの死傷者が出るということ自体、史上初だと思われる。しかも、ちょっとでも下手な動きをすれば、また同程度の被害を出すことになるかもしれない。また、少しでも油断すれば王宮を乗っ取られてしまうかもしれない——そんな状況で他のことに気を取られてはまずかろうと、サファイアは一生懸命ひた隠しにしているのだ。

「そうですか」

見え透いてるのに...と思いながらも、ジャックはこれ以上言っても仕方がないと話を切り上

げる。おかげで部屋は沈黙に包まれてしまい、サファイアのルビー・クリアシャインを気にする気持ちを紛らわせるものもなくなってしまふ。

「...ねえねえじゃっくん」

しばらくして、今度はサファイアの方から話しかけた。ジャックが黙ったまま振り返ると、サファイアはとうとう

「...私の妹って、どんな子かなあ...？」

と口にする。

「...わたしが知るはずないでしょう」

ジャックは嘘をついた。言うまでもなく、本当は1度会ったことがあるのだ。

1500年前のサファイアと今のサファイアがこれほど“同一人物”なんだから、ルビーさんもまったく変わっていないだろうな...

ジャックは心の中でだけそう呟くが、そんなこと知る由もないサファイアはあははっと笑いながら、

「だよねえ」

と言う。

サファイアは妹のことが気になって仕方がないのを隠そうとして隠し切れずにいたが、海の向こうの妹が姉に会えるのをあからさまに喜んでフィリッポに怒られていることなど、知る由もなかった。

事件発生間もなくから、ネット上にはこの事件のニュースが大量に流れた。ディマイアのように信頼できる報道から、普段ゴシップばかり扱っていて、何でも誇張しがちな報道サイト、個人のブログまで、ありとあらゆるところにこの事件の記事が出ているし、紙の新聞やテレビも、号外を配ったり速報を流したりしている。おかげで、事件発生からそう時間の経たないうちに、夢幻界中が知るところとなった。

※62...ジャックはもともと食事時間を必要としていないため、ピュア、ペーター、サファイアの3人。

※63...物語にはあまり登場しないが、もちろんそういう人たちもいるわけである。

※64...まだテロだと確定したわけではないが、とりあえずその可能性が高いという方向性で見ている。

2006年3月15日

空はうっすら曇り、白に限りなく近い水色といった感じだった。時折強く吹く風が、屋上の小型飛行機発着所に立っているサファイアとジャックの髪を揺らす。

「13:55...」

サファイアが時計を見ながら呟いた。

「大丈夫かなあ...」

「14:00到着予定でしょう？」

不安そうなサファイアに、ジャックが冷静な声で言う。

「まだ5分前ですから...」

今日の14:00に、紅玉高原から王宮のチャーター便が来ることになっていた。ルチアーノと“愉快な仲間たち”、計3人を乗せた飛行機である。なんせ青玉島も紅玉高原も空港はすべて離着陸見合わせにしているし、船ではあまりにも遅いし、そもそも青玉島に至っては輻射線が運行できないため鉄道もままならないし...ということで、いっそチャーター便で素早く着てしまおうということになったのだが、どう考えても危険である。

「だってさ...紅玉高原の王子様が乗ってるんだよ、飛行機で飛んでる間に攻撃されたら、一発で...」

落ち着き払っているジャックに、サファイアは半ば憤慨するように言った。しかし、ジャックは

「それはそうですが...」

と言いながらあくまでも空を見つめている。

その後会話は途切れ、サファイアが30秒ごとに時刻を読み上げるだけとなった。

「13:59...あと1分...」

「サファイア」

“あと1分”と言おうとしたサファイアの言葉をジャックが遮った。サファイアは“どうしたの？”と言おうとしたが、ジャックが黙って指さす物を見て、

「あ」

と声を漏らす。

ジャックが指さしていたのは、こちらへ向かってくる小さなオレンジ色の点だった。

ルチアーノ、ディック、ルビーは紅玉高原の超音速戦闘機“RUA-02” ※65 で青玉島へ向かっていた。超音速戦闘機の中で、パイロット+3人が乗れるのはこの機だけなのだ。

「そろそろ着きますよ」

パイロットが3人に告げた。

「えっ、もう?!だってまだ、5分も経ってないのに...」

ルビーが驚いて叫ぶと、パイロットは

「ええ。なんせマッハ2ですからね。アレティーノ・カポルオーゴからセントラルシティまでの直線距離は約340kmですから、8分ちょっとですよ」

と説明する。

「ちょ...今超高速移動してるんだから、パイロットに話しかけちゃダメだって...」

ルチアーノはパイロットを見て冷や冷やししながら、ルビーを叱った。

「大丈夫ですよ、ルチアーノ様。慣れてますからね」

ルビーの代わりにパイロットがそう答えながら笑うが、そんなパイロットの異常な余裕っぷりにもルチアーノの不安は増すばかりだ。

「ほらほら、そろそろ見えてきましたよ...」

パイロットの言葉で、3人も前方に目を凝らす。窓の外の景色の動き方を見ると、着々と減速しているようだ。

まだ肉眼で見える距離ではなかったが、操縦席についているモニターには、王宮の屋上にズームした映像が出ていた。2人、人が立っている。

「あ、あの子が姉ちゃんかなあ？」

ルビーは2人のうち、小柄な女の子の方を指差してディックに聞いた。サファイアを知っているのは、かつてディマイアで会ったことのあるディックだけである。

「ディック？」

にもかかわらず何とも答えないディックの腕を、ルビーが強く小突いた。

「あ、ああ...そうですね」

それでハッとしたディックは、慌ててそう頷く。

確かにその子がサファイアであることにはディックも気づいていたのだが、彼はむしろ、専らその隣にいる人物に気を取られていた。

...やっべえ...“相変わらず”って、変わらなすぎだろ...

1500年振りに見る、消息不明だった友人の姿。多分もう青玉島に行っているだろうと思っはいたが、その思いに根拠は何もなかった。ほぼ勘だけだ。そのためか、気持ちの上では強く確信していたにもかかわらず、いざ目の当たりにすると、やはり驚きを隠せない。

「ちょ...おまえ、どこが男の子みたいなんだよ!!めっちゃめっちゃ可愛い女の子じゃん!!」

憤慨するルビーに対し、ディックは

「いや、この間ディマイアに来た時は本当に男の子みたいな格好してたんだよ」

と弁解する。

「ほらほら、降りるよ」

いつの間にか、戦闘機は屋上の上空にホバリング ※66 していた。そのまま、戦闘機は青玉島王宮の小型飛行機発着所に垂直着陸する。

着陸してエンジンが止まると、サファイアとジャックは戦闘機の方へ歩き出した。戦闘機のドアが開き、ルチアーノたち3人が外に出る。

ディックがジャックの方を見ると、一瞬目が合った。ジャックはその瞬間だけ驚いた色を見せたが、すぐいつもの無表情に戻ると、サファイアと一緒に歩みを速めてくる。

...今あいつ、俺を見てびっくりしたな...

ディックはニッと笑った。いつも色々なことを思っているにもかかわらず、何故かまったく顔

に出ないあの友人が、一瞬でも驚きの色を見せたということは、本当はものすごく驚いているということなのだ。

やがてサファイアたちは、ルチアーノたちのすぐ近くまで来た。そしてサファイアが、その見た目からは想像できないような、大人顔負けの物腰で話しかける。

「ルチアーノ・フィラレーテ様でいらっしゃいますか？」

...な...なんでソルジャー社長が...?!

サファイアは内心でそう叫ばずにはいられなかった。

...え...ディマイア辞めた次は王宮勤務?!凄すぎでしょ...

ソルジャー氏はこちらを知っているそぶりをちらりとも見せなかった。隣のおねえさん——おそらく“妹”のルビーさんなのだろう——も、まったく反応してくれない。仕方がないので、サファイアもお仕事モードで大人しくしている。

「ようこそおいでくださいました。ピュア・カークランド女王の側近であります、サファイア・クリアシャインと申します」

サファイアが滑らかに言ってお辞儀すると、すぐに

「同じくジャック・キュアラーと申します」

と続く。

「クリアシャインさん、キュアラーさんですね？わたしはルチアーノ・フィラレーテです」

ルチアーノも明るい声で自己紹介した。紅玉伊語訛りのアメリカ英語だ。

「で...こっちがディック・ソルジャー、こちらはルビー・クリアシャイン...2人とも、わたしの側近です」

ルチアーノは紹介のためにルビーを振り返ったときに、視線だけで

“おまえも姉ちゃんを見習ったら？”

というメッセージを送る。するとルビーはふいっと視線を逸らせた。

「それでは、まず、お部屋までご案内いたします」

その言葉で5人が歩き出す。5人ともそれぞれに思っていることはありすぎるのだが、外から見るとそんなことはまったく分からないのだった。

※65...“RUA”は“ルビーノ・ウルトゥラソノーロ・アエーレオ”の頭文字。日本語では“紅玉超音速戦闘機”となる。

※66...“超音速戦闘機が空中にホバリングする”などと書くと、どう考えてもありえないとしか思えないが、夢幻界のテクノロジーは基本的に科学と魔法を組み合わせている。超音速戦闘機の空中停止は、魔法の力で実現されているのだ。

第3章 コランダム



サファイアとジャックは紅玉高原の3人を、それぞれの部屋に案内した。普通の来客用の部屋は上から2番目のフロアにあるのだが、外国の国王が来るとなれば話は別だ。最上階——つまり女王の間と同じフロアだ——に作られた王族専用の部屋に案内する。王族と側近を引き離すのもまずかろうということで、王族用の部屋と直接繋がっている部屋も3つ用意してある。青玉島女王の部屋には側近の部屋が1つしかないのに、来客用には3部屋も用意されているのだ。

今の時刻は14:05。準備の時間もあるので、会談開始時刻は14:30である。

14:30

「うわー...こんな仰々しいのを用意してくれたんだ...」

ルチアーノは会議室に入って辺りを見回しながら呟いた。後ろ左右に立つディックとルビーは、紅玉高原の制服を着て大人しくしている。男性用は暗い臙脂のスーツに淡いオレンジ色をしたスカーフのようなネクタイ。女性用はスズランの花を思わせるタイトスカートと襟のないジャケットにリボンで、色は男性と同じである。

「初回ぐらい、ちゃんとやったっていいでしょ？」

そう答えたのはすでに着席しているピュア。病気のこともあるため、身体を締め付けるような服を着ることはあまりないのだが、今日はかっちりとしたワンピースを着ている。その斜め後ろの席に座っているサファイアとジャックもやはり青玉島の制服を着ているが、こちらは男女とも濃紺のスーツで、水色のスカーフを菱形のブローチで留める形だ。

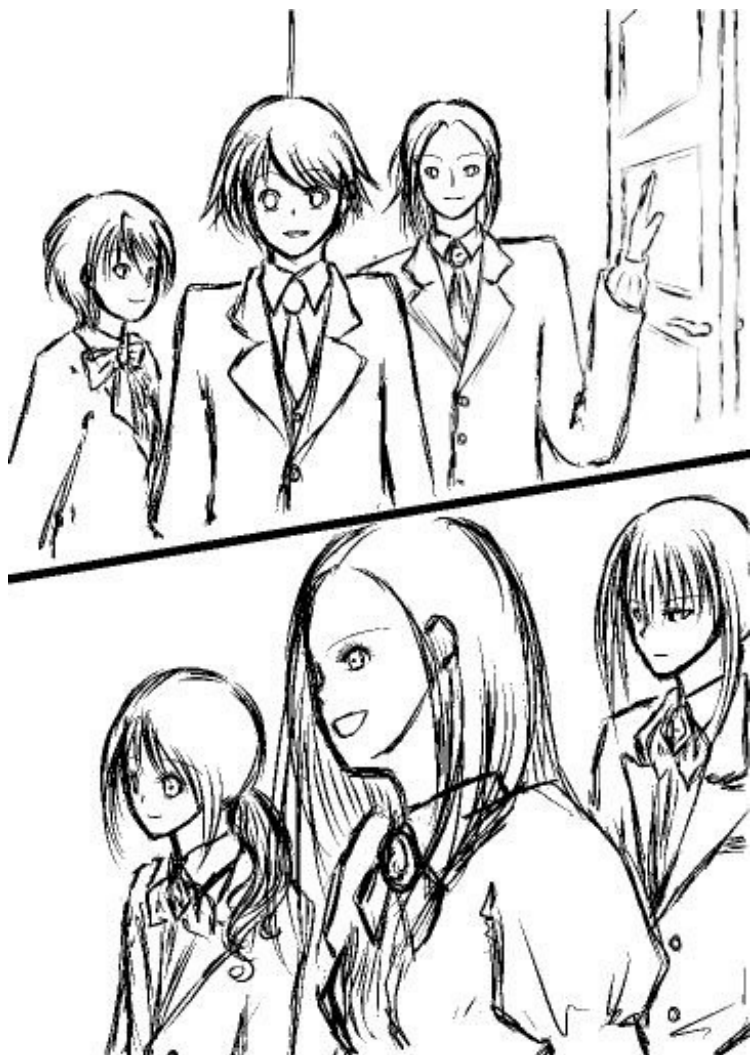
「まあ確かに」

ルチアーノたちも着席する。

「では、始めましょう」

2国間に立つペーターの穏やかな声で、会談が始まった ※67

「去る2006年3月12日16:00、ギルダンダイオ、レオンカバロ空港、アークライト、セントラルシティ駅、ディケンズ空港で、同時に爆発事件が起こりました。これにより、ギルダンダイオとアークライトでは合わせて13の大手銀行本社が半壊したほか、証券取引も4時間52分に渡って停止しました。また、レオンカバロ空港とディケンズ空港は共に管制塔が半壊、今日も全便欠航したままです。また、セントラルシティ駅も北側が半壊してしまったため、輻射線は全線運行見合



わせとなっています。現在確認されている死傷者数は、両国合わせて3159人です」

会議室にいるのは7人。全員がペーターの話に耳を傾けている。

「ギルダングダイオとアークライトは現在、残った施設やそれぞれの国のネットワーク等により、本来の機能を補っていますが、交通機関の方はまだ回復の目処が立っていません。また、両国とも現在、国土全体で軍が厳戒態勢を取っています。港湾でも、出入港の際必ず、乗客・貨物などすべて検査を受けることになっています」

ペーターの話は続く。彼の声以外には、物音1つしない。

「さて、そのような中、12日18:00に何者かから青玉島の王宮宛にメールで脅迫状が届きました」

ペーターはそう言うと、床に手をかざして巨大な電子板を引き出し、少しマウスを弄った。すると、彼の背後に用意されていたスクリーンにその脅迫メールが表示される。

「これ以上爆破事件を起こされたくなければ、我々の指示に従え。さもなくば、またMB-356を爆発させる」

ペーターがゆっくりと読み上げた。いつも通りの穏やかな口調で、ただそのまま読み上げただけなのだが、どういうわけか静かな凄味を持っている。

「本日の会談の目的は、以上の動きに対して、我々2国がどう対応していくか、その方針を決めることです。そのために挙げられる論点にはこのようなものが考えられますが、ルチアーノ王子、いかがでしょう？」

ペーターはそう言いながら再びマウスを操作した。すると今度は電子板に、

- 5つの爆破事件は同一犯による犯行なのか。
- これらの事件と脅迫メールには関連性があるのか。
- 紅玉高原及び青玉島の方針
- 紅玉高原及び青玉島は対外的にどのような態度を示すのか

という文字が現れる。

「はい。これで十分だと思います」

ルチアーノが答えた。

「ありがとうございます。では、早速本論に入りましょう」

“5つの爆破事件は同一犯による犯行なのか”という問題については、ほぼ一瞬で片付いた。まったく同時に発生したことで、使われた爆弾の種類、量などが完全に一致していることから、すべて同一犯によるものだと考えられる。そして、この“考えられる”が“断言できる”に変わるのは犯人を捕まえるまでありえないから、とりあえずこう結論しておくしかない。

“これらの事件と脅迫メールには関連性があるのか”という点についても、Yesという結論が出た。もちろん“この爆破事件に乗じた、単なる悪質な悪戯にすぎないのではないか”という意見もあったのだが、サファイアたち ※68 曰く、どう頑張っても送信主のパソコンを特定できないのだそうだ。夢幻界ではネットワークに国が積極的に介入しているので、実界に比べてネットワーク

の調査はやりやすいはずであるにもかかわらず、そのような監視をすべて跳ねのけているとなると、パソコンにおいて“一般人”であるとは考えられない。何より決め手となったのは、“MB-356”と爆弾の種類を言い当てていることである。たしかに、5ヶ所ともMB-356だったのだ。爆弾が何だったかなど公表していなかったから、部外者なら知らないはずである。

“紅玉高原及び青玉島の方針”——これも一瞬で片付いた。こんな脅迫に、従うわけにはいかない。この一言に尽きる。

問題は、最後の“紅玉高原及び青玉島は対外的にどのような態度を示すのか”という点についてだった。考えなしに“そんな脅迫には応じない”と言うのでは、同じようなテロ行為を繰り返されるのがオチだ。そんなことになったら、今度は“王宮は何やっているんだ?!”と国内外のバッシングを受ける羽目になる。

「平たく言えば、向こうを怒らせないようにするか、手も足も出ないようにしておくか、そのどちらかですよね」

ピュアが言った。

「って言ったって、実質選択肢は1つしかないでしょう」

ルチアーノが考えながらゆっくりと言う。

「そりゃ、代わりの何かを与えれば満足しちゃうような奴らだったらどうにかなるかもしれませんが、そんなことしたら皆に“テロするといいいことありますよ”って宣伝するようなものじゃないですか。ってことはどう考えたって、厳しい態度を取りつつ相手がまた何かやろうとしてくるのを阻止するしかないでしょう」

ルチアーノが主張すると、ピュアもすぐに

「そうですね」

と頷いた。

「とりあえず今は、紅玉高原でも青玉島でも国土のいたるところに警察か軍を置いて、有事の際にはすぐ動けるようにしていますけど...警察とか軍と違って、向こうにしてみればすっごく見やすい組織なんですよ...」

ピュアが言うと、ルチアーノも

「確かに...」

と言いながら、腕を固く組み直す。

「こっちには向こうがまったく見えませんもんね。ちょうどまるで、透明人間と対峙しているみたい...」

この議論はしばらく続いた。堂々巡りしたり、“どうしようか...”と言って固まったり.....そんなこんなで10分ぐらい考える。

その結果、ようやく1つの方針が見えてきた。こちらも向こう同様、向こうから見えない組織を作るというのだ。“組織”と言っても、軍や警察のような大きな組織にするつもりはない。組織が大きくなるとどうしたって動きが鈍くなってしまおうし、向こうにも読まれやすくなってしまおう。そ

れより、小さくて敏捷性の高い組織の方が良い。

「少人数の精鋭部隊を作って、奴らの動きを掴み次第妨害する、的な感じですよね...」

ルチアーノが言うと、ピュアは

「少人数...数人程度？」

と尋ねる。

「そうそう」

ルチアーノが頷いた。

「数人で大人数の敵を止めるには、ひとりひとりの力がめっちゃめっちゃ強くないといけませんから...」

さらにルチアーノが続けると、そこで何かを察したらしいペーターが、

「...え...まさか...」

と口を挟んだ。今まで淡々と司会進行をしていた彼が、意思を持った反応を示したのはこれが初めてだ。

「クリアシャイン」

ピュアが唐突に呼び掛けた。すると、ピュアの正面と斜め後ろから同時に

「はい」

という返事がする。

「...そうだったわね...」

ピュアは“そうだったわね”という言葉に“面倒だわ”という思いをちらつかせつつも、

「サファイア・クリアシャイン、できるわね？」

と問い直した。

「...はい」

サファイアには、こう答えるしか選択肢がない。

「キュアラーは？」

「お任せください」

ジャックも即答だ。

「あんたら...」

「かしこまりました」

ディックとルビーにいたっては、ルチアーノが言い終わる前に答える。

別にやりたくて仕方がないなどというわけでもないのだが、何を聞かれるかは分かっているし、どのみちこう答えるしかないのだ。

「じゃあまず、脅迫には応じないということを表明しましょう。そして、それと同時にテロ対策として極秘精鋭部隊を作ったと.....ん...発表するより、噂とかを流した方が効果的かしら？」

ピュアの言葉に、ルチアーノも

「ああああ...確かに...」

と賛同する。

「そしたら、そういう情報処理をしたら、あとは相手が何か不審な動きを見せるまで、とりあえ

ず待機ということにしましょう。待機場所としては――その都度紅玉高原に帰った方がいいなら強要はしませんが――よろしければ、青玉島王宮にこのまま滞在してはいかがでしょう？すぐに動ける専用チームを作ったなんて言いふらしておいて、いざとなった時にすぐ動けなかったら、奴らにも、他の国にも、自分たちの国民にも、ただのほら吹きだと思われちゃうでしょう？」

ピュアがポンポン話をまとめた。

この作戦は、“見えない精鋭部隊”という存在を作り、それに警戒させることで、向こうを慎重にさせるというものである。つまり、その精鋭部隊が大したことないと舐められてしまったら、一切の効果を失ってしまうのだ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらいます」

ルチアーノはそう言うと、笑顔を見せる。

「...それでは、他に何かありますか？」

ペーターが、会談終了直前の発言をした。ところが、ルチアーノは慌てて

「あ、はい、あります!!」

と手を挙げる。

「...何よ？」

ピュアが腕組みしながら聞くと、ルチアーノは

「あの、チーム名って、どうしましょう？兄が、どうしても“コランダム”がいいって言い張っております...」 ※69

などと言いだした。

「構わないわよ、“コランダム”でも“コロンブス” ※70 でも“コペルニクス” ※71 でも...」

それに対し、ピュアは呆れたような調子で冷やかに答える。

「そう？よかったあ...ありがとうございます...」

そうお礼を言いながら、ルチアーノも苦笑していた。あくまでも兄の意見なのだろう。

「...他に何かありますか？」

ほっとした様子のルチアーノにペーターが再度尋ねると、今度はピュアもルチアーノも首を横に振った。

「それでは、以上をもちまして、会談終了とさせていただきます」

※67...ちなみに、夢幻界における国家間の会談では、アメリカ英語を使うことになっている。イタリア語から派生した紅玉伊語を話す紅玉高原にとってはもちろん、青玉英語を話す青玉島にとっても一応外国語だ。

※68...科学部の中にパソコン専門の班はないが、魔法班・数学班・物理班には、PC国家資格を持つ者が2人ずついる。

※69...コランダム”とは酸化アルミニウムから成る鉱物で、六方晶系に属し、六角板状または柱状をしていて、ガラス状光沢がある。ペグマタイト・接触変成岩などから産出。この鉱物のうち、青色のものを“サファイア”、赤色のものを“ルビー”と呼ぶ。平たく言えば、“サファイア”や“ルビー”はコランダムの一種なのだ。

※70...言うまでもなく、1492年にアメリカ大陸を発見したイタリア人探検家。音が似ているから引き合いに出されただけである。

※71...地動説を唱えたポーランドの天文学者兼聖職者。彼に至っては、どうしてピュアが引き合いに出してきたのかもよく分からない。

会談が終わったあと、ピュアはサファイアとジャックに“今日はもう自室に戻ってよい”と言い渡した。彼女自身が、ルチアーノと話しておきたかったのである。そのため、まだ15:30であるにもかかわらず、サファイアたちは自室に戻ってきた。

「あーびっくりしたあ...」

開口一番、サファイアがソファに腰掛けながら言った。

「何がですか？」

精鋭部隊結成という展開にだろうか？それとも、ルビーさんについて何かサファイアの予想と大きく違う点があったのだろうか？

そう思いながら尋ねるジャックは、“びっくりしたあ...”と発言したサファイアよりももっとびっくりしているのだが、そんな様子は微塵も見られない。

「ほら、ソルジャーさんっていらしたでしょ？あの人ね、ちょっと前までディマイアの社長さんだったんだよ」

サファイアはジャックが思いもしなかったことを言った。

「え...？」

その言葉に、ジャックは思わずサファイアの方を振り向く。

...ディックが...？

ディマイアといえはまず夢幻界では絶対的権威を誇る報道組織だし、その名は実界にも一夢幻界の存在を知る人たちには一轟いている。中立かつ正確な情報を適切に流すことで、2つの世界の信用を勝ち得た報道組織だ。

しかしその経営陣については、設立当時(1108年)からずっと謎に包まれていた。特に社長の正体は、常に夢幻界のミステリーとなっていたのだ。

その正体が...まさか...

しかし、ジャックが反応した理由はこれだけではない。むしろ...

「ジャックに初めて会った日の何日か前、私、ディマイアに行ってたんだ。その前日に、私が女王様の側近やってるってことを記事にされちゃって、抗議しに行ったの。ディマイアは発信する情報はすべて社長自らがチェックしてるって話だから、“なんで王宮の人事に口出しするんだ!!”ってね。あ、あと、ジャックを捜しに行ったってのもあったんだよ、“青の薬商人について何か知りませんか？”って...」

...そう、まさにその記事だ。あれがなかったら僕はここにいなかった。あれがなかったら僕はおそらく、永遠にサファイアに会えなかっただろう。

あれがなかったら...

「...行って、どうなったのです？」

ジャックが尋ねると、サファイアは苦笑しながら首を傾げた。

「ん...なんかね、じゃっくんについてはもうすぐ彼の方から一つまりじゃっくんの方から、青玉島に来るんじゃないかって言われた。もしかしたら吸血鬼自治区に来るかも、ってことまで言ってたかなあ...あの時、なんか用事あったの？」

そう聞かれてもジャックは答えなかったが、サファイアはそれほど答えを求めていないらしく

、構うことなく話を進める。

「記事については、こっちが切り出そうとした段階であっさり謝られちゃって。何て言ってたかな...“それを記事にすること自体が重要”、とか言ってたかな。別に年齢も呪いもどうでもよかったみたい...うん、あんまりよく分かんなかった」

確かに、サファイアにはよく分からないだろう。しかし、ジャックにはすぐ分かる。

そういうことだったのか...

あの時から、あまりにも都合のよい記事だとは思っていた。名前、職業、居住場所、年齢、吸血鬼自治区へ行くという任務、“新月の呪い”という、僕の捜している“サファイア”と記事の“サファイア・クリアシャイン”を結び付けるキーワード...欲しい情報があまりにも揃いすぎている。おまけに、そもそもあれほど大々的に1面を占めるような内容の記事でもない。どうも不自然だ。ディミシアらしくない—ずっとそう感じてはいた。しかし、そういう話なら合点がいく。ディックは、僕のためにあの記事を載せてくれたんだ。僕が、サファイアと会えるように...僕に、サファイアが青玉島で生まれ変わっていることを知らせるために...

「でも、なんか本当にいい人って感じで、それ以上言えなくて...」

サファイアが肩を竦める。

「ええ...彼は本当にいい人ですよ」

ジャックはゆっくりと言った。

「...知ってるの？」

その言葉に、サファイアがくいと首を傾げる。

「ええ」

ジャックは静かに頷いてから、

「わたしの友人なんです」

と明かした。

「え...ええええええ?!」

予想もしなかった展開に、サファイアが抑え気味のボリュームで叫ぶ。この城の壁は、割と声を通してしまうのだ。

「意外ですか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは

「うん...意外」

と正直に頷いた。

ジャックとソルジャーさんって、完璧に正反対のタイプって感じに見えるんだけど...あ、でも、逆にその方がうまく行くのかなあ...?とりあえず、ソルジャーさんみたいなタイプが2人っていうならまだしも、ジャックみたいなタイプが2人となるとちょっと、苦しすぎるよね...

「...え...じゃあジャックはもう、ソルジャーさんのこと—ディミシアの社長さんだったとか、今紅玉高原の王宮で働いてるとか、知ってたの？」

サファイアが尋ねると、ジャックは

「いいえ」

と言って首を振る。

「今生きているということすら、知りませんでしたから」

サファイアは、数秒間黙ってジャックを見ていた。しかし間もなく、明るい笑みを満面に浮かべると、

「じゃあ本当に奇跡みたいなんだ...よかったね!!」

と言って、ジャックの肩をぽふぽふと祝福するように叩く。

「...ええ...」

ジャックがそう頷くのと、玄関の方でインターホンが押されるのとはほぼ同時だった。

「はい？」

サファイアが応じてみると、モニターに映っているのはソルジャー氏だ。

「あ、ソルジャーです...」

「はい」

ソルジャー氏がそれ以上言う前に、サファイアが玄関へ駆けていく。

「サファイアちゃん、お久しぶりですね...なんか別人みたいですけど」

黒いTシャツとグレーデニムに焦げ茶のボタンシャツという服装に着替えたソルジャー氏が、そう気さくに挨拶してきた。“別人みたい”というのは、前回会ったときのサファイアは少年にしか見えない格好をしていたからだろう。

ええええええ?!3年前に会ったときとかさっきまでとか、すっごく改まった喋り方してたのに...ギャップが...!! ※72

「はい...あの時は本当にお世話になりました」

サファイアはソルジャー氏の口調の違いに驚きながらも、改めてお礼を言った。 ※73

「えっと、あがっても平気...かな?ジャ...あー...キュアラールさんいます?」

「はい」

ソルジャー氏の質問に対し、サファイアは朗らかに頷く。

「大丈夫ですけど...あの...」

答えたついでに、サファイアはルビーのところへ遊びに行っても平気かどうか尋ねようとした。

「私、ルビーさんのところに...」

そこまで言ったのだが、なかなか次の言葉が出てこない。サファイア自身、ルビーに会いに行ってみるべきか否か迷っているのだ。

...うー...やっぱり怖いよ.....やめておいた方が無難、かなあ...?

しかし、そんなサファイアの様子から言いたいことを察したソルジャー氏が

「ルビーだったら、会いに行ったらあげればめっさ喜ぶと思いますよ」

と言ってくれる。

「え?あ...本当ですか?」

サファイアが確認すると彼は

「ええ。絶対喜びます」

と請け合った後、

「あ、だけど...行くときは心の準備をして行った方が...」
という、よく分からないアドバイスをくれた。

※72...そうは言っても、一般人はたいてい話し方をいくつも使い分けているから、別にそこまで驚くこともないと思うのだが...ただ、ディックの場合口調によってその雰囲気もガラッと変わるから、こういうことになるのだろう。

※73...“改めて”というのは、3年前にもサファイアが帰ってきた直後にピュアが感謝の手紙(←珍しく手書き)を出しているからである。

3分後、サファイアはルビーの部屋の前で、ずっと固まっていた。両手で黒猫のぬいぐるみキーホルダーをしっかりと握っている。まるでお守りを握りしめているかのようだ。ここに来てからずっとそうし続け、かれこれ2分30秒が経過している。

...どうしよう...やっぱり緊張するよ...

ずっと会いたいと思っていた妹。でも、だからこそ、拒絶されたら立ち直れない。

...うう...やっぱり、やめておいた方が無難かなあ...回れ右して、えーっと...部屋に戻ると悪いから、研究室かなんかに行っちゃえば、傷ついたりしないで済むんだけど...あーでも、“嫌い”って言われようと“あっち行け”って言われようとも、とにかく接触しておいた方が後悔しないかなあ...っていかどの道、これからこのテロ事件がどうにかなるまで、ずっとお世話になるんだよね...

...こんな調子で、ずっと考えているのだ。

だが以前なら、そもそもサファイアは訪ねようと思いつきもしなかつただろう。嫌われているということに疑いを持たなかつたはずだし、嫌悪の眼を向けられて傷つくぐらいなら、極力関わらないようにすることを選んだはずだ。

しかし今、サファイアはインターホンを押そうとしている。

“あなたが生まれ変わってくるのをずっと心待ちにしていた人も、いると思いますよ”

“あなたがいなくなってしまうたら悲しむ人がいるんです...”

ジャックがどういう意図でそう言ってくれたのか、サファイアは未だによく分からなかつた。普通 ※74 に考えれば、ジャックは優しいから、同情して慰めてくれているということになるだろう。でも...ただそれだけの割には、表情や口調が重かつた気がする...

ジャックはいつも無表情で、淡々としている。この時だってそうだった。しかし、だからこそ、その声や眼に宿る重みが目を引き、相手を捕らえる。

その言葉は同情じゃなくって...?“悲しむ人”って、あなたですか...?

そういう思いが、サファイアの背中を押してここまで来させていた。

もしそうだとしたら、彼はサファイアにとって初めての“例外”だ。もし“例外”などというものが1つでも存在するのであれば、それが2つになる可能性も、皆無ではないかもしれない。

もしかしたら...

そんなことを考えていたその時、サファイアの前に立ちはだかつていた厳格なドアが突然開いた。

「姉ちゃん？」

ちょうど問題となっていた人物が唐突に現れ、呼びかけてきたことにびっくりしたサファイアは、思わず飛び上がるように後ずさってしまう。

「あ、あ...その...こんにちは、サファイア・クリアシャインです」

1歩飛び下がってから、サファイアは反射的にそう口走った。

ああああ...まだ心の準備が出来てないのにいい...!!

すっかりしどろもどろになってしまっているサファイアに、ルビーは

「うん、それはもう聞いた」

と明るく笑う。ルチアーノよりもっと紅玉伊語訛りの強いアメリカ英語だ。

「あ...あ、はい...そう、ですよ...」

そんな指摘に、サファイアがしゅんとして俯いてしまった。

...うう...私のばかあ...!!

「ごめんなさ...ふえっ?!」

謝ろうとしたサファイアの手は、途中で驚きの悲鳴に変わってしまう。ルビーがいきなり、サファイアのことをぎゅっと抱きしめたのだ。背中に何かが当たっているが、それは多分彼女が持っていた紙袋だろう。

「姉ちゃん可愛すぎなんだけど!!さっきまでの落ち着きっぷりはどこ行っちゃったんだよ、もう...」

「え?...あ...あ...」

「今、ちょっと時間ある?ちょうどち、姉ちゃんとか遊びに行こうと思ってたんだけど、せっかくだから...」

ルビーは“ちょっと時間ある?”などと質問してはいるものの、手を掴んで部屋に引きずり込んでいくのだから、実質ほぼ強制だった。

「姉ちゃんチーズ好き?」

ルビーが先程の紙袋から箱を取り出しつつ聞いた。落ち着いてみると、真っ赤なショートヘアにオレンジ色の目をしたルビーは、水色のサロペットの下に目と同じ色のTシャツという、ラフな服装に着替えている。

「あ、はい」

そう答えるサファイアは、まだどぎまぎしているように見えた。膝の上には黒猫のキーホルダーがお行儀よく座っている。

「だったら一緒に食べない?そう思って持ってきたんだけど...」

ルビーの申し出に対し、サファイアは

「あ、じゃあいただきます...すみません、なんか気遣ってもらっちゃって...」

と言いながら会釈をした。キャンディチーズを皿に並べたルビーは、勧められた椅子にちょこんと腰掛けて小さくなっているサファイアを見ると、

「姉ちゃん...」

と苦笑する。

「もともと小さいのに、これ以上ちっちゃくなってどうすんだよ。もっとラクにしなっ」

その言葉に、サファイアは

「...うん...」

と頷きながら少し肩の力を抜いた。サファイアはずっと緊張していたのに、ルビーの方はまるで、生まれたときからずっと一緒に暮らしてきた双子といるかのようだ。

「あ...チーズおいしい...!!」

1口食べたサファイアが、小さな声で呟いた。

「当たり前じゃん!!王宮の厨房で新鮮なの分けてもらったんだからさ」

「……」

当然のように言うルビーに、サファイアはどうコメントしたらよいかと迷ってしまう。青玉島の王宮では、出来るかぎり税金を使わないようにということで、食材もなるべく安いものを買っていた。そのため ※75 か、青玉島では“王宮の食べ物=おいしい”という方程式は成り立たない。

「姉ちゃんに会うの、ずっと楽しみにしてたんだ。ディックがいい子だって言うから...そしたら何だよ、“いい子”とか言うレベルじゃないし!!こんな可愛い子だなんて思わなかったもん!!男の子みたいだなんてもう...あとでしばいとくわ」

本気か冗談か判別しがたい声で言うルビーに、サファイアは

「いやいやいや...しばかないで。確かに私、男の子みたいな格好してたし、他の人にも間違われてたし、ついでに言うところでも可愛くないし...」

と首を振る。するとルビーは

「え、マジで男の子みたいな格好してたの?だったらそれはそれで見てみたいなあ...」

と言ってまた笑った。先程から、笑ってばかりな人だ。

ルビーは手も口も驚くほどよく動く人だった。サファイアはそんなルビーのお喋りに相槌を打ちながら、無意識のうちに黒猫のキーホルダーを指で撫でている。するとそれに気づいたルビーが、

「あれ?その子ってもしかして...」

と言いながら、ポケットをまさぐり始めた。

「...どうしたの?」

サファイアが首を傾げると、ルビーは机の陰になった手元とサファイアの黒猫を見比べ、

「あ、やっぱ...」

と呟く。

「...?」

一層首を傾げてしまったサファイアに、ルビーは

「ジャジャーーンッ!!」

と言って何かを見せびらかしてきた。赤毛に赤褐色の目をした猫のぬいぐるみキーホルダーで、首にオレンジのリボンがついている.....

「え————っ!!色違い?!!」

サファイアが思わず叫んだ。

「そうっ!!今うち、めちゃめちゃびっくりしたもん!!魔法みたいじゃん!!」

ルビーはそう言った後、

「さすがうちら!!超双子!!」

と言いながらわざわざ回り込んできて、サファイアの肩を抱く。

そんな調子で散々騒いだあと、どちらから



ともなくハイタッチする姿は、まるで生まれたときから影と形のように寄り添って育った双子のようだ。

「え、姉ちゃんそれ、どこで買った？」

ルビーが尋ねると、サファイアはおかしそうに笑いながら

「10才の時、セントラルシティ 駅のお土産屋さんで買ったんだ...なんか、じゃっくんが“地元の土産物店で買ってどうするんです？”みたいな眼で見てたけど、気にしない方針だよ」

と答える。実はその店も先日のテロで木っ端微塵になってしまったのだが、2人ともそこにはあえて言及しない。

「じゃっくん？あの綺麗なおにいさんだろ？」

ルビーが確認した。それから、

「あんたら似てるよなあ...うち、会談の間、正面に座ってるあんたら見ながら、“うわっ、兄妹みたい!!しかもめっちゃめっちゃ綺麗!!”とか思ってたもん」
などと言う。

「ええっ?!似てるって、じゃっくんと私が？」

サファイアはそう聞き返してから、

「似てないよ...似てるのは髪の色だけでしょ」

と否定する。その勢いを見ると、謙遜などではなく本気だ。

「似てる似てる!!綺麗な兄さんと、可愛い妹、的な...」

ルビーも大真面目である。

その調子で、話はあっちへ飛び、こっちへ飛びを繰り返した。しかも話している内容は、取り留めのないどうでもよいことばかりだ。しかし、そんな話をしているうちにはすっかり打ち解けてしまう。

「...ねえねえ、ルビー？」

話が一区切りしたとき、サファイアが改めて話し掛けた。

「...ん？」

サファイアの雰囲気が変わったのを見て、ルビーはくいと首を傾げる。

「あのさ...私の呪いのことで、嫌な思いとかしたこと...なかった？」

サファイアはそう、躊躇いがちに聞いた。すると、ルビーは

「あー...」

という声を漏らしながら、右手を首の後ろへ持っていく。



「まあ...確かに、ごっちゃになってる人もいるけど...でも、うちじゃないって言ってから、“姉ちゃんのせいじゃないんだから、黙っとけ”って言ってやると、もう一発だから」

自信満々に、さも当たり前のような口調で言うルビーに、サファイアは「え...」

と呆気に取られてしまった。

「だってそうだろ？別に姉ちゃんが好きで呪いに掛かったわけじゃないんだから、姉ちゃんを苛めたって何にもなんないじゃん」

そう説明するルビーは、どうしてサファイアが呆気にとられているのかがまったく分からないようだ。

「...ま、まあ...そう言ってしまえばそうだけど...」

そう答えるサファイアの声も腑に落ちなさそうである。

確かにルビーの言ってくれてる通りだけど...でも、他人にしてみれば、どんな経緯であれ今自分に危害を加えて来る恐れがあるんだったら同じことなわけで...それなのに、どうしてルビーはそんなふうに言ってくれるのだろう？

サファイアがそう考えていると、ルビーはテーブルに身を乗り出して、やや低めの真剣な声で「姉ちゃん、うちの生い立ちの伝承、聞いたことある？」と尋ねてきた。

「...ん、まあ...さらっとは、1500年ぐらい前に暗黒派の兵器として作られたんだってことと、2人とも1回ずつ生まれ変わるんだってことと...あと、私の方には新月の呪いが掛かってるって...そんな感じ」

サファイアが列挙すると、ルビーは頷きながら

「うん、そう。だけど...」

と言って話し始める。

「だけど、どうして姉ちゃんだけが新月の呪いを持ってるのかって言うと、ほぼ偶然だったみたいなんだ。うちらは、生まれてすぐにそれぞれ反対方向へ逃げ出した。そしたらたまたま、姉ちゃんだけが追われて、捕まってしまった...違うのはたったそれだけなんだよ。もしうちの逃げた方向が逆だったら？そしたら呪われてたのはうちの方じゃん。な？だからうちは、姉ちゃんのことを悪く言う奴は許せないんだよ」

「.....」

ルビーの話に、サファイアは驚いて言葉を失った。無条件に受け入れてくれたジャックとはまた違う。限りなく近い運命、本当に紙一重の運命を持つ者だからこそその言葉...

「...ありがとう」

やがて、サファイアが俯き加減にそう言うと、ルビーは黙ったままニッと笑った。

※74...あくまでもサファイアにとっての“普通”である。世間一般の“普通”で考えれば、絶対にこんな結論は出てこないはずだ。

※75...そのためだということにしておこう。まさか、元になっている国の差だなんて...

「お邪魔しまあす」

サファイアが出ていくのと入れ違いになる形でディックが上がると、すぐにジャックが玄関口まで出て来た。

「よっ、久しぶり」

ディックは片手をあげて挨拶しながら、そう明るく笑う。

「ああ...本当に久しぶりだな」

それに対しジャックが平淡な調子で答えると、ディックは

「うっわ、1500年も経ってんのに相っ変わらずだなもう...」

と苦笑した。

ジャックはそんな言葉を無視してディックを部屋の奥へ通すと、

「紅茶とコーヒー、どっちがいい？」

と尋ねる。2人が最後に会った頃にはまだ紅茶もコーヒーもなかったから、どちらが好きなのか皆目見当つかないのだ。

「あ、じゃあ...じゃあ紅茶で」

ディックはそう言ってから

「わりいな」

と付け加える。

ちなみに、紅玉高原ではエスプレッソコーヒーをよく飲むのに対し、青玉島では紅茶の方がずっと多く飲まれる。某双子の姉妹が意気投合していても性格は全然違うのと同じように、紅玉高原と青玉島は姉妹国であっても文化や国風はまったく異なるのだ。

「...また会える日が来るとは思ってなかったな」

赤い模様の入ったティーカップをディックの前に、ブルーグレーのカップを自分の前に置きながら、ジャックがおもむろに言った。

「確かに...」

ディックは紅茶に口をつけながら相槌を打つと、ニッと笑って

「嬉しい？」

などと聞いてくる。

「ああ」

ジャックはしれっと頷いた。

...ったく...相変わらずだな...

ディックが苦笑する。多分、本当にそう思ってくれているのだろう。しかしそれにもかかわらず、まったくそうは見えない——儀礼的に見えるのだ。

...変わんねえなあ...

「あ、そうだ...お土産買ってきたぜ」

ディックは突然、何か思い出したかのように言うと、派手なオレンジと黒の紙袋を差し出してきた。

「...ありがとう」

ジャックはそう言いながら受け取りはしたものの、はっきりと警戒の色を見せている。ディックの悪戯っぽい笑顔が気になるのだ。

「開けてみろって」

ジャックが言われるままに開けてみると、紙袋から出てきたのはハロウィンで使うカボチャの被り物だった。

「...あー...悪いが、使い方を説明してくれないか？出来ることなら、こういった経緯でこれを選んでくれたのかも、教えてもらえると嬉しいんだが...」

ジャックの目つきが鋭くなるのも、無理はないだろう。

「あのな...前、ルビーに“ジャックって友達がいて...”みたいな話をしたら、“カボチャ？”って聞いてくるんだよ。俺、意味分かんなくて聞き返したら“ジャックってハロウィンのカボチャだろ？ほら...ジャック・オ・ランタン ※76”とか言うもんだからさ...面白くて」

「.....」

笑いを必死に噛み殺して説明する友人に、ジャックはいったいどう答えようかと真剣に迷ってしまう。

「...そう...この時期に入手するのはさぞ大変だっただろうな」

しばらくして、ジャックは冷ややかな声でそう言った。なんせ、今は3月である。そのあとジャックは少し冷たさを緩めた声で、もう1度

「ありがとう」

とお礼を言うと、脇にそっと置いた。

※76...紅玉高原の公用語である紅玉伊語でも、英語の“Jack-o'-lantern”という単語を使っている。イタリア語訳したGiacomo il lanterninoという言い方をする場合もあるが、紅玉高原では“Jack-o'-lantern”の方が一般的らしい。

「おまえ...あれからどうなったんだ？」

ジャックが静かに尋ねた途端、ディックの眼からふっと光が消し飛んだ。

「ははっ...見つかんねえの。アンテナいくら立てても、いくら網を張り巡らせても、完全に消息不明」

ディックはそう答えると肩を竦める。もちろんユリアの話だ。

「...そう...」

“アンテナ”も、“情報網”も、冗談や言い回しなどではない。本当に立て、本当に張り巡らせたのだ。

それだけのことをしても見つからなかったのか...

ジャックとしては複雑な思いだった。友人の1500年にも渡る多大な...本当に多大な努力が報われなかったことは残念でならない。しかしその一方で、ジャックはもともとユリアに復讐するということに反対していたため、これでよかったのではないかという気もする。

「...ディマイアはもともと、そのために設立したのか？」

ジャックの質問に、ディックは頷いてから続けた。

「夢幻界と実界なんて、歩き回って捜せる広さじゃないと思ってさ。だけど、150年、160年と経つうちに、これじゃダメかもって思い始めて...もう1度旅に出ようかとも思ったんだ。だけど...」

ディックはそこで1度言葉を切って、ニッと笑う。

「ちょうどそんな時に、面白い奴の情報が入ってきてね。“青の薬商人”って奴が、ぶっ飛んだ安さで薬を調合してるって...これが気になっちゃったわけですよ」

...!!ということは...

ユリアを捜すために設立したディマイア。だが、成果をあげられそうにないと気づいても、なおそこに居続けたのは...

...僕のために...？

ディマイアが設立されたのは1108年。それから160年後というと1268年——今から738年前のことだ。

「...ありがとう」

ジャックはそう言って立ち上がると、自分の机から灰色っぽい紙を取り出した。

2003年7月3日

『青玉島女王の側近、最年少記録を塗り替える!!』

「これ...書かせたのおまえだろう？」

ジャックが確認すると、ディックは黙って頷く。

こんな記事を書いたところで、社会的価値はあまりない。ディマイアにしてみれば、何1つ得にはならない。現に、この記事を書いた翌日には、もう早速青玉島からクレームが来ているのだ。

「...これがなかったら、僕は間違いなくここにいなかったよ。ずっと...ずっと旅し続けていたはずだ...本当に、ありがとう...」

ジャックはまっすぐにディックの眼を見て言った。限りなく透き通った青い光と、赤褐色の眼に宿る夕焼けのような光が綺麗に重なり合う。

しばらくそれが続いた後、やがて、ディックがふいと目を逸らせた。

「...ば一か。おまえのためじゃねえよ」

ディックは紅茶を飲みながら、斜め下に目をやってぼそぼそと言う。

「そんな、慈善事業みたいなことをして歩いてる奴が誰なのか、知りたかったんだよ。それに...」

そこまで言うと、ディックは逸らせた視線を再び合わせ、ふっと笑った。

「...あいつを捜す以外の、他のことをしたかったんだ...」

ジャックはまだ知らないのだが、ディックはこの復讐の旅のために、非常に多くのものを失っていた。

ルビーと旅する間、自分が手を伸ばしさえすれば手に入れられると、ずっと思っていた幸せ。ルビーの想いに頷いて、青玉島に行けば.....ジャックとサファイアのすぐ側で、ルビーと一緒に暮らしたら、どれほど幸せだっただろう？

しかし、再び青玉島に来たときには、何もかもなくなっていた。サファイアは死に、ジャックはどこかへ行ってしまい、そして...そして、ルビーは...

“1273年、青の薬商人、青玉島にて目撃される”

ディックにとってこの情報は、まさに福音だった。この“青の薬商人”という人物が、ジャックに思えてならない。天才的な腕の薬剤師。黒髪の若い青年——ジャックの暗い濃紺の髪は、ブルブラック——つまり広義の黒髪とすることもできるだろう。何より、破格の安値で薬を売ることが出来るのは、食べていくのにお金がかからないからだ。薬草は野生のもの ※77 ならタダだし、食費がかからなければ、お金は服や身の回りの小物などの分以外必要ない。そんな真似が出来るのは吸血鬼ぐらいだ。

そう思った時、ディックは初めて気がついた。ディマイアには、もう1つ可能性がある。復讐だけではなく、1度失った大切なものを取り返すという、可能性が...

「...俺が、おまえらに会いたかったんだよ」

いつのまにか2つのティーカップは空になり、2杯目の紅茶が注がれた。

「...で、おまえら今どうなってんの？」

その湯気の向こうから、ディックがニヨニヨしながら尋ねる。

「...何のことだ？」

ジャックは聞き返したが、その問いの意味は分かっていた。そして案の定、ディックは

「サファイアちゃんとのことだよ。どうなってるんだ？」

と言いながら、実に楽しそうに笑っている。

「.....」

ジャックは答えに詰まった。せつかく700年以上も協力してくれたのに...生憎、非常に言いにくい答えしか持ち合わせていない。しかし、結局話すことにした。700年以上も協力してくれたのだ

。黙っているわけにはいくまい…。

「サファイアは女王様から御尊命を賜っていてね、恋愛禁止令だそうだ」

ジャックがそう答えると、ちょうど紅茶を飲み込もうとしていたディックは、まさかの答えを聞いてむせてしまった。

「…え…れんっ…あ…」

「おまえ…大丈夫か？」

ジャックはテーブルを回り込んでディックの後ろに行くと、背をさすってやる。

「……う…あ、ありがと…」

ようやく快復したディックが顔を上げた。まだ涙目になったままだ。

「え…何、恋愛禁止令？」

「ああ」

ジャックが再び自分の座っていたところへ戻りながら頷くと、ディックは低い声で

「へーえ…そりゃ愉快的な話じゃないか…」

と言った後、

「今、女王様のところへ殴り込みに行ってもいい？」

などと聞いてきた。もちろん本気ではないのだろうが、眼がいやに据わっている。

「…いや、気持ちだけで十分だ」

ジャックが答えると、ディックは

「だってさ、ありえなくね？」

と憤慨し始めた。

「何でそんなことにいちいち口出すんだよ!!余計なお世話じゃね？」

ジャックはそう息巻くディックに

「…ディック、ここ意外と声漏れるから…」

と言って宥めたあと、

「将来の仕事に支障が出るそうだ」

と説明する。

「将来の仕事って？」

ディックの問いに、ジャックは肩を竦めて

「知らない。僕もサファイアに聞いたんだが、彼女自身も知らなかった」

と答えた。

「でも、おまえ…それじゃ…」



ディックがそう呟くと、ジャックは黙って目を伏せる。再び出会えただけで奇跡なのに、それ以上望むなど贅沢だ――そう思ってみても、やはり愛おしくて堪らない想いは誤魔化せない。しかしその一方で、何故愛おしいのか――この愛おしさは何の感情なのかと言われると、もはや単なる恋愛感情とは言い切れなくなっている。

ジャックは、自分の中のそんな想いに蓋をするがごとく、目を伏せていた。

※77...魔法薬品はたいてい野生で手に入る薬草を材料としているのだ。

しばらく話していると、玄関の方から

「ただいまあ♪」

というサファイアの明るい声が聞こえてきた。

「お邪魔しまーす」

そのあとに、ルビーの声が続く。

パタパタとリビングに来たサファイアは、ディックとジャックの様子を見ると、ピタッと立ち止って

「あ、すみません...お邪魔しちゃいましたか？」

と尋ねた。

「いえ、問題ありませんよ」

ジャックが淡々とした声で答える。

「なあなあ、ちょっとこれ見てよ!!」

ジャックたちの様子などまったく気にする様子もないルビーに、ディックは

「いやいやいや...おまえはちょっと遠慮しろって」

と突っ込んだ。

「じゃーん♪」

そんなディックの突っ込みを無視して、姉妹は2人同時に何かを取り出して見せてくる。例の、色違いの猫のぬいぐるみキーホルダーだ。

「...え、それ...色違い...？」

2人のキーホルダーを見比べ、驚きの色を隠さないディックに、サファイアが

「それぞれ別々の場所でまったく別の時に買ったのに、色違いになってたんです」

と説明する。

「ほら、これぞ双子のミラクル!!」

ルビーが何故か得意げに言うと、ジャックが

「仲が良さそうで喜ばしい限りですね」

とコメントした。ジャックの絶望的に仲が悪い姉弟関係を知っているのはディックだけだ。

「...あれ?じゃっくん、それなあに？」

ジャックの隣に何かオレンジ色の物体が置かれていることに気づいたサファイアが、くいっと首を傾げて尋ねる。

「ああ、それはディックからの...」

ジャックが答えている途中で、サファイアはそのジャック・オ・ランタンの被り物を、頭に被ってしまった。おかげで、“お土産です”と続くはずだったジャックの言葉は、きれいに消し飛んでしまう。

「...ね...姉ちゃん、可愛すぎだよお!!」

そう叫びながら、ルビーがジャック・オ・



ランタン・サファイアをぎゅっと抱きしめた。
。

「ふえっ?!」

抱きしめられてびっくりしているサファイア
の後ろで、ディックは爆笑して窒息しそ
うになっている。

ジャックは腕組みしながらそんな部屋を見
回して、本当に小さく溜め息をついた。

先程ジャックが言っていたように、この王
宮の壁はどうも声を通しやすい。

「...隣の部屋がやたらと賑やかな気がするん
だけど、平気かしら...？」

4人が(というよりクリアシャイン姉妹が ※78)騒いでいた部屋の隣にある女王の間では、ピュ
アが椅子の肘置きを指でイライラと叩きながら、この先を案じている。なんせ、その4人が精鋭部
隊なのだ。

「平気だと思うよ」

話をしに来ていたルチアーノが笑いながら答えた。彼はオレンジに近い赤茶色の髪で、ロゴ入
りの白いTシャツの上から赤地にチェックのボタンシャツを羽織り、ライトブルーのジーンズを
はいている。もう私服に着替えたのだ。

「だって、俺たちのとこなんて、365日こんな感じだもん」



※78...ディックは笑い過ぎて声が出なくなっているため、結果的に静かなのだ。

「...さっきの話はいつから考えてたんだい？」

ルチアーノが自室に戻った途端、ペーターがピュアに尋ねた。

「何の話？」

ピュアがとぼけると、ペーターは穏やかだが真剣な声で

「精鋭部隊の話だよ」

と答え、さらに

「もう今日始まる前の段階で、ほとんど決めてたんでしょ？」

と問い質した。

「...まあ...」

仕方なしにピュアが頷く。心持ち後ろめたそうだ。確かに、精鋭部隊コランダムの話は先程の会談で初めて出てきたわけではなかった。それだけではない。先程の会談の内容は、ほとんど予めメールで話し合っていた。そうでなければ、あんなにとんとん拍子で話が進むはずがないのだ。

「先に本人たちの意向を確かめておかなくてよかったのかい？」

ペーターにそう言われると、ピュアはきまり悪そうにそっぽを向いてしまう。

「分かってるわよ...先に言っておいた方がよかったに決まってる。でも...でも、“嫌だ”って言われたって、“命令よ!!”って言ってやらせるほかないし...」

まだ“指示”なるものは出されていないが、奴らの言う“指示に従う”とはすなわち、青玉島王宮がずっとテロ組織に従うということなのだろう。当たり前だが、そんなこと認められるはずがない。しかし、だからといってこれ以上の犠牲も払えない。そう考えると、軍や警察などとは違う、もっと目立たずに素早く動ける組織が欲しい。出来る限り小さな動きで、相手の動きを止め、敵を潰さなければならない。何十人もの敵を数人で――最悪の場合1人で倒さなければならない。そんなことができる部隊を作るには、強大な魔力とずば抜けた戦闘力を持つ彼らが必要不可欠なのだ。

だが、それゆえ命を落とす危険性がありすぎるのは言うまでもない。だからこそ、事前に話しておくべきだったのだが...

彼ら以外にできる人などいない。代わりがないのだから、誰が何と言おうとも、彼らにやってもらおうほかない。

「...どの道選択肢なんて用意していないのに、言い出せないじゃない...」

ピュアは独り言のように呟くと、無意識に唇を噛んでいた。

一方その頃、紅玉組はルチアーノの部屋に3人とも集まっていた。何故というわけではない。成り行きである。

「...あのさあ、どうしてあの子嬉しそうなの？」

ルチアーノはルビーを指差しながら、ディックにこっそりと尋ねた。しかし、ディックが答える前に本人が

「だって、これからずっと姉ちゃんと一緒にいられるんだよ!!幸せじゃん!!」

と答える。

「ちょ...おまえ...」

ディックが呆れたように口を挟んだ。ルチアーノも何だか不安になってきて、
「おまえなあ...押し付けといて俺が言うのもなんだけど、おまえ、自分の仕事分かってる？」
と確認する。

「分かってるよ、そんなこと」

それに対し、ルビーはそう言いながら口を尖らせた。そして、
「にしても青玉島の女王様、あれ絶対姉ちゃんたちに言ってなかっただろ...ってか、あんな可愛い子を戦いに行かせるなんてありえないっ!!」
と憤慨し始める。

「...あー...それはつまり、何が言いたいわけ？」

自らもルビーやディックに話していなかったルチアーノは、自分への遠回しな批判かと思って頬を引き攣らせた。

「いや、深読みせずに言葉通り受け取れば問題ないと思いますよ...単にお姉ちゃん大好きなだけですから」

それを見て言ったディックに、ルチアーノが

「ごめんね、前以て言わなくて...」

と謝る。

「あ、うちには何も言わないんだ？うちだって姉ちゃんには足元にも及ばないけど、一応女の子なんだぞ!!」

ルビーがすかさず口を挟んできた。

「あー...喜んどうのように見えたから...」

ルチアーノはわざと驚いたような顔をする。しかしその後、ルビーにもきちんと

「ごめんね」

と謝った。

同じ頃、サファイアは黄色のキャンディボールを持って上機嫌に鼻歌を歌っていた。キャンディボールなどどこで手に入れてきたのか分からないが、彼女はそれに先程のカボチャの被り物を被らせると、ソファの端に慎重な手つきで置く。微調整を重ねているところからすると、置く角度にもこだわりがあるらしい。

...何をやっているんだか...

ジャックはそんな彼女を呆れた眼で見遣った。しかしそれと同時に、ふと違和感を覚えもする。

会った頃に比べて、振る舞いが幼くなってないか...？

確かに出会った当初も、花畑の中をひとりで駆け回ったり、ケーキに大はしゃぎしたりなど、子供っぽい振る舞いを見せてはいた。しかし全体的には、もっと大人びた言動が多かったような気がする。

...まあ、無理して不自然に大人びているよりは、多少幼くても自然にしている方がいいのかもしれないが.....必要なときには大人顔負けの立ち振る舞いができるわけだし...

「...ねえねえじゃっくん？」

そんなことを考えているジャックに、サファイアがふと話しかけてきた。カボチャは満足のいく位置に収まったらしい。

「じゃっくんは、戦ったことって...ある？」

子供らしい仕草で首を傾げてくるが、彼女が何を思って聞いてきているのかは、いまいち掴めない。

「...ええ、ありますよ」

ジャックは静かに答えた。

ジャックが旅を始めた当初はまだ鉛の森を通るだけで敵に襲われるような感じだった。やがて仲間内の戦いによって吸血鬼が減ってくると、今度は魔法族暗黒派のヒトがつけ狙って来る。そして、吸血鬼狩りが始まれば...そんな状況では、戦いを避けようとしても、避け切ることなど出来ない。

「そっかあ...」

サファイアが呟くと、今度はジャックが

「...サファイア、よかったのですか？」

と尋ねる。

「...精鋭部隊のこと？」

サファイアが聞き返したのに対し、ジャックは黙って頷いた。するとサファイアは小さく笑いながら、顔を少し俯き加減にする。

「怖いけど...しょうがないよ。こういうことのためにずっと戦闘訓練受けてきたわけだし...私なんか本当に税金で養ってもらってる感じなんだから、たまにはお仕事しないと...」

サファイアは最後の部分で顔を上げると、明るい笑顔を見せた。

「.....」

ジャックは何とも答えない。サファイアの言い方はまたちょっと言い過ぎだが、そういう節がまったくないと言えは嘘になる。でも...

「...個人的なことを言うと、あなたにはあまり戦いなどしてほしくないのですが...」

ジャックは、やや低めの声で呟くように言った。腕を組み、サファイアから少し視線を逸らせている。

そんなジャックの言葉に、サファイアは驚いたように目を見開いた。一瞬、自分のことを心配してくれているのかと思ったのだ。ところがサファイアは、すぐに考え直すと、 ※79

「あははっ...うん、みんなの足を引っ張らないように頑張るよ」

と言ってまた笑った。

2006年3月16日

青玉島は一連の事件がテロである可能性が高いという声明を出した上で、いかなることがあってもテロ組織に屈服することはないと表明した。さらに、紅玉高原と手を組んで精鋭部隊を作ったという噂を、情報処理局を使って海外中心にばらまく。

青玉島内外構わず、各メディアはこのニュースを大きく扱った。週刊誌などは、ただの噂でしかない精鋭部隊のことも拾ってきている。また、先日のテロについては“夢幻界5大要所同時爆破テロ”という呼び方が定着したようだ。そんな中、最も慎重な報道をしているのはディマイアだ。常に冷静な態度で確実な情報を流すのがディマイアである。

しかし、テロ組織の方は不気味なほどおとなしかった。脅迫メールに書かれていた“指示”とやらもまったく出してこない。だが、あれだけ大きな破壊行為をしたのだから、まさか“冗談だった”とか“気が変わった”などということはないだろう。何か企みがあるのかもしれないが、精鋭部隊の噂を聞いて慎重になっているのだと考えたいところだ。

そんな日の午後、ピュアはまた例によって肘置きを指でカチカチ叩きながら、
「...ちょっとあんたたち、何でここにいるわけ...？」
と女王の間全体に尋ねた。声から判断すると、彼女のイライラ度はMAXだ。

「だって...部屋に独りでいても暇だし...」

“あんたたち”の代表、ルチアーノがケロッと答える。

ここ青玉島女王の間には、今7人集まっていた。ピュア、ペーター、サファイア、ジャックに加えて、ルチアーノ、ディック、ルビーも来ているのだ。

普段通り通信教育の教材に取り組みながら、ところどころ分からないことをジャックに尋ねるサファイア。新しく発表された論文に目を通しながら、時折サファイアに聞かれたことを丁寧に教えているジャック。もう義務教育 ※80 を終えているはずなのに“訳分かんない”などと言って、サファイアに質問しているルビー。

ジャックはわざと、ルビーの質問には答えないことにしている。サファイアに答えさせると、サファイア自身の理解度を確かめるのにちょうどいいのだ。

地歴公民科の話なら、ディックも口を挟んでくる。

ただ、紅玉の2人は勉強だけしているわけではなかった。関係ないことを話し始めたり、ケンカし始めたりすることもある。おかげで女王の間は、非常に賑やかだ。

「あのねえ、ここは国政の場であって子供部屋じゃあ...」

一層イライラするピュアに、ルチアーノが

「なあなあピュアちゃん？ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

と話しかけた。ピュアとペーターがいつも通りに青玉島の政治を行っている ※81 ので、あぶれたルチアーノは暇を持て余しているのだ。

「んもう...何なのよ、手短かにね」

仕方なくピュアが応じると、ルチアーノはサファイアたちを指差しながら

「あそこの4人って、兄妹みたいに見えない？」

などと言い出す。

ピュアは改めてコランダム4人を見てみた。そしてその結果、

「見える」

と答える。それを聞くと、共感を得られたルチアーノは嬉しそうに

「だよな!!」

と言った後、

「でな、今俺、その順番を考えてたんだけど...」

と続けた。

「あんたねえ、もうちょっと有益なことを考えなさいよ!!」

すかさずピュアが突っ込んでも、ルチアーノはどこ吹く風だ。

「ジャックさんとディックが上2人で、サファイアちゃんとルビーが妹なのは確定なんだけど、ジャックさんとディック、サファイアちゃんとルビーの中は、それぞれどっちが上なんだと思う？」

ルチアーノがそう聞いてくるので、ピュアは仕方がないという様子で

「クリアシャインは双子なんだからそれでいいじゃない」

と答える。するとルチアーノは

「ええー？でも明らかサファイアちゃんの方がしっかりしてるじゃん」

と抗議した。ところがピュアがその抗議を受けて

「ならサファイア、ルビーでいいんじゃないの？」

と訂正しても、ルチアーノは

「んー...でも、それもイマイチじっくり来ないしなあ...」

などと言って首を傾げる。

「...だったらやっぱり双子でいいわよ。1番無難でしょ」

あれこれ迷っているルチアーノを、ピュアがさっさと片付けた。

「んまあ...じゃあとりあえずそうしておくとして...お兄さん2人は？」

ルチアーノが妥協し、話を先に進める。

「キュアラー、ソルジャーでしょ」

ピュアが即答すると、ルチアーノはまた

「ええー？」

と抗議の声を上げた。

「もう何なのよっ!!だったらひとりで...」

「なあなあサファイアちゃん、どっちだと思う？」

憤慨するピュアを他所に、ルチアーノはサファイアたちまで巻き込んでいく。

「ディック、ジャックだと思いますが」

いきなりにもかかわらず、サファイアは即答した。どうも、今までの会話を聞いていたらしい

。

「へ？何が？」

今までの話を聞いていなかったディックが、自分の名前がいきなり出てきたことに驚いて聞き返す。

「あんたたち4人兄妹の順番だって」

ピュアが“ばかばかしい”という思いを言外に込めながら言うと、ディックとルビーは途端に「いやいやいや...何兄妹設定作ってるんですかっ!!」

「うちこんなん ※82 と兄妹になるの嫌だっ!!姉ちゃんだけでいいもん!!」
と言って抗議し始めた。

「いや、絶対ディックジャックの順ですよ!!」

それに比べ、サファイアはすっかり面白がっている。

「やっぱそうだよな?」

サファイアの言葉に喜んでるのはルチアーノだ。

「だってディックって、明らかにお兄ちゃんタイプじゃないですか!!大らかで陽気なディックが1番上で、真面目でしっかりしているジャックが2番目...みたいな感じですよ?」

「ちょっとクリ ※83 ...サファイア・クリアシャイン、いらっしやい...」

大盛り上がりの中、ピュアが突然低い声でそう言って呼び出した。

「はい、何でひょふ...?!」

やってきたサファイアの両頬を、ピュアが摘んでみいいいと伸ばす。

「あんた、私に逆らう気なわけえ...?」

「ふお...ふおふえんふあふあいい...」

頬をみいいいと伸ばされているサファイアは上手く喋ることが出来ない。ちなみに今言おうとしたのは“ごめんなさい”だ。

「何姉ちゃんのこと苛めてんだよ!!」

すかさずルビーが止めに入ると、ピュアも負けじと

「何よあんた、口答え禁止よっ!!」

と言い返し、ケンカが始まってしまった。そんなピュアとルビーを見ながら、ルチアーノがふと思いついたように

「むしろ...兄妹じゃなくて4人家族設定作る?」

などと言い始める。

「家族設定、ですか?」

サファイアが面白そうに聞いた。するとルチアーノは、

「そうそう。例えば、ディックがお父さんでジャックさんがお母...」

などと勝手なことを言い出す。

「ちょっ...やめて下さいってばっ!!」

ディックは慌てて立ち上がり、そう叫んだ。サファイアと違って、家族設定や兄妹設定は受け入れ難いようだ。

...いちいち剥きにならなければいいのに...

論文を読みながらもこの騒ぎを聞いているジャックは、呆れながら心の中でそう呟く。そん

なジャックに、ペーターがにこにこしながら

「仲良しでなによりだよ」

と話しかけてきた。

※80...紅玉高原の義務教育も青玉島同様16才までの8年間だが、紅玉はその8年間で読み書き四則計算の練習も行う。

※81...至極当然である。

※82...ディックとジャックのこと。

※83...“クリアシャイン”と呼ぼうとして、“ルビー・クリアシャイン”もいることに気付き、言い直した。

それから2ヶ月ほど経過し、もうすっかり暖かくなって春と初夏の間ぐらいの季節になってきた。外を歩くと、驚くほど鮮やかな緑色をした葉が印象に残る。

2006年5月20日

この日は雨降りだったが、女王の間の中はいつも通り賑やかだった——賑やかではあったのだが...

「あんたいい加減にしろっ!!」

「いったあ!!何すんだよ!!」

いきなり頭を叩かれて驚いたディックは、叩いてきた人物——ルビーの方を振り返った。しかしルビーは、

「“何すんだよ”じゃないだろ!!ボサーッとしてる方が悪いんじゃない。うち、何回呼んだと思う?このアンポンタン!!」

と言い返してくる。何回も話しかけられていたようだ。

「え?あ、ごめん...」

どうやら自分の方に非があるらしいので、ディックは仕方なくそう謝っておいた。

その日の夜、サファイアがルビーの部屋へ遊びに行っているのをいいことに、ディックはジャックたちの部屋に来ていた。サファイアとルビーは2~3日に1回ぐらいお互いの部屋を行き来しているのだが、ディックとジャックはさすがに、普段あまりそういうことはしていない。

「...どうでもいいんだけどさ、昼間叩かれたの地味に痛いんだけど...」

ディックは後頭部あたりを何となくさすりながらぼやいた。するとすぐに、ジャックが

「...そういうことは早く言え」

と言いながら打ち身薬を出してくれる。

「え?」

ディックは驚いたような顔で出された薬を見つめた。別に、薬を貰おうというつもりではなかったのだ。しかし、それでも出されれば

「...ごめん、ありがとう...」

と言ってありがたく頂戴しておく。

「おまえ...今日どうしたんだ?」

そんなディックの正面に座りながら、ジャックが怪訝そうに尋ねた。

「だってさあ...なんつつうか...やっぱ思い出しまうじゃん...」

ディックがそう答えても、ジャックには何



の話だかまったく分からない。それを見たディックは、ふと気付いたように

「あ...俺、まだ話してなかったんだ...」

と呟いた。

「...実はさ、俺、1500年前にもルビーと会ってるんだ」

ちょうど紅玉組が青玉島に来た日と同じように、2人はテーブルを挟んで座っていた。やはり、ブルーグレーのティーカップと赤いティーカップには紅茶が入っている。

「え...?」

驚いたジャックが声を漏らした。

「もしかして、おまえも...?」

そう呟くジャックに、ディックは首を振りながら

「俺が捜してたんじゃない、逆だ...止しておけばいいのに」

と言って、自嘲気味に笑う。

「おまえらと別れて1年もしない辺りだったな。いきなり話し掛けられてさ、そのまま主従契約して、一緒に旅することになったんだよ。ルビーはなんか、友達に荷物届けなきゃなんねえとか言ってて、俺はまあ...ユリアを捜しててさ」

ディックがパサパサした声で話し始めた。

「その旅の途中でさ、あの子...俺のこと好きだって言ってくれたんだよ。だけど、俺...Yesって言えなくて」

「振ったのか?」

ジャックが聞くと、ディックはまた首を振って否定する。

「そうすりゃよかったんだ。すっぱり振っちゃえば.....だけど俺、どっちとも言えなくて、なんとなくやむやに...ってか、適当にあしらってた。卑怯者って言われたけどね。ま、確かにそうだから、何も言えなかったけど」

ジャックは目に見える反応こそ示さなかったものの、内心では少し驚いていた。

ディックなら、その後も友達でいられるような答え方もできそうなものなのに...

「...止せばいいのにさ、俺のこと卑怯者だとか大っ嫌いだとかって言いながらもまだ好きでいてくれて、契約切れた時にもう1度告ってきたんだよね。その時はもう振っちゃったんだけど.....何なんだろうな、言い方が悪かったのか、それまでの態度が悪かったのか.....両方か、多分」

ディックの言葉がふと途切れる。それからディックは深く息を吸うと、その勢いで

「俺、殺しちゃったんだ」

と言った。

「!!」

さすがのジャックも目を見開く。

...“殺しちゃった”って...

「...封筒渡してきてさ、“50歩向こうへ歩いたら破け”、とか言うんだよ。だから、言われた通りに50歩歩いて、それで破ったら...後ろでドカンッ、だ...」

ディックはそう言いながら、掌が上に向く状態で握った右手をパッとほじくように開くという動作をした。

「封筒に抑制魔法陣が入ってたのか」

ジャックが言うと、ディックは

「ご名答」

と笑う。

「それが、今日だったんだな？」

その言葉にも、ディックは笑いながら頷いた。

「...そりゃ“俺は嵌められただけで、あの子が勝手に自爆したんだ”って、開き直すこともできないさ。だけど結局、そんなことさせちまったのは俺だろ？ってことはやっぱ、俺が殺しちゃまったことになるわけで...ほら、現に、俺が今でもこうやって生きてるってことが何よりの証拠だ」

その言葉に、ジャックは自分の手を見ずにはいられなかった。

...そうだ。本来なら僕もディックも、とうの大昔に死んでいるはずなのだ。僕はサファイアを、ディックはルビーさんを、殺して生きているんだ...

「...そのあと俺、この島に来たんだ。とりあえずおまえに会いたくって.....いや、ってか、おまえらが幸せに暮らしてるのを見たくってさ。ルビーから、おまえらが付き合ってるって聞いてたから.....そしたら、あの緑の髪の女の子...えーっと...」

「リル・メンテ？」

ジャックが助け船を出してやると、ディックはパチンと指を鳴らす。

「そうそう、リルちゃんだ...あの子が、サファイアちゃんは呪い...だか何だかで死んじゃったってことと、その時いたのはおまえだけだったってこと、あと、おまえがどっか行っちゃったってことを教えてくれたんだ」

ディックはそこまで言うと、ジャックの眼をじっと見た。それから、躊躇いがちに

「こんなこと言うのもなんだけど...」

と切り出す。

ところがジャックは、ディックが言い終わる前に“こんなこと”の内容を察すると、

「その通りだ」

と言って遮り、

「僕が今生きているのは、サファイアを...サファイアを殺したからだよ」

と自分自身の口で言った。そしてさらに、ジャックはサファイアの最期について手短かに話す。サファイアとリルの夢の話から、海岸までの話だ。

ジャックの話が終わると、ディックは

「...なるほど...」

と呟いた。それから、慎重に言葉を選びながらゆっくり話す。

「...その...不謹慎なこと言うけどさ、サファイアちゃん、ある意味幸せだったと思うぜ...そりゃ、ジェーンの奴に振り回されちまったのは辛かっただろうけどさ...でも、友達もいて、おまえに

目一杯愛されて...最期に、大好きな人に抱きしめてもらえたんだから...きっと、幸せだったと思うよ」

...まさに、サファイアの最期の言葉と同じだ。

ジャックはそう思ったが、それ以上は何ともコメントしなかった。その代わりに、

「...おまえは、ルビーさんのことをどう思ってたんだ？」

と静かに尋ね、話を戻す。

ディックは黙ったまま、しばらくジャックの眼を見つめていた。それから目を伏せると、低めの声で

「.....好きだったよ」

と呟く。

「俺も、ルビーのことが好きだった。それに...あの子が言ってくる前から、向こうの気持ちにも気付いてた。だからこそ、うやむやにしてたんだ。ユリアのごたごたに巻き込みたくなかったし...知らないでいてほしかった。ルビーの中では、ただの能天気な――復讐とかそういう物騒なこととは無関係な俺でいたかったんだよ」

そう言うと、ディックは短く笑った。自嘲的に歪んだ笑い方だ。

「全部話して振られるか、何も言わずにきっぱり振るか、どっちかすりゃよかったんだな、本当は...だけど、やっぱりそのまま一緒にいたいって気持ちもあるじゃん。もう少し、もう少し...って先伸ばしにしてたらこうだ...」

ディックはそう言うと、再び視線を上げてジャックの目を見る。

「何回も夢見たよ。おまえがサファイアちゃんというそばでさ、ルビーと一緒に暮らしたら、どんなに幸せだろうって...」

...もっとも、その頃にはもうサファイアが死んでいたのだから、どのみちそれは叶わなかったのだが。

「ぶっちゃけ、俺はもう会いたくなかったんだけどさ、ルビーの奴、未来の自分に手紙遺してたらしくって――何て書いたのか知らねえけど――わざわざディマイアまで来たんだよ。まあ、手紙には俺のこと友達って書いてあったらしいから、あの子もそうとしか思っていないんだろうけど...」

ディックの言葉はそこで切れた。しばらく待っても何も言わないから、もうこれで終わりなのだろう。

部屋の空気は妙に重く、息苦しかった。サファイアは、まだ帰ってこない。

「...なんで会いたくなかったんだ？」

しばらく経ってから、ジャックが静かに尋ねた。

「...あ？」

ディックはきょとんとしたように聞き返す。

「生まれ変わったルビーさんに会えば、もう一度はじめからやり直すことも可能になるわけだ...
...もうユリアのことは諦めているんだろう？」

ジャックがそう聞くと、ディックは目を瞬かせながら

「俺、そんなこと一言も言ってねえはずだぞ」

と言った。

.....?!

2人の間に一瞬の沈黙が流れる。

「...諦めてないのか？」

数秒の間をおいてからジャックがそう確認しても、ディックは

「諦めるわけないだろ」

とさも当たり前のことであるかのように言う。

ジャックは改めてディックのことを見つめた。ディックもまた、何をいまさらと言わんばかりにジャックを見つめている。

「復讐するも何も、彼女が今生きているはずがないだろう？」

ジャックにそう指摘されると、ディックは一瞬間をおいてから

「...あ...」

と小さく声を漏らした。

「...おまえ...今まで本気で、ユリアが生きていると思って捜していたのか...？」

ジャックがまさかというように聞いても、ディックは完全に固まっている。

「...いや...」

1分ぐらい経ってから、ようやくディックが口を開いた。“いや”と否定され、ジャックは少し安心する。ところが、次にディックの口から出てきた言葉は、

「あいつなら生きてたっておかしくないと思う」

というものだった。

「だってそうだろ？現に俺たちだってこうやって生きてるわけじゃん。もう1人いたって何ら不思議じゃねえ、だろ？」

ディックは真顔でそう主張する。

「.....」

今度はジャックが黙りこむ番だった。

ユリアが今もなおどこかで生き続けているという可能性は限りなく低いだろう。それは間違いない。だが...確かに、1500年以上生き続けている例が存在しているわけだ.....例外が1つでもあれば、他には絶対存在しないとは言い切れない。たとえどれほど低い可能性であったにしても、0とは言い切れない...

ジャックは反論することをやめた。どの道、この調子で言い合っても一生――たとえ無限の命であっても――埒が明かない。結論が出るとすれば、生きているにせよ死んでいるにせよ、ユリアを見つけた時だけだろう。

「...つまり、まだ復讐したいと思っているわけだ」

ジャックはユリアが生きているかを保留にしたまま、話を次に進めた。

「さっきも言ったように、ルビーさんに会えばやり直すことも可能だ。にもかかわらず会いたくなかったのは、また1500年前のことを繰り返すだけだと思ったからだろう？」

ジャックの問いに、ディックは黙ったまま頷く。するとジャックは、
「人を殺して、何とも思わないのか？」
と聞いた。これは、ジャック自身が最も聞かれないことの1つであることには間違いない。にもかかわらず、ジャックはわざと鋭い眼を向けて、非常に残酷な聞き方をする。

1500年前、ジャックは自分自身が人を――それも肉親を――殺してしまったという罪悪感に苦しんでいた。一応、キュアラ一族の規則では罪にならなかったのだが、自分自身がそれを許せない。自分が自分を責める。自分で自分が怖くなる。その苦しさを嫌と言うほど知っているのに、友人を止めることができなかった。まだディックは復讐していないが、それでもこれだけ苦しんでいるのである。

...今度こそ...

一方、非常にきつい言い方をされたディックは一瞬、まるで刃物を突き付けられた時のような顔をした。だがジャックの眼を見ると、自嘲的に微笑んで

「...思ったさ」

とゆっくりとした調子で答える。

「罪悪感とかいろいろに押し潰されそうで、言い訳や開き直りすらできなくて...本当に気が触れそうだった...いや、今だってそうだけど」

...それはそうだろう。

ジャックは心の中で呟く。

それは僕だって同じだ...

「でも、あいつだけは...」

「復讐して誰が喜ぶんだ？」

ディックがなおも粘ると、ジャックはその言葉を遮って尋ねた。

「まず、おまえは喜べないだろう？」

ディックはただ俯いているばかりだったが、ジャックにははっきりと分かっている。喜べるはずがないのだ。もしもディックがそれで喜べるような人物だったとしたら、初めて会った時にデビッドのところへ案内しなかっただろう。 ※84

「シェルダンさんのことはよく知らないが...おまえに、そこまでして――1500年間も捜し続けてまで、復讐してほしいと望むような子だったのか？」

ディックはそう聞かれると、今度は腕組みして顔を背け、

「...俺だって分かんねえよ。例の忌ま忌ましい腕輪のせいで、ろくに話すこともできなかったんだから...」

とややぶっきらぼうに答える。

「だったら、誰のために復讐するんだ？」

ジャックがそう聞いても、ディックは返事を寄越さなかった――いや、返事できなかった。そのため、ただ重苦しいばかりの沈黙が流れる。

黙ったまま何も言わないディックに、ジャックは静かな声で

「...おまえが人を何人殺しても、僕はおまえを友達として受け入れると思う。おまえが今でも、

僕と友達でいてくれているのと同じように...」

と話しかけた。ディックがジャックの方を見ると、ジャックは膝の上でしっかりと握った手を、じっと見つめている。

「...でも、できることなら...そんなこと、してほしくないよ」

今まで静かだったのに、そう言うジャックの口調は切々とした色を帯びていた。

「...おまえ、熱でもあるんじゃないの？」

珍しく自分の想いをよく喋るジャックに、ディックは驚いて尋ねる。しかし、ジャックはただ睨みつけるだけでそれを無視し、

「...今でも、ルビーさんのこと好きなんじゃないのか？」

と別の質問をした。するとディックは、伏せ目がちに小さく笑う。

「...もう諦めてるよ。あんだけ酷いことしといて、好きだなんて言えるわけねえだろ」

一応否定の形をとってはいるものの、この答えでは肯定したも同然だ。

「...誰も喜ばない復讐をするより、手の届きそうな幸せを掴もうとすることの方が、賢明だと思うよ」

そんなディックに、ジャックはぽつりと小さく言った。

※84...会った段階では分かるはずなどないじゃないか、と突っ込みたくなるが、ジャックは読眼術の使い手だから、何となく掴めるのである。

それから数日のうちに、夢幻界5大要所同時爆破テロの目撃者から、非常に重要な――と言うより、厄介な情報が入った。爆破事件の直前、人が突然等身大の竜巻に飲み込まれ、消えてしまったというのだ。見間違いなどでなければ、考えられるのはテレポートの類しかない。言うまでもなく、この類の魔法は使いこなせれば非常に便利だ。そのため、それを敵だけが使えてこちらが使えないとなると、戦局はかなり不利になる。 ※85 そこでピユアは、魔法班と総合班を合わせた4人に、急遽転送魔法を開発するよう命じた。と言っても、協力して開発しろと言うわけではない。逆に、互いに競い合って開発しろという意味である。

やがて夏になると、青玉島国内のいくつかのマンションで不審な人物が多数出入りしているという情報が入った。ここではコランダムではなく警察が動いたが、結局何の手がかりも掴めずにいる。

そうこうしているうちに暑い夏が過ぎ去り、青空は秋の色を帯びてきていた。もう、爆破された5ヶ所はいずれも再建され、交通網は通常運転している。ただし、警戒態勢は解かれていないため、飛行機や船舶の乗り降りには長時間に渡る検査を受けなければならない状態だ。

2006年9月10日

風の強い夜、ルビーは実験棟にあるサファイアの実験室へ来ていた。もう青玉島に来てから半年も経っているため、サファイアが部屋にいないときはここへ来ればよいと知っているのだ。しかし、今夜はいくらノックしても返事がない。

「お邪魔します...ん?!」

思い切ってルビーが入ってみると、部屋の照明が消されていた。そのかわりに、机の上で浮かんでいる、10cm程度の水滴らしき球体が、青・緑・紫といった色を中心に、赤・桃・橙・黄...など、色とりどりに光っている。まるで、万華鏡のようだ。

...な...何やってんの...??

大きな水滴を見つめる小さなシルエットが、その水滴をそっと掴むと、何か円筒形の物に入れた――もしかしたら、百露華かもしれない。それと同時に光が消え、真っ暗になる。

それから1秒ぐらいで、今度は百露華が光線を発した。光の広がり方は調節できるのだが、今は普通の懐中電灯ぐらいになっている。その光が何かを照らし出したかと思うと、照らされたものがふっと消えた。

え？消えた...???

そう思った次の瞬間、ルビーの目の前に林檎が現れる。ルビーはそれを反射的に捕まえたが、小さなシルエットはずっときよろきよろしている。

「.....姉ちゃん、もしかして林檎捜してる？」

ルビーが恐る恐る話し掛けてみると、サファイアは

「あ、うん。ありがとう♪」

と言って振り返ってから、一瞬間をおいて

「ひやあああああああつ!!」

と叫んだ。

「...んもうっ!!研究室は勝手に開けちゃダメだってば!!」

5分後、明るくした部屋で、サファイアはお説教ポーズをとりながら言った。腰に左手を当て、右手の人差し指を立てて軽く振るというおなじみのポーズだ。

「ごめんってば...謝るから許してえ...」

ルビーは椅子に座り、しゅんとしている。林檎はテーブルの上だ。

「もし私がここで、部屋が吹っ飛ぶような実験してたらどうするのさ?!

サファイアが今度は、肩の少し下辺りで両掌を上向きに開くような仕草で尋ねる。

※86

「いや、そんなことしたら、うちが外にいたとしてもアウトだろ」

ルビーが突っ込みを入れると、サファイアは3秒ぐらいしてから、腕を組んで

「そっかあ」

と呟く。

「そうだよね、だったら同じか」

そう笑うサファイアに、ルビーも笑顔で

「うんうん、全然問題ない」

と請け合った。

「だよねえ」

2人の笑い声が明るく響く。

「...って、やっぱダメだよ!!」

乗せられたことに気づいたサファイアが、そう突っ込みながらルビーの額を人差し指でブシュッと押した。

「アハハハッ...やっぱダメ?」

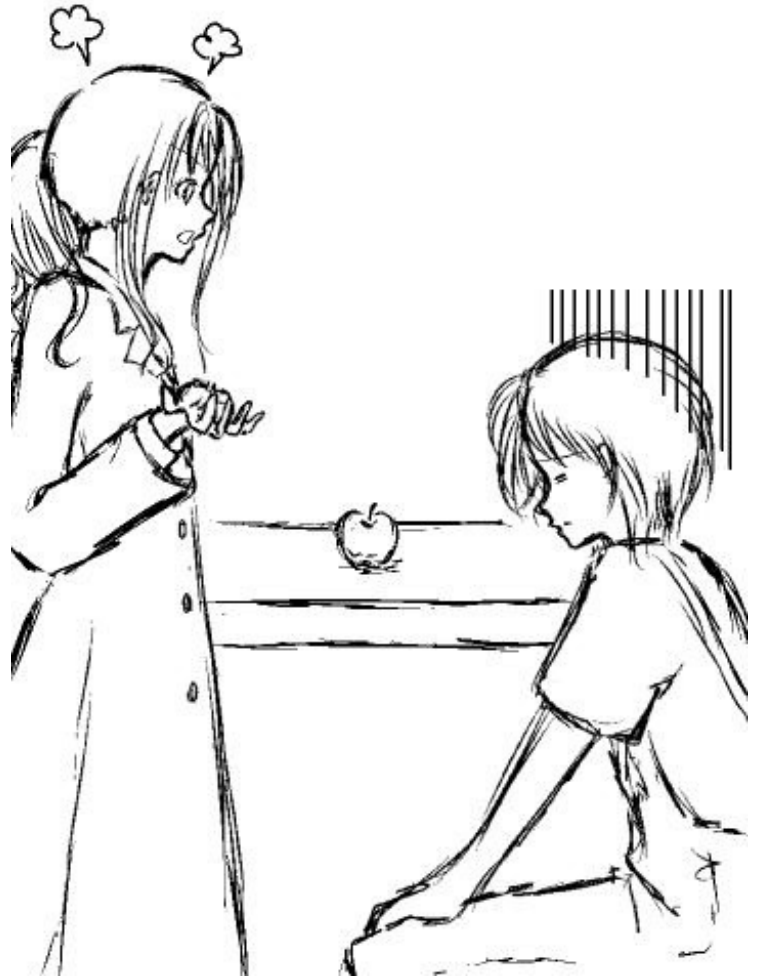
まだ笑っているルビーに、サファイアは

「ダメーっ!!」

と言って上司直伝の“ほっぺみいいん攻撃”を繰り返す。

...平和ではないはずなのに、“今日も青玉島は平和である”などと言われそうだ。

「...で、どうしたの?」



それから1分後、ようやく落ち着いてきたところで、サファイアが首を傾げて尋ねた。

ルビーも、いつもならサファイアが部屋にいなければわざわざ実験室までやってきたりしない。実験室にいるということは、サファイアは研究中なのだと分かっているからだ。にもかかわらずここまで来たということは、何か差し迫った用事があるという可能性が高い。

「いや、ちょっと相談したいことがあって...あと12日でどうにかしなきゃなんだ」

ルビーはぼそぼそと答えた。

「何を？」

サファイアがそう聞くと、ルビーはどういうわけか俯いてしまう。

「...あのな、その.....うちな、実は...えーっと.....うち...」

ルビーはなかなか先を言わない。どうも恥ずかしがっているようだ。

「好きな人がいるとか？」

なかなか言わないので、サファイアは出任せにそう trying してみた。すると、ルビーの顔は瞬く間に髪と同じくらい赤くなってしまふ。

「...う、うん...まあ...」

「ディック？」

さらにサファイアが言ってみると、ルビーは

「なっ...な、姉ちゃんどうして分かったの？」

と言って口をパクパクさせた。姉に見透かされたことにはかなり驚いているようだ。

「だって、私の中にある選択肢は、ルチアーノ様、ディック、ジャックの3択だよ？」

サファイアが苦笑しながら答える。確かに、この3択で1番可能性が高いのは、誰がどう考えてもディックだろう。 ※87

「え、え、どこが好きなの？」

サファイアは好奇心を隠しきれない様子で聞いた。するとルビーは完全に困ってしまう。

「...え?...ん.....いや、よく分かんないけど...やっぱ、一緒にいて楽しいし.....とにかく、好きなんだよ。ちっとも素直になれないけど...ついつい怒鳴っちゃったりするけど...」

真っ赤な顔を隠そうと、真下を向いてしまうルビーを見て、サファイアの方が言葉を失ってしまった。

...ルビー、ものすごく可愛いんだけど...

「...そっか...」

やがて、言葉を探しながらサファイアが呟く。

「...うん、頑張ろう!!お姉ちゃん応援するよ」

「マジで?!」

サファイアの言葉を聞くと、ルビーは安心したような嬉しいような顔をした。

「もちろんだよ」

サファイアがグッドサインを見せて笑うと、ルビーは

「ありがとう!!」

と言ってから

「でな、今月22日があいつの誕生日なんだよ。だから、プレゼントあげようと思ってんだけど...」

と早速本題に入る。

「だからあと12日なんだね？」

サファイアが挟んだ質問に、ルビーが頷いた。

「今年が3回目なんだけど、今までにプレゼントあげたことなんてないし...」

「普通なら手作りお菓子が王道なんだけどね...」

サファイアはそう言いながら苦笑する。

ディマイアで会った時から、サファイアはディックが吸血鬼なのか否かと迷っていた。縦に長い瞳孔は間違いなく吸血鬼の特徴なのだが、カラーリングが違うのだ。しかし、今年の3月に思い切って聞いてみると、突然変異で髪と目の色が違っているものの、やはり吸血鬼なのだという。

「できたら、形に残るものがないんだけど...」

ルビーが言うと、サファイアは

「うーん...そっかあ...」

と言いながら天井を仰いだ。

サファイアとルビーは、さまざまな案を出してはひとつずつ検討していった。アクセサリ、置物、実用品...いろいろな案があがっては、その都度消えていく。

幸い、ルビーもずっと王宮で働いているうえにあまりお金を使わないので、それなりのお金は持っていた。 ※88 だから、その分は選択肢が広がっている。

「...そう言えば、プレゼント渡しながら告白するの？」

話が行き詰ってきた頃、サファイアが何気なく思いついたことを聞いてみた。するとルビーは、

「あっ...あほっ!!姉ちゃん何言ってんだよ!!んなこと出来るわけないじゃん...」

とブンブン首を振って否定する。

「そっかあ...」

サファイアが苦笑した。“え〜〜告白しちゃえばいいのにい〜”などとは言わないのがサファイアだ。

「...ただ、いっつもケンカばっかしてるから、たまには...たまにはそういうことをして、ちょっとイメージ回復を狙おうかと...」

ルビーは俯いてぼそぼそと言う。

「うーん...そういうことね...」

サファイアはそう言うと、またプレゼントを考え始めた。

2人は散々話し合ったが、やはり良い案は浮かばなかった。議論が煮詰まると、徐々に話が脇道

へ逸れて行ってしまおう。

「あのさあ、姉ちゃんは誰か、好きな人とかいないの？」

ルビーが尋ねると、サファイアは

「うん」

と即答し、爽快な笑顔で

「私、恋愛禁止令が出てるから」

と言い足した。

「...はあ？」

予想外の言葉に驚いたルビーが聞き返すと、サファイアは苦笑しながら恋愛禁止令の内容について大まかな説明をする。

「えええええっ?!」

説明が終わると、ルビーは思わずそう叫んだ。

「何そのもったいない話っ!!姉ちゃんこんな可愛いのに...ってかさ、それって普通に困らない?だって...人を好きになっちゃったりするのって、不可抗力じゃん!!うちだって別になりたくてディックのこと.....ほら.....じゃん?しかも、好きになられてもダメとか言って...こんな飛びつきり可愛い姉ちゃんには、無理難題以外の何物でもないし。絶対困るでしょ。ってか、実は困ってたりするでしょ」

「困らない困らない」

サファイアは首を振って笑った。

「別に恋愛できなくたって、特に困ったりしないよ。初めから“ダメっ!!”て言われてるから、あえて誰かのことを好きになっちゃうこともないし、私のことなんて好きになる人いるはずないし、それでも毎日すごく楽しいし...皆がいてくれるからね」 ※89

「...そうなん？」

サファイアの発言にはいくつか引かかる部分もあったが、ルビーはあえて言及しないでおく。特に“私のことなんて好きになる人いるはずない”なんてはずはないだろうという点はぜひ指摘しておきたいところなのだが、ここであれこれ言ってもどうにもならないのだし、むしろこうやって言い聞かせでもしないと、こんな不条理な命令など納得できないのだろう、と思いなおしたのだ。

結局そうこうしているうちに、ディックへのプレゼントは決まらないまま、東の空が白み始めてきてしまった。

※85...今のところ、青玉魔術に転送魔法(=テレポートの類の総称)はない。

※86...先程からずいぶんと身ぶり手ぶりが激しいところからすると、多分サファイアはこうやって“お説教をする”ということを楽しんでいるのかもしれない。ジャックやピュアに叱られることはあっても自分が叱る側に回ることは滅多にないから、少しお姉ちゃん気分になれるのだろう。

※87...とりあえずジャックはあり得ないと思われる。2人とも大人だから(ルビーは20才。ジャッ

クは4ケタなので...)仕事には支障を来さないと思うが、どう見ても仲が良いとはいえないのだ。ルチアーノに関してはあり得ないとも言えないが(プルメリアとペーターのように、王/女王と側近がくっつくケースは多い)、サファイアから見るとディックの方が有力なのだろう。

※88...紅玉高原国王の側近がもらう給料は、青玉島と同じく衣食住+給料だ。ただ、額は8万Fan/月。これは別に青玉島の方が高い給料を出しているというわけではなく、サファイアたちには科学部員である分の2万Fanが追加されているというだけ。ちなみに、他の科学部員の給料は20万Fan~50万Fan程度。こう書くとサファイアたちとかなり開きがあるように見えるが、彼らは衣食住別となっているため、だいたい同じ程度である。

※89...こんな呑気な発言をしているのも、結成してから半年以上経っているにもかかわらず未だにコランダムの出番が来ないからである.....いや、出番がないということは、非常事態になっていないということだから、大いに結構なのだが。

部屋に戻ったあと、サファイアはソファの上で丸くなると、黒猫のぬいぐるみキーホルダーを指で突いていた。

ルビー...羨ましいな...

ルビーは真剣に悩んでいるのだから、こんなこと言ってはならないということは分かっているのだが、それでもそういう思いを打ち消すことは出来なかった。

先程ルビーの前では平然と首を振っていたが、本当はサファイアにも好きな人がいる。

でも、呪いのこともあるし、恋愛禁止令もあるし...そういうのをど返ししても望み薄だし...あー...いや、そもそも、こうやって外的要因のせいになっている時点でアウトか...

いつからその人のことを、そういう想いで見ていたのかはよく分からない。気づいた時には、いつも目で追うようになっていた。気づいた時には、なんとなくその人のことを考えているようになっていた。

初めはただ、綺麗な人だなあって思っているだけだった。初めはむしろ、自分の“お兄さん”みたいに思っていた。素っ気ない話し方だなあって思ったり、いつも無表情で何考えてるのか分からないって思ったりすることもある。あるけど...

でも、私の帰りが遅いと迎えに来てくれたり、呪いのことを知った友達と決裂してしまって落ち込んでいる私を慰めてくれたり...いつも見守ってくれて...新月の呪いを持つ私を、無条件に受け入れてくれて.....すごく優しいんだ...

そんな優しさに惹かれたのか。それとも初めに会ったとき、あの綺麗過ぎる眼を見て固まってしまった時から、ずっと魅せられたままなのか、それはよく分からないけど、別にそこを追究する必要はない。重要なのは、自分はその人——ジャックのことが好きなのだということと、誰がどう考えても——どういう視点から見ても、望みがないということの2点のみだ。

サファイアはそんな自分の想いを、見事なほど上手に隠していた。わざと子供みみたいな幼い行動をして、ジャックのことを兄代わりとして慕っているように振る舞う。できれば、そう振る舞うことで本当に自分の恋愛感情をなくして、兄妹のように無邪気な笑顔で“大好きだよ”って言えるようになりたい。恋愛は禁止されていても、そういう形で慕うことは禁止されていないのだから...

どうしてもジャックと一緒にいたい。どんな形だっていい。今のように、同僚として毎日一緒にいられるなら万々歳だ。それ以上のことを望んで、一緒にいられなくなっちゃったら.....それがどうしても怖くて...

「...高望みはよくないよね」

サファイアは、何となく雰囲気ジャックと似ている黒猫のぬいぐるみキーホルダーに、小さな声で問いかけた。 ※90

その後も、クリアシャイン姉妹は夜な夜な会ってはプレゼントの案を検討し続けた。その結果出した結論は、ブレスレット。まあ、ディックならあげれば着けてくれるんじゃないか、というわけだ。

「姉ちゃん、どれがいいと思う？」

「あんまり派手だと使いにくいよ」

「あー確かに...だけどやっぱ、ごっつい方が似合うと思わない？」

「あ、分かる分かる!!」

2人が騒いでいるのはセントラルシティの繁華街。1000Fan前後という予算でディックによく似合いそうなものを探すという旅が終わったのは、23:00ちょっと前のことだった。

2006年9月22日

6:55、ディックの部屋のインターホンが鳴った。

「はい？」

ディックがドアを開けてみると、手を後ろに回したサファイアが立っている。

「あれ？サファイアちゃんどうしたの？」

ディックは驚いて尋ねた。サファイアがディックの部屋を訪れることなんて、もしかしたら初めてかもしれない。

「えっと...これ、ルビーからお届け物です」

サファイアはそう言いながら、小さな箱を両手に載せて差し出した。焦げ茶の包装紙と赤いリボンでラッピングされた、手の平サイズの箱だ。

「へ？ルビーから？」

ディックがさらにびっくりして叫ぶ。

「うん。ルビーから」

サファイアはそこを強調しながら渡すと、

「じゃあ後でね!!」

と言って、パタパタと部屋に戻って行ってしまった。

その日の夜、ディックは自室に戻ると、そのプレゼントをそっと開封してみた。

「...え.....これ...」

出てきたのは、金色のスタッズをあしらった茶色のレザーブレス。 ※91 本革だし、幅も4~5cmくらいあるから、おそらく1000~2000Fanはしただろう。そして箱に付いていたカードには、紅玉伊語 ※92 で一言、“お誕生日おめでとう”とだけ書かれている。

「...やべえ...俺もういい年してんのに...」 ※93

...ものすごく嬉しいんですけど...

以前ジャックに“今でも、ルビーさんのこと好きなんじゃないのか？”と聞かれた時、ディックは一応それを否定した。自分の中でも、決して認めてはいない—あくまでも、もう諦めたのだと思っている。しかし、思いがけず誕生日プレゼントをもらって、ここまで喜んでしまうということは、やはりルビーのことが好きなのだろう。

だが、何故急にルビーが誕生日プレゼントなどくれたのか、それが分からないから怖い。

何で今年から急に...？

ディックの脳内に、一瞬まさかという思いが過ぎる。

...ははっ、バカらし。何自惚れてんだよって感じだよな、うん。

ディックは心の中でそう呟くことで、過ぎた懸念を打ち消すと、その代わりに

...俺、1度もあげたことなかったよな...

ということ思い出した。それどころか、ディックはルビーの誕生日すら知らないのだ。

...ま、まあ、そのことはまた考えるとして...とりあえず明日、ちゃんとお礼言わなきゃだよな

...

ディックはそう思いながら、試しにそのブレスレットをつけてみる。そして、やっぱり嬉しくて仕方がないことを確認すると、再び苦笑した。

翌日、いつも通り賑やかな女王の間で、ディックは

「あ...そうだ、ルビー」

と、いかにも今思い出したような調子で話し掛けた。

「ん？」

サファイアに夢幻史の説明を受けていたルビーが、くるっと振り返る。

「これ...ありがとな」

ディックはニッと笑いながら左腕をあげて見せた。姉妹で散々悩んで選んだだけあって、ディックによく似合っている。

「...ん...別に...」

ルビーはそうとだけ言うと、照れたようにふいっとそっぽを向いてしまった。

※90...まだサファイアは知らないが、この黒猫のぬいぐるみキーホルダーは、雰囲気どころか何から何まで、黒猫ジャックにそっくりなのだ。

※91...どうでもいいことだが、このデザインのブレスレットとなると、実はかなり際どい線だったと言える。なんせ、ユリアが用いていた鉛の腕輪も、割とよく似た形をしていたのだ。

※92...紅玉高原の公用語。イタリア語が訛ったもの。

※93...1525才だなんて、いい年にもほどがある。

2006年12月7日

6:30、まだ出勤時間より30分早いのだが、サファイアとジャックは緊迫した面持ちで部屋の外へ出た。ディックとルビーを訪ねるつもりだったのだが、彼らもほぼ同時に廊下へ出てくる。

「ディマイアの新聞、届いた？」

サファイアが尋ねると、ルビーは

「いや...そっちも？」

と聞き返してくる。

ディマイアのメール新聞は毎朝6:20ピッタリに届くのだが、今朝はそれがまだ配信されてこないのだ。

「おや...みんな集まってるってことは、まだ来てないのかい？」

そう言いながら、今度はペーターが現れた。 ※94

「ディマイアの新聞ですか？」

サファイアが聞き返すと、ペーターは黙って頷く。

「届いておりません」

ジャックが答えた。心持ち早口にはなっているものの、崩れは微塵もない。

「ねえねえみんな...」

「ディマイアなら来てないから」

最後にやってきたルチアーノに至っては、質問が始まる前の段階でルビーに答えられてしまった。

「ちょっとディック、どうなって...ん？」

ルビーは元ディマイア社長であるディックを問い詰めようとして初めて、彼がいなくなっていることに気付く。

「ありゃ？どこ行って...」

そうきょろきょろするルビーに、ジャックが

「あちらにいますが」

と手で示す。

ディックはいつの間にか、皆から5mくらい離れたところへ行っていた。何やら電話をかけているらしい。

「...繋がりません」

1分ぐらいで、ディックがケータイをポケットにしまいながら戻ってきた。

「ディマイア本社の窓口、社員専用の番号ともに繋がりません。何人かのケータイにもかけてみましたが、やはりダメでした」

話し合いはそのまま女王の間へと持ち込まれた。

「ちょうど今、情報処理局の派遣員で近くにいたのをディマイア本社に行かせてみたわ」

ピュアが深刻な声で言う。

『実界と南半球の支社には紅玉が行ってるよ』 ※95

こうやってきたのは、フィリッポだ。ピュアのパソコンが紅玉高原の王宮と繋がっているわけである。

「いったい何が――」

そう言いかけたルチアーノの言葉を、ピュアのパソコンに掛かってきた電話の呼出し音が遮った。

「はい？」

ピュアが応じると、

『こちら情報処理局のサリー・カーターです』

という自動音声のような人間の声が聞こえてくる。

『ディマイア本社は戦闘状態だそうです』

その言葉で、女王の間に緊張が走った。青玉島のパソコンは同時に4人まで話すことができる。つまり、ちょうど今1つの部屋に、いつもの7人もフィリッポもサリーも、皆一緒にいるような状態となっているのだ。

『詳しいことは分かりませんが、何らかの集団が侵入した模様で――』

そう説明しているサリーの言葉を、今度はフィリッポの方から聞こえてきた黒電話のベル音が遮る。フィリッポは

「あ、ごめん…」

などと言いながら受話器を取って

「Hallo …」 ※96

と話し始めたが、紅玉伊語で話しているのでサファイアには何と言っているのか分からない――もっとも、聞こえるのはフィリッポの声だけなので他の人にも会話全体の内容は分からないのだが。 ※97

『――侵入者の使う武器や魔法を考えると、多国籍であることが考えられますが、それ以上のことは分からないとのことですよ』

フィリッポの通話が終わるのを待ちきれないと判断したらしいサリーが、残りの内容を言ってしまう。

「ありがとう。また何か分かったら教えてちょうだい」

ピュアはそう言って、サリーとの電話を切った。

『一もしもし？』

今度はフィリッポが話し始める。

『支社もやっぱ戦闘状態だって。詳しいことは追いついてことだけど…』

フィリッポの話が終わると、2つの部屋に一瞬沈黙が流れる。 ※98

「どうしましょう？」

やがてピュアが、信じられないというふうに行った。

「ディマイアが襲撃されるなんてこと、今まであった？」

「ありましたよ」

まさかの答えに、その場の視線が一斉にその声の主――ディックに集まる。

「そんなことあったの？」

ルチアーノが驚いたように叫んだ。驚いていないのは、ディック本人とジャックだけだ。
「1860年に、ディミア実界支社が暗黒組織に占領されたことがあったんです。それ以来、ディミアには強力な自己防衛システムがありますから...」

そう説明するディックに、フィリップが
『ってことは、俺らが軍なり何なり派遣しなくっても平気ってこと？』
と聞くと、ディックは自信たっぷりに
「はい。あと数時間で片付くと思います」
と答えた。

ディミアというのは、夢幻界で最も権威あるメディアである。ディミアが何かに乗っ取られてもしたら夢幻界の報道はめちゃくちゃになってしまうだろう。しかしその一方で、ディミアの権威の最たる根拠はその独立性だ。どこかの国や団体が支援したという事実ができる、今後の報道に偏りが出るのはないかと懸念される——例え実際には偏りなどしなくても、そう疑われてしまう。それこそ、“光栄ある孤立”が求められるのだ。 ※99

ピュアとフィリップは共に、非常に重大な決断を迫られていた。2人だけではない。ディミアが襲撃されていることを知った国の君主、首相、大統領などは皆そうであるはずだ。
しかし結局、今回の件に手を出した国はなかった。

さて、ありがたいことに、ディックの予言は的中してくれた。
4時間後、ディミアは全世界に今朝配信する予定だった新聞と“ディミア3社同時襲撃事件 ※100”についての号外を配信。以下の内容はその号外の要約だ。
ディミアが襲撃されたのは青玉時間12月7日4:30、3社同時だったという。侵入手口も共通だ。まず100人くらいが正面玄関からなだれ込む。社員たちがそれに應對している間に、あちこちの廊下で湧いてきた者たちが、ディミアの各部署を乗っ取ろうとする。先程青玉島情報処理局が言っていたように、侵入者たちの国籍はまちまちなようだった。電気を操る者(黄玉人)、炎を操る者(柘榴人)、呪文魔法を使う者、機関銃を持つ者...ただ、そのほとんどが戦闘初心者だったらしい。ディミアの自己防衛システム ※101の方が圧倒的に強かったらしいが、さすがに倒しても倒してもあちこちから人が次々に湧いてくるという点には辟易したという。結局、戦闘が終わったのは本社が9:14、南半球が9:35、実界は9:56、3社のシステム復旧作業終了が10:37というわけだ。

「...ほら、俺の言った通りでしょう？」
得意げに笑ってそう言うディックに、ジャックが
「防衛システムを作ったのって、おまえか？」
と尋ねると、ディックは
「そう、システム考案者は俺ですから。ちなみに、本社にいたっては戦闘訓練も俺っすよ」
と言って、ニッと笑った。

翌日、ディマイアは夢幻裁判所に3人の“捕虜”を送ってきた。本社に侵入した者のうち、戦闘の中で気を失ってしまい、ディマイアに保護されたのだという。

夢幻警察は3人に対して取り調べを行った。彼らはそれぞれ違う国の出身なのだが、生活に困窮して繁華街をふらふらしていたところ、“協力してくれれば200万Fanあげる”と言われ、参加したそう。自分たちは指示通りに動いただけで、それ以上のことは何も分からないと言っている。

結局、3人の取り調べが終わってそれぞれの国に帰されたのは、年が明けて冬も終わった2007年3月のことだった。

※94...ペーターのような立場だと自分から出てきたりしなさそうなものだが、彼はいつでもよく動くのだ。

※95...夢幻界の南半球。

※96...イタリア語で“もしもし”の意。英語の“Hello”に該当する。

※97...実はこのメンバー、話せる言葉にはかなりばらつきがある。

サファイア/ピュア/ペーター ...青玉英語、アメリカ英語

ルビー/フィリップ/ルチアーノ... アメリカ英語、紅玉伊語

ジャック

... 青玉英語、アメリカ英語、紅玉伊語、柘榴露語

、黄玉西語、ドイツ語

ディック

...青玉英語、アメリカ英語、紅玉伊語、柘榴露語

、黄玉西語、フランス語

...年齢4ヶタ組は6ヶ国語読み書きできるそう。

※98...“2つの部屋”とは、青玉島の女王の間と紅玉高原の王の間のこと。

※99...“栄光ある孤立”とは、19世紀後半におけるイギリスの外交姿勢のこと。“栄光ある孤立”とも言う。

※100...ディマイア自らが命名した名前だ。

※101...詳しいことは書いていないが、建物自体に仕掛けられた罠と、戦闘訓練を受けた社員のこ
とらしい。

2007年8月17日

「...姉ちゃん、ほんっとに幸せそうだな...」

いつも通りの女王の間で、ルビーが姉を見つめながら呟いた。

「だって幸せだもん♪」

至福を具現化したような満面の笑みで答えるサファイアの前にあるのは、マンゴープリン。“今月のデザート”である。

「ほら、見てよ!!クロムイエローの艶やかな曲面、純白のホイップ、カーマインに輝くさくらんぼ、優しいベージュのウエハース...」 ※102

そう熱弁するサファイアに、ルビーは

「なんか、姉ちゃんの笑顔見てるとこっちまで幸せになるんだけど...」

と暖かな眼を向ける。

「1家に1人、みたいなの？」

ルチアーノがくすくす笑いながら口を挟むと、ピュアが

「バカね。毎日ケーキとか食べさせてたら、地味に家計を圧迫するわよ」 ※103

と指摘した。

「あー...確かに...」

そう笑うのはサファイア張本人。今まさに甘い物を食べているというのに、紅茶には砂糖を2杯入れ、そのうえ3杯目をとろうとシュガーポットにティースプーンを入れている。

「いい加減にしてください」

とうとう、ジャックはサファイアの手からシュガーポットを没収した。毎日言っているにもかかわらずサファイアは一向に懲りないため、ジャックの眼は夏の暑さを吹き飛ばすほど冷たい。

「あーっ!!何するのさあっ!!」

至福の笑顔から一転、サファイアが悲痛な叫びをあげた。

「糖分の摂りすぎです」

ジャックはそう言いながら、シュガーポットを片付けてしまう。

「えー...」

サファイアが“お願いお願い...!!”という熱い視線を送っても、ジャックは顔色ひとつ変えずに

「プリンが充分甘いでしょう？」

と一蹴する。

「...でもっ!!」

それでもめげないサファイアが粘ろうとすると、ジャックは

「何です？」

と言いながら今度はマンゴープリンを一瞥した。

...これ以上言ったらケーキを没収される...!!

本能的にそれを感じ取ったサファイアは、パッと口を噤む。

「...むううう...」

サファイアは渋々諦めたが、今度はルビーが

「良いじゃん!!せっかくあんな幸せな顔してたのに...この冷血漢!!人でなし!!」

と抗議し始める。

「あなたもそれ、いくつ目ですか？」

そんなルビーに、ジャックは肅然とした声で尋ねた。その視線の先にあるのは、ルビーがたった今冷凍庫から出したジェラートだが、出したばかりのジェラートより、ジャックの視線の方が冷たい。

「...5つ目だけど？文句ある？」

ジャックはそう聞き直るルビーの手から流れるような動きでジェラートを没収すると、

「あります。5つは多過ぎです。自重してください」

と言いながら冷凍庫に戻し、そのまま扉を閉めてしまった。

冷蔵庫の前で腕組みしているジャックと、一致団結して抗議の意を表明し続ける姉妹を見ていたルチアーノが、

「やっば、家族設定行ける気がするんだけど...」

などと言い始める。

「ジェラートも砂糖も逃げませんから」

ジャックが姉妹2人に対して言うと、ルビーはすかさず

「いや、あの人が食っちゃうかもしれない!!」

と反論した。

「俺かいつ!!」

“あの人”と指差されたルチアーノが突っ込んでも、ルビーは

「あんたしかいないだろ!!」

とあくまでも強気だ。

「あほっ!!俺は他人様の物には手え出さないし...なあディック？」

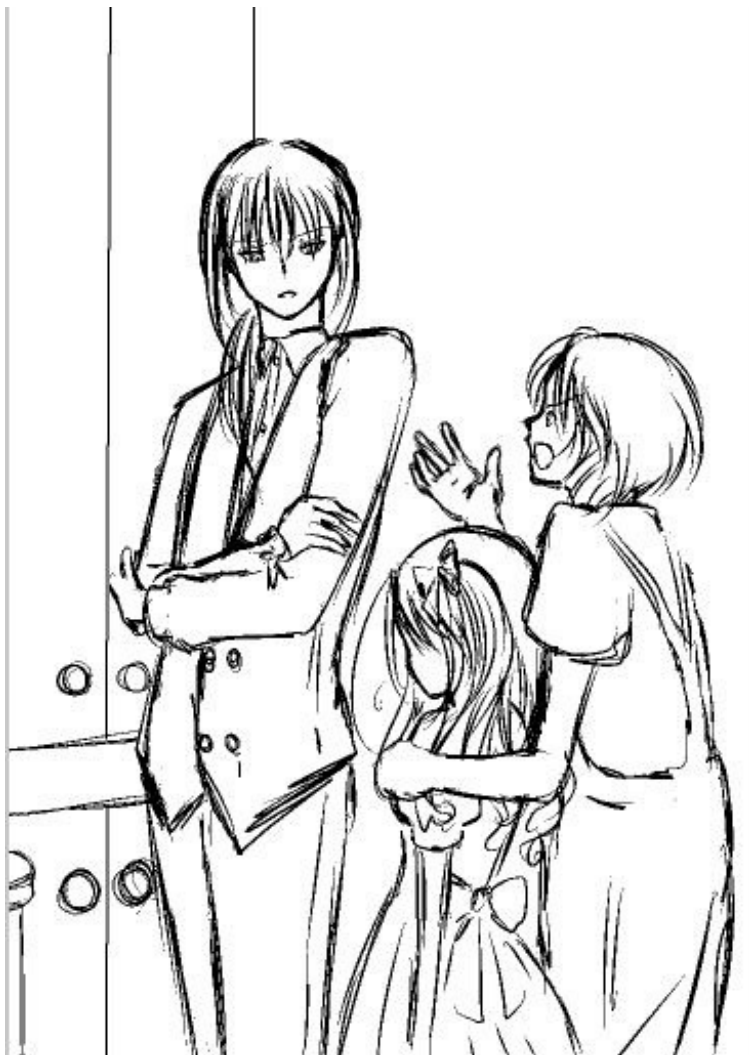
ルチアーノはそう言ってディックに援軍を求めたが、ディックは小刻みに震えながら机に突っ伏しているばかりで、何とも言わない。

「うーん...ちょっと今、答えられる状況じゃなさそうだよ」

そんなディックを見ながらペーターが苦笑交じりに言った。どうやら笑い過ぎで言葉を発せないようだ。

そんな中、女王の間の入り口から

「...あー...お取り込み中失礼いたしますが、よろしいでしょうか？」



という、この部屋では滅多に聞かない声が出た。それを聞いた瞬間、サッと蒼白になったサファイアが

「え...」

と声を漏らす。

先程の声の主はアルバートだった。

「あんたねえ...インターホン押しなさいよ...」

ピュアが肘置きを指先で小刻みに叩きながら言うと、アルバートは

「押ししましたよ...居留守されましたけどね」

と開き直る。もちろん女王の前だから大人しくしているが、ここにピュアとペーターさえいなければ、もっとせせら笑ったり皮肉を言ったりしていたことだろう。

「すみませんが、サファイアちゃんを借りてもいいですか？」

アルバートがそう言うと、サファイアは焦った表情で

「...え...まさか、もう完成した感じですか？」

と聞き返した。

「多分ね」

アルバートは余裕の微笑みを浮かべながら頷き、ピュアにもう1度

「サファイアちゃんを借りてもいいですか？」

と尋ねる。

「...まあ、いいけど...すぐ返しなさいよ、今こっちの工作中なんだから...」

ピュアはそう言ったが、アルバートが“冗談でしょう？”という眼をするのを見て、

「...一応」

と付け加える。

「ありがとうございます.....じゃあサファイアちゃん、おいで」

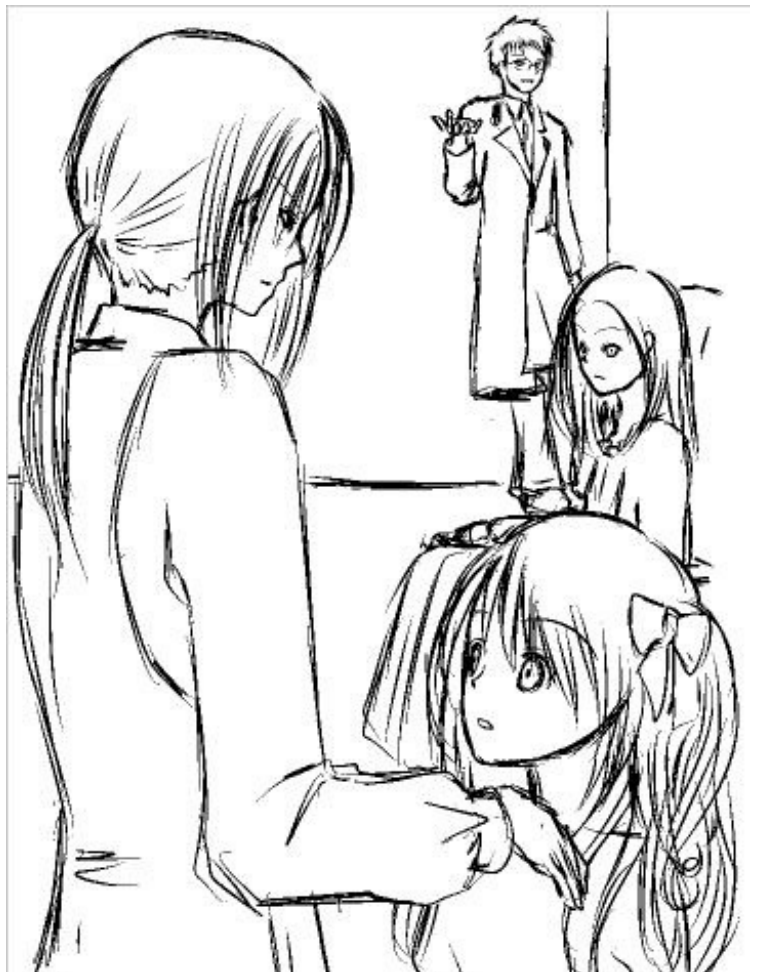
そう呼ばれて渋々行こうとしたサファイアの肩を、ジャックは反射的に掴んで引き止めた。サファイアは驚いたように振り返ったが、その表情はすぐに苦笑へと変わり、

「大丈夫だよ、じゃっくん」

と言って、その手をそっと外す。

「では、すぐに戻って参りますので」

サファイアは皆にそう言うと、パタパタと部屋を出ていった。



※102...このセリフから分かることは、青玉島の王宮で出てくるマンゴープリン、ファミレスで出されるものときほど変わらないと

ということである。

※103...電話代をケチるところや今の発言な



どから考えると、夢幻界1の大国を治める女王様の経済観念は一般国民と非常に近いと言える。

魔法班及び総合班の計4人は、転送魔法の開発を競い合っていた。他の2人は呼んでいないようだが、今回の要件もそのことであるのは間違いない。

「...本当にもう出来たんですか？」

アルバートの実験室でサファイアがもう1度聞くと、アルバートは

「まあ、君は女王様の側近と兼職だからこっちにばかり取り組んでられないし、しょうがないけどね」

などと言って笑う。要はもう出来たということだ。

「見ててご覧...」

アルバートはそう言うと、自分の百露華を取り出して光を灯した。万華鏡のような、色とりどりの模様が広がる。アルバートがサファイアの近くの机を指差した。そこに置かれているのは、黒髪を1つに束ねた男の人の人形だ。 ※104

その人形に光が投げかけられた瞬間、人形はふっと消えた。そしてその直後、微かな光と共に人形が部屋の隅に現れる。

「...ほら」

アルバートは転がった人形を指差しながら、くっと口角を上げた。“ほら...僕の勝ちかな”と言わんばかりだ。

「...何か、果物か野菜はありませんか？」

それに対し、サファイアは人形をきちんと立ててあげながら、あくまでも取り澄まし顔で尋ねた。

「アボカドならあるけど...」

アルバートがそう言って冷蔵庫から取り出すと、サファイアは

「それでもやってみていただけます？」

と頼む。

「いいよ」

アルバートはふふっと笑いながら、今度はアボカドを転送した。

「ほら、問題ないだ...っ!!」

先程と同じ場所に転送されたアボカドを拾い上げようと、アルバートが掴んだ瞬間、その手がピタリと固まる。軽く握っただけであるにもかかわらず、アボカドはクシャリと潰れ、手と机をベトベトに汚したのだ。

「あーあ...やっぱりですか」

愕然とするアルバートに、サファイアが失笑しながら歩み寄った。

「到着地点がきちんと定まるようにすると、水分の多いものを転送したときにそうなっちゃうん



ですよね...」

「ただいま戻りました」

サファイアが女王の間に戻ると、ピュアはすぐさま

「出来た？」

と尋ねてきた。するとサファイアはあたかも残念そうな顔をして

「あと1歩のようでしたね」

と答える。

その答えを聞いたピュアは、“ああ、そう。どっちでもいいけど、さっさと完成させてよね”と言おうと口を開いた。しかしその瞬間にふとサファイアが何かを大切そうに抱いていることに気づき、

「あら？あんな...」

と首を傾げる。

サファイアは何かを探しているかのようにきょろきょろしていたのだが、ピュアにそう声を掛けられると、

「はい？」

と振り向いた。

「あんな、何持ってるの？」

ピュアがサファイアの抱いているものを指差しながら怪訝そうに尋ねると、サファイアは

「この子ですか？」

と言いながら抱いていたものを皆に見せる――アルバートが実験に使っていた、黒髪を1つに束ねた男の人の人形だ。

「アル博士が持っていたんですけど、一目で気に入っちゃいました」

サファイアは愛おしそうな眼差しで人形を見つめながらそう説明した。

「だいぶ交渉して、いただいたんです」

サファイアの視線が一瞬だけ人形から離れる。それに気付いたディックはサファイアの目の動きを追うが、その視線の先にいたのはジャックだ。

「あ、そう...ウィルソンも変なものばかり持ってるわね...」

ピュアがそう溜息交じりにコメントした。しかし、サファイアは再び部屋の中をきょろきょろと見回している。自分が先程食べようとしていたマンゴープリンが見当たらないことに気づき、どこへ行ってしまったのだろうと捜しているのだ。

「あれ?...」

サファイアが不安そうに呟いた。するとすぐに、サファイアの問いを先読みしたジャックが「悪くならないようにしまっておいただけです」

と言いながら冷蔵庫からマンゴープリンを出してやる。

「なあんだ...びっくりした」

サファイアは心底ホッとしたように言ってから、

「じゃっくんありがとう!!」

と笑った。

※104...どうでもいいことだが、こんな人形ってなかなか珍しいと思う。“たまたまあったから使ってる”なんてことはないと思うのだが、いったい、どんな意図でこれを使っているやら...

2007年8月18日

「...あら？」

パソコンの画面を見ながら、ピュアが不審そうに呟いた。

「どうしたんだい？」

ペーターが尋ねる。

「実験棟、まだ誰も来てないみたい...」

ピュアが小さな声で呟くように言うと、驚いたサファイアがすぐに

「え？」

と聞き返した。

「ほら、使用中マークになっているところが1つもないの...いつもならこの時間には、あんたたち以外はみんな出勤してるのに...」 ※105

ピュアはそう言ってペーターとサファイアに画面を見せる。

「おかしいですね...何があったんでしょう？」

科学部員は全部で30人。そこからサファイアとジャックを除いた28人に、青玉組の4人が電話をかけてみた。 ※106 しかし、いくら電話しても繋がらないので、今度はサファイアとジャックが皆の家に行ってみる。

2時間半後、先に帰ってきたサファイアが

「みんな家にいません。しかも、どこも争った形跡が見られました」

という報告をした。さらに、その10分後に帰ってきたジャックの報告もほぼ同じだ。

「...ってことは、まさか...」

ピュアが小さな声で独り言のように呟くが、どう考えてもその“まさか”しかない——青玉島の超優秀科学者たちが、揃いも揃って何者かに誘拐されてしまったらしい。

青玉島は国家をあげて捜索に乗り出した。しかし、誘拐された科学者たちの中で1人、気になる者がいる。ジャックの報告によると、アルバートの家のみ争った形跡がないとのことなのだ。これは、後に取り調べに入った警察も同じ結論を出している。

その日の夜、サファイアは自分のベッドに座ってずっとパソコンの画面を睨みながらキーボードを叩いていた。本当なら研究室で転送魔法の研究をやる予定だったのだが、昼間発覚した科学者行方不明事件を受けて立入禁止にされてしまったので、仕方なく自室で研究しているのである。

夜は更け、2:30を回った。

「...じゃっくん、寝ないの？」

今まで研究に没頭していたサファイアが、ふと気になって尋ねる。

サファイアもジャックもひどい遅寝早起きが普通になっているタイプだが、その酷さ加減は研究状況に左右されることが多かった。今研究に追われているサファイアは酷さMAXだが、ジャック

クの方はそこまでではないはずである。

「あなたは寝ないのですか？」

ジャックが聞き返すと、サファイアはあっさり

「うん」

と頷いた。

「今日は徹夜する気満々だよ」

「...そうですか」

サファイアの返事を聞いたジャックは、そう答えながら少し迷うような素振りを見せる。

「じゃっくんいつも睡眠時間1~2時間しかないんだから、寝た方がいいよ」

サファイアがそう促すと、彼は数秒間考えたのち

「...そう、ですね...」

と言ってパソコンを閉じた。それから

「...それでは失礼します」

と言って立ち上がり、自分の机の方に向かいながら何か紐らしきものを大切そうに首から外す。

「...それなあに？」

その仕草を後ろから見ていたサファイアが、軽く首を傾げながら尋ねた。

「...ペンダントです」

ジャックが答えると、サファイアは驚いたように

「えっ?!ペンダントしてたの?!」

などと言いながらパソコンをベッドの上に打ちやり、駆け寄ってくる。

「...ええ...」

サファイアがしてみると、それは木のペンダントだった。長方形のプレートを、繊細な薔薇模様に掘り抜いてある。かなりの年代物のようだが、よほど念入りに手入れしているらしく、保存状態は極めて良好だ。

「綺麗だね。なんか、ジャックに似合ってる感じがする」

サファイアがそう言うと、ジャックは何かを押し殺しているかのような声で、静かに

「ありがとうございます」

と答えた。

...また、夢を見た。

連れ去られる姉。思わず飛び出す自分にロッドを向ける母。そのロッドが放つ閃光から自分を庇って崩れる父親。暴走した魔力による爆発。残ったクレーターと、横たわる両親の死体。やがて帰ってきた姉を見て、再会の喜びに手を伸ばす。すると、それに応えるような形で突き付けられる刃。

“私を恨むの？”“自分だって親を殺したのに？”

僕は...僕は.....

「...ジャックってばっ!!」

思いっきり怒鳴られて、ジャックはハッと飛び起きた。

「ジャック...大丈夫？」

ジャックを叩き起したサファイアが、心配そうに聞いてくる。

「...ええ...大丈夫です、すみません」

ジャックはそう答えながら、ちらっと時計を見た。

03 : 26

...もう起きよう...

「あ...もう起きるの？」

サファイアが驚いて尋ねる。

まだ1時間も寝てないのに...

「...ええ。だいたいいつもこれぐらいの時間ですから」

ジャックは、嫌に淡然とした、感情のない声でそう答えた。

※105...サファイアとジャックを除く科学部員は、皆自宅から王宮の実験棟に通っているのだ。

※106...あくまでも青玉島内部の話だから、青玉島の間でどうにかしようということである。

国家を挙げての搜索が日夜続けられているにもかかわらず、科学者たちは誰も見つからなかった。

「...犯人誰なのよ...」

ピュアが疲れたような声を出す。彼女の指がまた肘置きをカチカチ叩いているのは言うまでもない。

「要は、テロリストたちじゃなければいいんだけどなあ...」

ルチアーノが言った。

「誘拐されちゃったのって、いわば夢幻界トップクラスの科学者なわけだろ？それがテロリストの方に流れちゃったら痛いもんなあ...」

こう呟くのはルビー。まさにその通りなのだ。青玉島が夢幻界に誇る科学技術。それを担う科学者たちを失うだけで青玉島にとっては大きな損失だし、他国に流れては脅威になる。だから紅玉組にとっても他人事ではないのだ。

ましてや、それがテロリストなどに使われでもしたら...

そんな声は国民の中からもあがっていた。さすがの青玉島も、世論は厳しい目で王宮の対応を見つめている。

「分かってるわよ、そんなこと...」

そんなわけで、ピュアは今非常に焦っていた。

搜索が進まないまま、秋が来てしまった。もう木々の葉は半分以上落ちてしまっている。

「うー...」

そんな秋の夜中、サファイアは自室でパソコンの画面を睨みながら不機嫌な顔をしていた。隣には、MWが浮かんでいる。まだ研究室は“捜査中につき立ち入り禁止”なのだ。

「お茶が入りました」

サファイアの背後から、淡々とした声とともに紅茶がずっと置かれた。サファイアは驚いて振り返ったが、もちろんそこにいるのはジャックである。

「あ...どうもありがとう」

サファイアがそう言ってカップに手を伸ばすと、ジャックはちらりとパソコンの画面を見ながら

「行き詰っているのですか？」

と聞いてくる。

「うん...粗方出来ていると思うんだけど、転送先の位置をきちんと決められないんだよ...ほら」

サファイアはそう言いながら浮かんでいたMWを百露華に収めると、たまたま手元にあったハンドレストにその光を当てる。 ※107 するとハンドレストはふっと消えてしまった。

「あれ...どこいっちゃったんだろ...」

きよろきよろするサファイアを、ジャックが

「ここにありますが」

と言って手招きする。

「あららら...」

ハンドレストが転送された先は例のジャック・オ・ランタンの真下だった。ちょうど、小さなクッションの上にカボチャが座っているという状態だ。

「じゃっくん、どうしてこんな場所にあるこんなクッションを、こんな短時間で見つけれられるの？」

サファイアがカボチャをどけてハンドレストを拾いながら尋ねると、ジャックは「偶然です」

とだけ答える。

「...そっか...」

サファイアはそう言いながらカボチャを元の位置に戻すと、ちょっとその頭を軽く撫でた。それから1度MWを取り出し、ちょっと弄る。

「...でね、転送先をきちんと決めると、今度はこうなっちゃうんだよね...」

そう言ったサファイアは、今度は冷蔵庫から洋梨を取りだした。そして、キッチンにビニール袋を広げると、

「今度はあの中に転送するよ」

と宣言してから、先程と同じように転送する。

「ほら」

今度は正確に転送出来た。サファイアの手の上にあった洋梨は、見事ビニール袋の中に収まっている。

「だけどね」

サファイアがそう言いながらビニール袋ごと洋梨を掴むと、アルバートのアボカドと同じように潰れてしまった。

「アル博士も私も、ここで行き詰ってるの」

サファイアはそう言ってMWを取り出す。

「位置をきちんと決める部分は、この色によって決まるんだ」

そう言いながら、MWの1ヶ所を指差す。ピンク色の部分だ。

「だけど、これだと水分の多いものを転送した時に、中がぐずぐずに崩れちゃうの。それを防ぐにはここを、C=255.165、M=056.348、Y=29.036、B=0 ※108 にしないとイケないんだけど...どっちも同じ場所だから、まさに二律背反で...」

ジャックはMWを見つめながら、しばらく黙っていた。それから、サファイアに

「...MWと他のものを組み合わせることは可能ですか？」

と尋ねる。

「他のもの...？」

サファイアが首を傾げた。すると、ジャックは黙って頷いてから、

「例えば、魔法陣などと組み合わせてはいかがでしょう」

と言う。

「あー...」

サファイアはそう言いながら腕を組んだ。サファイアも魔法学者だから、もちろん魔法陣のことは知っている。ただ、青玉魔術ではMWの方が主流であり、魔法陣はほとんど使わないので、それほど詳しいわけではない。

「どうだろう...あー...でも、そうか...」

サファイアはそんな言葉ともつかない言葉を並べながら、いろいろと考えてみた。

「確かに、どちらかを魔法陣で指定すれば、もう片方をMWに組み込めるんだよね...そっか...あー...でも、私魔法陣ってあんまり分かんないんだけど...じゃっくん、分かる？」

サファイアが尋ねると、ジャックは

「あなたがMWを扱うようにはいきませんが...少しなら分かります」

と答える。

「ええッ?!本当？」

サファイアが驚いたように聞き返した。それからジャックの正面に回ってきちんと背筋を伸ばすと、

「手伝ってくださいっ!!お願いします!!」

と言ってペコっとお辞儀をする。

「わたしでよろしければ」

ジャックがそう頷くと、サファイアは“助かったあ...”と言わんばかりの調子で

「どうもありがとう!!」

とお礼を言った。

※107...“ハンドレスト”とは、長時間パソコンを使う時にマウスを操作する方の手を支える小さなクッション。要らないように思えるが、使ってみると意外とラク。

※108...C・M・Y・Bはそれぞれシアン、マゼンタ、イエロー、ブラックのこと。256諧調。ちなみにこの数値だと、少し緑がかった濃い水色になる。

MWをメインとし、魔法陣で位置を確定する。この方針を立ててから、サファイアのーいや、2人の研究は地道だが、順調に進んで行った。欠点は転送のスタート地点とゴール地点に魔法陣を書かなければならないことだが、それも昔のように手描きする必要はない。予めその魔法陣の形を百露華に記憶させておいて、印刷MWを使えば、どこにでも一瞬で描くことができるのだ。

11月末には、ジャックの魔法陣が一応形を成した。そのあとサファイアがMWを魔法陣に組み込んで行く。ちょうど、黒線で描かれた魔法陣の隙間を色で埋めて行く形だ。そうして初めて形になったのは12月中頃。そのあとは実際にいろいろな物を転送してみながら、調整を重ねて行く。

一方、年が明けるとディックとルビーはあちこちに出かけるようになった。無論遊びに行っているわけではない。夢幻界5大要所同時爆破テロが起きてから、もう2年の月日が経とうとしているのだ。その間にディミア襲撃事件、科学部員誘拐事件などが起きているにもかかわらず、犯人像は一向に掴めないままである。そのうえ、もともとの脅迫メールには“我々の指示に従いなさい”と書いてあったにもかかわらず、それ以後青玉島に何か要求をしてきた例がないという点も不気味だ。今までももちろん青玉島と紅玉高原の情報処理局が動いてはいたのだが、彼らでは危険過ぎてあまりいけないような場所があったのも事実である。そこで、そういう場所へディックとルビーが情報収集に行っているのだ。しかしそれでも、これだというような情報は掴めていない。

そうこうしているうちに青玉島にもまた暖かい風が吹き始め、季節は春を迎えていた。そしてサファイアとジャックの転送魔法開発も、もう最終段階を迎えている。

2008年3月17日

半月より少し膨らんだ月が、空に優しく光っていた。そんな晩に、女王の間ではピュアが若干イライラしながら電話している。

「...ー一分かったわ。じゃあ近々.....え？今日？今日はもう帰っちゃ.....はいはい分かったわ、分かったわよ...じゃあできるかぎり早く行かせるから待っててちょうだい...」

ピュアは3分ぐらいの電話を終えると、いつもの玉座から立ち上がってサファイアたちの部屋をノックした。もう21:00近いので、サファイアもジャックも自室に戻ってしまっているのだ。

「はい？」

出てきたのはジャックだった。

「どうなさったのですか？」

基本的にピュアが2人を勤務時間以外に呼び出すようなことはないので、ジャックは何かあったのではないかと思い、やや鋭く尋ねる。

「クリアシャインは？」

ピュアはジャックの質問に答えないまま聞いた。

「隣の部屋で実験をしておりますが」

ジャックが答える。また転送魔法の微調整を行い、今度こそ完成と言えるだろうかという実験をしているところだったのだ。

それを聞くと、ピュアは
「ああ、そう。分かったわ。じゃあそれが終わったら...」
“...クリアシャインを寄こしてちょうだい”と言おうとした。ところがそう言い終わる前に、
「できたあっ♪」

というサファイアの嬉しそうな声が聞こえてくる。

「じゃっくんじゃっくん、出来たよ!!完璧だよっ!!」

そう言いながら、サファイアがパタパタと駆け寄って来た。ところが、ジャックより先にピュアが

「本当っ?!」

と聞き返す。

「ピュア様?!」

サファイアが驚きの声を上げた。まさかピュアがいると思っていなかったのだ。しかし、ピュアはそんなことには構わず真剣な声で

「それ、後で見せてちょうだい...本当はすぐに見たいんだけど、今はあんたに至急会いたって人がいるのよ。今すぐって言うから、行ってあげて...」

と言うと、サファイアを手招きした。

その人に会いに行ってからサファイアが帰ってきたのは、部屋を出てから1時間後くらいのことだった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

そう言って迎えたジャックに、サファイアは

「何か、ルル・メンテさんっていう若い女の人に会ったんだけど...その人、たまに過去のことを夢で見るんだって。その夢の話だったよ」

と話す。

「“メンテ”さんですか？」

ジャックは思わず聞き返した。

「そう」

サファイアはそう頷くと、

「何か、その家系で未来のことを見れる人は“リル”、過去のことを見れる人は“ルル”って名前を受け継いでるんだって言ってた」

と捕捉しながら少し眉を顰め、

「なんか、よく分かんない話だったよ」

と付け足す。

「...そうですか」

ジャックは軽く相槌を打ちながら、1500年前のサファイアの友人を思い出していた。 ※109

...あの子の子孫か...?

そう思っていると、女王の間と繋がっているドアをノックする音が聞こえてきた。ジャックが開けてみると、案の定ピュアが立っている。

「今誰か帰ってきた音がしたと思ったのよ」

ピュアはそう言いながら、ちょっと部屋の奥を覗いた。

「あ、やっぱり帰ってきてたのね。クリアシャイン、ちょっといらっしやい」

ピュアにまた手招きされて、サファイアは

「はい」

と言いながら駆け寄ってくる。

「じゃあじゃっくん、話の続きは後でね」

そう言うと、今度は女王の間に行ってしまった。

サファイアが再び帰ってきたのはまたその1時間後だった。ピュアに、ルルから聞いた話をしてきたのだという。

「さっき“話の続きは後で”って言ったんだけど、ピュア様が、誰にも話しちゃダメだって...ごめんね」

そう謝るサファイアに、ジャックは

「構いませんよ」

とだけ答える。

「ルルさんの話、不思議な話だったから、じゃっくんにも聞いてもらいたかったのに...」

サファイアは残念そうに言うが、そんなことを言われてもジャックとしては

「そうですか」

としか答えようがなかった。

転送魔法の報告は翌日となった。ピュアとペーターの前で、サファイアとジャックが実演してみせる。

「あら...すごいじゃない」

ジャックの手から、ピュアの膝の上に敷かれた魔法陣 ※110 の上へと蔓の盛られた籠が移動したのを見て、ピュアがサファイアを褒めた。ところが首を横に振りながらサファイアが

「ジャックが魔法陣を作ってくれたんです」

と言うと、ピュアもペーターも

「え?!」

と驚いてジャックの方を見る。

「君は化学者兼医者じゃなかったのかい？」

ペーターが目を丸くして尋ねた。

「ええ、そうです」

ジャックが頷くと、ピュアが本気半分冗談半分に笑いながら

「あんた...魔法班にも入る？」

などと提案する。

「おいでよ」

サファイアに至っては、完全に本気で言っているようだ。

しかし、ジャックは

「いえ...昔、必要に迫られて少し触ったことがあるという程度ですから」と言って断った。

その日の夜、サファイアはルビーの部屋へ遊びに来ていた。サファイアのカップには紅茶が、ルビーのカップにはコーヒーが入っている。

「...ねえ、ルビー？」

ティーカップをソーサーに置いたサファイアが、ふと真面目な声で話しかけた。

「ん？」

ルビーが首を傾げると、サファイアは

「1500年ってさ...すごく長いと思わない？」

などと言ってくる。

「へ？」

いきなり妙なことを言い出す姉に、ルビーは一瞬きょとんとした。それから、「ま、まあ...そりゃ長いだろ...うん。めっちゃめっちゃ長いと思うけど、それが？」と聞き返す。

「だってさ、1500年って言ったら青玉島の歴史より長いんだよ？」 ※111

サファイアはゆっくりとした口調でそう言うが、あまり答えになっていない。

「そうだな...青玉島建国って何年だっけ？」

ルビーは首の後ろに手を遣りながら、とりあえずそう聞いてみた。

「576年」

サファイアが即答する。

「ってことは今から...えーっと...2008-576だから...1432年前か。うん、確かにそうだな」

ルビーはそう言ってから、もう1度

「で、それが？」

と尋ねた。

「今日、転送魔法が完成したって、ピュア様たちに報告したんだ。その時に“ジャックは化学者でお医者さんなのに、魔法陣もできるなんてすごいね”って話になったら、ジャックが、“昔、必要に迫られて少し触ったことがある”って言ってたんだ。それで、そう言えばジャックって...ジャックもディックも、1500年以上生きてるんだなあ...って思って...」

サファイアはそう言うと、1口紅茶を飲む。

「あー...確かに。そう考えると、うちらってあいつらのことほとんど知らないわけだよな...分母が大き過ぎて」

そう言いながら、ルビーが天井を仰いだ。

「ねー」

ルビーはディックのことが好きで、私はジャックのことが好きなわけだけど...私もルビーも、その人のこと全然知らないんだ...

「いったい、1500年間何してたんだろうね？」

サファイアは答えをまったく期待せずに尋ねていた。ところがルビーは、

「あ、ディックはなんか、人を捜してたらしいよ」

と答える。

「え？」

サファイアが聞き返すと、ルビーは

「うん。誰かは知らないけど...」

と頷いてみせた。

「あ、そうだったんだ...」

サファイアは驚きの声を漏らしたあと、

「となると...ジャックはどうなんだろう？」

と首を傾げる。

「聞いてないの？」

ルビーが聞き返した。

「ん...目的があったってことと、もう叶ったってことしか」

サファイアが答えると、ルビーは腕を組んで

「うーん...」

と考え込んでしまう。そしてしばらくした後、突然

「あっ」

と言って手を叩いた。

「ディックを捜してたんじゃない？お互いにお互いを捜してた、とか」

「あ、なるほど!! 確かにあり得る感じだよね」

サファイアもすっかり納得する。

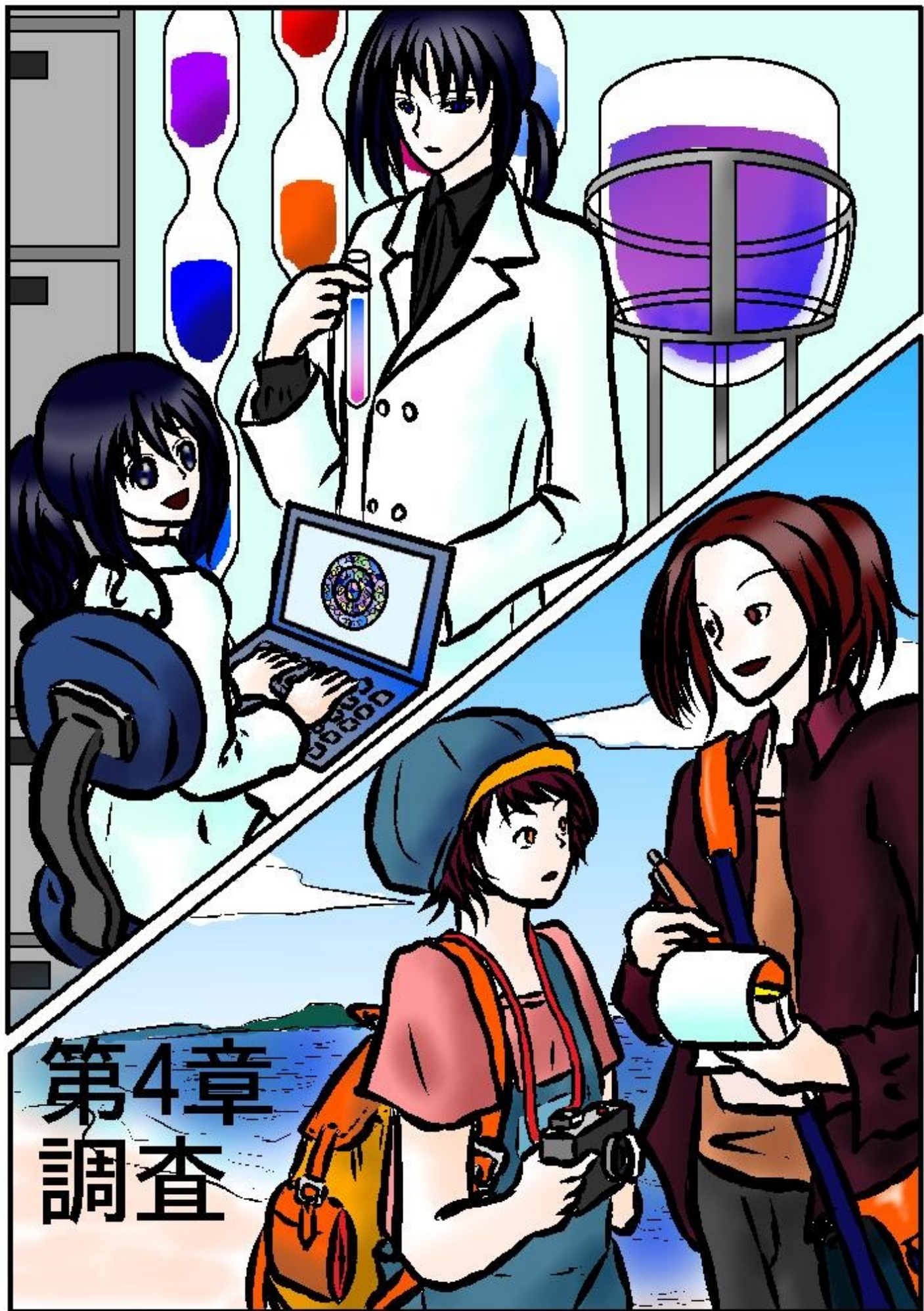
「ってことは、めちゃめちゃ仲良いじゃん!!」

ルビーがそう言うと、姉妹揃っておかしそうに笑い始めた。

※109...はたして“友人”と呼ぶべきなのかどうかジャックにはいまいち分からないのだが、少なくとも1500年前のサファイアはそう認識していた。

※110...“魔法陣を印刷した紙を、ピュアの膝の上に載せていた”という意味。

※111...何故青玉島を引き合いに出したかということ、夢幻界で最初に成立した国家が青玉島だからである。



第4章
調査

2008年5月28日

日付が27日から28日に変わった瞬間、ピュアのもとに1通のメールが来た。2年前の夢幻界5大要所同時爆破テロの際に送られてきたメールと同じ送信者だ。

内容は、“我々の指示に従いなさい。今日を含めてあと4日待とう”というもの。

「どういうことなの?!」

ピュアがイライラしながら叫んだ。

「従えと言いながら、指示を出していませんよね」

ディックはそのメールを見ながら、怪訝そうな顔をして首の後ろに手を持って行く。

「指示が暗号化されている、とかでしょうか...」

サファイアがそんな憶測を口にして首を傾げると、ピュアに

「だったらちょっと解析してみて...」

とパソコンごと渡された。 ※112

「もうすっかり、指示した気になってるんじゃない？」

ルビーが少し笑いながら冗談交じりに言うと、ジャックが狷介な面持ちで

「それでしたら余計怖いですよ」

と指摘する。

「もしも向こうがそのまま4日間気づかず、指示したと思いこんだままでいたら、こっちが無視したと思って、情け容赦なく襲撃してくるのでしょうか」

サファイアが解析した限りでは、特に隠されたメッセージなどはないだろうとのことだった。送信者もやはり分からない。ピュアはとりあえず、国内の警戒レベルを最大にまで引き上げた。警察も軍も(今まで以上に)厳戒態勢に入っている。ただし、訳の分からない脅迫メールが来たとなると、大パニックになる可能性があるため、こんなメールが届いたということは発表していない。

2008年5月30日

メールが届いてから2日経った日の18:36、情報処理局から電話がかかって来た。

「はい？」

ピュアがすぐさま電話に応じる。

『こちらー』

“ー情報処理局のサリー・カーターです”と名乗ろうとした彼女の言葉を、ピュアが

「分かってるわよ、サリー。何事？」

と遮った。しかし、サリーはピュアに急かされても、意に介するふうもなく淡々と用件を伝える。

『青玉島国内で、20人の武装グループが不審な行動を繰り返しているとのこと。場所はナタリア州ウェイレット市ー』

「クリアシャイン、キュアラー」

サリーからの電話の10分後、ピュアはサファイアとジャックに命令を下した。

「今すぐ問題の場所へ行きなさい。やることは2つ。まず、そのグループの目的を確かめること。音声なり映像なり、証拠を持ってきてちょうだい。次に、それがテロだの暴動だのその他何かま
ずそうな内容だったら、何がなんでも阻止すること。どちらの時点でも、第3者にばれないよう
にやってちょうだい——だから、奴らの隠れ家の中で捕まえて、王宮に転送して来ることね。到
着地点の魔法陣はこっちで描いておくから。あ、間違っても殺さないで、生け捕りにするのよ。
いいわね？」

ピュアが一気に言うと、側にいたルビーが

「ちょっと待って」

と口を挟んだ。

「うちらは行かないの？」

ルビーはそう言いながら、自分とディックを指差す。

「うん。おまえらは待機」

その問いに答えたのは、ピュアではなくルチアーノだ。

「何で？」

ルビーが聞くと、今度はピュアが

「青玉島の中で片付けたい...というよりむしろ揉み消したいのよ」

と答える。それからもう1度サファイアたちの方に向き直って

「じゃあ...いいわね？」

と念を押すと、サファイアとジャックは

「了解です」

と答えた。

※112...転送したりすると隠された情報が損なわれる可能性があると思ったのだろう。

ナタリア州ウェイレット市トゥインクル通り。かつては賑やかな商店街だったのかもしれない。しかし今は、煌めく名前とは裏腹に酷く寂れていた。通りに並ぶシャッターには落書きがたくさんあるし、穴が空いていたりもする。街灯の多くが割れていて、機能しているのはおよそ半分だけだ。残り半分は、月明かりが補っている。

「...青玉島にも、こんな場所あるんだね」

サファイアが低い声で呟くが、ジャックは何とも答えない。

「どうしよう、なんか怖いんだけど...」

ジャックは、そんなことを言っているサファイアの表情を見た。サファイアは苦笑しながら首を傾げている。“怖い”と言いながらも、それなりの余裕はあるらしい。ジャックは黙ったままふと目を伏せた。サファイアもゆっくり瞬きをすると、再び正面を見据える。

2人の着ているスプリングコートを、初夏の風が揺らしていた。その下には制服を着ているが、今はまだ見られないほうが良い。

「...ここ？」

ふと立ち止まったサファイアは、番地を見て確認した。

「でしょうね」

そう答えるジャックの声はとても低く、辛うじて聞こえるという程度だ。

「どうやって入ろう？シャッター開けたら一発でばれるよね？」

サファイアがそう言っている間に、ジャックはその建物の外壁に何かを探していた。そして、その何かを見つけたらしく、サファイアを手招きする。

「この穴から、中に入れると思います？」

ジャックが指差しているのは直径15cm程の小さな穴だった。

「あー...小人なら行けるんじゃない？」

サファイアが答える。ちなみに、百露華の縮小・拡大魔法を人間に使うことはできない。

※113

「でしたら、わたしがここから入ってどこかあなたの通れそうな入り口を確保しますから、そこから入ってきていただけますか？」

ジャックの言葉に、サファイアはきょとんとした。

「え、だって...」

しかし、そこまで言った段階で吸血鬼の能力を思い出し、

「...あ、そっか」

と笑う。

吸血鬼って、猫に変身できるんだよね...

「じゃあこれはどうする？」

サファイアはそう言いながら、小型カメラを取り出した。指輪程度の大きさしかないが、暗くてもきちんと写るようになっている優れものだ。

「わたしに貸してくださいー転送魔法はお願いできますか？」

ジャックが聞くと、サファイアは

「了解」

と頷きながらカメラを渡した。

「ありがとうございます」

ジャックがそう言ってカメラを受けとった瞬間、彼の姿が消えて代わりに黒猫が現れる。

...あれ？この黒猫、どこかで...

サファイアがそんなことを思っているうちに黒猫はするりと穴をくぐり、闇の中へ消えて行った。

ジャックはちょうどその穴の真上にある2階の窓を開けてくれた。メールでそれを知ったサファイアは、メルクリウスでひらりと飛び上がり、廃ビルの中へ入り込む。

それは廊下の窓だった。入って右手の方から、声が聞こえる。

サファイアは声のする部屋のドアの前まで行った。いつも通りの歩き方なのに、足音がしない。まるで、動画を消音で見ているかのようだ。

「...——どんなことがあっても母国語を喋るな。それぞれ持ち場へ行って、このボタンを押せば良い。じゃあ、当日は1日だから...」 ※114

その言葉を合図に、皆がガタガタ動く音がした。

...急がなきゃ...!!

そう思ったサファイアは、スプリングコートを脱いで床に放りながら、勢いよくドアを開け放つ——...

「!!」

サファイアはドアを開ける一瞬前まで、部屋に集まっているのは政治的意志を持ってテロを行おうとしている大人たちなのだとはばかり思っていた。ところがいざ開けてみると、10~15才くらいの子供ばかりが20人ほど集められている。

...みんな、私より年下ぐらいの子供ばかり...

サファイアは、魔法銃を構えることを一瞬躊躇った。怯んでしまったと書いた方が適切かもしれない。しかし、リーダー格の少年——この子だけは18才くらいだ——がピストルを構えたのを視界に捕らえると、考えるより先に身体が動く。

「うわっ!!」

サファイアの魔法銃が少年のピストルを弾いた。

「動くなっ!!」

サファイアが声を張り上げる。

「王命により、ここにいる者全員を連行する」

何人かは自分の武器を——ピストルだったり、魔法銃だったり、ロッドだったりとまちまちだったが——動かしたが、構え終わる者はいなかった。どれもサファイアの魔法銃に弾かれ、宙に放物線を描く。

大半はサファイアがいるのと反対側にあるドアから逃げようとした。しかし、そちらではもちろん、ジャックが同じように魔法銃を構えている。

「...従えば殺すような真似はしない。わたしたちに従いなさい」

そう言うジャックの声は、いつもより低くて冷たかった。

5分後、子供たちは1列に並ばされていた。逃げたり、抵抗したりするものがないよう、魔法銃を構えたジャックが冷厳な眼で見張っている。

列の先頭にいたのは10才ぐらいの男の子だった。サファイアが彼に百露華を向けると、彼は完全に怯えきった様子で、恐る恐る

「...僕たちを、殺すの？」

と聞いてくる。

「王宮へ転送するだけです」

ジャックが短く答えた。取り付く島もない答え方だが、それでも少年は

「じゃあ...そこで死刑になるの？」

と聞いてくる。

「分かりません」

そう答えたのはサファイアだった。濁りのない透明な声が、少年を冷徹に貫く。

その場に硬直した少年は、百露華の色鮮やかな光に照らされた ※115 瞬間、蒸発するように姿を消した。

結局、そこにいた子供たちは全員王宮に転送された。逃がしてほしいと泣き出す子もいたが、サファイアたちの態度は少しも揺るがない。そのため、あっという間に全員転送し終わり、外に出てきた。空の暗さも含めて、周囲の様子はここへ着いた時と何1つ変わっていない。

「...なんか、呆気なかったね」

ビルを出てから、サファイアがぽつりと呟いた。2人ともまたスプリングコートで制服を隠している。

「お互いに怪我1つなく済みましたからね」

ジャックはそう答えながら、サファイアの方を見る。もう、先程の少年たちに向けていた冷徹さの影はない。

「...うん、そうだね」

サファイアが苦笑しながら答えると、2人はパッと飛び立って闇の中に消えて行った。

※113...光を当てても、何も起こらないというだけである。

※114...脅迫メールが来たのは5月28日

※115...魔法陣はMWの黒で表現されている。一方、到着先の魔法陣はきちんとインクで描かれている。

捕まった子供たちは、取り調べに対して実に従順だった。

彼らは、“言うことを聞けば家族の生活を一生保障してやる”と言われて集まった、新興国に住む貧困層の子供たちらしい。実行犯には同情の余地もあるが、彼らが行おうとした計画の内容は非常に恐ろしいものだった。6月1日までに青玉島が“何でも従います”と言わなかったら、1人1つ魔法爆弾を持って青玉島のあちこちに散り、自爆テロを行うという計画だったのだ。防げたことはよかったのだが、どんな人が何の目的でそんなことを命じたのかを知っている者は、残念ながら誰ひとりとしていなかった。

青玉島および紅玉高原は、ずっとテロリストの報復に警戒していた。しかし、特にそのようなことは何も起こらない。もちろん起きないに越したことはないが、どうも奴らのやることは腑に落ちない。

“我々の指示に従いなさい”という言葉の意味も、今回の事件でようやく分かった。次に何か明確な指示がくるのかと思っていたのだが、その前にまず“何でも従います”という言葉を待っていたのだ。

少年たちは青玉島の法律に基づいて粛々と裁かれた。判決が下り、確定したのは6月30日のことである。全員、罰金500万Fanだ。

少年たちの判決が確定した夜、サファイアは窓の外に広がる曇り空をぼんやりと見つめていた。

「サファイア？」

ジャックが話しかけると、彼女は

「ん？どうしたの？」

と言って振り返る。その声は底抜けに明るい。

「...空元気ですね」

ジャックはわざと、サファイアの演技を指摘した。

「.....」

せっかくの“空元気”を一瞬で突き崩されたサファイアは少しの間黙っていたが、やがて小さく溜め息をつくとき、また窓に目を向けて

「だってさ...」

と話し始める。

「あの子たちって、要は藁にもすがる思いで、今日の食べ物もない家族のために自分の身を犠牲にしようとしたわけでしょ？別に悪い子たちじゃないし、ただ大人に利用されただけで.....500万Fanって言ったら、あの子たちじゃあ一生働いたって払えないような額だよ？もうそこから幸せになるってほぼ不可能だし...しかも、あんな末端部分の人たちを罰したって根本的な解決にはなっていないし...そう考えると、私たち、何したのかなあって...」

サファイアらしくない、要領の掴めない話だった。出てくる言葉が要領を得ないのは、言うまでもなく彼女の考えがまとまっていないからだ。

「何もしなければ、それこそ何百人もの犠牲者と、政治的・経済的被害が発生したはずですよ。それに比べたら致し方ないでしょう」

ジャックが言うと、サファイアは

「...うん...そうなんだけど...でもさ、もしかしたらあの子たちだって大きな幸せを掴んでいたかもしれないのに...」

と呟きながら俯く。

「...あの子たちが悪いわけじゃないのに...」

ジャックも窓に目をやりながら、少しの間考えていた。

確かに、サファイアの言うことは間違っていない。彼らは何十人、何百人、何千人という人の命を一瞬のうちに吹き飛ばそうとしたのは事実だが、彼らはいわば道具でしかない。見方を変えればただ利用されただけの被害者なのに、無限の可能性を秘める彼らは、ただひたすら罰金を払うことだけに一生を費やさなければならないのだ。

だが、こうなるということはサファイアにも想像できたはずである。にもかかわらず、あの時の彼女は驚くほど――未だかつて見たことがないほどの冷厳さで任務をこなしていた。サファイアはもうそういったことを割り切ってしまったのかと思っていたのだが...どうも違ったらしい。

「...サファイア」

ジャックは、静かな声で話しかけた。

「わたしたちは正義の味方ではないんですよ」

その言葉に、サファイアは驚いて顔を上げる。

「普遍的に正しいことをしようと思ったら、それは不可能です。そんなことをしていたら、わたしたちのほうが悪くなってしまいます。わたしたちは青玉島女王の側近に過ぎないので、青玉島のために働けばいいんですよ」

本当はそんなことを言うてはならないのかもしれないが、要するにそういう話なのだ。そう分かっているにもかかわらず、ジャックは自分でそう言いながら、心のどこかでサファイアが反駁してくれたらと思っていた。しかしジャックの望みに反して、サファイアは黙って小さく頷く。

。

「...そっか...そうだよ」

サファイアはそう呟くと、何ともやりきれない笑みを浮かべた。

夏が終わり、そのあとやって来た秋もどンドン深まり、いつのまにか冬の足音すら聞こえていた。

「なあなあ姉ちゃん...ちょっと聞いてくれない？」

夜の実験室。論文を書くサファイアの横で、ルビーが紅茶を飲みながら話しかけた。

「どうしたの？」

キーボードを叩きながらサファイアが首を傾げると、ルビーは

「その...ディックのことなんやけど...」

と切り出す。

その言葉を聞いた瞬間、サファイアはパタンとパソコンを閉じた。

「うん、どうしたの？」

身体ごときちんとルビーに向き直ってそう尋ねるサファイアに、ルビーは

「姉ちゃん...興味津々なのな」

と苦笑する。

「いいからいいから、どうしたの？」

サファイアが先を急かした。サファイアとしては、自分が恋愛出来ない分、妹の恋に関わっていたいのだ。もしかしたら、一種の疑似体験なのかもしれない。

「この前、ディックに“1500年間捜してたのって、もしかしてジャック？”みたいに聞いてみたんだけど...そしたらどうも、違うみたいなんだよ」

腕組みしたルビーがそう言うと、サファイアは

「ええっ?!」

とびっくりして叫んだ。

「だって...そんな、1500年も生きてる人なんて、他にもういないでしょ？」

疑いようがないというように確認するサファイアに、ルビーは

「まあそうなんだけど...でも嘘ついとる感じじゃなかったけどなあ」

と首を傾げる。

「...で、だったら誰だよって考えてたら、ふと、もしかして恋人とかかもって思って...1度そう思っちゃうと、もうそれが離れないんだよ...」

そう言いながら、ルビーはしゅんと俯いてしまった。

...ディックの前でもたまあにこういう態度をすればなあ...

サファイアはそう思いながら、

「...つまり、それを聞いてこいと。そういう話？」

と確認する。

...そんな話、私が聞いたところで話してくれるかなあ...？

サファイアとディックは2人とも人あたりがいいので、すぐに打ち解けはしたのだが、かといってそこまで踏み込んだ仲でもない。いくら仲がよくても、あくまでも“仕事仲間”という感じなのだ。

しかし、真剣に悩んでいる様子の妹に

「うん...別に急いでるわけじゃないから、ちょっと...頭の片隅にでも置いて、聞けそうなときに聞いてみてくれればいいから...」

などと頼まれると、サファイアももう断れなくなってしまう。

「分かった...やってみる」

結局、サファイアはそう頷いてしまった。

サファイアが部屋に帰ったのは23:00過ぎだった。サファイアとジャックの就寝時刻は0:30、この2人にしてはものすごく早い。

ところが、サファイアはなかなか寝付くことが出来なかった。ルビーの話を知ると、つい色々なことを考えてしまって、なかなか眠れないのだ。

ディックが恋人を捜してたのかもしれないって言ったって...いくら吸血鬼だって、普通1500年も生きないよ?!あの2人のほかに1500年も生きている人がいるとは思えないんだけど...あー...それとも、あれかなあ...なんか、恋人と離れ離れになっちゃって、捜しているうちに1500年経っちゃって、もうとっくに死んでるだろうけどそれが受け入れられないみたいな.....え、でも...ディックって絶対そういうキャラじゃないよね...でも、かといって他の可能性って言うと.....ダメだ、だって、誰にしたって“1500年も生きられるはずがない”って問題はなくなるし.....むしろ、誰か1人の人を捜してるんじゃないかって、何かの条件を満たす人を捜しているとか...?

サファイアの頭の中に、ありとあらゆる可能性が浮かんで消えて行く。ちょうど、シャボン玉が無数に現れてははじけて消えていくようなものだ。

あ、そう言えば...ディックがジャックを捜してたわけじゃないってことは、ジャックもディックを捜してたわけじゃないのかなあ...?ってことは、ジャックは1500年間も何のために旅してたんだろう?まさか、それこそ...まさかなのか...なあ...?

...あーもうっ!!眠れないよ...

仕方なく、サファイアはベッドから抜け出した。散歩にでも出掛けようかと思ったのだ。ところがサファイアは、ふと隣のベッドを見て立ち止まる。

...ジャック、またうなされてる...

こうして夜中によく起きるようになってから、サファイアはたびたびジャックがうなされていることに気づいていた。酷いときには起こすのだが、ジャックはいつも大丈夫だと言い張っている。

「ジャック...ジャック!!」

サファイアはそう言って揺すった。すると、ジャックはパッと飛び起きる。

「...あ...僕、うなされてました...?」

ジャックの声はこういう時でさえあまり乱れない。しかし、かといって平静かと言えば決してそんなこともない。

「うん」

サファイアはそう言いながら、ジャックのベッドに腰掛けた。

「大丈夫?」

サファイアが尋ねると、ジャックは俯いて

「ええ、大丈夫です...すみません」

と謝る。

「...ううん」

サファイアが首を振った。

こうやって起こすと、ジャックはいつも決まって“大丈夫”と言った後、“すみません”と謝ってくる。いつも力になってくれるジャックだから、そのジャックが困ってるときには、私も力になりたいのに...私じゃ力不足なのかな...

いつも、こういうことがある度にサファイアはそう思っていた。しかし、ジャックがサファイアを頼ろうとするような素振りを見せたことはない。

「...大丈夫じゃないでしょ？」

サファイアが試しに尋ねてみた。その声があまりにも静かだったことに驚いたジャックは、思わず

「...え?...」

と顔を上げる。

「...あ...ごめん...」

微かに驚きの色を含んだ眼で見つめられて、今度はサファイアが謝ってしまった。

「私、でしゃばるつもりじゃ...」

サファイアはそう弁解しようとするが、ジャックは

「...サファイア」

と言ってその言葉を遮る。

「ん？」

ジャックは何かを言いたがっているように見えた。しかし、ふと時計に目を走らせると、

「...いえ、何でもありません」

と言って話すのをやめてしまう。

03:07

「ううん、今で大丈夫だよ。ちょうどもう起きようと思ってたところだし...」

サファイアはそう言うと、ふわっと微笑んだ。今までに見せたことのない、包み込むような笑顔だ。

「...ありがとうございます」

ジャックはいつものようにきちんと座り直すと、静かに話し始めた。

ジャックの話は40~50分に渡った。家族構成のこと、戦争のこと、お姉さんが誘拐されてしまったこと、お父さんの最期、ジャックがお母さんを殺してしまったこと、再会したお姉さんに殺されかけ、その後結局、敵対したままだったこと...

「...1500年以上経っているのですが、今でも...よく、その時の夢を見るんです」

ジャックは最後、そう言って話を結んだ。深く俯いているため、どんな表情をしているのかわからない。

「...そう...大変だったんだね...」

サファイアはそう呟いた後、小さな声で

「でも、すごいと思うよ」

と言った。

「...“すごい”...ですか？」

あまりにも予想外な台詞にジャックが顔を上げると、サファイアはジャックの眼を見つめてはっきりと頷く。

「会ったことないから分かんないけど...もしもお父さんが今のジャックを知ったら、きっと誇らしく思うよ。だって...青の薬商人に救われた人、数え切れないもん」

1500年間旅し続けて、ジャックが助けた患者さん。さらに、その患者さんが助かったことで、その人の家族、友達、恋人...そういった人も救われたはずだ。そんな調子で考え始めたら、とても数え切れやしない。

「私だって.....ジャックがいつもそばにいてくれることで、本当に救われてるんだ。ほら、今だっけこうやって...一緒にいてくれてるでしょ?...それって、すっごく嬉しいんだよ」

サファイアは心底幸せそうな笑顔で話していた。しかし、ここで1度言葉を切ると、心と俯いて遠い眼をする。

「...みんなね、私とすれ違う時とかいつも、危険物を見るような眼で見てるんだ。自業自得でしょって言われちゃったら言い返せないし、自分自身でも当たり前だと思ってたんだけど...でも正直に言うと、やっぱり辛いんだよね。いっそのまま消えてしまいたい、そうすれば周りも自分もみんなラクになれる...そう思ったこと、何回もあったよ。だけど、ジャックが来てくれて、そばにいてくれて、優しくしてくれて.....本当に救われたんだ」

今、サファイアは毎日を楽しく過ごしている。ルビーとはすっかり仲良しだし、ディックとも友達になれた。女王の間で賑やかに過ごしているのは本当に楽しい。でもそれは、ジャックと出会わなかったらありえなかった。ジャックがいつもそばにいてくれるから、ジャックという存在があるから、サファイアは何重にも張り巡らせていた防御線を、ディックやルビーに対しても取り除くことができた。

サファイアはジャックのことが好きだというだけではない。サファイアが今のサファイアになるためには――そして、そうあり続けるためには、ジャックの存在が必要不可欠だったのだ。

「ね？」

サファイアは顔を上げてそう笑いかけると、

「お父さんが知ったら、きっと誇りに思うよ」

と繰り返す。

「.....」

ジャックは何とも答えられず、ただ黙っていた。

自分の存在がサファイアの力になっているというなら、それはとても嬉しく思う。しかし、この話をするのは今回が――デイビッドに話したのは別カウントとして――3回目だが、まるで母親の話がなかったかのように展開するのは初めてだ。

「...いいんですか？」

ジャックは思いきって聞いてみた。するとサファイアは、

「お母さんのこと？」

と言って苦笑する。

「まあ...よくはないんだろうね、それは」

サファイアはそう言いながらふと目を逸らした。しかし、ジャックが何か言うより早く、

「でも」

と続ける。

「でも、なんか...正直言って、あんまり気にならないんだ.....自分でも不思議なくらい、気にならないんだよ」

...気に、ならない...

ジャックは声に出すことなく繰り返した。サファイアはずっと遠くを見つめている。

「“よくはない”けど、“気にならない”...のですか？」

今度は口に出してゆっくりと聞き返した。

「うん...」

サファイアもそっと頷く。

よくはないのだろう。でも私、ジャックのこと大好きだから。私にとってジャックは...ジャックは1番大切な人だから.....いや、そればかりではない。ジャックの存在が、私の存在の拠り所だから――正直なところ、そういう保身的な思いもある。

「...それより...これからもずっと、一緒にいてね」

サファイアはそう言うと、先程とはまったく違う、子供らしい無邪気な笑顔を見せた。

2008年11月26日

ルル・メンテが死体で発見されるという事件があった。死亡推定時刻は4:53、ただ殺されたのではなく、手酷い拷問の末の死だった。

この連絡を受けたピュアの取り乱し様は並ではなかったという。顔面蒼白でガタガタ震え、しばし本当に口も聞けなかったとのことだ。それほどまでに取り乱した理由の1つには、ルルと最後に話したのが他ならぬピュアだったということが挙げられるだろう。1:35にまた“サファイアに会いたい”という連絡をよこしたのだが、時間が時間だったのでピュアが朝まで待つように言ったのだという。しかし、他にも理由があるのかどうかはよく分からない。

この後2~3日の間、ピュアとペーターは非常に忙しかった。本来なら、こういう時こそ側近を使うべきなのだろう。しかし、ピュアたちはどういうわけか、サファイアにもジャックにも手伝わせるどころか、何をしているのかすら一言も言わなかった。

2008年12月16日

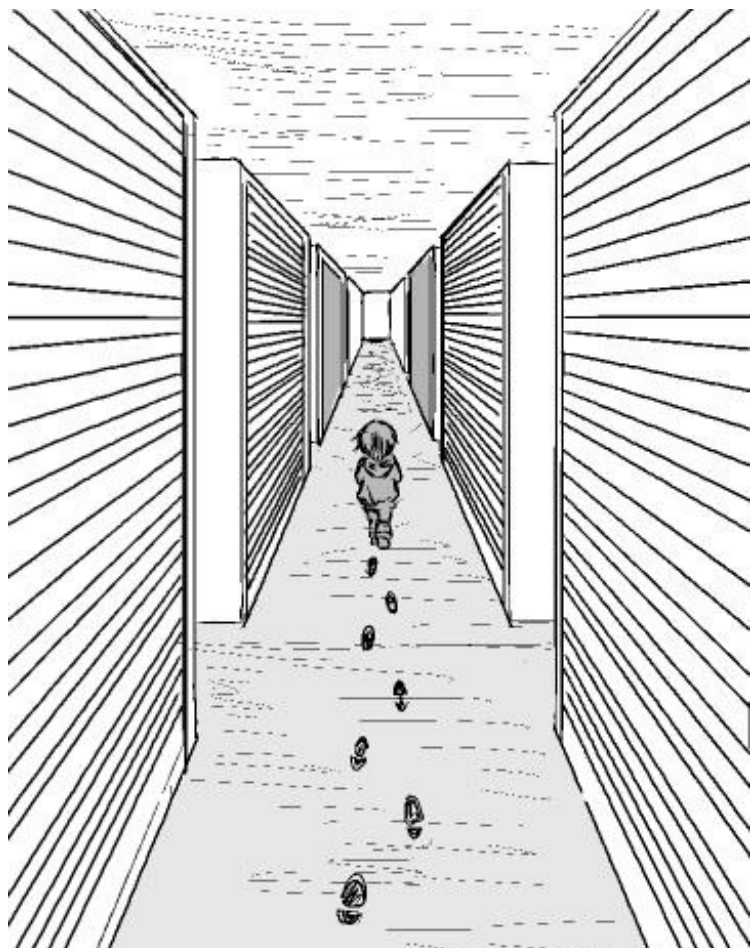
青玉島と海を隔て、紅玉高原を西から北へと通り過ぎ、さらに北上すると、柘榴溪谷という国がある。青玉島や紅玉高原ほどではないが、夢幻界の中ではかなりの大国だ。これらの第2流国家は、“準夢幻王国”という。

柘榴溪谷はその名の通り、深い谷間にある国だ。1年のほとんどは、白銀の雪に閉ざされている。そんな国だから、12月と言えばまさに極寒だった。道行く人は皆、暖かい家を目指して足早に歩いているのだが、中にはそうしたくてもできない人だっている。柘榴溪谷は準夢幻王国の中でも、所謂新興国だ。急成長の裏には、貧困に喘ぐ人々もいるのである。

エイゼンシュテイン州ガブリルユック街ファミンツイン通りの地下商店街。柘榴溪谷の中でも有数の貧困街だ。かつては大変賑やかな商店街だったのだが、今はすっかり寂れ果て、ゴーストタウンと化し、物乞いやホームレスなどが廃テナントに潜んで暮らしているのみである。

そんな中、汚れた廊下に小さな足跡を残して、ちょこちょこと駆けていく少年がいた。真っ直ぐな黒髪と鮮やかな碧眼を持つ少年が、両腕いっぱい空き缶を抱えて走っている。

この子がファミンツイン通りに来たのは3年前、まだ1才のころである。物心ついたころからずっとここにいる少年にとっては、来る日も来る日も空き缶を拾い集めるのが当たり前だった。夜中になると人目を盗んで地上



に行き、空き缶を拾い集め、地下で待っている父親のところへ持って行く。そうすると、父親はそれをどこかへ持って行き、お金と——もちろん、スズメの涙ほどの金額なのだが——交換し、闇市に行って親子2人分の食べ物を買うのだ。それが上手くいかない日は、ご飯抜きである。



「イヴァン」

少年は、後ろから不意に名前を呼ばれてピタッと立ち止った。振り返ると、濃紺の髪の若い女性が立っている。

「おねえちゃん!!」

イヴァンと呼ばれた少年はその女性のところへ駆け寄った。

「今日も空き缶拾い？」

女性が尋ねると、イヴァンは

「うん。ほら、こんなにみつけたよ」

と言いながら、腕の中の空き缶を得意げに見せる。

「ふーん...よかったわね」

女性はそう言うと、ポケットから何かを取り出し、イヴァンが着ている擦り切れたパーカーのポケットに押し込んだ。

「...？」

イヴァンが不思議そうに首を傾げると、女性は

「後で、お父さんと開けてみなさい」

とだけ言って、もと来た道を歩き始める。

「.....」

イヴァンはその後ろ姿をじっと見つめていた。しかししばらくすると、思い出したように父親のもとへ再び走り出す。

5分後、イヴァンは空き缶を父親に渡すと、ようやく開いた手をパーカーのポケットに入れ、先程女性が押し込んだものを取り出した。素っ気ない小箱だ。

「何だい？その箱は...」

父親が尋ねると、イヴァンは

「さっきね、いつものおねえちゃんがぼっけにいれてくれたの」

と答えながら、箱のふたを開けてみる。

「うわあ!!クッキーだ♪」

イヴァンは嬉しそうに叫んだ。一緒に中を見た父親も、目を丸く見開いていたが、やがてクッキーの底に小さなカードが入っていることに気づくと、

「ちょっといいかい？」

と言いながらそのカードをそっと取り出す。

「なあに？それ...」

今度はイヴァンが尋ねた。

「メッセージカードだね...」

父親はそう答えながら、無地のカードに刺々しい文字で綴られた短い言葉を、信じられない思いで見つめていた。

「とうさん...？」

そう言われてハッと我に帰ると、父親はまだ字を読めない息子の代わりに、そのメッセージを読み上げる。

「“イヴァン、4才のお誕生日おめでとう” ※116

しばらくの間黙っていた少年と父親は、互いに顔を見合わせると、どちらからというでもなく笑い出した。

※116...“イヴァン”という名前は、キリストの十二使徒の1人であるヨハネから派生したロシア語の名前である。ラテン語ではヨハンネス、イタリア語ではジョヴァンニ、フランス語ではジャン、英語ではジョン、転じてジャックとなる。

窓が焦げ茶色と濃い水色に彩られる季節は終わり、外は白1色となった。

2008年12月23日

この日の夜、サファイアは絵を描いて遊んでいた。しかし、ペンタブレットのペンを動かしても、しばらく待たないとその軌跡が現れない。

...あー...重くなってきた...ちょっとレイヤー重ね過ぎかなあ.....うん、今度メモリーを拡張しよう...

そんなことを思っていると、廊下側の出入り口からインターホンの音がした。ルビーかなあと思いながらモニターを見ると、映っていたのはディックだ。

「はい」

サファイアはパタパタと駆けて行き、ドアを開けた。

「もしかして、じゃっくん？じゃっくんなら今実験室だよ」

サファイアが言うと、ディックは

「あ、そうなの？じゃあ後でそっちも行ってみるけど...」

と言った。どうやら、サファイアにも用事があるらしい。

サファイアはディックを通し、紅茶を淹れた。ディックの前には赤の、自分の前には青のティーカップを置く。

「お砂糖何杯？」

首を傾げて聞いてくるサファイアを見て、ディックは思わず頬を引き攣らせた。サファイアが朗らかに笑っているのは結構だが、その手に持っているスプーンはやけに大きい。

「ちょっと待て、それ...世に言う“大匙”だよな...？」

ディックが確認しても、サファイアは満面の笑顔を崩すことなく、

「うん」

と頷く。

「...そのスプーンだったら6分の1でお願いします...」

説得を諦めたディックは仕方なくそう答えた。大匙1杯は約15ml、小匙1杯の3倍だ。ティースプーンと小匙はだいたい似たようなものだろうから、サファイアの持つ“スプーン1杯”は世間一般が言うところの3杯に相当する。

「6分の1？少ないんだね...」

サファイアはそう言いながらも、余計に入れるような真似はしなかった。ところが、自分の分には山盛り1杯入れようとする。

「ちょっ...ストップストップストップ!!」

ディックが慌ててサファイアの右腕を掴んだ。

「多すぎだろっ!!」

ディックが言うと、振り返ったサファイアは

「だって...じゃっくんが2杯までって言うから...」

と口を尖らせる。

「今のを2杯入れる気だったの?!」

ディックは思わず聞き返した。

...いやいやいや...それ2杯入れたら、普通に10杯ぐらいの量だぜ...

「だって...」

「だああもうっ!!せめてこんぐらいにしとけっ!!」

ディックはそう叫ぶと、サファイアの手からシュガーポットと大匙を取り上げ、擦り切り1杯だけ量り取って渡した。これでも小匙3杯分だからジャックなら許さないだろうが、まあ...この辺りで大目に見てやってもいいだろう。

「むううう...」

サファイアは納得いかないようだったが、とりあえずここで妥協ということになった。

「ところでどうしたの？」

散々騒ぎながら淹れられた紅茶を飲みつつ、サファイアがそう尋ねた。

「あ、そうだった...」

ディックはそう言われて用事があったことを思い出し、自分のポケットをまさぐる。

「これ、何だか分かる？」

ディックはそう言いながら、ペラッとしたメモ紙を取り出した。黒いペンで何かが書かれている。

「どこかの古代文字？」

サファイアはそれを見た瞬間にそう尋ねた。すると、ディックの表情が思わず硬直する。

「.....ああ、そう。古代文字.....うん、そういうことにしとくか」

ディックは片頬で笑いつつそう呟いてから、

「あー俺すげえ、古代文字なんか書けるんだぜ...」

と言っていじけたような仕種を見せた。

「え?あ...違うの？」

サファイアが慌てて聞き返すと、ディックはさらに2枚のメモ紙を取り出す。

今度はザックリとしたイラストが描かれていた。画風が違うことからすると、それぞれ別の人が描いたのだろう。

「トナカイ？」

サファイアも今度は、少し考えてから答



えた。鹿と迷ったのだが、ことさらに鼻を強調しているところを見ると、おそらくトナカイだろう。 ※117

「...うん、そう」

ディックは頷いた後、

「さっきの古代文字もトナカイだったんだけどな...」

と付け足す。

「...え...」

サファイアの表情が固まった。それから蒼白な顔でもう1度それを手に取ると、

「...あ...あ、うん、見えるよ。その...ほら、これ角だよね??」

などと言って、どうにか取り繕おうとする。するとディックは、一層遠い眼をして

「うん、いいよ、無理しなくて...てかまず、それ逆さまだし」

と指摘した。

「.....」

...もう、フォローのしようがない。

「...ごめんね、ディック...本当に...」

サファイアはしゅんと俯いて謝った。多分、真剣に謝られると余計辛くなるということには気付いていないのだろう。

「...ちなみに、こっちがルビーで、こっちがルッチーナ」

仕方なく、ディックは残り2枚の描き手を明かした。

「ちょっと待って」

それを聞いた瞬間、サファイアがディックの言葉を遮る。

「“ルッチーナ”ってまさか...ルチアーノ様の仇名？」

サファイアが聞き返すと、ディックは手をひらひらさせながら

「仇名じゃない、愛称だ愛称」

と答える。

紅玉事情はよく分かんないなあ...

サファイアは心の中で呟いた。もしもサファイアがピュアに愛称を付けでもしたら、間違いなく“ほっぺみいいいの刑”が執行されることだろう。 ※118

「...じゃあもう1つ聞いてもいい？」

ディックが話を変えた。

「あのさ...今、何かルビーが欲しがってるものとか知らね？クリスマスプレゼント欲しいとか言ってるんだけど...」

...そんなこと言ってるんだ...

サファイアはある意味で妹を尊敬した。

私なら言えないなあ...やっぱり、紅玉事情はよく分かんないよ...

そう思いながらも、サファイアは少し思いを巡らせてみた。そしてしばらくしてから、

「うーん...メルクリウスかな」

などと答えてみる。

青玉島ではメルクリウスが一般的な移動手段となっているが、紅玉高原では炎の戦車という空飛ぶ自転車普及していた。しかしまあ、戦ったりするにはメルクリウスの方がずっと便利である。

「ちょ...メルクリウスって...」

しかし、ディックは難色を示した。

「...うん。冗談」

サファイアも笑いながら否定する。メルクリウスは安くて5万Fan、きちんとしたものなら20万Fanはする。もちろんディックなら買うことはできるが、ちょっとしたプレゼントという額ではない。

「なんか、女の子っぽいものがないんじゃない？髪飾りとか、ペンダントとか...」

サファイアが提案すると、ディックはまた眉を顰めた。

「...使う質には見えねえけど...」

まあ確かに、ルビーはあまりそういう質ではない。ただサファイアは、ディックがそういうものをプレゼントしてあげれば、“女の子として見てもらえている”ということで喜ぶのではないかと考えたのである。

「そんなことないよ。はにかんだりするとすごく可愛いんだから」

サファイアは大真面目な顔を繕って主張した。

...はい、知ってます...

それに対し、ディックは心の中でだけ呟く。

...いい思い出じゃねえけどな...

一方サファイアは、秋にルビーと約束したことを思い出していた。恋人を待っていたのか否かという話だ。

...今って、もしかしてチャンスじゃない？

「...そういえば、ディックは他の人にはプレゼントあげないの？」

サファイアは何気ない調子で尋ねた。

「へ？」

ディックがきょとんとして聞き返す。

「あ、サファイアちゃん欲しい？」

ディックはもしやと思いながら言った。しかし、サファイアは

「え、いや、そういうことじゃなくって...」

と言って首を振る。

「え？じゃあ...何、ジャックってこと？」

ディックが大真面目に聞くと、サファイアは一瞬の間をおいてから、突然くすくす笑い始めた。くすくす笑いなのだが、なかなか治まらないせいで話すことができない。

「ちょっ...プレゼント、やり取りして...たの？か...可愛すぎ...」

「違ッ...してないってば!!」

ディックが慌てて否定しても、サファイアの笑いは治まらなかった。1分ぐらいして、ようやく落ち着いたサファイアは、ふう...と長めの息を吐いて、話に戻る。

「そうじゃなくって、恋人さんとか。いないの？」

サファイアの質問に、ディックは驚くべき速さで

「いない」

と答えた。

「いないよ。付き合ってる人も、好きな人も」

ディックはそう、はっきりと念を押す。あまりにもきっぱりとした言い方だから取り付く島などないように思えるが、サファイアはそれでも引き下がらない。無神経なふりをして、あえてしつこく粘る。

「そう？いかにもいそうだけど...」

サファイアはそう言ってから、ふと思いついたような調子で

「あ、もしかして本当はルビーのこと好きだったりするんじゃないの？だからプレゼントとか...違う？」

と聞いた。わざと、いつもより高めの大きな声にしている。

サファイアの言葉に、ディックの表情が一瞬なくなった。その後、彼はすぐに表情を取り戻して

「いやいやいや...」

と戯れ言のように笑いながら否定したが、サファイアもこの一瞬に起きた変化を見逃してはいない。

「ええええ?!絶対そうでしょ、間違いないって」

サファイアは確信しているかのように言った。

「ディック、結構表情に出てるよ。何かいつもルビーのこと気にしてるっぽかったりとか...ほら、同じ姉妹でも私に話すときとルビーに話すときじゃ全然態度違うし...それにさっき、私が“ルビーって可愛いんだよ”って言った時も、満更じゃなさそうだったし...」

サファイアがそう並べ立ててみても、ディックは笑いながら黙って首を振るばかりだ。

これ以上押しても仕方がないと思ったサファイアは、

「そっかあ...てっきりそうなんだとばかり思ってたけどなあ...」

と諦めたような発言をしながら、さもがっかりという表情を作った。するとディックは、

「んな顔したってさ...しょうがないじゃん」

と苦笑する。

しかし、サファイアはその一瞬前にディックが見せた安堵の色を見逃さなかった。安堵の色を見せるということは、逆にいえば今まで焦っていた、警戒していた、不安だった...ということになる。

「...やっぱりバレバレ」

サファイアはテーブルに片肘をつく、手の甲に顎を載せて口角を大きく持ちあげる。

「...え？」

サファイアはわざとバレバレだの何だのと言っていたが、本当はこれまでにディックがボロを出したことは1度もなかった。しかし、油断していたところをまた突かれたせい、ディックは今度こそはっきりと焦りの色を見せる—いや、焦っているというより、警戒しているようだ。とりあえず、ただ恥ずかしいから隠したいというだけではなさそうである。そもそもそれだけの話ならここまで真剣にならなくてもいいはずなのだ。思春期の子供ならともかく、大の大人なのだから...

何かあるのだろうか...？

「え、だから違うって...」

ディックは尚も否定した。しかし、サファイアが

「いや、もう諦めなっ」

と諭すように言うと、ディックはこれ以上何か言うことをやめて、小さく溜め息をつく。

「どうなの？」

何か深刻な事情があるはずだと分かっているながらも、サファイアは最後までその姿勢を崩さなかった。

「サファイアちゃん、思ったよりしたたかだなあ...」

ディックにそう言われると、サファイアは少し傷つくのと同時に、改めて申し訳なく感じた。

ごめんね、ディック...子供だと思って許して...

しかし、それでも

「そう？」

などと言って、あくまでもとぼけ通す。

「頼むから誰にも言わないでくれよ、サファイアちゃん」

“誰にも言わないくれ”だなんて、この手の話では必ず言われる言葉だが、ディックの言い方には苦しいくらいの切迫感がある。やはり何か、厄介な事情があるのだろう。

「...うん、分かった」

ルビーを応援しているサファイアにとっては実に喜ばしい返事であるはずなのだが、どうもいまいち喜べない。

...何なんだろう...？

しかし、いくら気になっても、無神経なふりをして聞くのももう限界だ。現に今、2人の間には若干気まずい空気が流れているのである。

...どうしよう...？

ところがそう思っていると、廊下の方から

「...ただいま戻りました」

という声が聞こえてきた。

「あ、お帰り!!!」

ジャックがうまいタイミングで帰ってきてくれたことにほっとしながら、サファイアは明るい声で返事をする。

「あ...ディック、来てたのか」

リビングに入ってきたジャックが言うと、ディックは

「うん...悪いな」

と謝った。

「いや、別に...」

ディックはサファイアに対するジャックの想いを知っているから謝ったのだが、ジャックはまさかディックが何かするとは思っていないので、別に気にする風もない。

「あ、おまえにも聞きたかったんだ。これ、何だか分かる？」

ディックはサファイアが古代文字と呼んだ図形の描かれているメモ紙を見せた。すると、ジャックはそれを一瞥しただけで

「トナカイ」

と言い当てる。

「よっしゃあ!!おまえなら分かってくれると思ってたよ!!」

ディックは大喜びでガッツポーズをしたあと、ジャックの肩を半ば抱くような形でぽふぽふ叩いた。一方、サファイアは驚きのあまり声も出ない状態である。

「まったく...みんなクラゲだのゴキブリだのって...なんか古代文字とか言う子もいたし...」

肩の高さで手を上向きに開いてディックが言うと、ジャックは

「...そう言われてもやむを得ないと思うが」

と一蹴した。しかし、そう言うジャックの眼はまったく明後日の方向を見ている。

何見てるんだろう...?

そう不思議に思ったサファイアは、ジャックの視線を追いかけてみた。そしてその先に置かれている物に気付くと、そのまま凍りつく。

あ...片付けるの忘れてた...

「...サファイア」

ジャックが氷のような声で呼び掛けた。ディックは、サファイアを見下ろすジャックの恐ろしく冷たい眼と、サファイアが蒼白な顔で見つめている大匙を見て、思わず吹き出してしまう。

「...当然ご承知かと存じますが、あれでしたら3分の2杯までですよ」

ジャックの言葉に、サファイアはただ黙って頷くしかなかった。

※117...もちろん、かの有名な“真っ赤なお鼻のトナカイさん”というクリスマスソングの影響である。

※118...そういう状態を、世間一般では“処罰なし”と判断する。

2009年6月12日00:03

就寝直前に自分のメールボックスとディマイアのニュースサイトを確かめることはピュアの日課である。この晩も例に漏れずそうしていたピュアは、画面を見ながら愕然とした様子で

「...嘘でしょ...」

と呟いた。

「どうしたんだい？」

ペーターが首を傾げながら尋ねる。しかし、ピュアは父親の質問には答えず、ただ

「...みんなを集めなくちゃ...」

とだけ呟いた。

それから5分後、女王の間にはいつもの7人が集まっていた。その場にはいないが、フィリップにも電話が繋がっている。パジャマを着ているのはピュア、ペーター、ルチアーノ、フィリップだけだ。

「...何だよ、こんな時間に...」

ルビーが眠そうにぼやいた。しかし、ピュアが

「...今、またテロリストからメールが来たの」

と言うと、その場の空気が一変して広い部屋を緊張が満たす。

「クリアシャイン姉妹が欲しいんですって。来月の今日までによこさないで、青玉島のどこかに埋めてある化学兵器を爆発させるって、脅迫してきてるわ」

自ずと、全員が目が姉妹に集まった。当の姉妹も、互いの顔を見合わせている。

「...え？...私たちを、ですか？」

サファイアが唖然とした様子で聞き返した。

「クリアシャインって苗字はこの世にあんたたちだけしかいないのよ」

腕組みしたピュアがイライラしながら答える。

「何でうちらを...？」

そう呟くルビーの口調も、信じられないという感じだ。

「そりゃ、魔力がうんぬんとか、もとは人間兵器だったとか、いろいろあるかも知れないけどさ...そんなんだったら、もっと早く言ってきたはずじゃん？」

ルビーがそう言っても、その問いに答える者はいない。ただ、ピュアとペーターがちらりと目配せし合うだけだ。

『どうしよう？2人を渡すわけにはいかないけど、かと言って青玉島で化学兵器なんかやられちゃったら困るし...』

フィリップが途方に暮れたように言った。

青玉島は夢幻王国の中でもっとも影響力の大きい国である。そのうえ、紅玉高原と青玉島は姉妹国ということで、互いに依存しあっている部分も大きい。そのため、青玉島が大ダメージを受けたら、紅玉高原だってただでは済まないのだ。 ※119

「まず、本当に化学兵器が埋まっているのかどうか、そこから検討しなければならないでしょう

」

ジャックが指摘した。その声はいつも通り落ち着いている。

「どこにいくつあるかも分かんないのに？」

こう問うのはルチアーノだ。

『とりあえず情報処理局出す？』

フィリップが申し出ると、ピュアは頷きながら

「ありがとう」

とお礼を言った。

「ただ、情報処理局だけじゃ厳しいかも…」

もちろん、情報を集め、真偽のほどを検討し、女王に報告するのは、情報処理局の本業ではある。しかし、情報処理局員に戦闘訓練は行っていない。したがって、局員自らが乗り込んで行う調査には、当然限界もある。それでも普段なら、ネット上の情報や口コミ、小さな噂などを拾ってくるのだが、今回はそれがあるとは思えなかった。化学兵器が埋まっているという噂があれば、瞬く間にネットを通じて全国に広まり、パニックになりそうなものだからだ。それが起きていないということは、小さな噂などにもなっていないと考えられる。

「あんたさあ、何かツテとかないの？」

ルビーがディックの腕を小突きながら言った。

「伝手？」

ディックが聞き返すと、ルビーは

「そう。なんかさ、ディマイアに口利きして、協力してもらえたりしないの？」

と言い直す。

「それは無理」

ディックは即答した。それから、今度は皆に対して

「ディマイアは、そう言った政府の要請には原則応じません。中立がモットーですから」と続ける。

「…だろうね」

ペーターが苦笑したのを最後に皆の言葉が途切れた。女王の間に絶望的な沈黙が流れる。

「あ、ただ…」

その沈黙を破ったのは、沈黙を作り出した張本人に等しいディックだった。

「こっちが動くんだったら、ちょっと頼れる場所がある、かも…」

「よし、じゃあおまえら2人で行って来な」

ディックの言葉が終わらないうちに、ルチアーノがそう言いながらディックとルビーの肩に手を置いた。

「え？うちも？」

ルビーが驚いて聞き返す。

『当たり前だろ。仲良く行って来いって』

フィリップが当たり前のように言うと、2人はもう

「はい」
と頷くしかなかった。

※119...こんな感じの文章を、前にもどこかで書いたような気がする...

夜が明けると、ディックとルビーは早速出発した。6:30のことである。 ※120

“炎の戦車”という商品名の空飛ぶ自転車を最大速度で飛ばしながら、ルビーが

「なあ、ディック？」

と話しかけた。

「うちら、今どこに向かってんの？」

ルビーが聞くと、ディックはおかしそうに笑いながら

“ヴァイス・オーガナイゼーション” ※121

と答える。

「...“ヴァイス・オーガナイゼーション”?!」

ルビーは思わず聞き返した。

「何そのネーミングセンスのなさは?!“悪の組織”...そのままじゃん!!」

そう言いながら爆笑するルビーに、ディックは

「確かに俺も最初、そう思ったけどさ...でも、笑えるのは名前だけだぞ」

と言った。おかしそうな笑いが、いつの間にか苦笑に変わっている。

「マジで？何してんの？」

ルビーはすぐ真面目な顔になって首を傾げた。それに対し、ディックは前を見ながら

「色々」

と答える。

「そいつら自身が何かやってるわけじゃないんだ。ただ、他の犯罪グループとか、反乱グループとか...そういう奴らを手伝って、それで報酬をもらうんだよ」

ディックは、ただ黙って聞いているルビーの方をちらっと見てから、再び話を始める。

「でさ、ただのパシリなら別に大したことはねえんだけど、そいつらがかなり優秀で...場合によっては、作戦の骨組みを考えるとところから奴らが関わってたりするんだ。どこの国の警察も証拠を掴めないから、そのまま野放しなんだけど...」

ディックの説明が終わると、ルビーは2・3回瞬きをしてから

「そんな奴ら、うちらが行って応じてくれんの？」

と尋ねた。

「多分」

ディックが頷く。

「俺、前にそこのリーダーの娘さんを助けたことがあるんだよ。なんか、ヴァイス・オーガナイゼーションに依頼しにきた側の組織の下っ端が、その子に絡んでてさ...あ、その子がまだ10才ぐらいの時な。で、それ以来、ちょくちょく仕事でお世話になったんだよね」

ディックの口調は軽く、けろっとしていた。もちろん紅玉高原の王宮はそんな組織には絡まないから、“仕事”というのはディマイアのことだろう。

「へええ...」

そうこうしているうちに、2人は砂浜に着陸した。島の最西端だ。6月だから、まだ人はほとんどいない。 ※122

「そいつらって、こんなところにいるの？」

ルビーが訝しげに尋ねると、ディックはニッと笑う。

「いや、もっと変なところだな」

ディックはそう言いながら砂浜を歩き始めた。ルビーがついていこうとすると、ディックはたかだか数歩で止まってしまう。そして、ルビーが何か問うより早く、ロッドを取り出した。

「何すー」

質問が終わる前に、ディックはそのロッドをさらさらした白い砂に突き立てる。

「何やってんの？」

何も起こらないのを見て、ルビーが一層怪訝そうに尋ねた。しかし、ディックは

「まあ見てろって」

とおかしそうに言うばかりだ。

「んなこと言ったって……へ?!」

砂浜から、何かがタケノコのように顔を出した。みるみるうちに生えてきて、やがて2人の背丈を抜く。

「な…何これ…」

現れたのはオフホワイトの箱だった。幅・奥行きともに1m、高さ2mと言ったところだ。正面にはエレベーターのような扉が付いていて、その隣にはナンバーキーのようなものも付いている。ディックがそこに8ケタの数字を打ち込むと、扉がすっと開いた。

「入るの？」

ルビーが尋ねると、ディックは軽く頷きながら“どうぞ”と言うように手で中を示す。

2人が乗ると、扉はすっと閉まり、箱が動き始めた。驚くべきことに、垂直方向ではなく、斜めに動いている。

「これ…どこ行ってんの？」

ルビーが聞くと、ディックは

「お楽しみだな。びっくりするぜ？」

と悪戯っぽく笑った。その子供っぽい表情は、とても1500年以上生きている人のものとは思えない。

エレベーターが止まって扉が開くと、そこから1本道の細い廊下が伸びていた。白い無機質な廊下である。そこを歩いて行く途中で、ディックが

「ほら」

と横の方を指差した。ルビーが見てみると、海の中の風景が額縁に収まっている。

「ん？ああ、綺麗な写真じゃん」

ルビーが言った。

「ちげえよ。よく見てみろって」

ディックは腕を組んで、楽しそうに笑っている。

「え？何なんだよ…あっ!!」

そんなディックに怒ろうと思ったルビーが、急に驚きの声を上げた。写真の中を、魚がサッと

横切ったのだ。よく見ると、それは写真でも動画でもない。窓なのだ。

「ええッ?!ここって、海の中...?!」

ルビーが口をパクパクしながら聞き返すと、ディックは面白そうに笑いながら

「そう。ここ、海中施設なんだよ」

と言った。

※120...この時期の青玉島の日の出時刻は6:17頃。

※121...イギリス英語なので、綴りは“vice organisation”となる。アメリカ英語だと“organization”

。

※122...このあたりの6月の平均最高気温は21℃。どう考えても海水浴をするような気温ではない

。

ディックとルビーの様子を、モニターでずっと眺めている青年がいた。赤紫色の髪と草緑色の目を持つ、20代後半の青年だ。彼は今、アジトの中に設置された隠しカメラの映像を見張っているところである。

...あれ、ディックさんだよな...？

ディックのことは、青年もよく知っていた。このアジトを見つけ出した、ものすごくやり手の新聞記者。ディマイアの専属らしいが、ディマイアはどうして彼をもっと出世させないのかと、常日頃疑問に思っている。その隣にいる女性のことはまったく知らないが、おそらく彼の後輩なのだろう。

「ガーネット」 ※123

青年はパイプいすに座ったまま、上半身で振り返ってそう名前を呼んだ。

「ああ？」

床に寝そべっていた女性が、ポテトチップスを口に入れてから答える。青年と同じ赤紫の髪だが、彼女は目も赤紫色だ。

「ディックさんが来てるよ」

青年がそう言っても、ガーネットと呼ばれた女性は数秒間固まったままだった。それから突然

、

「嘘っ?!」

と叫んで飛び起きる。

「ほんとほんと」

青年が苦笑しながら答えると、ガーネットは慌てて立ち上がった。

「ええッ?!どうしよう、じゃあ着替えなくっちゃじゃん!!」

「うん...会いたいならね」

ガーネットの格好はあまりにもいい加減だった。よれよれの大きなTシャツ、ジャージのようなズボン、髪は1つに束ねてあるが、結び方が無造作なうえにゴロゴロ寝転がっているものだから、ぐしゃぐしゃになっている。

「ヤバイヤバイ!!ありがとね、デマントイド」 ※124

ガーネットはそう言いながらバタバタと監視室を出ていった。その後ろ姿を、デマントイドと呼ばれた青年は切なげな笑顔で見送る。

「行ってらっしゃい...」

ディックとルビーが廊下を進むと、目の前に小さな扉が現れた。その前には、2人の男性が立っている。

「何者だ？」

その1人がぶっきらぼうに聞いてきた。

「ディック・ソルジャーです」

ディックは本名を名乗った。おそらく、もう顔と本名を知られているのだろう。

「おまえは？」

見張りと思われる男性が、ルビーに視線を向けた。

「あ...ルビー・カーターです」

ルビーはとっさにそう答える。“クリアシャイン”という名前は目立ち過ぎるのだ。

「...後輩か？」

見張りが尋ねると、2人は同時に頷いた。

「そう。じゃあ入れ」

見張りはそう言って、奥へ通してくれる。

「よお」

2人が扉を通った瞬間、そう呼びかけてくる女性の声が聞こえた。見ると、右側の柱に20代前半の女性が寄りかかっている。赤紫のまっすぐな髪を頭頂に近い位置で1つに束ね、ぴったりしたシルエットのパンクなプリントTシャツと迷彩柄のカーゴパンツを着ている。

「あれ...ガーネットちゃん？」

ディックは啞然としたように、小さな声で言った。

「...え...こないだあった時は、まだこんなだったよな...？」

ディックはそう呟いて、ちょうど13才ぐらいの背丈を示す。

「バカ、おまえ来たの何年前だと思ってんだよ。10年前だろ?!」

ガーネットはそう言いながら、つかつかと歩み寄って来た。

「こいつは？」

「ちょ...“こいつ”って...」

初対面にもかかわらずいきなり指さしてあからさまに聞いてきたガーネットに、ルビーはカチンと来て口を挟む。

「俺の後輩。ルビー・カーターだよ」

ディックが苦笑しながら答えた。

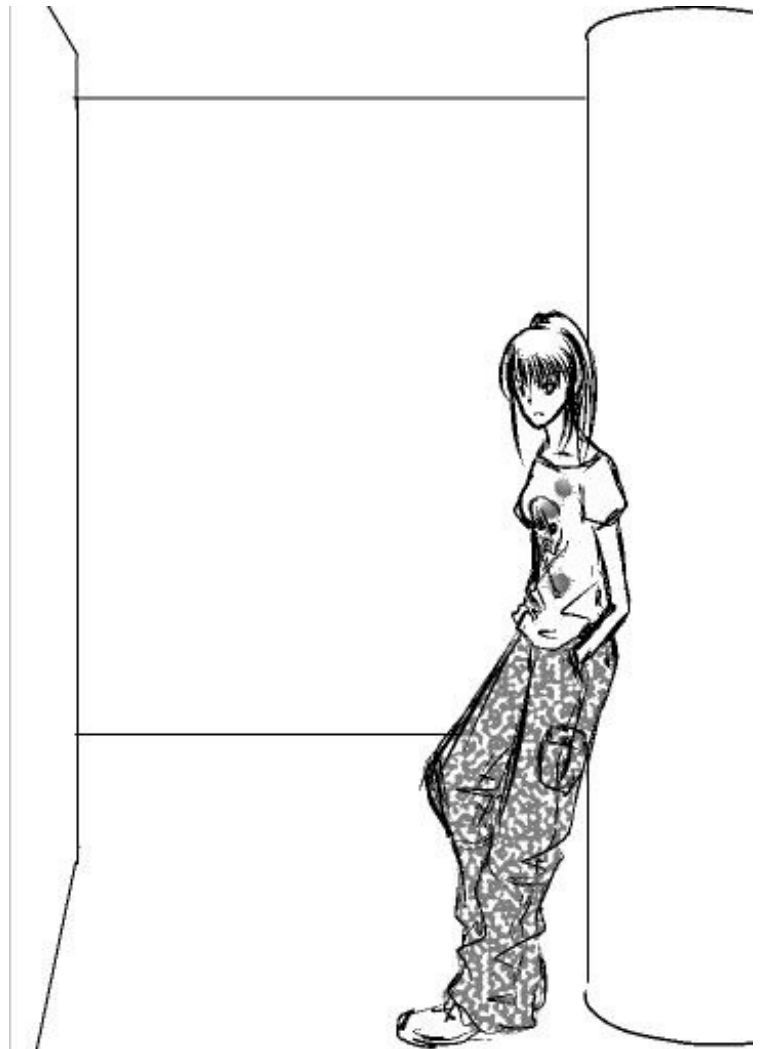
「...ふーん...」

ガーネットはそう言いながら、ルビーをじっと見つめる。どうも、気に食わないらしい。

「...あんたは？」

ルビーが不機嫌に尋ねた。もちろん、ガーネットの態度に怒っているのだ。

「...ガーネット・パマグラネット。一応言っておくけど、ここのリーダーの娘だから」 ※125



ガーネットにそう言われると、ルビーはその後と言うつもりだった文句を呑みこまざるを得なかった。交渉相手の娘とケンカするわけにはいかないのだ。

...今度個人的に会ったら、思いっきり文句言ってやろう...

「ほら、来いよ...父さんに会いたいんだろ？」

ガーネットはすぐ奥の部屋へ2人を案内した。

「父さん、ディックさんだよ」

ガーネットが言うと、メタリックな書斎の奥に立っていた男性が

「分かっている」

と言いながら振り返った。黒と見間違えるほど暗い赤毛の、恰幅のよい男性だ。目は細く吊り上がっているが、こちらに向けられている視線は敵に向けるものではない。テーブルにはすでにコーヒーの入ったカップが1つ置いてあり、さらにその両手には2つのカップを持っている。

「久しぶりだな、ソルジャーさん。こちらは...？」

男性がルビーを一瞥しながら尋ねた。

「ルビー・カーター。わたしの後輩です」

ディックが答えると、男性はルビーにきちんと向き直って、

「カーターさんですね。わたしはグロッシュラー・パマグラネット。ヴァイス・オーガナイゼーションのリーダーだ」 ※126

と名乗った。

「で、今日はどうした？」

グロッシュラーが尋ねると、ディックは愛想よく、

「また最近、結構大きな仕事しませんでした？」

と尋ねる。

ルビーはその単刀直入すぎる聞き方に驚いていた。しかし、グロッシュラーもガーネットも驚いていないところを見ると、ディックは割といつもこんな聞き方をしているのかもしれない。

グロッシュラーは、

「...した」

と静かに頷いた。しかし、すぐ後に

「けど、そのことは教えられないな。いくらおまえでも...」

と言い切る。

「...どうしても、ですか？」

ディックが念を押しても、グロッシュラーは黙って頷くのみだ。

「...そうですか」

ディックは残念そうに肩を竦めた。そして、

「じゃあ、今日は失礼します」

と言ってあっさり引き下がる。

「え、ええッ?!」

ルビーはそう叫ばずにはいられなかった。

「ちょっ...いいの？怒られちゃ...」

「んなこと言ったってしょうがねえじゃん」

ルビーの言葉を、ディックの諦め声が遮る。

「それでは失礼しました」

そう挨拶するディックに、グロッシュラーは

「悪いな」

と謝った後、ガーネットに

「エレベーターまで送ってやんな」

と命令した。

グロッシュラーの部屋を出ると、2人の前を歩いていたガーネットがピタリと立ち止って後ろを振り返った。

「カーターさん、ちょっと...」

ガーネットはそう言うなり、ルビーの腕を引っ張ってどこかへ連れて行こうとする。

「あ、ちょっと...ガーネットちゃん?!」

ディックは驚いてそう呼び止めながら、ルビーをちらっと見た。ルビーはガーネットの方を見ているから気づかないが、その視線は明らかにルビーのことを心配している。

その視線を見たガーネットは、思わず近くの物を蹴り飛ばしたくなった。しかし、さすがにそんなことをするわけにもいかないので、

「大丈夫だよ、ちょっと聞きたいことがあるだけ...何にもしないからさ」

とぶっきらぼうに答えておく。

「え、いや...」

「ちょっとだって」

そう言うと、ガーネットはルビーの手を引っ張ってどこかへ行ってしまった。

ガーネットは曲がり角を2回曲がったところでようやく立ち止った。

「ちょっと...あんた、さっきから何なんだよ!!」

ルビーが憤慨して声を荒げる。ガーネットの態度が態度だから、もう言葉遣いに気をつけようなどという考えは浮かびもしない。それに対し、ガーネットは

「あのさあ...」

と言いながらルビーのオレンジ色の目を強く見つめ、

「おまえ、ディックさんとどういう関係なんだよ？」

と尋ねてきた。

「...え？」

ルビーが間の抜けた声を出す。まさかそんな質問をされるとはまったく想定していなかったため、すっかり毒気を抜かれてしまったのだ。

「どういうって...だから、後輩だって言ったじゃん」

ルビーがそう答えても、ガーネットは疑わしげな目を向けてくる。

「本当かよ？」

...いや、嘘ですけど...

「本当だって。嘘ついてどうすんだよ」

そう聞き返されたガーネットは、しばらくの間黙っていた。歯を食いしばり、何か考え込んでいる。しかし、ルビーがイライラし始めたころになると、ようやく小さな声で

「...付き合ってるとかではなく？」

と聞いてくる。

「...え...ええッ?!」

ルビーが驚きの声を上げた。思わず頬が火照ってくる。

...え...いや、確かにそうなれたらって気はあるけど...え、そう見えるのかな...?

ルビーは恥ずかしさや困惑、焦りと同時にちょっとした嬉しさも感じながら、それを必死に隠して

「バツ...そんなんじゃないって!!本当に、ただの先輩後輩だから!!」

と否定した。そんなルビーを見たガーネットは、眉間にしわを寄せて目を細め、

「ふーん...あ、そう...分かったよ」

と呟く。

「え...本当に分かった?別に、本当にそんなんじゃないんだからな!!」

ルビーが念を押すと、ガーネットは

「分かったってば。戻るぞ」

と言って歩き始めた。

「あ...お帰り」

別れた場所で待っていたディックは、戻って来た2人にそう言った。言葉は2人に向けているが、目は完全にルビーの方を見ている。

「じゃあ行くぞ」

ガーネットは不機嫌な声でそう言うと、またディックたちの前を歩き始めた。まっすぐな廊下を歩き、例の額縁のような窓の前を通り過ぎる。

「...ほら、出口」

ガーネットはそう言いながらエレベーターのドアを親指で指し示した。

「ありがとな、ガーネットちゃん」

ディックが陽気に笑いながらそうお礼を言う。

ルビーがエレベーターのボタンを押した。ワイヤーが動いている様が見える。

「...あのさ、明日も来る？」

太いワイヤーの動きを見つめながら、ガーネットがぼつりと尋ねた。

「え?明日？」

ディックはきょとんとしたように聞き返す。

「え...特に来る用事はないけど...おまえのお父さん、来たって教えてくれねえだろ？」

ディックがそう言うと、ガーネットはしばらく黙っていた。砂浜と同じ色のエレベーターが下りてきて、ドアが開く。

「...来てみるよ。もしかしたら、私が説得できるかもしれない...」

そう言うガーネットの声は、囁くかのように小さかった。エレベーターに乗ろうとしたところで肩越しに振り返っているディックも、既に中で“開”ボタンを押しているルビーも、何も言わない。

「な？」

ガーネットはそう言うと、ディックの方にきちんと顔を向けた。やや吊りあがった赤紫の目が、ディックの赤褐色の目をしっかり見据える。

「...じゃあ、悪いけどよろしく」

ディックはそう言うと、ニッと口角を上げた。

※123...“ガーネット”とは、1月の誕生石となっている赤い宝石のこと。別名“柘榴石”。ただ、ここでは人名として使われている。ちなみに、ガーネットの石言葉は“真実・友愛”。

※124...“デマントイド”とは、ガーネットの兄弟石の1つである、草緑色の宝石のこと。

※125...“パマグラネット”はザクロ(植物)のこと。

※126...“グロッシュラー”もガーネットの兄弟石の1つ。無色、淡褐色、淡緑色など、様々な色のものがある。

その日の晩、ディックたちは近くの民宿に泊まっていた。

「ちょ...どうということ?!

ルビーが不機嫌な声を上げる。

「あんた、あいつらと仲良いの?“悪の組織”なんだろ?」

「仲良いんじゃないかって、顔が利くんだ。たまたまディマイアの仕事で行った時に、あのガーネットちゃんが絡まれてたから、助けてあげたの。そしたら、それ以来ずっと協力的にしてくれてんだよ」

ディックはそう言いながらソファに座ろうとした。しかし、すかさずルビーが

「コーヒー飲みたい」

などと言う。

「...自分で淹れろよ...」

ディックはそう言いながらも、仕方なくキッチンへ向かった。

「いいじゃん、淹れてくれたって」

そう膨れっ面をするルビーに、ディックは

「だっておまえ、いちいち薄いとか苦いとか文句言ってくるじゃん...コーヒーなんて、みんな苦いもんだろ...」

とぼやく。

「...あんた、あれだろ。“コーヒーよりももちろん紅茶”派だろ」

なんだかんだ言いながらコーヒーを持って来てくれたディックに、ルビーは腕組みしながらそう言った。

「うん」

本当はどっちでもいいのだが、ここはあえてそう頷いておく。

「...コーヒー投げていい?」

今渡されたコーヒーカップを持ちながら、ルビーがそう尋ねた。

「バツ...いいわけねえだろ!!せめてサファイアちゃんがいる時にしろっ!!」 ※127

ディックが慌てて怒鳴る。

「だいたいおまえ、いつからそんなコーヒー好きになったんだよ!!」

ディックが聞くと、ルビーはさも当たり前のような口調で

「今」

と答えた。

「ってことはコーヒー投げてみたかっただけじゃん!!」

ディックはそう突っ込んだ後、

「バカやろっ!!おまえのせいで何の話してたか分かんなくなっちゃったじゃねえか!!」 ※128

と憤慨した。

「ガーネットさんだよ。何、協力的って...だいたいあんた社長だったんだろ?あんたが取材に行ってたの?」

ディックの言葉を受けたルビーが話を戻す。すると、ディックは

「ああ、その話か」

と呟いた。それから、

「そう。ディマイアは戦闘組織じゃないからさ...一応。 ※129 だから、こういうヤバい組織には俺が行くの」

と答える。

口にはしなかったが、ディックが自ら赴いた理由は他にもあった。こういう組織の中には、もしかしたらユリアがいるかもしれないと思ったのである。

「“ヤバい組織”って...ぶっちゃけ、あんまそうは見えなかったけど？」

ルビーの言葉に、ディックはブンブン首を振る。

「1946年黄玉航空ハイジャック、犯人は実界から来た奴らだけど、それに夢幻界の航空設備の話をし、爆弾を渡したのは奴らだ。1983年に柘榴溪谷の生物兵器が盗まれたとき、失踪した責任者を、巨額の金をもらってずっと匿っていたのも、あいつらだよ」 ※130

「ちょっ...でも...」

ディックの説明に愕然としたルビーが口を挟んだ。しかし、ディックはすぐにそれを

「ああ、報道していない」

と遮って説明を続ける。

「この辺の事件は、奴らが絡んでるって確証がないんだよ。ディマイアは基本的に、確かな情報しか流さないから、確証のないことは報道しないんだ。でも、ガーネットちゃんのことがある以来、グロッシュラーは割と俺に情報を寄こしてくれるようになった。ほら...そう言う世界の奴じゃないと知り得ないような情報とか、持ってるから...もちろん、それを鵜呑みにするわけじゃないけど、そういう切り口があれば、調査もずっとやりやすくなるだろ？」

...まあ、確かにそうなのかもしれない。

「グロッシュラーも、俺のことを...違うな、ディマイアのことを信用しているんだ。つまり、ヴァイス・オーガナイゼーションがいろんな事件に絡んでるって思っても、確証がなければそれを報道したりしないから。だから、情報を渡しても、証拠さえ掴まれなきゃ平気だって思ってたんだよ」

「...ふーん...」

ルビーはそう呟くしかなかった。

「で、つまり向こうは、あんたのことをディマイアの1社員だと思っていて、うちのことはその後輩だって思ってるわけ？」

ルビーが確認すると、ディックは

「多分」

と頷く。

「...ふーん...」

ルビーは再びそう呟いた。

本当は、ディックに対して好意を抱いているらしいガーネットのことも聞きたいのだが...

そう思った瞬間、ルビーの頭の中にガーネットの姿が浮かんできた。赤紫色のまっすぐな髪、

きめ細かい肌。サファイアとはまた違う、もっとスポーティに細く引き締まった身体、 ※131
整った顔立ち...

...そりゃ、姉ちゃんの方が天使みたいでずっと可愛いけど...でもほら、あいつはあいつで、
ちょっと悪っぽい美人だったしな...とりあえず、自分よりはずっと可愛いと思わざるを得ない。
性格は最悪だけど...でも、そこはうちも引けを取らないし... ※132

そう考えていくと、ディックに彼女のことを聞いてみるのはあまりにも怖い。

仕方なく、ルビーはディックに淹れてもらったコーヒーを一口飲んだ。その途端、ルビーの動きが固まる。

「...ちょっ...これ、薄すぎ...」

ルビーが思わずそう呟いた。

「うるせーっ!!だったら自分で淹れろよ!!」

そう憤慨するディックに、ルビーはカップを差し出す。

「そういう次元じゃない...飲んでみろって」

「...え...いや、飲んでみろったって...」

カップとルビーを交互に見つめながらそう言うディックに、ルビーが

「ほら」

とカップを押しつける。

「.....」

仕方なく、ディックは1口飲んでみた。そして、その瞬間にピタリと硬直する。

...確かに...我ながら、飲めたもんじゃねえ...

「...まさか、天然？」

ルビーが尋ねると、ディックは

「...いや、嫌がらせでやるほど、俺性格悪くないし...」

と答えた。紅玉高原や青玉島の王宮ではコーヒーマシンを使っていたから露呈しなかったのだが、考えてみれば、ディックは料理が大の苦手なのだ。

「...そう。ごめん。あんたにやらせたうちがバカだったわ...いいよ、今度から、コーヒーマシンがない時はうちが淹れるから...」

遠い眼をしてそう言うルビーに、ディックは返す言葉がなかった。

深夜。ガーネットは辺りに警戒しながら自分の部屋へ戻って来た。彼女の手には、寝ている父親の部屋から今さっき持ち出した書類がしっかりと握られている。

「ガーネット？」

自室のドアを開けようとした瞬間、暗がりからそう呼びかけてくる声があった。

「誰？」

びくっとしたガーネットが慌てて聞き返すと、

「僕だよ」

という言葉とともに、やりきれないような顔をしたデマントイドが現れる。

「ああ、なんだ...」

ガーネットはホッとしてそう呟いた。デマントイドはそんなガーネットに歩み寄ると、彼女の右肩に自分の右手を置き、耳元で「それ...ディックさんに渡すの?」と低く囁く。

「!!」

ガーネットはバツとデマントイドの手を振り払った。

「...みんなに...父さんに、言うわけ?」

ガーネットが鋭く尋ねる。右ポケットに入っている手は、おそらく魔法銃を握っているのだろう。

...ここで僕が頷いたら、幼馴染であっても、本当に撃つ気なのかな...

「言わないよ」

デマントイドは静かな声で答えた。

「誰にも...何があっても、誰にも言わないよ。そんなもの、君が好きなようにすればいい」

デマントイドの言葉に、ガーネットは少し目を見開いた。まさか、彼がそう言うとは思っていなかったのだ。

「...ほんとに?」

ガーネットが聞き返すと、デマントイドは

「うん」

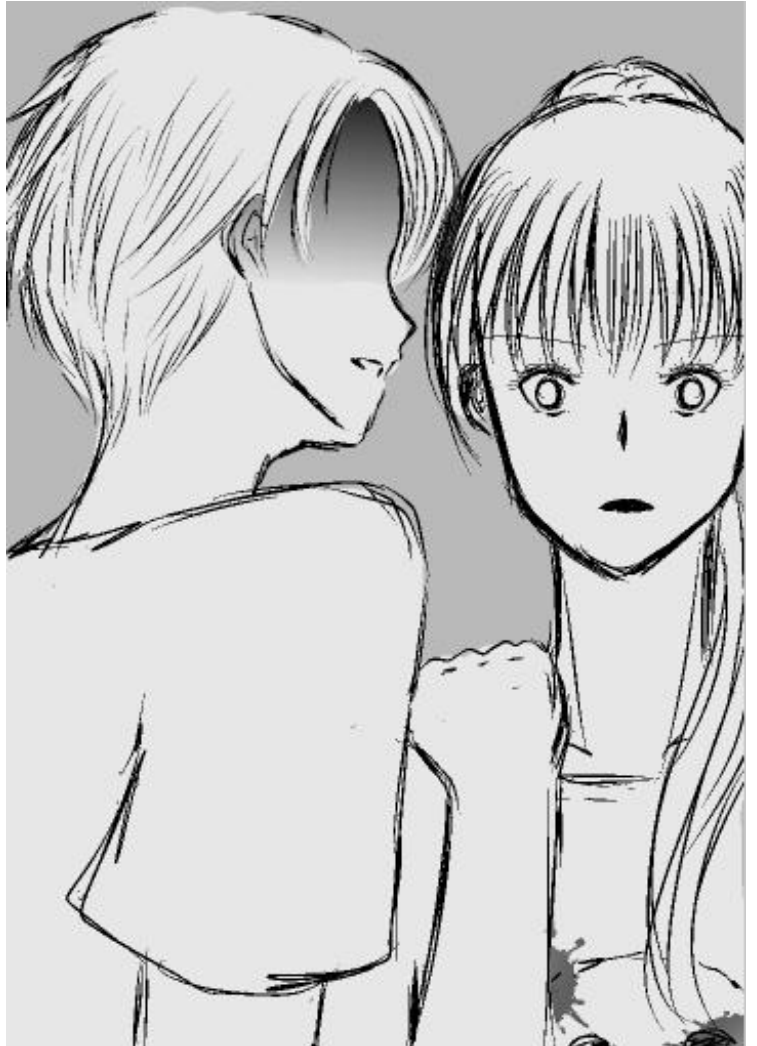
と頷く。

「その代わり...」

デマントイドはそう言いながら、再びガーネットに歩み寄った。そして、流れるような動きでそっと抱きしめ、そのまま流れるように放す。

「...うん。これで、誰にも言わないよ」

デマントイドは切なげに笑うと、立ち尽くすガーネットを残して、そのまま自分の部屋へ戻って行ってしまった。



※127...サファイアがいれば、青玉魔術でコーヒーがこぼれないようにしてくれるというわけ。ただ、サファイア・ルビー・ディックの3人が揃っているということは、大抵ジャックも一緒にいるから、そのあとただでは済まないということも明白である。

※128...実はこれ、筆者の本音だったりする。

- ※129...あの自衛システムはあくまでも“自衛”のためのもの。ディマイアビルという要塞の中だからこそ力を発揮できるのであって、外で、しかも個人では、あまり機能できない。
- ※130...ほとんど戦争がない夢幻界において、ここで拳がった事件は、10才になる前の子供でも知っているような大事件である。
- ※131...運動量は絶対サファイアの方が多はずなのだが...
- ※132...そう思うなら直せばいいのに....。

2009年6月13日

朝になると、ディックとルビーは再び砂浜を訪れた。するともう、エレベーターが生えてくるあたりに腕組みしたガーネットが立っている。

「これ。黙って持ってって。父さんの書類だから」

「!!」

ルビーは驚いてガーネットを見つめた。

...こいつ...自分の父親から、書類を盗み出してきたわけ...?自分の父親の組織を、うちに...いや、ディックに売るってこと?!

ディックも驚いたような顔をしていた。しかし、すぐに

「...ごめんな、ありがとう」

と早口に言って書類をしまう。

「その代わりに、また来いよ」

ガーネットはディックをまっすぐ見つめながら言った。

「必ず、近いうちに...いいな?!」

そう言うガーネットに、ディックは優しい笑顔を作ると、

「分かった」

と頷く。それを見たガーネットは一瞬ホッとした色を見せたが、すぐに辺りを見渡すと、

「...じゃ」

と言ってエレベーターを呼び、帰っていった。

2人は民宿に戻ると、その書類を見てみた。

「...2009年5月30日、依頼受託。2009年6月3日、化学兵器6つを埋める...埋めた場所は住所だけじゃなくて地図までついてるな...」

ディックが言うと、横から覗きこんでいたルビーが、

「でもこれ、依頼人の名前とか、化学兵器の中身とか書いてないな」

と指摘する。

「奴ら、そんなことまで気にするような組織じゃねえもん」

ディックはそう言いながらぺらぺらと書類をめくった。

「じゃあ、知らないってこと？」

ルビーが驚いて聞き返すと、ディックは

「多分」

と頷く。

...それでよく、今まで尻尾掴まれなかったな...

そう思うと、ルビーはある意味感心してしまった。

「...じゃ、王宮帰る？」

ディックの言葉に、ルビーは

「うん」

と頷いてから、ふと気になっていたことを口にした。

「あのさ...これって普通に、うちがいなくってもよかったんじゃない？」

ルビーがそう言うと、ディックは

「え？」

と驚いたように聞き返してくる。

「何言ってんだよ...おまえがいたから、あの子頑張っってこれ持って来てくれたんだろ？」

「え？」

今度はルビーが聞き返した。

「だって、あの人あんなのことが好きだったから、これ渡してきたんじゃないの？」

困惑していたルビーはついそんなことまで言うてしまう。

「多分」

驚くべきことに、ディックはあっさりと頷いた。

「え...気づいてたの？」

ルビーが聞き返しても、

「まあ」

と頷く彼はまったく平然としている。ジャックの無表情な“平然”ではなく、“それが？”と言わんばかりの“平然”だ。

「でも、あの子は普段だったらそんなことしないさ。おまえがいたから焦ったんだよ」

...あ...

そう言われて、ルビーはガーネットと2人で話した時のことを思い出した。ルビーがディックと付き合っているのではないかと懸念して、わざわざ呼び出してまで聞いてきたガーネット。そんな彼女に対し、自分の答え方を振り返ってみると...

...あれじゃ、バレバレだったよな...

もちろんルビーはむしろ隠そうとしていたのだが、ルビーもディックのことが好きなんだと気づいたガーネットは、大いに焦ったに違いない。なんせ、ガーネットはディックと会うのもままならない ※133 のに、ルビーは職場でちょこちょこ顔を合わせている ※134 のだ。

...それで、少しでも気に入って欲しくて、そしてまた来てほしくて、こんなことまでしたのか...

愕然としているルビーの横で、ディックはもう1度書類をパラパラしながら、

「あーあ、ガーネットちゃん、やっちゃったなあ」

と呆れたように呟いた。

「何が？」

ルビーが聞き返すと、ディックは黙って1枚の書類を見せてくる。

「...あ...」

それは、依頼主とヴァイス・オーガナイゼーションとの契約書だった。依頼主の欄には何も書かれていないが、ヴァイス・オーガナイゼーションという組織名と、グロッシュラー・パマグラネットという名前がはっきりと書かれている。

「...これだけはっきりした証拠があれば、ディマイアだって報道するぞ」

確かにそうだろう。ましてやディックは今、ディマイアの社長ではない。紅玉高原国王の側近なのだ。

「ヴァイス・オーガナイゼーションも終わりだな」

そう呟くディックは笑っていたが、それがかえって冷徹な印象を与えた。そんなディックに、ルビーは一応

「...ガーネットさん、あんたのことが好きでこんなことしたんだろ？あのボスだって、あんたのこと信頼してたんだろうし...」

とっておく。

「グロッシュラーさんは、まだ俺がディマイアの間人だと思ってるからな。まさか、王宮で働いてるとは思ってねえだろ」

ディックはそう言いながら書類をバッグにしまったあと、

「ガーネットちゃんも、見る目がなかったんだな...」

と呟いた。

...“見る目が無い”か...

その言葉を聞いて、ルビーは心の中で苦笑する。

「あんた...最低だな」

ルビーが試しにそう言ってみた。普通に考えれば、そうコメントするしかないんだろうなあと思ったのだ。しかし、ルビーはそう言いながらも、自分が本心からそう思っているわけではないということに気づいていた。冷酷ともいえる一面を見ても、彼に対する想いは何ら変わらないし、正直なところ、ガーネットやグロッシュラーに対する同情の気持ちもあまり湧かない。

ところが、ルビーの言い方はほぼ棒読みだったにもかかわらず、そう言われたディックは一瞬固まった。

...あれ...？

それに気づいたルビーが少し首を傾げる。

あれ...うち、口悪いから、“最低”とか“バカ”とか“人でなし”とかって日常的に言ってると思ったんだけど...

しかし、ルビーが何か言う前に、ディックはまた動きを取り戻した。書類をしまい、バッグのファスナーを閉める。

「...そうだな」

そう呟くディックは、自嘲的で哀しい眼をして、口だけで笑っていた。

※133...なんせ、今回会ったのが10年ぶりだというのだ。

※134...もちろん、ガーネットはそう思っているという話。

ディックとルビーは王宮に帰ると、ガーネットからもらった書類をピュアとルチアーノに渡した。それを受け取ったピュアたちは、すぐにあちこちを動かし始める。まず、本当にその場所に化学兵器が埋まっているのかどうかを確かめるべく、情報処理局の局員が派遣された。王宮内では、回収した兵器の置き場所となる巨大地下密室の状態確認が行われる。一方、ヴァイス・オーガナイゼーションのアジトには警察が乗り込み、その場にいた者全員を逮捕した。もちろん、ガーネットも例に漏れない。

その日の夜、ジャックはディックの部屋を訪れていた。

「どうしたんだ？」

ジャックが来ること自体非常に珍しいうえに、ディックたちが帰ってきて情報処理局が動いているというタイミングなので、そう尋ねるディックの声は深刻だ。

「契約書が見つかって、犯人の名前は分からないんだろう？」

ジャックの話は唐突に始まる。

「...憶測でしかないんだが...その裏方がジェーンである可能性は考えられないか？」

ジャックの発言を聞いたディックは、思わず

「あ...」

と声を漏らした。確かに、クリアシャイン姉妹の作り手はジェーンたちであるという話は聞いている。現に、ジェーンは2回に渡ってサファイアを誘拐—いや、取り返そうとしている。

でも—...

「...まあ...確かにあいつならやり兼ねないかも知れねえけど...」

ディックは腕を組みながら言った。

「...でも、それはあいつが生きてたらの話だろ？」

なんせ、こちらがジェーンと最後に会ってから、もう1500年以上経っているのだ。 ※135

「魔力が1000Maを越えれば、無限の命を得ることが出来る。吸血鬼は大抵500Ma持っているから、新たに得なければならぬ魔力は500Maだ。魔力を得るには、487Ma以上の魔力を持つものが自分の魔力以上の魔力を持つ者を殺せばいい。この条件を満たせば、吸収率は(自分と相手の魔力の差) $\times 3.45 \times (10^{-4}) - 1.23 \times (10^{-2})$ となるから、魔力の強い吸血鬼を殺せば吸収率は200分の1、つまり1人につき2.75Ma得られる...要は、182人殺せばいいわけだ。ただ、1人ずつ殺していくと自分より魔力の強い人などいなくなってしまうし、吸収率もどんどん落ちてしまうから、182人同時に殺さなければならない」 ※136

ジャックは一気に説明した。おそらく予め計算しておいたのだろうが、それでもよくまあこれだけのことをすらすら言えると感心する。

「...へーえ...つまり？」

ディックが遠い眼をして聞いた。彼は完全に文系なので、計算の話が出てきた時点で耳をシャットアウトしてしまったというわけだ。

「182人を同時に殺せば、無限の寿命が手に入るという話だ」

ジャックが結論の部分だけを言い直す。

「え...182人？意外と...」

...意外と少ない。 ※137

ディックがそう言うと、ジャックは黙って頷いた。

「...となるとさ、実は年齢4ケタの奴とか、意外とあっちこっちにいるんじゃないの？」

ディックの問いに、ジャックは小さく肩を竦め、

「さあ、どうだか.....吸血鬼の絶対数は昔から少なかったし、それだけの魔力を持つ人なんて吸血鬼以外ほとんどいないし.....何より、無限の命なんて持て余すだけだと思って、そもそも欲しがらないだろう」

と推測を述べる。

「...でも、あいつならそれぐらい殺りかねない、と...」

腕を組んでソファの背もたれにしっかり寄りかかったディックが、一言ずつ確認しながらゆっくりと言った。するとジャックは、

「目的があればの話だが」

と付け加える。

「目的、ねえ...」

ディックはそう呟きながら背もたれから身を起こした。そして今度は、自分の両膝に頬杖をつく。

「ま、考えられるのはクリアシャイン姉妹が生まれ変わってくるのを待って、今度こそ取り戻したかったってことなんだろうけど...でも、そもそもあの姉妹が作られた目的が分かんねえんだよなあ...あいつだとしたら絶対関係ありそうなのに...」

そう言うディックの声は絶望的だ。

そんなこと、本人に聞かないことには分からないじゃないか...

ディックの言葉の後、少しの間沈黙が流れた。しかし、ジャックの呟くような言葉がその沈黙を破る。

「...いずれにせよ、女王様に言ってみるつもりだ」

その言葉を聞いたディックは、思わず

「...は？」

と聞き返した。

「だから、ジェーンが敵の首領格であるかもしれないということを、女王様に報告するって言うてるんだ」

ジャックは若干苛立った様子で、今度ははっきりと言う。

「おまえ...正気か？」

ディックは思わずテーブルに身を乗り出していた。その気でなくても言葉の調子が強くなってしまう。

「んなことしたら――...」

「僕の家族のことも、何故今もまだ生きているのかということも、何もかも説明しなければならなくなる。最悪の場合、もうここにはいられないかもしれない――そういうことか？」

ジャックがディックの言葉を遮って言った。ディックが何も言わないことをYesだと判断したジャックは、小さく頷くと、そのまま少し俯く。

「...分かってるよ。でも...もし言わずにいて、彼女たちの身に何かあったときに、後悔するのは嫌なんだ...」

ディックはしばし黙っていた。

...ったく...なんて奴だ...

「...そう。だったら、まあ...頑張れよ」

ディックがそう言うと、ジャックは

「ありがとう」

と言いながら立ち上がった。

もう21:00近くになってから、女王の間のインターホンが鳴らされた。

「はい...って、ジャックさん?!」

モニターに映る人物の姿を見たペーターは、驚きながらドアを開ける。

「どうしたんだい？わざわざ...」

「遅い時間にお邪魔して申し訳ありません。しかし今、ピュア様に申し上げたいことがあるのですが、構いませんか？」

そう言うジャックを、ペーターはどうぞどうぞとあげた。

「話？どうしたっていうのよ」

入り口での会話を聞いていたピュアが尋ねると、ジャックは非常に淡々とした声で

「契約書があるにもかかわらず、ヴァイス・オーガナイゼーションへの依頼主は分かっていますよね」

と切り出す。

「“よね”じゃないでしょ...それが？」

ピュアが促すと、ジャックは

「確証はありませんが、もしかしたら...わたしの姉が、一連のテロに関係しているかも知れません」

と言った。

「...は？“わたしの姉”って...あんたのお姉さん？どういうこと？」

ピュアが顔を顰めて聞き返す。

「少し長くなるのですが...」

ジャックはそう断ってから、順を追って話し始めた。姉に殺されかけて以来、ずっと敵対していること。姉がクリアシャイン姉妹を作ったのだが、何者かが2人を逃がしてしまったため、2回に渡ってサファイアを取り返そうとしたということ。

「...ふーん...」

そこまで聞いたピュアは、頬杖をついてそう呟いた。それから突然、

「ちょっと脇道に逸れるんだけど、あんたのことを聞いてもいい？」

と言ってくる。

「...何でしょうか？」

ジャックはやや身構えつつそう促した。するとピュアは、ジャックに一言ずつ確認させるかのような調子で、

「1500年前のクリアシャインを殺したの、あんたでしょ」

と言う。

...!!

まさかそう言われるとは思っていなかったの、ジャックは驚愕した。

しかし、ピュアは頬杖をやめて腕組みすると、

「...あんたねえ...もうちょっとリアクションしなさいよ。ここは愕然とするところでしょ」

などと言ってくる。どうも、ジャックの驚愕は顔に出ていなかったようだ。

「...どうしてご存知なのですか？」

ジャックはやむを得ず事実を認めると、そう聞き返した。 ※138 まったく感情のない声は、明らかな不自然さを感じさせる。その声を聞くと、ピュアはくっと口角を上げて、細めた目でジャックの目を見据えた。

「...この前暗殺された、ルル・メンテ、いたでしょ？彼女がね、夢でクリアシャインの最期を見たって言ってたのよ...」

そう言いながらピュアは、ジャックの目を通り越してさらに遠くを見つめる。

「砂みたいに崩れてくあの子を、あんたみたいな黒髪の男が抱き潰して、トドメを刺したって言ってたわ...」

ピュアはそこで1度言葉を切った。ジャックは眉ひとつ動かしていないが、鮮やかな青色の目には光が宿っていない。そんなジャックに、ピュアは

「...クリアシャインに頼まれでもしたの？」

と尋ねた。ジャックが黙って頷くと、ピュアは

「ふーん、あの子らしいじゃない...」

と短く笑う。

「.....」

ジャックとしては、それがサファイアらしいと認めたくはなかった。だが確かに、それを否むことはできない。

「どうして、それがわたしだと思ったのです？」

ジャックが尋ねた。“黒髪の男”なんて、掃いて捨てるほどいるはずなのだ。 ※139

「何言ってるのよ」

それに対し、ピュアは“バカ言わないで”と言わんばかりに手をひらひらさせる。

「いくら吸血鬼だからって、1500年も生きてたらおかしいでしょ。だからちょっと、生物班に聞いてみたのよ。そしたら――えーっと...数字は忘れちゃったけど――“ある程度以上の魔力を持つ魔法族は、同じくある程度以上の魔力を持つ魔法族を殺害することで、被害者の魔力を吸収することが出来る”とか、“1000Ma以上の魔力を有するものは、永遠の寿命を得られる”とか言うじゃ

ない...で、1番有り得そうな例で試算してもらったら、殺さなきゃいけないのは182人ですって。これが根拠1個目ね」

ピュアは指を1本立てて見せた。“あと一押し足りない”という感じのところで切れてしまった気もするが、ピュアは構うことなく話を続ける。

「で、なんか...相手の魔力と自分の魔力の差が大きいほど吸収しやすいんでしょ？1500年前のサファイア・クリアシャインの魔力は伝わってないけど、ルビー・クリアシャインは.....えーっと.....1523Ma？1532Ma？ ※140 持ってたって分かってるから、こっちもまあそんなもんでしょ。これが根拠2個目。それで、1500年前のサファイア・クリアシャインがどんな人生を送ったかについては謎に包まれてるのに、今のあんたの話 ※141 を聞いてると、やたらと詳しいから...1500年前のクリアシャインを知ってるのかと思って。これが根拠3個目.....そういうことよ」

ピュアがとてもよく調べたことは分かった。しかし、なぜその3つの根拠から先の結論を導き出したのかが説明されていない。根拠1が示すのは、ジャックがどうやって1500年以上生きているのかということを説明する1つの説。根拠2の内容は、サファイアなら十分な魔力を提供することができただろうということ。根拠3はジャックが1500年前のサファイアを知っているという話。どれも確かに根拠にはなっているが、いまいち決め手となる根拠がない。強い魔力を持つ吸血鬼を182人殺している可能性もあるのに...そういった他の可能性を否定し、これしかないのだと説明する根拠はない...

ジャックはそれを尋ねようとした。しかし、その前にペーターが、
「要は、君がそんなにたくさんの人を殺すとは思えないから、メンテさんの話と君を結び付けて、納得いく話にしたかったってことだよ」

と笑顔でミッシング・リングを補う。

「ばっ...別にそんなんじゃないわよっ!!別に...」

それに対し、ピュアは玉座の肘置きを拳で叩きながら否定した。しかしいくら待っても、“別に...”の後の言葉は出てこない。彼女のことだから、照れ隠しか何かなのだろう。

「じゃ、じゃあ要は、あんたのお姉さん—ジェーンさん？がものすごい極悪人で、人を180人とか殺して生き延びてるかも知れなくて、そのお姉さんがクリアシャイン姉妹を取り返そうと、3回目のチャレンジをしてるって...そういう話？」

ピュアが確認すると、ジャックは頷いてから

「あくまでも推測にすぎませんが」

と念を押す。それからさらに、

「仮にわたしの憶測が正しいとすると、夢幻界5大要所同時爆破テロから始まった1連の事件は突発的なものではなく、1500年以上前からずっと続いていたのではないかという可能性が浮上します」

と追加した。

「お姉さんがクリアシャイン姉妹を作った目的と、テロリストたちが今脅迫メールを送りつけてきたりする理由が一致するかも、ってわけね...」

ピュアが言い換えると、ジャックはまた黙って頷く。

「分かったわ...」

ピュアはそう言いながら、腕をしっかりと組んだ。そしてふっと笑うと、

「この話が本当だとしたら、お姉さん、墓穴を掘ったわね」

と呟く。

「“クリアシャイン姉妹を寄こせ”だなんてうっかり言ったがために、自分の弟にチクられちゃったじゃない...ねえ？」

※135...“こちら”などと言っても、実際にはジャックのことなのだが。

※136...ジャックの試算にはかなり恣意的な仮定も多かったが、比例定数がとても小さいため、大した誤差にはならない。

※137...当然のことなのだが、彼らは“180人やそこら殺したって関係ない”と言っているわけではない。ただ“永遠の命”という究極の物を手に入れるための方法にしては、実現不可能な数ではないと言っているのだ。

※138...ちなみに、ピュアの無茶振りは完全に無視している。

※139...実界では、黒髪の人が最も多い。そのあと、栗毛>金髪>赤毛と続く。夢幻界では、青系・緑系の髪の人もあるし、黒髪・赤毛にもバリエーションが多いので(サファイアやジャックの“黒に近い濃紺の髪”やガーネットの“赤紫”など)、もっとややこしいことになっている。

※140...1523Maらしい。

※141...ジャックは今ジェーンの話をしたのだが、1500年前のジェーンの話をする、どうしてもサファイアのことが絡んでくるのである。

2009年6月14日

情報処理局から、書類通りの場所で化学兵器が確認されたという連絡が入った。一方、巨大地下密室の状態確認も終わり、異状なしとのことである。

それらを受けて、サファイアはすぐに作業を開始した。まず転送する前に、兵器から中身が漏れ出していないかどうかを点検する。ここで用いるのはスキャナー魔法の1種。もうすでに開発されているMWだからそれを今回の状況に合わせて適用すればいいのだが、もちろんだんな微量でも漏洩を見逃しては一大事なので、最上級の精密さが要求される。

漏洩が見つからなければそのまま青玉島王宮地下にある巨大密室に転送する。しかし、漏洩が見つかった場合、転送すると同時にそこを埋めなければならない。当然、MWはより複雑になる。

巨大地下密室に移すためには、例の転送魔法陣MW ※142 を使用する。兵器がある場所の真下に、兵器がはみ出すことのないよう気をつけながら魔法陣MWを作るのだが、ここはジャックとの共同作業となる。MW部分はサファイアが、魔法陣部分はジャックが作ることになるのだ。ただ、兵器の埋まっている場所は分かっているので、サファイアが他の作業をしている間に、ジャックが魔法陣を作成することは可能である。しかし一方で、それを描くためには絵画MWを使わなければならない。これはその描くものに合わせて適用しなければならない部分が多いから、それだけ面倒である。しかも、魔法陣MWから転送したいものまでの距離が大きく、しかもその間に障害物が多く存在するため、MWの形は通常の転送魔法陣MWよりややこしくなるわけだ。 ※143

サファイアの作業は今どんな状況なのか、傍から見ている者にはよく分からなかった。なんせ、本人の手はものすごい速度で動きっぱなしなのだ。まあ、おそらく順調なのだろうと思いたいところなのだが...

2009年6月19日

脅迫メールが届いてからちょうど1週間経った日の夕方のこと。

「...出来ました」

パソコンの画面を凝視しながら、サファイアがぼつりと呟いた。

「スキャナー魔法が？」

やはり自分のパソコンで作業をしていたルチアーノが、そこから顔を上げて首を傾げる。

「そうです」

サファイアが頷くと、ガーネットたちの取り調べ録を読んでいたピュアが

「MWどこに作るつもり？空に作るの？」

と聞いてきた。

「いえ」

サファイアは首を振る。

「空に作ると私たちのやりたいことが敵に一発でバレてしまいますから、地下に作りたいと思います」

「地下って...相当深くなきゃいけないよ」

ペーターが念を押した。青玉島は円形の国であるにもかかわらず、よく“縦に長い国”と言われる

。これは、狭い国土を有効利用しようとした結果、深い地下施設や超高層ビルが非常に多いためだ。つまり、“地下に作る”ということは、そういった地下施設よりももっと深いところに作らなければならないのである。作るだけでも面倒だし、MWと兵器との間に挟まれる障害物も多くなるから、それだけ厄介だ。

「ええ、大丈夫です」

サファイアがそうきっぱり言い切ると、ピュアは「じゃあもう今すぐやりなさい」と命じた。

皆に見えるよう、サファイアは自分のパソコンと女王の間の大モニターを接続し、青玉島地図を映し出した。言うまでもなく、女王の間にはいつもの7人が集まっている。

「...では、行きます」

サファイアはそう言うと、空中から青玉魔術のロッドを掴みだし、そっと床に立てるような形で持った。何が起こったのかは分からないが、大モニターに映る地図上の兵器があると思われる場所に、水色の大きな円が現れる。

「えいやっ!!」

それを確認したサファイアは、どう考えても必要なさそうな掛け声とともにスタートボタンをクリックした。

「おおおお...!!」

ルビーが思わず感嘆の声を漏らす。

パソコンに映し出されていたMWの図案が、オーロラか何かのように光っていた。そしてモニターでは、先程の水色の円がパソコン上のMWと同じ色彩に染まっていく。

「スキャナーMWができましたので、今度はそちらを発動します」

そう言うサファイアの口調はとても冷静で、完全に大人そのものだった。しかし、スタートボタンを押す際の

「それっ!!」

という掛け声が、せっかくのそれを台無しにしてしまう。

何はともあれ、今度は大モニターに映っている6つのMWが光り出した。今度は誰も声を発しない。MWが光り始めてから5分程経つと、突然、6つのMWの上にチェックマークが現れた。

※144

「...漏洩なし？」

ディックが尋ねると、サファイアは心底ほっとしたような笑顔で頷く。漏洩があると、それを埋めながら転送しなければならないため、作業がよりややこしくなるのだ。

「じゃあ、すぐに転送の準備をしますね」

サファイアはそう言うと、モニターとパソコンの接続を切って、作業を始めようとした。

「あ、じゃっくん...」

「魔法陣の準備はできておりますが」

サファイアに呼ばれただけで要件を察したジャックはそう答えるが、魔法陣のデータを送るより先に

「1度休んではいかがですか？」

と勧める。なんせサファイアは、この5日間ほとんど寝ていないのだ。

「そうしたって構わないわよ」

ピュアもそう言ったが、その直後に何故か慌てて

「ほら、疲れて間違えたりしたら一大事じゃない!!」

と釈明し始める。

しかし、サファイアは

「いいえ、大丈夫です」

と言って微笑むと、ジャックに魔法陣のデータを送ってもらい、また作業を始めた。

2009年6月21日

転送魔法陣MWはその2日後に完成した。脅迫メールが来てから9日後のことである。

再びサファイアのパソコンと女王の間の大モニターが接続された。魔法陣の操作もサファイアのパソコンで一括して行うことになっている。スタートボタンがクリックされると、前回と同じく水色の円が地図上に現れた。それがパステルカラーに彩られると、今度は各円の中心から黒い線が蔓のように伸びて、ジャックの作成した魔法陣が描かれる。魔法陣が完成すると、1度色彩が消え、水色の円と黒い線だけになってしまった。しかし間もなく、先程よりもくっきりとした色が、魔法陣から覗く水色の部分を埋めていく。

6つ全てが正常に描かれたことを確認すると、サファイアはもう1度スタートボタンを押した。すると、6つの魔法陣MWがオーロラのように光り出す。

「おおお!!ちゃんと地下に来てる!!」

巨大地下密室の中に置かれたカメラの映像を見ながら、ルビーが歓声をあげた。巨大地下室の床に描かれた魔法陣が光り、そこに大きなタンクのような形をした物が次々と現れる。

「さすが姉ちゃ...」

ところが、そう言いかけたところでルビーの言葉は止まってしまった。サファイアを見てみると、ジャックに寄り掛かるようにして眠ってしまっている。転送完了を見届けて安心したことで一気に疲れが出たのだろう。

「あーあ...寝ちゃったんだ...」

ルチアーノが苦笑しながら言った。

「...9日間、ほとんど一睡もしてないんだろ？」 ※145

ディックがそう聞くと、ジャックは黙って頷きながらサファイアをそっと抱き上げた。

サファイアの仕事はここまでで終わり、この先はジャックの仕事となる。

ジャックは転送魔法で巨大地下密室に送ってもらった。点検の際、今まで存在していた出入口を潰して、転送魔法で出入りするようにしたのだ。そうすればより一層気密性が高まる。ただ

、転送魔法で自分自身を転送することはできないから、必ず誰かに魔法陣MWを起動してもらわなければならない。

ジャックの仕事は兵器の中の有毒物質を無毒化することだ。この作業は、まず中身が何なのか突き止めるところから始まる。そして、それをやらないことには次の段取りは見えて来ない。

ジャックの検査の結果、中身はDP-49という薬品であることが分かった。液体のときは大概の樹脂と金属を溶かしてしまい、蒸発するとタンパク質を溶かしてしまうという奇妙な性質を持った揮発性の魔法薬物だ。化学兵器は外径5m、高さ6mの円筒に魔法爆弾が付いた物だった。必要となれば、魔法爆弾を爆発させて上にある物と蓋を吹き飛ばし、DP-49のガスを放出するという仕組みだろう。

ただ奇妙なのは、この容器が樹脂製であることだ。

『...つまり、これは爆破しなくても中の薬品が容器を溶かしてしまうように作られているということですよ』

ケータイを使って、ジャックがそのように報告してくる。ピュアのパソコンに映る彼の姿は紙マスクしかしていないようだが、これで立派にガスマスクの役割を果たすのだ。ちなみに、今彼がいるのは巨大地下密室ではなく彼の実験室である。

「あとどれくらいで溶け出すのかしら？」

ピュアが尋ねると、ジャックは淡々とした声で

『容器の厚さが分かりませんから何とも言えませんが』

と言いながら巨大なビーカーに薬品を空けた。イヤホンマイクを使っているので、通話しながら作業できるというわけだ。

「あー...でも、ジャックさんが今調合してるのって、ちょっと少くない？」

ルチアーノが首を傾げる。なんせ、化学兵器は外径5m、高さ6mの円筒で、これが6つある。それに対して今ジャックが調合しているビーカーは、直径60cm、高さ70cmぐらいにしか見えない。

『ええ...同じものをあと5つ作ります』

ジャックはビーカーの中身を混ぜながら答えた。

「ってことはあれ1個に対してそれ1個で足りんのか...」

ディックが呟く。

「ずっと気になってたんだけど...その薬品を、DP-49と反応させなきゃいけないんだよね？どうやるの？」

サファイアが聞いた。結局、あれからサファイアがとった仮眠は2時間程度。それで元気元気と言い張っている。ジャックは一瞬L-02を渡そうかとも思った ※146 のだが、ちょうど明日は新月。この薬は半月以上期間をあけて服用しないと依存症が出てしまうため、それも出来ない。

『あの容器に穴を開けて、そこから中にこれを流し込みます。この反応では反応後100%固体になってしまいますから溢れる心配はありません。むしろ体積は減ってしまうので、その分空気を入れて調整します』

ジャックはその後10時間ほどで薬品を調合し終え、無事にDP-49の無毒化に成功した。その間に、ピュアはジャックの同意のもと、皆にジェーンの話をしている。ザックリと...本当にジェ

ーンの話だけだ。

もちろん1番驚いたのはサファイアである。彼女が最もショックを受けたのは主従契約のことだった。“どんな関係だったんだろうね？”という話になったとき、危険 ※147 を察知したディックがやむを得ず明かしたのである。

※142...魔法陣とMWを組み合わせて使っているので、“魔法陣MW”と称してみた。

※143...だから、いつものように“百露華で一発”とはいかないのだ。

※144...“チェックマーク”とは、“✓”のことである。

※145...ジャックは前もって魔法陣を書いておくことができたのだが、サファイアの方は漏洩がないかどうか確かめてからMWを作らなければならないうえに、ずっとなんやかんやと作業し通したため、1日に20分ぐらい仮眠をとれるかどうかという状態だったのだ。

※146...“L-02”とは強力な体力回復剤のことだ。

※147...過去に恋愛関係があったことが知れると、恋愛禁止令に引っかかると思ったのだ。

「2人ともお疲れ様。これで心置きなく動けるわね」

ジャックが戻ってきて皆が揃ったところでピュアが言った。“2人”とは当然ジャックとサファイアのことである。

「ちょっとこれからのことを話すわよ」

ピュアはそう言いながら、玉座の肘置きに頬杖をついた。

「もし、キュアラの予想通りお姉さんが一連の事件の犯人なんだと仮定すると、1500年前にあなたたちを作った目的と、今テロを起こしたり、脅迫メールを送りつけてきたりする理由が一致する可能性が出てくるわけよ」

ピュアは、“あなたたち”のところでクリアシャイン姉妹2人を指差す。

「現に今だって、2人をくれって言ってるわけだしね」

ルチアーノが呟くように補足すると、ピュアは

「そう」

と頷いてから、皆の顔を1人1人見つ、重々しい口調で

「そこでなんだけど...思い切って、奴らの要求を呑んでみようかと思うの」

と言った。

「...はい？」

一瞬置いて、ディックが信じられないというように聞き返す。

「だから...ダブル・クリアシャインを奴らに引き渡してみるの」

ピュアがイライラしたように言い換えた。その途端、

「そんな...」

という反対の声があがったが、それをサファイア本人が

「つまり」

と遮る。

「向こうが私たちに何をするのかを見ることで、どうして今私たちが欲しがっているのかとか、何をしたいのかとか、何のために私たちを作ったのかとか...そういうことを探るってわけですわね？」

サファイアがそう確認すると、ピュアは少し口角を持ち上げながら

「そういうこと」

と頷いた。

「あと、ほんとにジャックさんのお姉さんが犯人なのかも調べられるかもしれないし...」

腕組みしたルチアーノが付け加える。

「ちょっと待ってくださいよ!!」

それに対し、ディックが抗議の声をあげた。

「それはあんまりじゃないですか?!何されるか分かんないわけでしょ？」

ディックが憤慨すると、ジャックも

「2人を向こうにとられては、損失どころか脅威でしょう」

と反対する。冷静に見えるが、声はいつもよりずっと鋭い。

「あほっ!!こちらが奴らに何か言われたからって、向こう方につくとも思ってるの？」

ルビーが怒るのを、ジャックは視線だけで制した。そして、作り物めいた不自然な声で「もともと姉は、あなたがたに人格を与えていませんでした。あなたがたを手に入れたら、彼女はまずあなたがたの人格を消すと思います。人格を持たない戦士は脅威ですよ。躊躇いも迷いもなければ、憎しみによる狂いもありませんから」

と言う。

ジャックの指摘により、部屋は沈黙に満たされた。そういうことは誰も考えていなかったのだ。

「...人格なんて、消せるもの？」

顎に手を添えたピュアが、サファイアにちらりと視線を送りながら、小さな声でゆっくりと尋ねた。

「今のところそのような魔法陣や呪文は報告されていません」

サファイアはそう答えたが、そのあとやや渋りながら

「ただ、ものに人格を与える魔法も報告されていませんから、そういう魔法が存在していても不思議はないでしょう」

と付け足す。

「ほら...もうちょっと別のやり方考えましょうよ」

サファイアの言葉を聞くなり、ディックが半ば強制的に促すような口調で言った。

「...わたしも個人的には...正直やりたくないなあ」

ペーターまで反対し始める。彼が皆の前でピュアに反論することは滅多にない。

「しょうがないでしょっ!!」

ピュアが叫んだ。ところが、急に叫んだことでむせ込んでしまい、その後の言葉が出てこない。

「ピュア様、大丈夫ですか？」

サファイアが背中をさする。

「ピュア様――...」

「...だ...大丈夫...夫よ、キュアラー」

最近、ピュアはこのように咳込むことが増えている。もちろんジャックは気付いているし、診察を申し出ているのだが、ピュアは“あんたは自分の仕事に専念しなさい”と言って、それを拒否しているのだ。

「...あのねえ...」

息を整えたピュアが皆を軽く睨みながら口を開いた。

「夢境界5大要所同時爆破テロが起きてから、もう何年経ってると思う？ 奴らの意図はまったく掴めないし...見えないところで何やってるか分かんないじゃない。また同じような事件が起きてごらんないよ、いくら紅玉高原の王政支持率が89%だとか、青玉島の王政支持率は92%だとか言ったって、今度は国民の暴動が起きるわよ!!」 ※148

誰も何とも答えられなかった。テロリストが何を考えているのか分からないが、国民が王宮を

否定するようになれば、彼らとその国民を味方につけるのは容易だろう。そんなことになれば、奴らは本当に怖いもの無しという状態になってしまう。

「当たり前だけど、国民を敵に回したら終わりなんだよ」

ルチアーノもピュアの話の補強する。

「...お願いよ。やってちょうだい」

最後には、ピュアの口調はもはや命令ではなく懇願になっていた。

最初に承諾したのはサファイアだった。というより、サファイアは初めから反対する姿勢を見せていない。サファイアが承諾すると、それに引きずられるようにルビーも頷く。最後まで反対したのはディックとジャックだが、当本人である2人が同意しては反対もしづらい。

結局、方針は決まってしまった。

「言う必要もないと思うけど、クリアシャイン姉妹を奴らに渡す気はさらさらないわ。奴らがあんたたちに何をしたいのか、何をさせたいのかが分かったら、即刻帰ってきなさい。いい？」

ピュアがそう言うと、ディックがすかさず

「ちょっ...“いい？”って言いますけどね、ピュア様」

と口を挟んだ。

「奴らが、この子たちが動けるような状態にしておくと思います？」

ディックがそう聞くと、ピュアは

「バカね。何のためにあんたたちがいるのよ」

と言い返ししながら、ディックとジャックをビッビッビッビッと2回ずつ指差す。

「...なんかそれ、久しぶりですね」

サファイアが苦笑しながら言った。“それ”とは人を指差すピュア独特のジェスチャーのことだろう。

「ああ、そう言えばそうね...って、そんなことどうでもいいのっ!!」

ピュアはサファイアの緩い話に乗りかけたが、ギリギリのラインで踏み止まって“片ほっぺみいいいん”をする。

「ああああ姉ちゃんいじめたら...」

すかさず抗議するルビー。

「はいはい...強制終了強制終了」

そんなピュアとルビーの間に、ペーターがやんわりと仲裁に入った。“強制”という言葉とやんわりした口調、にもかかわらず有無を言わせない空気という、奇妙な3つの取り合わせとなっている。

「...と...とにかく、さっきキュアラが言ったような事態になったら困るんだから、あくまでも姉妹の安全が最優先よ。敵陣に放り込んで死守しろっていう訳の分かんない任務だけど.....分かったわね?!!」

ピュアがそう言いながら1人1人に視線で確認すると、4人ともそれぞれに頷いた。

話が決まったところで、すぐに出発とは問屋が卸さない。明日の晩は新月だ。したがって、出発は新月の夜が明けたさらに次の日——つまり、24日の朝ということになる。

※148...2ヶ国の支持率は、2009年6月1日 ディマリア調べ

2009年6月22日

24日に向けて、女王の間は非常に慌ただしくなっていた。細かい点の打ち合わせ、道具の準備などを進めているのだ。

バタバタしているうちに時間は瞬く間に過ぎ、正午を過ぎていた。お昼時になると、たいていクリアシャイン姉妹が5人分 ※149 の昼食を食堂まで取りに行く。姉妹は食堂に着くと、5人分のメニューを選んで ※150 ワゴンに載せた。そして、スプーンやフォークもきちんと人数分持ったことを確認してから、今来た道を引き返す。

「なあ、姉ちゃん？」

食堂を出るとすぐに、ルビーが小さな声でそっと呼び掛けた。

「ん？」

サファイアが首を傾げて応じると、ルビーは低めの声で

「ジャックさんってさあ...1500年前も、姉ちゃんのこと知ってたんだろ？」

と切り出す。

「うん...そうだね」

サファイアは少し俯きながらそう答えた。

「昨日、魔力と寿命の話があったじゃん？」 ※151

ルビーは前方を見つめながら、慎重に話を進めていく。慎重過ぎて、サファイアには話がどこに進んで行くのかまったく分からない。

「で...ディックもさ、1500年以上生きてるわけだけど...1500年前、あいつがうちのことを殺したみたいなんだよ」

「え...？」

サファイアは、ルビーの思わぬ告白に驚いて振り返った。

「それでうちの魔力があいつに移ったから、あいつは今もずっと生きてるってわけ」

そう言うルビーに、サファイアが微かな声で

「それ...いつ知ったの？」

と尋ねると、ルビーはあっさりとした口調で

「会う前から知ってたよ」

と答える。

「1500年前のうちの、生まれ変わった自分宛てに手紙遺してたんだ。そこに書いてあった。でも、1500年前のうちは同時に“友達だったから会いに行け”とも言ってるから、多分何かしょうがない事情があったんだらうって思ってる...」

そう言ってちょっと笑って見せるルビーに、サファイアは返す言葉がなかった。1500年前のディックとルビーが、仲良く笑いあっていたり、しょうもないことでケンカしていたりする姿なら容易に浮かぶ。しかし、そんな...ディックがルビーを殺す様子なんて、まったく想像できない。

初めからそんなことを知っていても、ルビーはディックのことを好きになってしまった。また、殺した側であるディックも、ルビーのことが好きだと言っている。

それを考えた時、サファイアはふと、ディックからルビーへの想いを聞き出した時に見たディックの様子を思い出した。

...そっか...そんなことがあったからなのか...

“...やっぱりバレバレ”と言われた時の、異常な焦り方。“頼むから誰にも言わないでくれよ、サファイアちゃん”と頼んでくる時の、苦しいくらいの切迫感。あの時も、何か厄介なことがあるんだろうとは感じていた。しかし、まさかこんなことだったなんて...

「いや、話したいのはそこじゃないんだよ」

廊下の角を曲がってエレベーターが見えると、ルビーは慌ててそう言った。

...まだ本題入ってないのにもう道のりの半分終わっちゃったじゃん...!!

「ジャックさんも同じように1500年間生きてるんだろ？しかも、1500年前の姉ちゃんと面識があった。ってことは、姉ちゃんたちの方もうちらと同じだったりしない？」

ルビーがそう言うと、サファイアの足がピタリと止まった。

「...姉ちゃん...？」

俯いている姉にルビーがおそろおそろ話しかける。

...あー...やっぱり言わない方が良かったかなあ...

ルビーは俯いて固まっているサファイアを見て、ショックを受けて呆然としているか、もしくは泣いているのだと思った。ところがサファイアは、俯いたままふっと微笑むと

「...そうだったらいいな...」

という言葉漏らす。

「!!」

小さくぽつりと呟かれたその言葉に、ルビーは思わず目を丸くした。

「...え...？姉ちゃん、その方がいいの...？」

ルビーが信じられない思いで聞き返すと、サファイアは

「うん...」

と頷きながら再び歩き始める。

「だって、1500年前に主従契約を結んでいたってことは、私、きっと1500年前にも呪いのことで迷惑かけてたってことでしょ？しかも、“主従”契約だなんて...そう思うと、申し訳なくて...」

せっかく歩き出したのにすぐエレベーター乗り場に突き当たってしまい、2人はまた足を止めた。エレベーターは3機あるのだが、いずれも最上階付近でのろのろしている。

「じゃっくん、何か目的があつてずっと旅してたみたいだから...そのために、私の魔力が少しでも役に立てたんだったら...もしそうだったら、嬉しいなあって...」

普段は子供にしか見えないサファイアが、何故かとても大人っぽく見えた。

...姉ちゃんは、自分を殺した(かもしれない)人を“許す”どころか、“役に立てて嬉しい”って言うんだ...。

サファイアたちの状況と、ルビーたちの状況は非常に似ている。どちらも、姉妹を殺した(かもしれない)人がその魔力で生き長らえていて、それ故に今、再び一緒にいるのだ。しかし、似ていても何かが違う。同じではない。何かが決定的に違う...。

ようやくエレベーターがやって来た。2人の他にも人はいたのだが、3機のうち2機が同時に来たため、待っていた人たちは2つに分かれて乗る。皆サファイアを避けるため、姉妹と同じエレベーターに乗る者は誰もいない。

エレベーターに乗ると、再びサファイアがそっと口を開いた。まだ、俯き加減に小さく笑っている。

「それにほら、そうでなかったら、現代になってまたこうやって会うこともできなかったじゃない？私、ジャックには申し訳ないけど...でも、本当にジャックと会えてよかったって思ってるから...“よかった”って言うか、ジャックと会えてなかったら、私、どうなってたか分かんないもん...」

そう言うサファイアを、ルビーはじっと見つめていた。それから、思ったことを伝える上手い表現はないものかと必死に探しながら、ゆっくり

「姉ちゃん...ジャックさんのこと、本当に大切に思ってた...」

と言ってみる。それに対して、サファイアは至極自然に

「うん」

と頷いた。

「ジャックは私にとって、お兄さんみたいな感じなんだよね」

今度はサファイアがゆっくりと、噛みしめるように言う。いや、“噛みしめる”と言うより、“自分に言い聞かせる”と言った方が正確かもしれない。

...“お兄さんみたい”...?ってか、むしろ...

ルビーは少し首を傾げた。しかし、そこまでで考えるのをやめる。

...いや、姉ちゃんがそう言ってるんだから、きっとそうなんだろう...。

エレベーターのドアが開いた。もう女王の間がある最上階だ。2人はエレベーターを出ると、昼食の載ったワゴンを押しながら、また廊下を歩き出す。最後の角を曲がって長い一直線の廊下に差し掛かった。するとサファイアが、唐突に

「...1500年前の私はルビーみたいにきちんと手紙遣したりしてないみたいだけど...」

と言う。

「...でも私、きっと、生まれ変わってもジャックとはまた会いたいって...そう思ってたと思うよ」

そう言うサファイアの愁いを帯びた笑顔は、見る者が息を呑むほど綺麗だった。“美しい”のとも、“可愛い”のとも違う、“綺麗”な表情だ。おそらくジャックに向けられたものなのだろう。

...どんなに頑張っても、これから時を重ねて、うちと姉ちゃんがどんなに仲良くなっても、うちじゃあジャックさんの代わりにはなれない。

ルビーがそう痛感するのと、女王の間のインターホンが手の届く位置に来るのとは、ほぼ同時だった。

※149...言うまでもなく、女王の間にいる7人—ジャックとディック=5人 である。

※150...メニューの決定権もこの2人に任されている。

※151...ジェーンの話をした際に、ジャックが魔力と寿命の関係についても説明したのだろう。

その日の夕方、ジャックはサファイアを地下牢に閉じ込めると、屋上を訪れた。普段はずっと地下牢の外にいるのだが、今夜は何故か、ルビーに呼び出されているのだ。

ジャックが来た時には、もうルビーは柵に寄りかかって、少しずつ暗くなり始めたセントラルシティの街並みを見つめつつ待っていた。

「お待たせして申し訳ありません」

ジャックが謝ると、ルビーはちらりはこちらを見て、再び街並みに視線を戻す。その表情は非常に厳しい。

「あのさあ...昨日あんたのお姉さんの話とか聞いて、それからちょっとうちとディックのこととか思いだして、それで姉ちゃんと話してたんだけど...1500年前の姉ちゃん殺したのって、あんただろ？」

「!!」

あまりにも唐突な形で切り出されたルビーの言葉に、ジャックはすぐ答えることができなかった。しかし、ルビーはその沈黙をジャックが誤魔化し切る気であると考えたのか、厳しい表情を崩さないまま再び口を開く。

「うちとディックもそうなんだよ。1500年前のうちは、ディックに殺されたみたいなんだ。で、ディックはその時の魔力で今もずっと生き長らえている。まあ、何かしょうがない理由かなんかがあったんだろうとは思ってるけどさ。でも、あんたたちもそうなんじゃないの？あんたが姉ちゃんを殺して、その魔力で今も生き長らえている。そういうことじゃないの？」

まあ、確かにルビーの言うとおりであった。ジャックは否定するつもりなどない。もうすでにピュアには指摘され、認めているのだ。しかし、やはりサファイアの実の姉妹の前で、それを認めるということは、思っていたよりずっと難しかった。正直に頷こうと思っているのに、なかなか頷けない。

「...ええ。そうです」

それでも、ジャックはどうかそう頷いた。すると、ルビーは黙ったままこちらに目を向け、ジャックの青い眼をじっと凝視してくる。

「.....」

ジャックは思わず、そのオレンジ色の眼から視線を外した。クリアシャイン姉妹は互いにまったく似ていないのだが、どういうわけか、真夏の太陽のようなルビーの眼の奥に、1500年前のサファイアの最期が蘇る。

...あの時はちょうど、サファイアの眼に宿る光のような夜だったのに...

「...やっぱりか」

ルビーが低い声で、ぽつりとそう呟いた。

「...サファイアと、そう話していらしたのですか？」

ジャックが尋ねると、ルビーは小さく頷き、

「姉ちゃん、何て言ったと思う？」

と聞いてくる。

「...何ですか？」

当然分かるはずのないジャックが聞き返した。するとルビーは
「...そうだったらいいな、だってさ」
と答える。

...!!

ジャックは思わず耳を疑った。しかし、ルビーは構うことなく言葉が続ける。
「呪いのこととか、主従契約とか、いろいろ迷惑かけただろうから、自分の魔力があんたの...なんか、旅の目的だか何だかに役立ったなら、それで嬉しいんだって。それで、現代でも会えたんだから...みたいなことも言ってた。あんたに会えてよかったって...」

...違う。旅の目的は、サファイアに会うことだったんだから...

「...あんたのこと、お兄さんみたいな存在だって言ってた。あんたに会えていなかったら、どうなってたか分かんないって...」

ルビーはそこまで言うと、身体の向きを90度変えてジャックと正面から向き合った。そして、やや強い口調で

「あのさあ」

と話しかけ直してくる。

「うちは、あんたと姉ちゃんの間についてどんなことがあったのかとかまったく知らないし、ぶっちゃけちょっと癪なんだけど...でも、姉ちゃん、あんたが思ってる以上にあんたのこと頼ってるっぽいんだよな。あんたは何かいつも落ち着き払って澄まし顔してるけどさ...姉ちゃんにとって、あんたの代わりになれる人はいないんだよ。だから...ちょっと、それだけ覚えといてやって...」

ルビーがそう言い終わると、そのあとの屋上を沈黙が支配した。日はだいぶ沈み、風は若干涼しくなっている。“涼しい”と言うよりは“心地よい”程度かもしれない。

「...ま、それだけだよ」

そう言うと、ルビーはジャックの返事を待たずに、くるっと背を向けて城内への入口へ歩き始めた。真っ赤な短い髪が風に揺られている。

その後ろ姿を、ジャックは黙って腕組みしたまま見送った。

月のない夜が明けると、ジャックはいつも通りにサファイアの鎖・足枷・手錠・猿ぐつわを外して薬を飲ませた。

「...ありがとう」

薬を飲み干したサファイアはお礼を言ったあと、

「ごめんね、手間かけちゃって...」

と謝る。

「いえ」

ジャックが答えた。素っ気なく聞こえるが、このやり取りは毎月繰り返されているのだ。

「...私、1500年前もこうやって迷惑かけてたんだよね...」

サファイアがぼつりと呟いた。

「しかも、主従契約なんてしてたんでしょ？」

小さな声で申し訳なさそうに聞いてくるサファイアに、ジャックが

「ええ」

と頷くと、サファイアは

「ごめんね、ジャック...」

と謝ってくる。“申し訳なさそう”というよりむしろ、1500年前の自分が誰かの“主”であったことを、おこがましく思ってゾツとしているのかもしれない——彼女の思考回路なら十分にあり得る話だ。 ※152

「.....」

ジャックとしてもどう答えるべきなのか皆目見当つかなかった。ジャックに言わせてみれば、サファイアは契約中から本当に良くしてくれた ※153 し、主従契約がなければサファイアと親しくなることはあり得なかったのだから、こう謝られるようなことではないのだ。

さらにもう少し違うことも考えてみると、もしも新月の呪いがなければ、ジャックとサファイアは主従契約などしなかっただろうし、親しくなることもなかったはずなのである。まったく皮肉なものだ。

だが、サファイアは1500年前のことは覚えていないわけだし、恋愛禁止令がある以上迂闊なことは口に出来ないし...

「...いえ、謝らないでください」

やがて、ジャックは小さく首を振りながら答えると、慎重に言葉を選びながら

「もともとわたしの都合に因るところが大きかったんです。それに...あなたには、本当によくしていただきましたから...」

と言った。

※152...主従契約というレベルになると、もしかしたらサファイアでなくてもそう感じる人が多いのかもしれない。

※153...というより、主従関係は完全に形骸化して、事実上ジャックがサファイアの保護者のようになっていた気もする。

2009年6月23日

ジャックの治療のおかげで、サファイアは新月明けの仕事でも疲れを見せたことがない。新月がくる前の夕方は日没前に地下牢へ行かなければならないので早退するが、明けた後はまったくいつも通りなのだ。

この日も例外ではない。サファイアは普段通りに仕事をし、明日の支度をする。

「さっき連絡したら、明日の4:00に来るように、ですって。だから、クリアシャイン姉妹はとりあえず要求通りそこへ行く。いいわね？」 ※154

ピュアが姉妹を交互に見ながら言った。

「ルビー、いったんはおとなしく捕まっとくんだぞ。いきなり暴れたらダメからな」

ルチアーノが念を押すと、ルビーは

「分かってるし!!」

と言り返す。

「でも、何かされそうになったら...って言っても、2人が自由に動ける可能性は皆無でしょ？そこで、今度はあんたたち...」

ピュアはそう言いながら、ディックとジャックの方に視線を移すと、

「あんたたちは、クリアシャインたちがピンチになったら助け出すわけなんだけど...奴らがそんな遠くから目視出来るような場所で何かするとは思えないのよね...」

とゆっくり呟くように言った。

「サファイアちゃんとルビーは動けないんだから、ピンチになったら助けを呼ぶ、とかいうのは無理だろ？」

困ったように腕組みして言うルチアーノに、ディックが

「ってか、それじゃ間に合いませんって」

と突っ込む。

「とりあえず、私たちの居場所を見失わないことが必須ですよ」

サファイアが言うと、ルビーは頭の後ろで手を組んで

「そこはまあ...ちゃんと見ててもらうしかないだろ」

と言ってディックとジャックに目を向ける。

「目を離さなければ見失わないでしょうか？」

ルビーの意見に、ジャックが疑問を投げかけた。

「彼らはテレポート出来るのでしょうか？その場合、追跡は不可能だと思いますが」

ジャックが指摘すると、皆“あー...そっか...”などと言ったきり、何も言わなくなってしまう。

「...なあジャック？」

しばらくしてから、ディックがふと気になったように話しかけた。

「ジェーンってさ、いつからテレポートなんかできるようになったんだろ？」

ディックが尋ねると、ジャックは

「1500年前からだ」

と答える。

「へ？」

ディックが驚いて聞き返した。するとジャックは、皆に対して「戦闘の最中、姉の身体を突然身の丈ほどの小さな竜巻のようなものが飲み込んだかと思うと、竜巻と同時に消えてしまったんです。1秒あるかないかの出来事でした」と説明する。

「要は、今寄せられている目撃情報と同じよね」

ピュアが腕組みしながら呟いた。

「いや、だって...吸血鬼は本来、テレポートとかできないんですよ？1500年前って言ったら、誰もそんな呪文見つけてないですよ？」

信じられない様子で聞いてくるのはディックだ。

「今現在でも、夢幻界にはそんな自由自在に――戦闘の途中でテレポートしたりできる魔法は報告されていません。夢幻界の魔法はMWなどの平面図形を用いたものが多い ※155 ですし、呪文魔法を使う民族はどういうわけかみんな魔力が弱くて、転送魔法なんて使えないんです」

サファイアがそう口を挟むと、ピュアがイライラしながら

「ってことは何なのよ？」

と聞いた。

「おそらく、実界魔法族か白色吸血鬼が手を貸したんでしょうってことです」

サファイアが答えると、今度はディックが

「白色吸血鬼？」

と尋ねる。

「はい。主に吸血鬼魔術を研究する魔法学者が使う、独特の分類なんですけど...」

そこまで言ったサファイアは、一瞬続きを言うのを躊躇った。しかし、その先を言わないわけにもいかないので、

「普通、吸血鬼はみんなブルーブラックの髪と青い目なんですけど、たまに髪や目の色が違う人がいるんですよ」

と続ける。その言葉で、皆の視線が自然とディックに集まった。それを見たサファイアが

「ディック、ごめんね」

と謝ると、ディックは軽く笑いながら小さく首を振って、先を促す。

「ほとんどは色が違って見た目以外何も変わらないんですが、1色だけ例外があります。それが“白色吸血鬼”――つまり、銀髪・銀目の吸血鬼です。彼らは蔓や炎 ※156 を使うのは苦手なんですけど、その代わりに空間系の魔法が得意なんですよ」

「...ってことは、そういうのがジェーンさんを手助けしていたかもしれないのね？」

ピュアが確認すると、サファイアは黙って頷いた。

「で、とにかく、そんなことされたら追跡なんてできないってわけか...」

ルチアーノの言葉はあまりにも当たり前過ぎるため誰も頷かないが、本当ならつべこべ言わずにこれだけ言えばよかったのである。

「...位置探査MWでも持っておきます？多分没収されちゃうと思いますけど...」

しばらくしてサファイアが言った。

「絶対没収されないところに作るしかないよな」

ルビーが言うと、サファイアが

「どこ？」

と尋ねる。

「どこだろ...例えば...」

「ないと思うよ」

ペーターが静かな口調でルビーの言葉を遮った。

「必要とあらば、腕だって何だって没収されかねないからね」

「ちょ...お父様...」

夢幻界の大王国を治めているとはいえ、まさに温室育ちであるピュアは、父親の不穏な発言に思わず突っ込んだ。それでも、ペーターは

「そういうものだよ？」

と冷静に言う。

...そういや、ペーター様の相方って、手に盗聴魔法陣埋め込んでスパイ活動してたら、見つかって片腕“没収”されちゃったんだっけ...

そんなふうに思いあたったのはディックだけだ。

「...まあ、とりあえず持ってなさい...普通のMWでね。それ以上は無理でしょ...」

ピュアがお手上げだというように言った。

「したら...タイミングはどうしよっか？ 奴らがやり始める前に助けちゃったら意味ないじゃん？」

ルチアーノが次の問題を指摘すると、女王の間に再び沈黙が流れる。

「...思うに、この流れだと早過ぎるって心配より、間に合わないって場合の心配をした方がいいんじゃない？」

やがて、ルビーが手を頭の後ろで組みながら言った。するとディックも

「早過ぎた場合は、見れば分かるってのもありますしね」

と賛同する。

「...そう？ ならいいけど.....あ」

ピュアがいきなり、何か思い出したような声をあげた。

「そうよ、言い忘れるところだった...助けたら、その場にいる敵は全員捕獲してきなさい」

ピュアが命令すると、ディックはまさかという顔をして

「え...マジですか？」

と聞き返す。

「冗談なわけないでしょ」

ピュアはディックを睨みつけてから

「その場にいた人間ってというのは、あんたたちの顔を見てるわけでしょ。クリアシャインはバレてるからしょうがないにしても、ソルジャーとキュアラーはまだ知れてない...はずなわけ。でき

ることならこのまま知られない方がいいわ。それに、連れて帰ってくれば情報源になる。できるだけ殺さないでちょうだいね、例えテロリストだろうと何だろうと、戦争以外で殺すと夢幻国際法に引っ掛かるから……まあ、やむを得なかった場合は事故とかなんとかを装うしかないけど」と説明した後、最後にぼそっと

「…まあ、とりあえずあんたたちが帰ってくるのが最優先だけどね」と付け加えた。

※154...ここは誰か“連絡ついたの?!”と突っ込んでもいいところだと思うのだが、皆明日の計画に集中しているらしい。ちなみに、この約束をした後はまた、一切連絡つかなくなっている。

※155...平面図形を用いるということは、毎回その準備をしなければならないということである。従って、戦闘中にパッと消えるような真似はできないということだ。

※156...物語中ではあまり書いていないが、吸血鬼は炎も操ることができるのだ。たまに、これを使ってジャックが薬品を加熱している場面があったと思う。もしかしたら、戦闘に使っている場面もあったかもしれない。

出発前夜22:30、サファイアはもう就寝準備をしていた。いつも2:00ぐらいまで起きているサファイアにとってはあまりにも早い就寝なのだが、明日に備えておくよう“命令”されたのだ。

「...じゃっくん」

目覚まし時計をセットしたサファイアは、洗濯した枕カバーをかけながら話し掛けた。 ※157

「ごめんね、夕べ新月だったのに明日も迷惑かけちゃって...」

小さな声でそっと言うサファイアを、ジャックは黙ってじっと見つめる。

「...もし、もう手遅れだったら...そしたら、情け容赦なく殺しちゃってね」

サファイアは俯いたままだったが、顔を見ると少し微笑んでいた。さらに、黙っているジャックから確認を取ろうとした彼女は、微笑みをより大きくして

「ね？」

と首を傾げる。まるで、“もし雨が降りそうだったら、洗濯物取り込んでおいてね”と頼むかのような口調だ。

「...どういう意味です？」

そんなサファイアに、ジャックが硬い声で聞き返した。

「言葉通りの意味だよ」

サファイアはまだ笑っていたが、ジャックの冷ややかな視線を受けて再び俯くと、囁くような声で

「...嫌なの、私...ジャックとか、ディックとか、この王宮の人とか...みんなと戦ったりしたくないの...みんな強いから、そんな心配ないって言うかもしれないけど...でも、万が一のことがあって、誰かを殺しちゃったりしたら.....そう思うと怖くって...」

と説明する。

しばらくの間、2人を沈黙が支配していた。ジャックがサファイアをまっすぐ見つめているのに対し、サファイアは頑なに下を向いている。

「...それはあなただけではไม่ใช่でしょう」

やがて、ジャックが静かに口を開いた。静かだが、非難の色を含む冷ややかな声だ。

「わたしがあなたを殺して平然としていられると思います？わたしが、あなたを殺しても...何も思わないと思っているのですか？」

ジャックの声はいつもよりずっと低く、形容しがたいほど冷々としていた。それに驚いたサファイアが思わず顔を上げると、氷のような青い眼がこちらを見つめている。

「あ...ご、ごめんなさい...」

サファイアは慌てて謝った。ジャックの眼が冷たさの後ろに隠している、怒り、悲しみ、やるせなさ、身を切るような辛さ...そういったものを感じながらも、彼が今何を思っているのかを掴みかねているのだ。

サファイアが怯えていることに気づいたジャックは、

「...すみません」

と言って身に纏う空気を心持ち和らげた。そして腕を組むと、一瞬目を逸らしてから再びきちんとサファイアの目を見つめ、今度は一言ずつ言い聞かせるように、

「でも...あなたはわたしたちと戦いたくないのでしょうか？それと同じように、わたしだってあなたと戦いたくないんです」

と言う。

ジャックの様子は極めて静かに見えたが、内心では蘇ってくる1500年前の記憶に飲み込まれそうだった。

“私を、力いっぱい抱きしめてほしいの”

必死に頼んでくるサファイアに、僕は一瞬言葉を失う。その一瞬にも、サファイアの身体は風にさらわれ、砂浜に消えていく。

“...本気でおっしゃっているのですか？僕に、あなたを殺せと言うのですか？”

僕はやっとの思いで聞き返した。抱きしめたら、彼女の身体はぐずぐずに崩れてしまう。僕はサファイアのことを愛おしくて堪らないのに...僕に、殺せと？

しかし、そんな状態にもかかわらず、サファイアは恥ずかしそうに俯いて小さく頷いた。

“...うん。最期に、抱きしめてほしくて...大好きなジャックに抱きしめられて、その腕の中で死にたいの...”

結局僕は彼女の言葉に従った。この腕で、サファイアの身体を抱き潰したのだ。すると彼女の身体は、ぐずぐずに崩れて行ってしまった...

その後、僕は今日までずっと同じ夢を繰り返し見ることになった。何度も何度も...この夢を見る度に、僕は激しい罪悪感に襲われた。

“僕が殺したくて殺したわけではない”

“それしか仕方がなかった。彼女に頼まれたのだし、そうしないとジェーンたちにサファイアの膨大な魔力が流れてしまうし...”

“どの道あと1分ほどの命だったはずだ”

...そう自分に言い聞かせても、罪悪感が和らぐことはない。にもかかわらず、どうしてもサファイアに会いたくて.....だから、1500年間待ち続けたのだ。自分で殺したくせに、凶々しいとは思いつながらも...

...だが昨夜のルビーさんの話では、1500年前の自分を殺したのは僕かもしれないと聞いた時、サファイアは“...そうだったらいいな...”と言ったらしい。そう聞いた時には思わず耳を疑ったが...今になってみると、サファイアならそう言ってもおかしくないかもしれない。なんせ今だって、また僕に“殺せ”と言っているのだから....

「...ごめんなさい...」

ジャックの寂然とした様子から、自分の発言がジャックに何か辛い思いをさせていると気づいたサファイアは、また俯いて謝った。しかしジャックは、今俯いたサファイアの髪をそっと撫でるようにして上を向かせると、サファイアの眼をまっすぐ見る。

サファイアの濃紺の眼は、ジャックの気持ちを掴みあぐねてきょとんとしていた。6年前、ジャックとサファイアが再会してから初めての新月の夜が明けた時の表情と似ている。“そばにいてくれて嬉しかったよ”とでもいうかのように笑うサファイアを抱きしめようとした際、1500年前のサファイアを砂浜で抱き潰したトラウマのせいで抱きしめられず、愕然として固まっているジャ

ックを、何だかよく分からないというように見上げてくるサファイアの、少し不安げな眼...
...あれからもう6年経っているのに、僕はまだ、そのトラウマから逃れられていない...
ジャックは、サファイアのしなやかな濃紺の髪をそっと指で梳いた。ちょうど、6年前の地下牢でしたことと同じだ。そして、1500年前に初めて新月の呪いが発動した翌日と同じように、サファイアの眼をきちんと見据えて
「ご安心ください。そのような事態にならないよう、必ずお守りいたしますから」と言い切る。
...え...ちょっと...
正面切ってそんなことを言われたサファイアは、思わず頬が火照るのを感じた。
「...あ...あ、ありがとう...」
サファイアはまたもや俯いて、やっとの思いでお礼を言う。
...ちょっと待って...そんな綺麗な眼でそんなこと言わないでよ。反則どころか、むしろ犯罪だよもう...



※157...王宮のほとんどの部屋はちびっこお掃除隊が掃除・洗濯をしてくれるのだが、女王の間と側近の部屋に彼らが来ることはない。これは、女王の間や側近の部屋には極秘文書がある可能性が高いので、ちびっこを通して外に漏れることを防ぐためだ。女王の間の掃除・洗濯はペーターがやっているし、側近の部屋はかつてちびっこお掃除隊にいたサファイアがプロ意識を持ってやっている。



第5章 出動

翌朝2009年6月24日3:30

「...もう...何でこんな早朝なんだよ。もう少し遅い時間でもいいだろ...」

出発10分前の女王の間、ルビーがあくびを噛み殺しながら言った。

「私はむしろ、朝であることに驚いてるんだけど」

腕組みしながらそう呟いたピュアに、ルビーが

「朝?!まだ外暗いんですけど!!どう見たって夜中じゃん!!」

と言い返しても、ピュアは

「それだけ騒げるなら平気でしょ」

と一蹴だ。

「はい、お待たせしました!!」

サファイアが薄い箱のような物とナイフをそれぞれ2つずつ持って駆けてきた。

「これが位置探査MW...ほら、ちゃんと場所が出てるでしょう？」

ルビーに1つ渡してから、サファイアが女王の間の大モニターを指差すと、そこに映っている夢幻界地図と青玉島の拡大図の王宮の位置で、赤と青の点が点滅している。

「赤がルビー、青が私です。2人のケータイにも出てる...よね？」

「ああ、大丈夫大丈夫」

「ええ、出ています」

サファイアに聞かれたディックとジャックが確認して答えた。

「じゃあ、あとはそれね。えっと...」

ピュアがそう言いながらサファイアの持つナイフを指差すと、サファイアは

「切鎖短剣ですね」

と言って、ディックとジャックにそれを1本ずつ渡す。

「そうそう。それで封印鎖をガンガンやれば切れるはずだから...ま、あんたたちならガンガンやらなくても一撃だと思うけど」

手をひらひらさせながらピュアが説明すると、ディックは

「あー...なるほど...」

などと言いながらひっくり返したりして見て、

「ありがとうございます」

とポケットにしまった。 ※158

「...ってか、うちのこと助けに来てくれんのって、こいつなのか...」

そんなディックを見ながら、ルビーがぼつりと呟く。

「そうだよ。何を今さら...」

おそらく、ルビーの気持ちに気づいているのか、そう答えるルチアーノはニヨニヨと笑っている。それに気付いたルビーがどうにか誤魔化そうとして

「何か、肝心なところでしくじったりしそうで不安なんだけど...」

と付け足すと、ディックは憤慨しながら

「うっわ、今そういうこと言う?!うっせええ...いいよ、絶対助けてやっから見てろ!!」

と宣言した。

「...んもう...そういうセリフはもうちょっとマシなシチュエーションで言いなさいよ...」

腰に手を当てたピュアが、呆れ顔で溜め息交じりに突っ込む。

「ほんとだよ、まったく...」

そう同意するルチアーノは、まだ面白そうに笑っていた。

“とにかく、ちゃんと帰ってきなさいよ!!”ともう1度念押しされて、クリアシャイン姉妹は王宮のヘリコプターに乗り込んだ。さすがにメルクリウスや炎の戦車で飛んでいくわけではない。ジャックとディックはそれを先回りして行き、隠れているというわけだ。

今回の待ち合わせ場所は、外島の南の方にある荒れ地だった。耕作放棄地となり果てた畑が広がっている。その他にあるのは、1本の高い木と木造の小屋だけだ。待ち合わせ時刻の10分前に着いてヘリコプターに置いていかれた姉妹は、特にすることもなく、ただ待ち合わせ時刻が来るのを待っている。

「姉ちゃん、ちょっと見てよ」

今まできょろきょろしていたルビーが突然サファイアを突いて言った。

「どうしたの？」

サファイアが首を傾げると、ルビーは「姉ちゃんほどじゃないけどさ、あれめっちゃめっちゃ可愛いくねえ？」

と屋根の上を指差す。

屋根の上にはいたのは、やたらとお行儀の良い2匹の猫だった。1匹は夕焼けのような眼をした赤茶の猫。もう1匹はびっくりするくらい透明な青い眼をした黒猫...

確かに可愛い。可愛いけど...

「...あれ、ディックとジャックだよ」

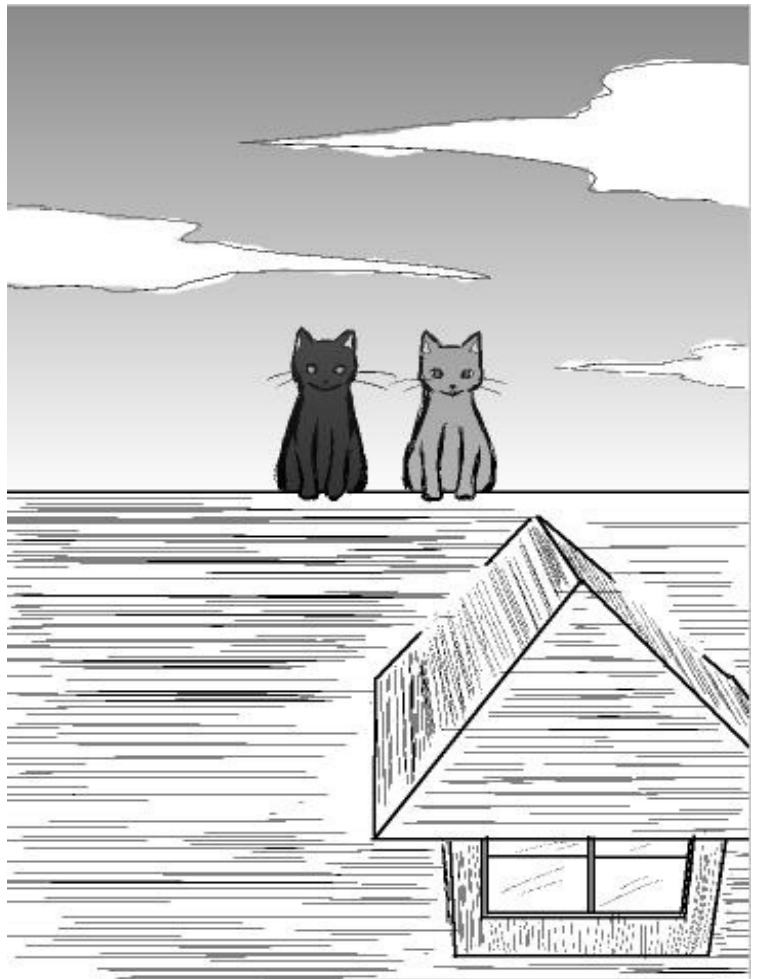
サファイアはルビーに耳打ちで教えてあげた。すると、ルビーはもう1度そっちを見て、思わず吹き出してしまう。

“ちょ...笑っちゃダメ!!バレちゃうでしょ!!”

サファイアが口の動きだけでそう叱りながら“ほっぺみいいいの刑”をした。上司から感染ったらしい。

...まったくもう...

一方、屋根の上の2匹——ではなく2人は、揃ってそう心の中で呟いていた。これだけ性格の違う2人でも、ここまで来るとコメントが揃ってしまう。



しかしそれでも、姉妹から目を離してはいない。

4:00——待ち合わせ時間になった瞬間、突然姉妹を小さな竜巻が飲み込んだ。竜巻はすぐに消える。しかし、竜巻が消えたときにはもう姉妹もいなかった。

※158...もちろん渡された段階からきちんと鞆に収まっている。

地図上の赤い点と青い点はすぐに移動した。赤い点は青玉島から約63km、青い点は約106km離れた地点で点滅している。いずれも、青玉島と大陸の間に浮かぶ無人島だ。吸血鬼の飛行速度は時速200kmだから、ルビーがいるところまでは約19分、サファイアのいるところまでは約32分かかる。

竜巻が消えると、ルビーは地下牢のようなところにいた。案の定、身体は封印鎖でしっかり縛られていて、どうにも動けないようになっている。

「ふーん...おまえがルビー・クリアシャインか」

不意に、右の方から男性の声が聞こえてきた。振り返ってみると、牢の中に入ってきた紫髪の男が、後ろ手に扉を閉めている。

...うっわ、いかにもガラの悪そうなおにいさんじゃん...

そんなことを考えていると、青年はルビーの正面で立ち止まり、笑いながら見下ろしてきた。

「ははっ...ちっせえ時からずっと王様のために働いてきたのに、売られちゃったってわけかなあ？」

「...しょうがねえだろ。青玉島が潰れちゃったら敵わないし...」

ルビーはそう言いながらギロツと睨みつける。

「んなこと喋っちゃっていいのか？国家機密じゃねえの？」 ※159

青年は睨まれても気にすることなく、からかうように言うと、さらに、

「ま、別にいいよな。自分を売った国だもんな。いっそ滅びちまえとか思ってんだろ？」と笑った。

「あほっ!!んなこと思ってるわけないだろ？そんなだったらこんなとこ来ないし!!」

ルビーが噛み付くように言い返すと、青年は呆れたような顔をしながら腕時計を見る。

「おまえ、その様でよく喋るな...ま、そうやって無駄口叩くのももう最後だし、別に構わねえけどよ」

「...何がしたいん？うちを殺す気なん？」

青年のよく分からない発言に、ルビーが顔をしかめながら尋ねた。

「ばーか、殺さねえよ。殺すんだったらわざわざ転送なんかしねえであの場で殺っちまえばいいんだからさ...少しは考えろよ」

青年はまた嘲笑したが、意識の半分以上は腕時計に集中している。まるで何かを待っているかのように、ちらちらと時計を見ている。

「今何時？」

青年があまりにも時計ばかり気にしているので、試しにルビーが聞いてみた。ディックを待っているルビーとしても、やはり時間は気になるのだ。しかし青年は

「教えねえよ、ばーか」

と言ってケタケタ笑うばかりである。

「あんたもいちいちムカつく奴だなあ...時間ぐらい教えてくれたっていいじゃん。何待ってんだよ？誰か来るの？ってかここどこ？」

ルビーはめげることなく質問攻めにした。もし青玉島から遠いのだとしたら、ディックが来てくれるまでもう少し時間稼ぎしておかないとまずい。

「ぎゃあぎゃあうるせえなあ...このバカ女」

青年が、そう言いながら爪先で太ももあたりを軽く蹴ってきた。

「あんた...黙って聞いてればバカバカバカバカ.....バカって言う方がバカなんだよ」 ※160

捕われの身にも関わらず、ルビーは臆すことなくしゃあしゃあと言い返す。

「いい加減にしろ」

蹴っても黙らないルビーに苛立ったのか、青年はそう言うのと銀色のナイフを取り出してルビーの顔の前に突きつけた。キラキラと脅すように光っている。

「何イライラしてんだよ」

ルビーはナイフの切っ先を見つめて顔を顰めながらも、いつも通りの声で尋ねた。

「...おまえには関係ねえよ」

青年はナイフを突き付けたまま、ぼそぼそした低い声で答える。

「関係あるよ。うちが八つ当たりされてんだからさ」

ルビーがそう言っても、青年はちらっとこちらを一瞥するだけで何も答えなかった。また腕時計を見ると、1度ナイフをしまい、今度はパソコンを広げ始める。

「ほら、さっきから何イライラしてんだよ?ってか、何する気なんだよ?」

ルビーは再度尋ねた。しかし、それでも青年は無視だ。

「ちょっ...シカト?酷くね?ってかさ...」

「黙れっ!!」

しつこく聞き続けるルビーに、青年がとうとう怒鳴った。

「こっちは集中してんだよ、邪魔すんな」

「バカじゃん?んなこと言ったらうちが黙るわけないじゃん」

ルビーはそう嘲りながらも、青年がかなり焦っていることに気づいていた。時間がないのか、何かトラブルがあったのか.....いや、そうではないだろう。今までずっと時間を気にしていたのだから、作業開始時間が予定より遅れたなどということはないだろうし、パソコンを開けたりする前からイライラしていたのだから、今トラブルに気づいたなどというわけでもなさそうだ。

...ってことは、何かプレッシャーでもかけられてんのかなあ...

「あんた、ほんとに何そんな焦ってるの?何か、失敗するとあんたも道連れになっちゃうとか、そういう話なわけ?それとも逆に、成功すればめっちゃめっちゃ偉い職に就けるとか?」

青年は作業を中断すると、つかつかとこちらへ歩み寄って来た。それでもルビーは喋るのをやめない。

「一生遊び暮らせるぐらいのお金がもらえるとか?それとも...っ!!」

青年が再度ナイフを取り出すと、ようやくルビーの言葉が止まった。しかし、それでも青年の動きは止まらず、鈍い音とともにルビーが寄りかかっている壁にナイフが突き刺さる。ルビーの頭から、わずか数cmのところだ。

「...ああ、そうだよ」

ナイフを抜くこともしないで、青年が小さく言った。

「一生遊び暮らせるぐらいの金が手に入る...そしたらさ、借金も返せるし、余った金で妹の結婚式も挙げられるんだ...」

青年の声は掠れているところか、ほとんど息ばかりで声になっていない。ルビーに話しているというよりはむしろ、自分に言い聞かせているようだ。ルビーは一瞬可哀相だと思った。しかし、だからと言って同情してしまうわけにもいかない。

「バカじゃん？そんな金で結婚式挙げたって、妹さんも相手の人も絶対喜ばないよ。横着しないで...こんなところにはいないでさ、ちゃんとしたところに就職して、真面目に働かなくっちゃどうにも...」

「黙れっ!!」

青年は突然そう怒鳴ると、

「どうせ毎日美味しいもん食って、暖かいベッドで寝てるんだろ？金に何か困ったことねえんだろ？」

と言いつつ壁からナイフを引き抜いた。

ヤバい、刺される...!!

そう思っても、ルビーの封印鎖はかなりきつく縛ってあるため、一切身動き出来ない。

振り上げられた右手が、勢いよく振り下ろされ始めた。ルビーを見下ろす青年の眼は、狂ったようにキラキラと光っている。

...もうどうにもならない。

ルビーは覚悟を決めると、固く目を閉じた。そして、銀色のナイフに切り裂かれるのを待つ――

――ところが、いつまで経ってもナイフは振り下ろされてこなかった。ルビーがどうしたのだろうと思いながら恐る恐る目を開けてみると、鮮やかな赤毛のポニーテールが視界に入ってくる。そこから少し左上に視線をずらすと、ルビーを切り裂くはずだったナイフが大きな手に受け止められ、その左手から、髪よりももっと鮮やかな赤色をした血が、ダラダラと流れて滴り落ちている。

ディックは軽く息を弾ませていた。本当に急いで飛んで来たのだろう。だが彼はそのまま左手でナイフを奪うと、突然のことに呆然としている青年に思いっきりアッパーカットを食らわせた。もろに喰らった青年が倒れた隙に、ディックは切鎖短剣でルビーの封印鎖を叩き切る。

「な？ちゃんと助けに来ただろ？」

ディックはニッと笑って見せながらMクロスボウを取り出した。 ※161 その笑顔は、左手の激痛など微塵も感じさせない。

倒れた青年が、歯を食いしばりながら立ち上がる姿が目に入る。サイレンがけたたましく鳴りはじめる。牢の外から、何人もの足音が聞こえてくる。

「...確かに」

そう呟きながら、ルビーもMクロスボウを取り出した。

※159...ちなみに、紅玉高原と青玉島が依存し合っているのは昔からの常識であって、国家機密でも何でもない。

※160...どうでもいいが、ルビーはいったいいつ黙っていたのだろうか。さっきからずっと喋っている気がするのだが...

※161..."Mクロスボウ"とは、青玉島における魔法銃と同じような、紅玉高原の一般的な武器のことだ。

一方、サファイアもまた、封印鎖で縛られた状態で地下牢にいた。小さな窓から入ってくる光と、ゆらゆら揺らめく暗いランプ以外に光源はない。

...ここ、どこだろう...？

そう思っていると、背後からドアの軋むような音が聞こえた。サファイアはその音に振り返ると、目を見開いて固まってしまう。

「やあ、サファイアちゃん...久しぶりだね」

赤銅色の短い髪、プラスチックフレームの赤い眼鏡、青銅色の眼に宿る、どんよりと濁った光

...

「...アル博士...」

アルバートは愕然としているサファイアの正面にしゃがんで目線の高さを合わせた。

「前に会ってから2年か...“大きくなったね”って言おうと思ってたんだけど、ちっとも変わってないね...」

そう言いながら、アルバートはサファイアの全身をゆっくりと見つめる。

「...座ってるからですよ。立てばちゃんと背伸びてますもん.....2cmくらい」

サファイアがどうにかそう反論してみても、アルバートは

「うん、変わってないね」

と一蹴する。

「どうだい？小さい頃からよく関わっていた同僚と、こんな形で再会する気分は...」

サファイアは冷たい眼をしたまま口角を上げるアルバートを軽く睨んではみたものの、すぐにふいとそっぽを向いてしまった。

「...今度は何の実験ですか？」

サファイアが尋ねると、アルバートはくつつつ笑いながら

「今回もお楽しみかな」

と答える。

アルバートは昔から、実験台となるサファイアに何の実験か教えないことが多かった。そして“お楽しみ”と言った時は、いくら粘っても教えてくれることはない。長い付き合いからそのことをよく知っているサファイアは、仕方なく質問を変えた。

「...まさか、博士が科学部誘拐事件の手引をしたとかじゃないですよね？」

そう聞かれると、アルバートは肩を竦めて

「ああ、僕はあくまでも被害者だよ。連れ去られて、無理矢理研究させられているんだ」

と苦笑する。

「その割には楽しそうですね」

サファイアが指摘すると、彼はふふっと笑って

「楽しまなきゃ研究なんて出来やしない...それは、君だってよく知っているだろう？」

と言い、ちらっと時計を見た。

「...ちょっと早いけどいいかな...」

そう呟くアルバートに、サファイアは

「え、ちょっ...何がですか？」

と慌てて質問した。ジャックが来るまで時間稼ぎしたいのだ。

「実験だよ、実験...本当はもう少し待ってから始めないといけないって言われてるんだけど...別に今始めたって、実験としては支障ないからね」

アルバートはそう言いながら、何やら準備を始める。こうなったらもう、彼が作業をやめることはないということも、サファイアはよく知っていた。

アルバートは自分のパソコンを開き、何か操作をした。すると、床にすらすらと文字が現れる。

「筆記呪文魔法ですか...」

サファイアが驚いて呟いた。これを使える民族は、実界に住む小さな民族、イディ族ただ1つだけなのだ。存在は有名だが、あまり研究は進んでいない。

「苦労したよ。書くことは出来ても、僕には使えないからね...仕方なくイディ族の子の魔力を使ったんだけど.....この魔法、かなり魔力を食うんだ。一気に魔力使いすぎて死んじゃった子もいたくらいだ.....その点君はタフだからね、実験台には最適だったんだけど...」

話している間に、アルバートの支度は整ったようだった。

「じゃあ、始めようか」

床に描かれた文字が黒ずんだ金色に光り、ゆらりゆらりと揺らめき始めた。ランプの揺れ方とぴったり一致している。やがて、揺らめく文字が、焚火から舞い上がる火の粉のように浮遊し始めた。風に流されるように舞いながら、くるりくるりとサファイアの周りを回り出す。気付くと、何千何万という文字がサファイアを周回していた。その速度は徐々に速まっていく。

...何する気なんだろう...？

どうする術もないのに、サファイアは神経を研ぎ澄ませて警戒していた。封印鎖で縛られているから警戒したところで何も出来ないのだが、それでもそうせずにはいられない。

文字はもはや形が分からないほどに速く回っていた。遠くから、歌が聞こえる。何十人、何百人、何千人という老若男女が合唱しているかのように、遠くから身体の芯を揺さぶってくる。筆記呪文魔法を強めるための音声呪文が歌であるということも有名な話で、この歌を聞いてはならないということはよく分かっているにもかかわらず、その歌に聞き入ってしまう。サファイアはかなり魔法に侵されていた。

金属音を響かせ、鎖が床に落ちる。代わりに、周回する文字の一部がサファイアに近づいてきて、優しく包み込む。遠くから、より強く響いてくる、異国の歌。

夢を見ているようだった。まるでうたた寝をしているかのような、現実味のない、ふわふわとした心地よさ...身体には力などまったく入っていないのに、それでも崩れることなく立っている。

蜜の中を漂うような感覚に、どれほど浸されていたか分からない。そんな中、どこかで爆発音が聞こえたような気がした。誰かの声が聞こえた気もする。それでも、とろみのある蜜のような

感覚は、サファイアの覚醒を許さない。

ところが、サファイアの頭の中でよく知った声が名前を呼んできた。その途端に、遠くから聞こえていた歌はノイズのようにバラけてしまう。

たった一声だけで、周囲の世界が豹変してしまった。鮮やかな青色が眩しい。限りなく澄み渡った、透明な世界。

なんて綺麗なんだろう...

いつも、吸い込まれそうだと思いながら見ていた。しかし、今はその内部にいる。内側から見ても、やはりどこまでも透き通っていることに変わりはない。

よく知っている声が、サファイアに命令を下した。サファイアの身体に“逆らう”という選択肢はない。何も考えず、命じられるがままに動く。

サファイアの右手にロッドが現れた。何もかもを振り払うように、ロッドが大きく振られる。その軌跡から激しい水流が迸り、周回する文字を一瞬で押し流した。

ようやくサファイアのいる地下牢にたどり着いたジャックがまず目にしたのは、黒ずんだ金色の竜巻だった。それから、その竜巻の向こう側に人が立っていることに気付く。

赤銅色の短い髪。プラスチックフレームの赤い眼鏡。青銅色の眼に宿る、どんよりと濁った光

...

ジャックは躊躇うことなくロッドを振った。風だけの爆撃だが、パソコンと竜巻を見比べていた人を、一発で壁に叩き付ける。

「お久しぶりですね、ウィルソンさん」

ジャックは倒れたアルバートの喉にロッドを突き付けながら、静かな声で挨拶した。

「...早...かったね、キュアラールさん...」

アルバートはそう言いながら、竜巻に目を向けるジャックの間をついて起き上がろうとした。しかし、風船が弾ける音を小さくしたような軽い爆発音がして、動きを止める。

「術者はどなたです？」

ジャックが冷たい声で聞いた。氷柱のような視線と、吹雪のような視線がぶつかり合う。

「教えると思うかい？」

やがて、アルバートがせせら笑うように言った。しかし、ジャックは冷淡かつ端然とした様子を崩すことなく、

「これをご覧にいれてもそうおっしゃいます？」

と言いながらポケットに左手を入れ、小さな霧吹きのようなものを取り出して見せる。

「あなたならご存知でしょう？」

ジャックはアルバートを冷やかに一瞥しながら言った。容器の中では、赤黒い液体が揺れている。

「“悪魔の血”か...」

“悪魔の血”というのは俗称で、学名はEHF-oilという。他に類する薬品がないため、番号は付いていない。これを何かに付着させて着火すると、その部分だけがめらめらと燃え上がる。水をかけても、酸素を遮断しても、決して消えることはない。燃え広がりもしない。恐ろしい薬品だが、上手く使えば素晴らしい松明になる。しかし、あまりにも調合が難しいため、もはや伝説の薬品となっていた。

「...開発者のだから、きちんとできているんだろうな...」

アルバートはそれを見つめながら、低い声で呟いた。“悪魔の血”の開発者は、他ならぬジャックなのだ。



「試してみます？」

見るものを凍てつかせるようなジャックの眼は真剣そのものだった。今の彼なら、本当に試しかねない。本当に吹き掛け、吸血鬼の炎を点しかねない...

「...術者は僕だよ。魔力供給はイディ族の子供たちだ.....だが、僕とその子たちを殺しても魔法は止まらない。内部から打ち破るしか.....しかし、それも無理な話だ。もうサファイアちゃんの人格はかなり沈んでいるはず.....まだ消えてはいないが、取り戻すのは困難だよ。あとはもう、完全に沈み次第消滅するのを待つのみ、だ...」

そう話すアルバートの身体を、黒い茨がきつく縛り上げた。吸血鬼の茨の棘には毒があり、じわじわと身体に力が入らないようにしてしまう。

ジャックはアルバートの動きを封じてから、ゆっくりと竜巻に近づきつつサファイアの名前を呼んだ。煌めくような何かがジャックの手の中に集まってくる――いや、本当に集まっているわけではない。そう感じるだけだ。

光は集まるにつれて正体を現し始めた。満月の光を浴びて煌めく、夜空のような海面の光。綺麗で、儂くて、何を犠牲にしても守らなければと思わせるのに、いつも最後にはむしろ、こちらが救われてしまう――そんな光だ。

ジャックは、その光に命令を下した。その瞬間、竜巻の中から激しい水流が迸り、黒ずんだ金色の文字を一瞬で押し流してしまう。

少女の小さな姿が現れた。何の光も宿していない濃紺の眼に光を返そうと、ジャックが手の中の光を放すと、その身体は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる。ジャックは反射的にそれを抱きとめ

「サファイア？」

と呼びかけた。それでも反応がないので、もう1度

「サファイア」

と呼ぶ。

「...ん.....」

サファイアの身体に力が帰ってきた。先程の水は消えていたが、少々暴れ過ぎたためかサイレンがけたたましく鳴り響いている。

「...ありがとう、ジャック...」

ジャックはそう言うサファイアを放してやりつつ、

「動けます？」

と尋ねた。

「うん、どうにか...」

そう言いながら魔法銃を取り出すサファイアの様子を見てから、ジャックは

「...来ますよ」

と言って自分が入って来た扉を視線で示す。

その直後、扉から20人近い人が武器を手になだれ込んできた。

青玉島王宮女王の間には、ピュア、ペーター、ルチアーノの他にパールも来ていた。彼女のパソコンには、王宮地下にある1万室もの独房のうち、200室の様子が一覧表示されている。

「独房に人が転送されて来ました」

パールはパソコンを見つめながらそう言うと、そのままさっと立ち上がった。これから捕虜たちの手当に当たる医者と、患者になる捕虜たちを監視しに行くのだ。

「てことは、少なくともどっちかはうまく行ってるんだな?！」

ルチアーノはぱあっと明るい顔で叫んだが、ピュアは大モニターを真剣な眼差しで見つめながら

「まだ分かんないでしょ」

という一言でそれを潰してしまう。

「...んもう...何でそんなこと言うんだよ?もうちょっと希望持たなきゃ...」

そう言うルチアーノの言葉を、電話の無機質な呼び出し音が遮った。

「はい?」

ピュアが応じると、

『あ、うちうち、ルビーなんだけど』

という声が聞こえる。彼女がテレビ電話ではなく普通の電話を掛けてきたため、声しか分からないのだが、それでも元気な彼女の声は女王の間を大いに安心させ、喜ばせた。

『おまえ無事なの?よかったあ...めっちゃめっちゃ心配してたんだぞ、もう...ディックは?』

ルチアーノの表情はまさに言葉通りだった。声にも表れているから、顔が見えなくても分かるだろう。それに対し、ルビーは

『ディック?ちょっと待って...』

と言った後、“なあなあディック”と呼びかけた。電話のマイクを遠ざけて入るようだが、その後“ルッチーが心配してるから、ちょっと声聞かしてあげな”と言っているのははっきりと聞こえる。

『あ、もしもし?ディック・ソルジャーです』

ディックの声に代わった。

「おお、2人とも無事だったんだ...さっきルビーにも言ったけど、ほんっとにめっちゃめっちゃ心配してたんだよ、もう...」

ルチアーノが言うと、ディックは笑いながら

『すいません』

と謝る。

「いやいやいや...ほんとに元気そうでよかった、うん...じゃあ、仕事が終わる次第、早く元気に帰って来な」

『了解です』

その言葉を最後に、電話が切れた。

「...いやあ...ほんとによかった...」 ※162

心底嬉しそうな顔で呟くルチアーノに、ピュアは

「よかったわね」

と声をかける。ルビーとディックが無事だったことには安心するものの、だったら自分の部下はどうなっているのかと一層不安になる...そんな複雑な気持ちが、声にはっきりと表れていた。

「あとはサファイアちゃんとジャックさんだよなあ」

ルチアーノの言葉は、その場にいる誰もが思っていることだった。しかし、青玉組からはなかなか連絡が来ない。

結局、青玉組の安否が分かるより、紅玉組が帰ってくる方が先だった。インターホンが鳴ると、ペーターはモニターを確認するや否やそのままドアを開け、

「お疲れ様」

と暖かく迎える。ところが2人は

「ありがとうございます」

とだけ答えると、すぐに

「あっちの2人は？」

と尋ねてきた。やはり青玉組のことが気になるらしい。

「まだ連絡がな...」

答えようとしたピュアは、この時に初めて2人の方を見た。そして、思わずそのまま固まってしまう。

「ちょ...あんたたち、ケガ...」

2人の怪我は予想外に酷かった。切り傷や火傷は2人ともたくさんあるし、ルビーは左下腕の骨折が、ディックは右上腕の挟むような傷がもっとも酷いように見える。

「...ごめんなさい...今科学部がないでしょ？だから民間の医者に電話したんだけど...地下牢を診てくれる人はいたんだけど、こっちは上がってきてくれる人がいないのよ...」

ピュアが目を逸らしながら謝った。それに対し、ルビーが

「いや、別に平気だけど...また何で？地下牢って、要は敵ばっかなわけじゃん」と首を傾げるが、誰も何とも答えない。

そんな気まずい沈黙の中、再び電話が鳴った。

「もしもし？」

ピュアが応じると、



『サファイア・クリアシャインです』

という明るい声が聞こえる。

「姉ちゃん!!無事だったんだ!!」

ルビーが歓喜の声をあげた。

『ルビー?よかったあ...帰ってたんだね。ディックは?』

そう聞くサファイアの声も、ほっとしているようだ。

「ああ、元気元気」

ディックが陽気な声で答えた。すると、サファイアはディックが次の言葉を言う前に

『今ジャックに代わりますね』

と言ってから、“じゃっくんじゃっくん、ディックが心配して声聞きたがってるよ”などと勝手なことを言い出す。確かにディックは今“ジャックは?”と聞こうとしていたが、まだ、そんなことは一言も言っていない。

「あ、ちょっと、何勝手なこと――...」

『もしもし、お電話代わりました、ジャック・キュアラーです』

ジャックの声に代わった。いつも通り淡々としているが、それでもディックが

「よかった、おまえ...」

と安心したように呟くと、ジャックも

『無事だったのか』

と微かに安堵の色を見せる。

「...じゃあさっさと帰ってきなさい。いいわね?」

ピュアはことさらに強い口調で言った。本当は彼女も青玉組の無事にほっとしているのだが、性格が性格だから、つい隠してしまうのだ。

『かしこまりました』

ジャックはそう言うと、電話を切ろうとした。ところがピュアは言わなければならないことを思い出し、

「あ、ちょっと待って」

と慌てて言う。

「申し訳ないけど、今医者がないのよ...地下牢だけなら診てくれるって人がいたんだけど。悪いけど、帰ってきたら4人分お願いしなきゃだわ」

ピュアがそう告げると、ジャックは一瞬間をおいてから

『...承知いたしました。お任せください』

と答えた。ジャックはある程度なら自分が負傷していても自他共に処置することが出来る。デイビッドから、そういう訓練を受けているのだ。今、答える前に少し間があったのはルビーと同様、その奇妙な現状に対する間である。ただ、それでも理由を問わないのは、ある程度答えの見当がついているからなのだろう。

「じゃあそういうわけだから、ちゃっちゃと帰ってきなさい。いいわね?」

ピュアがもう1度言うと、ジャックは

『かしこまりました。あと40分程で戻ると思います』

と答えた。

ジャックが帰ってくるまで40分間も放置するわけにもいかないので、ペーターとパールが応急処置だけ行った。 ※163

「何か、今すぐ報告しないと夢幻界がひっくり返るような話ある？今1分1秒を争うようなこと...」

ピュアが尋ねると、ディックとルビーは互いに顔を見合わせる。報告しないといけない爆弾情報はあるのだが、1分1秒を争うかと言われると...

「いや、それはないです。爆弾情報はありますけどね」

ディックが答えると、ピュアは

「そう。だったら2人が帰ってきてからでいいわよ」

と言った。

サファイアたちはほぼジャックの言葉通りに帰ってきた。怪我の様子は紅玉組と似たり寄ったりだ。ジャックは帰ってくるや否や、すぐに怪我の診察・治療を始める。

「悪いわね、キュアラー...科学部はいないし、あんたたちの手当してくれるって医者が見つからなくて...」

ピュアが言うと、サファイアは俯いて

「誠に申し訳ありません...」

と謝った。自分への愛情には鈍くても、こういうことは非常によく気付くらしい。要は、新月の呪いを持つサファイアに近付くことを、医者たちが皆嫌がっているのだ。

「...さあ、まず青玉組から...あんたたちに何をしようとしたの？」

ピュアが青玉組を見つめながら尋ねた。

「やっぱり、人格を消してしまおうって魂胆だったみたいです...」

そう答えたのはサファイアだ。

「あ、そう...そんなことできるの...」

ピュアは深刻そうに顔を顰める。相手の科学技術の高さを懸念しているのだ。

「他に何か分かったことある？」

ピュアがさらに促すと、今度はジャックが

「アルバート・ウィルソン氏を捕まえました」

と報告した。

「は？“アルバート・ウィルソン”って...青玉島王宮科学部総合班の、アルバート・ウィルソン？」

ピュアが思わず聞き返す。

「“保護した”ではなく？“捕まえた”の？」

「ええ」

信じられない様子のピュアに、ジャックは低い声ではっきりと頷いた。

「人格を消す魔法を開発し、サファイアに対して実際にそれを行おうとしたのは彼です。今は地下牢にいるはずですが」

ジャックが説明すると、ピュアは

「...そう...」

と呆然とした様子で呟き、

「...ああ、そう...他の科学部の面々は？」

と尋ねる。それに対してジャックが黙って首を振ると、ピュアは

「分かったわ...彼のことは司法に任せましょう。あんたたちは？」

と言って紅玉組に目を向けた。すると、ディックはただ片方の口角だけ上げ、何とも言えない複雑な表情で

「爆弾情報ですけど...ジェーンいました」

と報告した。

「見かけただけです。遠くから見ていて...一瞬目が合ったと思ったら、竜巻でどっか行っちゃいました」

しばらく部屋を沈黙が満たした。10秒くらい経ってから、ようやくピュアが

「...なるほど」

と呟く。

「じゃあ...今回の作戦は成功だったと見ていいかしら？アルバート・ウィルソンを捕まえ、敵のボスと思しき人物を確認し...まあ、奴らが何で姉妹を欲しがったのかはいまいち掴みかねるけど...」

ピュアはそうコメントした後、

「それにしてもすごいわね、キュアラ。あんたの予言的中じゃない。お姉さんのことも、レポートのことも、奴らのやろうとしたことも...」

と笑いながら言った。しかし、

「そうですね...結果的には」

と答えるジャックの表情は固い。それを見てとったペーターが

「大丈夫だよ、他意はないから」

と微笑む。

「...あのさあ、みんな今日はもう休んだ方がいいんじゃない？」

ルチアーノが唐突にそう言った。声はいつも通りだが、ピュアに何か目配せしている。

「そうね。疲れてるでしょうし」

その目配せを受けながら、ピュアも同意した。

※162...どうでもいいけど、さっきからこればかり言っている気がする。

※163...サファイアに応急処置の訓練を含む戦闘訓練を施したパールはもちろんのこと、ペーターも元側近なので、そのような教育を受けている。

「ねえじゃっくん」

自室に戻るや否やサファイアが話しかけた。

「本当にありがとね、助けてくれて...」

「いえ」

ジャックは短く答える。

“助けてくれて”と言われても、お互いそういう一クリアシャイン姉妹が囿になり、それを僕たちが救出するという一役割だったのだから、何も彼女が改まってお礼を言うことではないと思うのだが...

「あの...どうやって助けてくれたの？」

サファイアの質問に、ジャックは一瞬言葉に詰まった。それを聞かれるとは思っていなかったし、聞かれると非常に答えにくいのだ。

「...どうしてです？」

ジャックが聞き返すと、サファイアは俯いて小さく笑う。

「あのね...私、1500年前から所有呪文が掛かってるらしいんだ。それで、ずっと...私の所有者って誰なんだろう？って気になってたの」

...知ってたのか...

ジャックの思いを他所に、サファイアは微笑みながら話を続ける。

「さっき助けてくれたとき、頭の中でジャックの声がしたんだ。そしたらね、なんか...それまで、蜜の中を漂っているみたいだったのが、急にぱっと晴れて.....それで、ジャックの声で命令が聞こえたの。逆らえなかった。従う従わないって考えることすらしなくって...身体が勝手にその通りに動いてた」

サファイアはここまで言うと顔を上げて、ジャックの眼をまっすぐ見つめながら

「私の所有者って、ジャック？」

と尋ねた。ジャックもサファイアの眼を見つめている。

どう答えよう？

Yesとは言いにくかった。しかし、ここまでくるともう誤魔化すわけにもいかない。

「...ええ、そうです」

ジャックは眼を逸らしてから、やむを得ずそう認めた。すると、また沈黙が流れる。ジャックにとっては苦しい沈黙だが、それを自分から破ることも出来ない。

ところがそれを破ったのは、サファイアの

「...よかった」

という意外な言葉だった。

...?!

ジャックが見ると、サファイアは心から安心したように笑っている。

「...よかったあ...ちょっと怖かったんだ、どんな人かなって...」

そんなサファイアに対し、ジャックはどう答えたらいいのか分からず黙っていた。

「安心した」

サファイアは明るく笑ってそう言った後、ゆっくりと真顔に戻って

「それで...お願いがあるんだけど...」

と言い出す。

「何でしょうか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは

「そのこと...誰にも言わないでほしいんだ.....特に、ピュア様には絶対知られないように」と懇願してきた。まるで、ジャックがその頼みを聞いてくれるかどうかに関わらず自分の命運がかかっているともいうかのような言い方だ。

「...お願い...」

さらに念押ししてくるサファイアに、ジャックは静かだがはっきりとした声で

「承知致しました」

と答えた。

ピュアとルチアーノはサファイアたちに1日の休暇を与えたが、どうもそれは4人の休養のためだけではなさそうだった。今回の作戦における最大の目的はテロ組織の目的を探ることだったはずだが、それがいまいちはっきりしない。にもかかわらず、ピュアたちは“いくつかの仮説は立っている”と言い張るのである。4人に分かっていることは、やはりジェーンがボスないしはそれに近い立場にいるらしいということと、クリアシャイン姉妹の人格を消そうとしたことから、何かの道具にしようとしているのかもしれないということの2つだけだ。

その日の夜、サファイアはソファに座って電子書籍を読んでいた。いつものような研究書ではなく、『青玉学園の日常』という子供向けほのぼのギャグ小説だ。一方、ジャックは普段通り論文を読んでいる。

時間はゆっくりと流れていた。時折、マウスをクリックする小さな音だけが聞こえる。

それほど静かな部屋の空気を、突然響いた硬い音が突き破った。ジャックが振り向くと、いつの間にかサファイアはソファで眠ってしまっている。先程の音はおそらく、コードレスマウスが床に落ちた音だろう。ジャックは立ち上がると、床に転がったマウスを拾い、まだサファイアが持っているパソコンもそっと取り上げ、両方とも近くのテーブルの上に置いた。それから、すやすやと眠っているサファイアを少し呆れたような眼で見下ろす。

見下ろしながら、ジャックは少し懐かしい感覚を覚えていた。現代のサファイアは居眠りなど滅多にしないが、1500年前はそんなことばかりだったのだ。

ジャックはどうしようかと少し迷った。こんなところで寝ていても疲れてしまうだろうからベッドに運んでやりたいのだが、彼女の場合そんなことをすると起きてしまいかねない。

だが結局、ジャックはサファイアの身体をそっと抱き上げた。杞憂だったらしくサファイアは目を覚ます気配もない。一方ジャックは、抱き上げた拍子にふと、金の竜巻の中からサファイアが姿を現した時のことを思い出した。

棒のようにか細いサファイアの身体が崩れ落ちる様は、まるで糸の切れた操り人形のような

った。辛うじて抱きとめても、このまま目を覚まさないのではないかと心配になったのを覚えている。ところがその身体に意識が戻ってくると、その存在感が一気に蘇り、思わずこちらが安心してしまうほど、確固たるものになった。“サファイアは、崩れてしまったり、消えてしまったりすることのない確かな存在として、今、この場所に生きている”——そんな当たり前のことを、ジャックはこの時、とても強く実感した。

もう...もう、大丈夫...

ジャックはサファイアをベッドの上に寝かせると、風邪をひかないようにとタオルケットを掛けてやった。眠っているサファイアは、いつもより一層幼く見える。

ジャックはその顔にかかった髪を除けてやりながら、

「お休みなさい」

と声を掛けた。

翌日、例の化学兵器の蓋が開いていることが確認された。無論、今回の作戦に憤慨した相手が化学兵器を作動させたのだ。しかし、サファイアとジャックの尽力により、青玉島は何事もなく平然としている。

とある地下施設の1室に、3人の男女が集まっていた。

「...完全にやられたわね」

銀髪の女が部屋の中をうろうろ歩き回りながら憎々しげに言う。静かと言えば静かなのだが、どこか狂気じみたものも感じさせる声だ。

「...まあしかし、こちらもなかなか大きな情報を得た」

そう言うのはブルーブラックの髪の男だ。椅子に横に座って脚を組み、テーブルに肘をついて紅茶を飲んでいる。

「本当にディック・ソルジャーだったの？」

銀髪の女が足を止め、濃紺の髪の女をギンと見据えながら確認した。

「しつこいわね...そうよ。間違いないわ」

イライラした様子で答えるこの女に至っては、椅子の肘置きに腰掛けている。

「ジャックの友達、ディック・ソルジャーよ...ま、友達っていうよりはむしろ、双子みたいだったけどね」

濃紺の髪の女がそう付け足すと、男は

「当たり前だ」

とせせら笑いながらティーカップをソーサーの上に置いた。静かに置いても、陶器の触れ合う音が響く。

「となると...科学者たちの言っていた“ジャック・キュアラ”があの子である可能性も否定できなくなるね」

男の言葉に対し、濃紺の髪の女が

「むしろ、十中八九そうでしょ」

と言うと、男はテーブルに頬杖をついて何か考え始める。

「...まさか、あいつを引き込もうって言うの？」

それを見た濃紺の髪の女が、冗談でしょうという口調で尋ねた。

「...そんなに無理なことかい？」

男は女を見上げながら、ゆっくりとした口調で聞き返す。

「無理よ」

女はバカバカしいと言わんばかりに笑った。

「無理無理...あり得ないわ。あの子がこっちなんかに来るはずないじゃない」

女がそう言うと、しばらくの間沈黙が流れる。

「...まあ」

その沈黙を破ったのは、作り出した張本人である濃紺の髪の女だった。左手で右肘を抱えて右手の指を口元にやり、男を見つめながらゆっくりと言う。

「...あなたが行けば、少しは望みがあるかもしれないけどね...」

2009年6月26日

「...あんだ...何やってんの？」

ピュアがサファイアに生暖かい眼を向けながら尋ねた。

「青玉魔術の練習です」

当たり前のように答えるサファイアは、水でイルカのようなものを作って女王の間の中で泳がせている。魔法でコントロールしているからどこも濡らしはしないが、奇妙な光景であることは否定できない。

「...また何で急に...？」

ルチアーノが笑いながら聞いた。

「いえ、今まであんまり使ったことなかったなあって...」

青玉人の生まれ持つ魔力は本来、水を操る魔法である。それ以外のことは何も出来ない。そこで発達したのが魔法学という学問だ。このおかげで自分たちの魔力を様々なことに使えるようになったため、青玉人は皆MWを組み込んだ道具ばかり使い、自分たちが生れつき使える魔法はほとんど使わない、という状態になっているのだ。

「...それにしても自由自在だね」

ペーターが感心したように言った。

「普通、そんなに細かいことまではできないもんだよ」

「あ...そうですか？」

サファイアは人に誉められ、少しはにかんだように笑う。

「あれ...そういや紅玉人って、本来どんな魔法使うんでしたっけ？」

ディックがニッと楽しそうに笑って皆に尋ねた。紅玉人の生れつきの魔法は花を操る魔法なのだが、役に立たないことこの上ないため、紅玉人は青玉人以上に自分の魔法を使わない。使わずに一生を終える人もザラにいるくらいだ。

「私、見てみたいなあ...」

サファイアはそう言いながら、ルビーの方をじいっと見つめる。

「えー？いくら姉ちゃんの頼みでもダメだよ...あれ、めっちゃめっちゃ恥ずかしいもん...」

そう言って目を逸らせても、ルビーには“可愛い姉ちゃん”の視線から逃げることなど到底出来ない。

「...あー...じゃあ今度見せてあげる...」

仕方なく、ルビーはそう答えてその場凌ぎをした。

「じゃあお昼ご飯取ってきますね」

お昼時になると、サファイアがそう言って立ちあがった。その後すぐに、ルビーもぱっと立ちあがる。5人分の昼食を食堂まで取りに行くのはクリアシャイン姉妹の仕事なのだ。

「行ってらっしゃい」

そう見送られ、皆の分を選び、ワゴンに載せ、戻って来る。 ※164

「よかったなあ姉ちゃん、ミックスナッツタルトがあって」

2人でワゴンを押して廊下を歩きながら、ルビーが話しかけた。サファイアと廊下に出ると、ルビーの話す量はいつもに輪をかけて多くなるのだ。

「うん♪これ大好きなんだ」

そう答えるサファイアは、幸せを擬人化したような笑顔を浮かべている。

「うん、もうそれ、3万回くらい聞いた。で、2番目がさつまいもタルトなんだろう？」

ルビーが言うと、サファイアはこくっと頷く。

「んもう、姉ちゃんはほんつとに可愛いなあ」

そんな姉の頭を、ルビーがぽふぽふした。ちょうど女王の間の入り口前である。

「そんなことないって」

サファイアは素でそう言いながらインターホンを押した。

『はいはいどうぞ』

ピュアの億劫そうな返事を受けて、サファイアがドアを開ける。

「ただいま戻りました」

「おかえ...」

サファイアたちが入った瞬間、女王の間の空気が固まった。そのまま3秒間、誰もぴくりとも動かない。

「...どうしたんですか？」

サファイアのその言葉がきっかけとなって、皆が一斉に爆笑しだした。ペーターでさえ笑っている。ディックは静かだが、それは笑いすぎて声を出せないからに過ぎない。ジャック以外で笑っていないのは、サファイアただ1人である。

「...え?...え?」

訳が分からないという顔をするサファイアを無視して、ルチアーノがルビーに

「...そ...それ...いつから？」

と尋ねた。

「...さあ...いつからだろ...」

ルビーはふいとそっぽを向いてとぼける。

「え?何がですか？」

皆が何故か自分を見て笑うものだから、サファイアはすっかり戸惑ったようにきょろきょろしていた。

「何がですか？」

たまたま目が合ったピュアに聞いてみても、ピュアは

「ちょ...ゴホッゴホッ.....わ...私に聞かないでちょうだい!!」

とむせながら言って目を逸らせてしまう。

「...じゃっくん...」

誰も教えてくれないので、サファイアはジャックのところへ駆け寄って尋ねた。

「.....」

ジャックもどう答えればいいのか分からず、皆を笑わせている元凶を軽く突く。しかし、サフ

アイアにはジャックが何をしているのかまったく分からない。

「???'」

どうしようもないので、ジャックはサファイアを鏡の前に連れていった。

「.....」

「.....」

鏡に映る自分の姿。何の変哲もない、いつも通りの自分である――頭の上から生えた青いコスモスの花が、ゆらんゆらんと揺れていることを除けば、だが。

「...ちょ.....ルビーいいい?！」

サファイアは笑顔で振り返ると、ゆらありゆらありと妹に迫った。

「ね...姉ちゃんがさっき、紅玉魔術見たいって言ったんじゃない!!」

ルビーはそう言いながら、じりじりと後ずさっていく。

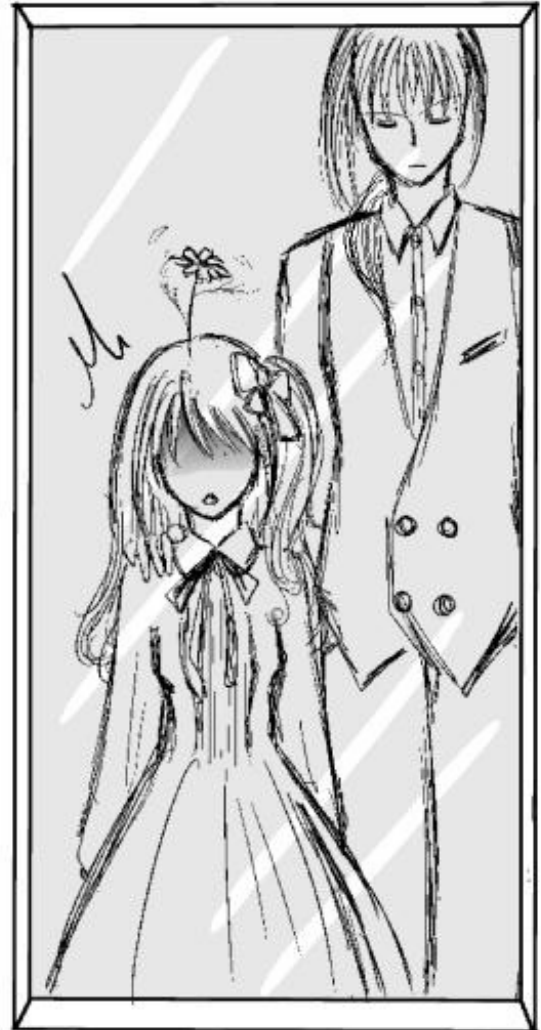
「ルビーのばかあああっ!!」

「ごめんっ!!ごめんってば!!謝るから怒らないでえええ!!」

サファイアとルビーが騒ぎ始めた。そんな姉妹の様子を遠い眼で見つめながら、ピュアが

「...命懸けの任務を終えてきたの、いつだったかしら...?」と尋ねる。

しかし、そんなピュアに一昨日だと答えてやる者はいなかった。



※164...メニューの決定権もこの2人に任されている。

2009年6月30日

「...ゴホッゴホッ...」

「ピュア様...」

最近咳が酷くなってきたピュアに、ジャックが診察を申し出ようとした。しかしピュアは、「大丈夫よ」と言って突っぱねる。

ピュアが患っている呼吸器石化症は、初期治療の段階で治さないと不治の病と化してしまう遺伝病だ。このようになってしまえば、もう進行を遅らせることしか出来ない。それも、病状が進むに連れてどんどん困難になっていく。

ピュアにはもちろん主治医がいたのだが、彼は科学部誘拐事件の際に連れ去られてしまった。それでも彼女のすぐそばにはジャックがいるし、彼の腕はピュアも本当によく知っている。ところがピュアは“あんたは自分の仕事に専念なさい”と言って、ずっと診察を拒んでいるのだ。

「しかし、ピュア様—...」

ジャックが反論しようとする、ちょうどその言葉を遮るかのようなタイミングで電話が鳴った。

「もしもし?.....あら、そう.....え?.....分かったわ、はいはい...」

ピュアの電話はたいていすぐに終わってしまう。今回も例に漏れず、瞬く間に通話を終えると、ピュアはジャックをビッと指差して

「私の心配してる場合じゃないわ、任務よ!!」

言った。

「今の電話なんだけど...」

ピュアがジャックに向かって話し始める。

「一昨日からポーラの激しい咳・高熱・頭痛・全身の筋肉痛と関節痛が治らないんですって。向こうの医者がお手上げだって、あんたを派遣するように言ってるのよ。至急行ってあげてくれない?」

「かしこまりました」

ジャックがそう答えると、隣りにいたサファイアが

「あの...」

と口を開いた。彼女もピュアに呼び出されたのである。

「私は何なんでしょうか...?」

サファイアが尋ねると、ピュアは

「あんたもついて行くの」

と答えながらビッビッビッとサファイアを指差した。

「え?どうして...」

目を瞬かせるサファイアに、ピュアは腕を組みながら

「科学者がさらわれたり、歴史学者が虐殺されたりしてるでしょ。1人より2人の方が安全じゃ

ない。コランダムのメンバーに万々万が一のことがあったら困るのよ」

と説明する。そして、

「分かったわね?!」

と言って2人を頷かせた。

2人はその日のうちにサファイアンコスモス静養地へと出発した。まだ6月だが、サファイアンコスモス畑の花はもう半分ほど咲いている。

「久しぶりだね、何か...」

上空を飛びながら、サファイアが懐かしそうに笑って言った。ちなみに、彼女の机の上にはまだこの写真がデジタルフォトフレームに収まって飾られている。

「今のごたごたが一段落着いたら、また一緒に遊びに来てくれる？」

そう聞いてくるサファイアに、ジャックが

「構いませんが」

と答えると、サファイアは

「ありがとう」

と言ってとても嬉しそうな笑顔を見せた。

到着するとすぐに、ジャックはポーラを診察した。

「...主治医はインフルエンザじゃないかって言ってたのですが...」

ポーラの教育係の女性が言う。

以前に2人がここに来た時からもう6年経っていた。あの時は6才だったポーラも、もう12才である。

「...インフルエンザとおっしゃいましたか。わたしにはむしろ...」

ジャックはHHCだと診察した。夢幻界特有の、あまり感染力が強くない細菌性の病気なのだが、1度感染・発症するとインフルエンザとよく似た症状に悩まされ、最悪の場合死に至ることもある。

「あの...治りますよね...?」

教育係が不安げに聞くと、ジャックは

「ええ...今、治療薬をお作りいたします」

と答えるや否や、調合の準備を始めた。

その間、サファイアはずっと別室にいた。暇なので、最新の魔法学論文をチェックしている。今読んでいるのはラウラ・カッサーノという微細魔法学者の論文だ。

“魔法学”と一口に言っても、その中にはさらに細かな分野がたくさんある。サファイアの専門はMW開発だ。カッサーノ女史の論文の内容は、ずばり“微細魔法学”という新しい分野の創設についてである。

彼女によると、魔法族が通常魔法を使う時より、ずっと小さな魔力で特定のことを為せる者が

稀にいるとのことだ。今のところ、対非人類会話術、夢見、占術...など、12種類が見つかっていて、読眼術もその1つだという。中でも、対非人類会話術と読眼術は特殊らしい。その能力が使われる際、わずかに使われる魔力の動きは波形として表すことができるのだが、対非人類会話術はその波形が“N”字のような形になり、読眼術は“S”字のように曲線を描くというのだ。ちなみに、他のはその中間らしい。

...ふーん...なんか面白そうな分野だなあ...

そう思いながら読み進めていると、その論文を表示していたパソコンから突然電子音が鳴り出した。この音は王宮から掛かってきた電話の着信音である。

「もしもし？」

サファイアが応じると、ルビーが

『あ、姉ちゃん？うちうち、ルビーなんだけど...』

と名乗った。

「...うん、映像あるから分かるよ」

サファイアが言うと、ルビーは

『あ、そうだったな...』

と笑ってから、

『なあなあ聞いてえ!!』

と唐突にもものすごい勢いで話し始める。

『あのな、フィリップ様が、急に結婚するとか言い始めたんだよ』

「...え？今、何て...」

まさかの発言に啞然としたサファイアが聞き返すと、ルビーは

『やっぱ信じられないだろ？』

と言って首を振った。

『よりによって何で今？って思うけど、ほら...もう33才だし、そろそろ結婚しないと次の代が面倒なことになる...って話なんだとさ』

「...あー...なるほど。確かに...」

ルビーの説明にサファイアは納得しながらゆっくりと相槌を打つ。確かに、跡継ぎ問題が厄介事を招くということは、あらゆる国の歴史がはっきりと証明しているのだ。

『それで、結婚式やるからうちら3人も1回帰って来いって話なんだけど...』

ルビーがおずおずとそう切り出すと、サファイアは

「へーえいいなあ、楽しんでおいでよ」

と心からの笑顔で言った。

『うん...だけどな、ほんとは姉ちゃんとかピュア様とかペーター様とかみんな呼びたかったんだけど...』

「ちょっと待って。今、わざとじゃっくん外したでしょ」

すかさずサファイアに突っ込まれたルビーは、笑いながら

『...まあ、ジャックも』

と付け足すと、また真顔になって話を続ける。

『今このご時世じゃん？だから...悪いんだけど、外国人立入禁止なんだよ。ほんとにごめんなあ...』

とても申し訳なさそうなルビーに対し、サファイアは苦笑しながら

「うん、分かってる。しょうがないでしょ、このご時世だし...」

と答えた。

『だから、明日1回帰国するんだけど...でも、来週にはまた来るから!!』

自分の母国へ帰るにも関わらず、ルビーはなんだか寂しそうな顔をする。

「うん...あ、そうだ...今ジャックはポーラ様を診ているところだから、ディックにはそう伝えておいてくれる？悪いけど...」

サファイアが頼むと、ルビーは

『あ、分かった。任しといて』

と笑った。

ジャックたちが到着してから4日後、ポーラはようやく全快した。この日、海の向こうではフィリップの結婚式が行われている。

翌日2009年7月5日深夜

ポーラが快復してから24時間様子を見た結果、特に問題はなさそうだったため、サファイアとジャックは王宮に帰ることになった。天気は雷雨。飛ぶと感電する恐れがあるため、やむを得ず電車で帰ることにする。

「ほんっとに雨酷いね」

歩きながらサファイアが言った。傘は差していないが、サファイアの魔法があるから雨に濡れはしない。青玉人が青玉魔法を使う、数少ない機会だ。 ※165

「そうですね」

ジャックはちらりと空を見上げて相槌を打つと、歩く速度をさらに上げる。

「こんな天気ってさ、何か起こりそうじゃない？」

サファイアも真っ暗な空を見上げた。ちょうどそのタイミングで稲光が走り、サファイアのわくわくした表情を照らし出す。

「例えば何です？」

「ほら、死んだはずの人がひょっこり現れたり、いにしへの魔物を召喚する人がいたり...」

そんなことを言うサファイアを、ジャックが冷ややかな眼で一瞥した。ちなみに、彼等にとってはドラゴン、水中人、妖精、吸血鬼...などは魔物でも何でもないごく普通の生物だが、ゾンビや幽霊は迷信とされている。

そんな話をしながら、2人が駅と静養地との真ん中辺りまで来たときのことだった。細い1本道の向こうから、1人のシルエットが歩いてくる。こちらも向こうも歩いているため、どんどん距離が詰まっていく。そのまま何事もなくすれ違おうだろーと思っていた。ところがその距離が10mくらいになったところで、そのシルエットは片手を上げて挨拶してくる。

...誰だろう？

雨風は酷く、その距離がさらに縮み相当近づいたところで、ようやく相手の顔を認識できた。その瞬間、ジャックの手から医療靴が落ちる。

「やあ...ジャック。久しぶりだね」

青年は優しく微笑みながら言った。

「どなた？」

驚いたサファイアが靴を拾いつつ尋ねても、ジャックは何とも答えない。

「.....父.....さん.....？」

ジャックはただ、掠れる小さな声でそう呟くだけだった。

「いや...本当に大きくなったね」

「.....」

ジャックと父親——ジュラダン・キュアラーは、その場に留まったまま話していた。邪魔しても悪いと思ったサファイアは一足先に駅へ向かっているが、水を避ける魔法は親子両方にかかっている。

「あんなに小さかったのに...もうわたしより大きくなっちゃったじゃないか」

「.....」

確かに、ジャックの方が4~5cmほど高い。

「...悪かったね...本当に長い間辛い思いをさせてしまった...」

「.....」

「...ジャック？」

ジャックは何も話せなかった。

1500年以上もの間、ずっと死んだとばかり思っていた。僕を庇って、母に殺されたのだとばかり...

生きていてくれたことは嬉しいはずなのだ。しかし、1500年間死んだと思っていた人物が突然目の前に現れても、それを受け入れることなど出来やしない。

...本当に...?.....本当に.....?

しかし、その声は記憶の中の声——夢で聞いていた声とまったく同じだった。容姿も、服装以外完全に一致している。ややふわっとしたブルーブラックの髪、笑った時の口元、切れ長な目、そしてその眼に宿る、優しく儂い、陽炎のように揺らめく青い光——間違いなく父親だ。

生きていてくれたことは嬉しい。だが、もしこれが現実なのだとしたら、分からないことがあまりにも多すぎる。あまりにも...あまりにも...

——あの日、いったい何が起きていたのですか？

何も言えないジャックを見て、ジュラダンは首を振りながら苦笑した。

「...信じられないんだろうね。ずっと...ずっと、わたしが死んだと思っていたんだろうから.....本当にすまない。あの時は、そうせざるを得なかった。いろいろ厄介なことがあったし、おまえはあまりにも幼かった——ああせざるを得なかったんだ」

“いろいろ厄介なこと”？何があったんだ？幼い自分には見えないところで、何かあったんだろうが...それなら何があったんだ...？

「...酷い天気だ」

ジャックが何も答えないので、ジュラダンは諦めて空を見上げた。

「...そうですね」

ようやく、ジャックが返事をする。

「...こんな天気じゃ話すに話せないし...また改めて会いたいね。ずっと離れ離れになっていたんだ.....だが、今からでも家族の絆を築くのに間に合わないことはないだろう？」

「...ええ...」

ジュラダンの話に対するジャックの相槌は曖昧だが、それでもジュラダンは気にする様子を見せない。

「実はね...我が家でまだ生きている者が、集まっているんだ.....君の叔母さんとかね、お姉さんも...」

「...!!!」

最後の部分に驚いたジャックは、改めて父親の顔を見つめた。今までも十分驚いていたのだが、“信じたいのに信じられない”という状態から、“信じられないし、信じたくもない”という状

態に急変する。

「...姉.....ジェーンですか？」

ジャックは否定してくれることを願いながら念を押した。しかし、ジュラダンは「そう」と頷く。

...どうということだ？ どうということなんだ？ いったい.....いったい.....まさか.....？

「...いや、今おまえが置かれている立場は知っているよ。でも...」

そう言いながら、ジュラダンはそっとジャックの頬を撫でた。それから肩、背中と手を這わせると、そのまま息子を優しく抱き締める。

「...どうしても、おまえと話がしたかったんだ。また、おまえと会いたかったんだよ...
...おまえの論文を見る度に嬉しくてね。わたしと分野は違うが...あんなに小さかったのに、今や化学界の権威だ!!...1度でもいい、会いに来てくれないか？ 政治的なことは抜きにして.....家族として...」

ジャックは幼い頃も、こんなふうに抱き締められたことはあまりなかった。教育熱心な父親だったが、子供たちを抱き締めるようなことはあまりしなかったのだ。それでも、少ないながらも残っている、抱き締められたときの感覚。今のそれは、その時と何ひとつ変わらない。

...なにひとつ...

「...父さん」

ジャックがぼつりと呼びかけた。

「ん？」

ジュラダンは優しく首を傾げる。

「いつ...どこへ行けばいいですか？」

ジャックが小さな声でそう尋ねると、ジュラダンは驚き・安堵・嬉しさの混ざり合ったような表情を見せた。

「...おまえなら、そう言ってくれると思ってたよ。わたしの言うことをよく聞く、素直ないい子だったからね.....この日時と場所に来てくれ」

ジュラダンはそう言ってジャックの手にメモを握らせると、そのまま立ち去ろうとする。し



かし、ジャックはその手を掴み、ジュラダンを引き止めた。

「...父さん...」

ジュラダンが振り返ると、ジャックは父親の眼をまっすぐに見つめている。

「...？」

「僕たち...いったい、いくつの命の上に生きているのでしょうか...」

ジュラダンはそう尋ねる息子をじっと見ていた。それから、口角をくっと持ち上げる。

「おまえなら計算できるだろう？わたしの方なら電卓で足りるよ.....おまえの方は、電卓なんかじゃとても桁が足りないけどね」

そう言うと、ジュラダンは自然な動きでジャックの手を振り解き、今度こそ闇と嵐の中に消えていった。

...一一立ち尽くす息子を残して。

駅に来たジャックの様子はかなり酷かった。いつも通り能面のような無表情で、サファイアが話しかければ崩れなく淡々と返事をする。

...でも、眼があまりにも虚で。

2人が合流した時に少し話したのを除けば、城に着くまでの間、サファイアとジャックは一言も話さなかった。

...さっき、ジャックは“父さん”って言ってたよね...？でも、ジャックのお父さんって、お亡くなりになったんじゃ...？...どうということ？.....どうということ.....？

しかし、サファイアもそういうことは一切質問しない。

※165...“数少ない”と書いたが、青玉島は温帯気候だから雨も適度に降る。そう考えると、意外と使う機会は多いかもしれない。

王宮の最上階まで来ると、サファイアが女王の間のインターホンを押した。

「ただいま戻りました」

『お帰り』

いつもならこんな時間にはもう寝ているであろう女王の間も、今夜はまだ起きていた。嵐の真夜中にもかかわらず、一刻も早く帰ってこいと言ったのはピュアである。だから、責任を持って待っているというわけだ。

「...ありがとう」

ピュアは真っ先にそう言った。

「嵐の中大変だったでしょ...もう早くや...」

「いえ」

“休みなさい”と言おうとしたピュアを、ジャックが短い言葉で遮る。

「今すぐ、お話申し上げなければならぬことがあります」

ジャックは静かな声で言った。静かすぎて、まるで機械音のような声だ。

「...何？言ってご覧なさいよ」

ピュアが促すと、ジャックはゆっくりと話し始める。

「姉の他にも、まだそれに匹敵する者がいたようです...」

ジャックはまず、この帰り道に起こったことを話した。しかし、ピュアはジャックの姉の話は聞いていても両親のことまでは知らないため、結局両親が離婚していたことや9・3事件のことまで話さなければならなくなる。

「...ちょ.....何なのよもう...あんたの家族どうなってるの...？」

話を聞き終わると、ピュアは混乱した様子で言った。

「...要はこういうこと？あんたのお姉さんがさらわれそうになった際に、お母さんがあんたを殺そうとした。そしたらお父さんが、あんたを庇って亡くなった。その直後、あんたがお母さんを.....“殺しちゃった”っていうか、つまりあんたの魔力が暴走しちゃったんでしょ？よかったわね、自分を吹き飛ばさなくて...」

「...こら、ピュア...」

ピュアの不謹慎な言い方をペーターが咎めるが、ピュアは無視して話を進める。

「まあ、今はその話には触れないことにするわ。あんたの話が本当なら事故みただし、どのみち今、そんな1500年も前のことをうだうだ言ってコランダムのメンバーを欠くわけにはいかないもの...」

ピュアがそう言うと、ジャックは黙って一礼した。無言だったのは、何と言えども適切な返事となるのか判断できなかったからだろう。 ※166

「...つまり、そこでご両親は亡くなられたと思っていた。ところがそのお父さんは生きていらした。生きていて、今さっき会いに来て、しかも暗黒派だった.....そういうこと？」

ピュアの確認に、ジャックは黙ったまま頷く。

「...本当に、お父さんだって間違いないの？」

ピュアが念を押すと、ジャックは
「ええ、間違いありません」
と断言した。これ以上話をややこしくしたくないので言わないが、読眼術でも確認しているので間違いはない。

「...で、お父さんはあんたとまた会いたいと言ってきた。お姉さんもいるってことまで、わざわざ告げて.....要は、自分が暗黒派であることを明かした上で、あんたを仲間に引き込もうって話よね...」

「そうですね」

ジャックが相槌を打つと、ピュアは
「で、何て答えたの？」
と聞いてきた。

「日時と場所を聞きました」

ジャックはそう言うと、先程父親から受け取ったメモを渡す。

「...2009年7月15日——“2009年”なんて書かなくたって分かるわよ、まめなお父さん
ね——22:00——中途半端に遅い時間ね——柘榴溪谷エイゼンシュテイン州ガブリルユック街ファミンツィン通り13番地——またまた酷いところに...貧困街でしょ——...なるほど。つまり、お父さんの要求、誘いに承諾したわけね。それで、まるで家族との再会を望んでいるかのような感じで日時と場所を聞いて、帰ってきて、さっそく私に話している、と...」

ピュアは色々とコメントしながらメモをしまうと、ジャックを見上げて目を直視した。

「あんたもなかなかしたたかだね。私に話したってことは、会いに行っても家族団欒は望めないわよ」

ピュアの言葉に対し、ジャックは

「そうですね」

と頷くと、はっきりした調子で

「そのつもりで、お話申し上げましたから」

と言い切る。

「そう...さすがあんただわ」

ピュアはそう言うと、ニッと笑って見せた。

※166...平たく言えば、自分が1500年前にしたことを謝罪するべきか否か、ピュアが9・3事件のことは言及しないと言ってくれたことに感謝の意を述べるべきか否かを、とっさに決めかねたということだ。

自室に戻ると、ジャックは崩れ落ちるように椅子に座った。

...そんな.....こんなことが、あるのだろうか...？

幼い頃の、家族3人で暮らした日々。男手ひとつで2人の子供を育て、熱心にいろいろなことを教えてくれた父親。例えば、ジャックは2才になるころには簡単な読み書きは出来るようになっていた。吸血鬼の教育水準は高かったからその時代でも読み書き出来るのは珍しくないのだが、それでも2才というのはかなり早い方だった。何か困ったことがあっても、いつも落ち着いて対処し、助けてくれた父親。そんな日々を一瞬で崩した、両親が死んだ日の事件。あの時も、父は自分を庇ってくれた。最期まで、いい父親だった――そう思っていた。

父親への尊敬、幼い日々の思い出、両親が死んだ日の出来事――それらは良くも悪くも、この1500年以上に渡る長すぎる人生において、常に土台となっていた。ジャックの人格を形成する1番の土台、基礎。それがすべて崩れ去った。何もかも.....何もかも――...

一方、とりあえず隣に座っていたサファイアも、いったい何をどうしたらよいのやら皆目見当つかなかった。

初めから家族がいない ※167 サファイアにも、近い想像をすることならできる。

もし、ジャックに裏切られたら？

サファイアにとって、ジャックは自分という存在そのものを支える存在だった。そのジャックに裏切られたら？自分という存在を支える、基礎が崩れてしまったら...？

しかしそう考えてみて分かることは、そんなことになったら何も分からなくなってしまうということだけだ。

.....どうしよう.....

結局、どう声をかけたらいいのかも、そもそも声をかけるべきなのかも分からない。

...何でこんな時に限ってディックがいないのさ...

サファイアは心の中で地団駄を踏んだ。

彼なら、きっと何か...何かできただろうに...自分には、何も出来ない。それが、悔しくて、悲しくて...

...どうしよう？ちょっとディックに電話してみようかな...ディックにしてみれば迷惑かもしれないけど...でも、私がジャックにできることって言ったら、それぐらいしかないし...

サファイアはそう思うと、そっと立ち上がろうとした。

...ところが。

「.....?!」

ちょっと身動きした瞬間、きゅっと袖を掴まれる。

「...ジャック？」

サファイアは驚いて名前を呼んだ。俯いているから、ジャックの表情を見ることは出来ない。でも、その手は、まるで助けを求めているかのようで.....いや、おそらくそうなのだろう。そんなジャックを見るのは初めてだった。この間ご家族の話聞いたときですら、ここまででは...
...まあ、当たり前かもしれない。むしろ、その場で承諾しておいて帰ってきてからすぐピュア様

に報告するという、それこそしたたかともとれる冷静さに驚くべきだろう。

「...すみません...」

ジャックは小さな声で言った。

「...すみませんが、もう少ししていただけませんか...？」

ゆっくりとそう頼んでくるジャックに対し、サファイアは驚きながらも

「...うん...」

と頷く。

...うん、いつまででもいるよ。...私でいいんだったら...

サファイアはそう言おうかとも思った。でも、そうやってしまうと、かえってジャックを壊してしまうような気がして.....代わりにサファイアは、袖を掴んでいたジャックの手に、自分の手をそっと重ねてみた。ジャックは一瞬反応したが、特に嫌がるような素振りは見せなかったので、サファイアはその手をきゅっと握る。

サファイアもジャックも、かなり長い時間緘黙していた。重い沈黙が、2人の間をゆっくりと流れていく。そんな状態がしばらく続いた後、ジャックが呟くような声で

「...サファイア、もう1つお願いしてもよろしいでしょうか？」

と言った。

「うん...私に出来ることなら」

サファイアが答えると、ジャックはやや躊躇いながら、そっと頼みを口にする。

「...子守唄、歌っていただけませんか...？」

ピュアはすぐに紅玉高原へ連絡した。それを受けた紅玉組3人は、翌日6日に急遽青玉島へ戻って来る。その後、ピュアはジャックの許可を得てから紅玉組にもジャックの両親の話や9・3事件のことなどを大まかに話し、そのうえで今回ジュラダンが接触してきたという話をした。

今回は場所が分かっているため、作戦を立てるにあたって入念な調査が行われた。まず、駄目元でスキャナー魔法が試される。しかし、案の定彼らはそういった呪文を避ける工夫をしているらしく、スキャナー魔法では何も出なかった。しかし、何も出ないから何もないだろうと考えるはずはなく、すぐに情報処理局の局員5人が柘榴溪谷エイゼンシュテイン州ガブリルユック街ファミンツィン通り13番地へ派遣される。

ピュアも言っていたように、ファミンツィン通りは柘榴溪谷の地下にある酷い貧困街である。ここもかつては賑やかな地下商店街だったのだが、いつしか寂れてゴーストタウンと化し、今は物乞いやホームレスなどが廃テナントに潜んでいるだけだ。借金取りから逃れるために、ここに身を隠している者も多い。

13番地も、何ら変哲のない廃テナントがシャッターを下ろしているだけだった。しかし、そこには誰も住んでおらず、さらに地下深くまで潜るエレベーターが隠されている。そのエレベーターで降りると、2つの部屋が並ぶフロアに出た。どちらもかなり頑丈な壁をもつ殺風景な部屋で、カメラもなければ人もいない、何もない部屋だという。入口も先程書いたもののみだ。つまり、ジュラダンがジャックに渡したメモに書かれていた場所は、少なくとも彼らが普段暮らしている

場所ではないらしい。 ※168

※167...ルビーとは紛れも無く姉妹だが、クリアシャイン姉妹はあまりにも特殊すぎて参考にならない。

※168...まあ、ジェーンがいるにもかかわらずジャックに居住地の位置を教えたら、それはあまりにも油断しすぎだろう。

2009年7月15日22:00

柘榴溪谷エイゼンシュテイン州ガブリルユック街ファミンツィン通り13番地。そのエレベーターを1人で下ったジャックは、鉄製のドアの横にあるインターホンを押した。音は何も聞こえなかったが、ドアはすぐ自動的に開く。

「やあ、ジャック」

ジュラダンは部屋の中央で、腕組みしながら立っていた。他には誰もいない。

「変わった部屋ですね」

ジャックが近づきながら部屋全体に目を走らせて言うと、ジュラダンは短く笑って

「まあね」

と頷いてから、

「ジャック...本当にこっちへ来てくれるのかい？」

と尋ねる。

「どう思います？」

ジャックは3mの距離を残して立ち止まると、淡々とした声で聞き返した。

「もちろん、そうしてくれると思うよ」

ジュラダンは微笑みながら、自信を持って断言する。微笑んではいるものの、その眼はまったく笑っていない。

「それしか選択肢がない。分かるだろう？ここへ来た以上、おまえはもう袋の鼠だ」

「...“袋の鼠”ですか」

ジャックがゆっくりと繰り返した。

「とても歓迎の言葉には聞こえませんが...」

ジャックの鋭い視線と、ジュラダンの醒めた視線が交差する。

「袋の鼠はどちらでしょうね？」

この言葉が事実上、ジャックからの宣戦布告となった。

ジェーンは隣の部屋で壁を透かして父親と弟の姿を見ていた。壁の中の魔法陣が、ジェーンやジュラダンには互いの部屋の様子を見ることが出来るようにしているのだ。

...ほら、言わんこっちゃない...

案の定隣の部屋では戦闘が始まる。

...はいはい、援軍ね...

ジュラダンとジャックが戦闘することになった場合、ジェーンは入口から入って背後から挟み撃ちにする手筈だったのだ。

...しかし。

突然扉の開く音がして、ジェーンはハッと振り返った。

「こんにちは、ジェーンさん」

扉のところでそう挨拶してきたのはサファイア。にこにこしながら自然体で立っているが、パールのポケットの中に収まっている右手は魔法銃を握っているに違いない。

「ああ...あんた、バカじゃないの？また自分から来たわけ？」

ジェーンはすぐにせせら笑いを作ると、そう言いながらおもむろに近付いていく。

「はい...でも今度は少し、抵抗させてください...」

サファイアがそう言うのと同時に、ポケットから現れた魔法銃が火を噴いた。

かつて地下商店街となっていたフロアでは、13番地に人が集まっていた。40~50人いるファミンツィン通りの住人全員——女・子供もだ——が武器を片手に集結している。もっとも、“武器”といっても包丁だの鍬だのというのが関の山だった。斧なんて持っていたら素晴らしいものである。

「あー...何でそんな物騒なもの持って集まってんですか？」

皆の後ろから、そう言って近づいてくる2人組がいた。住人たちが一斉に振り返ると、赤毛の男女がMクロスボウを片手に明るい笑顔で歩いてくる。無論、ディックとルビーだ。

じりじりと後退りする皆に向かって、今度はルビーが話し掛けた。

「出来たら、今のうちに帰ってもらえると嬉しいんだけど...民間人と戦うのも気が引けるしさあ...」

住人たちは後退りしても、退散までしてしまう者は誰1人としていない。そのため、非常に痛い沈黙が流れる。

「何ビッテンダヨ、コノ役立たズメ」

住人たちの背後から、明らかに不自然な女の子の声がした。いかにも作り物っぽい声だ。

「日頃ノ恩ヲ忘レタノカ？」

ちょっとゴスロリじみているようにも見えるくらい派手な、モノクロのワンピースを着た10才くらいの少女が、悠々と姿を現す。

「そうだ...行くぞっ!!」

住人の誰かが少女に答える形で叫んだ。それを合図に、皆がディックとルビーに殺到してくる——...

ジュラダンの左手が火炎放射を放った。炎はまっすぐジャックに向かうが、ジャックは蜚気楼のようにゆらりとかわすと、そのままロッドで素早く大きな弧を描く。弧はそのまま光の刃となり、ジュラダンの足元目掛けて宙を走った。それを跨ぎ越す様にしながら弾丸のごとく間合いを詰めてくるジュラダンを、ジャックの爆風が迎え撃つ。

「...戦闘を教えたのはデイビッドだな？」

爆風から身を守るために屈んだジュラダンは、立ち上がりながらさらに間合いを詰め



つつ、そう言った。ジャックはあえて答えず、左手で炎の弧を描いて距離をつくる。

「そっくりだ...陽炎のような動きも、常に距離をおいて魔法で戦いたがる所も」

確かに、ジャックは師の戦法を忠実に受け継いでいた。ジャックの性格がそうさせたのか、それともたまたまその戦い方がジャックにも合っていたのかは分からない。

「こういう狭いところでは苦しいだろう？」

ジュラダンが今までよりずっと速い動きで間合いを詰めた。ロッドの後ろに付いている刃を構え、勢いよく突いてくる。ジャックは咄嗟に右へかわしたが、かわし切れず左上腕から鮮血を噴いた。

ジュラダンはジャックの背後にいた。ジャックはそれを振り返り様、脇腹辺りに鋭い回し蹴りを食らわせる。

「確かにそうかも知れませんね」

そう答えながら放たれた光の弧の刃は倒れたジュラダンの足元を正確に狙っていた。しかし、ジュラダンは間一髪で立ち上がり跳び退いたため、また間合いは元通りになってしまう。先程からずっとこの繰り返しだ。

ジュラダンは

「...言葉の割には余裕だな」

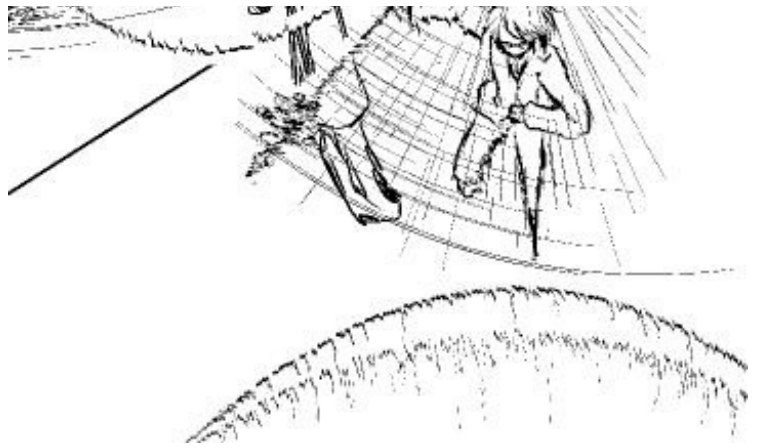
と笑いながらロッドを矛のように鋭く突いて、ジャックを爆撃で吹き飛ばそうとした。しかしジャックはまたその言葉を無視し、蜚気楼のようにかわす。その流れで向けられたジャックのロッドが、青い閃光を放った。

ジェーンがロッドを矛のように鋭く突いた。爆撃が炸裂するが、そこにいたはずのサファイアは消えている。それを認識すると同時に、ジェーンはとりあえず飛び退いた。案の定、銃弾がジェーンの脚があった辺りを突っ切る。

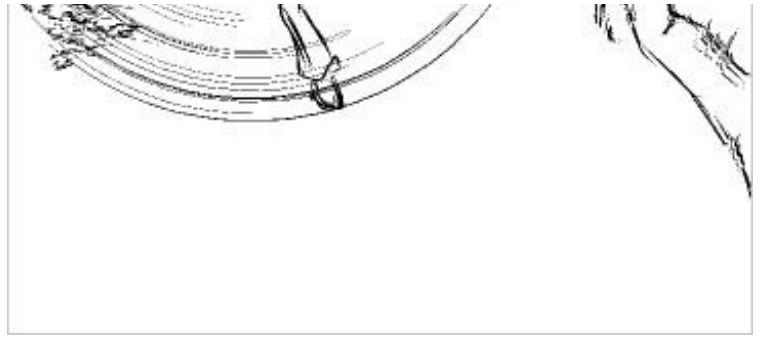
「勘がいいですね」

サファイアの緩い声が聞こえた。その言葉と共に今度は横から飛んできた銃弾をロッドで払い落とすと、その動きで大きな弧を描き、自分の後ろ以外に光の刃を走らせる。

サファイアはそれを跳ねてかわすとまた弾



を撃った。銃弾は常に正しくジェーンの腕や脚を狙っているのだが、ジェーンはどれもかわすか叩き落とすかしてしまう。



一方、ジェーンの攻撃はあまりサファイアを狙ってはいなかった。常にちょこちょこコマネズミのごとく動き回っている

ため、狙いようがないのだ。それよりは、広範囲に攻撃を繰り返し、動き回っているサファイアが自ら突っ込んでしまうことを狙ったほうが効率的だ。

「あんた...いつまでも動き回っていられると思わない方がいいわよ」

ジェーンがイライラした口調で言いながら、また直勘だけで閃光を放つ。

「わわっ!!」

サファイアの動きが止まった。閃光がサファイアの進行方向を遮ったのだ。もちろん、ジェーンがその隙を逃すはずはない。

「!!」

黒い蔓がサファイアの右手首を捕らえた。魔法銃が床に落ち、甲高い金属音を響かせる。毒茨を使わなかったのは、蔓の方がずっと速く動くからだ。

「ふふふっ...これでコマネズミちゃんも終わりかしら? ねえ?」

ジェーンは冷酷な猫撫で声で笑うと、ロッドを斜めに払って光の刃を飛ばした。ところがサファイアはしゃがんでかわすのと同時に、ジェーンと繋がった右手を後ろにぐっと引っ張る。

「意外と諸刃の剣かもですよ?」

サファイアはバランスを崩しかけたジェーンにまた緩い声でそう言うと、ジェーンの肩を貫くようにウォータージェットを放った。

地上では、50人近い人々が倒れて喘いでいた。誰も致命傷を負った者はいないが、脚などに酷い怪我をしていて動けない。

「...っく...!!」

1人の青年が動けない身体に鞭打って無理矢理立ち上がった。

「もうやめろ」

ディックは低い声でそう言いながら、その青年にMクロスボウを向ける。

「あんたら...何でこんなに...」

ルビーは全体を見渡しながらかれたように呟いた。

ディックとルビーの役割は“袋の鼠”を閉じ込める袋の紐を奪うこと。つまり、1つしかない入口に張り込むことで、ジャックやサファイアが脱出できないようにしている住人たちを追い払い、代わりに自分たちがそこに陣取ること、逆にジュラダンとジェーンを袋の鼠にしてしまうというわけだ。民間人を動けなくなるまで痛めつけるつもりはなかったのだが、そうせざるを得なかったのは、彼らがいつまで経っても退散せず、刃向ってくるからである。

「...どうせ俺らには身ひとつしかねえのにさ...こんなに楽しくないかよ? ああ?」

青年はそう言いながら斧を振りかぶった。しかし、ディックの黒い蔓はそれを情け容赦なく奪い取ってしまう。

「好きでやってるわけじゃない。嫌なら退けばいいだろ?」

ディックが言い返すと、別の誰かが小さな声で

「...あの人たち...よく、パンとかスープとかくれるんだよ...」

と呟くように言った。

「おたんじょうびのとき、おねえちゃん、クッキーくれたんだよ」

地面にへたりこんだ少年が、泣きながらそう言う。真っ直ぐな黒髪に青い目を持つ、4才ぐらいの男の子だ。

「いつか...いつか私たちも、柔らかいベッドで眠れるようにしてくれるって!!」

叫ぶように言ったのはサファイアと同一年ぐらいの女の子だ。なかなか可愛い顔立ちだったのに、その頬には大きな切り傷ができている。

こういった訴えを聞いたルビーは、

「.....ふーん.....そう言うこと.....」

と感情のない声で呟いた。



ファミンツイン通りの住人の多くは、新興国である柘榴溪谷が急成長を遂げる裏で、貧困に喘ぎ、普通の街を離れざるを得なくなった人々だ。借金取りから逃れて、地下に逃げ込んできた人も多い。ジュラダンたちはそういう貧しい住人たちの心を、物や言葉でしっかりと掴んでいたのだ。そしてその甲斐あって、ここの住人たちは今、これだけボロボロになりながらも、何とかしてジュラダンたちの恩に報いようとしているのである。

「あっ」

ディックがいきなり声をあげ、Mクロスボウを構えた。先程のゴスロリじみた女の子が、傷だらけであるにもかかわらず突然ぴよんと跳ね起きると、廃テナントの中へ駆け込んで行ったのだ。

「あとはよろしく!!」

「ディック?!」

少女の跡を追うディックに、ルビーも続いて行こうとした。ところが先程の青年がすかさず掴みかかってきて、ルビーの動きを止める。

「いい加減にしろ」

ルビーは青年を蹴り倒すと、Mクロスボウを向けながら低い声で言った。

「これ以上暴れると治療が間に合わなくなるぞ」

「治療？」

冷静なルビーの言葉に、青年は叫ぶように聞き返す。

「今こうやって武器向けてなのに？あとで優しい顔して治療だって？」

そんなことを言われても、ルビーはまったく意に介さない様子だった。

「ま、治療すんのはうちらじゃないけど...でも、大人しくするんだったら、ちゃんとお医者さんのところには連れてってやるよ」

ルビーはしれっとした顔で言う。

「だって、どっちもうちらの仕事だもん」

エレベーターに駆け込んだ少女は扉を手でピシャッと閉め、ディックを拒んだ。

「ちっ...あのガキンちよめ!!」

ディックがいくら毒づいても、後を追うにはまたエレベーターが昇ってくるのを待つしかない。

エレベーターで下った少女は、2つの部屋の前でしばし立ち止まっていた。ジュラダンの方に行くか、ジェーンの方へ行くか...そう迷った挙句、少女は自分を可愛がってくれるおねえちゃんがいる方を選ぶ。

部屋の中では、サファイアとジェーンが泥沼の戦いを繰り広げていた。確かにジェーンの蔓はサファイアのコマネズミのような動きを止めたのだが、それはサファイアの言った通り、諸刃の剣になっているようだった。互いに引っ張り、バランスを崩し合いながら、閃光や光の刃とウォータージェットを交錯させている。

そこへ、先程の少女がジェーンを援助しに来た。だがどうやら、タイミングと運があまりにも悪かったらしい。

ジェーンが放った閃光を、サファイアはぱっとしゃがんで避けた。サファイアに当たらなかった閃光は、そのままサファイアの真後ろにいた少女の頭を貫通する。

「ジュリーっ?!」

ジェーンはそう叫ぶと、もう手遅れだと分かっているながらも、その場に崩れるジュリーのところへ思わず駆け寄った。サファイアも攻撃することなく、ただ2人を見つめている。

「ジュリー?!ジュリーってばっ!!」

ジェーンは少女の死体を抱いて、がくがくと揺すった。しかし、そのジェーンの行動が――ジュリーを抱きしめていたことが、サファイアを守り、自らの身を滅ぼすという結果を招いてしまう。

突然爆発音が響き、サファイアの目の前で何かが飛び散った。

...え...ええっ?!今、何が...?

あまりにも唐突な出来事に、サファイアの思考はとても追いつかない。つい先ほどまで幼い少女だったと思われる肉片と、顔や前身がぐずぐずになってしまったジェーンの無惨な死体を、ただ見下ろしているばかりだ。

ジェーンが抱きしめていたジュリーの身体が爆発したらしい、という状況を呑みこんだのは、それから数分経ってからのことだった。

ジュリーの援軍が結果的にジェーンとジュリー自身の身を滅ぼしたわけだが、それは思わぬところにも影響を及ぼした。戦いながらも壁を見透かして隣の部屋を確認していたジュラダンは、たまたま娘が爆死する瞬間を見てしまう。

「ジェ...!!!」

ほんの一瞬の動揺が勝敗を分けた。壁の向こうの娘の死に気を取られたジュラダンは、壁を見透かすことの出来ない息子の爆風に、情け容赦なく吹き飛ばされる。

壁に激突したジュラダンからロッドを奪ったジャックは、非常に冷酷な眼で父親を見下ろしながら、その喉元に自らのロッドを突き付け、

「何に気を取られたのですか？父さん」



と尋ねた。“父さん”という呼びかけも、このような状況になるともはや氷の刃を突き付けるようなものだ。それに対し、ジュラダンはただ黙って壁を指差す。

そして、10秒近く経ってからようやく、酷く震える声で
「...ジェーンが、死んだんだよ」
と言った。

その後、ジュラダンは青玉島王宮の地下牢の独房へ転送された。上の階でジュラダンたちに協力していたファミンツィン通りの住人も、治療のために王宮へ送られる。ジェーンとジュリーの死体も――悲惨なことになっていたが――同じくだ。

帰国した4人は、言うまでもなく傷だらけなどという生ぬるいものではなかった。それでもやはり医者の手配が出来なかったため、ジャックが治療を行う羽目になる。

治療が終わってから、4人はそれぞれピュアたちに報告をした。まあ、報告と言っても、たいいていは地下牢を見れば分かる話だ。特に説明が必要だったのは、ディックとルビーが民間人相手に何故ここまで――皆が動けなくなるまでやらなければならなかったのかということと、どうしてジェーンとジュリーが死亡したのかということの2点である。

ディックたちの方はすぐに片付いた。ジュラダンたちが日頃から恩を売っていたため、住民たちはその恩に報いようと全身全霊を掛けてディックたちに抵抗し、どれほど怪我をしても引き下がろうとしなかった。だから、このように動けなくするほかなかったのである。彼らは治療をすればすぐに治るから、あとは取り調べだけして帰せばよい。

問題はジェーンたちの方だった。一体何が起きたのやら、目撃していたサファイアにも説明つかないのだ。

「...まあ、とりあえず...あんたたちの任務は成功よ。ボスも捕まえたし.....1人死んじやったけど。あとは.....これでどうにかなるのかしら...？」

皆の報告を聞いたピュアはやや混乱している様子だったが、とりあえずそうコメントする。
「だといいいけど...いずれにせよ、とにかく今日は休んだ方がいい...な？」

ルチアーノの提案に反対する人も、誰一人としていなかった。

その後しばらくの間、皆はジャックとサファイアのことを気にかけて、見守っていた。ジャックは自らの手で父親を囚われの身にしてしまったわけだし、ずっと敵対していたとは言え、姉を失っている。サファイアは2人の人間の死を――それも、相当無惨な死を――目の当たりにしている。どちらも精神的ダメージは計り知れないはずだ。

ところが当の本人たちは、2人とも平気な顔をしていた。お互いに、相手もまた辛い思いをしているということをよく知っているのだ。

...まったく...相変わらずだよなあ...

そんな2人を、ディックとルビーはそう思いながら心配していた。

翌日から、ジュラダンに対する厳しい取り調べが始まった。夢幻界の国際法を守り、拷問はしないでいたが、かなりギリギリのラインだと思われるところまでやっている。

しかしそれでも、ジュラダンは何も喋らなかった。ただ“まだ終わってはいない”だとか“どの道おまえには話さない”などと繰り返すばかりである。そんな状態だから、当然チーム・コランダムも解散できずにいた。

「...んもうっ!!何なのよっ!!」

ピュアがイライラしながら叫ぶ。

「どういうことなの?!“まだ終わってない”って!!」

ジュラダンがひたすらその2文しか言わないため、どういうことなのかよく分からなかったが、ピュアたちはそれを“どうやらまだテロ組織を指揮する者が残っているらしい”と解釈していた。そこで有力候補として挙がったのは、嵐の中でジュラダンがジャックに言っていた“叔母さん”という人物である。

「キュアラー、ほんとうに何も知らないの?!」

ピュアがもう何回したか分からない質問を繰り返した。

「ええ...申し訳ありませんが」

ジャックももう何回言ったか分からない答えを返す。ジャックは両親と姉以外の家族のことを何も一本当に一切知らないのだ。

「...んもう...どうするのよ...」

ジュラダンが捕まり、ジェーンが死んだ。にもかかわらず、ジュラダンは一切口を割らない。それどころか、“まだ終わってはいない”などと不吉なことを言っている。ジャックの“叔母さん”とやらがまだ残っているのかも知れないということだが、ジャックが誰ひとり親戚を知らない以上、その情報が何かの役に立つとは思えない。

その一方、取り調べから裁判まで瞬く間に進んだ人もいる。アルバート・ウィルソンだ。アルバートは厳しい取り調べが嫌だったのか、ジェーンたちに加担した件について何もかも白状した。話の内容をざっくりまとめるとこうなる。

2007年8月18日未明、突然自宅に来た誘拐犯たちは、アルバートを誘拐した。争った形跡がなかったのは、誘拐犯に何かされるのが怖くて、一切抵抗しなかったためだという。その後ずっと、アルバートは人格を消す魔法の研究を続ける。そして約1年10ヶ月後にそれが完成し、サファイアたちを呼び出した...というわけだ。

アルバートがこれだけ喋ったのは、共犯者が多く捕まっているため、自分が喋っても喋らなくてもすぐに何もかも明らかになってしまうだろうと考えたからだった。どうせ分かってしまうのであればむしろ、自分から喋れば情状酌量を見込めると思ったのだ。そして確かに、他の人への取り調べから、アルバートの話はすべて裏が取れている。

しかし、第1審の判決は懲役15年とのことだった。執行猶予はない。控訴してもまったく同じだった。だがアルバートは、さらに上告するつもりでいるらしい。

2009年7月17日

ジュラダンが捕まってからわずか2日後、紅玉高原の情報処理局が夢幻界を揺るがすような情報入手した。何者かが、紅玉高原の王宮を乗っ取ろうと画策しているというのだ。

紅玉高原王宮は嚴重な警戒態勢に入った。王宮ばかりではなく、大きな駅や空港、港、各地の大都市も軍や警察が警備している。紅玉高原だけではなく、青玉島や準夢幻王国も同じような状態だった。こうなると物流等にかなり響くのだが、治安維持のためにはやむを得ない。3年半前の夢幻界5大要所同時爆破テロのような悲劇を繰り返したくないのだ。

2009年7月20日

この日の夜、サファイアとルビーは城の中を散歩していた。2週間に1度くらい、姉妹で散歩するのだ。

「それにしても...ほんっとに厳戒態勢だな、これ...」

2人1組で城内を巡回している警備員とすれ違くと、ルビーは苦笑しながらそう呟いた。

「ルビー、それ、この3日間毎日言ってるよ...」

サファイアが突っ込むと、ルビーは

「マジで？」

と笑う。

「だってさ、これ...こんな感じの警備を、夢幻王国と準夢幻王国合わせた12ヶ国の、王宮とか空港とか港とか、おっきな駅とか、あっちこっちでやってるんだろ？普通に生活してる人に見れば、いい迷惑じゃん...」

確かにルビーの言う通りである。現に、高速道路でも駅でもどこでも嚴重な荷物検査が入るため、商品の輸送に倍ぐらいの時間がかかっているという話もあるのだ。 ※169

「まあ、そうだけど...でも、本当にまたテロが起きたら“困る”なんて話じゃ済まないから...しょうがないでしょ」

そう答えたサファイアは、生垣の前で不意に足を止めた。

「姉ちゃんどうし...」

ルビーはそう尋ねようとしたが、尋ね終わる前に答えが分かり、質問をやめる。生垣の中から、薄茶色の小さな子犬が現れたのだ。

「可愛い♪」

サファイアはそう言いながら、少しかがんで子犬を見下ろした。すると、子犬はくくん言いながらサファイアに近づいて行くのだが、サファイアは子犬が近づいてくるとその分だけ後ずさりしてしまう。

「姉ちゃん犬怖いの？」

ルビーが笑いながら聞くと、サファイアは黙って頷いた。

「今“可愛い♪”って言ってたじゃん...」

そう言いながら歩み寄ったルビーが、その子犬をひょいと抱き上げる。

「うん...見る分には好きなんだけど、近づくと...噛みつかれそうで怖いんだもん」

そんなサファイアの釈明に、ルビーは

「姉ちゃんなら普通に避けられるって...」

と言ってから、今度は子犬に

「どうした？」

と話し掛けた。すると、子犬は小さく悲しそうな声を漏らす。

「ん？飼い主と逸れちゃったって？え.....どんな人？.....茶髪の背の高いにいちゃん？.....いやあ...知らないなあ.....うん、ごめんな」

ルビーがそう言うと、子犬はとぼとぼと歩き出した。その後ろ姿を見送りながら、サファイアが半ば冗談っぽく

「言ってること分かるの？」

と尋ねる。

「あ、うん...なんか、昔っからそうっぽくて」

ルビーは素で答えた。すると、サファイアはいよいよ驚いて、

「ええッ?!」

と叫ぶ。

「ルビーすごいね、知らなかった...」

「そんなに驚かなくても...」

苦笑するルビーに

「いや、驚くよ」

と突っ込んだ後、サファイアは少し前に読んだ論文をふと思い出した。ラウラ・カッサーノの「微細魔法学」という論文だ。

「それって、もしかして対非人類会話術？」

サファイアが尋ねると、ルビーは首をひねって

「何それ？」

と聞き返す。

「微細魔法の1つ。ほんのわずかな魔力だけで、特殊な魔法を使える人がごく稀にいるらしいんだけど...人間以外の動物とも話せる“対非人類会話術”も、その中の1つなんだって。微細魔法の中でも特に珍しい能力らしいよ」

サファイアがすらすらと説明した。出掛け先で1度斜め読みしただけの論文なのに、大まかな内容はもう掴んでいるようだ。

「さあ...」

そんな姉に対し、ルビーは苦笑しながら首を傾げる。

「そんな仰々しいもんなのかな...そんな、“ごく稀に”なんて...」

ルビーの言葉に、サファイアは何とも答えなかった。ごく稀にしかいないという微細魔法の使い手が、今この場に2人いる。しかも、片方は対非人類会話術、もう片方は読眼術だ。どちらも、微細魔法の中でも特殊な能力である。

それが2人揃ってるなんて...もしもラウラ・カッサーノ女史が知ったら、びっくりするだろうな...

30分後、サファイアは自室に帰ってきた。

「お帰りなさい」

いつも通り、ジャックがそう言いながら出迎えてくれる。

「ただいま」

サファイアはダイニングに行くと、自分で紅茶を淹れ始めた。LDKの様子からすると、どうやらジャックは隣りの部屋にいたらしい。

「じゃっくん、紅茶飲む？」

サファイアが尋ねると、ジャックは

「あ...それでは頂きます」

と答える。

「うん、じゃあ部屋持ってくね」

サファイアは笑顔で答えた。しかし、何故かジャックは先に部屋へ行こうとはしない。

...むむむ...じゃっくん、私が自分の紅茶にお砂糖をたくさん入れると思って、見張ってるんだ。まったく...じゃっくんはちっとも信用してくれないんだから...

サファイアは心の中でそうぼやいた。

...まあ、確かに5杯くらい入れる気だったけど...

サファイアが淹れると、ジャックが2人分の紅茶を運んでくれた。寝室にあるジャックの机には、起動中のパソコンと電子板が置かれている。おそらく論文を書いているのだろう。

「ねえねえじゃっくん、聞いて」

ベッドに腰掛けたサファイアは、紅茶を1口飲むとそう話しかけた。

「ルビーって、実は対非人類会話術の使い手だったんだって」

サファイアが“びっくりだよ”というように話すと、自分の机の椅子に座ってパソコンを開こうとしたジャックの手が止まる。

「本当ですか？」

ジャックがサファイアを振り返ってそう聞き返すと、サファイアは真顔で

「うん。動物と話せるって言ってた。見たところ特別な何かをしているってわけじゃなくて、何かこう...普通なノリだったし、対非人類会話術だと思う」

と答える。ルビーが嘘をついているという可能性も否定はできなかったが、わざわざ嘘を吐く理由も思い当たらないので、そこには言及しない。

「...そうですか...」

ジャックはそう言いながら、何か思うことがありそうな様子でちらっと廊下の方を見る。

「...どうしたの？」

そんなジャックに、サファイアが首を傾げて尋ねた。するとジャックは、少しゆっくりめの口調で

「実は、ディックも対非人類会話術を使えるんですよ...」

と明かす。

「.....」

サファイアはもう返す言葉がなかった。

特殊微細魔法の使い手が3人いるなんて...カッサーノ女史が知ったら、何て言うかな...

※169...念のために言っておくが、青玉島では普段から荷物検査等を行っている。ただそれが非常に細かくなったため、いちいち時間がかかるという話だ。

2009年7月23日

紅玉高原の王宮を乗っ取ろうとする動きがあるという情報が入ってから6日目の午後、紅玉高原が再び驚くべき発表をした。王宮乗っ取り計画はでっちあげだったというのだ。

日々の生活に退屈した29才の紅玉人男性が、ふざけてネット上にそういった趣旨の話を聞いたと書き込んだのを、紅玉高原情報処理局の新米局員キアラ・マレスカが発見し、真に受けて発表してしまったのだという。この男性は自分のしたことが大事になってしまったことに戸惑って自首し、当然その場で逮捕された。

この6日間の厳しい警備体制によって不利益を被ったと、夢幻界各地の企業が紅玉高原に苦情の声を上げた。損害賠償を払わせようと紅玉高原王宮を夢幻裁判所に訴えようとした企業も多々あったぐらいだ。ただ、テレビ・新聞・ネット・手紙など様々な手段でフィリッポが皆に謝ったこと、青玉島が“もしも本当にそのような動きがあって、対応が遅れたために紅玉高原がテロ組織に乗っ取られてしまったら、夢幻界全体が危機的状況になっていただろう”と言って弁護したことなどのおかげで、どうにか裁判沙汰にはならず済みそうである。

『ピュアちゃん、ほんつとにありがとうございました』

青玉島が紅玉高原を弁護する声明を出したその日の晩、フィリッポがそうお礼の電話を掛けてきた。それに対し、ピュアはけんけんした声で

「別にあんたのためじゃないわよ。あんたが夢幻界中の企業に損害賠償吹っかけられて破産しちゃったら、青玉島だって困るんだから...だからそう言っただけなんだからね!!あ、でも貸しとしてはきちんとカウントしておくわ。今、貸し1よ、覚えておきなさい!!」

とまくし立てる。

電話が切れると、側にいたルチアーノも

「ピュアちゃん、本当にどうもありがと...っていうか、ごめんね...」

と、感謝と謝罪の言葉を言った。実は彼も、ずっとこれを言う機会を待っていたのだ。

普段のピュアの言動から考えれば、また“あんたのためじゃないけど、でも感謝しなさいよ”などという趣旨のことをまくし立てそうなものである。ところがピュアは何故かふいとそっぽを向いてしまうと、小さな声で

「あ...あんたはずっとこっちにいたんだから、しょうがないでしょ、バカ...」
とだけ言った。

不思議なことに、この事件の後も紅玉高原における王宮の支持率が下がることはなかった。ディマイアが行った21日付の調査では相変わらず90%弱を維持している。ディマイアの調査だから、偽装などもないはずだ。

とはいえ夢幻界中に謝る羽目になったフィリッポは大変だったが、見えないところでもっと酷い目に遭っている人がいた。これを誤って発表してしまった25才の新米局員、キアラ・マレスカである。クビにはならなかったものの、給料減額、嚴重注意処分だ。いや、これだけならむしろ“それで済んでよかったじゃないか”という話になるのだが、問題なのはなまじ甘い処分であったた

めに、同僚からの酷い苛めが始まってしまったということである。しかし、これについては本人も含め誰も何も言わないため、結局どうすることもできずにいるという状態だ。

2009年7月29日

この日、グロッシュラー・パマグラネットに死刑判決が言い渡された。死刑執行は8月10日。他の幹部たちは皆終身刑だ。なお、デマントイドは懲役15年、ガーネットは情報提供したからか懲役10年である。

2009年8月3日

グロッシュラーたちの判決が下された5日後、今度はアルバートの最終判決が下された。第1審、第2審では懲役7年の実刑判決だったのだが、さらに上告したところ、逆に懲役10年と刑が重くなってしまったという。もちろん、科学部の職は解雇されている。

2009年8月12日

別に珍しいことではないが、この日の夕方、女王の間ではルビーとディックが口ゲンカを繰り広げていた。今日のテーマは“犬派か猫派か”。犬の方がいいというディックに、猫の方が可愛いというルビーが反論しているのだ。全面的にどうでもいい話である。

「ねえねえじゃっくん今日はどっちが勝つと思う？」

そんな口ゲンカをBGMに、サファイアが紅茶を飲みながら話しかけた。ジャックの監督のもと、砂糖の量は一般的なティースプーン2杯に制限されている。

「決着するはずがないでしょう」

サファイアの問いをジャックは一言で片付けてしまった。それでもサファイアは、「そうかなあ...ちなみにじゃっくんはどっち派？」

などと聞いてみる。

...また“どっちでもいい”とか言われそうだなあ...

サファイアはそう考えていたのだが、予想に反してジャックは「わたしは猫の方が好きですが」

と即答した。

「あ、そうなの?!」

サファイアは答えてくれたことに驚いて聞き返してから、「でも、何か分かる気がする.....白猫とか飼ってそう」という勝手な予測を述べる。するとそこに、ルチアーノが笑いながら

「白猫？黒猫の間違いではなく？」

と口を挟んできた。しかし、サファイアは相手がルチアーノであっても躊躇うことなく、はっきりとした口調で

「いえいえいえ...白猫です」

と断言する。

「だって、ジャック自身が黒猫なんですから」

サファイアがそう言うと、ケンカ中だったはずのルビーが

「あああっ!!そう言えばそうだったなあ!!」

と言いながら手を叩いて話に加わってきた。ルビーとディックのケンカは、だいたいルビーがけしかけることで始まり、彼女が一方的にやめることで終わるのだ。周りはこれを、2人なりの一種のコミュニケーションか、もしくは遊びや暇潰しの類なのだと認識している。

「ジャックが黒猫でディックが赤茶猫だったもんなあ」

ルビーが笑いながら言うと、ピュアまで

「そうなの？」

と口を挟んできた。興味津々な眼で、ディックとジャックを交互に見ている。

「はい」

サファイアは大きく頷くと、ルビーに

「あれ可愛かったよねえ♪」

と言った。するとルビーも

「うん、あの時だけは可愛かった」

と同意する。“だけ”の部分が妙に強調されているのは気のせいだ。

「“あの時”っておまえ...」

そんな姉妹に対し、ディックが呆れているような声を出した。“あの時”とは、クリアシャイン四作戦で姉妹が待ち合わせ場所にいた時である。

「こっちはいつ何が起こるかとは心ば...」

「そうだ!!あの猫ちゃんたち、また見たいと思ってたんだよ。なあ姉ちゃん？」

助ける側の思いを知らないルビーが、無邪気に笑いながらディックの言葉を遮った。

「あ、それなら写真撮りた...」

「ちょ...誰がやるって言ったんだよ?!だめだめだめ!!」

“もちろんやってくれるよな?”という顔をしているルビーと、もうすでにカメラを構えているサファイアを見たディックは、手を顔の前でバタバタ振りながら首も横にブンブン振り、姉妹の要求を全力で拒否した。ディックは猫嫌いらしいから、必要に迫られなければやりたくないのだろう。

「はあああ?!やってくんないの？」

「くんないの？」

膨れっ面で抗議するルビーと、その口真似をして便乗するサファイア。

「...だあああもう、おまえも何とか...って、ちょ...」

助けを求めようと振り返ると、ジャックはいつの間にか自分の作業に戻っている。

「...久々に首ガクガクしてもいいか？」

それを見たディックが、小さく笑いながらそう申し出た。するとジャックは、作業を止めることなく

「やめろ」

と言って一蹴する。

「あっ!!すごいこと思いついちゃった!!」

吸血鬼たちの会話に構うことなく突然声を挙げたサファイアは、目一杯背伸びしてルビーに耳打ちした。

「...ああああ確かに!!」

サファイアの言葉を聞くと、ルビーもぱあっと顔を輝かせる。

「どうしたの？」

そんな姉妹に対してルチアーノが首を傾げた。実は今までにも口を挟みたいところはたくさんあったのだが、なかなかそのタイミングを掴めなかったのだ。

「私たちのぬいぐるみが、2人にそっくりなんです」

サファイアはそう説明しつつ、ポケットからぬいぐるみキーホルダーを取り出した。確かにジャックと同じく黒猫だ。それどころか、鮮やかな青色をした眼も、いかにも真面目そうな顔も、お行儀よく座っている姿も、何もかもジャックに似ている。青いリボンも、側近の制服を考えれば同じだ。 ※170

「で、うちのがこれ」

ルビーが取り出したぬいぐるみキーホルダーはオレンジのリボンをしていた。やはり、赤毛、赤褐色の眼、どこことなく気さくそうな姿勢など、ディックとよく似ている。

「へええ...こんな可愛いのに変身するの？本当に？それなら確かに見てみたいなあ」

ルチアーノは2つのぬいぐるみと2人の吸血鬼たちを見比べながら笑った。

「っていうか、いつの間にそんなお揃いグッズ買ったのよ...」

ピュアもそれらを見比べているが、こちらはすっかり呆れ果てている。

「それがさ...」

「いや、ってか...」

説明しようとしたルビーの言葉と、抗議しようとしたディックの言葉の両方を、ピュアの電話の音が遮った。知らない番号からだ。

「はい、もしもし？」

ピュアが慎重に応じると、相手は唐突に

『...もう1人は、紅玉高原パシュカーレ山山頂にいます』

と言った。何だか苦しげな女性の声だ。

「...はい？」

誰が話しているのかも何の話なのかも分からないピュアは、とりあえずそう聞き返してみた。怪訝そうな顔をするピュアを、周りは慎重に見守っている。 ※171 しかしそれでも女性は

『...さ...3人のうち残り1人は、紅玉高原パシュカーレ山の頂上です...』

とほぼ同じことを繰り返すだけだ。

「ちょ...あんた誰？何の話？」

ピュアが訝しんで聞くと、彼女は

『私は...』

と言いかけた。しかし、肝心なところで声は耳を劈くような悲鳴に変わり、そのまま切れてしまう。

「...何なのよ...」

仕方なく、ピュアも首を傾げながら通話を終わらせた。するとすぐにペーターが

「何だったんだい？」

と尋ねる。

「うん...変な電話だったわ」

ピュアは顔をしかめてそう言った後、電話の内容を皆に話した。

※170...青玉島の側近の制服は、襟元に水色のスカーフを菱形のブローチで留め、リボンのような形にするのだ。

※171...誰からの電話か分からないので、スピーカーホンにしていないのだ。

いくら話し合ってみても、この電話の意味は分からなかった。“3人”というのが“ジュラダンとジェーンと誰か”のことではないかという声もあったが、それはあまりにも都合が良すぎる気もする。そんなこんなで、この電話は“ただのよく分からない電話”として片付けられようとしていたのだが、その翌日、思わぬことが発生した。

2009年8月13日02:36

女王の間に寝静まった後、突然ピュアの電話が鳴った。

「...んもう...こんな真夜中に誰よう...」

そうぼやきながら、ピュアが電話に応じる。

「...はい？」

『ピュアちゃん？』

スピーカーから聞こえたのはフィリッポの声だった。明らかに呼吸が乱れている。

『...王宮が...乗っ取られた...』

フィリッポが掠れて消えてしまいそうな声で言った。

「何ですって?!」

ピュアは信じられない言葉に飛び起きる。

「今、何て...」

『うちの王宮が乗っ取られちゃった...すごい数の人で...軍も使ったんだけど.....』

フィリッポの声は掠れているだけではなく、明らかに虚だった。絶望を感じさせる声、未だに乱れている息...そういったものが電話越しでもはっきりと伝わってくる。

『今、俺たちは近くの洞窟に隠れてる...ラウラもいっしょだ。途中でトトー ※172 は死んじゃったけど...そっちも気を付けた方が...』

「馬鹿ねっ!!青玉島に来なさいよ、今すぐ迎えに行かせるから!!」

ピュアは電話を切るなり、いつものメンバーの部屋に電話をかけて叩き起こした。

「どうなされたんですか?!」

真っ先に女王の間に来たのはサファイアとジャック。この2人はまだ寝る気もなかったらしく、普段通りの服装だ。そのあとは、ディック、ルビー、ペーター、ルチアーノの順で集まる。

「紅玉高原の王宮が乗っ取られたんですって」

ピュアが重い口調で言うと、眠そうな顔をしていたルビーは急に目が覚めた様子で

「...はい？」

と聞き返した。

「だからあ、紅玉高原の王宮が何者かに乗っ取られちゃったのよ」

ピュアがイライラしながら繰り返す。

「...え...ええ?!そんな...」

そう呟くルチアーノは蒼白な顔をしていた。

「に...兄さんは？」

ルチアーノが震える声で尋ねると、ピュアは低い声で

「ご夫妻で避難してる」

と答える。

「もちろんすぐに青玉島で保護するわ。でも、迎えをやるにもそんな何人もは出せない...目立つとまずいでしょ。ってことはもう、あとの話は分かるわね？」

ピュアはそう言いながらコランダムの面々を1人ずつ見ていった。すると、目の合った人はそれぞれはっきりと頷いて答える。それを確認すると、ピュアは

「もう飛行機の準備が出来ている頃よ。行きなさい」

と命令を下した。

青玉島の小型飛行機は滑走路無しで飛び立ち、音速飛行をし、静かに着陸することが出来る。燃料は魔力なので、給油も必要ない。4人を乗せると、飛行機はすぐに紅玉高原へ飛んだ。

『あーもしもし？』

ルチアーノからの電話だ。

『兄さんのいる洞窟なんだけど...今どこ？って聞いてみたら“昔、よく一緒に遊んだところ”って言うんだよ。ルビー分かるよなあ？』

そう聞かれたルビーは、間髪入れずに

「ああ...あそこ？うん、分かる分かる、安心しな」

と答えた。すると、電話はすぐに切れてしまう。

「昔よく一緒に遊んだところ？」

サファイアが首を傾げながら繰り返した。

「そ。フィリップ様とルチアーノ様の家庭教師がうるさくて、よくエスケープしてたんだけどさ、その時に、必ずうちもついてってたんだよ」

ルビーは頷きながらそう苦笑する。

ルビーの案内にしたがって、飛行機はその洞窟の近くの着陸できそうな場所に着陸した。厚い雲が夜空の星を隠している。

「めっちゃめっちゃ近いからすぐだよ...」

確かに行きは近かった。4人の走力なら3分だ。

着いてみると、“洞窟”というより、もっとずっと小さな洞穴だった。それでも、幼いころのフィラーテ兄弟とルビーにとってはわくわくする洞窟だったのかもしれない。

「すぐって...本当に早かったですね」

入口で銃を持って見張りをしていた兵士が驚いて言った。ルビーやルチアーノよりさらにひどい鈍りだが、それでも青玉島の2人を気遣ってか、一応英語で話してくれている。 ※173

「当たり前じゃん!!」

そんなことを言いながらも、4人はすぐに奥へ進んだ。女王の間と同じくらいの空間に、フィリップとその王妃と思われるオレンジ色の髪的女性、あと兵士と思われる青年が2人、計4人が座っていた。王妃はルビーと同年くらいか、2・3才上かというところだろう。皆やっとの思いで逃

げてきたらしく、擦り傷・切り傷・小さな火傷などを全身に負っている。

「ごめんなあ、こんな夜中に...」

「いいから行きますよ」

兵士2人は紅玉高原に残ると言い張った。王と王妃をコランダム4人に引き渡したら、あとは軍の皆のところへ戻るといなのだ。

フィリッポたちと合流した帰り道は30分くらいかかった。まあ、歩いていくのだから当たり前だ。振り返ると王宮が見えたが、遠目から見た姿はまったく普段通りである。

暗い岩道だが、フィリッポも王妃ラウラもとんとん歩いた。幸いにして、誰にも遭遇することなく、飛行機が待っているところにたどり着く。6人が乗り込むと、飛行機はすぐに飛び立った。

「もしもしルチアーノ？あ、俺...フィリッポだよ」

フィリッポ自らが弟に無事を知らせると、ルチアーノは聞くだけで彼がどれほど心配していたのか分かるような声で

『兄さん?!無事なの??』

と確認してくる。

「うん、みんなすっごい早く来てくれたし、ほんとに助かった」

フィリッポは笑いながら言った。

『そう？よかったあ...じゃあ、無事を祈ってるよ』

あまり長電話するのはよくないということで、電話はまたすぐに切れてしまう。

ジャックは2人分の薬を量り取ると、フィリッポとラウラに手渡した。青玉島に着くのを待たず、飛行機に乗っているうちに治療してしまうというわけだ。

「ありがとうございます」

2人が飲むと、飲んだそばから傷が快復しはじめる。

「まもなく着陸態勢に入りますので、ご注意くださいませ」

運転手が前を見ながら言った。もう目の前には、青玉島の王宮が見えている。

※172...フィリッポの愛犬。

※173...まあ、サファイア以外は紅玉伊語で話されても分かるのだが、そういうことは言わないお約束だ。

王宮では、もうフィリップとラウラの部屋が用意されていた。女王の間と同じフロアにある来客用の部屋だが、こちらには側近の部屋はない。

「ちょっと物理的な部屋数の都合で、これしか用意できなかったのよ...」

それをピュアが弁解すると、フィリップは

「何言ってるんだよ、こっちがいきなり押しかけたんだから...」

と言いながら手をパタパタ振る。

フィリップもラウラも疲れていたはずだが、ルチアーノと無事を喜ぶのもそこそこに、女王の間で会議に入った。

「0:30ごろだったかなあ、急にサイレンが鳴って、さっきの兵隊さん2人が“起きてくださいっ!!”って駆け込んできたんだよ。何だろうって思ってたら、武器持った人がたくさん攻め込んできて...王宮にいた兵士でもって戦ったんだけど、またほら、奴らぽんぽん湧いてくるじゃん。埒明かないから...思い切って、王宮を明け渡しちゃったんだよ。箱取られても、中身の大臣やら兵士やら...そういう人材が生きてることの方が大事だろ？そっちが残ってればどうにか立ち直れるかもしれないし...」

フィリップが説明した。

「かなり沢山メールが来てる.....ああ、みんな上手く避難したみたい。とりあえず無事らしいわ」

ラウラは自分のパソコンを見ながらそう呟く。彼女の言葉はフィラレーテ兄弟やルビーと違って、まったく訛りのないアメリカ英語だ。

「それなら一安心ね」

ピュアは早口にコメントした。その声は言葉と裏腹にかなり深刻だ。

「どうするの？」

ピュアが尋ねると、フィリップは

「王宮は、こっちで準備整えて奪還するつもりだよ」

と、いつもよりもきっぱりとした声で言う。

「ピュアちゃん、王宮奪還に関しては援軍してくれなくて大丈夫だよ。ここは紅玉高原の威信をかけてちゃんと自力でやらないと」

「ただ、問題は...」

ラウラが何か考えながらゆっくり口を開くと、ピュアが

「その裏にいる人物よね」

とその続きの言葉を引き取った。

「この前誤報事件があったけど...誤報じゃなかったってわけ？」

ピュアにやや鋭い声で聞かれたフィリップは、困り果てたように首を傾げる。

「でもなあ...あれは犯人が捕まってるし...本人が勝手に自首して来たんだからさあ...やってないことを自首してきたりしないだろ...」

「でも、奴らが絡んでるのは間違いないでしょ？」

ピュアが腕組みしながら言った。

「間違いない...間違いない、かなあ...」

誤報事件のことがあったからか、フィリップは判断に慎重だ。

「だって、そんな大規模なこと付け焼刃の組織が出来っこないんだから...思い付きの悪戯でできることじゃないでしょ？」

確かにピュアの言う通りではある。

「でも、他にもそういう組織があるかもしれないじゃん」

フィリップが言うと、ラウラが横から

「そんな事態、考えたくもないわ」

と口を挟んだ。確かに、他にも同じ規模のテロ組織がいるだなんて、考えただけで背筋が寒くなる。

「いずれにしてもそれなりの組織が裏にいるんだとしたら、ただ王宮を奪還しただけではダメなのよね...奴らの大ボスを退治しないと」

ピュアがそう言ったのを最後に沈黙が流れる。それ以上のことは、ここでああだこうだと言っ
ていても分かることではない。

「パシュカーレ山、行ってみませんか？」

そんな中で、ルチアーノがぽつりと呟くように発言した。当然、全員の視線がルチアーノに集中する。

「パシュカーレ山？何かあるの？」

ラウラが首を傾げると、ピュアが

「実はね...」

と昨日の不審な電話について話した。話し終わってから、今度はルチアーノが言葉を付け加える。

「兄さんたちに言おうかとも思ったんだけど、何だかよく分からなかったから、“単なる悪戯かも”
って話になりかけてたんだ。けど...ちょうど同じ紅玉高原だし、あの電話がテロ組織の3人目
のリーダーを示してるって可能性もあるだろ？あれが唯一の手がかりなんだったら...」

...やってみるしかない。

「こんな事が起きてしまった以上、今が決戦の時よね...ここでしっかり動かないと、紅玉高原や
青玉島の国民だって今度こそ大ブーイングだろうし、向こうは調子に乗るでしょうから...」

ピュアがルチアーノの意見に同意するような発言をする。

「ただ、パシュカーレ山へ軍隊を出すわけにはいかないわね。確実な話じゃないし...大々的に軍
なんか出して、また“間違いでした”なんてなったらもう終わりよ」

ピュアはそう言いながらちらっとフィリップを見た。するとラウラは、

「つまり、また失敗したって国民に思われるのが怖いから、成功するまで秘密にしておきたいっ
てわけね」

とピュアの言葉を要約する。

「そういうこと」

ピュアは少し口角を上げながらラウラをじっと見つめて肯定した。それから、「さらに、今回は今までと違って不意打ちできるかもしれないんだから、それもきっちり活かしたい」

と追加する。

「...なるほど」

ラウラがそう相槌を打つと、ピュアはふと後ろを振り返り、「ただ...そういう話になると、動くのはまたこの4人になるけどね」と呟いた。すると、今まで黙って話を聞いていたコランダムは、互いに一瞬顔を見合わせたあと「ご命令とあらばどこへでも行きますが」と答える。

それを聞くと、ピュアは少し安心したように笑った。

フィリッポとラウラは散り散りになって隠れている臣下や軍と連絡をとりながら、王宮奪還に向けて体制を整えていった。

「あんたらは...今さっき帰って来たばっかだけど、1晩休む？」

ルチアーノが聞くと、ルビーは首を振って

「全然平気だし」

と笑う。

「むしろ、向こうが手薄になっている可能性があるのは今だけでしょう」

冷静な声で指摘するのはジャックだ。

「あんたたちタフね...」

ピュアはそう言うと、ふっと口角を持ち上げた。しかし、すぐにまた真顔に戻る。

「じゃあ、すぐに作戦考えて...そしたら行ってもらいましょう」

ピュアの言葉に、皆ははっきりと頷いた。

出発前、ジャックはピュアに昨日奇妙な電話を掛けてきた人の声を聞かせてもらえないかと頼んだ。向こうでその人と会った場合に分かるかもしれないというのだ。その人が味方か敵かはっきりしないにせよ、とりあえず手がかりにはなる。ピュアはそれに応じ、電話に録音されていた記録を再生した。

パシュカーレ山とは、4239mの標高を誇る夢幻界の最高峰だ。 ※174 高いだけでなくかなり険しい山なのだが、そのうえ強い魔力を放出している魔法山でもある。しかし、どんなに険しかろうと何だろうとコランダム4人には関係ない。ただ飛んで行けばいいのだ。ただ、飛んで行くと言っても先程のように飛行機で直接行くことは出来ない。パシュカーレ山は非常に強力な魔法山だから、その魔力のせいで飛行機は墜落してしまうのである。

ルビーの飛行ツール“炎の戦車”は時速150kmしか出ないはずだが、サファイアが無理矢理改造して時速200kmにまで上げてしまっていた。自転車型なのでこの速度は相当危険だが、そこはルビーの運動能力でどうにかするという方針だ。 ※175 マッハ2の軍用機で近づけるところまで近づき、そこから4人それぞれの手段で飛び続けること1時間30分。森を越え、標高が高くなるに連れて植物が減っていき、やがて岩場と崖のようになっていく。

山頂に行ってみても、不自然な物は何も見当たらなかった。スキャナー魔法を試してみても、何も出てこない。しかし、初めからそれを想定していたサファイアたちは、動じることなく魔力検知器を取り出した。0.1 μ Maから100kMaまで計ることが出来るという強者だ。サファイアは1台しか持っていなかったのだが、もともと微細魔法学者だったラウラが3台貸してくれたのである。

※176 この山の平均魔力は3kMa。しかし、地下に魔法施設があればそこだけ魔力が違って来る。入口はその施設とダイレクトに繋がっているのだから、その差異は顕著だ。それを利用して、地道に入口を探るのである。

1時間後、4人はようやく入口を見つけた。と言っても、本当の入口ではなく通気孔だ。しかし、それでも構わない——いや、かえって見つかりにくいかもしれない。通気孔を通るにあたって、猫などに変身できないクリアシャイン姉妹は変身MWを使ってリスに変身した。クリアシャイン姉妹の変身は30分で切れる。これが長いか短いかはやってみないと分からない。

4人は——見た目には4“匹”だが——通気孔をひたすら進んだ。猫なら余裕で通れる広さだ。もちろんリスならもっと余裕である。広さは十分なのだが、通気孔にしてはやけに曲がり道が多かった。不審に思っても、ここを進むしかないのでひたすら前進する。

砂っぽい下り道を進むこと10分、4人はT路地に突き当たった。右も左も、どこに繋がっているのか分からない。

ここからどうするのか、相談はかなり面倒だった。なんせ言葉を話せないのだ。仕方がないので、道の砂っぽさを利用して筆談する。

“どっち行く？”

最初にそう書いたのはルビーだった。なんだか子供っぽい、丸い字だ。

“魔力の強い方じゃない？”

サファイアは上手いには上手いがあまり書き慣れていなさそうな文字でそれなりに理



に適ったことを書くが、ジャックの
“どうやって検知器を取り出すのです？”
という、綺麗に流れるような字で書かれた指
摘によって一蹴されてしまう。

“両方ってダメ？”

少し考えてから、ディックが雑な字でそう
書き付けた。

“分かれるつもり？”

ルビーが聞くと、ディックははっきりと頷
いてみせてから

“どの道、4人でうろうろしてたら見つかりま
うだろうし...2手に別れた方が早く探せる気が
しねえ？”

と書き足す。

確かに4人で歩き回るより2人ずつの方が見
つかりにくいだろう。2手に分かれれば効率
よく探せるかもしれない。しかしその代わり、
敵に遭遇したときも3人目の黒幕を見つけた
ときも2人だ。当然2人では4人の場合より
戦力が落ちてしまう—そういった点をサ
ファイアが指摘した。しかし、今度はルビー

が“その代わり、万が一めちゃめちゃ大量の
敵に囲まれちゃったり、何かトラップに嵌ま
ったりして動けなくなっちゃっても、もう1
方が残るよな”とメリットを述べる。

結局サファイアが折れて、2手に分かれるこ
とになった。青玉組は右へ、紅玉組は左へ、
それぞれ足早に進んでいく。この組分けにつ
いては、何の議論もなく自然に決まった。吸
血鬼組とクリアシャイン姉妹というように
分かれてもよかったはずなのだが、まるで
他の分かれ方 ※177 は存在しないとでもい
うかのように当たり前のごとく分かれた。

分かれてから15分ほどで、サファイアと
ジャックは通気孔—と思っていた通路を出た。
ただ、出口に扉が付いていたところからす
ると、どうやら通気孔ではなかったらしい。
しかも1度出してしまうとその通路がどこ
にあったのか分からなくなってしまう。それ
を考えると、もしかしたら隠し通路か何か
だったのかもしれない。

2人が出た廊下は何から何まで黒づくめ
だった。壁も床も天井も真っ黒なのだ。た
だ、壁の上の方に施された、薔薇の花と茨
・葉のレリーフだけが白く、非常に目を引
いている。明かりは小さなランプだけだ。
廊下に並ぶ扉も真っ黒で、薔薇の花の装
飾だけが白いという点も同じである。

辺りに人の気配はなかった。ただひたす
ら静寂に満たされている。

2人はそんな廊下をとりあえず歩きだ
した。サファイアの変身が解けるまで、あ
と5分くらいである。

フィリップは自国の情報処理局員を城
内に送り込んだ。内部の情報を待ちなが
ら、城から死角



になる崖の下に兵を集め、奪還の機会を探っている。

サファイアの変身が解けるのに合わせて、ジャックももとの姿に戻った。廊下は迷路のように入り組んでいるが、人もいなければルビーの言っていたような罠もない。ただひたすら静寂に包まれるばかりで、逆に不気味だ。

扉はどれも鍵がかかっていた。しかし、それをひとつひとつこじ開けてみる必要はない。魔力検知器を見ながら歩いて、特に強い魔力が検出された部屋、もしくは魔力の変動が大きい部屋をチェックすればよいのだ。しかし、今のところそのような部屋もない。

少し歩くと、2人は階段に行き当たった。

「...あ、階段だ」

サファイアが見れば分かることをぽつりと呟く。階段のデザインも廊下と同じだ。やはり黒ずくめで、白い手摺りは薔薇を象っている。

「この手摺りは何のために存在するのでしょうかね」

ジャックが低い声で指摘した。手摺りであるにもかかわらず、ご丁寧に茨の棘まで付いているのだ。これに掴まった日には、手に穴が開いてしまうだろう。

「っ...ちょ、じゃっくん、笑わせないでよ...」

サファイアは笑い声を上げないよう必死に我慢しながら抗議した。しかしジャックは笑わせるつもりはなかったらしく、冷やかな声で

「上りと下りがありますが？」

と尋ねる。

「...うーん...じゃあ、下ってみよっか」

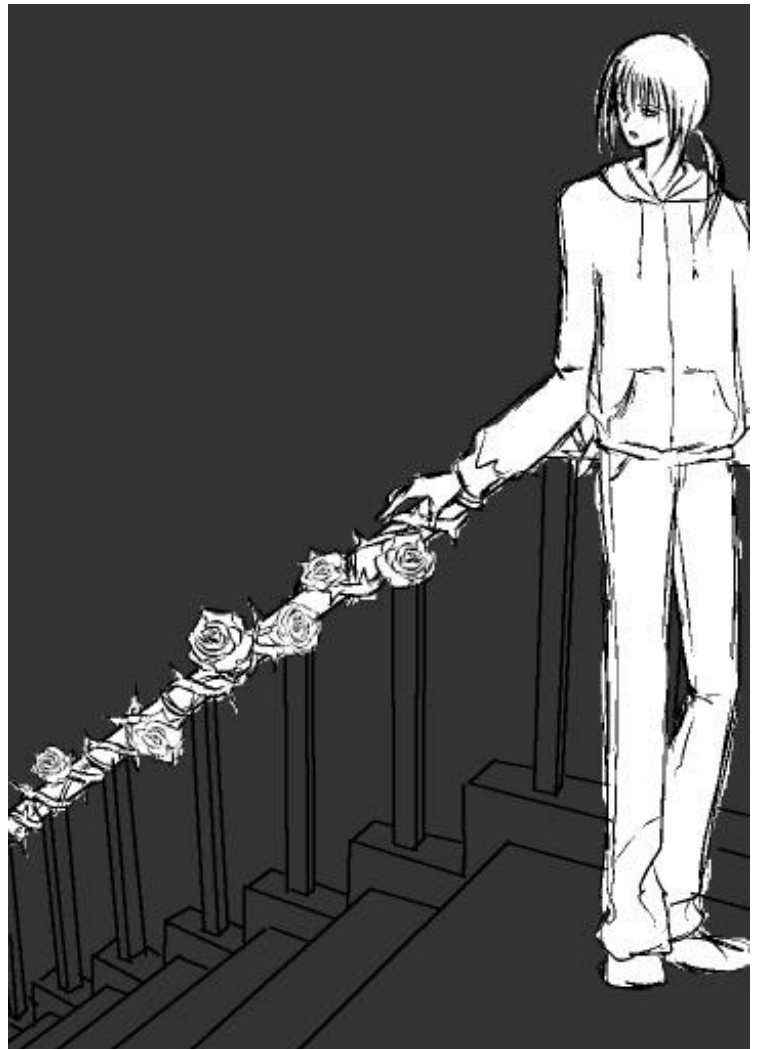
サファイアはそう言いながら階段を下り始めた。

「なんか、ラスボスって1番深いところで待ち構えてるイメージじゃない？」

サファイアが小さいながらも明るい声で言うが、ジャックは冷たい眼を向けるだけで無視する。サファイアが無駄に喋る理由は分かっていた。静か過ぎて不安なのだ。しかし、もちろんずっと喋っていては見つかってしまうので、あえて無視して強制終了させる。

階段を下ってもやはり同じような廊下が続いていた。魔力検知器も反応しないし、どの部屋も鍵がかかっている。

「...どうして何もないんだろう？」



サファイアが低い声で言いながら首を傾げた。

「そうですね」

ジャックは相槌を打ちながら周りに気を配っている。

「それに、これどこまで続くの？」

そんなことを問うても答えが分かるはずがない。

変化が起きたのはさらに下の階に行ってからだった。今まで通り廊下を進んでいると、ちょうど今2人が通り過ぎたばかりの扉が背後でいきなり開く。2人が反射的に振り向いて飛び退くと、左右1対の扉から黒い布のようなものが大量に飛び出して来るところだった。人が布を被ったように見えるが、足は無く宙に浮かんでいる。

黒い布のようなものが手と思しき部分に握った大鎌を思いっきり振りかぶった。ジャックは振り下ろされる大鎌をロッドで薙ぎ払うと、その勢いでロッドを振ってそこにいた黒い布たちを吹き飛ばす。その横で次の鎌をひょいとかわしたサファイアは、魔法銃で奴らの頭部と思しき部分を撃った。すると、布はまるで中に何も入っていなかったかのようにくしゃっと落ちてしまう。

ひとつひとつは弱いのだが、何しろ数が尋常ではない。吹き飛ばしても、銃で撃っても、途切れることなく飛び出してくる。2人が撃退するより速く出てくるものだから、どんどん数が増えていく一方だ。そのうち2人の頭上を越えて2人の背後に回ろうとする――つまり2人の進行方向を塞ごうとする――ものも現れる。

「...サファイア」

頭上を越えようとするものを光の刃で切り裂きながらジャックが話し掛けた。

「あなたは先に行ってください」

「ジャックは？」

魔法銃で機関銃掃射していたサファイアが鋭く聞き返す。

「ここでしばらく食い止めて時間を稼いだあと、追いつきますから...あなたは今まで通り検知器で調べながら進んでいてください」

ジャックの話し方は非常に落ち着いていた。とても戦いながら話しているとは思えない。

「そんな...」

サファイアは機関銃掃射を続けながら、左手で横をすり抜けようとするものを叩き潰すが、それでも2・3個が2人を越えて背後に回ってしまう。

「このまま囲まれてしまったら動けなくなりますよ。今のうちに行ってください」

ジャックがその2・3個を倒して言った。

「でも...」

「わたしは大丈夫ですから早く!!」

躊躇っていたサファイアは、ジャックのいつになく強い、半ば叫ぶような言い方に押されて戦闘に背を向けた。魔力検知器を見ながら、検知器の反応が追いつく範囲で最大限速く進んでいく。

今まで気づいていなかったが、サファイアもジャックも切り傷だらけになっていた。敵の数が

増えていくにつれて避けきれなくなるというだけでなく、上の方で倒せば振り上げられた鎌が降って来るし、足元にはだんだん鎌が溜まっていくし...1体1体が弱くても、数に押されてしまうのだ。

...ジャック、平気かなあ...？

もちろんサファイアだって、ジャックが強いことはよく知っていた。しかし、だからといって安心できるかというと、そうではない。

...いくらジャックが強いつて言ったって...敵があんなにたくさんいたら...

サファイアは大切な人を置き去りにしている罪悪感に苛まれ、今からでも引き返したくなる気持ちをどうにか抑えて、無理矢理検知器を見つめながら足早に進んで行った。

※174...ちなみにエベレストは標高8848m。青玉島に限らず、夢幻界全体を見てもあまり高い山はないのである。

※175...時速150kmの段階から危険だと思うが。

※176...念のために書いておくが、微細魔法学の論文を書いたラウラと、今紅玉高原の王妃であるラウラは同一人物である。

※177...本当は、もう1つ“ディック・サファイア”と“ジャック・ルビー”という分かれ方もあるはずだが、これはさすがにあり得ないと思われる。ディックとサファイアはそれなりに仲良いからまだどうにかなるかもしれないが、ジャックとルビーの仲はあまり良くないのだ。ジャックはルビーのことをあくまでも“サファイアの双子の妹”ないしは“ディックが(多分)好きな人”としか思っていないし、ルビーに至ってはジャックのことを気に食わない奴だと思っている。

サファイアの姿が見えなくなってから20分以上経った。未だに黒い布は次々と部屋から出て来てはジャックに襲い掛かる。

...もういいだろうか？

1人で廊下の幅を守り切ることは思っていた以上に難しかった。いつのまにか、自分の背後に数体いるという状態が常になっている。

...もうそろそろサファイアを追った方がいいだろう。

ジャックはそう見切りを付けると、まず背後の――つまり進行方向にいる奴らを光の刃で切り裂き、続いて部屋から出てくる奴らをロッドで吹き飛ばすと同時に、全力で駆け出した。 ※178
奴らはすぐに追ってきたが、ジャックに追いつけるほど速くはない。

階段まで来て初めて、ジャックは後ろを振り返ってみた。黒い布は追ってきていない。どうやら上手く巻けたようである。

ジャックは階段を下りながら魔力検知器を取り出して起動すると、その画面を見ながら速足で進んだ。もちろんこの地下施設の主も探しているわけだが、まずはサファイアと合流したい。

しかし、迷路のようにになっている廊下でサファイアと合流するのは予想外に困難だった。歩きだして30分後、サファイアを見つけるより先に魔力検知器が反応する。それほど大きな反応ではない。大きくはないが、魔力の強さがゆらゆらと不自然に変動している。

反応していたのはジャックの左手にある扉だった。仰々しい南京錠がついているが、それぐらいならすぐに壊せる。ジャックは南京錠のフープ状の部分の部分を両手で握り、ぐっと力を加えた。幸い展性・延性に乏しい金属だったらしく、ポキッと呆気なく折れる。だが扉はまだ開かない。もともと備え付けられていた鍵も掛かっているのだ。数字4桁の電子ロックである。

とはいえ、この手の鍵ならパソコンを使えば一瞬だ。サファイアがいれば早かっただろうにと思いつつも、番号入力する部分の蓋を外してケーブルの差し込み口を探す。少なくとも夢幻界で普及しているタイプなら、パソコンを通してナンバーの設定を行うため、パソコンと接続できるようになっているはずなのだ。やってみると案の定、上手く接続することができた。あとは専用のソフトが“0000”から“9999”までの10000通りを片っ端から試していつてくれる。

あっという間に鍵が開いた。ナンバーは“1124”だ。ジャックはパソコンをしまつて数字入力部分の蓋を戻すと、ロッドを握り直してドアノブを回す。

「!!」

中にいたのは行方不明になっていた青玉島の科学者たちだった。皆手錠をかけられ、猿ぐつわを噛まされている。数えてみると、27人全員がいた。 ※179

ジャックはとりあえずひとりひとり猿ぐつわと手錠を外してやった。すると、その途端に皆が一斉に喋り出す。

「よかったあ...助けに来てくださつたんですね」

「いつ殺されるかと思つてたんで...助かりました」

その言葉で改めて見てみると、確かに皆傷だらけだ。ほとんどは打ち傷だが、中には切り傷などもちらほら見られる。どうも暴力を振るわれていたらしい。

「どうしてここが分かったんですか？」

女性生物学者が首を傾げて聞いてきた。

「魔力検知器が、不自然な魔力の変動を捉えたんです」

ジャックが答えると、皆がメガネをかけた男性魔法学者を振り返って

「じゃあそれのおかげか」

「でかしたぞ!!」

「さすがスティラーさん!!」

などと称賛の言葉をかける。

照れたように笑うスティラー博士の足元の砂っぽい床には、踵か何かで描いたと思われる3重円があった。3重円は魔法陣の最も基本となる形であり、それだけで魔力を集めることなら出来る。

「こうやって魔力を揺らせば、どなたか気づいてくれるかと思って...」

そしてその思惑通り、ジャックに見つけてもらえたというわけだ。

「皆様を転送呪文で青玉島にお送りしようと思うのですが、その前に伺いたいことがあります。あなた方をここに監禁した者がどこにいるのかご存知ですか？」

ジャックは皆を見渡しながらかねた。しかし、皆は残念そうに首を振る。

「わたしたち、ここから1度も出たことがないんですよ」

「この部屋の外がどうなっているのかすら知らないんです」

皆が口々にそういう中、先程の生物学者が

「ただ、どんな人かは知ってますよ」

と言った。そして、ジャックに“どんな人です？”と聞かれるより早く、

「濃紺の髪の子と銀髪の子です」

と言う。“濃紺の髪の子”というのはジュラダンとジェーンのことだろう。

「少なくとも濃紺の髪の子の2人は吸血鬼ですね。かなり初期の形を保っています。銀髪の子は.....もしかしたら、白色吸血鬼かもしれません」

...白色吸血鬼、か.....空間を操る吸血鬼——女王の間での議論でも、その存在は予想されていた。

「分かりました。どうもありがとうございます。それでは青玉島王宮にお送りいたします」

ジャックはポケットから百露華を取り出した。すると、スティラーとは別の魔法学者が

「もしかして...どなたか転送魔法を開発なさったんですか？」

と聞いてくる。

「ええ、サファイアが」 ※180

ジャックが答えると、その学者は

「...ああ.....クリアシャインが...」

と硬い声で呟いた。彼だけではない、他の者も大多数が表情を強張らせている。

「...もうしばらくここにいます？」

その反応に対し、ジャックはそこで1度手を止めると、ひとりひとりに氷のような視線を浴びせながら非常に冷たい声で言った。

「あ、いや...それはやめときます...」

さっきの魔法学者が慌てて取り繕おうとする。

「.....」

まあジャックも本当に皆を放置しておくわけにはいかないので ※181、仕方なく皆を青玉島王宮へ転送した。

一方サファイアは、ジャックを置き去りにした階のさらに下の階を歩き回っていた。この階も何もないかと諦めかけたころ、ようやく検知器が異変を知らせる――数値がいきなり跳ね上がったのだ。

反応したのは右側の扉だった。やはり鍵が掛かっている。

鍵はアルファベット300字の電子ロックという恐ろしいものだった。パソコンを使えば“aaaa...aaaa”から“zzzz...zzzz”まで試すことも不可能ではないが、(26の300乗)通りを試しては、あまりにも時間がかかり過ぎる。 ※182

...どうしよう...さすがにまずいかなあ...?

サファイアは一瞬迷った。しかし、最終的には意を決して一か八かの賭けに出る。サファイアは扉の反対側の壁に寄り掛かると、魔法銃を扉に向けて構え、引き金を引いた。その途端、鼓膜が破れそうになるほどの爆発音が響いてドアが吹き飛ぶ。

サファイアが今撃ったのは大型爆弾だ。強烈な威力を持つが、今のように身体を固定して撃たないと自分が吹き飛ばされてしまう。他の弾を撃つときは反作用抑制魔法が働くから、例えジャンプしながら撃っても問題ないのだが、大型爆弾だけはこのMWが上手く効かないのだ。

サファイアは魔法銃を構え直すと、今扉を吹き飛ばしたばかりの入口から中に入った。入口は部屋の右端にあり、入ってすぐ左側は鉄格子になっている。

鉄格子の中には、濃紺の髪をアップに結った若い女性が座っていた。手錠・足枷をされ、封印鎖で縛られている。

「あ...あなたは...?」

女性は青い眼に、怯えているとも警戒しているともとれる色を浮かべながら聞いてきた。その眼の奥には、優しく抱きしめるような暖かい光が宿っている。そして、瞳孔が縦に長い楕円形をしていることからすると、おそらく吸血鬼だ。

「...失礼ですが、どちらさまでしょうか?」

答えないサファイアに、彼女はもう1度問い掛けてきた。

...あれ?この声って...

「あの...もしかして、昨日...」

サファイアが“昨日電話をくれた人ですか?”と言おうとすると、女性はその言葉の先を読み取って

「ええ。昨日青玉島の女王に電話したのは私です」と答える。

サファイアはどうしようかと迷った。

名乗っても大丈夫だろうか？この人は味方？敵？

素直に考えれば、彼女は情報提供してくれたのだから味方だ。しかし、もしかしたらその電話自体が敵の罠だったかもしれない。だとしたら、その電話の主である彼女も敵ということになる。

...どっちかなあ...？

しかし、最終的にサファイアはこの人を信じることにした。優しく抱きしめるような暖かい光を宿す、青い眼を信じることにしたのだ。

「私は青玉島の者 ※183 ですが...あなたは どうしてこんなところに？」

サファイアがそう尋ねると、女性は辛そうな様子で深く俯いた。

「...友人を壊してしまいました...」

...友人を壊してしまった？

サファイアはそのよく分からない言葉に思わず首を傾げる。サファイアはどういうことかと気になったが、それよりももっと差し迫ったことを聞くことにした。

「あなたをここに閉じ込めた人がどこにいるかご存知ですか？」

サファイアの質問に、鉄格子の中の女性は

「ええ...おそらく」

と頷く。

そう聞けば、もう考えたり迷ったりする余地は全くなかった。サファイアはその場にしゃがんで座っている彼女と目線を合わせると、

「どうか、その人のところまで案内していただけますか？鉄格子とかなら、すぐに壊せますから...」

とお願いする。

女性は数秒間サファイアの目を見つめていた。しかし、やがて申し訳なさそうに俯く。

「...ここから2つ下の階へ下りたら、常に角を右折するようにして進んでください。38個角を曲がったら、1番手前の右手の扉です。私が知る限りでは、そこが彼女の部屋です。銀髪の美しい女性ですから、すぐ分かると思います.....申し訳ありません、助けていただいても、私が行くわけにはいかないんです.....申し訳ありません」

深く頭を下げる彼女に、サファイアは

「いえいえ、申し訳ないだなんて、そんな!!」

と、手をパタパタさせながら慌てて言った。

「そんな丁寧に教えてくだされば、それで十分です」

そう言うなり、サファイアはパッと立ち上がる。

「どうもありがとうございました」

サファイアはペコッとお辞儀すると部屋の出口の方へ駆け出した。ところが、あと1歩で部屋から出るというところまで行くと、急にピタッと止まって振り返り、慌てて戻ってくる。

「すっごく大切なこと忘れてました!!もしよろしければ、青玉島へ行きませんか？」

サファイアはそう言いながら鉄格子の中の女性の姿を改めて見た。ずっと監禁されていた彼

女は、吸血鬼とは言えやはり衰弱しているように見える。

「...青玉島へ...？」

ゆっくり聞き返してくる彼女に、サファイアは深く頷いてから

「青玉島に行けば、治療も療養も最高水準のものを受けられますし...大丈夫でしたら、今すぐお送りしますよ」 ※184

と付け加える。

サファイアの申し出に、女性はしばらく目を瞬かせていた。しかし、やがて小さく苦笑すると

「じゃあ...お言葉に甘えさせていただきます」

と答える。それを聞くと、サファイアはほっとしたように笑って、鉄格子を掴みながら

「檻とか、壊しても平気ですか？」

と尋ねた。

「え、ええ...」

女性が戸惑いながら頷いた瞬間、サファイアは魔法銃のレーザーで鉄格子数本を切り取ってしまう。そうして作った穴から中に入ると、さらに手錠足枷を破壊し、切鎖短剣を用いて封印鎖を砕いてしまった。

「では、お送りしますね」

そう言いながら、サファイアは転送魔方陣MWの準備を始めた。

※178...吸血鬼は時速40kmほどの速度で長距離走ることができる。入り組んだ廊下を走るには速過ぎるから、“全力で”と言いつつも実際にはもう少し抑えていたのだろう。ちなみに、2009年時点の実界における100m走世界記録は、ウサイン・ボルトの9秒58。時速に直すと時速37.58kmである。

※179...誘拐事件の段階で、科学部員はサファイアとジャックを含めて30人だった。しかし、その後アルバートは有罪判決と同時に解雇されているので、現在は29人である。その29人のうち、サファイアとジャックは誘拐されていないので、今ここにいたのは27人である。

※180...ご存じのとおり、本当はジャックとサファイアの共同開発である。

※181...彼らを失うことは青玉島という国家の大きな損失になるのだ。

※182...ちなみに某質問投稿サイトで質問してみたところ、26の300乗を計算すると、420桁以上の数になるらしい。宇宙の歴史は100億年程だと言われているが、それを秒にする
と31536000000000000000秒。19桁でしかない。本文中では“不可能ではないが”と書いたが、こう考えてみるとむしろ、“不可能だ”と書くべきだったようだ。

※183...これで答えたことになるのだろうかという疑問は残るが、この女性が聞いたかったのもこういうことだったため、結果的にそれでいいのである。

※184...“いいから助けてやれよ”と思うかもしれないが、何の確認もとらずに迂闊なことをすると取り返しのつかないことになる可能性があるため、一応“大丈夫でしたら”と確認しているのだ。例えば、彼女の鉄格子を壊すと自動的に他の捕虜が殺害されるなど...そういう事態も十分想定できる。

その頃、ルビーは廊下を1人で歩いていた。つい先程、切り落とすと切り口から2本の首が生えてくるといふ首を9本持つうえに、胴体を刺しても平気で噛み付いてくるといふ恐ろしい生物と遭遇してしまったのだ。そんなものの相手をしては命がいくつあっても足りないので、仕方なくディックとルビーは正反対の方向に駆け出した。首が9本あろうが100本あろうが、胴体は1つしかない。2人が違う方向に駆け出せば、どちらかは確実に逃げる事ができる。怪物が優柔不断で立ち往生してくれれば、どちらも逃げ切れるかもしれない。そしてその結果、紅玉組も青玉組と同じようにはぐれてしまったというわけだ。自分は追われなかったから、怪物はディックの方へ行ったか優柔不断で立ち往生しているかのどちらかだが、ルビーはうじゃうじゃ生えている頭がケンカして立ち往生していると信じて疑わないことにしている。

...うわ、もう1番下の階じゃん...

階段を下りたルビーは、もうこれ以上下りる階段がないのを見て心の中で呟く。彼女もやはり傷だらけだ。

...あれ...ってかこの階、何...？

この階の廊下は今までの迷路のようなものではなく、1本道がまっすぐと伸びていた。ランプもないので、本当に真っ暗だ。

ルビーは懐中電灯を取り出した。黄色がかった白い光が広がる。しかし、何故かあまり先を見通すことはできない。しばらく進むと、廊下が三又に分かれていた。十字路ではなく、鳥の足跡のような形だ。

...この階、本当に何...？今までの階と違いすぎだろ...

どの道を進もうか迷った挙げ句、ルビーはポケットからペンを取り出した。それを床に垂直に置いて押さえていた手をぱっと離すと、ペンは小さな音を立てて左に倒れる。

...よしっ、左だ!!

ルビーはペンを拾ってから左の道歩き始めた。

...青玉島の人ってちょっとしたメモでも何でもパソコン使ってるけど、ペン持ってないという時に困らないのかなあ...？

そんなことを考えながら先に進むと、10mくらいで扉が立ち塞がった。鍵が掛かっているらしく、開けようとしても開かない。魔力検知器の画面には“ERROR”と書かれている。

...え、ちょ...何、ここ...めっちゃめっちゃ怖いんだけど...

ルビーはとりあえず三又に分かれているところまで引き返した。今の扉は何だか不気味なので後回しだ。

...次はどっちに行こう...？

再びペンを倒してみると、またもや左に倒れてしまった。やり直した結果、今度は右に倒れる。

...よっしゃ、行くぞ!!

せっかくそう張り切って歩き出したのに、またわずか10mほどで扉に突き当たってしまった。見た目には先程の扉と何ら変わらない。

ルビーは慎重にドアノブを回してみた。ガチャッという音とともに、扉が開く。

.....ちょ、ま.....ここ、どこだよ...

扉の向こうには色とりどりのお花畑が果てしなく広がっていた。綺麗な青空には白い雲が浮かび、暖かな日の光が降り注いでいる。

...ちょ、ここ地下なんだけど...

あまりにも不審なので、ルビーはそのまま扉を閉めると、また三叉路のところまで引き返してきた。

...んもう...なんか怖いんだけど...

そう思いながらも、仕方がないので最後に残った真ん中の道を歩き出す。だが、少し進むとまた扉が現れた。しかし、今度の扉はその隙間からオレンジ色っぽい光が漏れ出し、ゆらゆら揺らめいている。

...何だ、これ...

そう思いつつ、ルビーは引き寄せられるように近づいて行った。幻想的な光に魅せられながら、そっとドアノブに手をかけ、ゆっくりと回す。

その瞬間、オレンジ色っぽい光がルビーを包み込んだ。

...ったく...あいつどこ行っちゃったんだよ...

ディックはそう思いながら半ば小走りで歩いていた。左肩には羽織っていたボタンシャツを破いたと思われる布が巻かれているが、すでに真っ赤に染まっている。しかし、これ以外はあまり怪我していないようだ。

...だいたい、何でこんなに広いんだ？ほとんどのドアは鍵掛かっているけど...そんなにでかい組織なのか？でも、それにしても人いねえし.....化け物はいたけどさ...

ディックはそう思いながら、ちらっと左肩に目をやる。この怪我は大蛇ヒドラのような怪物にやられたものだ。奴を巻くためにルビーと別々の方向へ逃げた結果、すっかりはぐれてしまい、今捜しているというわけである。少なくとも、化け物はディックを追ってはこなかった。ということは、ルビーの方へ行ったか、立ち往生しているか...

...大丈夫、なんかあいつ卵からウズラの卵が生えたような形してたし、まさか飛ぶようにも見えなかったし...ぜってえルビーの方が速いだろう、うん...

ディックは無理矢理そう言い聞かせて先に進む。たとえ何をどう心配したところで、今さらどうすることもできないのだ。

通気孔の中で別れたジャックたちのこと、今捜しているルビーのこと、ヒドラのような化け物のこと...色々なことを考え、心配しながら歩いていると、何の変哲もない扉の奥から、いきなり女性の高笑いが聞こえた。まるで狂ったかのような、ぞっとする高笑いだ。

...この声は...

ディックは昔、その声を聞いたことがあった。

...この声は...まさか...

一瞬間き間違いかとも思ってしまうが、やはり...

...やっぱ、あいつの声だ.....間違いはない。

ディックはそう思うと、他には何も考えずドアノブを回した。驚くべきことに、そのままガチャッという音とともにドアが開いてしまう。ディックはロッドを構えながら躊躇いなく中に入っていった。すると、高笑いしながら何かモニターのようなものを見ていた銀髪の女性がくるっと上機嫌に振り返る――...

女性が振り返ると同時に、ディックはロッドを薙ぎ払うように振って女性を吹き飛ばした。女性は何も抵抗することなく壁に激突する。周りにあったテーブルやらガラスの棚やらが薙ぎ倒され、ガラスの破片があたりに散らばるが、女性もディックも気にする様子は見せない。

「お久しぶりですね、ユリア様」

ディックはロッドを構えたまま、いつもより低い声でゆっくりと挨拶した。少しずつ追い詰めるように近づいていく彼の笑顔は、ぞっとするような残酷さを持っている。

「...ええ、本当に久しぶりだわ」

ユリアは冷たい銀色の目を細くして答えた。右手に付けた腕輪が周期的にぼんやりと赤く光る。

「あんたもしつこいわね...まだあの男の子のこと怒ってるの？」

「許したり諦めたりすると思ってました？」

せせら笑うようなユリアの言い方に、ディックは低い声で問い返ししながらロッドを喉元に突き付けた。

「殺す気？」

暗い怒りと憎しみに燃える赤褐色の眼に睨まれても、ユリアはまったく臆することなく薄ら笑いを浮かべながら見上げている。

「ええ」

ディックははっきりと頷いた。

「でも、最後に教えてください」

ディックはほんの一瞬だけ顔を背けたが、またすぐに視線を戻して静かに尋ねる。

「どうしてシェルダンを殺したんですか？」

そう聞かれると、ユリアは目を逸らしてバカバカしいとでも言うかのように鼻で笑った。

「馬鹿ね、殺したかったんじゃないわ...ただ、実験に失敗してあんなっちゃっただけ。それだけよ」

ユリアはさも些細なことであるかのように答える。

「これで気済んだ？」

再びディックを見上げるユリアの眼には、反省など一欠けらもなかった。人の命を奪ったという意識すらないようだ。それが余計に、ディックの暗い怒りと憎しみの炎に油を注ぐ。まだ、何か理由があって殺したんだという方がマシだ...

「ああ、そう...そういうこと...今日は逃げねえんだな」

ディックの口調が変わった。もはや、わざと主従契約していた頃のような丁寧語を使う余裕もない。ユリアの眼が狂気じみた光を宿していることにも気づかないほど、ディックの怒りも狂気じみている。

「逃げられるなら逃げたでしょうね。でも私、もう魔法を使えないのよ、何も.....大分前からね。唯一使えていたテレポートももうできないわ...」

ユリアはそう言うと、またいきなり高笑いし始めた。自嘲的かつ狂気じみた、むしろ哀れにも思える笑いだ。

「...へーえ...」

しかしそれでも、ディックは何も思わない。

「じゃあ、おとなしく俺に殺されるんだな。シエルダンと同じ目に遭わせてやるからさ...」

ディックが冷酷に笑う。

「馬鹿ね」

そう言うユリアも笑っていた。高笑いこそ治まったようだが、今度はくすくす笑いが止まらないらしい。

「あんたには殺せないわよ、あんたには。たとえこっちが“殺してくれ”って懇願したって、あんたには人を殺すなんてできやしないわ」

確かに、ユリアの言葉は的を射ていた。例えば、ディックはかつて1度ユリアにテレポートで逃げられたことがある。もうテレポートできないと知ったのはたった今。本当に殺す気なら、つべこべ言わず逃げられないうちにと最初の一撃で殺しているはずだ。

確かにまだ、ディックは自分自身も気づかないところで躊躇っていた。

本当に復讐を果してしまったら、こいつと同じじゃないのか。本当に殺してしまったら...そしたら――

...29個目...

鉄格子の中の女性を無事に青玉島へ転送し終えたサファイアは、すぐに部屋を飛び出すと、曲がり角を数えながらどんどん走っていった。廊下は曲がり角ばかりなので、案外早くカウントが進む。

...30個目...

30個目の角を曲がった、まさにその時のことだった。突然、廊下の壁についている白い薔薇と茨のレリーフが不気味に光りはじめる。

...な、何これ...

レリーフの光は強くなったり弱くなったりを繰り返していた。その強弱は、一定の周期で変動している。

...まさか...!!

サファイアはハッと恐ろしいことに思い当たった。慌てて魔力検知器を見てみると、案の定数値が鰻登りになっている。

...まずい、早く行かなきゃ...

そう思うと、サファイアは今まで以上に速く駆け出した。

.....31.....32.....

.....

「...ほら、あんたには無理よ」

ロッドを動かさないディックに、ユリアがせせら笑いながら言った。ところが、このユリアの嘲るような言葉が躊躇っていたディックを変えてしまう。ユリアの悪びれる様子もなく平然とし

ている眼が、ディックの良心——というより正気を、吹き飛ばしてしまう。

ディックは何も言わずにロッドを高く振りかぶった。このまま勢いよく振り下ろせば、爆発音とともにユリアの身体は肉片となって散ってしまう。

——ところが。

まさにディックがロッドを振り下ろそうとした瞬間、後ろでドアを勢いよく開ける音がした。ディックはそれに構うことなく振り下ろし始めるが、何者かが後ろからディックの右腕を掴んでロッドの先を逸らす。

大砲のような爆発音が炸裂した。しかし、吹き飛んだのは脇の方にあった椅子。ユリアは無事である。

ディックは驚いて振り返った。

...誰が、今...?

振り返ったディックは、一瞬前の驚きとは比べものにならないほどの驚愕に、赤褐色の目を大きく見開く。

後ろから半ば抱きしめるような形でディックを押さえ、そのロッドの先を逸らしたのはジャックだったのだ。

「...ちょ...おまえ...?!」

「...あ...あ、僕.....」

ジャックは自分自身のしたことに愕然としているようだった。ディックもジャックもそれ以上の言葉が出てこない。ユリアもまた、何も言わずにいる。

ようやくディックが口を開こうとすると、また勢いよく扉の開く音がした。

勢いよくドアを開けて入ってきたのはサファイアだった。

「何やってるんですか?!」

サファイアは入ってくるなり、ユリアを鋭い口調で問い詰める。

「何のこと？」

とぼけるユリアに対し、サファイアが

「この廊下.....これ、巨大な立体魔法陣でしょう？何する気なんですか？」

ともう1度聞くと、ユリアは少し驚いたように笑った。

「あら、気付いたの.....あれはね、“時の最果て”と“空間の最果て”を融合する魔法陣.....のはずよ」

「“時の最果て”？」



妙な言葉に、ジャックが聞き返す。

「そう...夢幻界や実界が船だとしたら、その周りがある海や空気みたいなものよ。今は“時の最果て”と“空間の最果て”に分かれている.....ちょうど、海と空が分かれているようにね。その2つを融合して、私が支配してしまえば、夢幻界も実界も、他の世界も全て私のもの...」

ユリアはそう説明すると、再び高笑いしはじめた。

「...ばっかばかし...」

ディックが吐き捨てるように呟く。

「...確かにバカバカしいけど...」

サファイアも呟くように言った。ユリアの最終目標は、どうも世界征服することらしい。あまりにも無謀かつ陳腐な話であることにも愕然とするが...

「...“時の最果て”だの“空間の最果て”だのって話が正しいとすると、混ぜちゃったら世界征服どころの騒ぎじゃないんじゃない...?」

確かに、船は波や風に大きく影響される。しかし、だからといって海と空を混ぜてしまえば、その狭間にある船を支配できるのだろうか...?

「...まあ見てなさい、今ね、あんたの妹が自分から空間の最果てに入ってくれたのよ。おかげで今までどうしても動かなかった魔法陣が、やっと動き始めたわ...」

「ルビーが?!」

高笑いの合間にユリアが言ったことに対し、サファイアが思わず叫んだ。それと同時に、ディックがユリアに掴み掛かる。

「どういうことだ?」

ディックは低い声で脅すように聞いた。しかし、ユリアはそれでも平然とした様子で

「分かんないわよ。たまたま上手くいったんだもの...」

と答える。

「あれが入口ですか?」

ジャックはこの状況下でも落ち着いていた。部屋の隅にあるモニター ※185 に映し出された、オレンジ色の光が漏れ出す怪しい扉を指差している。

「そう、この1つ下の階だけど...」

「俺行ってくる!!」

ユリアの言葉が終わらないうちに、ディックは部屋を飛び出して行ってしまった。

「馬鹿ね、行ったって無駄よ、誰でも入れるわけじゃ...」

ユリアはその後ろ姿を冷笑しながら残りの言葉を言おうとしたが、結局言い終えることはできなかった。ジャックが茨で全身を縛り付け、さらに蔓の猿ぐつわを噛ませてしまったのだ。

「とりあえず青玉島へ送ってしましましょう」

「あ、うん...」

ジャックに言われたサファイアは、急いで百露華を取り出し、転送魔法陣MWの光を当てた。その瞬間、ユリアの姿が消えてしまう――これで転送完了だ。

「...私たちも行ってみようか」

サファイアが呟くと、2人はそれが合図であったように、部屋から駆け出していった。

※185...ディックがこの部屋に入った時、ユリアが見ていたものだ。

ディックは全力疾走で階段まで戻ると、一気に階段を飛び降りた。もう下へ続く階段は存在しない。他の階と違って照明はなかったが、どこへ行けばいいのかははっきりと分かった。正面奥の扉からオレンジ色の光が漏れ出しているのだ。ディックがその扉に駆け寄って開けると、途端に明るい光がディックを包む。

強すぎる光から目を守るために、ディックは本能的に目を瞑っていた。数秒経ってから、慎重に目を開けてみる。

辺りには何もなかった。ただ、ひたすら薄オレンジ色の世界が広がっているばかりだ。

...これが“空間の最果て”か...？

正直、つまんねえところだなあ...などと思っていた。しかし、そんなことを言っている場合ではない。早くルビーを捜さなければならないのだ。

「おーい!!ルビーっ!!」

とりあえず大声で呼んでみる。それぐらいしか方法がない。

「いるんだったら...うわっ!!」

“いるんだったら出てこいっ!!”と言いかけたところで、突然何か後ろからものすごい勢いで抱きついてきた。ほぼ“突進”と言うに値する勢いで抱きつかれたディックは、思いっきりつんのめってしまう。

「ルビー?!」

腰辺りに腕を回して見上げてくるルビーは、今にも泣き出しそうな顔をしていた。いきなりこんなわけの分からないところに来てしまって、さぞ不安だったに違いない。

...ってか、普通パニックっちまうよなあ...

ルビーが見つかってほっとする半面、ディックは泣きそうなルビーの様子に慌てていた。

「おまえ...大丈夫か？」

そんなふうに声をかけながら、とりあえず安心させようと頭を撫でてやってみる。

ところがルビーは、突然その手を払い除けるとぱっと離れ、

「べ...別に平気だし!!」

などと言い出した。

「なっ...」

そんな言い方をされると、ただ意地っ張りなだけなんだと分かっていても、ついムカッとしてしまう。



...うっわ、もう...どうしてこう素直じゃねえのかなあ...

「だああああもうっ!!ほら、行くぞ!!」

ディックがそう言って扉の方に歩き始めると、ルビーも慌ててついてきた。

「何でまだ扉残ってるの?さっきうちが来た時は、閉めた瞬間消えちゃったのに...」

扉を開けるディックに、ルビーが後ろから問い掛けてくる。

「日頃の行いが悪いからじゃね?」

そんなルビーを一瞬だけ振り返ると、ディックは少しいじけた声でそう答えた。心の中で“すげえ心配して来たのにさ...”とぼやく。

「う...うるさい!!ちょっと黙っとけ!!」

ルビーがディックの言葉に憤慨して叫んだ。この期に及んでもケンカせずにはいられないらしい。

2人はディックの開けたドアから外に出た。“外”と言っても、出た先はもちろん先程の真っ暗な廊下だ。ルビーがその扉を閉めると、ほとんど暗闇になってしまう。

「...でも、確かにそうかも」

お互いの顔が見えなくなってから、ルビーは不意にぼつりと呟いた。

「ごめん.....助けに来てくれて、ありがとう」

小さな声でルビーがそう言うと、ディックは驚いて振り返った。まさかそんなことを言うとは思っていなかったのだ。それから、お互いに顔が見えないのを分かったうえでニッと笑うと、心の底から

「無事で安心したよ」

と答えた。

白いレリーフが不気味に光る中をサファイアとジャックが駆けていくと、ちょうど階段の途中でディックたちと鉢合わせした。

「ルビー!!」

ディックの後ろにルビーの姿を見つけた瞬間、サファイアが勢いよくルビーに抱きつく。今までそんな様子を見せていなかったが、本当はずっと心配で仕方がなかったのだ。

「姉ちゃん?!」

いつもと逆の立場になってそう叫ぶルビーに、サファイアは

「よかった、無事で...」

と嬉しそうに言う。

「サファイア」

そこへジャックがわざと冷たく咎めるように声をかけ、水を差した。

「あ、ごめん...」

その声で妹の無事を喜んでいる場合ではないということを思い出したサファイアは、しゅんと俯いて謝る。

「で、どうすんの?」

ディックが苦笑しながら問い掛けた。ディックもジャックも、サファイアの気持ちはよく分かっているのだ。しかし、こうしている間にもレリーフの光り方は激しくなっていく。

「えーっと...まず脱出するでしょ。それで、この建物全体が立体魔法陣になっているわけだから、それを爆破しちゃえば.....あ」

サファイアは言葉の途中で、突然サッと青ざめた。

「...どうした？」

ルビーが首を傾げる。

「誰か.....帰り道、分かる？」

サファイアは恐る恐る問いかけた。迷路のように入り組んだ廊下を必死に進んで来たため、自分がここまでどうやって来たのかなど、まったく記憶にないのだ。

ディックもルビーも同じなのか、サファイアの問いに答える者はおらず、4人の間に沈黙が流れる。

「...行きますよ」

その沈黙を破ったのは、さっさと階段を上りはじめたジャックの奇妙な一言だった。

「え、おまえ...覚えてんの？」

ディックが聞くと、ジャックは黙ったまま頷く。

「さすがじゃっくん!!」

目を輝かせて言うサファイアに、ジャックは

「“さすが”じゃなくて、覚えていてください」

と冷ややかに言った。

その後の帰り道は速かった。初めにサファイアとジャックがいた階まで階段を一気に飛んで上ると、入り組んだ廊下を走って行く。

「あの辺りです」

ジャックは止まる少し手前でそう予告した。その直後、4人は予告通りの場所で止まる。見まわしてみても、何の変哲もないところだ。

「この辺りですね」

ジャックはそう言いながら壁の下の方をあちこち突く。

「あっ、姉ちゃ...」

「分かってるよ」

ルビーは変身MWのことを指摘したのだが、そう言われた時にはすでに、サファイアは百露華を取り出している。

「ここじゃね？」

ディックが壁を叩きながら言った。叩くと奥に空洞がありそうな音がする。

「ほら...」

ディックはそう言いながらそこを強く突いた。すると案の定、細い通路の入口が現れる。

もうその時には姉妹2人ともリスになっていたもので、4匹ならぬ4人はすぐに通路を駆け出した。

今度はずっと上っていくわけだ。

登り道であるにもかかわらず、下りであった行きより時間はかからなかった。行きの時は知らない道だったし、途中でミーティングをしたせいもあっただろう。4人が外に出るまでにかかった時間は、だいたい20分ぐらいだった。パシュカーレ山に到着した時はまだ早朝だったが、今はもう太陽が1番高いところを通り過ぎて、少しずつ西に傾き始めている。

「ちょっと待て...サファイアちゃんがリスから戻らないと魔法陣爆破できなくね？」

まだリスから戻らない姉妹を見て、ディックが指摘した。するとジャックは、辺りに視線を走らせながら

「どの道ここから離れないと爆発に巻き込まれるから...2人が戻るまでの時間はそれに使うしかないだろう」

と答える。

ジャックとディックはそれぞれサファイア・リスとルビー・リスを持って朝に飛行機から降りたところへ向かって飛び始めた。10分ぐらい飛んだところで、2匹のリスはいきなりもとの姿に戻ってしまう。だが、ジャックもディックも時間的に覚悟はしていたので、どうにか落とすことなく抱き留めた。

「どうもありがとう」

サファイアはそう言いながら自分のメルクリウスで飛んでジャックの隣辺りに来ると、パソコンを開いてキーボードの上で指を躍らせ始める。パシュカーレ山の内部に超強力爆破MWを描き、巨大立体魔方陣となっている地下施設を、パシュカーレ山の山頂ごと吹き飛ばしてしまうつもりなのだ。

「出た、姉ちゃんの...」

そう言おうとしたルビーを、ディックが

「バカ、邪魔すんじゃねえって!!」

と叱りつける。

サファイアの作業はしばらく続いた。30分くらい経ってから、サファイアはようやく

「できたっ!!」

と嬉しそうに叫ぶ。

「行くよ.....それっ!!」

掛け声と共にMWを発動させた。一瞬パシュカーレ山山頂付近を淡い光の模様が包んだかと思った次の瞬間、凄まじい爆発音が鳴り響く。

「...なあ、これ...山が崩れちまったりしねえの？」

パシュカーレ山の頂上を見つめながら、ディックが呟くように指摘した。するとサファイアは、笑いながら

「大丈夫。そういう二次災害が起きないように調整してあるから...だから時間かかっちゃったんだ」

と答える。

「時間かかったって...こないだ何日もかかったのを考えたら、めちゃめちゃ速いじゃん」

そう言いながら、ルビーは労うように姉の肩をぽふぽふ叩いた。

「あれに比べたらずっと簡単だからね」

そう笑うサファイアも、同じように叩き返している。

「...行きましょうか」

ジャックが静かな声で言うと、4人はその言葉を合図に飛行機が待っているところへ飛び始めた

。

「お帰りなさい」

王宮でコランダムの4人を迎えたのは、ピュアとペーター、ルチアーノの3人だった。皆明るい顔をしている。

「紅玉の王宮奪還、成功したよ!!」

喜びに満ちたルチアーノの報告を聞くと、4人はほっと胸を撫で下ろした。フィリッポとラウラは、もう紅玉高原に帰ったのだという。

それからこちら側の報告もしようとしたのだが、ピュアはまず4人の治療を優先した。科学部の中でも優先的に治療を受けた医学班の面々は完治してすでに働いていたので、3人の治療はその中の1人が行ったのだが、サファイアの番になるとその医者は露骨に嫌な顔をする。それを見たジャックが、自らやるとすぐに申し出たため、結局そこはいつも通りとなった。

治療終了後、ピュアに

「じゃあ...何があったか聞かせていただこうかしら」

と聞かれた4人は、今度こそ向こうでの出来事を皆に報告する。科学部員全員を発見・保護したこと。電話をかけてきた女性を保護したこと。今回の目的の人物と思われる、ユリアを捕まえたこと。彼女が“時の最果て”と“空間の最果て”という2つの世界を融合させて世界征服しようと試み、巨大立体魔法陣を作動させていたこと。ユリアを青玉島へ送っても魔法陣が止まらなかったため、魔法陣を一つつまりあの建物を一つ爆破してしまったこと。ルビーが“空間の最果て”とやらに入ってしまったため、ディックが連れ戻してきたということ――...

「世界征服?!」

ルチアーノが素頓狂な声をあげた。

「またまたそんな...信じられない奴がいるんだな...そんな、世界征服だなんて...本気でいったの?」

「冗談でないのは確かですが...正気かどうかは分かりません」

ジャックが静かに答える。会話は普通に成り立っていたが、ユリアのあの目つきや高笑いは、どう考えても普通ではない。

「...本当に...本当に、時の最果てと空間の最果てを混ぜようとなんてしてたのかしら...?あんなたち...本当に、空間の最果てへ行ったの?」

ディックとルビーにそう尋ねるピュアの表情はとても深刻で、やや青ざめているようにすら見えた。

「さあ...」

ルビーはそう言いながらちらっとディックの方を見る。するとディックはそれを受けて「多分そうなんじゃないかと思いますよ。ユリアの奴が言っていた“空間の最果て”とか何とかが本当に存在するんだとすれば...」

と答えた。決して故意ではないのだろうが、“ユリア”という一言に憎しみと恨みがたっぷり含まれている。

「最果ては存在するわよ、確かに...何て言われたんだっけ?」

ピュアが聞くと、すかさずサファイアが

「夢幻界や実界が船だとしたら、“時の最果て”と“空間の最果て”はちょうどその周りがある海や空気みたいなものだって言ってました」

と答えた。それを聞くと、ピュアは

「だいたいそんなもんよ...」

と頷いた後、少し引き攣った笑いを浮かべて

「あんたたちがいつか世界征服するときのために教えておくけど、混ぜたら全部めちゃくちゃになって終了だから、せめて他の方法にしてちょうだいね」

などと言う。

「...ですよね」

ピュアの冗談に対し、ディックが苦笑しながら相槌を打った。だがそのあと誰も何も言わないため、女王の間は沈黙に包まれてしまう。

「...とにかく、今日の任務は大成功だよ、なあ？」

何ともすっきりしない空気が充満している中で、ルチアーノが明るく笑いながら言った。テンションを上げているが、ちらちらとピュアに目配せしている。

「ええ...悪かったわね、夜中から2つ連続で...あんたたちなんて、昨日から一睡もしてないでしょ」

ピュアもその目配せを受けながら、4人を労うように言った。後半の“あんたたち”というのはサファイアとジャックのことだ。

「今日は休みなさい.....また明日」

自室でシャワーを浴びたディックは、まだ髪がびしょびしょなのも気にせず、ベッドへ仰向けに倒れ込んだ。

ぐったり疲れている。全身が重い。

...あーあ...

1500年間、絶対あいつだけはぶっ殺してやると心に決めていた。そのためにどれだけのことをしただろう？どれだけの犠牲を払っただろう？そして今日、とうとうそのチャンスが巡って来たのに.....結局、殺らなかった。

「...ごめんな、シェルダン...」

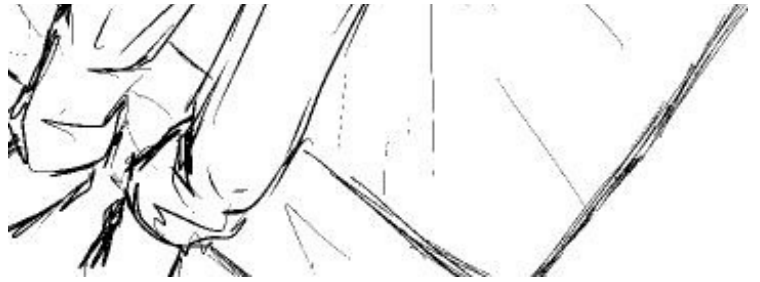
試しに呟いてみるが、そのあまりの虚しさに、すぐそうではないと気付く。

...シェルダンに頼まれたわけじゃない。俺が、シェルダンを殺された恨みを晴らしたかっただけのことだ。

奴がこの城の地下にいるということは分か



っていたが、だからと言ってまさか今から殺すわけにはいかなかった。それに、正直もう...今から殺しに行く気にはなれない。



あの時ジャックに止められなければ、多分本当に殺していただろう。しかしどういうわけか、“どうして止めたんだ?!”とジャックを責める気にもなれなかった。

...もしかして本当は、止めてほしかったんだろうか？

そう思ってしまうほどだ。

1500年前に、ルビーを殺してしまったときの罪悪感——“罪悪感”なんて言葉では表せないような、重く、冷たく、苦しい思い。それを知った時から、人を故意に殺しなどしたら、その時には自分自身も壊れてしまうのではないか、という思いもあった。現に、その言葉にもできないような苦しみは1500年経った今でもまったく薄れていない。むしろ、考える度にどんどん増していく一方だ。

...どう考えりゃいいんだろ...

ディックはしばらくの間ぼんやりと考えていたが、突然バツと起き上がった。それからふらっと部屋を出ると、どこへというでもなく歩き始める。

「あ、やっほー!!」

廊下を歩いていると、不意に明るい声がした。声の方を見してみると、サファイアとジャックがこちらへ歩いて来る。

「あのね、じゃっくんが今日だけ特別にってケーキ2つ取らせてくれたの♪」

そう言うサファイアの手は、ミックスナッツタルトとさつまいもタルトが載った皿を大切に持っている。

「あー...食堂行ってきたんだ。で、特別にドクターストップを緩めてもらった、と」

ディックはそう言いながら、ジャックに対してからかうような視線を向けた。しかし、サファイアはそんなことには気付かず、嬉しそうにVサインをする。

「...サファイア、すみませんが先に戻って食べていただいただけませんか？」

ジャックが唐突に言った。するとサファイアは、すぐに

「あ、うん...了解です」

と言ってパタパタ駆けていく。もしかしたら何か察したのかもしれない。その後ろ姿を見送ってから、ジャックが低い声で

「...大丈夫か？」

と尋ねてきた。

「うん」

ディックは苦笑しながら頷く。

「なんつつうかさ...どう考えたらいいのか分かんねえんだよなあ...」

ジャックは腕組みしたまましばらく俯いて黙っていた。しかしやがて、慎重に言葉を選びながら

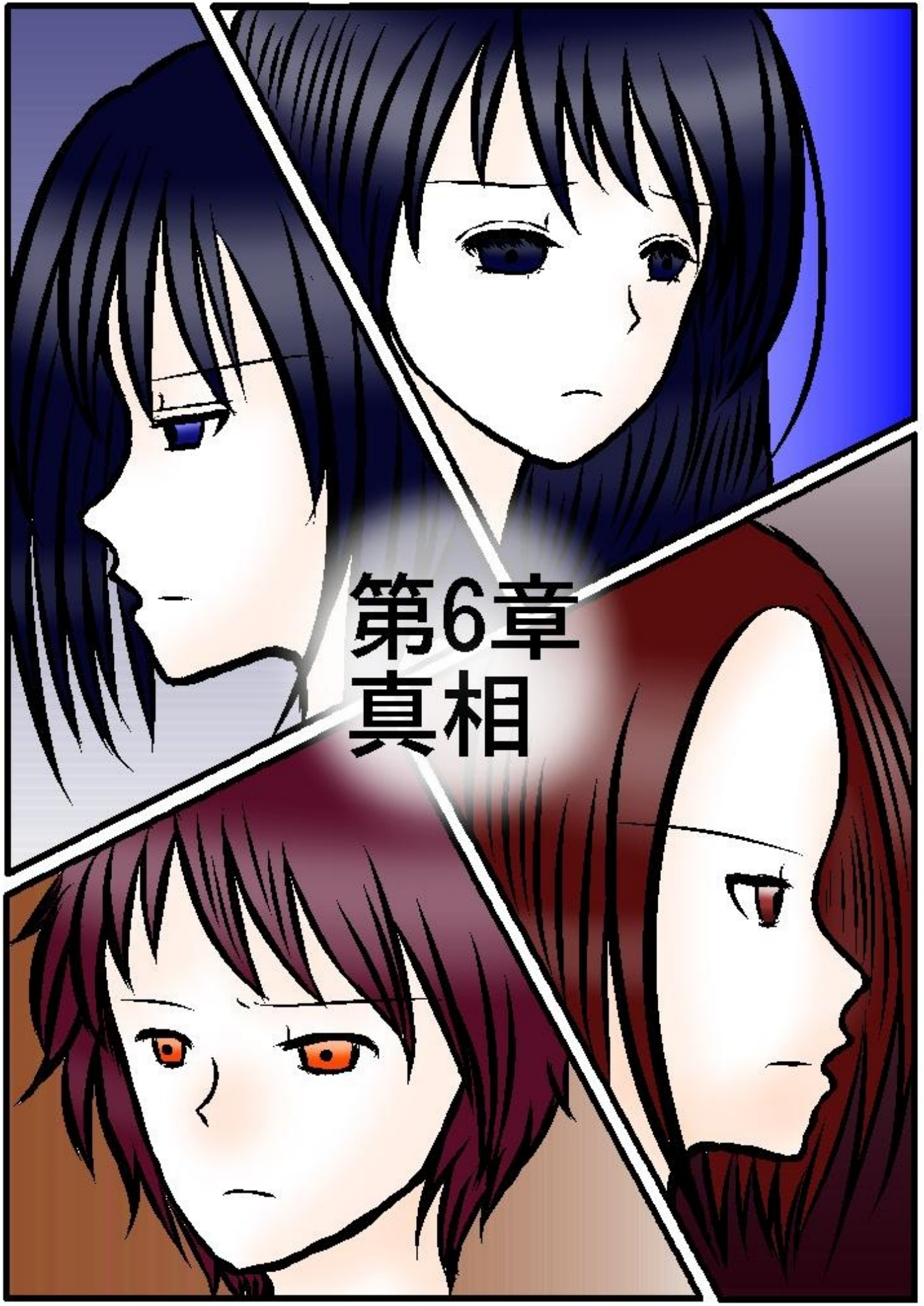
「...1500年間の努力を水の泡にしてしまったことは謝るよ。悪かったと思う...でも、おまえがユリアを殺そうとするのを止めたことについては、後悔していないから...」
と言う。

「ははっ...前から反対してたもんな...」

ディックはそう答えながら一層苦笑を深くする。

まあ、よくよく考えてみれば、あそこでユリアを殺してしまっていたら“時の最果て”やら“空間の最果て”やらのことは分からないままだっただろう。ということは、空間の最果てに行ってルビーを見つけてくるのも不可能だったはずだ。

.....これで.....これで、よかったのかな...



第6章
真相

それから2週間で、王宮乗っ取り事件の真相はかなり明らかになった。指揮していたアレックス・カンパニーレをはじめ、紅玉高原の王宮を乗っ取ろうと侵入した者の大部分が捕まったため、彼ら――特にカンパニーレだが――の取り調べを行ったところ、予想外の事実が発覚したのだ。

事の始まりは先月の誤報事件である。ネット上の書き込みを真に受け、国際的大混乱を招いた紅玉高原情報処理局新米局員キアラ・マレスカは、あれ以来ずっと同僚などに苛められていた。その苛めがエスカレートしていくうちに耐えられなくなったマレスカは、自分のブログに苛めが辛いと漏らすものの、彼女自身があれだけの大混乱を招いたことが苛めの原因となっているだけに、逆にブログへの書き込みが炎上してしまう。

そんな騒ぎを利用しようとしたのが、アレックス・カンパニーレだった。彼はヴァイス・オーガナイゼーションの支部のような組織の責任者だった。支部にいたため逮捕されていなかった彼は、ネット上からマレスカの個人情報を拾う ※186 と、マレスカに近づいて、優しく慰めながら彼女を味方に引き込んだ。そして8月13日、マレスカの手引きによって、カンパニーレたちが王宮に侵入したのである。この計画についてユリアがやったことと言えば、ただカンパニーレの言うことにGOサインを出したことだけだったらしい。

一方、青玉島ではジュラダン、ユリア、あと電話をかけてきた女性の取り調べをしなければならなかった。

とりあえず、ユリアは医学班の者の進言によりセントラルシティの王立病院精神神経科へ送られた。

最も厄介なのはジュラダンである。彼はこの40日近い間、23人もの取り調べ官に対し“おまえには話さない”と言い続けていた。まだまだ取り調べ官はいるから、それをすべて試すことも出来なくはない。しかし、ピュアには1人、ジュラダンの意向にあう取り調べ官について、思い当たる節があった。

2009年8月27日

「おはようございます」

「ちょっとあんたたち、来なさい」

7:00になった瞬間に出勤してくる ※187 ジャックとサファイアを、ピュアは挨拶を返しもせず呼び出した。

「いかがなさいましたか？」

そう言いながら2人が玉座の前に来ると、ピュアは

「あのねえ…」

と頬杖を突く。

「ちょっとねえ…あんたのお父さん、我が儘過ぎるわ。どの取り調べ官に行かせても、“おまえには話さない”って言い張ってんのよ…もう23人試したのに、全員ダメって言うんだから!!」

ピュアは苛立ちと呆れの混ざった笑みを浮かべて言った。しかし、ジャックには

「申し訳ありません」

と謝ることしかできない。ところがピュアは、

「あんたのお父さんでしょ？何とか言ってきてよ」

などと言い始めた。

「ちょっとピュア、あんまり無茶なこと...」

ペーターがそう窘めても、ピュアは完全に無視して玉座の下へ手を伸ばすと、

「はい、これ」

と言ってジャックに電子板を手渡す。

「それ、取り調べ事項だから頑張って」

「え...ええっ?!」

隣にいたサファイアが驚いて叫んだ。ピュアはジャックに、彼自身の父親の取り調べを行うよう命じていたのである。もちろん普通ありえない話だ。

「ピュア、本当に...？」

これはペーターも初耳だったらしく、目を丸くしている。

「...息子が父親の取り調べをして、構わないのですか？」

皆思っているのだが、言いづらくて ※188 はっきりとは言えなかったことを、ジャック自身が尋ねた。しかし、ピュアは

「取り調べそのものがないよりはマシでしょ」

と開き直っている。

「...ほら、あと30分で始まるから頑張って」

そう言いながら、ピュアは扉の方を指差した。

7:25

側近の制服を着たジャックは、地下の取り調べ室で電子板を読んでいた。取り調べ室には6つの隠しカメラがあり、取り調べを受ける側と行う側の両方を監視している。

カメラの映像は隣の記録室にあるモニターに映し出されていた。映像だけでなく音も聞こえるようになっている。サファイアが開発した全自動メモプログラムも導入されているが、記録官による手動の取り調べ記録もとっておくのだ。ちなみに、今そのモニターを見ているのはサファイアである。

モニターに映るジャックの表情は、まったくいつも通りの無表情だった。これから父親の取り調べを行うのだとは思えないほど落ち着いている。

7:30になると同時に、取り調べ室のドアがロックされた。

『はい』

ジャックが答えると、扉が開いて監視員とジュラダンが現れる。

『それではよろしくお願いします』

監視員はそうとだけ言うと、静かに部屋を出て行った。

『本日、あなたの取り調べを担当いたしま...』

『知ってるよ、ジャック』

無機質な声で話し始めたジャックを、ジュラダンは非常にリラックスした様子で遮る。傷は完治しているし、服も着替えていた――おそらく私服だろう。手錠はしていないが、左手首には封印鎖の腕輪のようなものが巻かれている。これで魔力だけ封じておくということだろう。

『女王様はいつになったら気づくのかと思っていたんだが...いや、意外と早かったね。わたしはおまえに話をしておきたかったんだ』

ジュラダンは自分の方から勝手に話し始めた。

『多分また色々と質問を用意しているんだろうが、できれば時系列順に話したい。話し終わってまだ聞きたいことがあれば答えるから、先に話させてくれ』

そう言うジュラダンに、ジャックは『分かりました』

と言いながら小さく頷く。

ジャックは淡々と答えているが、モニターで見ているサファイアは驚きを隠せなかった。...え...ええええっ?!ちよ...どうしちゃったの?何でこんな急に協力的になってるのさ?

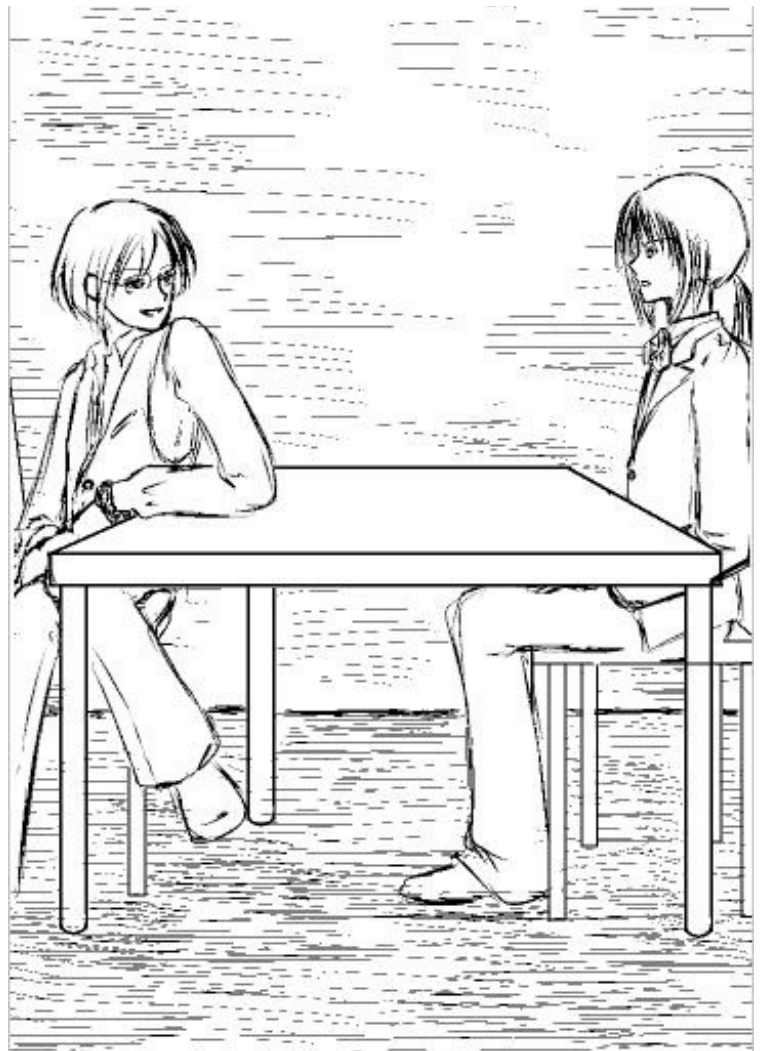
『ありがとう』

ジュラダンの豹変振りについていけない記録官を他所に、ジュラダンはゆっくりと話し始めた。

※186...マレスカは情報処理局の局員だったが、これらを見る限り、彼女の情報リテラシーは一般人より低いと言わざるを得ないように思える。

※187...ちなみに、紅玉組3人はあくまでも入り浸っているだけだから、女王の間に来る時間は割とまちまちである。

※188...それを言うと、まるでジャックが不正をするのではないかと疑っているように聞こえるため、なかなか言えなかったのだ。



“ねえジュラダン、聞いてよ”

森の中を歩きながら、ジュリアがおかしそうに話し掛けてきた。

“お父さんったら、もうお兄ちゃんにリーダーの位譲るんですって”

“え...本当か?!デイビッド”

僕が驚いて尋ねると、彼は

“そう...ほんっとうに気が早いんだから...”

と苦笑する。

“じゃあ大変ね...初代リーダーと2代目リーダーに見守られながらでしょ?”

ユリアはそう言うと、くすくすと小さく笑った。

“そうなんだよもう...どうしよう、これからはこんな呑気に散歩なんてしてられないよ...”

その言葉に、デイビッドは独特の緩い口調で嘆くように言う。するとジュリアが、

“大丈夫よ、お兄ちゃんがいなくても私たち3人で仲良く散歩してるから”

などと言って、からかうように笑った。

デイビッド・ジュリアの兄妹と、わたし・ユリアの兄妹は非常に仲が良かった。デイビッドとわたしが同じ年で、両兄妹とも年子でね。

キュアラ族の創始者の孫であるデイビッドがリーダー職を継いだのは19才のとき。周りの一族と比べても、ずば抜けて若いリーダーだった。

彼は昔から、独特の緩い空気を持つ切れ者でね、周りはよく“のんびりしすぎだ”と言っていたものだが...でも、まだ先代——つまり彼の父親が元気でいたにもかかわらずあの年でリーダー職を任されたのだから、彼が相当な切れ者であることは、皆もよく知っていたんだろう。

ジュリアも兄と似てのんびりしていたな...彼女の場合は本当に見た目通りののんびり屋でね、4人でいたころは、いつも何となくその場を和ませてくれる人だった。

ユリアも、昔はすごく優しい子だったんだよ。ちょっと神経質なところもあったが...いや、でも実に真面目で、心優しい子だった。まあ、そう言っても信じないだろうけど...

親の影響なのか何なのか、わたしたちはみんな勉強が好きでね——この遺伝子は強いのかな...おまえにもジェーンにも遺伝している——ジュリアは魔法存在論に、ユリアは世界学に興味を持っていた。デイビッドはもちろん、魔法化学だよ。そして、わたしは魔術研究が好きだった。分野はバラバラだが、それでも不思議と互いに手伝ったりして、協力しあったものだ...

23才のとき、ジュリアとわたしが結婚した。第126次吸血鬼戦争が始まったのは、その直後だ。だが、デイビッドが上手く立ち回って中立を維持してくれたおかげで、キュアラ族は平和だったよ。外で戦争しているなんて、考えられないくらいにね。

そのあとジェーンが生まれて、その6年後にデイビッドとユリアが結婚して、翌年の秋にディックくんが生まれた——...

ええッ?!ってことは...ジャックとディックって、従兄同士なの?

サファイアは心の中で叫び声を上げた。これにはジャックも驚いたらしく、表情にこそ大きな

変化は見られないものの、目は普段より大きく開いている。

それを見ると、ジュラダンも口角を持ち上げて

『そうだよ。ディックくんはデイビッドとユリアの子なんだ。デイビッドはジュリアの兄、ユリアはわたしの妹だから、おまえとディックくんは従兄弟同士ってことになるね』
と言った。

...そう、このあたりまではよかったんだ。何もかもが上手くいっていた。そうだろう？だがね.....ディックくんが生まれてから1ヶ月ぐらいしたころだったかな、このころジュリアは、魔法存在論の究極である、人格の創造の研究を進めていた。でも、この時ジュリアはもうおまえを産む2ヶ月前くらいだったから...あまり動けないジュリアを、ユリアが手足となって手伝っていたんだ。

見ての通り、ユリアは完全な白色吸血鬼だ。このころはまだよく分かっていなかったのだが、わたしたちとは、生まれ持つ魔力がまったく違っている。彼女が世界学に興味を持ったのだから、今になって思えば当たり前のことだ。白色吸血鬼は空間を操るのが得意なんだからね....

とにかく、ジュリアが開発した呪文の実験をするために、ユリアはいろいろと準備をしていた。だが———そういった魔力の違いから、何かが狂ったんだらうね———この実験の途中で事故が起きてしまった。細かいことはよく分からない。はっきりしているのは、ジュリアは無事だったが、ユリアが.....この事故のせいで、いわゆる二重人格になってしまったということだ。

“...ごめ...ごめん、なさい...ジュラダン.....
本当に.....”

僕の足元に座り込んだジュリアが、泣きながら必死に謝ってくる。

“.....”

僕は、ただひたすら黙ってそんな彼女を見下ろしている。僕は...今、いったいどんな眼で見下ろしているのだろうか？

別に、ジュリアが悪かったわけではない。たまたま.....ユリアは運が悪かった。そういうことだ。愛する妻に、そう言ってやるべきだったのかもしれない。だが、わたしにとってはユリアも愛する妹だったんだ。どうしても...どうしてもそう言えなかった。どうしても、ジュリアを許せなかった...

それから2週間ぐらいして、また事件が起きた。ユリアとディックくんが、行方不明



になってしまったんだ。わたしたちは必死

になって捜したよ。ジュリアも、重い身体の許す限り捜した。だが、彼女はなかなか見つからなかった。ようやく見つかったのは...もう3週間ぐらい経ってからのことだ。彼女は森のずっと北の方をふらふらと迷い歩いていた。見つけたのは...たまたまわたしだった。

“...——ユリア?!”

僕が呼び掛けると、ユリアは怯えたようにビクッと身を震わせて振り返る。

“...っ?!...あ...あ、兄さん.....私.....私.....”

ユリアは今にも壊れてしまいそうだった。

“落ち着きなさい!!どうしたんだ?!”

僕が安心させるように抱きしめながら尋ねると、彼女はどうか...辛うじて正気を保っているかのような様子で、ぽつりぽつりと話し始める。

“...も...もう1人の、私が...”

彼女の話によると、デイビッドが目を離した隙に、ユリアの交代人格がディックくんを連れて家から彷徨い出て、道中に彼を置き去りにしてしまったらしい。それから数日した後、主人格に戻って自分のしてしまったことに気づいたユリアは、慌ててディックくんを置き去りにしてしまった場所まで引き返した。だがもう、その時にはいなくなっていて.....そのあと、ずっと捜し歩いていたそうだ。

“...帰ろう”

話を聞いた僕は、囁くような調子で言った。

“嫌よ、あの子を見つけるまで...今もどこかで泣いてるわ!!”

激しく首を振りながら叫ぶユリアに、僕は静かな声で言い聞かせる。

“もう、泣いてないと思うよ...あの子はまだ赤ん坊だった。血を飲めなければ5日が限度だ.....僕たちみたいに10日も2週間もは堪え.....”

“やめてっ!!”

ユリアが耳を塞いでヒステリックに叫んだ。

“そんなこと言わないで!!生きてるわ、絶対生きてるわよ!!”

“ユリア...”

“生きてるってば!!”

“落ち着きなさいっ!!”

ユリアは怯えたように身を縮め、黙ってしまった。僕はそんな彼女を見て、ようやく自分が怒鳴ってしまったということに気付く。

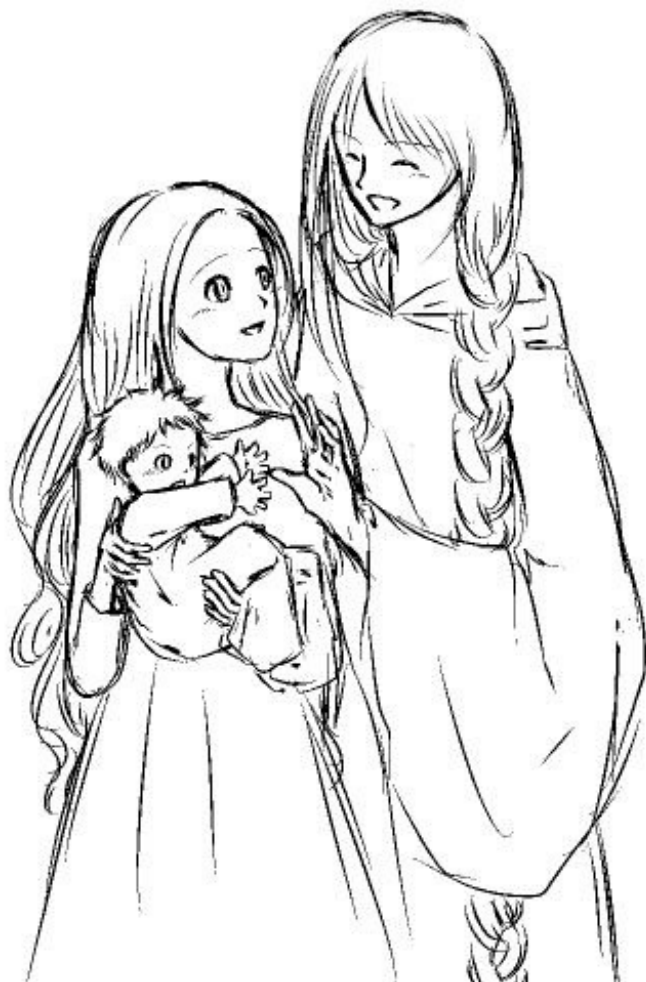
“...もう無理だよ、帰ろう。みんな心配してるから...”

僕が努めて優しく言うと、ユリアは僕の腕の中で震えながら首を振った。

“...無理...できないわ、そんなこと...私、デイビッドにどう謝ればいいのか?”

言うまでもないと思うが、デイビッドはディックくんのことを本当に可愛がっていた。つまり...彼の髪が赤くても、目が赤褐色でも、まったく気にしなかった。いや、むしろ自慢にしていたくらいだよ、太陽のようだとか言いながらね...。彼は、周りが呆れるくらい、息子を愛していた。そして、ユリアも同じようにディックくんを愛していた.....おまえは絶対に信じないだろうが。だが、本当だよ。一挙一動に一喜一憂して...わたしたちはそんな2人を、親バカだってからかっていたものだ。

だからこそ、ユリアはもう1人の自分を憎み、恐れた。愛おしくて堪らない息子を置き去りにしてしまった、もう1人の自分をね。そして、デイビッドに会うことも嫌がった。デイビッドがどれほど息子を愛しているか知っていたから.....絶対に許してもらえないと、言い張ったんだ...



ガタガタ震え、泣き叫ぶ妹を抱きしめながら、僕は途方に暮れていた。

...このままでは、この主人格まで壊れてしまう。本来のユリアまで、発狂してしまいかねない

...

“...ユリア”

やがて、僕はそっと話しかけた。

“僕が、おまえの交代人格を消してあげるよ”

そう言うと、ユリアは驚いたように

“本当?”

と見上げてくる。

“...ああ...”

僕は彼女の目をしっかりと見つめながら頷いた。その眼は純真で、清らかだ。

これを、失いたくない...

人格を消す呪文——奇妙なことに、消す呪文は魔術研究の分野なんだ。創るのは存在論なんだがね。この時、人格を消す呪文は“ほぼ”完成といった状態だった。あと、微調整だけ...そういったところだ。だが、多分薬でも同じだと思うが、その微調整が結果を大きく左右する。それは当時

もよく知っているはずだった。知っていたはずだったのに……やめておけばよかったんだ。無謀なことをするんじゃないかった…。

わたしが消したのは、交代人格ではなく主人格の方だった。ユリアがおまえたちの――というよりディックくんの知っているユリアになったのは、まさにこの時だよ。まったくの別人。わたしの最愛の妹とはあまりにも掛け離れた、別人だ……。

何となく分かっているのかもしれないが、このユリアはとにかく世界征服にこだわっていた。そして、当時は言動が支離滅裂だった……今もそう見えるかもしれないが、あれでもだいぶマシになったんだよ。当時は、一瞬でも目を離せば何をするか分からない状態だったからね…。

わたしはまず、何とかしてユリアの主人格――つまり本来のユリアを取り戻そうとした。だが、1度消えてしまったものはもう戻せやしない。あらゆることを試してダメだと分かると、今度はこの新しいユリアを更正させようとした。せめて、一族に帰って一緒に暮らせるようになればと思ってね…その結果が今のユリアだ。会話できるくらいまで快復させたんだよ、これでも――世界征服への異常な執着と、そのためなら手段を選ばない残虐さ、あとやはりどこか狂気じみている部分は消えなかったがね。

幾分まともになったが、到底一族で暮らせる状態ではなかった。連れて帰れば監禁される――少なくとも、デイビッドは間違いなくそうしただろう。一族のためにも、ユリア自身のためにも、わたしや、わたしの両親のためにも…。

だが、わたしにはそんなことできなかった。自らの手でこんなにしてしまった妹を、監禁するなど……わたしのせいで最愛の妹が一生暗い部屋に閉じ込められて暮らさなければならなくなるなど、堪えられなかった――…

『…――それで、わたしはどうしたと思う？』

ジュラダンが尋ねた。すると、ジャックは静かに首を振る。

『…ユリアの言うことに付き合っただけでやることにしたんだ。彼女を一般的なモラルに当て嵌めようとすると、どうしても監禁するとかして押さえ付けなければならなくなる。だが、逆にわたしが彼女の言うことに付き合っただけでやれば……そうすれば、彼女は自由に生きることができる』

ジュラダンはふっと笑った。悲しげにも、狂っているようにも見える笑い方だ。それからその笑みを浮かべたままで、独り言のように付け加える。

『ユリアが世界に合わせられないのなら、世界がユリアに合わせればいいんだ…』

わたしは北の孤島に1軒の家を建てた。ユリアの新しい家だ。その後、わたしは一族に帰る。家にはジェーンもいたからね…。

そうこうしているうちに、おまえが生まれた。もう今、こんなふうになっているから言うんだがね…ジャック、おまえが生まれたときは、ジェーンの時ほど喜べなかった。すまない……だがね、そのときはどうしても、どうしても……おまえがいなければ、ジュリアは1人で実験できたはずだ、そうすれば、ユリアはあんなことにならずに済んだ……そんなふうには思わずにはいられなかった。いや、分かっている。ジュリアのせいではない。ましてやまだ生まれてもいないおまえのせいであるはずがない。最後にユリアの主人格を消してしまったのは、紛れも無くわたしだ。それは分かっていた。分かっていたからこそ、誰かのせいにしたかったんだ…。

おまえが生まれて3ヶ月くらいすると、とうとうわたしとジュリアは離婚してしまった。というより、わたしがジュリアを追い出してしまった。これを機に、デイビッドとわたしの関係が決定的に悪化したのは言うまでもない。ジュリアはデイビッドのいる実家に戻りはしなかった。ユリアのことがあったから帰れなかったんだろうね。一族を勝手に出たりはしなかったが、わたしともデイビッドとも距離をとっていた。

これ以来、わたしは1人でおまえたち2人を育てることになった。奇妙なことだが……どう考えてみても、良い子なのはおまえの方だった。よくいろいろなことを聞いてくる子だったね。“あれは何？”“これはどうなってるの？”“何でこうなるの？”“どうしてそうするの？”…納得できるまで質問攻めだ。でも、わたしや周りの大人の言い付けには従順だった。かといって何を言われても従うというわけでもなく、2才のときにはもう、おかしいと思うことにはきちんとそう言えるようになっていた。うん、発育は早かったよ、本当に…。

それに比べて、ジェーンはちょっと…捻くれていてね。とりあえず、面倒見のよい姉ではなかった。仕方がないね、親が悪いんだ。わたしがジュリアと離婚したとき、ジェーンはもう8才だった。それまでの半年間、ずっと両親の不仲を目の当たりにしてきたんだ……最後の方は、互いにロッドを向けかねない勢いがあったからね。そんなのを見ていれば、捻くれるのもまあ無理はないだろう。

ああ、少し話が逸れたね。

ジュリアと離婚して、わたしは1人でおまえたち2人を育てることになった。だが一方で、ユリアの方にもほぼ毎日通っていた。そんなわたしの行動を不審に思ったのが、デイビッドとジェーンだ――…

『…――おまえがどれくらい覚えているのか分からないが、おまえが1才を過ぎたあたりから、デイビッドはおまえに接触するようになった。覚えてるか？』

ジュラダンの問いに、ジャックは黙って頷いた。

『ええ……はっきりとはありませんが、何となく覚えています』

ジャックが答えると、ジュラダンは

『…そう…』

と呟き、視線を逸らせて足を組み替える。それからまたジャックの方に向き合うと、今まで通り

の調子で話を再開した。

デイビッドはさりげなくおまえに近づくと、おまえを通じてわたしに探りを入れようとした。デイビッドは不思議と、自分がおまえの伯父であるということは話さなかったみたいだね。おまえはあくまでも、わたしたちの中の偉い人が優しくしてくれている、そう思っているように見えた。だがそれでも、わたしにとってこれはあまり思わしいことではなかった。わたしがユリアを見つけたことも、誤って主人格を消してしまったことも、わたしが彼女の――文字通り狂気の沙汰に従っていくことにしたということもすべて、もちろんデイビッドには隠していたからね...いや、誰にも言っていないんだが。しかし、幼い子供2人を置いて毎日出掛けるわたしの姿は、あまりにも不自然だったのだろう。デイビッドはおまえを通じて、わたしが何をしているのか探ろうとしていた。

一方、毎日留守番を任されるジェーンも不審に思い始めていた。彼女はおまえと違って、本来のユリアがどんな人だったのかも、ユリアが二重人格になってしまったことも、しっかりと知っていたからね。だが、わたしはまだあの子は小さいからと油断していた。9才ぐらいだったかな...そしたらとうとう...ジェーンに気づかれてしまったんだ、わたしのやっていることをね...。

まもなく、ついにキュアラ一族も戦争に巻き込まれてしまった。この少し前だったかな、おまえがミルクを拾ってしまったのは.....普段は素直なのに、あの時はびっくりするくらい頑固だったね。

そんななか、わたしはもうユリアのところへ毎日通うのは困難だと感じていた。だから、向こうへ引っ越すことにしたんだ。

だが、一族が戦争に巻き込まれると、デイビッドはわたしを一層厳しく監視するようになった。彼からして見れば、わたしがどこで何をしているのかまったく分からないのだからね、もし敵の手引でもしていたら困ると思ったのだろう。わたしはいろいろ考えたよ。本当に.....少しジェーンに相談したりしてね、まだ10才の子供だったのに...。

問題は、キュアラ一族を離れても村の様子がある程度分かるようにしたいということだった。デイビッドやジュリアのことも気にかかっていたからね――そう、この期に及んでもまだ、2人のことが気にかかっていたんだよ。特にジュリアは、このころ行方不明になっていたから.....心配だったんだ。

わたしはジェーンを一族に残していくことにした。まさか3才のおまえを置いていくわけにはいかないからね...まあ、ジェーンを残し、おまえを連れて失踪するというにことにしたわけだが、それもなかなか難しかった。戦争中で混乱していてもね、デイビッドはわたしの監視は怠らなかったんだよ――...

『...――そこでいろいろ考えたわたしは、一芝居打つことにしたんだ。十八番の呪文を使ってね――...』

ジュラダンがくっと口角を上げた。今日ここで話しているときにはずっと見せなかった、この

前までの、冷酷な笑みだ。しかし、その眼は冷たいというより、むしろ哀しい。

その日、わたしは敵に避難所の場所を漏らした。もちろん、敵はわたしたちのところへ襲撃してくる。だが、敵の襲撃より先に味方からの連絡が入った。避難所が狙われているという連絡だ。これで避難所はパニックになった。そのパニックに乗じて、わたしたちも駆け出す...

逃げる途中で敵に出くわしただろう？実はね、すべて茶番だったんだ。わたしは人形を操る呪文が得意でね.....上手かったらう？まさか人形だなんて...本物の敵にしか見えなかったらう？あの茶番を知っていたのはわたしだけだった。ジェーンにも知らせていなかった。戦闘の中、ジェーンだけ誘拐を装ってわたしたちから離し、わたしたちは彼女を捜す振りをしながらどこかへ.....北の孤島へ行ってしまふ。そんなつもりだった。

ところがね、そこに邪魔が入ったんだ。言うまでもなく、ジュリアだよ。彼女は、これが茶番であることには気付いていた。だが、その目的を勘違いしていたんだ.....ジェーンに見えないところで、わたしがおまえを殺す気だとね。だからジュリアは、わたしを攻撃しようとした。

わたしもね、咄嗟によく考えたんだよ。計画を潰したくない、むしろこれを利用したいとね...ジュリアのことが心配だったのに、いざとなったら利用しようとしたんだ。

わたしはわざと、おまえがいる方に動く。

“危ないっ!!”

...ジュリアは当然わたしの動きを追って攻撃してくる。彼女があまり破壊力の強い攻撃をしてこないことは分かっていた。すぐ近くにおまえがいるからね。だからわざと掠る程度で攻撃を受けて、倒れた振りをしたんだ。それを見たジュリアは、すっかり混乱してしまった。おまえを殺そうとしていたはずのわたしが、おまえを庇おうとしたことにね。まずわたしがおまえを殺そうとしていたという話が誤解だし、さらに冷静に考えれば、彼女は初めからわたしを狙っていたのだから、庇うも何もないと気づいても良かったはずなんだが...まあ、気が動転していたんだらう。

とにかく、そのせいで彼女はロッドを降ろすのが遅れた。するとそのロッドは、わたしの真後ろにいたおまえに向いているわけだ...当然、今度はおまえの誤解を招く。

まさかおまえがあんなことをするとは思っていなかったよ。だが、話はすべて上手い方向に流れていた。ジェーンを“誘拐する”ことにも成功したし、ジュリアもおまえも気絶してしまった――

『え？』

ジャックが思わず遮った。

『ああ、そうだよ』

ジュラダンはくつつつと笑う。

『死んではない.....木に激突して、気を失っていただけだ。まあ、勘違いするのも無理ないよ

。おまえはまだ3才だったし.....あの後わざと、ジェーンにおまえが殺したんだと責めさせたりもしたしね...』

おかしそうな口調で話すジュラダンと、ジャックは初め当惑した眼で見つめていた。訳が分からない、信じられない、そんな眼だ。しかしその眼はやがて、背筋が凍るほど冷たく、鋭いものになっていく。睨んでいるのではなくただ見つめているのだが、そのまっすぐさが余計に怖い。

しかし、サファイアからしてみればむしろ、ジャックがこう静かに座っていられることの方が不思議だった。

私だったら、絶対怒鳴ったりしちゃいそうなのに...

しかし、ジュラダンも本当におかしいと思って笑っているわけではないようだった。くつくつ笑う彼の三日月のような眼は、哀しい悲鳴を上げているかのようなのだ。

さて、とりあえず上手い方向に転びはしたものの、ジュリアを放置していくというわけにはいかなかった。放置していけば、彼女がデイビッドに報告してしまうのは目に見えていたからね。とは言え、おまえと彼女の両方を連れて誰にも見つからないよう逃げるのも難しい。結局わたしは、おまえを残してジュリアを連れていくことにした。ジュリアを残していく方がはるかに危険だと思ったわけだ。それに、おまえは親殺しの罪で処分されるだろうと思ったからね...

ところがデイビッドは、おまえのしたことを“母親殺し”ではなく、“父親の仇討ち”と解釈し、罪を言及しなかった。

ジェーンを通じてそれを知ったわたしは、ジェーンにおまえを殺させようとした――そう、それまでわたしは、継閥派になった ※189 ことをデイビッドや一族に知られないようにしていた。ジェーンについてもそうだ。しかし、戦争はキュアラ族を大きく変えた。平和な一族を、継閥派の一族にしてしまった。ジェーンを通じてそれを知ったわたしは、もうジェーンが継閥派であることを隠す必要はないと気付いたんだ.....まあ、わたし自身は死んだことにしておいたがね。

だが、ジェーンはおまえを殺し損ねた。わざわざ言うまでもないね、今おまえがここにいるんだから。

※189...ユリアがやろうとしていた“世界征服”という行動は、紛れもなく暗黒行為である。それを目指す吸血鬼なら、広義の継閥派に入るのだろう。

それからまもなく、ユリアはジミー・カラントの『もうひとつの世界と最果て』という論文を読んだ。驚いたかい？そう、彼女は論文を読むなんてことができたんだよ。というより、そういうことだけできたんだ...支障を来していたのは日常生活だからね。

その論文は夢幻界と最果てについて述べられたものだった。それまで伝説だと思われていたパラレルワールド“夢幻界”が存在するということが、さらにそこには、“時の最果て”“空間の最果て”という世界への出口が存在し、実界も夢幻界もそれら2つの大きな世界に浮かぶ船のようなものにすぎないということ、その2つの世界にはそれぞれ専門の守人が必要であるにもかかわらず、2000年以上“仮”の守人1人だけで切り盛りされているということ...ジミーはそんなことを述べ、それを踏まえたうえで、いつか最果ての均衡が崩れてすべてが消えてしまうのではないかと警鐘を鳴らしていたんだ――...

『...――それを讀んだユリアは、いったい何と言ったか分かるかい？』

ジュラダンは両手の指を組み合わせたうえに顎を載せ、ジャックの眼を少し下から覗き上げつつ尋ねた。しかし、ジャックに分かるはずもなく、彼は黙って首を振る。それを見たジュラダンは、ぱっと身を起こして背もたれに寄りかかると、腕を組みながら一瞬斜め下に目を向け、やりきれないというように

『ユリアは、その守人を作って操ることで、ありとあらゆる世界を支配しようと言いだしたんだ...』
と言った。

ばかばかしいと思うかもしれない。実際、わたしもそう思った。しかし、わたしは彼女の言うことに付き合うと決めたからね。わたしはジェーンをジミーのところへ派遣した。「守人が必要なのであれば、作ってしまえばいいじゃないか」などと言って、説き伏せさせたんだ。

彼はまず、最果ての入り口は夢幻界にしかないから、夢幻界を捜すところから始めなければならないということを指摘した。それから、守人を作る呪文を教えてくれた。“バベルの塔”と呼ばれる呪文だ。莫大な魔力を必要とする――つまり、それだけ多くの人を殺して魔力を集めないと出来ない呪文であることから、そう呼ばれているそうだ――...

『...――ただ、彼はその呪文を教えてはくれたうえで、実現するのは不可能だと言った』

ジュラダンは口角だけ持ち上げた状態で、ゆっくりとそう言った。

『まず、必要な魔力を集めるには、大勢の吸血鬼を同時に殺さなければならない。ジャック、魔力の吸収率は知っているかい？』

ジュラダンがそう尋ねると、ジャックは機械のような声で

『487Ma以上の魔力を持つものが自分の魔力以上の魔力を持つものを殺すという条件において、(自分と相手の魔力の差) $\times 3.45 \times (10^{-4}) - 1.23 \times (10^{-2})$ 』
と即答する。

『そう、その通りだ。ということは、わたしたちと殺される人たちの間に魔力の差がなければな

らない。間違っても、わたしたちが彼らの魔力を超えるようなことがあってはならない。そう考えると、1人ずつ殺しては、どんなに頑張っても必要な魔力を集めることはできないんだ。多くの人を、一気に殺さなければならない。1500Maの魔力を持つ人間を1人作るには、魔力の強い吸血鬼55000人を同時に殺さなければならない...ちょっと、難しそうだろう？』

ジュラダンはその言うと、平然と微笑んだ。ジャックが何も答えなくても、まったく気にする様子はない。

55000人——そんな人数をたった3人で殺してしまうなんて、そんな例は現代でも聞いた例がない。だが実際には、サファイアとルビーの2人を作っているのだから、少なくとも11万人は殺しているはずだ。さらに、他にも作っていたり失敗したりしていれば、その数はもっと大きくなる。

『彼は、守人であれば最果ての扉に強く惹かれるだろうと話した。ただ、どんな人が守人になりうるのかは知らなかったようだ...いや、むしろ、他のことをどうやって知ったのかと疑問に思えるべきなんだろうね。当時、夢幻界ですら“存在するらしい”という伝説があるだけで、確認されてはいなかったのに、どうやって最果てなんてものの存在を知ったのだろう？だが、それだけは企業秘密だと言って教えてくれなかった——...』

わたしとジェーンは、さっそく守人の開発研究を始めた。それと同時に、ユリアは1人でロシアの方へ行った。彼女は彼女でまず夢幻界への入口を開こうと模索していたからね。よく分からないが、そっちへ行った方が都合良かったそうだ。この頃のユリアはもう、1人にしておいても問題ないくらいにまで落ち着いていたんだよ。

おまえが10才くらいのころ、吸血鬼の森が鉛の森になってしまったのを覚えているね？あれは、わたしたちの実験の副産物だ。初めて“バベルの塔”の呪文を試してみたんだが...その時に生まれたのがジュリーだった。まあ失敗ではない。きちんと独立した生物で、しかもちゃんと働いたりできたからね。だが、成功とも言えないだろう。この時に集めた魔力は10000Ma。700~800人の吸血鬼を殺したわけだ。わたしたちがユリアとロシアへ行かなかったのはこのためだよ。吸血鬼が多く住む魔法森林など、ここぐらいしかなかったからね。そのためにわたしは北の孤島に、ジェーンはキュアラ一族に残ったんだ。...だが、その魔力の大半は外部に漏れてしまった。その結果が鉛の森だ。結局、ジュリーの持つ魔力は20Ma程度。ほぼ魔力を持たないに等しい状態だった。 ※190

だが、成功率0.1%の呪文を1発で成功させたことは奇跡だった。その後7年の研究で、どれだけの吸血鬼を殺して魔力を集め、実験を繰り返したか分からない。

そして499年12月10日、とうとうわたしたちの研究が成功し、守人が完成した。水と花にそれぞれ15万Maの魔力を与えた結果、1500Maの魔力を持つ少女が2人——サファイアちゃんとルビーちゃんが誕生したんだ。どうでもいいことだが、この姉妹の名前はおもしろいね。違う人物が違う場所でそれぞれ付けたのに、たまたま兄弟石の名前になっているんだから...

生まれた当初は、2人とも人格を持ってはいなかった。“バベルの塔”の呪文で作れるのは守人の肉体のみだからね。わたしたちは、人格を持たない守人を所有呪文で操ることで、ありとあらゆる

る世界を自由自在にできるようにする予定だったんだ。よく言われていた“人間兵器”っていうのはこのことだよ。言うことを聞かない世界は、彼女らを使って潰してしまえばいい——まさに、最強の“人間兵器”だろう？

この2人に人格を与えたのはジュリアだった。この頃まだ監禁ではなく軟禁状態にあったジュリアは、たまたま屋敷の地下室におかれていた姉妹を見つけると、何を考えたかこっそり2人を持ち出し、すべての元凶となったあの呪文で人格を与えた。

この後わたしたちはジュリアを捕まえたが、もう姉妹はどこかへ行ってしまっていた。それからジェーンがサファイアちゃんを追って捕まえたんだが、彼女はサファイアちゃんの人格を見て、もう使い物にならないと判断したらしい。彼女はとりあえず、ユリアがサファイアちゃんの魔力を回収できるように砂時計の呪いをかけた。さらに、それを隠すために新月の呪いもかけた...
...ああ、この話はおまえも知っているんだね。それなら飛ばしても問題ないな？

その後1ヶ月足らずで、わたしたちはユリアと合流した。まずユリアが住んでいるはずの館へ行ったのだが、なぜか地下は破壊されたまま放置され、ユリアは見当たらない。それでユリアを捜すのに、1ヶ月くらいかかってしまったんだ。

ユリアとディックくんの主従契約について聞いたわたしが、いったいどれほど驚いたか、想像できるかい？ああ...いや、彼が生きていたことに驚いたわけではないよ.....ジェーンがずっとキュアラ一族にいたんだからね。わたしは、ユリアがディックくんと主従契約を結んだということに驚いたんだ。吸血鬼同士、ましてや親子間で主従契約を結ぶなんて!!ユリアは、ディックくんのことを——あれほど愛していた息子のことを、微塵も覚えていなかったんだ...

その年の7月、ついにユリアは夢幻界への入口を発見した。誰かが夢幻界に迷い込んだことで発生した小さな波動のようなものを、たまたま拾ったって言ってたかな... ※191

わたしたちが最初に着いたのは、青玉島の近くにある小さな島だった。そこから周辺を調べていくうちに、青玉島に人がいるということに気づき、さらにサファイアちゃんが夢幻界に来ているということも分かった。それを受けて、まったく消息の掴めないルビーちゃんを捜すと同時に、リル・メンテと接触して情報を聞き出したり、サファイアちゃんを誘拐してわたしたちに従わせようとしたり、いろいろしたんだが...その話はおまえもよく知っているだろう？

結局、サファイアちゃんを誘拐することはできなかった。このころ、ユリアの状態もまた良くなってきてね、そっちにも手間取っているところへ、ジミーがある情報を教えてくれたんだ。守人は、それぞれの最果てに2人ずつ必要らしい。つまり、サファイアちゃんたち2人を捕まえたところで、あと2人いなければ話にならないということだ。

その情報は、わたしたち3人が同時に聞いていた。ところがね、それを聞いた瞬間、ユリアがいきなり、サファイアちゃんにかかった砂時計の呪いの抑制魔法陣を破いてしまったんだ。いったい何を思ったのか分からないが...まあもう、さらに2人作るなんて不可能だったからね。それで癩癩を起したのかもしれない。ただ、あまりにも唐突にそんなことをしたものだから、わたしもジェーンも止める間もなく、破かれた後に驚くことしかできなかったんだよ。

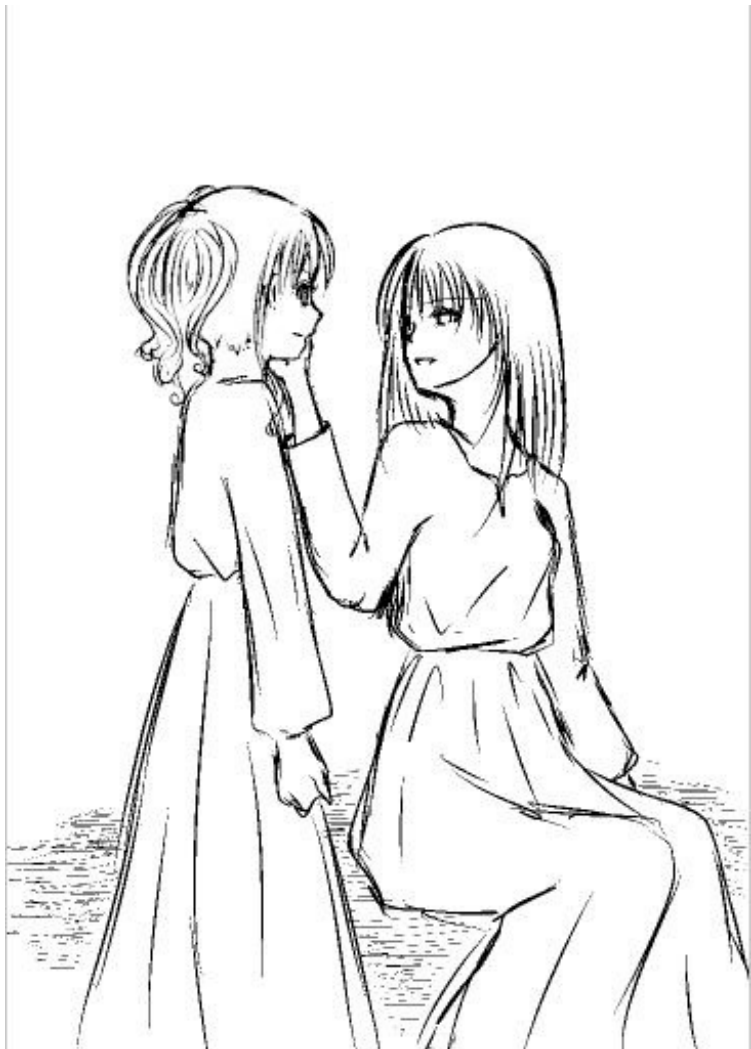
やがて、サファイアちゃんは砂時計の呪いで死んだ。本来なら、その魔力はユリアに行くはずだった。ところが、サファイアちゃんが死んでもユリアに魔力がこない.....誰かが邪魔したん

だね、ジャック。サファイアちゃんの身体が崩れ始めた際、どこかの誰かが、ユリアに魔力が流れるのを阻止しようと先にサファイアちゃんを殺したのだろう。しかし、サファイアちゃんについてはもうどうしようもなかった。そうなってしまった以上、もうどうすることもできない。

一方、わたしたちはルビーちゃんのこと追ってはいた。だがね、あの子についてはどうにも情報が掴めなかった。現に、わたしたちはあの子の最期がどんなものだったのかも、いつだったのかも知らないんだよ。所有呪文も上手く繋がらなくてね…。

この後、わたしたちはジュリアから人格を作り出す呪文を聞き出そうとした。彼女を生かしておいた理由のひとつがこれだからね。だが、彼女はなかなか喋らなかった。それでもどうにか吐かせて、その方法でジェーンがジュリーに試してみたのだが……完成度が高いとは言えないね。はっきり言えば、心も身体も出来損ないだ。だが、おもしろいことにジェーンはジュリーをものすごく気に入ってね……本物の妹のように可愛がっていた。まったく…驚いたよ。なんせ彼女は、本物の弟には愛情を見せたことがなかったからねえ…。

ジェーンは満足していたようだが、とにかくあれでは十分に技術を引き出したとは言えなかった。ジュリアがまだ何か大切なコツを隠しているか、もしくは彼女がよほど上手いかのどちらかだ。



※190...50Ma以上持たないと、魔法を使うのは困難だとされる。現に、非魔法族の中にも30Maぐらいの弱い魔力を持つものはざらにいるのだ。

※191...この時期に夢幻界へ迷い込んだのは、他ならぬディックである。

ユリアは自分が癩癩を起してサファイアちゃんを殺してしまったにもかかわらず、やはり諦めきれなかったのか、何が何でも生まれ変わるのを待つと言い出した。しかし、もう吸血鬼も絶滅目前だし、あと2人守人を作るなんてできるはずがない。だが、それでも彼女は待つと言い張って聞かなかった。そしてわたしは、彼女の言うことに従うと決めたからね。彼女の言うように、生まれ変わってくるのを待つことにしたんだ。

そのためにはまず、わたしたちがそれを待てるだけの寿命を得なければならない。わたしたち3人は無限の寿命を得るために、1人につき200人ぐらいの人を殺して、魔力を集めた。サファイアちゃんとルビーちゃんを作るために殺した数を考えれば――吸血鬼はもともと絶対数が少なかったからね、わたしたちの動きは間違いなく吸血鬼の元来種絶滅に貢献していると思うよ――200やそこらなんて、大したことはない。

だが、ジュリアにもそれをやらせるというわけにはいかなかった。そうだろう？そこでわたしたちは、200年ほどかけて、まったく新しい技術を開発した。それが人工冬眠魔法だ。完成した呪文を実際にジュリアに掛けたのはユリアだよ。わたしは反対したのだが、どうしてもやりたいと聞かなくてね。いったい、何を考えたのやら…。

…この呪文を掛けたことで、彼女はまた副作用を負ってしまった。白色吸血鬼が一般の吸血鬼の魔法を使うのは危険だと、身をもって知っているはずなのに…いや、知らないのか。主人格の記憶は失っているのだからね。これ以来、彼女はテレポート以外の魔法を使えなくなる、魔力出力能力障害になってしまった。

さあ、これからだいぶ時代が飛んで、今度は2003年の話になる。

7月4日、ディマイアがおもしろい報道をしたんだけど…知っているかい？サファイア・クリアシャインが最年少で青玉島女王の側近になったなどという記事だ。ディマイアらしくない、ゴシップ的な記事だが……わたしたちにはまるで、サファイアちゃんが生まれ変わったことを教えるための記事であるかのように思えたね。これを受けて、わたしたちは再び世界征服の活動を始めた。

2006年3月12日、夢幻界5大要所同時爆破テロ。これだけは非常に綿密な計画を立てて臨んだ。目的は、青玉島を混乱させ、王宮を脅し、乗っ取ることで、時の最果てへの出口を手に入れることだった。空間の最果てへの出口はもうわたしたちが抑えていたのだが、時の最果ての方は王宮が隠していたみたいだったからね。それを奪い取ろうというわけだ。

だが、正直なところ、わたしもジェーンもそんなことできるはずがないと思っていた。テロそのものは上手くいくはずだと思っていたが、まずテロが成功したところで青玉島が時の最果てを渡すとは思えない。仮に手に入れたとしても、サファイアちゃんとルビーちゃんを手に入れるのも困難だし――なんせ、それぞれの王宮がしっかりと握っていたからね――それにそもそも、その2人だけでは話にならないんだ。まあ、ユリアだけは何もかも上手くいくと信じきっていたがね…。

無理だと知りながらも、わたしたちは最善を尽くした。

テロは成功しても案の定何にもならなかったが、その後も思いつくことはやってみた。時の最

果てへの出口について情報を得ようとディマイアを襲撃してみたり...次にやったのは、青玉島科学者の誘拐だったかな。言うまでもなく、目的は様々な分野の技術者を手に入れることだった。それに、青玉島から彼らを奪えば、科学技術的にかなりのダメージを与えられるとも思ったしね。一石二鳥だ。

彼らは皆我々への協力を拒んだ。監禁して、協力するまでそのままにしておく脅してもダメだった。例外はアルバート・ウィルソンだ。彼は誘拐する段階から従順だったね。確かに...頭のいい男だ。

...わたし個人としてはあまり好きではなかったが。

わたしたちは彼に、人格を消す呪文の開発をさせた。いや、本当なら...その気になれば、かつてわたしがユリアに使った呪文があったんだがね.....“その気”になると思うかい？誤ってユリアの主人格を消してしまっていて以来、わたしはあの呪文を封印していた。だから、別の人物に別の方法でやらせたかったんだ。

それから、青玉島でまた自爆テロを起こそうともしたね。また王宮を手に入れようとしたわけだが...二番煎じだし、あまり期待していなかったよ。

そのあと、今度はルル・メンテから守人の条件を聞き出そうとした。残り2人も探さなければならぬからね。だが、残念ながら彼女もそれは知らなかったようだ。相当拷問したらしいが、結局吐かなかったというから...その後殺してしまったらしいね。

一方で...今までももちろんサファイアちゃんとルビーちゃんを狙ってはいたのだが、この子たちは意外と強固に守られていてね。あちこちに派遣されたりする割に、情報は厳重に守られていた。だからずっと二の足を踏んでいたんだ。

だが、わたしたちは思い切って青玉島・紅玉高原両国に姉妹を寄越すように要求した。どうにか化学班に化学兵器を作らせたりしてね。そうしたら、おまえたちに出し抜かれた。まあ、あまり上手くいくとも思っていなかったが...でも、あれぐらいしかやりようがなかったんだよ。

ジェーンを目撃されてしまったこととアルバート・ウィルソンを取られたことは痛かったが、一方でこちらもディックくんがいるという情報を得ることが出来た。

それまでも、青玉島におまえがいるという情報はあったんだよ、ジャック。だが、わたしたちはそれを信じなかった.....おまえが200人も殺して永遠の命を手に入れようとするとは思えないからね。だが、ディックくんがいるという情報は、おまえの情報の信憑性も高めた。1500年前にサファイアちゃんの魔力をユリアが回収するのを誰が邪魔したのか、この時に分かったというわけだ。

知っての通り、わたしたちはおまえを引き込もうとした。わたしの発案だよ。ジェーンは大反対だった。おまえが暗黒行為に協力するはずはない、とね...わたしもそう思わなかったわけではない。だが、それ以上におまえが欲しかった。化学界の権威だし、サファイアちゃんのすぐ側にいるし....

『...一一何より、一応は親だからね...殺そうとしたりはしたが』

ジュラダンは自嘲的に笑った。

『ジェーンは絶対に無理だと反対した。おまえが暗黒行為に協力するはずはない、自滅するのがオチだ、と。ただ、彼女はおまえの中で、わたしがいかに大きな存在となっているかも知っていた。わたしなら、おまえを説得できるかもしれない、とね...』

ジュラダンはその言いながら、ジャックの眼をまっすぐに見つめた。ジャックはしばらくそれを受け止めていたが、やがてふと俯く。

『...確かにわたしにとって、あなたは非常に大きな存在でした。身を呈してわたしのことを庇ってくれた父親——そう思っていましたから』

ジャックはゆっくりと言った。膝の上でぎゅっと握った手を見つめている。しかしそれから数秒経つと、ジャックは再びきちんと父親の眼を見据えた。

『ですが、あなたが現れたことで、まさにその部分が揺らいだんです。あの日、本当は何が起きていたのだろうか、と...』

話しながら、ジャックの眼はさらに鋭くなる。

『そこで出てきた姉の名前が、決定打になりました。わたしがどれほど姉を恨んでいたか、どれほど憎んでいたか.....ご存知なかったのですね...』

ジュラダンはしばし黙っていた。黙ってジャックを見つめている。

『...そう、か...』

やがて、ジュラダンがぼつりと呟いた。

『こんなこと聞きたくないかもしれないがね...あの子も悪い子ではなかったはずなんだよ。あの子は幼いときから、わたしたちの事情に——つまりジュリア、ユリア、わたし、あと...まあデイビッドもかな——ずっと振り回されてきたんだ。幼い頃からずっと両親の不仲を目の当たりにし、父親によって暗黒の道へ引きずり込まれていった.....現に、あの子自身の人生って、何1つないんだよ。友達も、恋人もないし.....すべて今話していることに終始しているんだ.....あの子もまた、被害者なんだよ...』

ジュラダンは伏せた眼で遠くを見つめながら、とても辛そうに言う。

『...まあ、加害者はわたしだから、あの子もわたしには言われたくないだろうけどね...』

そう付け加えると、彼はまた自嘲的に笑った。

おまえを引き込むべく、サファイアンコスモス静養地にHHCウィルスを送り込んだ。もともと体の弱いポーラ・カーランドなら発症するだろうからね。案の定、静養地の医師には正しく診察出来なかった。そこで、おまえが派遣されたわけだ.....医学班の科学者はわたしたちが握っているわけだから、おまえしかいない。そして、その帰り道を狙ってわたしが行ったわけだ.....あとはおまえも知っての通りだ。

さて、こちらの手応えは微妙だった。おまえはわたしの登場に、かなり動揺したようにも見えた。わたしとの待ち合わせにも応じてくれた。その辺りを見ると、上手く行ったかにも思えた。だがそんななか、1つだけ気になることがあった。別れ際におまえが言った言葉.....何だったかな、確か.....

“僕たち...いったい、いくつの命の上に生きているのでしょうか...”

.....だったかな。これは、お互いにとって踏み絵みたいなものだった。わたしは確か、
“おまえなら計算できるだろう？わたしの方なら電卓で足りるよ.....おまえの方は、電卓なんかじゃとても桁が足りないけどね”

と答えたはずだ。

多分おまえは、これを聞いてわたしが暗黒派であると確認したんだろう。同時にわたしも、おまえのこの質問で、おまえが希光派であることを一一いや、光明派と言った方が正しいかな...もう吸血鬼の話ではないからね一一再確認したわけだ。

7月15日におまえを迎えるとき、わたしたちはもうおまえが仲間になってくれるとは期待していなかった。おまえたちを一一ああ、どうせ4人来るだろうと思っていたからね一一捕まえる気でいた。とてもそうは見えなかっただろう？いたのはわたし、ジェーン、ジュリー、あとはファミンツィン通りの哀れな住人たちだけだ。これだけで、おまえたちを捕まえられるとは思っていなかったよ。でも、それしか出来なかったんだ。どうしてもまともな人材を得られないのなら、むしろ、あの通りの住人に協力してもらおうと考えた。あんな哀れな民間人が相手だと、おまえたちは尻込みするんじゃないかと思ってね....

...だが、期待は外れた。ディックくんとルビーちゃんは、予想外の冷酷さを見せた。青玉島自爆テロ未遂の時のおまえとサファイアちゃんもそうだが...おまえたちは、仕事だと割り切ると、こちらが思ってもみない冷酷さを見せることがあるね。

『...一一さらに、サファイアちゃんにまんまと侵入されたことも予想外だった』

ジュラダンはずっくりそう言うと、

『どうやったんだ？』

と聞いてきた。

『答えると思います？』

ジャックが冷たく一蹴する。

ちなみにどうしたのかというと、サファイアはペーターに転送してもらったのだ。 ※192

...まあ、予想外の極めつけはジュリーの行動だがね。何を思ったか、あの子は持ち場を離れ、ジェーンとサファイアちゃんが戦っている部屋へ入った。多分応援に来たのだろう。ジュリーが部屋に入った時、ジェーンはまさにサファイアちゃんに向かって閃光を放ったところだったんだが、それをサファイアちゃんが避けてしまったがために、その閃光は真後ろにいたジュリーの頭を貫通してしまった。さっき、ジェーンがジュリーを可愛がっていた話をしただろう？ジェーンは戦闘を投げ出し、慌ててジュリーに駆け寄った。普通だったら、そんなことをしたら次の瞬間には敵に殺されてしまうものだが.....サファイアちゃんはただ見ていたね。

ところが、ジュリーの死体はジェーンの腕の中で爆発した。どうして爆発したのかは分からないが.....やはり、出来損ないだったんだろう。そうなれば当然、抱きしめていたジェーンも巻き添えだ。そのかわり、運のいいサファイアちゃんは無事だったが...

...あの時、おまえはわたしに“父さん、何に気を取られたのですか？”と聞いてきたね。わたしは壁越しに、この光景を見ていたんだよ...

『...——わたしはここで捕まった。あとのことは何も知らないよ、ずっとこの王宮にいたんだから...』

ジュラダンの話はこう終わった。

『...そうですか』

ジャックはそう言いながら、ちらっと電子板を確認する。だいたい聞きたかったことは彼の話の中にあっただが、それでも聞き洩らしがないかどうか確認しているのだ。

『...1500年前のことですが、ユリアはシェルダン少年に何をしていたのですか？』 ※193

ジャックが質問すると、ジュラダンは首を傾げた。

『さあね...その時わたしは吸血鬼の森でクリアシャイン姉妹を作る研究をしていたから、その辺りのことはあまり知らないんだ。だが最後は、無理矢理作った夢幻界の入口を通過する実験の、実験台にしたようなことを聞いている』

『そうですか...』

ジャックはそう頷くと、今度は

『現代の話ですが、パシュカーレ山の巨大地下施設は何ですか？』

と尋ねる。

『サファイアちゃん辺りが気づかなかったかい？』

ジュラダンは驚いたように聞き返してきた。

『あれは巨大立体魔法陣だよ。黒地に白い線で描いた、暗黒魔法陣...何らかの方法——例えば、然るべき人が空間の最果てに行くとかね——で刺激されると、その世界の方が勝手に暴走しはじめるという...』

ジュラダンはそこまで言うと、ふっと微笑んで

『...世界征服どころか、世界の破滅を招く魔法陣だ』

と付け加える。

『それを知っていたのですか？』

ジャックは微かに驚きの色を見せた。当然だ。記録室にいるサファイアもまさかの言葉に愕然としている。

...そんなことしたら世界が終わっちゃうって.....知っててやってたの？

『...そうだよ。ユリアはいつの間にか、時の最果てと空間の最果てを混ぜてしまえば、その両方を自分自身が支配できるという考えにとりつかれていたが...そんなことをしたら、それこそこの世の終わりだ。空と海を混ぜたら、その境目にある船がどうなるか...考えるまでもない。もしもそれを知らなければ、こんなテロとか何とかなんて、やらなくてよかったんだ。ルビーちゃんだけ誘拐してきて、空間の最果てに入れてしまえばいい。そうすればユリアの巨大立体魔法陣が発動し、2つの最果てが混ざり合い、すべてが終わってしまう。だが、わたしもジェーンも最果てを混ぜた末に何が待っているのか知っていた。だから不可能と分かっているにもかかわらず、どう

にかして守人を4人揃え、2つの最果てを手に入れようとしていたんだ...』

ジュラダンはそのままで言うと、片手で頬杖をつき、少し下からジャックの眼を覗きこんだ。口元だけが微かに笑っている。

『だが、別にわたしは世界征服をしたかったわけではない。まったく矛盾することを言うが、世界がどうなろうと、どうでもよかったんだ。ただ...ただ、ユリアを、社会にあわせて監禁したりしたくなかったんだ。わたしのせいで、ユリアは完全に壊れてしまった.....もう二度と社会に適応できなくなってしまった。だったら開き直って、暗黒の道を生きればいい.....暗い部屋に一生閉じ込められているよりは遥かにマシじゃないか』

ジュラダンは、優しく儂い青い光が陽炎のように揺らめいている眼を細めて微笑むと、

『ユリアが幸せならそれでいいんだ。あの子が望むなら、世界が破滅しようとうとうと構わない。世界が破滅したら、あの子も破滅してしまうからと思って頑張ったが...それも彼女が望むなら...もう何だって構わないんだ...』

と結んだ。



※192...サファイアとジャックが開発した魔法陣MWで術者自身を転送することは出来ない。

※193...おそらく、この質問は電子板に書かれていたものではなく、ジャックがディックのことを思って聞いておいたことだと思われる。

取り調べが終わったあと、サファイアとジャックはすぐに女王の間へ戻った。サファイアはもう、ジュラダンの話とほぼ同時進行で供述内容の要約を作っている。それと、全自動メモプログラムが書き留めた2人の会話そのままの記録、さらに6つのカメラで撮影された音声・映像……この3つがピュアに提出される。

「……なるほど……」

ピュアは読み終わると、目を伏せて俯きながら呟いた。一緒に読んでいたペーターの表情も非常に重い。

「…どうだったんですか？」

報告を読んでいるピュアたちと、父親の取り調べを終えてきたばかりのジャックを交互に見つめていたディックが、そう言いながら近づいてくる。

「…先こっち」

しかし、ピュアはそう言って先にルチアーノに渡した。

「あ、どうも……ごめんな」

ピュアから電子板を受け取ったルチアーノはディックとルビーに謝ってから読み始めたが、読み進めるにつれその表情はみるみるうちに変わっていく。

「…な……なんだ、これ…」

読み終えて愕然とするルチアーノの手から、ルビーがひょいと電子板を取り上げた。

「読んでもいい？」

ルビーがルチアーノとピュアに尋ねる。

「ええ…読んだ方がいいわ」

ピュアが重い表情で頷くと、ディックとルビーは一緒に読み始めた。

「なあなあ姉ちゃん、一緒に散歩でもしない？」

勤務時間が終わって女王の間を出た瞬間、ルビーがサファイアを誘った。

「あ、行く行く!!」

サファイアはそう言いながらルビーの方へ駆け寄ると、くるっとジャックの方に向き直って

「というわけで行ってきます!!」

と笑顔で手を振る。

姉妹が仲良く歩いて行く姿を、ジャックとディックはしばらく見送っていた。

「…なんかさ、ルビーに気い遣われるとめっちゃめっちゃ違和感あるんだけど…」

やがて、腕組みしたディックがぼそっと呟く。

姉妹は、ディックとジャックが2人で話をしたいのではないかと気遣って、わざわざ散歩に行ってしまったのだ。

5分後、ジャックは自室で紅茶を淹れていた。ティーポットから、赤いラインのカップとブルーグレーのラインのカップに、深い紅色の液体を注いでいく。

ジャックが紅茶を運んでくると、ディックは

「サンキュー」

と言いながら目の前におかれた赤いカップに口を付けた。

8月だが、青玉島の夏は夜になると結構涼しい。

「...にしても...まさかなあ...」

カップを置いたディックが、天井を仰ぎながら独り言のように言った。

まさにその一言に尽きる。戦争中にジャックを襲った悲劇。デイビッドがジャックとディックに対して異常に親切だったこと。ディックとユリアの関係。ジェーンがずっとサファイアを狙っていたこと.....無関係だと思っていたことが、すべて繋がっていた。すべて、ジャックとディックの親たちから始まっていたのだ。

「...ってかさ、デイビッドさん何で教えてくんなかったんだろ!？」

ディックが突然憤慨し始めた。

「教えてくれたってよくね?!教えてくれりゃあさ...」

ディックは自分の両親について何一つ知らなかったのだが、今まで誰にも——ジャックにさえも、それを気にしている様子を見せたことはなかった。しかしもちろん、本当に気にしていなかったわけではない。特にディックは髪や目の色が周囲と違うから尚更だ。

「そうすりゃユリアとだってそもそも主従契約しなかつただろうし...」

「デイビッドさんは、おまえが誰と契約するのか知らなかったのか？」

ジャックが眉を顰めて聞くと、ディックはこめかみに手をあて、思い出すように顔を顰めながら

「うん...だって俺、あいつの名前知ったのキュアラ一族を出た後だもん」

と答える。それに対し、ジャックは

「ああ、そう...」

と半ば呆れたような眼をした。ディックに呆れているのではなく、主従契約という制度のいい加減さに対して呆れているのだ。

「...しかも、やっぱさ.....デイビッドさん、あんな近くにいたのに...」

彼が自分の父親だと知っていたら...やはり、接し方も感じ方も変わっていただろう。

「.....1回くらい、“父さん”って呼んでみたかったじゃん...」

本当はずっと、“父さん”は近くにいてくれていたのだ。にもかかわらず、ディックの中の“父さん”は“父さん”ではなく、あくまでも“デイビッドさん”なわけで.....感覚としては、ずっと両親を知らないままだ。

「...デイビッドさん、本当は何をどこまで知っていたんだろう？」

今度はジャックがぽつりと呟いた。

「父が隠しているつもりでいたことも、本当はかなり気づいていたんじゃないか？現に、おまえがキュアラ一族に来た時、すぐにおまえがいたソルジャー族のリーダーを言い当てたじゃないか...」 ※194

「あ、確かに」

ディックはそう言うと、

「だったら分かった時点で迎えに来てくれたってよくね?!」

と怒り出す。

「キュアラ一族があんな状態でなければそうしたんじゃないか？」

ジャックが微かに口角を上げた。

「ソルジャー族は良い村だったんだろう？そこから、わざわざあれほど治安の悪い一族に引き込むのは、誰でも躊躇うと思うよ」

現に、ジャックだってキュアラ族から出て行くディックを、
“こんな村で戦々恐々としながら一生を終えるより、どこでもいいけど平和なところで幸せになってほしい”

と言って見送ったのだ。

「……でもさあ…」

しかし、ソファの背もたれに肘をつきそっぽを向いてそう言うディックの表情は、やはり不満げである。

窓の外では星が瞬いていた。風が吹いているのか、窓がガタガタいつている。

窓の音しか聞こえない中、突然ディックはバツと身を起こすと、

「…ってかあいつ、もしかしておまえの両親のことも気づいてたんじゃね?!」

と叫んだ。

「僕もそんな気がする」

ジャックも小さく頷いて同意する。

「事故に近いとはいえ、母親を殺した子に対して何の刑罰も与えないというのはいくら何でも異常だ。しかも、殺された“母親”はデイビッドさんの妹だったわけだし…」

「…けど、実はおまえがお母さんを殺していないと知っていたとすれば、むしろおまえを罰さないのは当たり前」

ジャックの話の後半部分を引き取ったディックに、ジャックは再び頷いた。

「…あいつのこと、ぶん殴ってきていい？」

ディックが嫌に据わった眼で呟くと、ジャックが

「いや、もういないと思う」

と指摘する。

「だってさ、酷すぎるだろ!!おまえがどんだけ苦しんでたか、あいつが知らなかったわけねえじゃん!!」

ディックは自分の話の時よりもっと激しい勢いで憤慨した。

「…まあ…」

そんな友人に対しありがたく思いながらも、ジャックはふと俯いて考える。

父さんの口振りでは、母さんはまだ生きていたみたいだった。でも、だとしたら今どこにいるんだ？…まさか…

ジャックは最後にパシュカーレ山の地下施設を爆破してきたことを思い出す。

…まさかあの時に…

そこまで考えたところで、突然電話の呼び出し音が響いてジャックの思考を遮った。

「はい？」

ジャックがすぐに応じると、サファイアの急ぎ込んだ声が聞こえてくる。

『ジャック、今すぐ実験棟の前の庭に来て!!』

※194...当時の吸血鬼の苗字は、その一族が得意とする職業名となっていた。Ex. “Curer”(癒す者)“Soldier”(戦士)

従って、同じ名字の一族はたくさん存在したのだ。

ジャックたちが話し始めたころ、サファイアとルビーは王宮の庭をのんびりと歩いていた。夜のひんやりした空気が心地よい。

「...私たちが生まれるのに...どれくらいの人が必要だったんだっけ？」

舗装された道をじっと見つめながら、サファイアが小さな声で尋ねた。

「さあ...でも、何万とか何十万とか...そういう数だろ？」

ルビーは空を見上げている。ちょうど姉とは逆だ。

「...うん...」

当たり前の話だが、サファイアたちが生んでくれと頼んだわけではない。彼女たちの意志とは関係なく作られたのだから、その過程で何十万人の命が注ぎ込まれようと、知ったことではないと言い張ることも、まったく不可能なわけではない。

...でも...

やはり申し訳ない気持ちが重く押し掛かってくる。

家族を懸命に支えていた人。自分の夢のために頑張っていた人。成長していく子供の姿に幸せを見出だしていた人。無限の可能性を秘めた子供。みんな友達がいたり、家族がいたり...恋人がいた人もいただろう。そんな人たちが、何十万人も殺されたのだ。

...私たちを作るために...それだけのために...

「...なあ姉ちゃん？」

「ん？」

ルビーに後ろから呼び掛けられて、サファイアが振り返った。

「うちら...そういう人たちにちゃんと報いてると思う？」

そう聞いてくるルビーは、依然として星空にひたむきな視線を向けていた。まるで、その星ひとつひとつが自分たちのために死んだ人々だとでも言うかのようだ。

「...え...」

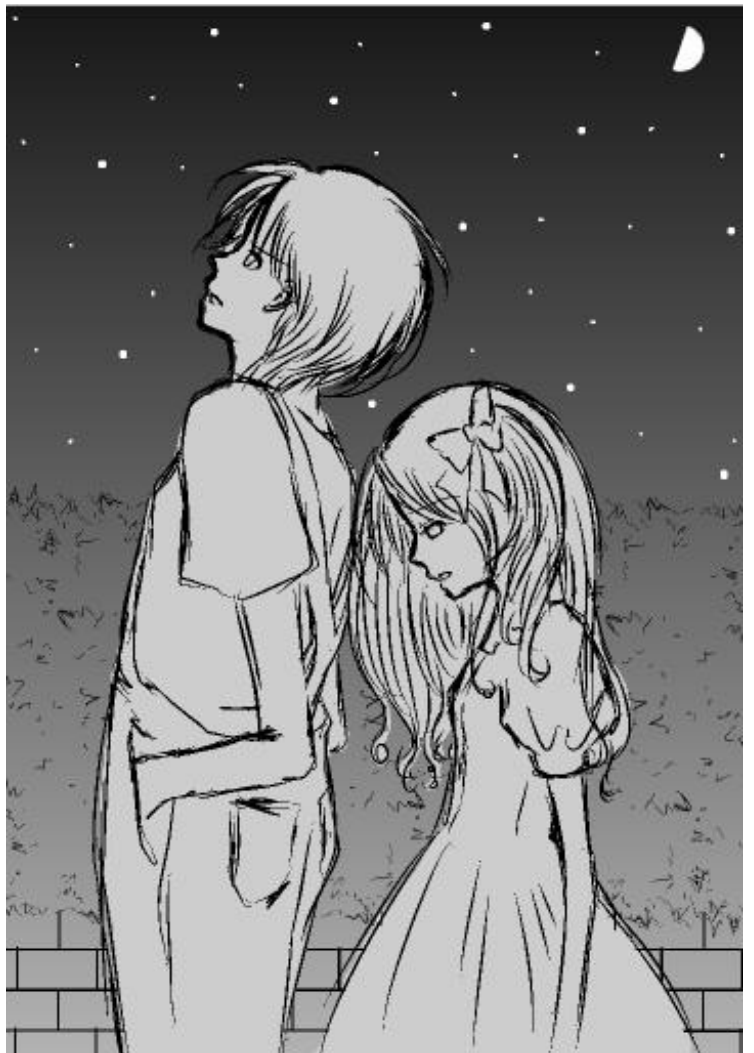
サファイアが微かな声を漏らす。

「そういうことだろ？そんだけの人命をもらってるわけなんだからせめて、その人たちが皆が“まあしょうがないか”って納得できるような生き方をしなきゃいけない...そういうことだろ？」

「.....」

ルビーの考え方に、サファイアは呆然と立ち尽くした。言葉も何も出てこない。

...私たちのために犠牲になった人たちが、納得できるような生き方...そんなこと、考えもし



なかった。思い付きもしなかった。...そんなこと...

「...姉ちゃん？」

固まってしまった姉を、ルビーが心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫？」

「...うん...」

サファイアは小さく頷く。

「ちょっとびっくりしただけ...ルビー、すごいね」

そう言って少し微笑むサファイアに、ルビーはくいと首を傾げた。ルビーの言葉はサファイアを愕然とさせたが、ルビーにしてみればそれが当たり前の思考回路なのだ。

不意に生け垣がガサガサと音を立てた。2人が振り返ると、茶色の猫が現れ、また別の生垣の中に消えていく。

「...何か今の子、ディックと少し似てるね」

サファイアがくすっと笑いながら言った。すると、ルビーも

「確かに...」

と笑ってから、

「でもやっぱ、こっちの方が似てるよ」

と言って例のぬいぐるみキーホルダーを取り出す。

「まあね...」

それを見たサファイアは、またおかしように小さく笑った。

「...あ...ディックって言えば、あいつ今まで両親のこと知らなかったわけ？」

ルビーが問いかけると、サファイアは

「そう...なんじゃないかなあ...」

と首を傾げながら、再びゆっくりと歩き始める。

「聞いてないの？」

ルビーの方を向いたサファイアが、そう聞き返した。サファイアはジャックから、ジャックの家族の話を知っている。だから、ルビーもディックのことは知っているのだと思っていたのだ。

「いや...何も聞いてないよ。うち、ディックのことって何も知らないんだよな...」

ルビーは首の後ろに手をやりながら俯く。

「まあだけど、ジャックの方はよかったなあ。お母さん殺しちゃったと思ってたけど、要は――本当は殺してなかったんだろ？」

ルビーの言葉に、サファイアは

「うん」

と頷いた。少しほっとしているようだ。

「よかった.....ジャック、ずっと気にしてたみたいだから...」

言葉は少ないが、サファイアは心底安心した様子で眼を伏せ、微笑んでいる。

そんな姉の姿を、ルビーはしばらくじっと見つめていた。それからぽつりと、唐突に

「.....姉ちゃん、ほんとに綺麗になったな」

と呟く。

「え？」

サファイアは呆気にとられたように聞き返した。

「いや……前からめっちゃめっちゃ可愛かったけど……それだけじゃなくて、ほんと綺麗になったなあ…って…」

ルビーはあくまでも真剣に、真顔で言っているのだが、サファイアは

「んもうっ!!ルビーは…」

などと言いながらルビーの腕あたりを肘で軽く小突く。

「暗くて見えないからそういうこと言うんでしょっ!!」

どうも、ルビーの言葉をまったく本気とっていないようだ。

「いや、ほんとだって…」

騒ぎ始めた2人を、強くなってきた夜風が吹き始める。満天の星空を、時折小さな雲が駆け抜けていく。

「…あの…」

騒いでいる姉妹の後ろから、女性が恐る恐る話し掛けてきた。濃紺の髪をアップに結った若い女性で、青い眼には優しく抱きしめるような暖かい光を宿している。

「あ、あなたは…!!」

振り返ったサファイアは、そう言うと笑顔で駆け寄った。

「お元気になったんですね」

サファイアがそう言うと、女性は

「ええ…おかげさまで」

と微笑む。話し掛けてきた女性は、パシュカーレ山でサファイアが助け出した女性——つまり、王宮に電話を寄越してきた女性だったのだ。

「ちょっとお願いしたいことがあるんだけど、いいかしら？」

女性はそう言ったあと、

「ジュラダンから聞いているのかしら……私、ジュリア・キュアラーっていうんです」

と名乗った。

サファイアはすぐに電話でジャックを呼んだ。実験棟の庭を待ち合わせ場所にしたので、そこまでジュリアを案内すると、姉妹は先に城へ戻る。

ジャックが現れたのはそれからまもなくのことだった。

「…——母さん…」

母子は花に囲まれた庭のベンチに座っていた。星と月の光が、優しく照らしている。

ジュリアの姿は、3才のジャックが見た時の姿とあまり変わっていなかった。アップにした濃紺の髪。柔らかな目つき。眼の光の記憶はなかったが、今目の前にいる母の青い眼には、優しく抱きしめるような暖かい光が宿っている。

「...ごめんなさいね、ジャック...」

やがて、ジュリアがぽつりと呟いた。

「本当に.....本当に辛い思いをさせてしまったわ。あなたにも、ディックくんにも.....ジュラダンやジェーン、お兄ちゃんもそうよね.....ユリアにいたっては、あんなにしてしまったし...」

ジュリアの言葉を聞きながら、ジャックは妙な気持ちでいた。確かに、母親と再会できたことは嬉しいのだ。自分が殺してしまったと思っていた母が無事であったことも、今このように会って、話しているということも...だがそれでも、ジャックはどうしても違和感を抱かずに居られなかった。

夢の中では、1500年間ずっと、僕が皆に謝っていた。

“父さん、僕がしっかりしてなかったせいで、僕を庇って死ぬことになっちゃって...ごめんなさい”

“母さん、殺しちゃってごめんなさい、本当にごめんなさい”

“お姉ちゃん、父さんと母さんを死なせちゃってごめんね...”

ところが今、僕の方が謝られている。父さんにも、母さんにも...

「...謝らないでください」

ジャックは静かな声で言った。

「この1500年間、僕の方が母さんに謝りたかったんです。ずっと...殺してしまったとっていましたから...だから、母さんが生きていて下さっただけで、本当にほっとしているんです...」

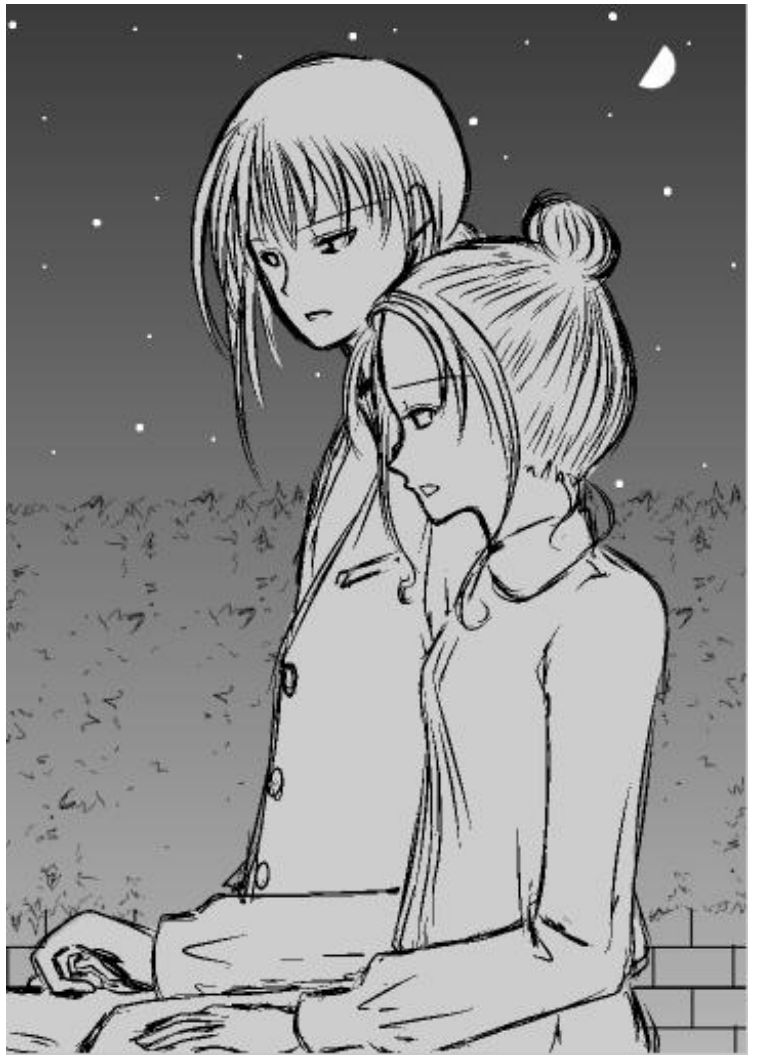
ジャックは目を伏せ、少し俯いた状態で正面を向いている。その横顔をじっと見つめていたジュリアは、ふっとまた正面を向くと、

「あなたがジュラダンの取り調べをやったんですってね」

と言った。

「多分そのあとすぐに、裏をとるために私の取り調べがあったのよ.....ジュラダンは、この1500年分のことを、すべて話したみたい。私のことも.....聞いているでしょう？」

ジュリアが恐る恐る尋ねると、ジャックは一瞬母親の顔を見てから、また視線を正面に戻し、



小さく

「ええ」

と頷く。

「...でも、そのことについては、正直どう考えればいいのかよく分からないんです」

ジャックは慎重に、ゆっくりと言った。

もし、母さんが人格を作る呪文の研究などしていなければ...そうしたら、まずユリアは世界征服など望まなかっただろう。ディックはデイビッドと優しいユリアに可愛がられ、幸せに育ったはずだ。間違っても、1500年間もの間復讐の炎を燃やし続けるようなことはなかったはずである。そして僕も、家族と和やかな子供時代を過ごせただろう。ジェーンだって、継閥派になったりせず、普通の人生を送れたはずだ。皆、暖かく幸せな人生を送れたに違いない。

...だがそうになると、クリアシャイン姉妹は生まれてこなかったはずだ。もし母さんがその研究をしていなかったら、僕がサファイアに会うことはあり得なかったのである。

たった1人の存在が、ジャックの思いを混乱させていた。

...これだけの悲劇があったからこそ、サファイアと出会えたんだ...

「確かに、母さんの実験がなければ僕たちの人生はまったく違ったものになっていたでしょう。ですが...その場合、あまりにも違いすぎて...分からないんです。だから、謝らないでください」

ジャックがそう言うと、ジュリアは返事の代わりに、悲しい遠い眼をして微笑んだ。

夜風が吹き、少しずつ冷え込んでいく。

「...母さん、クリアシャイン姉妹のことを聞いてもいいでしょうか？」

ジャックがぼつりと尋ねた。

「どうして、彼女たちを連れ出したのです？」

そう聞かれると、ジュリアは

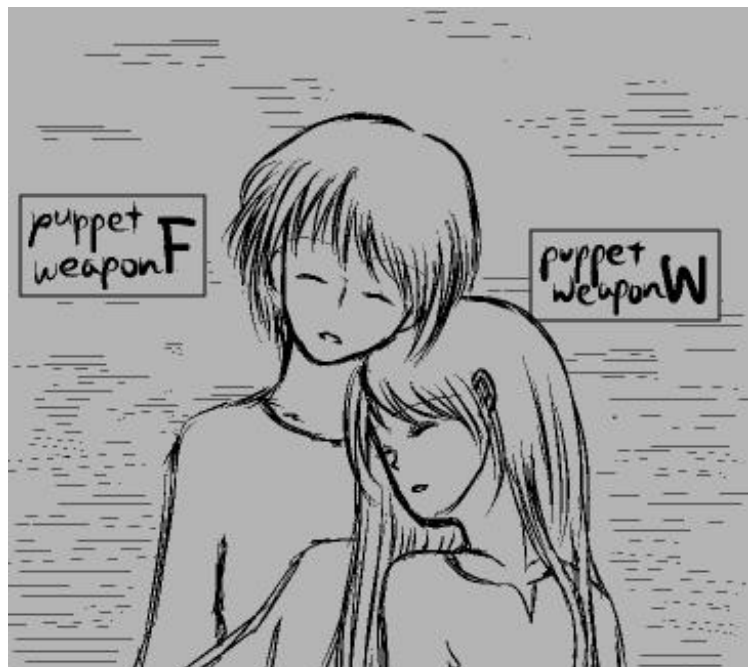
「ああ、あの子たちね...今も、たまたま2人に会ってあなたを呼んでもらったんだけど...」

と言いながらくすっと笑みを漏らし、先程姉妹が入っていった城の入り口を見つめる。そして、少しデイビッドと似た緩い口調で話し始めた。

「私、当時はまだ軟禁状態だったから、割と家の中はうろうろできたのよ。そしたらたまたま、実験室に保管されているあの子たちを見かけたの。お互いの肩に頭を載せ合って、本物の姉妹が仲良く眠っているみたいな感じで座らされてたわ.....それなのに“傀儡兵器W”※195 “傀儡兵器F”※196 なんてラベルが貼ってあるんですもの。あんなに可愛らしいのに、もったいないじゃない」

ジャックにも、姉妹が仲良く寄り添って眠っている様子は容易く想像できる。

「なんか放っておけなくて...だから、こっそ



り2人を連れ出して、とにかく南へ行ったの。吸血鬼の森よりさらに南まで行ったわ。吸血鬼の森が鉛の森になっちゃってたのには驚いたけどね。で、そこで2人に人格を与えたのよ。どんな子になるか分からなかったから怖かったけど.....よかったわ、いい子になってくれて...」



...どんな人格になるのかはすべて運任せなのか...。

ジャックはそれを聞くと、少し複雑な気分になった。いや、それが嫌なわけではない。逆に、もしも誰かが意図的に作り込んだ人格なのだとしたら、その方がはるかに恐ろしいだろう。“恐ろしい”というより、“不気味”である。しかしその反面、ユリアのことがあったにもかかわらず、また同じ呪文で、どんな人格になるのかも分からないまま、2つの肉体に人格を宿したのかと思うと... それもそれで、少し軽率に感じられてしまうのだ。

だがいずれにせよ、ジュリアがそうしなかったら、ジャックはサファイアと出会えなかったわけで...。

「一応姿を見られたくなかったから、隠れて小さな光を通して必要事項を教えたりしてみたのよ。ほら、年齢とか、知らないで困るでしょ？」

ジュリアは人差し指を立て、真剣な面持ちで言う。

...なるほど。これでまた1つ謎が解けた。サファイアと出会った当初、どうして1週間前のことも分からないサファイアが自分の年齢など知っているのかと不思議に思っていたのだが、それはどうやら母の少し変わった価値基準による配慮のせいだったらしい。

「...不思議ね。今、あの子たちと仲良いんでしょう？」

ジュリアはしみじみとした口調でそう言うと、微笑みながら首を傾げてきた。どうやらもう、これ以上の説明はないらしい。

「ええ...」

ジャックはゆっくりと頷く。“仲良い”などという次元ではない。なんせサファイアに会いたいがために、彼女が生まれ変わるのを1500年間待ち続けたほどなのだ。彼女1人が絡むだけで、価値判断が大きく変わってしまう...他の条件がどれほど否定すべきだと示すものでも、それを否定することで彼女の存在が揺らぐとなれば、途端に否定できなくなってしまう。

風に乗って運ばれてきた小さな雲が月を隠し、辺りが暗くなった。しかし、その雲が流れてしまうと、また明るい夜になる。

「...10日に電話を下さったのは、母さんですか？」

ジャックが尋ねると、ジュリアは

「ええ」

と頷き、

「サファイアちゃんーっていうのよね？あの子にもすぐに言われたわ。案外分かっちゃうのね...」

と言ってくすくす笑う。

「急にドア吹き飛ばしてきたと思ったら、びっくりしている私の声を聞いて、すぐに“もしかして、昨日...”って言い出すのよ。電話したのは私だって言ったら、すぐに鉄格子とか鎖とか...いろいろ壊してくれたわ。優しい子ね」

そう言うと、ジュリアはふと何か思い付いたようにじっとジャックを見つめた。

「...どうしたんですか？」

その視線を受けてジャックが尋ねると、ジュリアはまたおかしそうに小さく笑う。

「...ん...そういえば、サファイアちゃんってあなたに似てるなあ...って思って」

「...え？」

ジャックは耳を疑った。

「冗談でしょう？」

ジャックがそう言っても、ジュリアは真顔で

「あら、小さい頃のあなたにそっくりよ。仕草とかも...」

と主張する。

「.....“小さい頃”っていつですか？」

ジャックが少し怪訝そうに尋ねた。なんせジャックが持っている母親の記憶には、遠くにちらっと見かけたときか、もしくは自分が吹き飛ばしてしまったときかのどちらかしかないのだ。

どうして仕草なんて知っているんだ...？

「あら、そうだわ、言ってなかったわよね!!」

ジュリアは眼を見開き、しまったというように言った。それから、

「ほら...」

と言った瞬間、ジュリアの姿がぱっと消える。そしてその場所には、白い猫がいて――...

「え.....ミルク...？」

ジャックが驚いて呟くと、ジュリアはまたもとの姿に戻って

「そう、あなたたちが心配で、こっそり様子を見ていたら、うっかりあなたに捕まっちゃったのよ.....戻るに戻れないじゃない？」

などと言い、少し悪戯っぽく笑った。

※195...サファイアのこと。“W”は“water”の頭文字。

※196...ルビーのこと。“F”は“flower”の頭文字。

一方、クリアシャイン姉妹はジュリアと別れた後、すぐに自分たちの部屋へ向かった。その後ルビーは自室に戻ったのだが、サファイアはそのままディックの部屋のインターホンを押す。

「はい...どしたの？」

出てきたディックは、驚いたようにサファイアを見下ろした。

「ちょっと...遊びに来ました」

サファイアはそう言いながら、少し首を傾げて子供っぽく笑う。

ディックは快くサファイアを部屋にあげたが、急にどうしたのだろうかと思議に思っていた。それでもディックはサファイアに椅子を勧め、

「紅茶だろ？」

と言いながらお茶を淹れ始める。聞かなくても、彼女がコーヒーを飲むはずはないと分かっているのだ。 ※197

「あ、うん...ありがと」

サファイアはそうお礼を言ってから、

「あの、出来たらお砂糖を一一」

“5杯入れてください”と言おうとした。ところが、ディックはサファイアが言い終わらないうちに

「2杯ね」

と切り捨てる。

「ええええお願い、あと3杯...」

「ダメダメ。そうすると俺がジャックに怒られるんだよ、甘やかすなって...」

ディックはそう言いながらサファイアの前に紅茶とクッキーを置いた。ティーカップではなくマグカップだ。

「むううう...なんかじゃっくん、もう“お兄ちゃんみたい”っていうより“お母さんみたい”だよ...」

サファイアがちょっと膨れっ面をしてそう言うと、ディックは思わず

「ちょっ...」

と突っ込みながら笑ってしまう。

“お兄ちゃん”通り越して“お母さん”かよ.....あーあ、可哀相に...

ディックが笑っている間に、サファイアは紅茶を1口飲んだ。それからいきなり真面目な声になって、

「...そう言えば、先週パシュカーレ山行った時のことなんだけど...」

と切り出す。

「...ああ」

今の話からどう飛んでパシュカーレ山になったのかと、ディックは不思議に思わずにはいられなかった。 ※198 しかしとりあえず、そう相槌を打っておく。

「私がユリアの部屋に入った時、ディックは何やってたの？」

サファイアがそう尋ねると、一瞬部屋の空気が凍った。

「...な...何って...俺、そこにいたじゃん。サファイアちゃんの見えてた通りだよ」

ディックが訳分からんというように笑いながら答えると、サファイアは子供っぽい真剣な顔で

「うん」

と頷く。

「うん、私が入った後のことは分かってるよ。私が部屋に入る一瞬前。何やってたの？」

ディックは答えに詰まった。サファイアが入ってくる一瞬前。その時は...

「部屋の中がめちゃくちゃになっていて、ユリアが壁に打ち付けられたあとみたいに座り込んでいて、その前にディックがいて、ディックだけがロッドを持っていた。壁から床にかけては、何か大きく抉られたような傷があった...そんな感じだったかな」

その時の状況を、サファイアはひとつひとつゆっくりと描写していく。

「でも、ユリアはその時、テレポートも何もできない状態だったんだよね。ってことは、そんな抵抗してきたはずないでしょ？ロッドを突き付ければ、それでおしまいじゃない？なのに、何で部屋の中がめちゃくちゃだったの？あの傷は何？」

サファイアはそう言うと、くいと大きく首を傾げた。ディックはただ、黙ってサファイアのことを見つめている。ディックが何とも答えないので見ると、サファイアはさらに

「しかもなんか、ジャックがディックのこと抑えているように見えたんだけど...」

と追い打ちを掛けた。

「...何が言いたいんだ？」

ディックは慎重に尋ねる。自分をまっすぐに見つめてくるサファイアの表情はまったく底意を感じさせず、まさに子供のような純粋さを持っているのだが、なんせ彼女だってもうすぐ17才だ。しかも、小さいころから苦労し続けて育った子である。

この子は本当に、心の中でもこの表情をしているのだろうか...？

「ディックは、ユリアと主従契約してたんでしょ？」

サファイアはディックの質問には答えず、さらに別の問いを投げかけてきた。

「...まあ」

ディックは渋々認める。それはジュラダンの供述にも含まれていたことだから、もう認めざるを得ない。

「しかも、何かあったんでしょ？その間に...」

ディックは何も答えなかったが、サファイアもそれ以上問い詰めようとはしなかった。その代わりに、今度は

「あとさ、ルビーから聞いたんだけど...1500年前に、ルビーを殺したのって、ディックなんだってね」

と言ってくる。

「.....」

ディックはサファイアと目を合わせているのが辛くなって、思わず斜め下に顔を背けた。読眼術などできなくても、サファイアの濃紺の眼が非常に綺麗であることは何となく分かる。そして、後ろ暗いものを抱えている人にとって、そんな眼でまっすぐに見つめられることは、まるで“あなたは罪人だ”と言われているかのようで、あまりにも辛いのだ。

しかし、顔を背けたところでその辛さはまったく変わらなかった。無垢な顔で首を傾げ、綺麗

な眼でただひたすら見つめ続けてくるサファイア。責めるでもなく、睨むでもなく、ただ純粋に尋ねてくる。

「...言わないならこっちから好き勝手に言うけど...ディック、ユリアのこと前から殺そうと思ってたんじゃない？1500年前から。ルビーが死んだのって、その巻き添えになったとかじゃないの？それでこの前、ユリアにまた思いがけず会ったから、殺そうとして、ジャックに止められたんじゃない？生け捕りにしなきゃいけないんだからって...」

サファイアはディックの過去について、ほとんど何も知らなかった。今言ったのは、ディックを追い詰めるために作った出任せの物語だ。もちろん、その出任せがかなりの的を射ていることなど知る由もない。

だが、ディックはいよいよ追い詰められていた。言い逃れしようと思えばまだ、そうする余地はあったのかもしれない。でも、サファイアの表情や態度、眼が、ディックに激しい罪悪感を抱かせる。サファイアを見ていると、自分だけが一方的に悪いのだという気分になってしまう。

「...だいたい、そんなところだよ」

やがて、ディックがぼつりと呟いた。

「そんなところだ...」

ディックはとうとう、何もかもを白状した。ユリアとの主従契約、シェルダンのこと、復讐してやると決めたこと、ルビーとの主従契約と恋愛、それらの結末、その後の1500年間ずっとユリアの情報を探していて、ディミアもその一環であったこと、そして1週間前、まさにユリアを殺そうとしたところで、ジャックに止められたのだということ...

“何もかも”と言っても、ディックはサファイアとジャックのことはすべて隠していた。おかげで、ここで語られたディックの人生は、本当に復讐だけによって彩られたもののよう聞こえてしまう。

「...そうだったんだ」

話を聞き終わると、サファイアはただそう呟いた。

「だから、ルビーと距離を置こうとしてるんだね」

サファイアの言葉に、ディックは

「...へ？」

と聞き返す。

...俺、そんなにあの子のこと避けたり、よそよそしくしたりしてたっけ...？

「あー...何て言うか...何か特別にそういう行動をしてるっていうんじゃないかって...なんとなく、空氣的に」

実は、サファイアがここまで執拗に問い詰めたのはそのことがあったからだった。ルビーはディックのことが好きで、プレゼントをあげたり、(たまにだが)女の子っぽい振る舞いを見せてみたり ※199 と、いろいろな努力をしている。一方サファイアは、ディックもルビーのことが好きなのだということも知っている。ところがサファイアの知る限り、ディックはどう考えてもルビーとそういう関係になろうというような動きを見せたことがない。むしろ、現状より距離が縮まることをあまり喜ばしく思っていないように見える。だから、何かあるのではないかと気に

していたのだ。

逆に言えば、サファイアはそこ以外まったく気にしていなかった。というより、否定できなかった。ディックの復讐にせよ、ルビーのことにせよ、どこか1ヶ所でも違っていたら、今こうして4人であることはあり得なかったのである。そう考えると、何1つ否定することはできないのだ。

「...まあ...そんなとこなんじゃね? たぶん...」

サファイアの言い方が曖昧なので、ディックもいまいち肯定も否定もできない。

「そっか...」

サファイアはそう言いながら、お茶受けのクッキーに手を伸ばす。

「あ、これ美味しい♪」

そう言うサファイアは、もうすっかりいつも通りのサファイアだった。

※197...ちなみに、ディックの部屋にジュースの類は置かれていない。

※198...そうは言うものの、ディックももともとはおしゃべり好きで、どちらかと言うとぴよんぴよん話が飛ぶタイプだったのだが...

※199...そんなことしているシーンはない気がするが...サファイアがそう言っているのだから、おそらく筆者の目に見えないところでそんなことをしているのだろう。

2009年8月30日

この日、ジュリアはちびっこお掃除隊の世話役として王宮で雇われることになった。

そして同じ日に、ジュラダンとユリアの夢幻裁判が始まった。 ※200 ユリアについてはもちろん精神状態を踏まえたうえでだが、それでも夢幻界の国際法では一応裁くことになっているのだ。

さて、こうなれば当然コランダムは解散するはずである。ところが、何故か紅玉組3人が帰国するという話はあがらない。コランダム4人は嬉しく思いつつも不思議がっていたのだが、その理由は突然明かされた。

2009年9月3日

「ええええええっ?!結婚?!」

女王の間に、サファイアとルビーの叫び声が響いた。

「や...ゴホッ...やかましいっ!!」

ピュアが反撃に出るものの、いきなり叫んだためにむせ込んでしまう。

「おめでとうございます」

即座にそう言ったのはジャックだ。無表情だからあまりおめでたそうには見えないが、今更それを気にする人もいない。

「え、だって...ピュア様、嘘だろ?!ルッチー...じゃなかった、ルチアーノ様と結婚だなんて!!」

ルビーがルチアーノを指差しながら、考え直せと言わんばかりに叫ぶと、腕組みしたルチアーノが悲しげに

「ちょ...それ地味に凹むんだけど...」と訴える。

「馬鹿ね、部下の冗談に凹んでんじゃないわよ!!」

そんなルチアーノを叱りつけるピュアを見て、ディックが「いや、いいじゃないですか。お似合いですよ」と楽しそうに笑った。

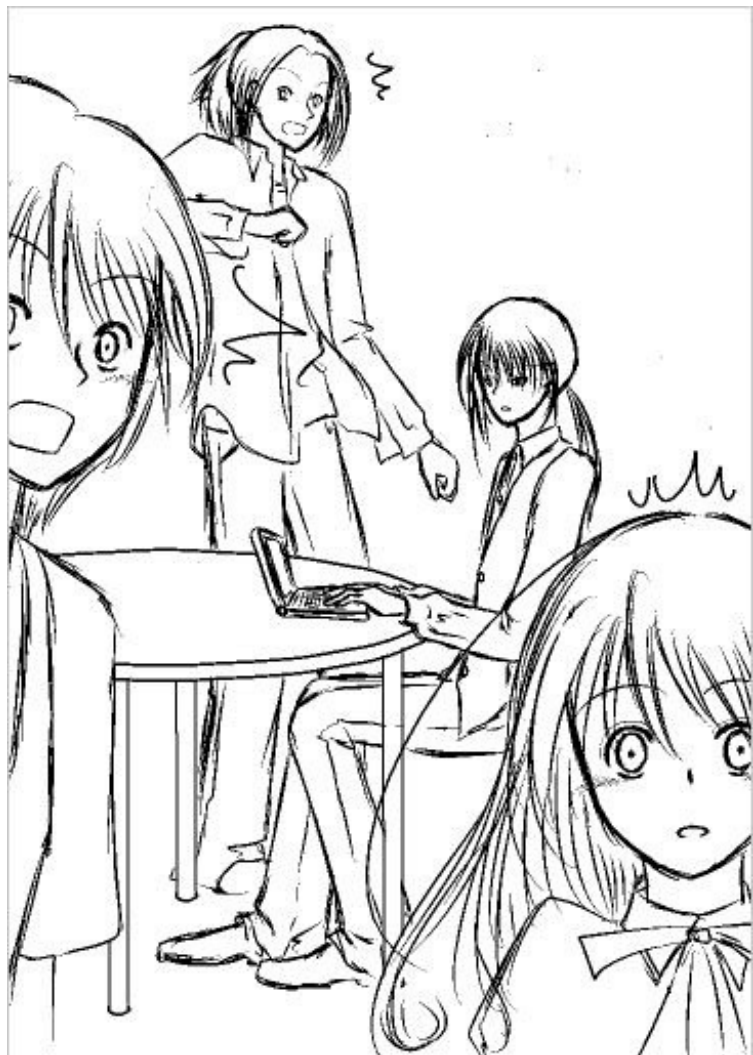
「むしろ、あまりにもお似合い過ぎて逆にびっくりです...」

驚きと嬉しさの入り混じったような顔でそう言うのはサファイアだ。

「え、ペーター様も認めてるんですか?」

ルビーが尋ねると、ペーターは笑顔で頷いた。

「うん。もともと電話越しの幼馴染だったしね...“うちの娘はかなり意地っ張りなんですけど...”っ



て忠告しなくても、もうよく分かってくれるし」

「お父様っ!!」

父親の冗談に憤慨するピュアの横で、ルチアーノは

「これからどうぞよろしくお願いします」

と愛想のよいお辞儀をする。それからディックとルビーの方を振り返ると、

「...結婚式は9月10日――来週の今日だから。ディックとルビーの帰国もその後だよ...それまで部屋貸しといてくれるって」

と笑った。

「へえええ...こんなのあるんだ」

勤務時間が終わって夕食を食べたあと、クリアシャイン姉妹はルビーの部屋にいた。チーズを摘みながら、結婚式の衣装を考えているのだ。

青玉島の王宮には、王宮で働く人なら誰でも利用できる衣装レンタルシステムがある。しかも、その衣装はすべて電子情報としても管理されていて、パソコンを使えば3D映像で確認できるという優れ物だ。

「サイズはフリーサイズだから気にしなくて平気だよ」

サファイアが笑いながら言うと、ルビーは不思議そうに

「フリーサイズ？」

と首を傾げる。

「うん。着る人に合わせて、服の方が大きくなったり小さくなったりしてくれるんだ」

サファイアは“大きくなったり小さくなったり”のところにジェスチャーをつけながら説明した。

「へえええ」

ルビーは感心したように呟きながら、気になるものをチェックしていく。

「あ、これルビーに似合いそう」

サファイアが画面に並ぶ中の1つを指差して言った。2分くらいの長さの袖がふわふわしていて、襟元にお花が沢山付いた、優しいオレンジ色の可愛らしいドレスだ。

「ええ～？なんかお花いっぱい付いてるじゃん...」

そう苦笑するルビーに、サファイアは

「お花嫌いなの？」

と首を傾げる。

「別にそういうわけじゃないけど...うち、そんな可愛い感じのキャラじゃないし...」

「ええ～？お花可愛いよ～」 ※201

パタパタ腕を振って主張する姉を他所に、ルビーはどんどんスクロールしていく。

「あ、これ姉ちゃんにピッタリじゃん？」

ルビーがそう指差したのはサファイアブルーのドレスだった。裾の布がかなり多いが、それ以外はきわめてシンプルだ。

「でもこれ、袖ないよ」

サファイアが指摘すると、ルビーは

「だから...」

と言って何かを検索し始める。

「...ほら、こんなの合わせたら可愛いだろ？」

ルビーが淡い水色のボレロを指差して言った。総レースになっているためか、ふんわりとした印象を与える。

「...でもって...ほら、こんなのをつければ完璧じゃん!!」

「サファイアンコスモスのコサージュ？」

透き通った青い花卉も、花の大きさや形も、まさに生花そのもののようだった。そこに、青と水色の細いリボンが付いている。

「姉ちゃん、この花好きだって言ってただろ？」

ルビーが振り返って言うと、サファイアは

「う、うん...」

と頷いた。確かに、サファイアの1番好きな花はサファイアンコスモスである。 ※202

「ほら、髪飾りバージョンもあるし...」

「...うん...でも...私、あんまりそういうの着ないけど.....大丈夫かなあ...？」

少し不安そうに俯いたサファイアが、そう口を挟んだ。するとルビーは、

「何言ってるんだよ!!」

と言いながら姉の腕を軽く小突き、

「姉ちゃんはいつも、襟とか袖とか割とかっちりしたワンピースが多いだろ？生地も重くて硬いのが多いし.....それもお人形さんみたいでめっちゃめっちゃ可愛いんだけど、こういう柔らかい感じのも似合うと思うんだよ。ほら...なんか妖精さんみたいじゃん？な？」

と熱弁する。

「...うん...確かに組み合わせは可愛いけど...」

...着る人が...

まだ不安そうなサファイアに、ルビーは

「いいから任しときなって!!」

と自信満々に言った。

結局サファイアがルビーの熱弁に流されてしまったため、サファイアの服はあっさり決まった。ルビーの方はあれやこれやと考えたが、最終的には最初にサファイアが薦めたものに決定する。

※200...夢幻裁判所とは、夢幻王国・準夢幻王国計12ヶ国を中心とした国際的司法機関のこと。1国の法律で裁くわけにはいかない、国際的な問題を扱う。

※201...意見の相違があったのは、お花が可愛いかな否かではなく、ルビーに似合うか否かという点だと思うのだが...

※202...念のために言うが、名前に自分の名前が入っているからではない。

「...にしてもなあ...ルッチーとピュア様が結婚だなんてなあ...」

2人の服が決まった後、ルビーがしみじみと言った。

「いつのまにくっついたんだろ？」

ルビーが首を傾げると、

「ね!!ぜんぜん気づかなかった!!」

と言いながらサファイアが冷蔵庫からプリンを取り出す。ルビーの部屋の冷蔵庫だが、これはルビーのものではなく、事前にサファイアが持ち込んで冷やしておいたものだ。

「姉ちゃんさっきケーキ食べてたじゃん...ジャックに怒られるぞ」

ルビーが苦笑しながら言うと、サファイアはむっと膨れっ面をして

「ルビーだってそれ何個目さ?!!」

と言い返した。ルビーが手にしているジェラートは、本日5つ目である。それを指摘されると、ルビーはコロッと意見を変え、

「ええよな、ケーキとプリンくらい、な」

と笑った。

「だよね♪」

サファイアもそう言ってにっこりと笑う。

「...でも、あの2人って本当にピッタリじゃない？」

食べ始めてから、サファイアが話を元に戻した。

「うん。ヘタレなルッチーと意地っ張りなピュア様ならあんまし衝突したりしないだろうし...あくまで青玉島の国家元首はピュア様なんだから、その辺考えてもあの2人の力関係はベストだろ」

ルビーも頷きながらそう細かく分析する。

「...ルビー、さっき“あり得ない”的なこと言ってなかった？」

ルビーの最初の反応と今の分析との食い違いにサファイアが苦笑して言った。ところがルビーは

「うん」

とあっさり頷き、

「でもあそこは誰か1人、ああいう反応する人がいないと」

とさも当然のように言う。

「...あー...なるほど。そういう...」

そんな妹に対し、サファイアは思わず苦笑するしかなかった。

「...ところで」

プリンを食べ終わったサファイアは、スプーンを置きながら身を乗り出した。

「ルビーは、今ディックとどうなってるの？」

サファイアがルビーからディックのことが好きなのだと明かされたのは3年前の今頃。2人であれこれ相談して誕生日プレゼントをあげた。それ以来ずっとプレゼント交換は続いているらしい。昨年のクリスマスには、ディックがサファイアにプレゼントの相談をしにきたりもした。そ

の際、サファイアはディックから、彼もルビーのことが好きなのだということを白状させている。その後サファイアはすぐルビーに話を伝えたが、“1500年間待ってたのは恋人さんじゃないみたいだから大丈夫だよ”と言ったのみだ。その後からコランダムの仕事も増え始め、なんやかんや言っているうちに1年が経ってしまったというわけである。ついこの前ディックを問い詰めて1500年前のことを暴いたのだが、ルビーとはもうずっとこの手の話をしていない。

「え、別に...別にどうもなってないけど...」

ルビーはそう言いながら俯いてしまった。心なしか頬が赤くなっている。

「...あのさ、夢幻界はまた平和になってきてるじゃない？精鋭部隊コランダムの仕事ももう終わってるわけだし...今月がディックの誕生日でしょ？だからその時に...」

「ムリムリムリムリ!!」

サファイアの言いたいことに気づいたルビーは、慌てて手を振って否定した。

「絶対無理だって!!そんな...」

真っ赤になって俯くルビーを、サファイアは

「大丈夫だって!!」

と言って励ます。

「今チャンスだよ!!ピュア様とルチアーノ様のことでテンション上がってるし、3年間の出張任務が終わるってこともあるし...」

ルチアーノはもちろん青玉島に越してくることになるが、ルビーとディックは結婚式が終わり次第紅玉高原に帰らなければならない。つまり、姉妹がこうして直接会って相談したり出来るのも、もう最後なのだ。

ルビーも同じことを考えていたのだろう。サファイアがもう1度

「...ね？大丈夫だって!!」

と明るい声で言うと、ルビーは

「...うん...」

と小さく頷いた。

「プレゼントどうする？」

3年前にも、2人はこの問題でかなり頭を悩ませた。

「...ん...そうだなあ...」

ルビーがそう言いながら天井を仰ぐ。

「ほら...初めに姉ちゃんとブレスレットを選んだじゃん。そのあとは...目覚まし時計、置物、コップ...」

すらすらと列挙していくルビーに、サファイアは

「おおっ、さすが!!」 ※203

と賞賛の言葉をかけた。

「...で、今年なわけだろ？」

ルビーがそう言うと、2人の間に沈黙が流れる。毎年誕生日とクリスマスに交換しているだけあ

って、妥当なものはだいたい拳がってしまったように感じられた。

「...あえて、何か手作りしてみるの？」

サファイアが提案すると、ルビーは

「ええ～？手作りい？」

と難色を示す。

「え、何で？気持ちがかもってて良くない？」

手足をパタパタさせて主張するサファイアに、ルビーは

「確かに良いけど...うち不器用だし...んな子供じゃないんだから、あんまし不格好だと洒落になんないじゃん」

と言いながら斜め下を向いてしまう。

「ほら...クロスステッチとか」

「それ、むしろルッチーたちの結婚祝いじゃね？」

「ミサンガ」

「子供じゃないんだからさあ...」

「...マフラーは？」

「ベタあ...しかも今9月だし...」

いろいろなものを考えてはみるが、なかなかうまいものが見つからない。

「...なあ、姉ちゃんだったら、好きな人から何をもらったら嬉しい？」

少ししてから、ルビーがふと思いついたように聞いた。

「うん、気持ちだけで十分」

サファイアは笑顔で即答だ。

「うわ...さすが姉ちゃん。うちだったらその笑顔だけで十分」

ルビーもそう笑った後、急に真顔になって

「なあ...こんなこと聞いても話にならないのは分かってるけど...姉ちゃん、ほんとに好きな人いないの？」

と低い声で尋ねる。

「...うん...いないよ、もちろん...」

サファイアはそう答えながらふと俯いた。

サファイアの片思いももう数年に渡っているわけだが、サファイアはその間ずっと自分の想いを必死に抑え付け、隠してきた。わざと妹のように幼く振る舞ってみたりして、その想いをすり替えてしまおうともしてきた。

だが、時が経つにつれて想いは募るばかり。

確かに、仮に許されていても望み薄なのは分かっている。自分なんかでは、とてもジャックとは釣り合わないということも分かっている。

それでもいい。叶わなくたって構わない。せめて...伝えることだけでも...

だが、サファイアは伝えることどころか、好きになることすら許されていないのだ。

「...本当に？」

俯いてしまった小さな姉に、ルビーがもう1度尋ねた。

「うん。いないよ」

それに対しサファイアははっきりと頷くと、顔を上げて何でもないように笑う。

「...そう...」

ルビーもそう言われると、ただ頷いて引き下がるほかなかった。

それから毎晩、サファイアとルビーはプレゼントを考えるためにルビーの部屋で会議を続けた。しかし、この件 ※204 で頭を悩ませているのはクリアシャイン姉妹だけではない。

姉妹が話し合っている部屋の2つ隣の部屋では、頬杖を突いたディックが、玉乗りピエロのおきあがりこぼしー昨年ルビーからもらったクリスマスプレゼントだーを突きながらぼんやりと考え事をしていた。

※203...すらすらと列挙できたことに対して称賛の言葉を掛けたのである。

※204...“この件”とは、単にディックの誕生日プレゼントと言うだけではなく、ルビーたちの恋愛全般について言うのだろう。そうでないと、ディックが悩んでいる理由が分からなくなってしまう。



コランダム最後の仕事はピュアとルチアーノの結婚式準備になりそうだった。なんせ、普通なら1年かけてやる準備を、あと6日で行うというまさかのギリギリ日程なのだ。

青玉島女王と紅玉高原王子の結婚という、今までとは違う意味で夢幻界を揺るがす事態であるにもかかわらず、こんなことになっているのには一応理由があった。1つは、今まで結婚どころの騒ぎではなかったということ。もう1つは、ピュアの病状の悪化が進んでいることだ。

すぐ近くにジャックという名医がいたのだが、ピュアはずっと彼のコランダムとしての職務を優先して、自分の診察にあたらせなかった。周囲がいくら言っても、頑固な女王様は聞く耳を持たない。そして今——こんな言い方をしてはなんだが——そのツケが回ってきていた。主治医が帰ってきて、ようやくピュアが診察を受けた頃には、病状がかなり進行してしまっていたのである。そこで、まだ元気なうちに挙式してしまおうという話になったのだ。

幸い、両家の顔合わせ、会場探し、新居探しなどは省くことができる。こんな状況だから、ハネムーンなどは出来るはずがない。ゲストのリストアップ、料理・ドリンクの検討、招待状作成などは青玉島の王宮スタッフに任せてしまう。装花をはじめとする会場の演出は紅玉高原で担当することになった。衣装選び・結婚指輪・引出物選びは本人たちがやるしかない。

コランダムの仕事は二次会の準備だ。予算にはある程度余裕がある。会場は王宮だから問題ない。招待状や出欠確認などはやはり他の人にやってもらうしかないだろう。となると、本当に4人が行うのはどのような二次会にするのかを決めることと、当日の進行だ。

さて、こんなてんやわんやな6日間なのだが、他にも少々気になることがあった。

2009年9月5日

まだ勤務時間中だが、4人はサファイアたちの部屋にいた。本人たちにも時折確認をとったりはするものの、基本的に二次会の内容はお楽しみにしているのだ。

「...だああもうっ!!何だよこれ...全部同じに聞こえるんだけど...」

BGMを選ぼうと候補曲を聴いていたディックが訴えた。

「冗談だろう？」

ジャックは曲目を見て眉を顰める。別に曲目に不満があったわけではない。あまりにも有名な曲 ※205 ばかりなのに、ディックがそんなことを言うからそんな顔をするのだ。

「いや、分かんねえって...」

しかし、クラシック音楽に疎いディックにとっては、どれを聞いても皆同じである。

「...ってか...」

ディックが何か言おうとした瞬間、世界がグラッと大きく揺れた。その後もグラグラと揺れ続ける。

「...な、今の何?!!」

10秒くらいして揺れが治まった後、ルビーが驚いて叫んだ。

「地震だよ、地震」

ディックも驚いている。

「私...地震初めてかも...」

サファイアが呟いた。

「当たり前だ。多分、地震って夢幻界初じゃ...あれ？ジャック?!」

ディックはジャックに同意を求めようとして、ジャックがいないことに気づいた。少し捜してみると、すでに女王の間の様子を見に行っている。

「...幸い、被害はなかったみたいですね」

やがて、帰ってきたジャックが冷静な声で言った。

「なあジャック、今までに夢幻界で地震なんてあった？」

ディックがそう聞くと、、ジャックは

「いや」

と首を振る。

「多分おまえの方が詳しいと思うが...僕の記憶する限り、初めてだ」

そんな吸血鬼たちの会話を聞きながら、ルビーは

「...夢幻界の歴史って...1500年間ぐらいあったよなあ？」

と遠い眼で姉に尋ねた。

「うん...それを実体験で話せるってすごいよね...」

サファイアの眼も同じく、はるか彼方を見つめている。

幸いにして実被害はなかったため、4人はすぐにまたBGM選びの作業に戻っていった。

地震はその6日間にもう1度起きた。ディマイアによると、夢幻界全体が同じように揺れたという。震源地は分からない。どこもまったく同時に、同じ震度で揺れたというのだ。

何はともあれ、瞬く間に時間は過ぎ、9月10日になってしまった。結婚式当日である。

式が始まる少し前、自分の身支度が済んだサファイアは、もう既に着替え終わっているであろうジャックをこっそり見にきていた。壁に隠れ、気づかれないようにそっと覗く。

わあああ...じゃっくん綺麗!!

サファイアは心の中で叫んだ。すぐにジャックはどこかへ行ってしまったが、それでももう満足である。

じゃっくん、やっぱり正装したりすると、ものすごく似合うよ...

一方、そのジャックはサファイアの2m程後ろに立っていた。壁の陰からちょこちょこ覗いてくるサファイアを不審に思って、声を掛けに回り込んできたのである。

しかし、そう思ってきたジャックはサファイアを見て驚愕し、固まっていた。

...サファイアンコスモスの、髪飾り...

サファイアは覚えていないが、ジャックはかつてサファイアンコスモスの髪飾りを誕生日プレゼントとしてあげたことがあるのだ。

相変わらずその花はサファイアによく似合っていた。ドレスも、非常にサファイアらしいと思われる。

そうこうしているうちに、サファイアがふと振り返った。そして、そこにジャックがいたこと

に驚いて

「じゃっ...じゃっくんっ?!」

と叫ぶ。

「わわっ...どうしたの？」

サファイアは慌てながらそう尋ねた。すると、ジャックはまだ髪飾りを見つめたまま
「いえ...あなたがここで不審な動きをしていましたから、何かあったのかと思ひまして」

※206

と答える。

わわわ、気づいてたのか...さすがじゃっくん...

「あー...あ、その...はい、何でもありません...」

サファイアはそう言うと思わず俯いてしまった。それでも無表情でじっと見つめてくるジャックに、サファイアは一層焦って
「あ、え...?その...私、どこか変になってる？」

などと言いながらその場でクルックルッと回って見せる。

「...いえ」

ジャックは静かに首を振った。そして、淡々とした口調でしれっと

「とてもよくお似合いです」

と付け加える。

「.....」

そう言われたサファイアは数秒の間、目を瞬かせながらジャックを見つめていたが、突然クルッと背を向けると、

「き...気のせいだよ!!」

などと言い残してパタパタ逃げて行ってしまった。

どんなにバタバタしていても、あくまで青玉島女王と紅玉高原王子の結婚である。挙式と披露宴は実に厳粛かつ大掛かりなものとなった。夢幻王国はもちろん、夢幻界の多くの国の代表が集まる。実界からも夢幻王国と繋がり強い国――イギリス、イタリア、スペイン、ロシアなど――の代表が来た。 ※207 各国の著名人もである。かなり厳選したのに、披露宴の出席者は1000人以上だ。

二次会は極力関係の近い人に絞り込んだ。それでもやはり、300人弱にはなる。その人数・その



空気だから、二次会でもゲームなどはせず、交流を重んじる形にした。青玉島と紅玉高原の著名な音楽家 ※208 ーラブリオーラ、ウェイトリー、ギスランツォーニ、デスパニアなどーの曲をBGMに流し、格調高いものにしてある。

司会進行はジャックが、スピーチはディックが担当した。余興はサファイアとルビーが“舞闘”を披露する。“舞闘”とは、剣と魔法を用い、曲に合わせて華麗に舞うように戦うという、夢幻界の伝統舞踊の1つだ。

2人とも剣をとり、アップテンポの曲に合わせて激しく舞う。本当に戦っているようにも見えるのだが、本当の戦闘に比べると2人とも回転運動と跳躍が非常に多い。剣同士がぶつかり合うタイミングなどは、すべて曲と一致している。一方、青玉魔術と紅玉魔術は水と花を会場中に舞わせ、煌めきと彩りの美しい共鳴を作り出していた。

余興以外では、サファイアは護衛として、ずっとピュアとルチアーノのすぐ側にいた。コランダムは4人いるにもかかわらず、ピュアがあえてサファイアを護衛にしたのは、呪いを持つ彼女が普通に会場にいと、皆に避けられたり酷いことを言われたりしてしまうだろうという配慮からである。そしてサファイアも、ピュアの意図はよく分かっていた。

「本日はおめでとうございます」

スペインの魔法界の代表、パブロ・ムリーリョ氏がピュアたちにそう挨拶してきた。

「ありがとうございます」

ピュアとルチアーノが答えると、ムリーリョは

「まったく...もう驚くばかりですよ。この間会った時はまだやんちゃな盛りでしたのに...」

と言って笑う。実は以前に彼と会ったのは13年ぐらい前なのだ。 ※209

「...おや、この子は...ピュア様のご令妹ですか？」

新郎新婦の後ろに立っているサファイアの姿に気づいたムリーリョがピュアにそう尋ねた。すると、ピュアは

「じゃあそういうことにしておきます？」

などと答える。

「え？違うんですか？」

ムリーリョが聞き返した。それに対しピュアが

「ええ、私ひとりっ子ですから」

と答えると、彼は

「おっと...これは失礼しました...」

などと言いながら慌てて逃げていく。

実は、“呪われたクリアシャイン”は夢幻界ではほとんどの人が知っているが、さすがに実界ではあまり知られていないのだ。

「はははっ、本当にうっかりさんなんだなあ」

ムリーリョの姿が見えなくなってから、ルチアーノがおかしそうに笑いつつ呟いた。

「まったくよ、私たちの兄弟姉妹関係ぐらい知っときなさいって」

腕組みしながらそう言うピュアは少し怒っているように見える。

「...にしても、本当にサファイアちゃんみたいな妹がいたらいいのに」

ルチアーノがサファイアを笑顔で振り返りながら言うと、サファイアは即座に

「いえいえいえ...そんな...」

と否定する。すると、ピュアもちらっとだけサファイアを振り返ってから、

「まあ...でも実質、そんなところでしょ」

と言った。

一方、ルビーはずっとカメラを持って会場内をちょこちょこ駆け回っていた。300人いっぺんには写真も撮れないので、何回も何回も記念撮影をする。

様々な人と写真を撮った最後、いつものメンバーとルチアーノの家族—つまり、ピュア、ルチアーノ、ペーター、フィリッポ、ラウラ、ジャック、ディック、サファイア—が並んだ。

「じゃあ行きますよー!!...って、姉ちゃん、隠れてるって!!」

ルビーがカメラを構えながら叫ぶ。見ると、サファイアはジャックの斜め後ろに立っていた。背の高いジャックの後ろに小さなサファイアがいれば、隠れてしまうのは必然である。 ※210

ジャックはサファイアの肩に手を添えると、自分の前に連れてきた。

まあ、集合写真を取るとなると必ず起こるやり取りである。

「はい、じゃあ行きますよ」

ルビーはもう他に隠れている人はいないかと確認しながらシャッターを押した。

ピ、ピ、ピ、ピ.....

ルビーがパタパタと駆けて行き、端の方にいたサファイアの隣りに立つ。

ピピピピピピピピ...

電子音が速くなったと思った数秒後、フラッシュが光ると同時に明るいシャッター音が響いた

。

※205...例えばイーゴリ・パステルナーク。柘榴溪谷の作曲家だが、実界で言うモーツァルトぐらいの有名さである。

※206...ジャックの動きもなかなか不審だと思うのだが。

※207...代表と言っても、各国の魔法界の代表である。

※208...どれぐらい著名かと言うと、実界におけるベートーベンやモーツァルト、シューベルト、バッハなどと同じくらいである。

※209...ムリーリョは13年以上ずっとスペイン魔法界代表を務めていたわけではない。1998年に一度他党に政権を奪われ、それから2007年に再度代表となったのだ。

※210...少なくとも、青玉島物語のメインキャラの中ではジャックが最も長身だ。逆に、子供(リサ、キャサリン、セイラ、ローラ、カラント兄弟など)以外で最も小さいのはサファイアである

。

結婚式が終わると、ディックとルビーは帰国準備を始めなければならなかった。帰国予定日は9月13日だ。サファイアはルビーの仕度を手伝いに来ては、ディックへの誕生日プレゼントと一緒に考えていた。

「ねえねえルビー、この間ちょっと探してみたら、小さな編みぐるみの作り方を紹介してるサイトがあったんだ」

洗濯して畳んだ服をジッパー付きポリ袋に入れて圧縮しながら、サファイアがそう話し掛ける。

「編みぐるみ？あの...毛糸の人形？」

ルビーが首を傾げると、サファイアは頷きながら電子板を取り出す。

「うっわ...姉ちゃん、また可愛いの見つけてきたなあ...」

電子板に映っていたのは編みぐるみを使った写真立てだった。木枠の両サイドに、犬、猫、ネズミ、うさぎが仲良く立っている。

「でね、これを赤毛猫、黒猫、リス2匹に置き換えたら...」

サファイアはそう言うと、“どう？”というようにルビーを見つめた。

「...うちら？」

ルビーが聞き返すと、サファイアは黙ったまま笑顔で頷く。それを聞くと、ルビーはもう1度電子板を見てから爆笑し始めた。

「面白いわ、それ!!ええ!!」

ルビーはそう言ってひとしきり笑うが、その後ふと気づいたように

「けど、それ...うちが作るの？本人じゃん」

と指摘する。

「...あ」

サファイアが呟いた。

...う...確かになんか変、かな...

サファイアは黙ってしまうが、そう指摘したルビー本人が

「...でも、別にいいよな、可愛いもん...な？」

とひとりで納得する。

「URL教えてもらってもいい？」

「あ、うん」

サファイアがURLを転送すると、ルビーは

「ありがと、姉ちゃん」

と笑った。

2009年9月13日

4人は空港に来ていた。3年前に紅玉組3人 ※211 が青玉島へ来たときは空港が破壊されていたため、チャーター便で直接王宮まで飛んできてしまったのだが、今回は普通に、空港から一般の旅客機で ※212 帰国する。空港まで賑やかだったことは言うまでもない。

やがて4人はミーティングポイント ※213 “水の都”に着いた。広間の真ん中に目印となる巨大な噴水があって、ディックとルビーがこれから通るゲートももう見えている。

「本当に帰っちゃうんだね...」

サファイアが少し寂しそうに言った。

「やっぱうち、姉ちゃん連れて帰りたいんだけど...」

真顔で言うルビーを、ディックが

「電話だってメールだってあるだろ」

と慰める。

「ええええ?!だって電話じゃ抱きしめたりできないじゃん!!」

ルビーがサファイアを抱きしめながら抗議した。いつもは照れて抵抗することが多いサファイアも、今日はおとなしく抱きしめられている。

「...元気でな」

ジャックがディックに、静かな声で言った。

「おまえもだぞ」

ディックもニッと笑うと、ジャックの肩をポンと叩く。

ルビーたちが乗る飛行機のアナウンスが流れた。まもなく搭乗時刻だという。

「じゃあな」

「着いたらすぐ連絡するで!!」

「うん、待ってる」

歩き出した2人を、サファイアは手を振って、ジャックは静かに見つめて、見送った。

「ただいま戻りました」

「おかえり」

ディックとルビーがいなくなると、女王の間は驚くほど静かになってしまった。

「あのさ、奴らがいないとほんっと静かになっちゃうんだな...ちょっと寂しいぞ」

今まで常に賑やかな場所にいたルチアーノが驚いて呟くと、ペーターも

「まあね...」

と苦笑しながら頷く。それに対しピュアは

「何言ってるのよ、やっとな静かになったんじゃない、まったく...」

などと言っているが、やはり寂しがっているのは見え見えだった。

その日の夜、サファイアたちの部屋に電話が掛かってきた。もちろんルビーからである。

『姉ちゃん？姉ちゃん？』

電話に出た瞬間、ルビーの声が勢いよく聞こえてきた。王宮の電話を使っているらしく、映像はない—なんせ、フィリップの趣味のせいで、紅玉高原王宮の電話は黒電話なのだ。

「うん」

『よかったああ...姉ちゃんの声聞くのめっちゃめっちゃ久しぶりなんだけど!!超寂し...』

「何言ってるのさ!!数時間前でしょ!!」

サファイアが笑いながら突っ込むと、ルビーは

『数時間もじゃん!!やっぱ連れて帰ってくればよかったわ...』

などと叫ぶ。そんなルビーに、サファイアも苦笑しながら

「こっちもね...2人がいなくなったらなんか静かになっちゃって、寂しがってるよ」

と言うと、ルビーは

『あー...姉ちゃんはおとなしいし、ジャックに至ってはおとなしいだの静かだのってレベルじゃないもんな。ちょっとルッチーをからかってやると賑やかになるよ』

と教えてくれる。ただ残念ながら、もちろんそんなことはできそうにない。

「うん、ちょっと無理かな」

サファイアはそう明るく答えた後、

「ところでディックとはまだケンカしてないよね？」

と尋ねた。すると、ルビーは案の定

『うっ.....』

と言葉に詰まってしまう。

「もう...今度はどうしたの？」

サファイアが呆れた声を出した。なんせこの2人のケンカは日常茶飯事なのだ。

『うちが寂しいから電話するって言ったら、ディックがまだ1日も経ってないとか言ってバカにしてきてさ。だからうちが、あんたもジャックに電話なり何なりした方がいいんじゃない?って言ったら、別に平気だとかってほざくんだよ!!』

「...それで、電話しろとかしないとか、そういう？」

サファイアが遠い眼をして笑いながら、呆れ果てた声で言うと、ルビーは

『うん』

と大真面目に頷く。

「ああ、そう...ちょっと待ってね...」

サファイアはそう言うと、電話の保留ボタンを押した。

「ねえじゃっくん」

いつものように何かの論文を読んでいるジャックに、受話器を持ったサファイアが話し掛ける

。

「ルビーたちね、ディックがジャックに電話するとかしないとかで揉めてるんだって...」

そう切り出したサファイアがルビーの話をざっくり伝えると、ジャックは

「...分かりました。わたしの方から掛けておけば問題ないのですね？」

と言いながら立ち上がり、隣の部屋へ行った。

「...あ、もしもし？」

サファイアが保留を解除して話し掛けると、ルビーは

『何かあったの?』

と聞いてくる。

「ううん、ちょっとチーズのお化けが襲撃してきただけだから大丈夫」

サファイアが訳の分からないとぼけ方をした。

『マジで?!—大事じゃん、早く食っちゃった方がいいよ』

ルビーはあえて突っ込まず、真面目な声で乗ってくる。

「うん、でも大丈夫。じゃくくんが冷蔵庫にしまってくれた」

ルビーが突っ込まないのをいいことに、サファイアはさらにボケ続けた。

『おおっ!!さすがだな。いっつもケーキとかジェラートとかしまっちゃうの得意だもんな!!』

ルビーがケラケラ笑うと、サファイアも

「ね!!そうだよね」

などと言いながらおかしように笑う。

こんな調子で、姉妹の無駄な長電話が続いた。

久々に ※214 自室へ戻ってきたディックは、ベッドに座って荷物を片付けようとしていた。そこにジャックから電話が掛かってきて、思わず苦笑する。話がどこからどのように流れてこのような結果になったのか、見当がついているのだ。

「もしもし？」

ディックが出ると、ジャックは

『ジャックだけど.....大丈夫か？』

と言ってきた。電話の向こうの声が半ば呆れていることから考えると、どうやら見当通りの経緯で掛かってきたようだ。

「ああ、うん...ごめんな、気い遣わせちゃって」

ディックが謝ると、ジャックは

『いや、そういう訳ではないけど...』

と言ってから、唐突に

『...さっき空港でも言おうと思ったんだが...今度こそ後悔しないようにしろよ』

と低い声で言う。

「あ...」

ディックの表情が引き攣った。

「...あー...そう、そうだ。あのさ、ジャック...」

『...何だ？』

言い淀むディックに対し、ジャックが先を促してくる。

「この前、ありがとな.....その...俺が殺すの、止めてくれて」

ディックは本当に小さな声で言った。すると一瞬、沈黙が流れる。

『...いや。僕もほとんど無意識だったから...』

やがてそう返ってきたジャックの声も小さい。

「...うん、ありがと」

ディックがもう1度お礼を言うと、もう1度沈黙が流れた。暗かったり、重かったりするわけで

はないが、いったいどうすればいいのか分からない、何とも言えない沈黙だ。

『...これでもう、後ろ髪を引くものはないな？』

しばらくして、ジャックが静かな声で聞いてきた。おそらくルビーの話だろう。

「...あ、ああ...うん...」

ディックは頷くものの、そう言う声はどれも浮かない。

『...1500年前に自分のしたことが後ろめたいのか？』

ジャックがずばり言い当てた。1500年前の自分がルビーにした仕打ちや、それが招いた結末を考えると、どうにも後ろめたいのだ。

「...こんなこと言うのもなんだけど...ぶっちゃけ、あいつ.....ほら、気いあんのかなあ、って思ったりすることもあんだけどさ...」

『.....』

「でもさ...」

『...おまえも好きなんだろう？』

ジャックに問われると、ディックは言葉に詰まってしまった。すると、ジャックはややイライラした声で

『腕輪、ずっと大切にしているじゃないか』

と指摘してくる。

「.....ああ」

確かにその通りだった。ディックは3年前に初めてもらった誕生日プレゼントである腕輪を常につけているのだが、それにもかかわらず、傷みなどはほとんどない——それだけ大切に扱っているのだろう。

「でもさ、俺、あいつにほとんど何も話してねえんだよ。別に話さなくたっていいっちゃいいんだろうけど...後になって、何かでバレたら...怖くね？」

バレてしまって、彼女に責められたら.....いったいどう謝ればいいんだ？

『それとこれとは話が別だろう？』

ジャックはそう言いながら、1500年前のことを思い出していた。

1500年前は、僕が両親のことで——結局殺してはいなかったのだが——躊躇っていた。サファイアに拒絶されるのが怖くて...サファイアを汚してしまうのではないかと不安で.....あの時、そんな僕の背中を押してくれたのはディックだった。だから、今度は...

『それがルビーさんに発覚するような事態になれば、どんな関係でいようと説明せざるを得なくなる。どんな関係でいようと、同じことだ。それならむしろ、また同じことを繰り返さないようにすることの方が大切じゃないのか？』

ディックはしばらく黙っていた。顔を合わせていない分、沈黙は不安の色を帯びる。

だが...

「...だよな」

やがて、ディックは小さく笑って呟くように言った。

「そうだよな.....うん。ありがとう」

ディックがそう答えると、ジャックは
『上手くやれよ』
とだけ言った。

※211...ルチアーノを入れて3人。“青玉組”と言えば必ずサファイアとジャックのことだが、“紅玉組”と言うとたまにルチアーノを含む場合もあるのだ。

※212...王宮からしてみれば本当はチャーター便の方が安上がりだし手っ取り早いのだが、4人が一緒に話す時間を作るために、わざとこうしてくれたのだ。

※213...待ち合わせや集合のために作られたスペースのこと。

※214...と言っても実はフィリップの結婚式で1度戻ってきているのだが。

2009年9月22日

「あ、おはよう」

紅玉高原の王室に出勤してきたルビーに、フィリップが明るく声を掛けた。

「どうしたの？3分前に来るなんて、珍しいじゃない」

ラウラがびっくりして尋ねる。ルビーは大抵時間丁度から5分後ぐらいの間に出勤してくるのだ。
※215

「あの、ちょっとこれ、ディックに渡しといてください」

ルビーはそう言って紙袋をラウラの手に押し付けた。そして、皆が止める間もなく、そのまま窓から炎の戦車で飛び出して行ってしまう。フィリップが

「あぁっ!!どこ行くんだよ?!」

と窓から叫んだときには、もうどこにも見当たらないという始末だ。

「...ったくもう...」

腕組みして溜め息を吐くフィリップの後ろで、ラウラはおかしそうに笑っている。

「...何の騒ぎっすか？」

隣の部屋で騒ぎを聞き付けたディックが、ひょこっと現れた。

「ああ...ルビーが3分前に出勤してきたから明日は大雪なんじゃないかと思ってたら、これを押し付けて窓から逃走しちゃったんだよ」

フィリップが説明すると、ラウラが

「これ...あなた宛みたいよ」

と言って紙袋を渡す。

「へ？俺ですか？...あ、ありがとうございます」

ディックはそう言いながら受け取ると、中を見てみようとした。しかし、紙袋の口は“誰もいないところで見てください”と書かれたガムテープでしっかりと塞がれている。

「...せっかく早く来たと思ったのに、もう時間過ぎてるよ.....悪いけど、ちょっとあの子捕まえてきてくれない？」

フィリップが呆れ声で命令した。するとディックは、

「了解です!!」

と言ってまたひょいと窓から飛び出して行く。

その後ろ姿を見送ったフィリップは、大きく溜め息を吐くと

「...んもう...今度“窓は出入口ではありません”って貼紙した方がいいかなあ...？」

と呟いた。

窓から出たディックはとりあえず屋上に来てみた。しかし、どうもルビーはいないようである。

...あいつ、どこ行ったんだ...？

そう思って辺りを見回してみても、やはり誰もいない。

...どうしよう...先にこの袋、開けてみっか...

ディックは受けとった時から、多分誕生日プレゼントなんだろうなあとには思っていた。毎年交換しているのだから、それぐらいの見当はつく。

だが、最初にブレスレットをもらったとき以外はいつも直接手渡しされていた。

...どうしたんだろう？

そう思いながら開けてみると、可愛らしい編みぐるみの写真立てが入っている。

「何これ、可愛いじゃん...」

オレンジリボンの赤茶猫、青いリボンの黒猫、オレンジと青のリボンのリス2匹.....これってもしかして...俺たちじゃね？

そう思うと、ディックは思わず笑ってしまった。決して器用な作りではないが、4匹それぞれが当人を思わせる表情をしている。

...ってことは、わざわざ作ってくれたんだ.....あんな慌ただしかったのに...

ディックはそれを紙袋の中へ大切にしまおうとした。ところがその時、袋の底にまだ何かが入っているということに気付く。

...何だ？

取り出してみると、それは4つ折に畳まれたオレンジ色の便箋だった。ディックが開くと、そこには非常に短いメッセージが書かれている。

“好きです”

「.....」

ディックはしばらくその文字を見つめていた。

...マジで？

何となく感づいていたのに、いざこうして見るとなかなか飲み込めなくて。でも...ものすごく嬉しくて。

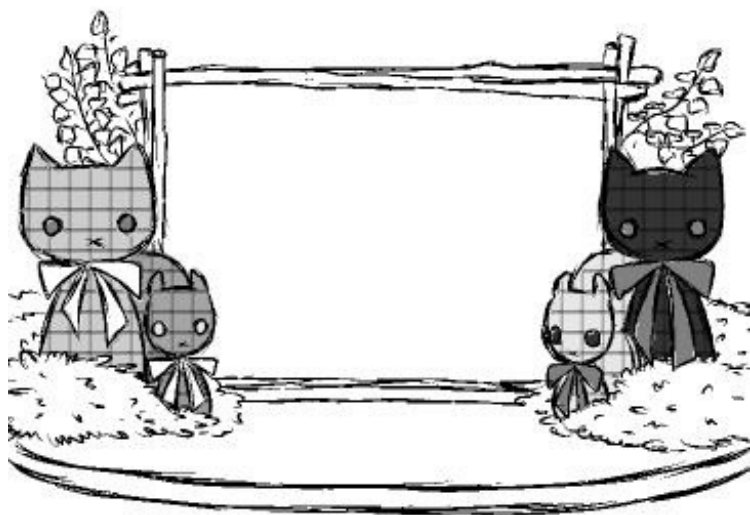
固まっているディックを、秋の心地好い風がさっと吹いた。それに急かされるような形で、ディックは手紙と写真立てを今度こそ大切に紙袋の中へしまう。

...よし、捜しに行くか。

そう心の中で呟くと、屋上からひょいと飛び降りていった。

ルビーはふらふらと庭を歩いていた。定規で測ったかのごとくかっちりと整えられた青玉島の庭に比べ、紅玉高原の庭は良くも悪くも賑やかである。

なんか恥ずかしくて逃げ出してきちゃったけど...よく考えたら、これじゃあ帰るに帰れないじ



ゃん!!どうしょ...うち、今仕事なんだけど...

「あっ、いた!!」

突然、斜め後ろからよく聞き慣れた声がした。振り向いてみると、ディックがこちらに向かって駆けてくる。

...あ、そっか.....逃げてきてもこういうオチになるんだ...

「ど...どうしたんだよ？」

ルビーはそうとぼけて聞いた。聞きながら、ディックが持っている紙袋の口に視線を走らせる。

...あ、もう開けてる...手紙読んだのかなあ...?.....わあああどうしょ?!めっちゃめっちゃ緊張するんだけど...

「どうしたんだよ？」じゃねえだろ、もう8:00過ぎてるぞ」

ディックが腕時計を指差して言った。ディックとルビーの出勤時刻は8:00なのだ。

「...ほら...行くぞ」

「あ、うん...」

すたすた歩きはじめるディックの後を、ルビーは慌てて追い掛けた。すぐ横に追いつくと、ディックはポツリと

「プレゼント...ありがとな」

とお礼を言ってくる。

「ん...」

ルビーはちらちらとディックの様子を伺っているものの、基本的にはずっと俯いていた。しかしルビーの見る限り、ディックもずっとそっぽを向いている。

「あと.....手紙も、ありがと。嬉しかったよ」

...え？

ルビーは思わず立ち止まった。それに釣られる形で、ディックも足を止めて振り返る。

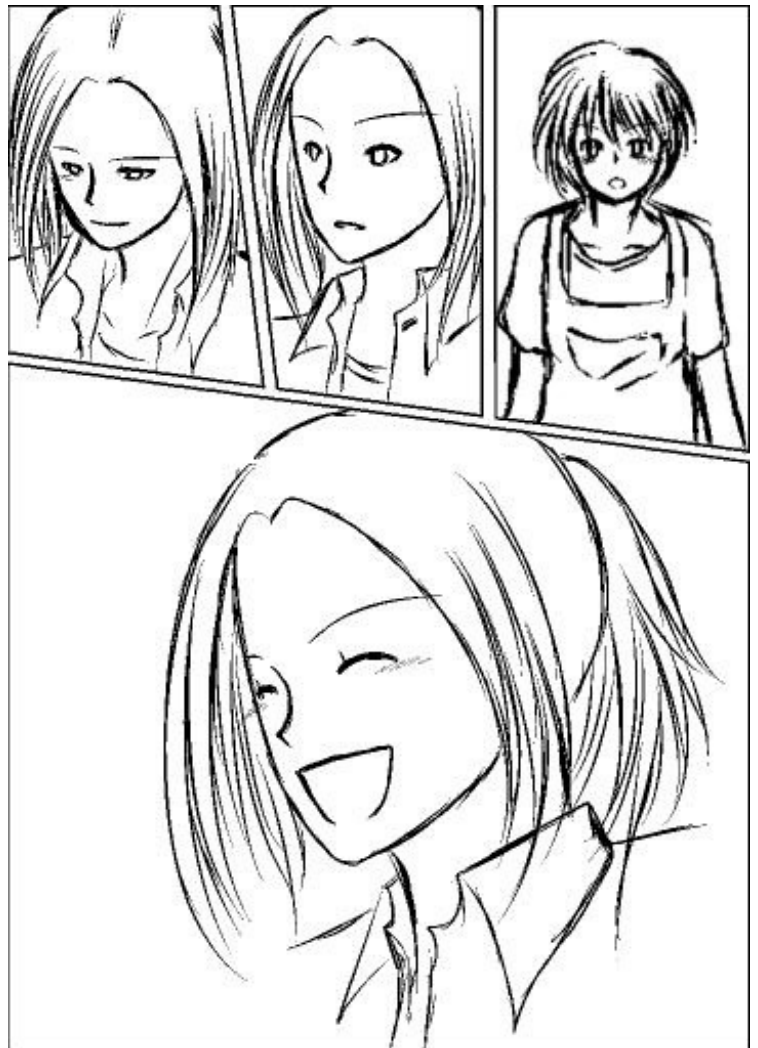
ディックの表情はよく分からなかった。不思議がっているようにも見えるし、すべて分かっているようにも見える。

ルビーは小走りでディックの正面に回り込んだ。

「つ...つまり？」

ルビーが緊張した面持ちで尋ねる。

ディックはそんなルビーのことを一瞬じっと見つめたあと、ちょっと俯いて伏せ眼がちに微笑



んだ。それから、ぱっと顔を上げて明るく笑う。

「うん、俺も好きだよ」

※215...要は、ほとんど遅刻しているということである。

第7章 融合



2009年9月29日

「ちょっと、あんた...なんてものを持ってんのよ...」

食堂からおやつを持ってきたサファイアを見て、ピュアがげんなりしたように呟いた。

「これですか？」

サファイアが慎重な手つきでテーブルに置いたのは、直径約10cm、高さ約15cm程度の大きなプリンである。

「今、食堂で“期間限定毎日先着5名様巨大プリンプレゼントキャンペーン”をやってるんですよ」

そう答えるサファイアが幸せいっぱいの笑顔を浮かべているのに対し、その後ろにいるジャックの眼は非常に冷たい。

「キャンペーン？キャンペーンって、いったい何のよ...？」

ピュアが怪訝そうな顔をして尋ねた。すると、ペーターがくすくす笑いながら

「君たちの結婚祝いだよ」

と答える。それを聞いたピュアは片頬を引き攣らせながら

「...ふーん...」

とだけ呟いた。明らかに“そんな無駄な時間とお金をかけるんだったら、もっとマシなことしなさいよ”と思っている顔だ。

「まあまあ、たまにはいいじゃん」

ルチアーノが苦笑しながらピュアを宥める。

そんな周囲の反応を他所に、サファイアは

「いただきます♪」

と言うと、薔薇色の笑顔でスプーンを手にとった。ところがその瞬間...

「わわっ!!」

「また地震?!」

辺りがグラッと大きく揺れた。そのあとも、グラングランと大きな横揺れが続く。

20秒ぐらいでようやく揺れが治まった。

「また大きかったなあ...」

ルチアーノが驚いたように言うと、ピュアも深刻そうな顔で

「本当よ。絶対おかしいわ」

と呟く。

「どこにも被害はない...かな？」

ペーターが辺りを見回しながら皆に聞いた。

「ええ...あそこ以外は」

ジャックはそう答えながら、ある1ヶ所を指差す。

「.....あ.....」

ジャックの指差した先には、テーブルの上で無惨に砕け散ったプリンと、それを泣きそうな眼で見つめるサファイアの姿があった。誰も何も言えないうちに、サファイアはとぼとぼと雑巾を取ってきて、テーブルを綺麗に拭き始める。テーブルの上にしか被害がなかったのは不幸中の

幸いだが、しゅんと項垂れるサファイアの落ち込みようは筆舌に尽くしがたい。

「ちょ...サファイアちゃん？」

ルチアーノが恐る恐る声をかけた。

「ば...馬鹿ね、また明日もらえばいいじゃない」

ピュアがそう言うと、ペーターが首を振って

「これ...今日が最終日だったんだよ」

とピュアに耳打ちする。

非常に痛々しい沈黙が流れた。まさに目も当てられないという状態である。そんな中、ジャックが淡々とした声で

「...今度、作りましょうか？」

と言った。その瞬間、サファイアがくるっと振り返る。

「え...ほんとに...？」

サファイアは聞き間違いではないかと思ってそう確かめた。それに対し、ジャックは黙ったままはっきりと頷く。

すると、サファイアは

「どうもありがとう!!じゃっくん!!」

と言って、再びぱあっと輝くような笑顔を見せた。

その日の夜、自室に戻ったサファイアにピュアが電話を掛けてきた。

「はい？」

サファイアが出ると、画面にピュアの深刻そうな顔が映る。

『あなた、前にルル・メンテと会ったでしょう？』

「はい...」

サファイアが頷いた。

『その時の記録、残しておくようにって言ったわよね？』

ピュアの問いに、サファイアはまた

「はい、ありますよ」

と頷く。

『よかったあ...』

サファイアの返事にピュアは安堵の色を見せると、

『あなたに、その時の話を聞かせてほしいって人がいるのよ。イル・メンテっていう世界学者で、ルル・メンテの弟なんだけど...今すぐ応接間08に行っちゃおうだい』

とだけ言って電話を切ってしまった。

「どうしたんだろう？」

パソコンなどを持ちながら、サファイアがくいと首を傾げる。するとジャックは、

「わたしはあなたがルル・メンテ女史から聞いた話の内容も知りませんから、何とも言えませんが...」

と断ってから、何か考えているかのようにゆっくりとした口調で
「...最近頻発している地震と、何か関係しているのでしょうか」
と言った。

「ただいま」

サファイアが帰ってきたのは、部屋を出てから3時間近く経った後のことだった。

「お帰りなさい」

奥から、そういう声と共に水の音が聞こえてくる。サファイアがLDKに入ると、ジャックはキッチンで食器洗いをしていた。

「え...じゃっくん、もしかして...プリン作ってくれてたの？」

驚いたようにサファイアが尋ねると、ジャックは作業しているままの状態ですべて黙って頷き、

「まだ固まっていないと思いますが」

と答える。

「じゃあ、明日食べれるの？」

「ええ」

ジャックが頷くのを見ると、サファイアは

「やったあ♪♪」

と嬉しさいっぱいの声で叫んだあと、

「じゃっくん、ありがとう!!」

とお礼を言った。

その後、10月2日、9日、13日にも地震があった。この1500年間1度もなかったのに、最近になっていきなり地震が頻発しだしたことについては、夢幻界中のメディアが盛んに報じている。実界の地震と大きく違うことは、震源地から揺れが伝わっていくのではなく、夢幻界全体が同時に同程度の震度で揺れることだ。

地震が起こる度に、ピュア・ルチアーノ・ペーターは深刻かつ憂鬱そうな顔をする。ジャックとサファイアは不思議に思っていたのだが、その謎はすぐに明かされた。

2009年10月17日

この日は、まだ夜も明けないうちに2回地震があった。そのため、
「おはようございます」
と言いながら出勤してきたサファイアたちの表情は、朝から非常に深刻だ。
「おはよう」
それに対し、ペーターとルチアーノは少しだけ笑って答える。
「今日、お客さんが来るわよ」
挨拶も無しにいきなりそう言うのはピュアだ。
「10:00に、イル・メンテがここで私たち5人に話したいことがあるんですって」

2009年10月17日10:00

約束の時間が来た瞬間、女王の間のインターホンが鳴らされた。

「どうぞ」
ピュアがそう言うと、静かに扉を開ける音が聞こえる。
入ってきたのは、淡いうぐいす色のふわふわした髪と淡い緑色の目を持つおっとりした感じの男性だった。歳は20代後半だろう

。「こんにちは」
微笑みながらイルが挨拶した。
「紅玉高原から直で飛んで来たんでしょ？長旅お疲れ様」

ピュアはそう言いながら、既に用意してあった椅子を奨める。

「ありがとうございます。急ぎの用ですから...しょうがないんですけどね。では、申し訳ありませんがもう本題に入らせていただきます。本当に急いでいるんです...」

そう言うと、イルは5人に向かって語り始めた。



わたしたちメンテ家は、夢幻界が開かれた当初から夢幻界に住んでいる、大変古い一族です。わたしたちの家系では、2代に1人くらい、変わった能力を持つ女子が生まれます。“夢見”です。未来を予言する夢を見る者は“リル”、過去を映す夢を見る者は“ルル”という名前を継いでいます。また、“リル”の弟は“エル”、“ルル”の弟は“イル”という名になることも伝統です。

僕の姉はルルといい、仕来り通り時の丘の入り口に住んで丘の管理と青玉島の歴史・伝説の研

究をしていました。僕はというと、姉に手伝ってもらいながら夢幻界全体の歴史・伝説を研究しています――姉はもういませんが。

青玉島建国は576年、僕たちの先祖が来たのは6世紀に入ったところからだと言われていますが、彼らが来たころには、もうすでに家などが建っていたそうです。僕たちの先祖は、空き家の並ぶ村に住みつきました――...

「...――キュアラールさん」

話の途中で、イルは突然ジャックに話を振った。

「キュアラールさんの論文は、1500年近く前から出されていますよね。あの.....失礼ですが、おいくつですか？」

イルが尋ねると、ジャックは平然とした様子で

「1528です」

と答える。 ※216

「夢幻界にいらしたのは？」

「18の時ですから、1510年前です」

一方イルもイルで、ジャックの信じ難い返答にもまったく動じない。

「それでしたら確認させてください。今、僕がお話ししたことは正しいですか？」

イルに聞かれると、ジャックは静かに頷いた。すると、イルはほっとしたように微笑む。

「ありがとうございます」

そう言うと、彼は再び話し始めた。

空き家があったということは、言うまでもなく、かつてそこに誰かが住んでいたということになります。

先日僕は、サファイアさんからお話を伺いました。最後に姉と会ったのはサファイアさんですから、その時の姉の話をお聞かせしていただいたんです。それによると、3500年ぐらい前には、時空系の魔法を操る人々――つまり、時を操り、空間を自在に行き来する人々が住んでいたそうです。彼らはある日、夢幻界と実界の外側を満たす2つの世界を発見し、無理矢理そこへの入口――いえ、出口を作り出しました。その世界が、“時の最果て”と“空間の最果て”です。

“時の最果て”には、ありとあらゆる歴史が堆積します。個人個人の小さな歴史が堆積して、大きな歴史になるわけです。一方“空間の最果て”では実界・夢幻界など様々な世界が繋がっています。

それまで、歴史は人々が各々の人生を歩むだけで、勝手に紡がれていました。勝手に紡がれ、勝手に蓄積し、残るものは残り、残らないものは自然消滅していました。当たり前ですね。そして、複数ある世界も、これまでは自然に互いの最適な距離を保っていました。これも当然ですよ。ところが、彼らとその空間に接触してしまったことにより、2つの空間は変質してしまいました。人類が関わらないと正常に機能しないように――いえ、むしろ人類という存在が関与しても正常に機能するよう、変化したと言うべきでしょう。

2つの空間はそれぞれに、自らを正常に動かすための管理人を要求しました。“時の最果て”“空間

の最果て”という空間が、それぞれ自分と相性が良い者を、管理人として要求したのです。それを“時の守人”“空間の守人”といいます。ところが、夢幻界先住民の中にはその該当者がいませんでした。しかし、もう守人なしには成り立たなくなってしまった2つの空間は、それぞれ自分の入口がある地域の人に守人を要求し続けます。時の最果ては今の青玉島にあたる地域——つまりこの島に、空間の最果ては紅玉高原がある地域にです。

守人がいなければ、時の最果ても空間の最果ても存在し続けられません。2つの世界が消えてしまったら、夢幻界をはじめとする様々な世界も消えてしまいます。そこで夢幻界先住民たちは、たまたま通り掛かった旅人の少年を言いくるめて、2つの世界の管理人にしてしまいました。その子はどちらの空間とも相性がいいわけではありませんでしたが、暫定的な守人として、どうにか2つの空間を保ち続けました。

仮の守人は、かつて1回だけ交代しています。1500年ぐらい前、招かれざる者が無理矢理時の最果てに出ていきました。招かれざる者が最果てに出ると、基本的にはもうどの世界にも入れません。正当な人なら、自由に出入りできますが、そうでない人は1度出たら他の世界には24時間しか入れられないのです。出入りは何回でもできますが、他の世界にいる時間の合計が24時間になると、消えてしまいます。理由は分かりませんが、2代目の暫定的な守人が1代目からそう説明を受けているところを、姉の1代前のルル・メンテが目撃しているんです。

2代目の守人は、今も2つの空間を維持し続けているのですが、先月から、2つの空間は非常に不安定になっています。最近地震が頻発しているでしょう？夢幻界の外側にある2つの最果てが揺らいでいるのです。おそらく守人が懸命に安定させようとしているのですが、もう限界も近いと思います。もともと守人は2人ずつ、計4人必要なんです。それを、暫定的な人物が、1人で管理しているのですから、無茶なのは分かりますよね。

不安定になっている原因は、言うまでもなく8月にあったパシュカーレ山の事件でしょう。しかし、幸いなことにその事件のおかげで空間の守人になることが出来る人物——つまり空間の最果てと相性のよい人物が2人いることが分かりました。

「...まさか...」

サファイアが口を挟んだ。すると、イルは静かに頷いて言う。

「ええ、空間の最果てに入り込んだにもかかわらず、そのまま帰ってきて24時間以上存在し続けることができた人物.....つまり、ディック・ソルジャーさんとルビー・クリアシャインさんです」

空間の守人になると、永遠に歳をとらなくなります。寿命も来ません。永遠に、空間の最果てを管理し続けることになります。

とは言え、ずっとそこに居続けるわけではありません。正規の守人は外に出ることが出来ますから、様々な時代・様々な世界へ言って、空間の乱れを修復して歩くことになります。“守人”と呼んでいますが、もしかしたら“旅人”と言った方が適切かも知れませんね。

空間の最果ての揺らぎ方は特に酷いため、2人には明日出発してもらうことにしました。

「え？」

またサファイアが話を遮ると、イルはサファイアとジャックに申し訳なさそうな眼を向ける。

あなた方はあのお2人と仲良いんですよ。残念ながら、もう会うのは困難かと思われま。とりえず、我々が彼らを訪ねていくのは不可能です。たまたま実界と夢幻界は繋がりが強いですが、守人でなければ出入りできない世界もありますし……第一、僕たちが時を越えることは出来ませんからね。

彼らがあなたがたを訪ねて来るのは不可能ではありませんが、多分そんな余裕はないと思います。いくつもある世界と、果てしない時間という巨大なものの中で、空間の位置関係という途方もないものを、たった2人で整備していかなければならないのですから…。

連絡を取り合うのも困難でしょう。たまたま彼らが、我々と同じ時点の夢幻界か実界にいれば連絡はつきます。しかし、存在する時点が違えば、もしくは夢幻界・実界以外の世界にいれば、連絡はつきませんから…。

「…ということはもう…もう二度と会えないんですか？」

サファイアが小さな声で尋ねると、イルは俯いて

「…ええ…」

と頷き、

「申し訳ありません」

と謝った。何もイルが悪いわけではないのだが、やはり罪悪感を覚えるのだろう。

…さて、彼らが行ってくれば、空間の最果ては治まるはず。そうすれば仮の守人は時の最果てへ行き、そちらに集中することができます。でも、それもそう何日も続かないはず。2つの最果てのパワーバランスが、あまりにも違ってしまいますから…。

となると、時の最果てにも至急正規の守人を立てなければならなくなります。しかし、こちらはまだ1人しか分かっていません。1人しかいない状態では最果てから出ることが出来ませんから、時空を旅して回ることは出来ませんが、それでも正規の守人が1人でも行けば、時の最果ての方も少しは落ち着くでしょう……もちろん、もう1人を見つけるまで本当の安定はありませんが。

守人の最大の条件は、最果ての入口の扉に惹かれるかどうかです。他の人が扉に触れようとすると、感電するような衝撃を与えて拒むのですが、最果てと相性が良ければ逆に惹かれます。また、そのような人は特殊能力を持っているとも言われています。ただ、それがどんな能力かはまったく分かっていません。

「時の最果てへの出口がどこにあるのかは、もう分かっているのですか？」

ジャックが尋ねると、イルは

「ええ」

と頷く。

「先程、僕の姉は仕来り通り時の丘に住んでいたと申しあげましたよね？ですが、地図を見てみてください。青玉島のどこにも、“時の丘”など描かれていないはずですよ。どうしてだと思います？」

イルの質問に、一瞬沈黙が流れた。サファイアは首を傾げているが、ジャックはまっすぐにピュアのことを見つめている。

「...王宮が隠してるからよ」

その視線を受けてか、やがてピュアがそう答えた。

「王宮が物理的にも、情報的にも完全に隠しているから...だから、実際にその場所に行ってみても、そこにはただうち捨てられた工事現場があるだけになってるわ」

ピュアの言葉に、イルは

「女王様の仰せのとおりです」

と言って苦笑する。

「...“隠している？”」

サファイアが首を傾げた。すると、イルは微笑みながら

「ええ、そうです。この丘の頂上には、1本の大きな樹が立っています。それ以外には何もありません。しかし—968年に当時のルル・メンテが過去を映す夢を見ました。その結果、その樹の洞こそが、時の最果てへの出口へつながっているのだと分かったのです」

と答える。

それを聞いて驚いたのはサファイアだけだった。ジャックは今までの話から察していたようだし、先程ピュアが答えたということから考えても、おそらくピュアたち3人はもう知っていたのだろう。

「さて...1人の時の守人を見つけたのは、3代前のルル・メンテです」

イルは静かな声で言いながら、サファイアをじっと見つめた。

「1500年前のサファイアさんが、時の丘へ友達と探検ごっこに行った際、時の最果てへの出口にあなただけが惹かれていく姿を、彼女が目撃しているんです」 ※217

イルの言葉のあと、女王の間を沈黙が支配した。やがて、サファイアが小さな声で呟くように

「...つまり...私が“時の守人”だってことですか？」

と尋ねると、イルはゆっくり頷いて見せる。

「そうです。サファイアさん、あなたが時の守人です」

イルによると、サファイアはルビーたちほど急ぐ必要はないらしい。明日ではなく、5日後の22日でいいそうだ。

イルが帰っても、女王の間は静まり返っていた。この部屋を満たす重苦しい沈黙。それを最初に破ったのはジャックだ。

「今の話—ずっと、ご存知でいらしたんですよね？」

ピュア、ペーター、ルチアーノを見つめていたジャックが非常に静かな声で聞くと、ピュアは俯いたまま

「...ええ...知ってたわ」

と答えた。

「最果ての話は、研究が進む度に青玉島の女王と紅玉高原の王だけに伝えられるの。私は父様にだけ話してた.....ルチアーノも、フィリップからずっと聞いてたのよね」

ピュアが言うと、ルチアーノは黙って頷く。

「クリアシャインが時の守人であることは、初めから分かってたわ。ソルジャーとルビー・クリアシャインのことも、パシュカーレ山からあなたたちが帰ってきて報告してくれた時に分かった...」

それだけではない。考えてみればもともと、ジュラダンたちはクリアシャイン姉妹を守人として作ったのだ。ただ、それを聞いた時点では、サファイアたちが“守人”というものを知らなかったため、その時に明かされた他の衝撃的な事実に取りつかれ、気付かなかったというだけのことである。

「...私が小さい頃にピュア様がおっしゃっていた、“大きくなってからやんなきゃいけない大切な仕事”って、このことですよ？」

サファイアが尋ねると、ピュアは

「そう...そうよ」

と答えた。

「恋愛禁止令も...」

サファイアがさらに尋ねようとする、ピュアは

「そう」

と遮るように頷く。

「あんたが時の守人にならなきゃいけないって話になった時に、もし結婚とかしてて、子供でもいたら、困るでしょ?...だからよ」

※216...4ケタになっているにもかかわらず、自分の歳をきちんと把握しているということも、地味にすごいと思う。

※217...先程“ジャックは今までの話から察していたようだ”と書いたが、1500年前のサファイアからこの時のことを聞いていたから察したというのものもあるかもしれない。

勤務時間が終わって部屋に戻っても、サファイアとジャックは無言でいた。ジャックはダイニングの窓のそばに立って外を見つめているし、サファイアはソファの上で丸くなっている。

どうして...？

サファイアはそんな思いを抑えるのに必死だった。

話し出したら止まらなくて、一緒にいるといつも笑いが絶えなかった、妹のルビー。陽気で親しみやすく、親切な友達である、ディック。ずっと優しくしてくれた、ピュア様、ペーター様、ルチアーノ様...

...もう、会えなくなっちゃうんだ。もう、二度と...

そういう皆との別れも非常に辛かったが、何より辛いのは、やはりジャックと会えなくなってしまうことだった。

10才の時に吸血鬼自治区で助けてくれた時からずっと、いつでも一緒にいた。新月の呪いのことを知っていても、優しくしてくれた。無条件に受け入れてくれた。私が落ち込んでいる時にまっさきに気づいてさりげなく慰めてくれるのも、困った時に助けに来てくれるのも、いつもジャックだった。

そんなジャックのことが、好きで、好きで、仕方がないのに...こんなに大好きなのに...

...ずっと、一緒にいられると思っていた。このままいつまでも一緒にいられると思っていた。ずっとこうして一緒に暮らしてて。たまにルビーやディックが遊びに来たり、逆に私たちが遊びに行ったり...。そしたら、私やルビーが騒ぎ始めて。ディックがおかしそうに笑っていたり、茶々入れてきたりして。呆れたような眼で見ているジャックが、たまに冷ややかな声で口挟んできたりして...それが当たり前だと思っていた。

...それなのに.....どうして...？

その日の夜、ディックとルビーからテレビ電話が掛かってきた。彼らは今晚が出発前夜だから、最後に挨拶しておこうというのだ。

一晩中4人で話していた。奇妙なことに、話すことはどうでもいい話ばかり。最初にディックとルビーが付き合い始めたという報告があった以外は、驚くほどくだらない話ばかりだ。4人ともそれで満足だった。いや、満足ではないのだが、“もう会えないんだね”なんて話をするより、最後に楽しい時間を過ごしたかったのだ。

ルビーとサファイアがいろいろ喋ると、ディックがそれをさらに掻き混ぜたりして、訳が分からなくなると、ジャックが淡々とした口調で話の收拾をつける。そうするとすぐに、また別の話題が沸いてくる——こんな調子で、ディックとルビーの時間が許すかぎり、ずっと話し続けた。

2009年10月18日

ディックとルビーは再び空間の最果てに来たものの、何をどうすればいいのかさっぱり分からなかった。仕方がないので、とりあえず最果てを歩き回ってみる。

「ちょ...ほんとにここ、どうなってんだよ...」

ルビーが辺りを見渡しながらか、うんざりしたように言った。

「どこを見ても薄オレンジだもんな...」

そう言うディックにいたっては、もう周りを見渡すことすらしない。

「こんなところにいつまでもいると気が違っちゃ.....あ？」

「...なんだあれ...？」

2人は正面を見上げて立ち止まった。

「...な...何かボールみたいなもんがふよふよしてるんだけど...」

ルビーが呟くように言うと、ディックは

「ボール？」

と聞き返す。

「え...どこらへんがボール？」

首を傾げるディックに、ルビーは

「ええ？ほら...キャンディボールみたいなんがふよふよしてるじゃん」

と言いながらそれを指差してみせた。ところがディックは

「いやいやいやいや...どう見てもボールじゃねえだろ」

とぶんぶん首を振る。

「だったら何なんだよ？」

ルビーは膨れっ面でそう尋ねた。するとディックは

「え？だってさ...なんかふよふよ浮かんでる円盤みたいなものの上に木だのビルだの家だのがうじゃうじゃ建ってんじゃん」

と説明する。

「円盤？ビル？」

ルビーが顔を顰めた。

「そんなの1つもないんだけど？」

「はあ？あれもあれもあれもみんなそうじゃん!!」

ディックが半ば叫ぶように主張すると、ルビーも

「嘘だろ!!みんなボールじゃん!!」

と叫び返す。

2人はこんな調子で20分ぐらい言い合った。実はここに見えるのは各人の“様々な空間”のイメージだから、それぞれ違うものが見えて当たり前なのだが、2人はそれを知らないため、こういう争いになるのである。

20分後――...

さすがの2人も言葉がなくなっていた。“キャンディボールだ”“円盤だ”を繰り返すしかないケンカだから、それほど続かないのだ。この2人の場合、そこから関係ない話に飛び火しなかったことを褒めてやるべきだろう。

「...ってか、俺たちケンカしてる場合じゃなくね？」

ディックが疲れた声で言った。

「...確かに」

ルビーも改めてそれを見上げる。

「ほんとにこれ、何なんだよ...？」

ルビーはそう呟きながら、思い切って近づいていった。

「あっ、ばかっ!!触んじゃ...」

ディックが止めるのも聞かず、ルビーが浮いている何かに指先で触れる。

「うわわっ!!」

その瞬間、ルビーの身体が何かの向こうに引き込まれた。慌てて彼女を引き戻そうとしたディックも巻き添えになる。

生まれてから今までの1530年間で、走馬灯のごとく一気に頭の中を駆け廻る――

――ディックのそれはほんの一瞬だった。ところが、ルビーの上腕を掴んでいた右腕は、ガッと下の方へ強く引かれる。

「あ...おい、ルビー?!」

ディックが慌てて声を掛けても、ルビーはうんともすんとも反応しなかった。

初めは気絶してしまったのかと思ったのだが、よく見てみるとどうやら眠っているらしかった。しかし、何時間経っても目を覚まさない。

...ちょ...大丈夫か...?

彼女の睡眠時間が2桁になるといよいよ不安になるのだが、声をかけても揺すっても突いても、一向に起きる気配がない。

...ほんっとに大丈夫か...?

どんなに心配でも為す術がないので、ディックはただ、眠っているルビーの側にずっと座っていた。

「...ん...うーん...？」

ルビーが目を覚ましたのは倒れてから3日後のことだった。

「あ、よかった...やっと起きた!!」

さすがにずっとではないものの、基本的には側にいて、ずっと心配していたディックは、心底ほっとしたようにそう言う。

「え.....うち、どれくらい寝てた？」

片手で頭を支えながら少し怠そうな様子で聞いてくるルビーに、ディックが

「3日間」

と答えると、ルビーは

「マジで?!」

と驚いたような顔をした。

「あ、そう...ほんとに...」

そう呟くと、ルビーはしばらく黙ってしまう。

「...あー...どうした？」

そんなルビーを見て不審に思ったディックが尋ねた。

「...うー...」

何か言葉を選んでいるようなルビーの様子に、ディックの脳内にある不審メーターが跳ね上がる。

...どうしたんだ？

「...おまえ...熱でもあんの？」

本気で心配したディックが手をルビーの額に当てようとする、ルビーはようやくいつもの調子で

「あほっ!!違うわ!!」

と叫んだ。

「じゃあどうしたんだよ？」

そんなルビーの反応に安堵しているのを隠しつつ、ディックがさもむっとしたように尋ねると、ルビーは

「ただ...1500年前のことを、思い出ただけだよ」

と言って俯く。

「.....え.....」

その答えを聞いたディックは、一瞬で血の気を失って固まった。

2人はしばらくの間黙っていた。息もできないほど重苦しい沈黙が、その場をずっと支配している。それを先に破ったのは、ルビーの

「...分かってると思うけど、うち、怒ってるんだよ」

という言葉だった。腕組みして言うルビーに、ディックは

「...はい」

と頷くことしかできない。

「...あの時さあ...あんた、何しようとしてたんだよ?なんかやろうとしてたんだろ?だから、うちのことが邪魔だったんだろ？」

ルビーにそう言われると、ディックは

「...“邪魔だった”...」

とゆっくり繰り返す。そんな言い方はしたくないが、でも平たく言えばそういうことだ。

「何しようとしてたの？」

ルビーがもう1度聞くと、ディックは俯いたまま、低い声で

「...ユリアをぶっ殺してやる気だったんだ」

と答えた。

「ユリア？」

ルビーがきょとんとする。

「ユリアって...こないだの？あれ、あんたのお母さんだろ？」

「そう。だけど、知らなかったから...」

ディックはそう言って、ルビーに一切合切を話した。自分が捨て子だったこと。ソルジャー族全滅のこと。キュアラ一族に行ってジャックに出会い、居候させてもらったこと。ユリアとの主従契約。シェルダンと会ったこと。そして、彼の最期――

「...――だけど、“ユリア”はあんたのお母さんで、その“デイビッドさん”がお父さんで、おまけにジャックは従兄弟だったんやろ？」

ルビーが戸惑ったように聞くと、ディックは

「ああ」

と短く頷く。

「だけど、それは本当にこの間知ったから.....あの時は、そんなことこれっぽっちも思ってなくて。だから、本気で復讐してやる気だった」

ディックはずっと俯いていた。俯いたまま、ぽつりぽつりと話す。

「でもさ...ぶっちゃけ、やっぱどこにいるかも分かんねえ仇を捜し続けるよりさ、つまり、その...おまえという方が楽しいじゃん。だから、一緒にいるとなんかもう、“やめちゃおうかな...”みたいな気になるんだよ。でも、それじゃあシェルダンが可哀相だろ？」

ディックがそう言うと、ルビーは首を傾げながら

「シェルダンくん、あんたにそんなことしてくれって言ってたの？」

と聞いてきた。

「いや、言ってねえけど...」

ディックがそう言いながら首を振ると、ルビーは

「何だよ...だったらただのお節介じゃん」

と言ってパスッと切ってくる。

「違うよ」

ディックは自嘲的に笑いながら、また首を振った。

「今“シェルダンが可哀相”って言ったばっかなのになんだけど、多分、本当は俺が恨みを晴らしたかっただけなんだ。散々酷い目に遭わされたこととか、シェルダンを奪われたこととか.....あいつのせいでキュアラ一族から離れなきゃならなかったこととかさ」

ディックがそう言うと、ルビーは

「キュアラ一族？」

と聞き返す。

「めっちゃめっちゃ治安悪くって、嫌だったんじゃないの？」

ルビーがそう尋ねると、ディックはシレッとした調子で

「でも、ジャックがいたし」

と答えた。

「おまえ...ほんつとにあいつと仲良いんだな」

ルビーが呆れたように言う。

「え？や、だって...ほら、1500年以上ずっと腐れ縁だからさ...」

ディックはそっぽ向いてぶっきらぼうに言うが、ディックとジャックの仲がいかに良いかということについては今さらどうこう言うまでもない。

「あ、そう.....で？」

ルビーが先を促すと、ディックは

「え？ああ...それに...ほら、やっぱおまえの前でそういうことしたくもなかったし...」

と言いながらまた俯いた。

「...なんかめっちゃめっちゃバカにされてる気がするんだけど...」

ルビーがそうむくれると、ディックは首を振りながら

「そうじゃなくって!!」

と弁解する。

「結局、どんな大義名分を掲げてみたところで、要は人を殺すって話だろ？そうするとほら、やっぱさ.....その.....後ろめたいじゃん」

散々言葉を搜した結果、結局うまく言い表せるものがなくて、“後ろめたい”なんて言葉で済ませてしまったが、本当はそんな軽い言葉で済まされるようなものではない。

「...ふーん...だから、うちに何も言わないで、あんな訳分かんないこと言ってたんだ？」

ルビーがジトツと睨みながら言うと、ディックは

「...まあ...はい、そうです...」

と頷く。

重く押し掛かるような沈黙が流れた。流れていく時間があまりにも痛い。そんな沈黙の中で、ディックは何回も謝罪の言葉を口にしようとした。しかし、いったいどんな言葉で謝ればいいのか、まったく分からない。“こう言えば...”と思っても、いざ言おうとすると何故か言えなくなってしまうのだ。だが、そうこうしているうちに沈黙はどんどん重く冷たくなっていく。それに堪えられなくなったディックは、とうとう

「.....ごめんな」

と謝った。

「...本当に、ごめん...」

言葉は砕けているが、だからこそ、胸を罪悪感という矛で突き通されたような苦しみと痛みが、彼の感じているままにひしひしと伝わってくる。

「...1500年前も、うちのこと嫌いじゃないって言ってたよな？」

ディックの思いを感じながら、ルビーが低めの声で尋ねた。

「...好きだったよ」

ディックがぼつりと答えと、ルビーは少し口角を上げて
「うちのこと殺しちゃってさ...何か思った？」
と聞いてくる。

そんな彼女の表情に、ディックは思わずむっとした。

いや、自分が悪いのは明白なのだ。ルビーを散々生殺し状態にしたあげく、本当に殺してしまったのだから、自分が怒るのはどう考えても筋違いだ。だが、それでも...

「そりゃ.....いろいろ思ったさ」

大好きな人を苦しめて、悲しませて、追い詰めて、殺してしまった。そんな自分を責め、嫌悪し、憎んだ。“人を殺した”という罪悪感そのものにも悩まされた。でも、そういうことをどうやって言葉にすればいいのか分からない...

「...本当に、気が狂っちゃうんじゃないかと思った...」

ディックはそう言いながら、俯いて唇を噛んだ。その時の思いはすぐ蘇ってくる。思い返すだけで、深海に沈められたかのような苦しみが帰ってくる。にもかかわらず、それを言葉にはできない...

言葉にはできなくても、その苦しみと悔しさは顔に出ていた。それを見たルビーは、小さく苦笑する。

「...だったらもう、チャラでいいよ」

ルビーが呟くように言った。

「1500年間、ずっと反省してくれたんだろ？だったらもういいよ.....うちもさっき夢で見たとき、我ながら惨いことしたなあって思ったし...」

ルビーはそう言ってから、

「な？」

と明るく笑う。

そんなルビーに、ディックは驚愕して目を瞬かせた。

...え...?そんな...

ディックは一瞬、“...本当に...?”と聞き返そうかと思った。しかし、そんなことを言えば、“しつこいっ!!”などと怒鳴られるのは目に見えている。

「...ありがとう...」

とても短く、簡単な言葉。そこに、ディックは自分の思いをすべて詰め込んだ。

ディックとルビーが空間の最果てへ行ってしまった18日の晩は新月だった。身体が暴れなくなって間もないうちに地下牢の扉が開き、眩しい光とともに長身のシルエットが目に入ってくる。

鎖などを解いてくれる時、ジャックはいつも無言だった。“大丈夫？”“大変だったでしょう？”—そういう言葉をかけられた記憶はない。そのかわり、鎖を解いてくれる時や足枷・手錠を外してくれる時の手、猿ぐつわを外そうと頬に添えられる手—そういった時の手つきが、優しく労ってくれる。びっくりするくらい丁寧で、まるで宝物か何かを扱っているんじゃないかって思うくらいに優しくて.....

「お薬をお持ちしました」

「うん...どうもありがとう」

薬を飲むと、どんどん傷が癒えていくのを感じる。“Curer”—まさに“癒す人”だ。

「...ありがとう、ごめんね...」

「いえ」

いつも通りの会話。まったく同じやり取りを、毎月毎月繰り返してきた。...でも、もうこれも最後。毎回迷惑かけてきたんだからこんなこと言うのもなんだけど...こうやってジャックに治療してもらうのも、最後なんだ...

2009年10月20日

「...失礼します」

ジャックはそう断ると、サファイアの肩に乗っている髪を梳くように除け、パジャマの襟をそとずらして鎖骨を露わにした。そして、その白い肌に牙を立てる。牙が突き刺さっても痛みはない。ただ、何かが入ってくる違和感があるだけだ。

...ううう...

この時間が、サファイアにとってはある意味最も怖い時間だった。あまりの近さに跳ね上がる心拍数—それがバレてしまわないかと、不安で不安で仕方がないのだ。だがそれと同時に、少し嬉しい時間であったりもする。ジャックはただサファイアの両肩を押さえているだけなのだが、サファイアにはなんだか抱きしめられているかのように思えてしまうのだ。そして、そんな自分があまりにもバカらしくて、虚しくもなる。

...でもいずれにせよ、吸血されるのもこれが最後なんだろうな...ここ数日は“最後”のことばかりだ。

やがて、すっと牙が抜ける感覚がした。それだけで瞬く間に塞がる傷口を、ジャックは優しく指で撫でるようにして拭う。

「...ありがとうございました」

ジャックがそう言った瞬間、またしても地震が起こった。サファイアの机の上に置かれたデジタルフォトフレームなどがカタカタと音を立てて揺れ、そのあと10秒ぐらいで治まる。

「...もう2人が行ったのにね」

俯いたまま、サファイアが小さな声で呟いた。

「ええ...」

ジャックも低めの声で頷く。

まるで、サファイアも行かなければならないのだということを再確認させているかのようだ—
—そう思うと、ジャックはサファイアの肩を掴んでいた手につい力が入ってしまうのを感じた。

2009年10月21日

この日はサファイアが時の最果てへ行く日の前日だったが、サファイアとジャックはまったくいつも通りに

「おはようございます」

と挨拶しながら出勤してきた。するとルチアーノとペーターも、

「おはよう」

といつも通りの挨拶を返す。

「クリアシャイン、あんた明日の支度は出来ているんでしょうね？」

挨拶を完全に省いたピュアがいきなりそう確認してきた。

「はい、大丈夫です」

サファイアの明るい返事を聞くと、ピュアは

「だったらちょっとねえ...頼みがあんのよ」

と言いながら2人を手招きする。

「サファイアンコスモス静養地のすぐ近くに、新しく水族館ができたんですって。で、館長が私にチケットを寄越してきたんだけど...ブラックモア先生に聞いたら、行っちゃダメだって言うのよ」

ピュアが不機嫌な声で言った。ブラックモア先生とはピュアの主治医のことだ。

「というわけで、あんたたちで行ってきてくれない？2人用だから...」

ピュアはそう言いながらサファイアにチケットを差し出す一あげたりもらったりしたということを実感しやすいためか、青玉島でもギフト用としてのみ紙のチケットを使っているのだ。

「ええっ?!いいんですか?!」

それを受け取ったサファイアはびっくりして思わず聞き返した。するとピュアは頬杖を突きながら、イライラした声で

「話聞いてなかったの？」

と言ってくる。

「私は、あんたたちにそれを処分してくれって言ってるの」

ピュアがそっぽを向いたままそう言うと、サファイアは嬉しそうに笑って

「ありがとうございます!!」

とお礼を言った。

3時間後、サファイアとジャックはサファイアンコスモス水族館の入口に来ていた。交通の便の悪さと水曜日という曜日のせいか、大きな水族館であるにもかかわらず来館者は非常に少ない。

入口でチケットを出すと、係のお姉さんが半券を返してくれた。軽く会釈してそれを受け取ったジャックは、そのまま財布にしまい、入口のすぐ奥にある装置にケータイをかざす一電子リフレットだ。

「ねえねえじゃっくん、イルカショーやってると思う？」

通路を歩きながら、サファイアがわくわくした声で尋ねた。

「どうでしょう、平日ですから...」

ジャックはそう言いながら今落としたデータに検索を掛け、イルカショーの案内を見つけると

「今日は12:00からと15:00からの2回ですね」

と教える。

「じゃあ、あとで絶対見に行こうね!!」

サファイアが笑顔で言った。その眼はまるで子供のようにキラキラと輝いている。ジャックはそんなサファイアを見ながらケータイをしまうと、いつもと変わらない淡泊な口調で

「構いませんよ」

とだけ答えた。

水族館は3フロアに渡っていた。1階は淡水魚である。

「あ、シルバーアロワナだ!!」

サファイアが最初に反応したのは、石包丁のような形をした1m強の魚だった。腹びれが申し訳程度の大きさしかない代わりに、しりびれがとても大きい。解説には“雄が口の中で仔魚を育てる”と書かれている。

「あ、バタフライ・フィッシュ!!」

次に指さしたのは、腹部から棘のようなものが数本出た全長15cm程度の魚だった。

「うきぶくろで空気呼吸するんだって」

サファイアは“だって”と言っているが、そんな解説はどこにも書かれていない。おそらくサファイアが昔学んだ知識なのだろう。

「あ、カジカだ——...」

サファイアはちょうど子供のように、気になる魚を見つけてはすぐに駆け寄って行った。ただ子供と違うのは、普通あまり反応しないような魚に反応することと、すらすら解説が出てくることぐらいだ。

2階は海水魚のフロアだった。最初にあったのはサメの水槽だ。

「ねえねえじゃっくん」

しばらくおとなしく眺めていたサファイアが、唐突にそう話し掛けてくる。

「オナガザメって、なんかじゃっくんに似てない？」

オナガザメの形状は、まさにその名の通りだった。全体的にシャープなシルエットで、尾が体長より長い。全体の色は濃紺だが、腹部だけは白色だ。



「...共通点を教えていただけませんか？」

ジャックの声が冷ややかになっても、サファイアはめげずに

「ほら、あのまっすぐ伸びてる尾が、じゃっくんの1つに縛った髪の毛に似てるでしょ？色も、濃紺と白だからじゃっくんカラーだし...」

と説明する。ジャックはそれを

「そうですか」

と冷たく一蹴したが、それでもサファイアは気にすることなく

「うん、絶対そうだって」

と断言すると、笑顔で次の水槽に行ってしまった。



3階は爬虫類や両生類などのフロアだった。

「うわあ...ヤドクガエルだ、綺麗...」

サファイアは“綺麗”とコメントしたが、その言葉と裏腹に、ケースとの距離を1mより縮めようとは決してしない。

「コメントと行動が合ってませんよ」

ジャックが冷ややかな声で指摘すると、サファイアは

「いや...ほら、あんまり騒いで猛毒のカエルを刺激するといけないし...」

などと言って、ススス...と離れていった。

3階にはトカゲやカタツムリ、蛇などもいた。どれもきちんと水槽に入っていて、蓋も閉まっているため、近づいたぐらいで襲ってくることはまずないと思われる。にもかかわらず、サファイアはどの水槽の前にもあまり立ち止まらなかった。

館内を一巡りし終えたのは11:40のことだった。イルカショーの20分前だ。

「そろそろ行こ!!」

サファイアはそう言うなり、ジャックを手招きして小走りに駆けていく。

2人が着いた時にはもう、席の3分の2は埋まっていた。楕円形の大きなプールを、すり鉢型の席が360度囲んでいる。

「あれ?中はガラガラなのに意外と人いたんだね...」

サファイアはそう首を傾げながらも、最前列に2つ並んだ席を発見し、すたすた歩きはじめた。

「わたしたちが来たのは開館直後でしたから...そのあとにいらしたのではないのでしょうか」

ジャックが言うと、サファイアは

「あー...なるほど」

と相槌を打ちながら席に座る。

もともと既に客が多いと驚いていたわけだが、その後の20分間で人の数はさらに増えていった。ショーが始まる頃には満席となり、後ろに立っている者まで現れる。しかも客層は子供連ればかりかと思いきや、意外とカップルが多い。

「良い席とれて良かったね」

ガヤガヤとしている中で、サファイアが笑いながら言った。

「そうですね」

ジャックは“平日の昼間なのに...ここに来ている人は何なんだろう?”とも思ったが、それは言わないでおくことにする。

開始予定時刻12:00になってもショーは始まらなかった。12:05になって、ようやく司会役の若い女性飼育員が現れる。

『皆様、サファイアンコスモス水族館へようこそ!!イルカショーの時間がやって参りました。わたくし、本日司会を務めさせていただきますグロリア・グリーンと申します。よろしくお願ひしませう!!』

グリーンさんはこの手の司会者独特の口調で話した。テンションが高く、やたらと抑揚のついた話し方だ。

『では、今日のイルカちゃんを紹介します。3才の男の子、ポールとー』

グリーンさんが名を呼ぶと、水中からイルカがジャンプしてきた。

『ー2才の女の子、ネリーです!!』

今度は先程よりやや小さなイルカが飛び出してくる。

『はい...じゃあ早速始めましょう。最初はー...』

イルカは様々な芸を見せた。バレーボールのラリーみたいなことをしたり、1桁の足し算を披露したり...最後には、チャイコフスキーの『胡桃割人形』の曲に合わせて宙返り、水の輪ー青玉魔術で作ったものだー潜り、立ち泳ぎなどを連続して行う“ドルフィンダンス”なるものを見せたりする。

イルカが技を見せるたびに観客が沸くのだが、サファイアも例に漏れず大はしゃぎだった。そ

して、最後のお馴染みである

『...ーでは最後に、イルカちゃんたちを撫でてみたい人~!!』

という募集にパッと手を挙げる。

しかし、いくら幼く見えるサファイアでも、あと2ヶ月で17才なのだ。こういう時に選ばれるのはたいてい小さな子供である。そして、今回も例外ではない。

「イルカショーすごかったねえ」

10分後、通路を歩きながらサファイアが満足げに言った。

「そうですね」

ジャックは頷いたあと、曲がるべきところで直進しようとするサファイアを、後ろから

「こちらですよ」

と引き止める。

「あ、そっか」

サファイアは慌ててUターンしてきた。

2人が向かっているのは軽食コーナー。ジャックはともかく、サファイアにとってはもう昼食の時間だ。

軽食コーナーに到着すると、サファイアはメニューを見ながら

「うーん...」

と悩み始める。

「...サファイア」

ジャックが冷々とした声で話し掛けた。

「どうしていきなりデザートのパージを開けるのです？」

そう聞かれると、サファイアは

「うっ...」

と言葉に詰まる。

「えーっと、とりあえずパンケーキは決まったんだけど、あとキャラメルパフェにしようか、それともアップルパイにしようか...」

「デザートは1つです。そして、食事もきちんと摂ってください」

ジャックが氷のような眼で言った。

「ええええ...」

サファイアが抗議すると、ジャックの眼がさらに冷たくなる。

「...ううう...」

結局、サファイアは卵サンドとキャラメルパフェにした。ジャックは紅茶ではなくコーヒーを飲んでる。

「なんか...ジャックが紅茶と血液以外のものを飲んでるのって、初めてな気がする...」

サファイアが卵サンドを食べながらそう呟くと、ジャックは

「気がするだけです」

という一言だけで答えた。

そのあとに運ばれてきたキャラメルパフェを、サファイアがいかに幸せそうな顔で食べたかは、もう書くまでもないだろう。

その後、2人はお土産コーナーへ行った。

「あ、ここにもじゃっくんとディックがいる!!」

サファイアの意味不明な台詞を受けて彼女の視線の先を追うと、そこには6年前にサファイアがセントラルシティ駅で買った黒猫のぬいぐるみキーホルダーが並んでいる。もちろん、同じ並びにルビーが持っていた赤茶猫もいるわけだ。

「...オナガザメではなかったのですか？」

ジャックが真顔で尋ねると、サファイアは一瞬目を瞬かせてからおかしそうに笑い出す。

「あれは似てるだけ。やっぱりじゃっくんは黒猫だよ」

他にもいろいろな物が売られていた。イルカグッズ・ペンギングッズは特に多い。ぬいぐるみ、ペンダント、シャーペン、ボールペン、消しゴム、定規、メモ帳、ハンカチ.....キーホルダーは10種類以上ある。

「文房具も多いですが...あまり使いませんか？」

マンボウのメモ帳を手にとるサファイアに、ジャックがそう尋ねると、サファイアは

「まあね。でも、青玉学園初等科ではノートとかシャーペンとか使うらしいから...」

と言いながらマンボウのメモ帳を売場に戻した。

「そうなんですか」

流石の青玉人も、人生の中で2年間ぐらいは手書きする時期があるらしい。

「あ、これ綺麗!!」

次にサファイアが目を止めたのは貝殻の瓶詰だった。瓶に好きなだけ貝殻を詰めて1瓶600Fanなどという、お馴染みのものだ。サファイアはしばらくそこを掻き混ぜていた。しかし、結局瓶詰は買わないことにしたらしく、そのまま立ち上がる。

サファイアはお土産コーナーでも、爬虫類グッズには近寄らなかった。食品売場では、王宮の3人にイルカサブレを選ぶ。

店内を一巡りし、二巡りし、いくつかの売場をうろうろした。そして3周目に入って、隅にまだ見ていない売場があることに気づく。

「あーっ!!これ可愛い!!」

サファイアがそう反応したのはオナガザメのぬいぐるみだった。尾を除いて30cm、尾も入れれば60cm程だ。

...どこが可愛いんだろう？

ジャックにはどうも理解できないのだが、とにかくサファイアにとっては可愛いらしい。

結局、サファイアはそれとサブレをレジに持っていった。

お土産を買った時点で時刻は14:30。水族館を出ると、秋の澄んだ青空が広がっている。

「...ねえねえじゃっくん、ちょっと寄り道してもいい？」

「構いませんが」

2人は周辺に広がるサファイアンコスモス畑の小道をゆっくり歩いていった。本当に広い花畑で、水族館が小さくなってしまいうくらい歩いても、まだまだずっと広がっている。

「...ピュア様は嘘をついていらしたみたいですね」

ジャックが唐突に言った。

「どうして？」

サファイアが驚いて首を傾げると、ジャックは

「先程ぬいぐるみを買う際に気づいたのですが」

と言いながら半券の1ヶ所を指差す。

“兄弟特別招待券”

「ピュア様にご兄弟がいらっしゃることを、館長をご存知ないとは思えません」

仮に知らなかったとしても、今ピュアは結婚したばかりなのだから、夫婦ペア券などを渡すのが自然だ。

「...確かに...」

...ピュア様、わざわざ用意してくださったんだ...

サファイアはそう思いながら、半券を丁寧に畳んでポケットに入れた。

「私たち、兄妹に見えるのかなあ？」

サファイアが笑いながら首を傾げると、ジャックは少し間を置いて

「...どうなのでしょうね？」

とだけ答える。

それから数歩進んだところで、サファイアが突然心と足を止めた。それに合わせる形で、ジャックもその場で立ち止まる。

一面に広がる青いコスモス畑は地平線で綺麗な空と混ざり合っていた。秋の心地好い風が、花を揺らし、2人の髪をも揺らしている。

「...ごめんね、子供みたいにはしゃいじゃって...」

サファイアが唐突に言った。

「水族館来るの初めてだったから...つい、興奮しちゃって...」

微笑みながら俯くサファイアを、ジャックはじっと見つめる。

...そうか...

生まれて間もない頃から王宮にいて、3才から働き始め、6才からずっと今の仕事をしているサファイアは、水族館になど来たことなかったのだ。

「...楽しかったですか？」

ジャックが尋ねると、サファイアは、

「うん」

と大きく頷いたあと、“ジャックは？”というように首を傾げてきた。

「...わたしも楽しかったですよ」

ジャックは花畑を見つめながら、静かな声でそう答える。

「...嘘っばい...」

相変わらず無表情なジャックを見て、サファイアは思わず苦笑した。

風に乗って、微かに笛の音が聞こえてくる。時刻は15:10だから、おそらくイルカショーの音だろう。

「...でも...本当によかった」

サファイアが呟いた。

「初めての水族館も、最後の水族館も、ジャックと一緒に来れたもん」

今日が、最初で最後の水族館。遊園地や動物園、プールなどはついに行かないままだ。

「それに、またここに来れたし」

そう言いながら、サファイアは青く透き通ったコスモスの花を1輪摘み取る。

「ね？」

サファイアが振り返り、笑いながら首を傾げた。その笑顔は、サファイアが今言った言葉が本心の一部であることを示している。確かにそう思っているのだろうが、思っていることはそれだけではない。

「...ええ」

ジャックは頷きながら、ゆっくりとサファイアに近づいた。不思議そうに見上げてくるサファイアの手からおもむろに花を取り上げると、サイドだけ結んである彼女の髪に、そっと挿してみる。

「...この花、本当によく似合いますね」

ジャックが一言ずつ噛みしめるような口調で言った。ほとんど無意識のうちに、サファイアの髪を細い指先で梳いている。

「...う...そう？」

サファイアは恥ずかしそうに俯いてしまった。ジャックの言葉に反応したのか、それとも行動に反応したのかは分からない――いや、おそらく両方なのだろう。

「ええ...本当に」

風が2人を優しく撫でる。空気はもう冷たいが、日の光はまだ暖かい。

「...ねえ、ジャック？」

未だかつてなかった空気が2人を包む中、サファイアはその空気に乗じて

「1つ...お願いしてもいい？」

と尋ねた。

「何ですか？」

ジャックが聞いても、サファイアは躊躇ってしまってなかなかその先を言わない。だが、ジャックがもう1度

「何ですか？」

と促すと、サファイアは俯いたまま、本当に小さな声で

「その.....抱きしめてほしいの」

と言った。ワンピースの裾をきゅっと握り、緊張のあまり身を固くしている。

そんなサファイアに、ジャックは微かに驚きの色を見せた。

...当たり前だ。いきなりそんなことを言われたら、驚くに決まっている。変な子だって思われているかもしれない。何を言い出すんだって思われてるかもしれない。

...でも...どうしても.....1回だけ...

「...お願い...一瞬でもいいから...」

ジャックはその言葉の途中で、そっと、優しく抱きしめてくれた。信じられないほどの優しさで、ふわりと抱きしめてくれる。

...そういえば、初めて会った時もびっくりするような柔らかい手つきで抱きとめてくれたっけ...

サファイアに“抱きしめてほしい”と言われた時は、ジャックもやはり躊躇っている部分が大きかった。だから、間違っても壊してしまうことがないようにと細心の注意を払って、丁寧な手つきでそっと抱きしめたのだ。しかし、1度こうしてしまうと、そんな躊躇いはみるみるうちに消えてしまう。今この瞬間、この場所に、サファイアは紛れもなく存在しているのだと感じられる。そしてただ、サファイアのことを愛おしくて、愛おしくて、失いたくなくて...そんな思いが溢れてきて、抱きしめる腕に思わず力がこもってしまう。



サファイアはジャックに自分の体重を任せてしまうと、そのままそっと目を閉じた。

ジャックのことだから、仮に抱きしめてくれても一瞬だけだろうと思ってたのに...こんなふうに、ぎゅっと抱きしめてもらえるなんて、思ってなかったな...

嬉しくて、切なくて、ちょっと...虚しくて。

「...サファイア」

抱きしめたまま、ジャックが切実な声で何か言おうとした。しかし、サファイアは

「ううん、言わないで」

と小さく首を振る。

「ごめん、私...我儘だよね。でも...聞きたくないの。お別れの言葉とか.....寂しくなっちゃうでしょ」

サファイアがそう頼むと、ジャックはそれ以上何も言わなかった。そのかわり、サファイアの

小さな身体をさらに強く抱きしめる。

サファイアンコスモス畑は、今も6年前も1500年前も、いつも同じように揺れていた。

帰ってきた2人は、ピュアたちにイルカサブレを渡した。

「楽しかったかい？」

ペーターに聞かれると、サファイアは

「はい、とっても!!」

と答える。その後2人はピュアにきちんとお礼を言った。

「...何言ってるのよ。別に、あんたたちのために用意したとかじゃないんだから。ただ、自分の国の女王様の健康状態も知らない館長が送り付けてきた、有難迷惑なチケットの処分を頼んだだけなんだからね!!」

頬杖突いてそっぽ向くピュアの後ろで、ルチアーノが必死に笑い声を噛み殺している。

「それより感想聞かせなさいよ。館長にお礼言うとき、困るでしょ？」

ピュアはあくまでもその設定を突き通すつもりのようだ。

「あ、はい。まず...」

サファイアは気に入った魚30種ぐらいについて、名前・形状・面白いと思った解説などを、身振り手振り付きで逐一話した。何かメモを見ているわけではないのに、詰まることなくすらすらと喋る。

「...ちょ...遊びに行ったんじゃないの？」

ルチアーノが愕然とした声で突っ込んだ。しかし、サファイアは何故そう突っ込まれたか分からないらしく、不思議そうにくいっと首を傾げる。

もちろんイルカショーについても詳しく話した。

「ふーん...じゃあ1番のお気に入りはやっぱイルカナわけ？」

ピュアが尋ねると、サファイアはふるふると首を振る。

「イルカも可愛かったんですけど...1番はこれです!!」

ジャンッ!!と効果音が付きそうな勢いで、サファイアがお土産に買ってきたぬいぐるみを取り出した。

「オナガザメです!!」

サファイアが自分の顔の高さに掲げて皆に見せると、ペーターは“また変わったものを...”というように

「...ほう...」

と声を漏らす。

「なんかジャックに似てませんか？尾が髪の毛っぽかったり、色もジャックっぽかったり...」

「ちょ...」

ピュアが思わず爆笑した。笑いすぎてむせてしまい、笑っているのか咳込んでいるのか分からなくなる。

「んもう...あん...ゴホッゴホッ...たはまったく...」

ピュアの呆れ声に、サファイアは少し悪戯っぽく笑った。

その夜、ピュアからサファイアに1年分の“食料”なるものが入った段ボール箱が3つ渡された。

「...え...？」

驚いたような顔で受け取ったサファイアに、ピュアは
「1人じゃ外に出られないんですって。水は青玉人なんだから自分でどうにかしなさい」と言い放つ。

「あの...中身は...？」

サファイアが恐る恐る尋ねると、ピュアはきっぱりとした口調で
「カンパンと、コンビーフと、ビタミン剤。しょうがないでしょ？」
と言った。それを聞いたサファイアは途端にしょんぼりしてしまう。2人目の時の守人が見つかるまで食料をもたせなければならないのだから、こういうものばかりになるのはやむを得ないと分かっているのだが...

「...甘い物...」

サファイアの呟きに、ピュアが溜め息をついた。
「そう言うと思ったわ.....ほら、これで我慢しなさい」
そう言って手渡されたのは、サツマイモキャラメルとミックスナッツキャンディとカスタードプリンキャンディの袋。サファイアの好きなお菓子ーさつまいもタルト、ミックスナッツタルト、プリンを意識して、ピュアが直々に選んだものだ。

「...ありがとうございます」

サファイアはそうお礼を言うと百露華を取り出して、全部ポケットに入るよう縮小した。

2009年10月22日6:58

「...そろそろ時間かな」

ベッドに腰掛けていたサファイアは、そう言いながらぴょんと立ち上がり、思いっきり伸びをした。やはり、いくら伸びあがっても小さいものは小さいようだ。

「ええ...」

ジャックもそう言って立ち上がる。そのまま玄関に向かおうとしたサファイアの肩を、ジャックがそっと掴んで引き止めた。しかし口を開こうとすると、サファイアが“言わないで”と言うように首を振る。

ごめんね、我儘で...私も、本当は言いたいことたくさんあるの。“いっぱい迷惑かけちゃってごめんね”とか“ずっと側にいてくれてありがとう”とか、“一緒にいて、楽しかった”“ジャックに会えて、本当によかった...”とか...“大好きだよ”とか。

でも...そんなこと言ったら、時の最果てへなんて行けなくなっちゃうから。そしたら...困るでしょ。だから...ごめんね、ジャック.....ごめんね...

8:00

ピュア、ルチアーノ、ペーター、イル、パール、ジャック、サファイアの7人は、時の丘の大きな木の下にいた。

「この洞から入ってずっと進むと扉があると思いますから、それを開けてください」

イルがそう説明すると、サファイアは首を傾げて

「1本道なんですか？」

と尋ねた。すると、イルは首を振って

「いいえ...でも、あなたなら分かるはずです。扉があなたを引き寄せるはずですから...」と答える。

「...分かりました」

不安はたくさん残っていたが、サファイアはとりあえずそう頷いた。

「...では、行ってまいります!!」

サファイアは皆に明るい笑顔を向けてそう言うと、身軽な動きで洞の中へ消えて行く。

結局サファイアはジャックに、自分の想いを言うことも、彼の想いを聞くこともしなかった。

その後王宮に戻った6人の動きは、いつもとまったく変わらなかった。安全確保のために来ていたパールは自分の仕事に戻ったし、ピュア・ルチアーノ・ペーターは女王の間で普段通り国政を行う。当然ジャックも側近の仕事を一一と言ってもあまりないのだが一一している。

ジャックが自室に戻ったのは勤務時間終了後だった。もともと物が少なかったこの部屋だが、余計に物が減ってしまい、ガランとしている。空っぽになった机。もう使われることのないベッド。サファイアンコスモスの写真を飾っていたデジタルフォトフレームもない。サファイアが愛用していた青いラインのティーカップさえ、彼女が持って行ってしまった。

ジャック1人には、あまりにも広すぎる2人部屋。11年近くサファイアが暮らしていた部屋な

のに、彼女の痕跡はどこにもない。

どこにも——いや、1つだけ残っていた。

「.....」

ソファの上に置かれた、ジャック・オ・ランタンの被り物をしたキャンディボール。
“ジャック”という名前からルビーが連想し、面白がったディックが買ってきて、受け取ったジャックがソファの上に置いておいたところ、サファイアが被ってしまったあと、今度はボールに被らせた、あの時の——...

「.....」

ジャックはそこに歩み寄ると、崩れ落ちるように膝を付いた。

...どうして...？

1500年もの間、彼女に会いたくて、会いたくて、どうしようもなく...その一心で、ずっと待ち続けた。1500年間も待って、捜し続けて、ようやく巡り会えたのに。ディックの計らいに助けられ、奇跡的に会えたというのに...

...やはり、再会出来ただけで幸せだと、考えるべきなのでしょうか。再会できたうえに6年を越えてずっと一緒にいられたのだから、それ以上望んでは贅沢なのでしょうか。

でも...

待っている1500年間は1日1日が本当に長かったのに、一緒にいる6年3ヶ月は瞬く間に過ぎ去ってしまっ。まるで、光のように...

ジャックにとっては、2人の掛け替えのない人がほぼ同時に去ってしまった形になっていた。互いに心の底から分かり合えていた、これ以上はないという程の友人と、“忘れて”と言われても忘れられなかった、あまりにも愛おし過ぎる...大切な人。ディックとも、サファイアとも、過ごした時間は10年足らずなのに、その存在はあまりにも大きくて...

...もし、また1500年待てば、どこかで巡り会えるのでしょうか？何千年でも、何万年でも待ち続ければ、また会えるのでしょうか...？



サファイアは細く続く長い道をどんどん進んで行った。丘の上に立った樹の洞から入ったにもかかわらず、登ったり下ったりしながら、全体的にはどんどん登っていく。

やがて、サファイアは洞窟の奥で三つ又の道に行き当たった。当然選択肢は3つあるのだが、サファイアは迷わず真ん中を進み、不気味なほど霊妙な青白い光の漏れ出す扉を見つける。

サファイアは何も躊躇うことなく扉のノブに手を掛けると、ゆっくりと丁寧に回した。扉が開いた瞬間、青白い光に包み込まれたサファイアは、そのあまりの明るさに、思わず目を瞑ってしまう。

「……………」

20秒程度で光が穏やかになると、サファイアは恐る恐る目を開けてみた。360度見渡しても、上を見ても下を見ても、まったく変わりのない世界。ただひたすら、青白い光の世界が続くばかり。空と地面の区別すらない。

…これが、時の最果て…？

サファイアは特にこれといった理由もなく、ゆっくりと歩き始めた。しかし、いくら歩いても何も変わらない。

…え、ちょっと、これ…どうすればいいの？

何時間も歩き続けて、ようやく“何か”が現れた。

…と…時計…？

曲線的な細かい装飾のなされた黒いアナログ時計が、サファイアの前に聳え立っていた。

…何、これ…

目の前の巨大な物体が時計であることは分かっても、それがこの空間において一体どんな役割を担っているのやら、皆目見当つかない。

サファイアは何となく近づいていき、巨大な時計に触れようとした。右手を伸ばし、そっと指先で触れようとする。

「っ?!」

その瞬間、サファイアの身体がぐいっと時計に引き込まれた。転ばないように体勢を整えてから、慌てて辺りを見渡す。

…森?!

そこは森の中だった。隣には…

…ルビー!!

隣には、奇妙な服——いや、1500年ぐらい前の服を着たルビーが立っていた。呼び掛けようとしても、声が出てこない。

ルビーはサファイアを知っているような素振りを見せなかった。ただ、きょろきょろと辺りを見回している。

そんな2人の前に、蛍のような光が現れた——…

気がつくと、サファイアはもとの青白い世界に倒れていた。身を起こして腕時計を見ると、もう10月25日になっている。

「……………」

時計に引き込まれてからずっと、長い夢を見ていた。

森の中で立ち尽くす私たちに、蛍のような光——これがジュリアさんなんだろう——が逃げろという。北に逃げ、ジェーンさんに追われ、捕まってしまい、呪いを掛けられる。そこに、ジャックが助けに来てくれて。デイビッドさんの仲介もあり、主従契約を結ぶ。

それからアレンやメアリーさんと会った私たちは、母子の案内に従って夢幻界へ行く。リルに会い、村長さんに紹介してもらい、今の青玉島にあたる島で暮らし始める。カレント家でジェイクからカードをもらったり、リルとウィリーさんの恋を応援したり…。そんなことをしているうちにジャックが新月の呪いを突き止めてくれて。

ディックが来たりもした。

林の中でジャックが助けてくれたこと。ジェーンさんのせいで新月の呪いが暴走してしまったこと。そのあと所有呪文でジェーンさんのところへ行ってしまった私を、またジャックが助けてくれて。そこで——そこで、好きだって言ってくれた。

それから、行方不明になったメアリーさんを、ルビーが連れて来てくれて。そんなこんなうちに、砂時計の呪いが発動して。サファイアンコスモス畑に連れていってもらったり、お誕生日をいろんな人に祝ってもらったりして…この時ジャックは、ジェーンさんに壊されてしまったコスモスの髪飾りを、もう1度くれたんだ。

そして最期に、海へ行って…

…——そんな長い夢を見ていた。夢だったはずなのに、目を覚ましたサファイアの中では、確かな“記憶”として定着している。

サファイアは、1500年前の自分の記憶を取り戻していた。

時の最果てへ来ても、サファイア1人では何もすることはできない。ただ、ここにいることで、2つの最果てのパワーバランスを保つだけである。

サファイアはずっと、膝を抱えて座り込んでいた。

……ジャック……

1500年前の記憶を取り戻しても、一層悲しくなるだけだった。ジャックとの思い出が増した分、会えない寂しさが倍増する。

「……………」

そっかぁ…そういうことだったんだ…

1500年前の私もジャックのことが好きだったんだ。そして…ジャックも私のことを、好きだって言ってくれた。

ディマイアが——ディックが発行した、私についてのディマイアらしくない記事。あの時のディックの、“もし彼がわたしの思っている人だったら、多分彼の方から青玉島に来ると思いますよ”という言葉。あまりにも都合よく、吸血鬼自治区にいた、青の薬商人。

“もう旅はできませんけど…いいんですか？”——“ええ…もう構いません”

もし、ジャックが私を捜すために、1500年も旅していたのだとしたら？ディックの記事の目

的が、ジャックに私の居場所を知らせることだったとしたら？ そうだとすれば、青の薬商人が一つまり“ジャックが”ということだが——都合よく吸血鬼自治区にいたことも、もう旅が出来なくても構わないという返事も、納得がいく。

...でも...

これはあくまでも、私にとって都合のよい、希望的解釈だった。

...普通、死んだ恋人が生まれ変わるのを、1500年間も待ち続ける人がいるだろうか？ それも、いつ、どこに生まれて来るか分からないのに...。待ったところで何の記憶も引き継いでいないというのに...

私なんかのために...？

普通なら、そのあとまた誰かと出会って、その人を好きになったりするのが当たり前だ。なんせ、前の恋人は死んでしまったのである。その人に一途であることを要求する者は、誰もいないだろう。

ただ、ジャックならあり得るかもしれない、という気もした。ジャックは...ジャックは本当に、優しいから...

サファイアは膝を抱える腕の中に、顔を埋めていた。涙が止まらない。それを止めようとも思わない。

...ジャック...

今までもジャックのことが好きで好きで堪らなかったのに。今はもう、彼のことが頭の中に浮かぶだけで苦しくて...でも、頭から離れることはなくて。

目を閉じれば、彼の姿が鮮明に浮かんでくる。すらっとした長身。1つに結っている、細く、長く、柔らかな濃紺の髪。切れ長な青い目。その眼に宿る、どこまでも限りなく澄み渡った、綺麗過ぎる透明な青い光——触れられそうなほど鮮明に浮かぶのに、ここにはいない。誰もいない。寂しくて、悲しくて、苦しくて、泣いても泣いても治まらない。

だがそんな中で、サファイアはふと、ジャックの気持ちも考えてみた。

ディックと会えなくなってしまったことを悲しんでいるのは前から分かっている。彼はほとんど顔には出さなかったが、それは間違いないだろう。

でももし、さっきの都合の良い希望的解釈が正しいのだとすれば、彼は私がいなくなってしまったことも、悲しんでいるのだろうか？

そう思うと、寂しさや悲しさの上から、申し訳ない気持ちまで押し掛かってきた。

もしそうだとしたら、私は、1500年前に悲しい思いをさせて、1500年間ずっと待たせ続けて、そして今、また悲しませているということになる。そう考えると、あまりにも申し訳なくて...

だが、サファイアはそこで考えるのをやめ、思い直した。

何を自惚れているのだろう？ 確かに1500年前には、ジャックは私のことを好きだと言ってくれた。でも、まさかそれが、今もだなんて.....いくらジャックが優しくったって.....私なんかのために...——そんなこと、あり得ない。

奇妙だった。ジャックのことが好きで好きで堪らないのに、大好きなのに...いや、だからこそ、彼が自分のことなど何とも思っていないことを願った。

大好きな人が、自分などのために悲しんでいないことを、願っていた。

サファイアは来る日も来る日もずっと座り込んでいた。それしか出来ることがないのだ。何日経っても、皆に会いたい気持ちは変わらなかったし、ジャックに会いたい気持ちは、むしろ増す一方である。だからずっと泣いていた。食欲も沸かないのだが、飢え死にになってしまうわけにもいかないで、カンパンだけは無理矢理食べるようにしている。しかし、他のものは一一飴さえも一一まったく手を付けていない。

時の守人である以上、もはや自分の命は自分だけのものではなかった。なんせ、時の守人が2人揃わないことには、2つの最果てが安定することはないのだ。最果てが崩れたら、実界も夢幻界もなくなってしまうのである。そしたら、ジャックも、皆も一一そう思わなければ、カンパンすら手をつけなかったかもしれない。それぐらい、沈んでいた。

2009年11月10日

青年はいつも空間の最果てと時の最果てを行き来していた。仮の守人だからこそ、為せる業である。

青年が時の最果てに入ってから数日歩くと、はるか向こうの方に誰かが座り込んでいることに気付いた。

...あれ...？まさか、ついに正規の時の守人が来たのかな...？

そう思いながら、青年が駆け出す。

...え...？

近づいてみると、それは彼の知っている子だった。

「...サファイアちゃん？」

声をかけると、彼女はビクツとして見上げてくる。

...あら.....泣いてる.....

「...大丈夫かい？」

そう心配そうに尋ねてくる青年の姿を、サファイアはついじっと見つめてしまった。サイドで1本の三編みにしても、まだ地面 ※218 に引きずってしまうという、あまりにも長い濃紺の髪。やはり引きずるような長い丈の、ゆったりしたローブ。

...この人は...

「...デイビッドさん？」

サファイアは驚いたような声をあげながら、慌てて涙を拭いて立ち上がった。今の今までずっと泣いていたのに、涙を拭くとケロツとしてしまう辺りは、まるで子供のようだ。

「わたしのこと、覚えてるのかい？」

そう聞き返す青年——デイビッドも驚いていた。1500年前に少し会っただけだから、もう忘れていたのではないかと思っていたのだ。

「あ、はい...」

サファイアはそう頷くと、どうしたらいいのか分からず俯いてしまう。2人の間に、そのまま沈黙が流れた。

サファイアからすれば“デイビッドさん”は“ジャックとディックの先生”、デイビッドからすれば“サファイアちゃん”は“ジャックの主人になった子”である。直接的な関係はないため、なかなか会話が始まらない。

「...あー...久しぶりだね。えっと、何年ぶりかな...？」

どうにか間を繋ごうとしてデイビッドが言うと、サファイアは

「6年です」

と答えた。

「6年？」

デイビッドが聞き返す。

「はい...王宮の廊下で1度、すれ違っているんです...」

サファイアは、ディマイアへ行く日の朝のことを思い出しながら答えた。廊下を歩いている途中にすれ違った、顔まで隠してしまいそうなフードのついたローブを引きずる、奇妙な人。すれ違った直後に驚いたサファイアが振り返ると、その人も立ち止まってサファイアを見つめている。驚いたように見開かれた紫掛かった青色の眼に宿る、化学反応で発生しているかのような、綺麗だけど少し冷たい、怪しい光…。サファイアは“どうしたんですか？”と尋ねようとしたのだが、その時彼は何かを思い出したように、慌ててどこかへ行ってしまったのだ。

…今になって思えば…あの眼は、1500年前に1度会ったデイビッドさんの――つまり、今日の前にいるデイビッドさんの眼と同じだ…。

「…よく気づいたね」

デイビッドは苦笑しながら言った。

「100年に1回ぐらい、夢幻界と実界の様子を聞きに行っていたんだ。ここにいると何にも分からないからね」

デイビッドの言葉にサファイアが

「え、でも、外にいられるのって…」

と聞くと、デイビッドは

「うん、24時間だけ。1回にだいたい1時間かかってたから、あと…9時間ぐらいかな」とゆるゆるした口調で言った。

「1回1時間……1時間って、与えられた時間の24分の1、ですよ？」

結構大胆に使うんだなあ…などと考えながらサファイアが尋ねると、デイビッドはまた

「うん」

と頷く。

「大胆に使ってるみたいに思えるかもしれないけどね…でも正直なところ、2400年間も独りでいたくないからね。その前に誰か来ないかなあって思ってたんだよ」

そう言うデイビッドの調子は、まるでお天気の話でもするかのようだった。しかし、考えてみれば…

「…そうですね…」

サファイアはそう言って俯く。

…私なんて、1ヶ月足らずでもう…堪えられないのに……1500年も…

「…あの…」

気が重くなる話題から話を変えたくて、サファイアはふと気になったことを聞いてみることにした。

「どうしてあの時、私のことを見てたんですか？わざわざ立ち止まって…」

そう聞かれると、デイビッドはきょとんとした様子で目を瞬かせる。それから、

「…ああ」

と思い出したように呟いてくすくす笑うと、

「あれはね…ほら、あの時……怒らないでほしいんだけど……君、髪も短かったし、服装も…ちょっと、男の子みたいだったから…」

などと前置きしてから、開き直ったように

「...うん、小さい頃のジャックと見間違えたんだ」

と言った。

「え？」

その発言に、サファイアは我が耳を疑わずにはいられない。

「え、ジャックと...ですか？」

サファイアが聞き返すと、デイビッドはおかしそうに笑いながら

「そうそう」

と頷く。

「君の知ってるジャックは冷たいし無愛想だけどね...小さい頃は、素直で可愛い子だったんだよ。本当に...」

デイビッドはそう言うと、突然ふと悲しそうな笑顔を浮かべた。

「...どうしたんですか？」

無遠慮かなあと思いつつ、サファイアがおずおずと聞いてみると、デイビッドは

「ああ、いや...わたしの育て方が悪かったのかな...ってね」

と答える。

「そんなことないですよ!!」

デイビッドの言葉を、サファイアは激しく首を振って否定した。

「じゃっくん、すごく優しいんですよ!!いつも見守っててくれるし、困ったことになるとすぐ助けに来てくれるし、勉強も分からないっていうとすごく丁寧に教えてくれるし...育て方が悪かったなんて、そんなことないですよ!!」

いきなり激しく憤慨し始めたサファイアに、デイビッドは一瞬驚いたような顔をした。しかし数秒の間を置くと、また面白そうに笑う。

「あはは...大丈夫だよ、彼がああ見えて本当はいい人なんだってことは、わたしもちゃんと知ってるからね」

サファイアはその言葉でようやく我に返り、申し訳なさそうに俯いて

「そうですね...すみません」

と謝った。気持ちに余裕がなかったものだからデイビッドの軽い言葉につい剥きになってしまったのだが、考えてみれば、デイビッドはまだ幼いジャックを育てた人物なのだ。知らないはずがない。

「いや、謝らないで。嬉しかったから...」

デイビッドは微笑みながらそう言うと、

「あ...そうだ。彼がどうなったか、知らないかい？」

と尋ねた。

「...多分、王宮で働いていると思いますけど...」

サファイアが沈んだ声で答えると、デイビッドは驚いたように目を丸くする。

「“王宮で働いている”って...いつのことだい？」

その質問に、今度はサファイアが目を丸くした。

「え、今ですけど...もしかして、今も生きてるって、ご存知ないんですか？」

サファイアが聞き返すと、デイビッドは戸惑いを隠せない様子で

「うん...」

と頷く。

「まったく...ここにいると外のことは何も分からないからね」

彼はそう言うと、サファイアをまっすぐ見つめて

「もし良かったら...そういうことを、教えてくれないかな」

と頼んだ。

※218...とはいえ、ここだと“地面”というものを認識しづらいのだが。

サファイアが承諾すると、デイビッドはその場に座ろうとした。しかし、そういうそぶりを見せると、サファイアが慌てて

「あ、ちょっと待ってください。今片付けますから...」
と言ってくる。

確かに、2人の足元は酷い散らかりようだった。無造作に積まれた段ボール箱のほか、紙切れのようなものが散乱している。

「...この箱は何だい？」

3つの段ボール箱を指差しながらデイビッドが尋ねた。

「あ...食料です」

サファイアがその箱をどかしながら答えると、デイビッドは
「あああ...なるほどね」
と言ってからおかしそうに笑う。

「ここにいる間は飲み食いしなくて大丈夫みたいだよ.....そうでなかったらわたしなんて、とっくの大昔に餓死しているはずだろう？15世紀以上ずっとここにいるんだから」

デイビッドの言葉に、サファイアは思わず

「...あ...」

と声を漏らした。言われてみれば確かにその通りだ。

「暇つぶしに食べたいって言うんだったら別だけど、見た感じじゃあんまり食欲もないんだろう？だったらとっておきなよ。もう1人の守人が来て、旅し始めたら、必要になるかもしれないからね」

笑いながらそう言うデイビッドに対し、サファイアは

「そうですね.....はい、そうします」

と答える。

サファイアは3つの箱を1ヶ所に積み上げると、今度は散乱した紙切れを集め始めた。何か絵が描いてあるようだ。

「その紙は？」

手持無沙汰なデイビッドが聞いてみると、サファイアは

「あっ...これは何でもありません」

と言ってぱっと背中に隠してしまう。実を言うと、サファイアはジャックやルビー、ディック、そのほか王宮の面々を思い出しながら、皆の顔などをちまちまと落書きをしていたのだ。

「あ...片付けました」

その紙たちを箱と箱の間に挟み込んでしまってから、サファイアはデイビッドの方に向き直ってそう言った。

「わざわざありがとう」

デイビッドがそう言いつつ座ると、それに合わせてサファイアも彼の正面に座る。

サファイアは何もかもを話した。ジャックと過ごした、1500年前の2年3ヶ月間と、現代の6年3

ヶ月間のこと。ジュラダンから聞いたこと。もちろん、デイビッドの息子であるディック ※219
のこともだ。

「...そう...」

サファイアの話が終わると、デイビッドは唇を噛んでそう呟いた。

「.....」

目を伏せて俯き、ただ黙っている彼の様子を見ると、サファイアはずっと聞きたいと思っていたことも聞けなくなってしまう。

“どうしてジャックやディックに、何も話さなかったんですか？”——1500年前の記憶を取り戻し、もともと持っていた現代の記憶と合わせていくうちに、自ずと沸いてきた疑問だ。ずっと聞きたいと思っていたのだが、この1500年間のことを今まで何も知ることが出来ず、今になって——しかもサファイアというほとんど見ず知らずの子から——聞かされ、言葉も出ないという状態のデイビッドに、そう責めるような質問をすることも出来ない。

「...ジュラダンは、守人を通して2つの最果てを、そしてあらゆる世界を支配しようとしたのかい？」

そう聞いてきたデイビッドにサファイアが

「ええ...そうみたいです」

と答えると、デイビッドは

「はははっ...そう、そっかあ...」

と笑った。

「いや...守人を——というより、人間を作ってしまうなんてことは、その...いろんな意味ですごいと思うんだけどね。ただ...まったく、バカだなあ...」

デイビッドは独り言のように言う。

「念のために言っておくけどね、守人はあくまでも最果ての番人なんだ。まあ、君たちみたいな本物の守人だったら他の世界を旅して修復していかなきゃならないんだから、“旅人”って言ってもいいけどね.....いずれにせよ、支配者ではないんだよ。守人になったところで、あらゆる世界を支配できるなんて...まあ...」

デイビッドは初めこそ滑稽そうに笑っていたが、その笑いはどんどん悲しみを帯びていった。その拳句、痛々しいぐらい哀しい笑みを浮かべて、

「...まったく、バカだなあ...そんな...本当に狂気の沙汰だよ」

と言った後、さらに



「ちっとも洒落にならないけどね...」

と付け足す。

サファイアは、もう返す言葉もなかった。

ただ黙って見つめていることしかできない。

「...そうか」

しばらくしてから、デイビッドはもう1度呟いた。

「ありがとう。じゃあつまり、ディックは空間の最果てに、ジャック、ジュリア、ユリア、ジュラダンも青玉島にいるんだね？」

そう確認してくるデイビッドに、サファイアは

「はい」

と頷く。

「でも、ディックたちはもう他の世界へ仕事に行ってしまったかもしれませんし、ジュラダンさんとユリアさんは...もしかしたら...」

「...死刑になっているかもしれない」

サファイアが言い淀んだ部分を、デイビッドはゆっくりとした調子で引き取った。それから少し間を置くと、

「...うん、分かったよ。ありがとう」

と言って、おもむろに立ち上がる。

「どうなさるんですか？」

サファイアもつられて立ち上がりながら尋ねると、デイビッドは

「皆に会ってくるよ」

と笑った。

「え...でも...」

サファイアが小さな声で言う。

...あと9時間しかないのに...

そんなサファイアの想いを見透かしたデイビッドは、

「...どのみち、正規の守人が来ているってことは、わたしはもう長くはられないからね」とゆるゆるした口調で言って笑った。

「え、じゃあ...」

サファイアが驚いて言うと、彼は

「うん」

とあっさり頷く。

「もう帰ってこないよ」

自分が消えてしまう話をしているのに、デイビッドの口調はとても伸びやかだった。それを訝しんでいるようなサファイアの顔を見ると、デイビッドは苦笑しながら

「.....あのねえ、100年に1回1時間話す以外、ずっとこういうところを独りでふらふらしてるんだよ？君ももう1人の守人が来るまでそうなんだろうけど...1年で飽きるからね」



と付け加える。その言葉にまたしゅんと俯いたサファイアは、心の中で“...大丈夫です。すでに1ヶ月でダウンしそうですから...”と答えておいた。

「.....何か、誰かに伝言とかあるかい？」

デイビッドが尋ねると、サファイアは迷わず、

「ジャックに.....私は元気に楽しくしてるからって、伝えてもらえますか...？」

と言った。それを聞くと、デイビッドは目をぱちくりさせて

「...え...あんまりそうは見えなかったけど...？」

と聞き返す。

だって...さっき、泣いてたじゃないか...

「...はい」

それに対し、サファイアは沈んだ様子で頷いた。それから、

「正直、寂しいんです.....ジャックとも、ルビーとも、ディックとも会えなくなっちゃって.....でも、ジャックには手間かけさせてばかりでしたから...もうこれ以上、心配かけたくないんです...」

と打ち明ける。

デイビッドは俯くサファイアを真顔でじっと見つめていた。そしてふっと、呆れているようにも感心しているようにもとれる微妙な笑みを浮かべる。

「...そう、分かったよ。伝えておく」

そう言うと、彼は

「じゃあね」

と手を振った。

「...さようなら」

サファイアもそう言うってお辞儀する。

デイビッドはもう1度手を振ると、サファイアに背を向けて歩き始めた。

※219...そもそも、どうしてデイビッドは自分の息子であるディックのことではなく、ジャックのことを聞いたのか——この答えは非常に単純だ。デイビッドは、サファイアとディックに面識があるとは思っていなかったのである。だから、サファイアにディックのことを聞いても何もならないだろうと思い、聞かなかったのだ。

2009年11月12日

もうすぐ日付が変わろうとしていた。しかし、ジャックはそんなこと気にも留めず、作業に没頭している。

サファイアがいなくなってから、掃除と換気をする以外はほとんど自室に行かなくなっていた。女王の間で働いているか、実験棟の研究室で薬品をいじっているか、どちらかだ。

扉をノックする音が聞こえた。そう思った瞬間、返事も待たずに扉が開く。

「ジャック？」

「...母さん」

扉から覗き込んでくるジュリアを見ると、ジャックは1度手を止めて入口のところまで出てきた。

「もう何度も申し上げたはずですが、返事を待っていただけませんか？よくお分かりでしょうが、ここは研究室なんです。もしわたしが、有毒ガスを扱っていたらどうするのです？」

実際、実験棟の部屋はどこも限りなく100%に近い気密性を備えている。つまり、そのような実験をする可能性も大いにあるのだ。

「何言ってるのよ。もしそんなことしてたらあなただってアウトでしょ」

ジュリアは口を尖らせてそう反論してきた。しかし、ジャックはそれを冷淡な声で

「わたしはガスマスクをしているでしょうから問題ありませんが」

と一蹴する。

「あら、そう.....ごめんなさい」

しゅんとして謝るジュリアと、呆れたような冷たい眼で彼女を見下ろすジャック——これでは、どちらが親なのか分からない。

サファイアがいなくなっからというもの、ジュリアは週に1回ぐらいの頻度で研究室に遊びにきていた。そして、この会話も毎回繰り返している。

ジャックはジュリアを中へ通すと、作業を再開した。ジュリアも、無断で椅子に座る。お互い、もう勝手は分かっているのだ。

「...まだ見つかってないの？」

「...ええ」

ジュリアは研究室に来るたびに、サファイアの相方となるもう1人の守人がどうなったのかと聞いてきた。ジャックがそれに答えるのは4回目だが、内容は変化してない。情報処理局が懸命に働いているのだが、未だに見つからないのだ。

「...そう...」

ジュリアは残念そうに俯いた。

「...サファイアちゃん...ずっとひとりぼっちなんじゃない？」

「.....」

ジュリアもジュリアなりにサファイアのことを心配しているのだが、ジャックとしてはその話題が出るたびにやりきれない思いになるので、正直に言うとあまりその件で話す気にはなれない。

会話が途切れたところで、またノックの音が聞こえた。ジャックは再び手を止めると、

「はい？」

と言って扉を開ける。

そこに立っていたのは7~8才の女の子だった。ネグリジェの上からカーディガンを羽織っている。

「あら、キャサリン...どうしたの？」

ジュリアが驚いたように尋ねた。実は、6年前にジャックがサファイアとちびっこお掃除隊の部屋を尋ねた際、泣き出してしまった赤ん坊が、このキャサリンである。約6年間の月日が流れ、今ではこの子とリサが最年長となっているのだ。

「ジュリアさんにお客様が...」

「あら...分かったわ。今行く」

そう言うと、ジュリアはジャックの脇を歩いて外へ出る。

「じゃあ...またね」

「ええ」

ジャックは2人を見送ってから扉を閉めた。

サファイア、ディック、ルビーがいなくなっても、ジャックが誰かの前で辛そうにしていることはほとんどなかった。今まで通り無表情だし、仕事もきちんとなしている。もともと少なかった口数は一層減ってしまったが、それは話す用事がないからにすぎない。

しかし、本当に平気なのかというと、とてもそうは言えなかった。

確かに、ディックのことからはかなり立ち直っていた—いや、こう書くとまるでディックのことはどうでもいいかのように思えるが、そういうことではない。彼はもちろん、非常に大切な、掛け替えのない友人である。一緒にいた時間は短くても、お互いに助け合ってきた。ジャックがディックを居候させてあげたり、母親を殺してしまったというジャックを、ディックが受け入れてあげたり...。1500年前、母親の件の後ろめたさなどから、サファイアへの思いに気づかぬ振りをしていたジャックの背を押したのはディックだった。ディマイアの社長という立場を利用して、ジャックにサファイアが生まれ変わったことを教えたのもディックだ。一方、ディックにとっては半ば伝説になっている“青の薬商人”をジャックだと思えることが、心の支えになっていた。ユリアを殺そうとしたディックを止めることで、結果的に彼が母殺しをしてしまうのを間一髪で防いだのもジャックである。ルビーに対し後ろめたさを感じていたディックの背を、同じ悲劇を繰り返さないようにと押してあげたのもジャックだ。このように、互いにずっと助け合ってきたのは紛れもない事実だが、しかし一方で、彼との関係に“依存”という要素はない。離れていても、会うことが出来なくても、互いに友人だと思っただけで支えになるのだ。

しかし、同じ“大切な人”であっても、サファイアの場合は違う。側にいてくれれば...側で笑っていてくれれば...それだけで、いったいどれほど救われるか知れないのに...1度いなくなると、それだけで.....こんなにも苦しくなる。何もかもが虚しくなる。愛おしくて、愛おしくて...

...でも、彼女が幸せになってくれるなら。それなら別に構わない—いや、構わなくもないの

だが、大切な人だから……まず、彼女が幸せになってほしいと思うのだ。

しかし、彼女は今、どうしているだろう？今——…

2009年11月13日2:00

今日の実験結果のデータをまとめ終え、ノートパソコンの蓋を閉じた瞬間、本日 ※220 3度目のノックが聞こえた。

「はい？」

そう答えて扉を開けたジャックは、愕然として目を見開く。

「...やあジャック。久しぶりだね...」

ドアの外でそう微笑むのは、デイビッド・キュアラーだった。

「...あー...すごいねえ...本当に...さすがだねえ...」

ジャックの論文をパラパラとめくりながら、デイビッドが遠い眼で言った。先程ジュリアが座っていた椅子に、今度はデイビッドが座っているわけだ。

「いや...みんなが君のことを、口を揃えてすごい化学者だって言うもんだから、わたしも期待してたんだけど.....まさか、ここまでとはねえ...」

「.....」

デイビッドは心置きなくゆるゆるしているが、ジャックの方は言葉も出てこない。

「...お茶が入りました」

出てこない言葉のかわりに、ジャックは紅茶を出した。

「あ...ありがとう」

デイビッドは紫色のラインが入ったティーカップを受け取ると、そうお礼を言う。

「.....本当に久しぶりだね」

やがてデイビッドは、最初に言った言葉をもう1度繰り返した。

「...ええ...」

ジャックはそう頷いてから、

「今までどこにいらしたのですか？」

と尋ねる。

「...時の最果てと、空間の最果てをふらふらしてたんだ」

デイビッドはゆっくりと答えた。

「最果て？」

そう呟くジャックの顔には驚きの色が見えている。それを見ると、デイビッドは目を伏せて微笑みながら

「そう...」

と言って説明し始めた。

キュアラー族を解散させてからね、わたしはジュラダンとジュリアとユリアを捜しに出かけたんだ。3年間ぐらい、あちこちを捜し回っていたかな...。

そうしていたら、ある時、“時の最果て”という空間が存在することを知ったんだ。そこにいる“時の守人”は、様々な世界に存在するすべての生物の生涯が堆積して歴史を作っていくのを管理して

いるって...そう聞いた。

そんな話を聞いたら、その人なら知ってるかもって思うじゃないか。でもね...やっぱり横着は良くないんだね。時の守人って、そういうことまったく分からないんだよ。現に、皆が一一びっくりするぐらい“皆”なんだがね一一まだ生きていてってことも、つい3日前に知ったってぐらい。

まあ、それでとにかく、前の守人一一13・14才の、金髪の男の子だったんだけど一一まあ、その子に“来た以上交代”みたいなことを言われて、仕方なく仮の守人を引き受け、1500年間2つの最果てをうろうろしていたんだ一一...

「...一一つまり、両親が共に生きていてご存知だったのですね？」

デイビッドの話を聞くと、デイビッドを見つめるジャックの眼がぐっと鋭くなった。しかし、デイビッドは目を伏せたまま静かに首を振って、また説明し始める。

君からあの事件一一9・3事件の話を聞いた直後、わたしはもう1度現場を見に行った。君のお母さんがお父さんを殺し、さらに君がお母さんを殺してしまったという、現場をね。だが、そこにはやはり、何もなかった。クレーターと血痕はあったが...死体などは何もなかった。

君はもう知っているみたいだけど、ジュリアはわたしの妹だし、ジュラダンも親友だ。あの頃にはもう、ジュラダンとの関係はだいぶ.....だいぶ緊張していたが、それでも気持ちとしては親友だった。だから、もともと2人が死んだなんて、信じたくなかったんだよ。証拠もないのに、妹と親友の死を認めたくなかった。たったそれだけのことなんだ一一...

「...一一自分が思い込みみたいってだけの話を、まだ小さな君に対してまことしやかに話すわけにはいかないじゃないか」

「.....」

ジャックはまさかそんな理由だとは.....それだけのことだとは思っていなかったため、予想外の答えに言葉もなかった。しかし一方で、デイビッドの気持ちはジャックにも痛いほどよく分かる。なんせ自分だって、本当に生まれ変わるのかも、いつ、どこに生まれ変わるのかも分からない恋人を、ずっと待ち続けたのだ。いつか、どこかに生まれ変わるかもしれないなどという、非常に曖昧な情報を信じて...

「...ということは、母を殺したと思われていたわたしを罰しなかったのも、2人の死を認めたくなかったからということですか？」

ジャックが尋ねると、デイビッドは

「...うーん...」

と苦笑する。

「確かに、当時君が話してくれた事件に関する話が正しいと仮定した場合、君のやったことは2通りに解釈することができる。単純にお母さんを殺したと考えるか、お父さんの仇をとったと考えるか...」

デイビッドはそう言いながら、指を1本、また1本と立ててみせた。

「しかし、どんな曖昧な理由であれ、わたしは君の両親が活着ていると思うことにした以上、君に処罰を下すわけにはいかない。でも、確証は何もないから、君や周りにそう説明することもできない。だから、君の罪が問われない形に解釈することにした——君の言いたいことはそういうことかい？」

デイビッドがそう言うと、ジャックは

「ええ...」

と頷いたうえで、

「それに、わたしを処罰するということは、両親の死を認めたことになりますから、デイビッドさん自身の中でも矛盾してしまうでしょう？」

と付け足す。すると、デイビッドは

「...相変わらず、理屈っぽいんだね...」

とさらに苦笑を深めた。

「まあ...そういうことがないわけではないよ、確かに...でもね、最大の理由はもっと単純なんだ。君も知ってると思うけど、単なる親殺しに対する処罰は、死刑しかないからね...」

そう言うと、デイビッドはふっと優しく微笑む。

「...可愛い可愛い甥っ子を、殺したくないじゃないか」

「...!!!」

...そんな...そんな、単純な...

そう言ってくれるのは嬉しいが、それについてはコメントのしようがない。

かなり長い沈黙を挟んでから、ジャックはようやく再び口を開いた。

「...そのことも教えてくださいませんでしたね」

ジャックが静かな声で尋ねると、デイビッドは

「ああ...わたしが君の伯父だったって話かい？」

と確認する。それに対してジャックが頷くと、デイビッドは数秒間目を瞑ってから答えた。

「...ジュラダンがいたころは、彼の方針に従うことにしたからだよ。彼はそのことを君に話していなかったみたいだからね。これ以上彼と対立したくなかったんだ」

デイビッドは1口残っていた紅茶を飲み干した。ジャックがもう1杯飲むかと尋ねると、ちらっと時計を見てから笑顔で首を振り、話を続ける。

「そのあとも話さなかったのは、君とある程度距離を置きたかったからだ。あ、いや、君が嫌いだからって話じゃないよ。そう言うことじゃなくって、君に早く自立してほしかったんだ。一族の状況は、君が日頃から言っていたように散々だったし、わたしはどうしたって君と付きっきりでいるわけにはいかないからね。だから、一刻も早く自立してもらわなければならなかった。だから、あくまでも“一族のリーダー”——つまり“他人”でいることにしたんだ」

これまで、ジャックとデイビッドの会話は非常に静かだった。ところが、

「...では、ディックに両親を明かさなかったのは何故です？」

という質問になると、ずっと淡々としていたジャックの口調が初めて強くなる。

それを見ると、デイビッドは小さく苦笑した。

「君たち、本当に仲良しなんだね...ディックなんて、わたしが行ったら開口一番に——それこそ挨拶も何もなしに、“何でジャックに両親のこと話してやんなかったんですかっ!!”って怒鳴ってくるんだから...」

「...ということは手を挙げはしなかったんですね？」

ジャックがややほっとしたように言うと、デイビッドは

「そんなことまで言ってたのかい？もう...」

と苦笑を大きくする。それから数秒してふと視線を落とすと、またゆっくりと話し始めた。

「...実はね、あの子がショーンのところにいるのはずっと知ってたんだ。ユリアがいなくなっちゃってから2週間後に、ショーンの村——つまりソルジャー族でたまたま見かけてね。大人5・6人と、小さな子供3・4人に囲まれて幸せそうに笑ってた...そんな姿を見て、どう思ったと思う？」

そう聞きながら、デイビッドはジャックの青い目をじっと見つめた。しかしデイビッドの紫がかった眼はジャックに何かを求めているわけではないようだ。ただ切なげに笑って、そのまま話を進める。

「まず何より、心底安心したよ。無事でよかった、元気そうでよかったってね...だけど同時に...結構ショックだった。ユリアが二重人格になってしまってから、わたしもユリアも精神的に追い詰められていてね.....いや、あの子に当たったことはないよ。でも.....親のそういう精神状態って、子供にはすぐ分かるみたいでね.....うちにいた時より、ずっと幸せそうに見えた。今までずっと可愛がっていただけに.....ショックだったね。それで.....引き取りに行けなかったんだ」

デイビッドは俯くと、ここで一息ついてまた時計を見た。だが、ジャックが何か言うより先に話を再開する。

「そんなふうに躊躇っているうちに、キュアラ一族は戦争に巻き込まれ、終わってみたら継閥派ばかりになっていた。一方、あのソルジャー族は最後まで戦争に巻き込まれなかった。あんな状態のキュアラ一族に、リーダーの子供を連れてきたら、どうなるか分かりきっているだろう？それにディックはもう、ソルジャー族の子として向こうに馴染んでしまっているんだし.....」

デイビッドは一瞬ジャックと目を合わせたが、またふっと視線を外した。

「...最後、君がディックをわたしのところへ連れてきてくれた時.....もう7・8年見に行っていなかったけど——ショーンの一族は遠いんだ...そんな長い時間、キュアラ一族をほっぽっといたら悲惨なことになるだろう？——ずっと見に行っても、一目で分かったよ。じゃあその時、どうして言わなかったのか.....白状するとね、あの子を“捨てた”のが自分だって知られるのが、怖かったんだ。いや確かに、あの子のことを考えたうえでそう判断したんだよ。紛れもなく、あの子のためにやったことだった...でも、何をどう言ったところで結論は変わらない。結局のところ、わたしはあの子を捨てたんだ.....ショーンにも何も言ってなかったしね。それを知られるのが怖かった。だから、言い出せなかったんだよ.....」

デイビッドはそこまで言うと、いよいよ辛そうに俯く。

「...言えばよかったね...」

俯いた彼は、小さな声でぽつりと呟いた。

「やっぱり、言っておけばよかった.....そうすれば.....あの後...まさか、ユリアと主従契約するなんてことには、ならなかったろうにね...」

「.....」

確かに、デイビッドがディックに話していれば、ディックはユリアと主従契約することはなかっただろう。そうすれば、シェルダンの仇をとるなどという話にもならなかったはずだ。しかしジャックには、だからと言ってデイビッドを責めることは出来なかった。

誰かからこの1500年間の話を聞いた時、ディックに話した時、そして今、僕に話している時...その度に、どれだけ自身を責めているだろう？

自分自身に責められることの辛さを、身を以ってよく知っているジャックには、それ以上デイビッドを責めることなど出来やしない。

「...すみません、デイビッドさん.....もうお会いできないかと思っていたあなたと久々にお会いして、こんなふうに責めるつもりはなかったんです」

ジャックがそう謝ると、デイビッドは少し微笑みながら小さく頷いた。ジャックの言葉を肯定したのではなく、“ありがとう”という意味合いなのだろう。

2人はそのあと、ようやく少し他愛のない話をした。デイビッドが、ジャックの1500年間のことを知りたがったのだ。しかし、デイビッドは話の途中にもちらちらと時計を気にしている。

やがてそんな話が一段落したころになると、時計を見たデイビッドは唐突に

「もうそろそろかな...」

と呟いた。

「お帰りになるのですか？」

ジャックが尋ねると、デイビッドは静かに首を振る。

「いや、もう時の守人も空間の守人もいるからね...帰れないんだ」

いつも通りのゆるゆるした口調で言うデイビッドに、ジャックは

「...え...？」

と聞き返した。

「...ということは、24時間経ったら...」

...消えてしまうのですか...？

「...うん。もう、仮の守人はいないからね」

デイビッドは笑いながら頷く。

「いやはや...この1500年間は長かったよ。ずーっとひとりぼっちだからね。24時間しか外に出られないって言うからさ...いや、正直消えちゃっても構わなかったんだけどね。でも、正規の守人が来るまでは待つてなきゃいけないから、そういうわけにもいかないし...だから、100年に1回1時間だけ王宮に来て、その1世紀分の話をしてもらったり、ちょっと本を借りたりしてたんだけど...いくら本を借りたって、ものの数ヶ月で読み切っちゃうからね。そうするとあとは何も無いから、

もう退屈したらありゃしない...」

清々したと言わんばかりに伸びをするデイビッドに、ジャックが

「...2つの最果ての守人を兼任なさっていたのでしょうか？」

と尋ねると、デイビッドは

「それでも暇だよ。正規じゃないから外部の仕事はできないんだからね」

と答えた。

「...まあ、最期に君たちと会えてよかったよ」

そう言うデイビッドの口調は、まるで“今日は晴れてよかったよ”とでも言っているかのように気軽なものだった。それに対し、ジャックは

「わたしも、デイビッドさんともう1度お話しできてよかったです」

と言ってから、

「本当にお世話になりました」

とお礼を言う。

「いや...」

デイビッドは苦笑しながら首を振った後、

「あ、そうそう」

と何か思い出したように呟く。

「皆が1500年間どうしていたかって話は、サファイアちゃんから聞いたんだけど...」

デイビッドがそう言いかけると、ジャックはすかさず

「どうしてました？」

と聞いてきた。珍しく急ぎ込んでくるジャックに、デイビッドは目を瞬かせてからおかしそうにくすくすと笑う。

「...うん、“元気に楽しくやってる”って伝えるように言われたよ」

「“伝えるように言われた”？」

デイビッドの回りくどい言い方に違和感を覚えたジャックがそう聞き返した。すると、デイビッドは

「...うん」

と憂鬱げに頷く。

「...寂しそうに泣きながら、ね...」

デイビッドは“じゃあね”と手を振ると研究室から出て行ってしまったため、ジャックがデイビッドの最期を見ることはなかった。

ただ、東側だけ少し仄明るくなっている空が、奇妙なほどデイビッドに似合っていて、記憶の中にくっきりと焼き付いている。

※220...日付が変わっているから“本日”とは言わないのかもしれないが、まあ、感覚的には“本日”だ。

2009年12月16日12:30

「...お食事をお持ちしました」

ワゴンを押しながら、ジャックが女王の間に戻ってきた。以前は食事を選んで食堂から持ってくるのはクリアシャイン姉妹の仕事だったのだが、今はもう2人ともいないので、ジャックが代わりにやっているというわけだ。自分は食べないジャックだが、その選び方は栄養学的にも味的にも非常にバランスがよい。

ほのぼのと穏やかな会話をしながら、3人の食事は進んでいった。ジャックは紅茶だけ飲んでいる。そして皆がだいたい食べ終わり、今日のデザートであるプリンに手を出そうとしたときのことだった。

「わわわっ!!」

また地震が起きた。サファイアが時の最果てに行きついで以来ずっとなかったから、ほぼ2ヶ月振りである。

「...あああ危なかったあ...あとちょっとでプリン落としちゃうところだったよ...」

地震がおさまった後ルチアーノが安堵したように呟くと、ペーターが

「サファイアちゃんみたいに？」

と懐かしそうに言った。

「あああ...あのものすごく大きいプリンね.....あ、そう言えばジャックさん、あれ、結局作ってあげたの？」

おかしそうに笑いながら聞いてきたルチアーノに、ジャックは

「ええ」

とだけ頷く。

「...ってか、何でまた地震が起きるのよっ!!クリアシャインがもう行ったじゃない!!」

ピュアがそう憤慨し始めた。すると、ペーターが深刻な声で

「まだもう1人が見つからないからね...」

と呟く。

一同を沈黙が支配した。

“ディックもルビーも行き、サファイアまで行ったというのに、まだ足りないと言うのだろうか...?”—それは、ここにいる4人共通の思いである。※221

日は南の空に上り切ると、今度は西の空へ少しずつ下り始めた。空は徐々に茜色っぽく染まっ
ていく—そんな時間帯に、ピュアのパソコンへ電話がかかってきた。

「誰かしら?...って、紅玉高原じゃない...」

ピュアはそう言いながらスピーカーホンをONにすると、受話器をとる。

「もしもし？」

『ラウラ・フィラレーテです』

ラウラが流暢な英語で名乗った。

「あら、どうしたの？」

そう答えるピュアの声は、無意識のうちに緊張している。なんせ、昨日電話会談したばかりなのだ。

...何かあったのかしら？

『あのね、まだ、もしかしたらって話なんだけど...もう1人の時の守人を捜すヒントが見つかったかもしれないの』

「ええっ?!」

まさかの朗報らしいラウラの言葉に、ピュアとルチアーノが同時に叫んだ。

「え...ほんとに?!」

ルチアーノが聞き返すと、ラウラは

『いや、待って。まだ仮説なの。まだ仮説なんだけど...ほら、さっきも地震あったでしょう?だからとりあえず言っちゃおうかしらって思って...』

などと言いながらパソコンを弄り始める。

『あ、ちょっと先に聞かせてほしいんだけど.....サファイアちゃんって、読眼術使えたりしなかった?』

ラウラがそう尋ねると、ジャックが即座に

「使えると思います」

と答えた。すると、ラウラは

『やっぱり?!じゃあ良い線行ってるかも...!!』

と嬉しそうに叫ぶ。

『前に私が“微細魔法学”っていう新しい分野を創設したときの論文、読んでる人いる?』

ラウラが尋ねると、ピュアは片手の指先で肘置きを小刻みに叩きながら

「悪いわね、読んでそうな子は時の最果てに行っちゃったのよ」 ※222

と答えた。それを聞くと、ラウラは苦笑しながら

『そっか...じゃあざっと話すわね』

と言って説明し始める。

『えーっとね...まず、普通の魔法族が通常魔法を使う時より、ずっと小さな魔力で特定のことができる人が稀にいるんだけど、そういう魔法を“微細魔法”って呼ぶことにしたの。例えば.....今時点見つかってるのは、対非人類会話術、夢見、占術、読眼術...などの12種類ね』

ラウラは自分の書いた論文を見ながら言った。

『で、微細魔法が使われるときに使われるわずかな魔力の動きは、波形として表すことが出来るんだけど...それがね、普通はちょっと角の丸まったN字みたいな形になるのよ』
ラウラはそう言いながら、波形の図を見せてくる。

『でも、対非人類会話術と読眼術は特殊なのよ。対非人類会話術はその波形が完全にカ

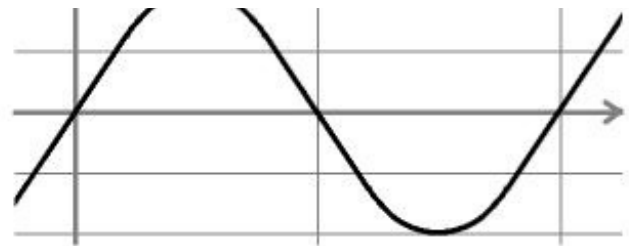
対非人類会話術



その他



クカクしたN字形になって、読眼術は逆にS字みたいな曲線を描くのよね。だから、この2つは微細魔法の中でも“特殊微細魔法”っていう名前で、特別扱いされているわ』



読眼術



「...またまた難しい話を...」

そう顔をしかめるルチアーノの横で、ややイラついた様子 of ピュアが

『で、つまり？』

と先を促す。

『で、実はね、ディックもルビーも対非人類会話術の使い手だったのよ。そして、サファイア

ちゃんが読眼術を使えるってことは.....守人は特殊微細魔法の使い手、つまり、時の守人は、対非人類会話術の対である読眼術の使い手...って仮説が立つじゃない!!』

明るい声で力説するラウラに、ルチアーノが

「なるほど!!つまり、読眼術とやらを使える人を探せばいいって話か!!」

と感心したように言った。しかし、ピュアは

「...そうね.....あなたが言うならそうなのかも知れない、けど...」

と言いながら難しい顔をする。

「...けど、読眼術を使える人って、どれぐらいいるの？」

その質問に、ラウラの明るかった表情が一瞬で陰った。

『...昔はもう少しいたみたいなんだけど、どんどん減ってるのよ.....今は、夢幻界と実界あわせても1人いるかいないかって感じね.....しかも、自覚してない可能性もあるし...』

ラウラの説明にピュアが

「...ちょ...それを探し出すのって...絶望的じゃ...」

と言うと、その言葉を最後に沈黙が流れる。

「...いえ、それは問題ありません」

数秒してから、ジャックの小さな声はその絶望的な沈黙を破った。

「どうして？」

すかさずピュアが尋ねると、ジャックは

「わたしが...読眼術を使えるからです」

と答える。

ジャックの声は、不自然なほど抑揚のない、静かな声だった。

※221...いや、あと1人足りないのは紛れもない事実なのだが...

※222...ジャックもよく論文を読んではいるが、彼が読んでいるのは魔法化学か医学の論文がほとんどである。サファイアは魔法学が専門だから、ラウラの論文も読んでいたのだ。

ジャックが本当に時の守人なのかどうかを確かめるのは極めて容易だった。実際に行かせてみればいいのだ。行かせてみて、扉に触れさせれば一発である。

ジャックは時の丘の頂上にある樹の洞を通して洞窟に入ると、足早に進んでいった。しかし、どんどん奥に進むにつれて、ジャックの歩みは徐々に遅くなっていく。

初めは、一刻も早く確かめたくて逸る気持ちを抑えながら進んでいたのだ。だが、しばらくするとだんだん不安になってくる。

もしも...もしもラウラ様の仮説が間違っていたら？

“もしも”と言っても、彼女はたった3つの例に基づいて仮説を立てたのだから、それが間違っている可能性も十分にある。

もしもその仮説が違っていたら、僕は彼女に2度と会えないのだという事実を、改めてもう1度突きつけられることになる。

もし、違っていたら...

期待と不安を抱きながらずっと歩いていくと、ジャックはやがて3叉路に行き当たった。しかしジャックはそこで立ち止まることなく、そのまま直進する。1500年前にサファイアが友達と探検した時の話を聞いていたので、左右の扉が何なのかは知っていたのだ。

真ん中の扉からは、青白い光が漏れ出していた。幻想的な光が、ジャックをそっと引き寄せ

る。ここに来るまでの間は非常に大きな不安を抱いていたにもかかわらず、いざ扉を目の前にすると、ジャックは何も考えなかった。何も考えず、躊躇うことなく、ドアノブを掴む。

「.....」

ドアノブはジャックを拒まなかった。その瞬間、このまま扉を開けてしまいたい衝動にかられる——しかし、ジャックはそのまま扉から手を離れた。イル ※223 から“今は扉を開けないで帰ってくるように”と言われているのだ。なんせ彼自身の支度もあるし、王宮での残務整理もある——ジャックが時の最果てへ行ってしまったら、ピュアの側近 ※224 は1人もいなくなってしまうのだ。このまま出発というわけにはいかない。

そんなこんなで、出発は3日後——12月19日となった。

2009年12月19日

今度こそ最果てに来たジャックは、ひたすら青白い世界を歩いていた。もちろんサファイアを捜しているのである。しかし、上下左右どこを見てもただ青白いだけで、自分が本当に前進しているのかどうかすら分からない。

そんなとき、ジャックははるか前方に何かがあることに気づいた。駆け寄ってみると、どうやら巨大な砂時計のようだ。非常に繊細な装飾が為されている。

「.....」

それを見上げたジャックは思わず眉を顰めた。砂時計の呪い以来、砂時計に対してあまり良い印象を抱いていないのだ。

それでもジャックは警戒しながら近づいた。すると今度は、何かに操られるかのように手を伸

ばし、指先でそっと触れる。

「っ?!」

その瞬間、ジャックは砂時計の中へ引き込まれた。生まれて間もなくから、今に至るまでのおよそ1530年が、一瞬のうちに走馬灯のごとく蘇る――...

サファイアの時と違い、ジャックのそれはほんの一瞬で終わった。

...何だったんだ...?

そう思いながら辺りを見渡すと、少し離れたところに丸くなって座ったサファイアの姿を見つける。近づいてみると、彼女は積み上げられた段ボール箱に寄り掛かる形で眠っているようだ。そして、その周りにはたくさんの紙切れが散らばっている。

「.....」

こんな姿勢で寝ていたら全身痛くなってしまおうと思ったジャックは、サファイアを横にさせようとした。寝かせる場所を作るために散乱した紙の1枚を拾い上げる。

...これは...

拾った紙には自分の顔が描かれていた。“砂糖はスプーン2杯までです”などというセリフまでついている。

ジャックは1枚1枚拾っていった。ルビー、ディック、ピュア、ルチアーノ、ペーター、パール...いろいろな人の絵がある。中にいる人も含め女王の間全体を描いたものもあった。しかし、その中でもジャックを描いたものが最も多い。ざっと見たところ、7~8割を占めているようだ。紅茶を淹れていたたり、薬品を量り取っていたり、呆れていたたり、叱っているところだったり...

集め終えた後、ジャックはそれを箱の上にそっと置くと、サファイアを起こさないように気をつけながらそっと横にさせた。今まで隠れていた頬には、涙の跡が残っている。

“...うん、‘元気に楽しくやってる’って伝えるように言われたよ”

“...寂しそうに泣きながらね...”

...寂しさを誤魔化そうと絵を描いているうちに、泣き疲れて眠ってしまったのだろう。

「.....」

ジャックはサファイアの近くに腰を下ろすと、指先でそっとその髪を掬った。

...確かに、いる...

ラウラの話聞いた時、聞き間違いではないかと不安になった。

ラウラ様は、本当に“読眼術”と言ったのだろうか?もしそうなら、僕がもう1人の時の守人ということになる。そうだとしたら、僕はもう1度.....もう1度、サファイアに会うことができる...

3日前に確かめに来た時も、今日ここに来るまでの間も、ずっと不安だった。もし、何かの間違いだったら...勘違いだったら...

しかし今、サファイアは僕の目の前にいる.....夢のようだった。もう二度と、会えないと思っていた。それでも、一瞬でも会えるのだとしたら、そのために何千年でも何万年でも待とうと思っていた。

それほど会いたかったサファイアが、今、ここにいる...

だが、ジャックは今自分がどう感じているのかよく分からなかった。サファイアに会えたことは嬉しい。それは言うまでもない。しかし、この様子を見るとサファイアは――デイビッドも言っていたが――ここに来てからずっと、辛い思いをしていたようだ。たった1人で、こんな何もないうちで...“辛い思い”という一言で済ませるものではないだろう。

サファイアがずっとそんな思いをしていたことを考えると非常に心苦しくなる。だが、その一方で先程の絵の中でジャックのことを描いたものが圧倒的に多いことからすると、自分の存在はサファイアの中で思っていた以上に大きな部分を占めていたようだ。それを知って、嬉しく思ってしまう気持ちが少なからずあることは、どうにも否めない...

ジャックはサファイアがここに存在しているのだということを確認めたくて、無意識のうちに彼女の髪を梳いていた。すると、サファイアは

「.....ん...んん.....」

などと言いながら目を覚ましてしまう。

「あ、申し訳ありません.....起こすつもりはなかったのですが」

ジャックがそう謝ると、サファイアはトロンとした声で

「ううん、大丈夫...」

と言いながら目を擦った。そのあと2・3秒してから、突然はっとしたように

「えっ?!」

と振り返る。

「ジャック?!」

しばし愕然として目を瞬かせながらジャックを見つめていたサファイアは、突然自分の頬に手をやると、思いっきり抓った。

「何をなさっているのです？」

サファイアの手を掴んでやめさせながら、ジャックが呆れたような声で尋ねると、サファイアは

「...夢の続きだったりしないか、確認してるの...今、ジャックの夢を見ていたから...」

と言う。

実はここ2週間ぐらい、サファイアはかなりの時間を眠って過ごしていた。夢の中なら、ジャックに会えることに気づいたのだ。ジャックだけではない。ルビーやディックが一緒のときもあれば、ピュアやペーター、ルチアーノが出てくることもある。メンテ姉弟やカラント兄弟が出てくることも2・3回あった。 ※225

...いわゆる、現実逃避である。

「...夢ではないかと確かめたいのは、わたしも同じです」

ジャックが静かな声でゆっくりと言った。

「え...え?じゃっくん?本当に、じゃっくんなの...?」

サファイアはうわ言のようにそう呟きながら、ジャックの手をぎゅっと握った。すると、ジャックもその手を握り返してくれる。

...あ...ああ...ほんとに、本当にじゃっくんだ...

そう思うと、サファイアは泣き出してしまった。もう二度と会えないと思っていたジャックに会えた嬉しさはもちろんのこと、このまま永遠に独りっきりなのではないかという不安や寂しさをずっと我慢していたのが一気にあふれ出たということもある。

「...じゃっくん...ず、ずっと...ずっと会いたか...ったよ、本当に...本当に、会いたかった...」

ジャックは黙ったまま、泣きじゃくるサファイアの髪を優しく撫でていた。“わたしもですよ”—そう言いたいのだが、今それを言ってしまうと一層泣かせてしまう気がして、あえて黙っている。

10分ぐらい泣き続けた後、ようやく落ち着いてくると、サファイアは

「え...今来てくれたってことは.....ジャックが、もう1人の時の守人...?」

と小さな声で尋ねた。

「ええ」

ジャックが頷く。

「え...ええっ?じゃあ、またずっと一緒にいられるの...?...う、嘘じゃない、よね...?」

信じられない様子のサファイアにジャックが

「サファイア、ラウラ様のご結婚の直前に発表なさった、微細魔法学についての論文をご存知ですか?」

と聞くと、サファイアは

「うん」

と頷いた。

「ごく稀に小さな魔力で特定のことができる人がいて、それを“微細魔法”って呼ぶとか、対非人類会話術は波形がN字形で、読眼術はS字形で、特殊だとか...そんな話でしょ?」

さすが魔法学の専門家だ。何も見なくても、そしてこんな状況でも、すらすらと言葉が出てくる。

「ええ。ディックとルビーさんは対非人類会話術の使い手で、あなたは読眼術の使い手ですよ。それらの事実からラウラ様は、最果ての守人になることができる者が持つ特殊能力とは、特殊微細魔法のことではないかとお考えになったのです。対非人類会話術の使い手が空間の守人に、読眼術の使い手が...」

ジャックがそこまで言うと、先を察したサファイアが

「...時の守人に...」

と呟くように言う。

「...そっかあ...」

サファイアは驚きのあまり、そうとしか言葉が出てこなかった。まだ、何となく夢を見ているようなフワフワした感じから抜け出せない。

「じゃっくん、読眼術使えるんだよね...」

その呟きに、今度はジャックが驚いた。なんせジャックの記憶する限りでは、生まれ変わったサファイアには自分も読眼術の使い手であるということを話していなかったはずなのだ。

「わたしも読眼術を使えるということ、お話ししたこと...ありました?」

ジャックがそう尋ねると、サファイアは

「前に“ウィリーさんってなんとなく気が置けないんだよね”みたいな話をしたとき、ジャックが自分でそう言ってたでしょ」

と答えた。それからふと俯いて

「.....私ね、1500年前のこと、思い出したんだ...」

と微かな声で言う。

「...え...？」

微かだが驚きの色を見せるジャックに、サファイアは自分が思い出した経緯をざっと話した。大きな時計があったこと、それに触れると引き込まれ、その後長い長い夢を見て、目が覚めたときには1500年前の自分の記憶が戻ってきていたこと...

「.....そうでしたか.....」

そう呟くジャックの声から、彼の感情を読み取るのは非常に困難だった。様々な感情が混ざり合っているように見える。

しばらく沈黙が流れた。重苦しかったり、痛かったりする沈黙ではないが、かといって気の休まる沈黙でもない。お互いに相手の思いを押し量ろうとし、その難しさを痛感する、そんな沈黙だ。

「...ねえ、ジャック」

やがて、サファイアがぽつりと話しかけた。

「どうしてジャックは、1500年間もずっと“青の薬商人”として旅し続けてたの？私と会ったとき、もう旅できなくても構わないって言ったのはどうして...？」

サファイアがそう質問を重ねると、ジャックは

「...もう見当がついているのでしょうか？」

と聞き返してくる。

「.....」

サファイアは否定も肯定もしなかった。すると、ジャックは俯いて、ひとつひとつの言葉を探していく。

「あなたは、自分のことを忘れて幸せになってほしいと言ってくさいましたが、わたしには無理だったようです。あなたを忘れるどころか、忘れたいと思うことすら出来ませんでした.....もう1度、あなたに会いたかったんです。他の誰でもなく、あなたに.....」

ジャックの声は非常に落ち着いていて、驚くほど静かだった。まったく崩れがない。しかしだからこそ、ジャックの切実な思いが沁み込むように伝わってくる。愛おしすぎて苦しくなるようなジャックの思いが伝わり、今度はサファイアの胸がまるで強く絞られているかのごとく苦しくなるぐらいに...

「.....じゃっく.....」

サファイアの頬には、自分でも気づかないうちにまた涙が伝っていた。今度は泣きじゃくるのではなく、さらさらと静かに流れていく。

「...ごめんね、1500年間も待たせたりして、しかも、恋愛禁止令があったりして...その...辛かつ

たよね、きっと...本当に、ごめんね...」

「.....」

確かに、辛くなかったといえば嘘になる。いつ、どこに生まれ変わってくるのかまったく分からないサファイアを、あてもなく.....ただ闇雲に捜しつづけるしか術がなかった、期待しては裏切られてを繰り返す日々。ようやく会えたと思った矢先に知らされた、恋愛禁止令。これほど近くにいるのに、抱きしめることも、思いを伝えることも許されなかった。

サファイアが苦しんでいても、手を差し延べることすらままならなくて..... ※226

もっと言えば、彼女が身を危険に曝す任務に就くことも、やめてほしいというのが正直なところだった。彼女の実力は認めていたが、だからといって安心できるかといえば、そんなことはない。でも、どんなに心配でも、どうしようもなかった。

だが...

「...謝らないでください」

ジャックは静かに首を振りながら言った。

「辛くなかったといえば嘘になります.....でも、それはあなたの責任ではありません。どうしてもあなたにもう1度会いたくて.....そう思ったわたしが、自分の願いのためにしたことです」

そう言ってもまだ申し訳なさそうに俯いているサファイアの肩に、ジャックはそっと手を添える。すると驚いたサファイアが、恐る恐るといった感じで顔をあげた。涙に濡れた濃紺の眼は、満月の光を受けて煌めく海面のような、綺麗な光を宿している。

ジャックはそんなサファイアの眼をまっすぐ見つめながら

「サファイア」

と呼び掛けた。小さいが、いつもより若干柔らかな声だ。

「もう1度...もう1度、言わせていただけませんか？」

サファイアは2・3回瞬きしてから、ゆっくりと頷いた。彼女が何を考えながら頷いたのかはよく分からないが、ジャックは構うことなく、その眼を見ながらはっきり

「...愛しています、サファイア...」

と言う。

サファイアもジャックの眼をしばらくじっと見つめていた。信じられないというような表情が、だんだん小さな笑顔へと変わっていく。そして、自分の頬が熱を帯びてくるのに気付くとサファイアは深く俯いてしまった。

「私も...私も、ジャックのこと、大好きだよ...」

そう呟いた声は、辛うじて聞き取れるかどうかというほど小さい。

「1500年前も、今も...ずっと、大好きです...」

ジャックは、そう言うサファイアの肩をそっと引き寄せた。まるで何かを確認しているかのごとく、ゆっくりと引き寄せる――だが、サファイアは一切抵抗しない。それを確かめると、ジャックはサファイアをしっかりと抱きしめる。鎖を締めるときと同じく、痛くない範囲で、ぎゅっと強く――。

サファイアは抱き締められ、初めこそ心臓が早鐘を打つのを感じながら身を緊張させていたが

、やがて安心したように全身の力を抜いていった。ジャックの温かさが嬉しくて、また少し泣きそうになる。

それを抑えようと俯いたサファイアは、ジャックの肩越しに見えた床(?)が綺麗に片付いていることに初めて気付いた。

「あ...じゃっくん」

サファイアがびよんと離れて話しかけると、ジャックは

「どうしましたか？」

と答える。

「床に、なんか...紙切れみたいな散乱してなかった？」

サファイアが手をパタパタさせながら尋ねた。明らかに慌てている。

「ええ...そちらの箱の上に置きましたが」

ジャックの答えを聞いたサファイアは、

「え...ええっ?!うそっ!!」

と叫んだ。頬から耳まで、みるみるうちに赤く染まっていく。

「え...あ...その...見ちゃった...？」

そう聞かれてもジャックは何とも答えない。無論、こういうときの沈黙はYesだ。

「はわわわ...あれは、その...えっと...つまり...」

サファイアはもはや、頭の上のペンから首までペンキを被ったかのごとく真っ赤だった。今彼女の頭の上に牛乳と茶葉の入った鍋を置けば、そのままロイヤルミルクティーができるかもしれない。

「...いえ、でも...嬉しかったですよ」

斜め下に視線をそらしてそう言うジャックの頬も、心なしか薄桃色になっている。

「やああああっ!!忘れて忘れてっ!!」

サファイアの叫ぶ声は、冷やかな水色の空間に吸い込まれていった。

「...サファイア」

先程の騒ぎからしばらくしたのち、ジャックがふと話しかけた。

「ん？」

問題の絵を自分の荷物の奥底に封印したサファイアは小さく首を傾げる。

「ささやかですが...」

ジャックはサファイアを放すと、ポケットから小さな小包を取り出した。

「お誕生日、おめでとうございます」

「ええっ?!」

確かに今日はサファイアの誕生日だ。しかし、そんなこと予想もしていなかったサフ



アイアは、驚いて目を丸くする。

「あ、ありがと...開けてみてもいい？」

そう言って包みを開けると、中にはサファイアアンコスモスの髪飾りが入っていた。本物を薬品で加工した花に、鮮やかな青のリボンが付いている。

サファイアはしばらくの間、黙ってそれを見つめていた。

「.....ありがとう、ジャック」

眩くようにそう言ってから、サファイアはパッと顔をあげて思いっきり笑う。

「すっごく嬉しいよ...本当にありがとう!!」

そう言うサファイアの笑顔は、とても幸せそうだった。



※223...当然のことだが、ラウラの仮説も、それに基づいて考えるとジャックが重要候補者となるという話も、すべてイルに伝わっている。

※224...サファイアとジャックはあくまでもピュア個人の側近であって、王宮のではない。

※225...確かに大切な友達だったのだが、なんせ1500年前の友達なので、現代でずっと一緒にいた面々に比べると、やはり遠い存在になっているのかもしれない。

※226...特にジャックと会ったばかりの頃のサファイアは、呪いのせいで皆に嫌われていたためか、誰かに必要としてもらうこと、“あなたが大切なんだ”と言ってもらうことに乾いていた(もっとも、言ったところでサファイアがそれを言葉通りにとるかどうかは別だったが)。恋愛は友情と違って“あなただけ”という関係だから、それを満たすにはもってこいである。...ただ、10才だの11才だのというサファイアにジャックがそれを言うてしまうと、恋愛禁止令がなくとも結構問題になったのではないかという気もする。

クリスマスが過ぎ、2009年ももう終わりに近づいていた。そんな日の夜遅く、ペーターももう自室に戻ってしまった後。ピュアは窓枠に頬杖を突いて立ち、ぼんやりと外を見つめている。ふわりふわりと舞い降りる粉雪――それを、ひとつひとつ目で追っているのだ。

「...ピュアちゃん？」

背後から突然聞こえた声に、ピュアは慌てて振り返った。

「何？」

ピュアがキッと睨んで聞き返すと、声の主であるルチアーノは苦笑しながらピュアの隣にやってくる。ピュアのこういう態度は、何かを隠して強がっているというサインなのだ。

「何の用？」

ピュアが腕組みして身を硬くしながら言った。

「何の用でもないけど...何してるの？」

ルチアーノはサインの意味を知っているので、ピュアの剣幕など気にする様子もなくそう尋ねる。

「...ちょっと...外見てただけよ」

ピュアはそう答えながら再び窓の外に目を向けた。

「ただ暇つぶしに、降ってくる雪を目で追っただけなんだから!!」

そんなことを言うピュアを、ルチアーノはじっと見つめる。それから、ルチアーノも外に視線を移して

「...そうだよなあ...そんなこともしたくなるよなあ」

と呟いた。

「ちょ...」

ルチアーノの言葉に、ピュアがバツと振り返る。

「勘違いしないでよね!!別に、皆がいなくなっちゃって寂しいとか、そういうんじゃないんだから!!」

ピュアがそう言うと、ルチアーノはおかしそうに笑いながら

「ピュアちゃん、それ...寂しいですって言ってるようなもんだって」

と指摘した。するとピュアは

「だから違うってば!!」

と否定してそっぽを向いてしまう。

「.....そう？」

そんなピュアを見下ろしながら、ルチアーノが軽く首を傾げた。

「...正直言って、俺はやっぱ寂しいよ。ついこの間まですっごく賑やかだったのに.....あっという間に3人いなくなっちゃってさ、静かになっちゃったなあって思ってたなら、ジャックさんまで向こう行っちゃって...」

特に、ルチアーノにとってルビーは幼馴染のようなものだった。ルビーは生まれたときから王宮で育てられていたが、兄弟王子の用心棒兼遊び相手として働きはじめたのは8才のときだ。ルチアーノとルビーは同い年だったこともあって、特に仲が良かった。その後ルチアーノが16才の

ときにフィリップが即位すると、ルビーを今度は側近として雇い直す。

フィリップ、ルチアーノ、ルビー——この3人の段階で十分騒がしかったのだが、その1年後にルビーがディックを連れて来たことで、王室は一層賑やかになった。

それからおよそ5年半。それだけ長い時間いつも一緒にいた側近が突然いなくなってしまうと、寂しくなるのは当然だ。

「……………」

ピュアだって同じことだった。当時まだ6才だったのに、12才の自分を火災の炎から救い出してくれたサファイア。その後自分が女王となると、ピュアは真っ先にサファイアを自分の側近にした。小さくて愛らしい命の恩人サファイアのことを、ずっと気になっていたのである。

彼女はいろいろな意味で優秀な側近だった。事務的な仕事もきちんとできる。魔法陣研究とパソコンに長け、戦わせても強い。それでいて、周囲の人間を和ませる。特に、6年半ほど前にジャックが来てからは、それらに輪がかかっていた。

ずっとサファイアのことを可愛いと思って、妹のように愛し、大切にしてきたのに。…結局、“サファイア”とファーストネームで呼ぶことすら出来なかった。サファイアのことだから、きっとピュアの想いには最後まで気づかなかったに違いない。呪いのせいで皆に煙たがられて育ったサファイアは、そういう人よりもっと身近にいる人——例えばピュアやペーター、パールなど——からは、深く愛されているということに気づかなかったのだ。 ※227

「…あの4人、本当に兄弟みたいな仲だったじゃん。ほら、元気で可愛い妹2人と、適当に掻き回す1番上のお兄ちゃんと、冷静沈着な次男で…」

ルチアーノはそう言うと楽しそうにくつつ笑う。どうやら4人の話している姿が頭の中に浮かんでいるらしい。しかし、それから急に真顔に戻ると、

「…けどもう、4人揃うこともないんだもんなぁ…」

と呟く。

舞い降りる雪はもはや粉雪ではなくなっていた。風も強くなっている——今夜は吹雪かもしれない。

「…いいじゃない、静かになって」

それでもピュアは、斜め下の方を見つめながら頑なに言った。すると、ルチアーノは苦笑しながら

「まあ、静かになっていけば静かだけど…」

と言った後、ふと思い出したように

「そういえば、そろそろ新しい側近探さなきゃだよなぁ…なかなか見つからないよ」

と提案する。

「えっ…もう？」

ピュアは驚いて振り返った。

「何で？」

ルチアーノが首を傾げる。

「…え…別に、何でってわけじゃないけど…」



その...そんなに急がなくていいじゃない。
もうちょっと...」

ピュアはそっぽを向いて小さな声で言う。
まだ、新しい側近など受け入れる余裕は微塵もないのだ。

それを見てとったルチアーノは、おかしそうに笑い出した。

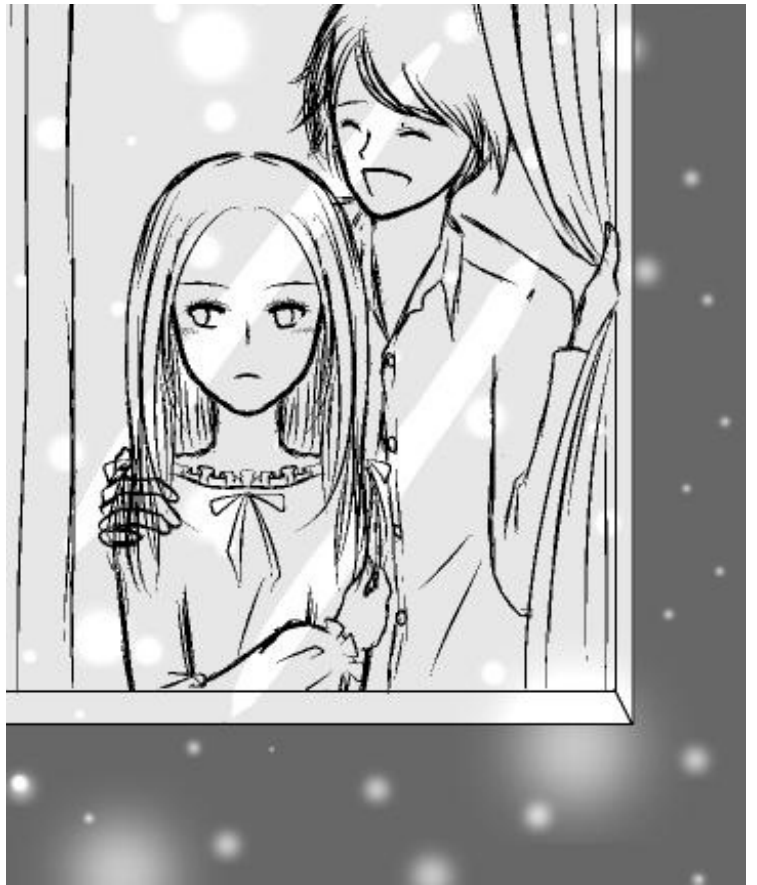
「な...何よ!!」

憤慨するピュアの肩を、ルチアーノが後ろから軽く抱きしめる。

「ほら、やっぱ寂しいんじゃない」

「.....」

ピュアは頷きこそしなかったが、否定も抵抗もせず、大人しく抱きしめられていた。



※227...ジャックやディック、ルビーについては、さすがに少しは気づいていたのではないかと思われる。

ジャックとサファイアは、時の最果ての中を歩き続けていた。しばらく進むと2人は妙な場所にたどり着く。

薄茶の小さなカードが、雪のように降ってきては落ち葉のように積もっていた。それを拾ってみると、1枚1枚に生物1個体の生涯が詰まっている。

「...“個人個人の小さな歴史が堆積して、大きな歴史になるわけです”...」

その光景を見たサファイアが、イルの言葉を繰り返した。

「...まさに文字通りですね」

ジャックは冷静にコメントしながら、カードを踏まないように飛んで近づく。

「わたしたちの仕事は、“個人個人の小さな歴史”——つまりこのカードの中から異常のあるものを選び出し、そこへ行って異常を直す.....そういう作業ですか？」

ジャックが確認するように言うと、サファイアは遠い眼をしながら

「...かな、うん...」

と頷いた。

ちょっと待って...何この大量のカード...しかも、ずっと新しいカードが降り続けているのに、その中で、異常のあるカードを見つけて、その時代に行って、修復していくの...？

「...どういったものが“異常”なのかよく分かりませんが、とりあえずやってみる他ないでしょう」

そう言うと、ジャックは降ってくるカードを1枚捕まえ、読み始めた。ところが、彼は読み始めた次の瞬間にはもうそれを地面に堆積させてしまう。書いてあるのは、名前、生没年、生きた場所...それだけなのだ。

仕方なく、2人はとにかくカードを見ていくことにした。

ジャックに指摘されて気づいたのだが、この2ヶ月間、新月の呪いは発動しなかった。それに気づいた時のサファイアの喜び方が半端でなかったのは言うまでもない。 ※228

それどころか、日が昇ったり沈んだりすることもなかった。そもそも、空が見当たらない世界において、日が昇るも沈むもないだろう。ただ、2人の持つ時計はすべて機能しているので、時間の流れの中にはいるらしい。2人はとりあえず、その時計に基づいて動くことにしていた。

「それにしても...よく時計が機能していますよね」

ジャックが腕時計を見ながら言った。ただいまの時刻は19:36である。

「本当だよね。これだとケータイも繋がったりして...」

そう言いながらサファイアがケータイを取り出そうとポケットをまさぐると、青いカードが飛び出してくる。落ちる前に慌てて捕まえたサファイアは、それを見て苦笑した。

「...あ...例の、使い道がないロッカーのカードキーだ...」

「持ち歩いていたんですか？」

ジャックがやや呆れたように冷やかな声で聞くと、サファイアは

「うん.....なんとなくね」

と答えてカードを別のポケットにしまい、今度こそケータイを取り出す。

「...—う—ん...やっぱりダメだね...」

時計は動いているが、ケータイやパソコンの通信機能は一切働かなかった。案の定、圏外なのだ。ここばかりでなく、2人のケータイやパソコンに対応した電波設備のない時代・世界では—つまり、ほとんどいつもだろうが—通信することは出来ないと思われる。

「これじゃ不便過ぎるから...ちょっと弄ってみるね」

サファイアはそう言うと、2人のケータイとパソコンを改造し始めた。最低目標は、どんな電波環境であっても、2人の間でだけは通信できるようにすること—つまり、人工衛星や電波塔を仲介せずに直接電波を飛ばせるようにすること。できることなら、その場所にある電波環境に対応し、他の人との通信やその世界のインターネット的なシステムにもアクセスできるようにしたい。

ジャックは“異常あり”と思われるカードを探し続けてくれているが、サファイアはその作業は任せてしまって、MWとにらめっこだ。

10日後—...ようやくサファイアの作業に見通しが立った。いや、今“ようやく”と書いたが、なんせケータイやパソコンを改造しようとしているのだから、むしろ“もう”と書くべきだろう。

しかし、1つ問題があった。

.....材料が足りない.....

使うMWの1つに、鉛などの重金属を必要とするものがあるのだ。

...手っ取り早いのは、鉛の森の木の枝かな...

サファイアは取りに行く前に、ジャックに連絡しようと思った。しかし、ジャックの姿は見当たらない。実を言うと、どうもカードが降ってこない場所の方がずっと少ないようなのである。

...捜してもキリがないし...ちゃちゃっと思っちゃおうかな...

サファイアはメモだけ残すと、時の最果ての出口—いや、夢幻界の入り口へと飛んで行った。
※229

※228...たった2行で済ませてしまったが、このことはサファイアにとって非常に大きなことだった。なんせ、違う世界・違う時代に行けば、もう“呪われたクリアシャイン”などと冷ややかな目を向けられることはないのである。サファイアにしてみれば、非常に大きな足かせが取れたようなものなのだ。

※229...鉛の森があるのは実界だが、実界と最果ては繋がっていないため、夢幻界を経由するのである。

1度きちんと守人が2人揃ったためか、サファイア1人でも出口はきちんと現れた。

吸血鬼がいなくなったあと、鉛の森は不気味に思われて非魔法族に伐採されてしまったため、現代はもう存在しない。 ※230 そのため、サファイアは1500年前に行くことにした。別に他の時代でも構わないのだが、やはり未知の時代より、少しでも知っている時代の方が安心する。

時の最果てから夢幻界に入って、青玉島の時の丘へ来たサファイアは、実界への出口がある森に向かって歩き始めた。

ちょっと...何かすっごく懐かしいんだけど...

サファイアは心の中でそう呟く。島中探検していたサファイアにとっては、どこを通っても懐かし過ぎるのだ。緑の中に、ぽつぽつと建っている家々。長閑な空気に包まれた、小さな村。

これが1500年後には、あんな高層ビルばかりの国になるなんて...

サファイアは現代の青玉島の風景が嫌なわけではなく、むしろそれはそれで好きなのだが、その変貌を考えるともう、ただ驚くしかない。

ジャックもやっぱり驚いたのかなあ...あ、でもジャックは10年おきぐらいで青玉島にも来てたのか。だったら驚かないか...。

ただ、サファイアは歩いていて1つ気づいたことがあった。

...あれ...?なんか、どこもかしこも空き家ばかりで、人がいない.....そういえば、村長さんもイルさんもそんなこと言ってたっけ...

やがて森につき、サファイアは実界へと出た。

...うわー...鉛の森だ...

ぎらぎらと黒光りする鉛の森。今になって思えば、ここで“鉛の森”という物珍しさに負けずさっさと通り過ぎてしまえば、ジェーンに捕まったりしなかったかもしれない。

...もっとも、そうしていたらジャックにも会えなかったわけなのだが。

サファイアは急いで必要な分の鉛を集め始めた。継閻派の吸血鬼に見つかってしまう前に帰りたいのだ。小枝を魔法銃で切り落とし、拾う。これを繰り返すうちに、鉛の枝はかなりの量集まった。サファイアはそれをすべて袋に入れると、百露華を使って袋ごと縮小し、握り拳大にしてしまう。

ところが、ポケットにしまおうとすると、その大きさではまだ入らなかった。仕方がないので、ポケットに押し込みかけたものを1度取り出してからもう1度縮小し、今度は指輪ぐらいの大きさにする。

...さ、吸血鬼が来ないうちに帰ろっと...

サファイアは気づいていなかったのだが、実はこのサファイアの行動をずっと見ている少年がいた。ジェイク・カラントである。もちろんまだ、サファイアのことには知らない。

彼の目には、女の子 ※231 の服装も、手に持っている物体 ※232 も、何だかさ



っぱり分からない未知のものに映った。

...あのおねえちゃん、何やってるんだろう...？

そう思っているうちに、女の子は作業を終え、足早に歩き始める。

...あれ？

ジェイクは、女の子の去ったあとに何か落ちていたのに気づいた。

...??

拾ってみると、青地に黒の線で模様が描かれたカードだ。

「おねえちゃん!!」

ジェイクはそれを届けようと、女の子の行った方向に駆け出した。木々の脇をすり抜けるように駆けること10ヤードで、湖に突き当たる。

湖の中央には、どういう訳か扉があった。女の子はそれを開けると、中へ入っていく。ジェイクもそれを追った。湖に踏み出しても、沈むことなく水面の上を走っている。しかし、ジェイクは女の子を追うのに夢中で、まだそんな怪奇現象が起きていることには気づいていない。

ジェイクが扉をくぐると、一瞬間に包まれた。しかし、次の1歩を踏み出した瞬間、色鮮やかな緑の森に出る。女の子は30ヤードぐらい先をゆっくり歩いていた。

「おねえちゃん、落とし物だよ!!」

ジェイクはそう叫び、駆け寄ろうとする。ところが、女の子は一瞬こちらを振り返ったかと思うと、急に向こうへ走り出した。

「待って!!」

ジェイクがそう叫んでも、女の子は待ってくれない。風のような速度で行ってしまったため、瞬く間に見失ってしまう。

「...あーあ...落とし物、いいのかなあ...？」

ジェイクはしょんぼりしながら青いカードを見つめ、そう呟いたが、答える者はいなかった。

サファイアは時の丘を駆け登ると、木の洞の中へ飛び込んだ。それでも止まらず、時の最果てに出てからようやく足を止める。

...あー...びっくりしたあ...

森の中で呼び掛けてきた少年がジェイクであることは、もちろんすぐに分かった。だからこそ、慌てて逃げてきたのだ。

彼とは後に、1500年前の自分が深く関わることになるはずである。仮に今、自分が彼と話したりしてしまうと、次にジェイクと1500年前の自分が会った時、ジェイクにとっては2回目の対面ということになるが、1500年前の自分にとっては初対面という、ちぐはぐなことになってしまう。つまり、ここで変に関わるわけにはいかないのだ。



...もっと前の時代に行った方が良かったかなあ...？

そんなことを考えながらパソコンやケータイを広げた場所に行くと、もうすでにジャックが戻ってきていた。腕を組み、氷のような非常に冷たい視線を向けてきている。

「お帰りなさい」

「...ただいま」

絶対零度の眼を直視することなど到底できるはずもなく、サファイアは俯いたまま言った。

「どちらへお出かけになっていたのです？」

ジャックが低い声で聞いてくる。

「...うん、MWを作るのに重金属が必要で.....ちょっと、鉛の森に...」

サファイアが答えると、ジャックの纏う空気が一段と冷たくなった。

「...鉛の森」

ジャックが呟く。

「まさか、1500年前の？」

「.....」

サファイアが黙っていると、沈黙をYesととったらしいジャックは、冷水のような声で

「知り合いに会ったりしませんでした？」

と聞いてきた。

「あー...うん、大丈夫...」

サファイアのいかにも“誤魔化しています♪”という感じの答え方に、ジャックの眼の冷たさが倍増する。もはや、直視したら瞬間冷凍されるんじゃないかと思うくらいだ。

その視線に堪えられず、とうとうサファイアは一部始終を白状した。すると不思議なことに、ジャックの纏う空気が若干和らぐ。

「サファイア、カードキーお持ちですか？」

「...カードキー？」

ジャックの奇妙な質問に、サファイアは目を瞬かせた。

「ロッカーの？」

サファイアが聞き返すと、ジャックは黙って頷く。

「うん、多分...えーっと...」

そう言いながら、サファイアはカードキーをしまったはずのポケットをまさぐった。ちょうど、鉛を入れた袋をしまったのと同じポケットだ。

「...あれ...？」

そのポケットの中に、カードキーは見つからなかった。あるはずのポケットになくて焦ったサファイアは、他のポケットの中も捜してみるが、やはり見つからない。

「あれれ??」

もう1度捜してみた。しかし、何回捜してもないものはない。

「...ありますか？」

しばらくしてジャックが尋ねると、サファイアはようやく諦めて

「...ないです...」

とうなだれる。

「...これで、ジェイクさんが言っていたことが分かりましたね」

ジャックが静かな声で言った。

「ジェイクさんは、あなたの落としたカードキーを拾って、それを届けるためにあなたを追ってきた結果、夢幻界を見つけた。だから彼は、あなたが夢幻界の開拓者だと言っていたんですね」

「...ということは...」

サファイアが考えをまとめながらゆっくりと言う。

「ジェイクが言っていた“夢幻界を開いた人”って、1500年前の私じゃなくて、今の私だったんだ...」

その後、サファイアはケータイとパソコンの改造を成功させた。これで、どこの世界にいても2人は連絡を取り合えるし、その世界にそれなりの通信システムがあれば、他の人と通信することもできるはずだ。

一方ジャックは、異常ありのカードを大量に見つけた。そういうカードが集まってくる場所を見つけたのだ。そこには、文字通り数え切れないほどのカードが山になっている。おまけに、異常ありのカードはその上からさらにどんどん降ってきている。

つまりその山のカードの枚数だけ、2人の任務も山積しているというわけだ。

※230...まだ“鉛は人体に有毒だから”などということが分かる前の時代である。従って、単に不気味だと思われたただけだ。

※231...サファイアのことである。

※232...魔法銃のことだ。

2010年1月6日

この日、ジュラダンに最高裁で死刑判決が下った。青玉島の最高裁ではなく、“夢幻裁判所”という、夢幻王国と準夢幻王国の計12ヶ国を中心とした、国際的司法機関の最高裁だ。

罪状は“非常に身勝手な動機で多くの命を犠牲にし、夢幻界全体を恐怖のどん底に陥れた※233”ということだが、終身刑ではなく死刑となった最大の理由は一言には表わされていないが、永遠の命を持つため、いつまで経っても死ぬことがないからだと言われている。死刑執行は30日、青玉島にて行われるとのことだ。

死刑執行前日、最後に身内との面会が許され、ジュリアがジュラダンの独房を訪れた。面会時間は30分だったが、そのうち20分ぐらいは沈黙だったという。

ジュラダンが真っ先に聞いたのは、ジャックが来ない理由だった。最後に何か悲しみの言葉にせよ恨み言にせよ一言いにくると思っていたらしい。ジュリアはそれに対し、ジャックとディックが残りの守人であったということ告げた。

ジュラダンは、自分自身の死刑については“永遠にこの独房で暮らすよりはずっといい”と笑ったが、ユリアがこれからどうなるのかについて非常に心配していた。ジュリアがまだ判決は出ていないがおそらく死刑だろうと言うと、ただ“.....そう.....”とだけ言って俯いたという。

「...変ね」

別れ際になって、ジュリアがぼつりと言った。

「私、こうやってあなたと会ったら絶対泣いちゃうと思ってたのに...」

それを聞くと、ジュラダンは

「1500年間もおまえを監禁していた夫だ.....涙も出ないだろう」

と自嘲気味に笑う。

「...死体を引き取って初めて、泣いたりするのもかも...」

ジュリアもそう小さく笑った。

「...わたしはどうでもいいよ。だが、ユリアの時は泣いてやってくれ.....あの子は、主人格を失うまで、1度たりともおまえを恨みはしなかった...」

ジュラダンがこう言い終わると同時に、看守が時間切れを告げる。

これが、夫婦の最後の会話だった。

その2日後、ユリアにも死刑判決が下った。まだ1審だったが、ユリアも誰も控訴しなかったため、そのまま確定したのだ。死刑執行は2月26日。やはりジュリアは面会に訪れたが、その30分間、会話はほとんどなかったという。

2010年12月13日

結婚してからおよそ1年3ヶ月、ピュアとルチアーノの間に女の子が生まれた。名前はポピー。2人で3ヶ月間話し合い、ようやく決めた名前である。ピュアの病状が病状だけに、無事出産でき

たということで国中が沸いた。しかし、このあとピュアの病気は一層悪化してしまう。それでも、医学の力と本人や周りの心掛けにより、どうにか娘が12才——つまりピュア自身が即位した歳に達するまで、持ちこたえた。

ピュアが死亡したのは2023年6月7日のことである。

※233...確かに犠牲にした命の数は半端ではないが、“恐怖のどん底に陥れた”は少々言い過ぎのような気もする。

時の守人も空間の守人も、色々な時代の様々な世界を旅し続けた。数日で終わるような時があれば、何百年単位の場合もある。時には平穏な旅もあるが、大抵は何か深刻な事態に関わる羽目になっている。この物語に出てきたことより遥かに凄まじい戦いに巻き込まれることもしばしばだ。

時の守人と空間の守人が顔を合わせることは滅多にない。しかし、2組の旅は永遠に続くのである。それも、ただ時の流れに従って旅しているのではない。はるか未来に現れることもあれば、ジャックやディックが生まれるより何千年も前の時代に行くこともある。その都度多くの人に出会い、友達ができ、そして必ず別れることになる。

そんなことを繰り返すうちには――...

「...――えーっと、ここだよね、W会議室」

重々しく豪華な扉の前で、サファイアが確認するように言った。在職中も滅多に着なかった、青玉島女王側近の制服を着ている。

「ええ...そう書いてありますが」

ジャックは端然と指摘しながら、扉の上にある金色のプレートを指差した。彼もサファイアと“お揃い”の服装だ。

「...そうだよ。じゃあ、行きますか...」

サファイアがノックしようとしたまさにその時、

「姉ちゃんっ!!」

と言って赤毛の女性がサファイアを背後から抱きしめてきた。

「わわわっ!!」

サファイアはそう叫んだ後、振り返りながら

「る、ルビー?!」

と驚きの声を上げる。

ジャックは、すぐにそのもつと後ろを振り返った。すると案の定、片手をポケットに突っ込んだディックが、もう片方の手を振りながら笑顔で歩いてくる。

「久しぶりだな」

ディックが言うと、ジャックは

「ああ...」

と頷いた。

「やっぱ姉ちゃん、相変わらずめっちゃめっちゃ可愛いんだけど!!」

ルビーが姉の頭を撫でながら言う横で、ディックもジャックを指差しながら

「こいつもほんっとに相変わらずだよな」

と苦笑する。



「え...2人もこれから、ここで...？」

サファイアが期待に眼を輝かせながら尋ねた。

「うん」

ルビーとディックが同時に頷くと、サファイアは

「やったあ!!じゃあ一緒だ♪」

と嬉しそうに叫ぶ。

大いに盛り上がっている3人に、ジャックは

「...会議室の前で騒いでいるとまずくありません？」

と冷水のような言葉を浴びせた。その言葉が、皆に今の状況を思い出させる。

「あ、そうだった...」

サファイアは決まり悪そうに笑うと、今度こそ扉をノックした。

「...失礼します」

...——こうしてまた、新しい物語が始まる。



Q01)“時の守人”“空間の守人”って、具体的には何をしていますか？

A01)時の最果てに降って来るカードには、様々な世界の生物の個体1つ1つの生涯が記録されています。それが積み重なって、歴史を構成していくわけです。

ところが、中にはその記録の一部が壊れてしまっているケースもあります。そうすると、歴史が正しく形作られません。

そこで、その記録が壊れてしまった部分を実際に見に行って、その個体に寄り添う形で再記録するのが、時の守人の仕事です。

一方空間の守人は、様々な“世界”が所定の位置から外れてしまっているのを見つける度に、その原因を突き止め、根本的な解決を試みます。

“2人組で時空を越えて旅をする”という点は共通ですが、やっていることはかなり違うのです。

Q02)デイビッドさんは最後、どこへ行ってしまったのですか？

A02)ギリギリまでジャックと話していたので、もうどこかへ行くような時間はありませんでした。ただ、ジャックの目に入らない場所で、消しゴムで消されるかの如く消えてしまったそうです。

Q03)ディックの絵が果てしなく下手なのは分かりましたが、青玉組はどうなんですか？

A03)2人とも上手ですが、サファイアは美術的に上手いのに対し、ジャックの絵は“上手い”というより“正確”という感じです。クロッキー・デッサンは上手ですが、想像で描くことはあまりしません。

あと、サファイアは漫画絵も描けます。

Q04)ジャックって苦手なことはないんですか？

A04)中世版で出てきたように、とてつもなく音痴です。

音楽の知識は一通りありますし、音感もいいですし、ピアノも弾けるのですが、自分が歌うとどうもとんちんかんになってしまいます。

ただ、夢の中で散々聞き続けたサファイアの子守唄だけは、まともに歌えるそうです。

Q05)サファイアは歌が上手いのですか？

A05)そんなことはありません。下手でもありませんが、普通程度です。子守唄に関する描写はジャック視点であることが多いですから、気をつけてください。

Q06)4人の声はどんな感じですか？

A06)高さは、

- サファイア...メゾソプラノ～ソプラノ

- ルビー...アルト～メゾソプラノ
- ジャック...やや低めのテノール
- ディック...バリトン～テノール

という感じです。

サファイアとジャックの声は、少し無機質なくらいに澄んでいます。

Q07)サファイアのロッドって、結局何だったんですか？

A07)吸血鬼同様どこからともなく取り出せるツールですが、吸血鬼と違って、ロッドを使わなくても不自由なく魔法を使えます。

ただ、あった方が彼女も魔法を使うイメージが沸きますし、戦闘では半ば棍棒としても役に立ちますので、たまに使っているみたいです。

ちなみに、作中では1度も出てきませんでしたが、実はルビーもそんな感じのロッドを持っています。

Q08)“ブルー一族”って、結局何だったんですか？夢幻界の先住民って、もう少し何か分からないんですか？

A08)“ブルー一族”とは吸血鬼の先祖に当たる実界の魔法族です。髪と目が青いことがその名の由来となっています。普通の魔法族よりずっと強い魔力を持っていたこと、目や髪の色が特殊だったこと、少数民族であったことから迫害され、それから逃れるためにブリテン島を北上して行く途中で突然変異を起こし、吸血鬼になったという説が有力です。ただ、ヒトの遺伝子に対して吸血鬼の遺伝子は劣勢であるにもかかわらず、何故1代限りで終わらなかったのかは分かりません。夢幻界の先住民については、イルが言っていたこと以外何も分かりません。

Q09)サファイアやルビーは、好きなテレビとかないんですか？

A09)サファイアはニュースや教育番組以外、あまりテレビを観ません。情報はインターネットで入手することが多かったみたいです。

テレビではありませんが、『青玉学園の日常』という子供向けほのぼのギャグ小説と『うっすら分かった気になるシリーズ』がお気に入りでした。

ルビーは紅玉高原では『嘘でしょ☆夢幻界』というバラエティ番組をよく観ていたそうです。

Q10)アイリスは何をしていたんですか？そして、アイリスのお母さんって何者ですか？

A10)アイリスは仲間たちと紅玉高原を建国していたそうです。お母さんは...魔法学系の学者だったのでしょう。

Q11)メルクリウスってどんな形なんですか？簡単に使いこなせるものなんですか？

A11)形は様々です。サファイアのはローファー型ですが、スニーカーのような形だったり、サンダルみたいだったり、色々な形があります。羽は生えていません。魔法製品ですから、ある程度

使いやすくなっています。足だけに力が加わるのではなく、全身に力が加わるため、どんな姿勢で飛んでも問題ありません。方向転換なども、きわめて直感的に行えるようになっていきます。ただ、その分コツを掴まないと使いこなせないなので、ある程度練習が必要です。

Q12)青玉カップルと紅玉カップルはそれぞれ結婚しているんですか？

A12)サファイア・ジャックも、ルビー・ディックも、あくまで“恋人”であって、結婚はしていません。

Q13)ジャックって、サファイア以外との恋愛経験は持っていないんですか？

A13)はい。まずサファイアと会う前は、周りにはデイビッドとディック以外全員敵ですから、恋愛が発生するはずがありません。

また、サファイアが死んでから再会するまでの1500年間は、サファイアのことを忘れられずに待ち捜し続けた1500年間ですから、当然他の恋愛はありません。

Q14)ディックって、ルビー以外との恋愛経験は持っていないんですか？

A14)はい。ソルジャー族にいたころはまだ子供でしたし、キュアラ族にいたころはジャックと同じ状況ですし、ユリアとの主従契約期間は論外です。

ルビーの死後については、ディックの場合、ユリアに復讐するための1500年間ですから他の恋愛があってもおかしくはないのですが、なんセルビーを殺してしまうに至った経緯が経緯ですから、それに縛られてとても他の人を好きになるなんてできませんでした。

ジャックの場合と違って、ルビーのことは好きでい続けるどころか忘れてしまいたかったのですが、ずっとルビーに縛られている状態だったようです。

Q15)ルビーって、ディックより前に好きな人はいなかったんですか？

A15)中世版でも現代版でもいなかったみたいです。

Q16)青玉カップルと紅玉カップルはどこまで進んでいるんですか？

A16)詳しくは分かりませんが、中世版青玉組は、どんなに進んでいてもキス止まりでしょう。守人になった後は未知数です。

紅玉組は中世ではそもそも付き合っていないから、何もしていません。守人になった後はやはり未知数です。

ちなみに、守人には子供は生まれません。

Q17)同性同士の主従契約もあるんですか？

A17)あります。

Q18)最終話の“W会議室”ってどこですか？

A18)実界です。それ以上のことは、ご想像にお任せします。

Q19)フィラレーテ兄弟の両親はどうしたんですか？

A19)あの兄弟は晩年出産で生まれた子たちだったこともあってか、もう死別しています。

Q20)ローラやミヒヤエルはどうなったんですか？

A20)ローラは王宮で働いていましたが、24才で普通に男性と結婚して退職しました。ミヒヤエルはずっと王宮で働き続けました。

Q21)ジャックが時の最果てに行くと言った時、ジュリアはどんな反応を示したのですか？

A21)「あら、よかったじゃない。それならあの子ども寂しくないものね。優しくしてあげなさいよ」と言って笑っていたそうです。

Q22)現代版のサファイアはジャックに誕生日やクリスマスのプレゼントをあげていたんですか？サファイアとルビーは誕生日やクリスマスのプレゼント交換をしていたんですか？ジャックとディックは(以下略)

A22)サファイアとジャックの間、サファイアとルビーの間のプレゼント交換はあったようです。ただディックも言っていたように、ジャックとディックの間ではやっていなかったと思います。

Q23)サファイアはさつまいもタルトとミックスナッツタルトのうち、どちらの方が好きなんですか？

A23)どちらも好きです。でも、1番好きなのはジャックが作ってくれたプリンです。

Q24)コランダム4人の戦闘能力の順位はどうなっているんですか？魔力が戦力に影響するとしたら、かなり開きが出ることになりませんか？

A24)そうですね。

中世版では、クリアシャイン姉妹は吸血鬼の約3倍の魔力を持っています。したがって、きちんと訓練すれば吸血鬼よりずっと強くなったでしょう。まあ、そこは作られた目的が目的ですから、ある意味当然ですよ。ただ、彼女らは何も訓練を受けていないので、実際にはそれほど強くありません。

現代版では、ジャック・ディックはクリアシャイン姉妹の2倍の魔力を持っています。受けた訓練は同程度でしょう。となると、この時点ではジャックたちのほうが強かったのかもしれませんが。もっとも、ジェーンとサファイアの戦いでは互角だったようですが。道具や相性など、魔力とは別の要素もあるのでしょうか。

さて、最果てに行ってからのお話ですが、最果ては何にしてもバランスを好みます。そのため、守人が4人そろると、自動的に4人の魔力を平均化してしまいます。したがって、守人になってからの4人の魔力は皆同じです。戦ったことがないのではっきりしませんが、多分ジャックとディック

は同じくらいで、サファイアとルビーも同じくらい、吸血鬼たちとクリアシャイン姉妹では体格差の分だけ吸血鬼たちの方が強いのでしょうか(もともと、戦闘力における魔力の部分がとても大きいので、体格差による影響はさほど大きくないと思いますが)。

Q25)現代のジャックとディックがそれぞれデイビッドさんと戦ったらどうなりますか？

A25)分かりませんが、デイビッドは“もう敵わないよ”とゆるゆる笑っています。

Q26)中世版でジャックがサファイアから誕生日プレゼントとしてもらったペンダントはどうなったんですか？

A26)現代版の物語中にもちょっと出てきましたが、こまめに手入れしながらずっとつけています。最後の方でディックに“腕輪、ずっと大切にしているじゃないか”などと言っていますが、自分は15世紀越えなんですね(笑)

Q27)時の最果てでジャックがサファイアにあげた髪飾りは、1500年前のものですか？

A27)いいえ、新しく作ったものです。しかも、青いリボンをつけてちょっと進化型にしています。(笑)

ちなみに、1500年前のものは今もジャックが大切に保管しています。

Q28)オナガザメのぬいぐるみとジャック・オ・ランタンの被り物はどうなりましたか？

A28)オナガザメはサファイアが、カボチャはジャックが最果てに持ち込みました。その結果、サファイアの荷物の中にはいつも“カボチャを被ったサメ”という得体の知れない物が入っています。

Q29)ピュアからもらった食料に含まれていた餡はどうなりましたか？

A29)サファイアはジャックが来たその日に3袋とも食べてしまい、ジャックに叱られました。

Q30)ジミー・カラントって悪人じゃないんですか？ジュラダンの話を聞いているとそうは思えないのですが。

A30)彼は“手段を選ばない”ことで名高だけです。つまり、暗黒魔術を研究しているなどというわけではなく、普通の(とは言えないくらいすごいことを研究していたようですが)ことを研究する際に、例え周りにどんな影響が出ようと誰を犠牲にしようと構わなかったというだけのことです。

Q31)たまにサファイアは“皆に嫌われているから...”などという発言をしていた気がしますが、どう見ても愛されっ子ですよ？

A31)そうです。

確かにサファイアは新月の呪いのせいで周りから冷遇されていましたが、例えば、食堂やアリ

一ナ、軍事訓練場、図書室、実験棟などといった公共施設を使用するのにあたって、冷ややかな目で見られたり、露骨に避けられたり、嫌な思いをすることはあっても、利用を断られたり、持ち物に手を出されたりして使うのに差支えが生じるなどといったことはありませんでした。

そこまで激化しなかったのは、ひとえに皆がピュアの力を恐れたからに他なりません。

王宮では、ピュアやペーターがサファイアを溺愛していることは周知の事実でしたから、そんなサファイアに嫌がらせをし過ぎて、それがピュアたちに知られた日には、自分たちがどのような目に遭うか皆分かっていたのです。

サファイアも、ピュアやペーターの力に守られているという意識はありました。

ただ、それを“可哀相に思ってわざわざそうしてくれている”と考えていたようです。

そこまでくると、“どうしてサファイアがそこまで自分への好意に鈍いのか？”という問いに“呪いのせいで皆に嫌われていた境遇が影響したから”と答えるのは苦しい気がします。

Q32)人を殺したことがあるのは誰ですか？

A32)ジュラダン、ジェーン、ジュリー、ユリア、デイビッド、ジャック、ディック、ピュア、フィリップです。

最初4人は言わずもがなですが、デイビッドもおそらく第126次吸血鬼戦争などの戦闘で殺したことがあるでしょう。

言うまでもなく、ジャックはサファイアを、ディックはルビーを殺しています。

ピュアとフィリップは、それぞれの国で死刑が行われるたびに死刑執行ボタンを押していますから、一応ここにカウントしておきました。

クリアシャイン姉妹やペーターは人を殺したことはありません。

おそらく、ジュリアもないと思います。

Q33)どうしてジャックは猫に食べ物の名前を付けたがるのですか？

A33)どうしてでしょうね。ただ、“シュガー”はもしかしたら、サファイアの好きなものの名前を付けたのかもしれない。

Q34)現代版ルビーの誕生日はいつなんですか？

A34)7月19日です。

中世版は12月生まれでしたから、空間の最果てに行って1500年前の記憶を取り戻したルビーは2つの誕生日を持つことになります。

サファイアはどちらも12月19日ですから問題ありません。

Q35)中世版サファイアの誕生日は本当に12月19日なのですか？

A35)違います。12月19日は鉛の森でジャックと会った日です。ただ、その当時はサファイアが過去の記憶を失っているのだと思っていましたから、ジャックが暫定的に19日を誕生日にしてしまいました。結局、それがそのまま中世版サファイアの誕生日となっているわけです。実際にジュ

リアが人格を与えたのは12月17日ごろだったのではないかと思います。

現代版サファイアは正真正銘12月19日生まれなのですが、それを目撃している人はいませんでした。しかし、発見された日が中世版サファイアの誕生日12月19日に近かったため、同じにそろえてしまったようです（結果的に正しいのですが）。ということは、青玉島の王宮は何らかの形で中世版サファイアの誕生日を知っていたんですね。

Q36)皆の身長は何cmですか？

A36)以下の通りです。

- サファイア...144cm
- ジャック...186cm
- ディック...182cm
- ルビー...163cm
- デイビッド...179cm
- ジュラダン...181cm
- ジェーン...171cm
- リル...164cm
- エル...152cm(会った当初)
- シム...164cm
- ピュア...158cm
- ルチアーノ...174cm
- ペーター...175cm

Q37)皆の体重は何kgですか？

A37)ノーコメントです。

Q38)守人が死んでしまった場合、どうなるのですか？

A38)2人いるうちの片方が死んでしまった場合、もう片方は最果てに戻ってひたすら次の守人が一つたり読眼術か対非人類会話術を使える人が一に来るのを待ちます。

その間、本来の仕事は停滞してしまいます。

両方死んでしまうと、最果ては不安定になってしまい、またあらゆる世界が消滅するという危機が訪れます。

したがって、守人たちが最も気をつけなければならないことは、自分たちの保身であると言えます。

Q39)ディックにとって、ルビーとジャックだったらどちらの方が大切なのですか？

A39)基本的に、あまり比べていないと思います。

ただ、強いて言えば、彼の場合どちらかというとならジャックの方が大切なのかもしれません。

ちなみに、ルビーもおそらくどちらかというディックよりサファイアの方が大切だったりすると思います。

Q40)ジャックとルビーは猫派、ディックは犬派とのことでしたが、サファイアはどうなんですか？

A40)もちろん猫派です。

Q41)現代版でジャックがジュラダンと再会して帰ってきた後、サファイアに子守歌を歌ってもらっていますが、ジャックはその後寝ちゃったんですか？

A41)そうだったら可愛い気もしますが、寝ていません。

ジャックはいつもサファイアの子守歌を聞いていますが、それで寝てしまったことはないと思います。

Q42)デイビッドさんはディックに、魔法化学を本当にまったく教えようとしなかったんですか？

A42)もしかしたら1回ぐらいは教えようと試みたかもしれませんが。

ただ、ディックの壊滅的な料理の腕からすると、もし教えようとしたとしても初回で完全に懲りたと思います。

Q43)守人たちは旅の際にかかるお金をどのように調達しているのですか？

A43)どういうシステムかはまったく分かりませんが、それぞれ青玉島と紅玉高原が給料を出しています。

Q44)現代版における最初の(サファイアが生まれて間もなくのころを除く)新月の描写で“城に来て間もないころに借りた本を瞬く間に読んだ彼(=ジャック)は、もうパソコンもケータイも十分に——もちろんパソコンの国家資格取得者であるサファイアほどではないが——使いこなせるようになっていたのだ”とありましたが、ジャックとサファイアはそれぞれどれぐらい“使いこなせる”のですか？

A44)ジャックはこの時点で、自分が普段使うソフトの使い方を一通り身につけていました。

それに対しサファイアは、ソフトもOSもプログラムレベルで(夢幻界のパソコンにおける“プログラム”とはつまりMWのことですが)理解しています。

Q45)現代版で“ドラゴン、水中人、妖精、吸血鬼...などは魔物でも何でもないごく普通の生物だが、ゾンビや幽霊は迷信とされている”と出てきましたが、どういうことですか？

A45)物語中ではまったく登場しませんでした。夢幻界にも実界にも、ドラゴン、水中人、妖精、ユニコーン、小鬼...といったいわゆる魔法生物たちは生息しています。

つまり、私たちにとってのライオン・イルカ・蝶・馬・猫...などと同じ感覚です。

ただし、ある程度の魔力(約50Ma以上)を持っている人でないと見えません。

一方、幽霊・ゾンビのように死者が何らかの形で蘇ることはないとされているようです。

Q46)“守人のサファイアが夢幻界の扉を開いた”ということですが、それは“青玉島にある扉を開いた”という意味ですか？

A46)確かにそうですが、サファイアが青玉島の扉を開いたことによって夢幻界全体が開いたと言えます。

詳しいことはよく分からないのですが、かつて夢幻界には今とは全く違う文明があったようです。

(現に、当時実際にあったような庶民の家は、中世版でサファイアたちが使っている家よりずっと簡素だったと思います...多分)

その文明が何かの事情により消滅したことで、夢幻界は一度無人状態となり、実界に対しても閉ざされてしまいました。

そんな状態であった夢幻界を再び開いたのが、守人サファイアだったのです。

つまり、サファイアがいなければ——もっと言えばジュラダンたちによる一連の事件がなければ、今ある夢幻界そのものが存在しなかったわけです。

Q47)現代版サファイアは、ジャックの前では可愛らしく(笑)振舞っていますけど、他の人(特にアルバートやディック)にはかなり辛辣ですよ？

サファイアがそういう裏表を持っているということに、ジャックは気付いているのですか？

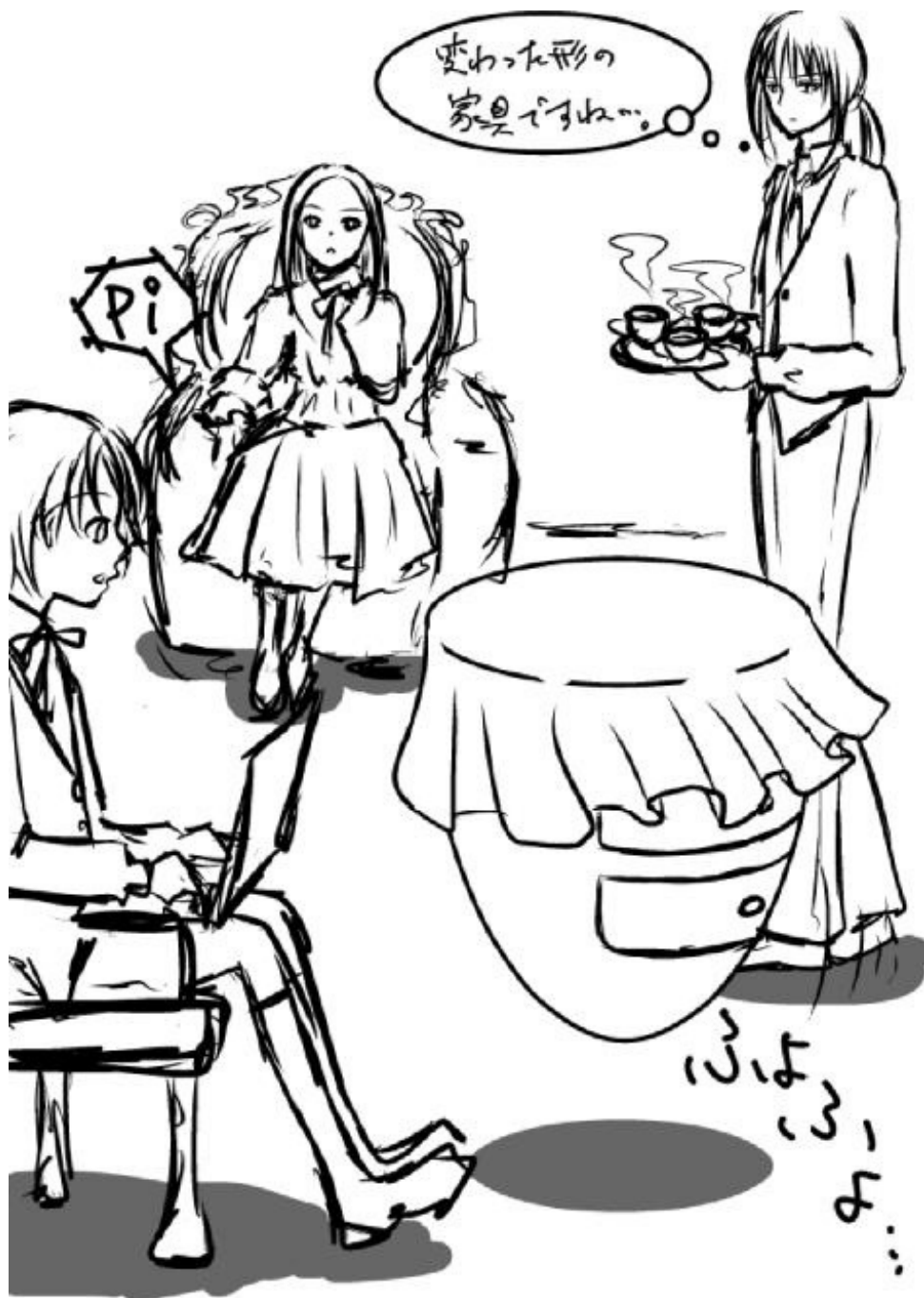
A47)もちろん気付いています。

そして、サファイアもジャックに気付かれていないとは思っていません。

というより、多分サファイアはわざとジャックの前で可愛い子ぶっているわけではなく、“無意識”や“天然”と言った類のことだと思います。

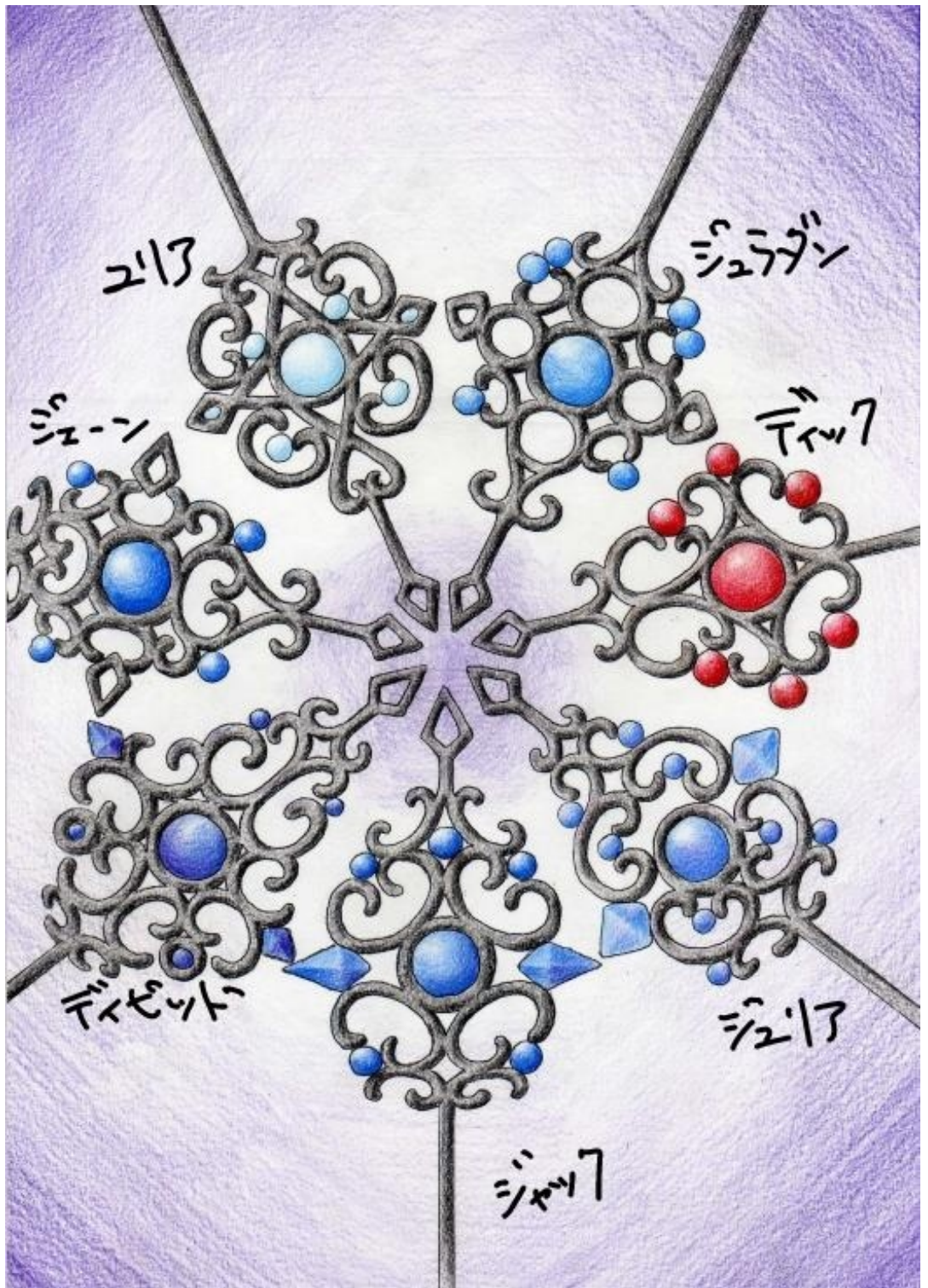
Q48)現代版p.20に「ピュアがそう嬉しそうに言って玉座に付いているリモコンを操作すると、逆さにした卵の上を平らにしたような形の引き出しが、ヒューンと飛んでくる」とありますが、“逆さにした卵の上を平らにしたような形の引き出し”ってどんなものですか？

A48)こんな感じです。



Q49) 吸血鬼たちが使っているロッドの形が分かりません。挿絵を見ても適當すぎて分かりません

。



A49) こんな形です。

Q50)青玉島と紅玉高原に時差はないのですか？

A50)青玉島と紅玉高原はちょうど実界のイギリス・フランスぐらいの位置にあり、時差は1時間しかありません。したがって、それほど問題にはならないようです。

Q51)もし、ジュラダンたちがクリアシャイン姉妹を作ったりしなかったらどうなっていたんですか？

A51)守人が足りず、あらゆる世界が滅亡していました。かといって、ジュラダンたちの計画(というよりユリアの妄想)通りに事が進んでいてもやはりあらゆる世界が滅亡していましたから、この終わり方以外はすべてバッドエンドだったということになります。

Q52) ジュリーはどうして1500年も、子供の姿のまま生きていたんですか？彼女は吸血鬼ではないですよね？

A52) 1500年間生きていたのは、ジュラダンたちと同様に、それ相応の人数を殺しているからです。

成長しなかった理由はよく分かりませんが、おそらくクリアシャイン姉妹ほど完成度が高くないので、“成長する”などという高度なことはできなかつたのだと思います。つまり、ロボットの身体がいつまで経っても大人になったり老人になったりしないのと同じことです。

Q53)ジュリアは電話で「パシュカーレ山の山頂にいる」と言っていました、実際は地下にいたんですよね？

A53)そうです。ただ、ジュリアは自分で地下牢までいったのではなく、無理やり連れて行かれたのでしょうから、「山頂から入った」と認識したのを最後に、自分の居場所を見失ってしまったんだと思います。

Q54)ピュアはいわゆるツンデレキャラですか？

A54)典型的なツンデレキャラだと「別にあんたのためじゃないんだからね、私のためなんだから」と言いますが、ピュアは「あんたのためにわざわざやってあげたんだから感謝しなさい」ということが多いので、セリフが逆になっています。

単なる意地っ張りです。

Q55)キュアラ一族の「25才になるまで主従契約禁止」という規則なんですが、25才で成人って遅くないですか？

A55)はい、現在でも多くの国は18才で成人ですし、ましてやあの当時ならもっと早くから大人として扱われるはずだと思います。現に中世版の青玉島では14才で成人とみなしていたわけですし、キュアラ一族でもデイビッドは19才でリーダーになっていますし…。多分、もう10代後半は実質大人として扱われていたのではないのでしょうか？

デイビッドが何を考えて「25才」という規定を作ったのか分かりませんが、もしかしたら少しでも長くジャックを(制定した時期によってはディックも)つなぎとめておきたいと思ったのかもしれませんが……結局2人ともその規定より早く主従契約して出て行ってしまいましたが。

Q56)科学部の学者さんたちはみんな、このご時世にもかかわらず個人作業で研究しているんですか？

A56)たまたまサファイア・ジャック・アルバートがそうただただで、もちろん多くの助手やスタッフを雇って組織的に研究している人もいます。

ただ、そういったスタッフを雇うためのお金を王宮に請求するためにはそれ相応の実績をあげなければならないため、そういう人はいつもノルマに追われて必死になっているようです。

Q57)青玉島王宮の科学部には優秀な学者がそろっているという話ですが、サファイア・ジャック・アルバート以外の方が何か発明したような話を聞かないのは気のせいですか？

A57)本筋に関係しないので書きませんでした。みんなきちんと論文を発表したり発明したりしています。

むしろ、定期的にある程度の実績をあげていないと解雇されてしまうという仕組みになっています。

ただ、サファイアとジャックに関しては側近の仕事もありますから、ノルマはかなり緩くなっています。

Q58)パシュカーレ山で魔力検知器を使っていましたが、ジャックとディックにはいらなかったんじゃないですか？

中世版でジャックがサファイアの強大な魔力を感じ取っているような描写がありましたけど...

A58)まあそうですが、あのパシュカーレ山はもともと魔法山ですからあちこちから魔力が出ていますし、魔力を持ったものもたくさんありますし、精度も高めたいので、あえて検知器を使っていたんだと思います。

485年8月15日

キュアラ一族が第126次吸血鬼戦争に巻き込まれてから11日経った。夜になっても、外から爆発音が聞こえてくる。この夜も例外ではなかった。深夜になっても、爆発音がやむ気配はない。

そんな中、ジュラダン子供たちが寝ている部屋の隣りにある部屋で論文を書いていた。すると、廊下の方からひたひたと足音が聞こえてくる。

「...父さん？」

部屋の入り口から、ジャックがひょこっと顔を出した。

「ジャック...まだ寝てなかったのか？」

ジュラダンがそう言うと、ジャックは

「違うよ、ちゃんと寝てたもん!!」

と憤慨してくる。

「...ということは、外の音で起きたのか...」

ジュラダンはそう言いながら小さく溜め息をついた。

「...うん...」

ジャックは申し訳なさそうに俯く。

「ああ...じゃあ、側にいてやるから、早く寝なさい」

ジュラダンはそう言うと、筆記用具や論文を簡単に片づけた。ジャックはその様子をじっと見つめている。

「...ほら、行くよ」

ジュラダンは立ち上がりながら、寝室に行くよう手で促した。するとジャックは

「はい」

と素直に返事をして、ちょこちょこと隣の部屋へ向かう。

ジャックが横になるとジュラダンは布団を掛けてやった。真夏でも、夜はかなり涼しくなるのだ。 ※234

「...父さん？」

ジャックが小さな声で話しかけてきた。

「何だ？」

ジュラダンが答えると、ジャックは

「僕たち...死んだらどうなるの？」

と聞いてくる。

「...さあ...分からないな。消えてしまうんじゃないか？」

ジュラダンはそうとしか答えられなかった。吸血鬼はまったく宗教観を持たないため、“死んだらどうなるのか”という問いには、答える術がないのである。

「消えてしまう...？」

ジャックはそう繰り返しながら、こちらに身体が向くよう寝返りを打った。

「いなくなっちゃうの？」

「...そう...どこにもいなくなっちゃうんだよ」

ジュラダンがそう答えながら、自身も天井に向く形で横になる。

ジャックはしばらく黙って考え込んでいた。そして数分後、

「死んじゃうって、やだね」

という結論を出す。

「そうかい？」

ジュラダンが聞き返すと、ジャックはこくと頷いて、

「だって、もし父さんが死んじゃって、消えちゃったら、僕がどこを捜してももう会えないんでしょ？」

と聞いてきた。

「当たり前じゃないか」

ジュラダンが言うと、ジャックは少し黙ってから、

「前に父さんが読んでくれた本みたいに、どっか別の世界に行くとかだったら、会えるかもしれないのに...」

と言ってくる。おそらくギリシャ神話のことだろう。

「あれは物語だよ。本当のことじゃないんだ」 ※235

ジュラダンの言葉に、ジャックはただ

「そっかあ...」

とだけ呟いた。それからまたしばらく黙りこんだ後、今度は

「どうして死んじゃうの？皆ずっと仲良く生きていればいいのに...」

と聞いてくる。

そう言うジャックを、ジュラダンはしばらく見つめていた。その後、

「父さんはある程度生きたらそれでいいと思うがね」

と呟く。すると、ジャックは

「え？どうして？」

と驚いたような声で聞いてきた。

「...ジャックはかくれんぼするの好きだろう？」

ジュラダンが聞くと、ジャックは

「うん」

と頷く。ジェーンとかくれんぼしても負けてばかりなのだが、それでも好きらしい。

「だけど、1週間ずっと休まずにやってなさいって言われたら、途中で飽きて、嫌になると思わないか？」

「うん...飽きる前に、疲れちゃうと思う」

ジャックが答えると、ジュラダンは

「それと同じだよ」

と言った。

「生きていれば楽しいこともあるだろうけど、いつまでもいつまでもずっと生きてたら飽きてしまう。いつか終わりが来るからこそ、今生きていることに価値があるんだよ」

ジュラダンの言葉は、もうジャックに向けられたものではなかったのかもしれない。おそらく自分の考えを口にしてみただけだろう。

それに対し、ジャックはまたしばらく考えていた。しかし結局よく分からなかったのか、「そっかあ...」

とだけ呟く。するとジュラダンは、ちらっとだけジャックを見てから、

「...まあ、覚えておきなさい。正しいかは分からないが...覚えていれば、おまえが大きくなってから、正しいのか間違っているのか、考え直すこともできるだろう？」

と言った。

“いつか終わりが来るからこそ、生きていることに価値がある”——そう言っていたにもかかわらず、ジュラダンは後に、永遠の命を求めて200人もの人を殺す羽目になった。

そしてジャックも今、時の守人として永遠に、様々な世界を旅し続けている。

“いつまでもいつまでもずっと生きてたら飽きてしまう”——ジュラダンはそう言ったが、ジャックは今のところ、生きていることに飽きを感じたことはなかった。色々な世界を旅し、その都度何らかの事件に巻き込まれるため、飽きる暇などないのだ。

...いや、本当にそうだろうか？色々な世界を旅し、その都度何らかの事件に巻き込まれるから、飽きないのだろうか？

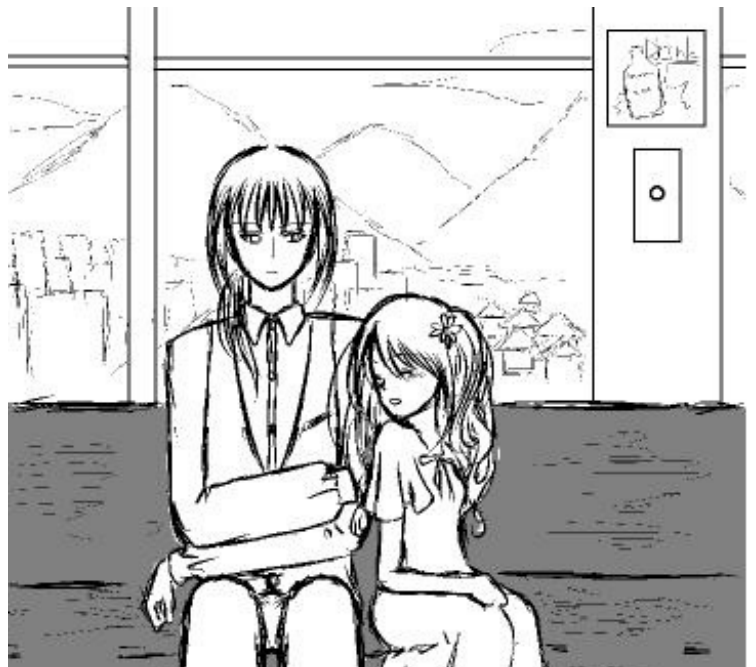
時の守人は、どこの世界へ行っても、誰と仲良くなっても、所詮オブザーバー——陪席者、観察者でしかない。どこへ行っても、“どこか違う世界から来た異邦人”でしかないのだ。そんな不安定な立場で居続ければ、それ自体が嫌になってしまってもおかしくない。

だが、ジャックは今の立場に不満を感じたことはなかったし、倦怠感を覚えることもなかった。しかも、それについて“どうしてだろう？”と思ったこともない。

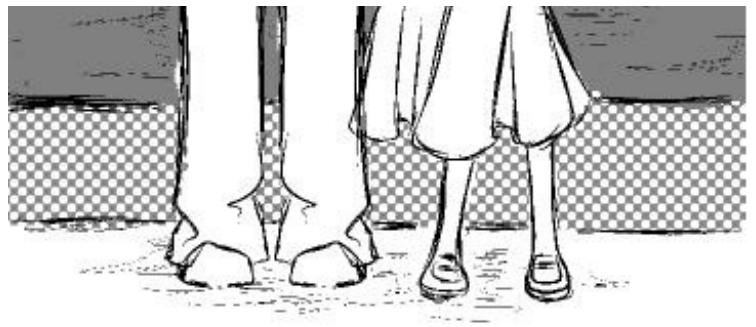
ジャックは自分の上腕あたりに寄りかかって眠っている少女に目を遣った。言うまでもなくサファイアである。長く電車に揺られているうちに、ジャックに寄りかかって眠ってしまったのだ。

サファイアと一緒にいるのも、もう何年目なのだろう？

砂となって消えた彼女に会いたくて、どうしても諦めきれず、待ち探し続けた“1500年間”という月日。途方もない年月に思われたが、いつの間にか一緒にいる時間の方がはるかに長くなってしまった。しかし、それで



も振り返ってみると、一緒にいる時間は長く感じられない。光のように駆け抜けてしまうから、その長さを実感できないのだ。



しかし、この年月の間に、2人の関係には若干の変化が生じていた。例え不満に思わなくても、“時の守人”という立場はきわめて特殊である。常にそんな立場に居続ける2人

にとって、互いを理解できるのはもはや互いだけとなっているのだ。 ※236

以前から“純粋な恋愛感情ではなく、友情、家族愛、憧憬...などといった、いろいろな感情が混ざっているような気がする”と思っていたが、そこに“唯一の理解者”という項目が加わったようである。

「...ん...」

サファイアが目を覚ました。ちょっと目を擦ると、辺りを見回して状況を確認してから

「おはよう、じゃっくん」

などと言って、無邪気な笑顔で見上げてくる。

そんなサファイアに、ジャックは相変わらずの淡々とした調子で

「おはようございます」

とだけ答えた。

※234...これは現代のデータだが、イギリスの北端にある都市ストーノウェーの8月の平均最低気温は9.8℃である。

※235...吸血鬼はこの頃から、“神話”を“ただの物語”としか認識していなかった。本文中にも書いたが、吸血鬼は基本的に宗教観を持っていなかったようである。

※236...いや、空間の守人であるディックやルビーも同じような立場に立っているのだが、2人とは滅多に会えないため、やはり時の守人同士の方が理解者となりうるのである。

青玉島物語 現代版

<http://p.booklog.jp/book/17427>

著者 : SapphireIsland

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sapphireisland/profile>

発行所 : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17427>

ブクログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17427>